有島武郎全集　第三巻

修禅する人の如くにさ和(にろむき)

静りたに恋乃門ホの授すむ

春

道なし業為たる荒し心して

荒野の土に海の黒を注け

春

第三卷目次

小説集

童話集

附録

有島武郎全集 第三巻

小説・童話集

石にひしがれた雜草

姿を隱す時が來た。何を愚圖々々のさばつてゐるのだと心の中で君に呵責まれる時も果てた。君と一緒にこの地球の上にゐながら姿を隱すのか、或はあの世に姿を隱すのか、そんな事は詮議してくれるな。縱令詮議した所が無駄だ。僕が姿を隱した後に、君はこの置手紙一つの外は何物も見出さないだらうから。嗚呼、一體僕はこの世の中に何をする爲めに生れて來たのだ。何になる爲めに生れて來たのだ。人を殺す爲めに!? 而して一人の道化役になる爲めに!? 笑へ、笑へ。豚も海鼠も、さけるまで口を開いて笑へ。しかも僕が笑へといへば、彼奴等すら笑ひかけた口を結んでしまつて、しかつめらしく僕を尻目にかけるに違ひないのだ。(こゝで僕は一言、「馬鹿」とか「畜生」とか、捨臺詞がいつてやりたいのだが、僕の胸のすき切る程の臺詞は生憎まだ日本語には發明されてゐない。)

姿を隱す前に、僕は君の戀人であり、僕の妻であるM子を生殺しにした顚末を君にだけ知らせて置きたいと思ふのだ。僕が何か目的があつてそんな事をしたと思つてはいけない、僕には目的はない。目的なぞがあるものか。君を悲しませようとするのでもない、苦しませようとするのでもない。人間が好んで運命を狂はせる、その醜い姿を見せつけようと云ふのでもない。運命が人間を弄ぶ、その沒義道な戲れを思ひ知らせようと云ふのでもない。況してや君を喜ばせようと企むのでもない。僕は唯何んだか君に書き殘して置きたいと思ふから書くだけの事だ。强ひて目的といへばそれだけのものだ。君がこの置手紙からどんな結論を引き出さうとも、それは僕の知つた事

ぢやないのだ。何んにも目的がなくなつてしまふと、人間の姿といふものが可なり露骨に見え透くよ。惡魔の眼が冴えてるのも多分はその爲めなのだらう。

三つ兒の魂百までといふが、考へて見ると、人間も隨分變るものだ。二人が〇〇大學にゐた時はお互に生眞面目な青年だつたね。僕がこんなになり果てようとは、その時どうして考へ得られよう。まあ然しそん事はどうでもいゝ。

君も覺えてゐるだらう、二人ともB先生の歌留多會に招かれた晩の事を。そして始めてM子に遇つた時の事を。顏も心も煤けたやうな人でありながら、Bさんははしやぐ事の好きな人だつた。どんな遊戲でも科學的に綿密な研究をして、機敏さうもない風をしながら妙に上手だつた。君なんぞは中々練習も積んでゐて、敏捷い質だつたのに、先生に刃向ふといつでも散々に負かされてしまつた。その中にM子だけは互角だつたので、二人だけで勝負をさせようといふ事になつた。その時だ、僕がM子に牽き付けられてしまつたのは。

M子は色々と辭退してゐたが、辭退し切れなくなると、死に身になつたやうな顏をして、ぽうつと頰を赤めながら、「それぢや一寸お待ち下さいましね」といつて一人で臺所の方へ立つて行つた。この勝負に非常な興味を催した一座はM子の歸るのを今や遲しと待ちうけてゐたが、思つたより暇が取れた。いつでもせか／＼と細かい事に氣の付くBさんは、M子が勝手を知らないと見て取つて、僕に行つて見てやれと命じた。始終家の人のやうにB家に出入してゐた僕は、命ぜられるとすぐ座を立つて、廊下から唐戶を開けて食堂の方へ出て行つた。食堂は眞暗だつた。そこに圖らずも僕は女のくす／＼と忍び笑ひをする聲を聞いた。

「どなた？　ちよいと電燈のスヰッチをひねつて下さいましな。どなた？（こゝで彼女は廊下から來る光で僕を透かして見てゐるやうだつた。）Aさんぢやいらつしやらないの」

「さうです」
僕はもうしどろもどろだつた。
「Aさん？　ぢや、ちよいといらしつて頂戴。こんな馬鹿な事をしてしまひましたのよ」
いたづら〳〵した聲が小さく艶めかしく又かう響いた。僕の眼はまだ闇には慣れてゐなかつたから、その時の處置としては電燈を點す事が一番早道だつた。僕はそれを感じてゐた。その癖さうはせずに、僕は手探りで聲のする方へ近よつて行つた。
「こゝですわ」
いきなり濕りつぽい、柔かな、案外冷たい小さな手が僕の手をやんわりと握つて引寄せた。はつと思ふまに僕は、M子と着物を觸れ合ふ程の近さに立つてゐた。鼻の先にはあの惡魔的に人を誘惑する日本髷の半分腐つたやうな濃厚な匂ひがむせる程漂つてゐた。
「こんなに。ね」
さういひながらM子は僕の手を握つた自分の手を前髪の所に持ち上げた。僕は自分の手がM子の手よりも冷えて行くのを感じながら、もつと冷たい、若い女の髮の毛といふものに始めて觸れて見た。その無類な纖細な感じと、いひ現はし難い快い彈力とは、僕の注意を本能の奧底まで浸み込ました。僕の指はそれをぐつと握りしめたい欲念でのたうつた。
「こゝですのよ」
M子がもう一つの手を添へて僕の指を導いた。そこには天井から下げられた鐵條のランプ釣りが髮にからまりついてゐた。

M子は中腰になつてぎごちなさゝうに立つてゐる。そのふつくらした胸は僕の胃部の邊で觸れたり離れたりする。その暖い氣息は時々僕の頸の邊に流れて來る。僕はいつまでもさうして居たい心持と、座敷の人々の思はくを氣にする心持で、わく〳〵しながら、震へる手先でランプ釣りから前髮をほごさうとあせつたけれども、暗くはあるし埒が明かなかつた。M子は段々じれ始めて來た。

「取れませんか……まだ？……取れませんか……痛い」

僕は始めて電燈をつける氣になつて、M子から離れてスヰッチをひねつた。二人はまざ〳〵と灯の光に照らされた。

「どうなすつて、眞蒼なお顏をなさつて。駄目ですわね、どうせ。あら、こゝにこんないゝものがありますわ」

さういひながらM子は頭を据ゑたまゝ手を延はして、ミシン臺の上にあつた大きな裁縫用の西洋鋏を取り上げた。而して左手でいゝ加減に前髮の一部分をつかみ丸めながら、容赦もなくじやきりとそれを切つてしまつた。眞黑な毛が一束切り揃へられて、眞白な富士額に房々とふりかゝつた。とめる暇もなかつた。僕は茫然としてその艶美な亂暴を見守るばかりだつた。

「亂暴ですね」

「だつて早く先生を負かして上げたいんですもの。今水をいたゞいて歸つて來ると、いきなり前髮がこんなに引かゝつてしまつちやつて、……もうようござんすわ、どうも難有う御座いました。さあ參りませう」

さういつてM子は僕の存在を無視したやうにどん〳〵一人で廊下の方へ出て行つてしまつた。僕は夢からさめたやうに物足らなく思ひながらその後につゞいた。と、座敷に這入らうとする所で、M子が戸のハンドルを握つたまゝ立ち止つたので、勢ひよく歩いて行つた僕は危く彼女にぶつからうとした。M子は片手で前髮を器用にか

き上げながら振り向けた晴れ〴〵しい顏をまともに廊下の電燈に照らして見せた。

「祈つてゝ頂戴ね。どうぞ。屹度勝つてお目にかけますわ。いゝこと？」

その眼は接吻しろといはんばかりに物をいつてゐた。然し次の瞬間に彼女はもう廊下には立つてゐなかつた。

全くその時の勝負は一座の人氣を湧き立たした。B先生に加勢するものとM子に加勢するものとが二手に分れてひしめき合つた。君はM子の側に坐つて、手を出してM子を邪魔せんばかりにして、Bさんに加勢してゐたね。僕は默つたまゝ、大勢の後ろに突立つて、腕組をして二人の勝負を見てゐた。本當は二人を見てゐたのでもない、勝負を見てゐたのでもない、M子を孔のあく程見つめてゐたのだ。彼女は斷ち切つた前髮の動ともすれば額に落ちかゝるのを左手で押へつけながら、落着き拂つて戰つてゐた。高い所から見おろしてゐた僕の眼には、襟足の美しい、脂の乘つた眞白な後頸と、こゞむので拔衣紋になつた、强い刺戟を與へる半襟と、高く大きく背負ひ上げたお太鼓の帶とが、搖れたり靡いたりしてちか〳〵と眩しく映つた。

「誰が一體この女を獨占するやうになるのだらう。あの髮を、あの後頸を、あの女に似合はしい衣類を、而してその美しい着こなし方を。あの女が誰にも獨占されるのでなければ、俺も別に獨占する氣はない。俺は靜かにあの女を嘆美してゐればそれで濟む。が……」

然し誰があのまゝでM子を捨てゝおくものかと思ふと、僕はこみ上げるやうな嫉妬を誰にともなく感じて來た――ゐても立つてもゐたゝまれないやうな嫉妬を。僕にはM子の心の自由に動くのが詛はれて來た。人の心の自由に動くのが詛はれて來た。何か一思ひに殺してゞもしまへば始めて安心が出來るやうな嫉妬だ。而して僕よりも確に年上らしい、恐らく才はじけたM子に、僕がどう映じてゐるかを推測すれば、この奇怪な嫉妬は尙更嵩じるばかりだつた。M子を見つめたまゝ、僕は興奮で脂に濡れた手で顏を撫で廻すやうに見せかけながら、手の平

に殘つた前髮の移り香を嗅いだ。それから大事に手を握りしめて又胸の所で組み合せた。

「萬歲！」

突然こんな聲が聞こえたと思ふと、群がつてこゞみなりに坐つてゐた男女の客が、一齊に腰を伸ばして兩手を擧げた。勝負がついたのだ。M子が勝つたのだ。電燈が急に華やかに光り出したやうに見える中で、B先生はいつもの燻んだ顏に燻んだ微笑を浮べて、殘つた札を數へてゐた。M子は今までの沈着に似ず、すつかり上氣して晴れ〳〵と愛嬌笑ひをしてゐた。その眼の活々した輝き、尋常な癖に大きく見える表情深い眼の！　がや〳〵いふ中で君は何かM子に抗議を持ち出してゐるらしかつた。M子は自分の味方になつてくれた人々に訴へるやうに、あちこちに眼を流しながら、辯解してゐた。僕はその一瞥を一心に待ちうけてゐた。その勝利を祈る筈だつた僕が、M子の一瞥を惠まれるのは當然だつたのだ。けれども彼女は仕舞まで僕の存在を無視したやうに振舞つた。僕の眼は輝いたけれども、彼女の眼はとう〳〵僕の上には輝かなかつた。何事も明らさまな、あるがまゝな一座の中にゐながら、僕一人は暗い淋しい迷路をぐる〳〵と迷ひ歩いてゐた。勿論誰もそんな事を氣取らう筈がない。それは僕にとつて、都合のよい、同時に堪らない程物淋しい事だつた。僕は弱者らしく氣むづかしくなつて君とも碌々口をきかなくなつてしまつた。君はそんな事に氣もつかなかつたらうけれども。

歸る時にB先生はM子の家が僕の近所だから一緒に行くようにと云つた。一種の反感と諦めから僕は割合に冷淡にM子と連れ立つて、人通りの少ない寒い夜の街を歩いた。自分の手の屆かない物をあまのじやくから眞價以下にまで見下げる、あの心持で僕はM子に對してゐた。それにも係らずM子は獨りではしやいで、B先生との勝負のいきさつを、嬌めかしい小刻みな笑ひで句點をうちながら、熱心に語りつゞけた。女の自己主義がかういふ時には極端に發揮される。そんな場合女といふものは相手の心持なぞはてんで考へてはゐないのだ。それが又馬鹿馬

鹿しい事には、云ひ知れぬ蠱惑的な無邪氣な愛嬌として男の心を捕へるものなのだ。さもしい男の心だ。僕は街燈の下に來ると、思はず、知らん振りをしながらM子を偸み見した。見得をする必要のなくなつたM子は富士額に前髪のたれかゝるのをかき上げようとはしてゐなかつた。肉感的な程度に悒欝な眉頭に散らばつた一房の髪の毛は、彼女の魅力を自然に强めてゐた。身だしなみを崩した放恣な姿がそこに暗示されてゐた。彼女はまた話しながら絶えず右手の甲を唇にあてゝは接吻するやうに吸つた。注意して見ると一條長く蚯蚓脹れが出來てゐた。彼女が手の甲を唇に持つて行くたんびに、僕の胸はおぞましくもときめいた。負け惜しみをやる僕の心をすつかり見拔いてるもう一つの僕の心は、興奮に熱したり皮肉に冷えたりした。兎に角僕はM子が醸した惡酒にしたゝか醉ひしれてゐたのだ。

別れる時に敎へられて見ると、思ひがけなくもM子は僕のゐる親類の家のすぐ隣りの小綺麗な二階建に住んでる事が知れた。別れ際になるとM子は急に僕に對して恐ろしく親しげな風を見せ出した。M子はともすると此方で恥かしくなるまでひた〳〵と僕に身をすり寄せて來たりした。

「こんなに近く住ひながら私今まであなたのお姿も見ませんでしたのよ。不思議ですわね。ほんとに不思議ですわね。でも口惜しいわ。馬鹿にされてたやうですもの。でも私滅多に戸外に出ないから當り前なのかも知れませんけれども。今度から私もつと氣をつけますわ、ほんとに」

又おべんちやらをいふ、と僕はM子を苦々しく思ひながら、胸の中はゴム毬の樣にはずんでゐた。

僕は家に歸るとすぐ部屋に這入つて、脂でしと〳〵になつた手の平を、洗ひたてのハンケチで念入りに押拭つた。そのハンケチに乘り移されたM子の前髪の匂ひは長い間消えずに、僕の机の引出しの中で匂つてゐた。

その晩から僕は激しい戀の病にかゝつてしまつたのだ。さうだ戀の病といふ言葉が一番適はしい。戀に落ちた

と云つた位ではその頃の僕の心の狀態(ありさま)をはつきりと現はしてはゐない。ふつと氣がついて見ると僕はどの瞬間にもM子の事ばかり思つてゐた。その戀は、僕が今まで輕く味つて來たやうな、淸いローマンチックな、その代り、美しい夢として置いてもそれで濟ませて行けるやうなものではなかつた。肉にまで喰ひ込んで行かなければとても滿足しない、極めて現實的な、そこいらに澤山ころがつてゐるやうな戀だつた。唯それは病と云はなければ適當しない程執心の深い戀だつた。

　尤もかうなつて行くには或る時間の經過を必要とした。のみならず私の心持は不思議だつた。私はM子その人に執着したといふよりも、M子が他人に占領されるのを思つたゞけでも我慢してゐられない、その不思議な競爭心ともいふべきものに執着してゐたやうだ。これは勿論今になつてその當時を回想しての判斷だ。一體ワイニンゲルのいひ出した婦人の二種の典型、即ち家婦型と娼婦型との中で、娼婦型の女はその魅力を女自身に備へてゐるといふよりは、その周圍を取り卷く男とその女との關係の間に持つてるやうだ。さういふ女は不思議に男の羨望と嫉妬とを挑撥する事に妙を得てゐる。さういふ女は屹度凡てのものを逆用する。何時でも敵の刄を奪つて敵を斃さうとする。男は又奇怪にも率直な愛の發露をさしおいて、男の遺產なる爭鬪慾の滿足に異常な興味を寄せる。而して女を勝利品と心得て互に夢中になつていがみ合ふ。そのいがみ合ふ程度が强まれば强まる程、女はぢつとしたまゝで、男達の心の中にずん〳〵魅力と價値とを增して行くのだ。縱令(たとひ)その女が一人の男の所有に歸した後でも、さういふ女が男に對して取る手段に變りはない。男に與へる不安定の感じだ。男は女自身を愛するといふよりもこの不安定な心持から自分を救ひ出さうとする爲めに藻搔(もが)き苦しんで、その女を全然占領し盡さうとあせるのだ。

　ワイニンゲルは客觀的に女の二つの典型の實在を主張してゐるやうだ。それは或る程度まで爭はれない事實だ

としても、大部分は問題となつた男と女との間に自然に生ずる關係から來る事だと云つた方がいゝ。例へばM子は或る他の男に取つては家婦型と云ふべき女かも知れないが、僕に取つては確に娼婦型の女だつたのだ。いはゞM子は僕の苦手だつたのだ。M子と結婚してから後でも、冷靜に考へる時には、僕はこれだけの事をはつきり了解してゐた。それだのに實際を見ろ。僕はとう／＼こんな置手紙を書くべき運命に追ひつめられてゐるのだ。…

…何んといふ醜態だ。

一轍で、極端な內氣で、妙に片意地の强い二十歲といふ無經驗な當時の僕は、歌留多會の晚から、見も知らぬ悒鬱な世界にどん／＼深入りして行つた。何事も見漏すまい聞き漏すまいと隣の二階家に注意を怠らなかつたにも係らず、その後暫くの間、M子の姿なり聲なりは夢にも捕へる事が出來なかつた。唯そこの家の井戶端に干される洗濯物の中に、M子のものらしい下着の類を見出した時だけ、僕はM子を想像で垣間見るばかりだつた。

或る日——それは板塀に沿うて植ゑ込んである灌木の類の病葉が落ち盡して、それが土と同じ色になつて二寸もある霜柱の上に終日乘つたまゝになつてるやうな、慘めな、暗い、二月の或る夕方だつた——僕は書見に倦きたやうな體で、いつもの通り眼と耳とを極度に働かしながら、その癖放心した顏付をして、隣りに近い庭の隅をぶらぶら步いてゐた。と、突然隣りの家の二階の窓障子が開いた音がした。それまで地面ばかり見つめてゐた僕ははつと思つて眼ざとく音のした方へ顏を上げた。その途端に障子はもう半分締められてゐたが、M子らしい女の人の姿が、確かにちらりと視覺に觸れた。同時に葉書の半分程の大きさの紙切れが、可なり早い速力で窓を離れて僕の家の庭の方へ落ちて來た。火のやうな氷のやうな棍棒形をした何物かゞ、不意に小痛い程ぶつかつて來て、心臟をどきんと下から押しひしやげたと思ふと、體中の脈搏が苦しい程高まつたのを僕はまざ／＼と感じた。紙はそこに落ちてゐる。然し僕はさつそくにそれを拾ひ上げる勇氣を失つてゐた。M子がどこからかそつと見てゐないと

も限らないと思つた。それは僕の心を全くしやちこばらしてしまつた。その紙を拾ふのは夜になつてからが都合がいゝ。けれども確かに拾つた事をM子に見せる爲めには今でなければいけない。然し今拾ふには先づ四周に氣を配らなければならない、その樣子をM子が二階から見てゐると思ふととても出來ない。

然し僕はとう〳〵思ひ切つて、大膽になるより仕方がなかつた。僕は押し切つて人もなげにその紙を拾ひ上げた。而して眼を定めてそれを見た。丁度紙の眞中とも思はれるあたりの下の方にNといふ字だけが小さく美しく書いてあつた。僕は兎に角それを持つて部屋に歸つた。

そんな時に人は妙に傳奇的になる。僕は机の上に、香水の匂ひのかすかに漂ふすべ〳〵した紙片をおいてぢつと見やりながら、トルストイのアンナ・カレンナを思出してゐた。愛し合ふ男女が、いはうとする文句の頭字だけを書きならべて、普通の會話のやうに心を通じあつたといふあの條を。所が僕にはNだけではM子の意志をどう想像して見る事も出來なかつた。まさかNoを云はうとするのではあるまい。さん〴〵考へた末に僕はとうとう考へあぐんでしまつて、結局M子が書き損なひの紙を窓から捨てたのを、偶然に僕が拾つたまでだと思つても見た。それでもその紙の一端にさし込んである丸鋲から見ると、錘をつけて僕の庭に落さうとしたM子の意志が推測されないでもないと思つた。戀する者にはこんな下らない事一つが生死の問題よりも大きく考へられる。その晩僕は眠る事が出來なかつた。

翌日庭を散歩すると不思議にもまた丸鋲を錘にした紙が落ちてゐた。それには前と同じ位置にOの字がたつた一つ書いてあつた。僕の恐れたNo.といふ字が過たず綴られる事になるではないか。

僕には見えない所で僕の動靜をM子は疾うから見守つてゐたのだ。而して僕に無駄な苦しみをさせまい爲めの慈悲心から、一枚の紙切を惠んでくれたのだ。どつちでもいゝから迷ひから解き放されたいと思つてゐた癖に、か

う突然決定的な運命を見せつけられると、僕は自制を失ふまでに絶望的な悲しみと怒りとに襲はれてしまつた。而してその晩M子にあてゝ興奮ではち切れさうな長い手紙を書いた。それを一晩中素膚の胸に抱いて運命にあらんかぎりの哀訴をした。

翌朝早く僕はまたその手紙を持つて庭に出た。塀越しに隣りの庭に投げ入れようとしてゐたのだ。所がどうだ、その朝も灌木の枯枝の上に昨日と同じ紙切れがまた引かゝつてゐるではないか。それにはOと同じ位置にIの字が書かれてゐた。僕は死刑の瞬間に大赦に遇つた人のやうに勇み立つてしまつた。その翌日には紙の左端にEが現はれてゐて、二字程の間を置いて、TSNといふ三字が讀まれた。NとOとで綴方の見當をつけ習つた僕は、毎朝早くその紙切れを拾つて來ては、一枚々々上に重ねて文句の出來上るのを一日千秋の思ひで樂しむやうになつた。丁度一週間目の朝にその綴りは完成した。それはかうだつた。

COME
TO
澁谷
STATION
THIS
NOON

M子といふ女はこんな事をする女なのだ。逆に持つて行つたのもM子らしいが、NOで人を威かしておいて、後の興奮を引き立たせようとする駄じやれは殊更M子だ。君は、それは僕の思ひなしで、M子の企らんだ事ぢやないといふかも知れない。それはさう思ふなら君の御勝手といふものだ。但し君はM子については俺程苦しまされてはゐないのだといふ、それだけの事を云ひ添へておかう。兎に角トルストイの描いた男女と僕等二人との間

に挾まつてる距離は、この一つの小さな挿話が雄辯に說明してゐるよ。
それからの事は委しく書くまでもない。君も大體は僕から聞かされて知つてるし、M子が蜜よりも甘い言葉で君を引きつけようとしてゐた時分、君をじらせる武器の一つとして、M子から十分の誇張をもつて傳へられてゐる事だと思ふから。然しこゝに一言云ひ添へて置かなければならない事がある。それは、心の動き方の激しかつたのは僕の方であつたかもしれないにせよ、この戀愛を實行に移した主動者はM子だつたといふ事だ。僕がこの事件を始めて君に告白した時も、M子をより女らしく美しく描かうとする一種の技巧的な心持から、又僕自身の興奮がM子より遙に激しかつたのを意識せずにはゐられなかつた、その弱味から、事件の全體には僕の方がより多くの責任を持つてるやうに云つたと記憶するが、實際は明らかにさうではなかつたのだ。こゝに封入する手紙を讀んで見給へ。これは二人が澁谷の停車場で始めて遇つてから一箇月とたゝない中にM子が僕に書いてよこしたものだ。

（M子の手紙）

「Aさん。
「昨日までは、私あなたのいとしい姉さんでしたのね。あなたは少し不滿らしくそれでも忍耐深いおとなしい弟のやうに私に事へて下さいましたわね。けれども私は何といふ恐ろしい事をあなたに強ひてしまつたのでせう。何といふ悲しい報いを見なければならないのでせう。あなたより三ケ年だけ餘計思慮のあるべき私が……
「純潔の破れるその脆さをどう悲しみませう。あんなにお泣きになつたあなたの涙を思ひ出すと、今でも私の胸はつぶれます。私も泣かずにはゐられませんでした。けれども罪深い私はあなたに悲しんでいたゞく資格はありません。あなた私を許して下さる？　許して下さいましね、萬望。私はもうあなたの姉でも何んでもなく

なつたんですからね。あなたを戀ひこがれる哀れな一人の少女になつてしまつたのですからね。許して頂戴ね。憐れんで頂戴ね。あなた故に罪に沈んだ私の心を少しでも察して下さつたら……あゝA様、お別れした時のあなたの悲しさうなお顏が、いつまでも〳〵私の心から離れずにゐます。私はあなたにもう一度お目にかゝつて、得心がいくまでお詫びをしなければいやです。いやです。明日。いゝえ今日會つて下さいまし。屹度この車屋にすぐ御返事渡して下さいまし、きつと、きつと。

死にまでの思ひをこめて　M子」

どこまでもわざと下手に出たこの空々しい手紙を見ろ。姉と弟として清い熱い交際をしようと先方から云ひ出しておきながら、殘酷に鼠を弄ぶ猫のやうに、戀に溺れきつた僕を一ケ月の間死なんばかりに弄んだのはM子ぢやないか。阿り切つた娼婦のやうに、二十三歲の豐滿な肉體と感情とに、あらん限りの技巧を凝らして、さらぬだに喘ぎ求めてゐた僕の肉情を緊張の極點にまで煽り立て、幾度か機會を掴む間際まで僕を釣つて置きながら、空を切りかへして飛びかはす燕のやうに、突然見えない程遠退いて、恐ろしく高い所から天使のやうな冷やかな眼で、誘惑に打ちのめされて恥かしさに顏も得上げない僕を靜かに眺める、その殘忍さを、僕はどれ程M子を恨み自分を責めて堪へ忍んだか。僕は自分の無邪氣さから、M子を全く天使のやうな心の女と見誤つてゐた。僕自身の汚れた要求が知らず〳〵色に出るのを憐れむ餘りに、心にもなく僕の意を迎へて見ても、迚も自分の墮落に堪へられないで、元の氣高い、罪を知らずに蠱惑的なM子に還るのだと思つた。さう思ふと僕は自分の汚れに愛想が盡き果てゝ、M子が意識せずに持ち合はしてゐるらしい誘惑の力を呪ひに詛つた。仕舞には煩悶の餘りに僕の心も身も瘦せ衰へた。このまゝで續けば一年も經たない中に死病に取りつかれるか氣が違ふかとさへ思つた。いつそM子から離れて仕舞はうと決心した事も二度や三度ではなかつた。然しそんな決心は三日とは續かなかつた。

M子が二階から投げてよこす一行の文句は、何もかも忘れさせるに十分だつた。M子が最後の情熱を與へなければ殺して仕舞はうと思つて、兇器を用意してM子と會つた事もあつた。さういふ時にはM子は屹度有頂天な望みをその次ぎの日に約束するやうに見えた。僕はおぞましくも復活を信ぜさせられた宗教狂のやうに、目前の惡行を快く放擲した。次の日にはM子を惡む代りに自分を責める憐れな弱者になり果てゝゐた。

今になると凡てが極めて明瞭だ。何故M子は僕のやうな人間を選んだか。それは肉の戯れに餓ゑた彼女は食を擇ぶ暇がなかつたからだ。M子は自分の周圍を見まはした。そこには手近かに僕がゐた。僕はM子より年が若く、面倒な監視を受けないで濟む親類の家に寄寓して居り、容貌も人なみで、童貞で、情熱的だつた。快味の多い flirtation には相手が童貞で情熱的であるのを必要とするのだ。M子は打算の上から僕を選んだのだ。M子は又戯れはどこまでも實行に移つてはならない事を知つてゐた。而して彼女は出來るだけ興味多く、言葉を換へていへば、實行の閾まで踏み込んで、存分に僕を弄ばうとしたのだ。

所が氣の毒ながらM子は一ケ月も經たない中に自分の作つた陷穽に陷つてしまつた。戯れの興奮から思はず自分を失つてしまつた。畢竟自然はM子以上に惡戯好きで巧妙なのだ。M子は自分で自分に驚いたに違ひない。然し驚いた時には氣の毒ながら遊戯本能以外の或る欲念が目覺めてしまつたのだ。M子が一ケ月目に僕と作つたやうな關係を新しく他人に求めるのは隨分大儀な事だ。而して兎も角もう少しの間僕を取り逃しではならないと決めたのだ。

けれどもその時の僕は突然M子から飛びのいてゐた。僕は第一自分の惡念がM子をとう／＼肉に陷れたといふ苦痛で戰いてゐた。M子からはもう元のやうな濃厚な捧誓を受ける事は出來ないまでに僕は自分の醜さに打負けたと思つた。今までの情熱が急にちゞこんで、責任といふ重苦しい感じが突然非常な力でのしかゝつて來た。そ

の時になつて僕は始めてM子と自分とを結び附けて僕の生活の將來を考へ出したのだ。それで僕は妙におくれが先立つて、M子を懼れて、極端な悒鬱に陷りながらM子と別れたのだ。

あの何處までも下手に出たM子の手紙が何故僕に送られたかは、これだけの事をいへば了解される筈だ。

兎も角その時の僕には、あの手紙がどれ程嬉しく情深く讀まれたか分らない。僕は早速M子と會つた。二人は銘々違つた意味で心を安んじ合つた。

あゝその時の僕の喜びと滿足！　世界はその時から全く新しく變つた。M子の家はM子が生れたに似合はない嚴格な家だつたから、僕は何んとしても、公然その家でM子に會ふ事が出來なかつた。從つてM子と會ふ手段も隨分くどい道行きを工夫しなければならなかつた。それは非常に僕を物足らなく思はせたけれども、同時に僕を物語中の立役のやうに仕立てあげた事も疑ひない。今までの無目的な功名心ははつきりした形を取つて眺めやられた。する事にも考へる事にも中心が出來た。兎も角一つの仕事に成功したものゝみが感ずる心の張りといふものも出來た。實際は碌な事も仕出かさない癖に、始終何か目論んでそれに熱中した。熱心にそれをM子に云つて聞かせる事が誇らしかつた。然しこんな夢のやうな世界に住み切つてゐながらも、僕の情熱には眞劍な所があつたと見える。M子の僕に對する愛も段々眞面目になつて行つた。こゝでも僕はM子の愛の生長に對して皮肉な見方の出來る位な餘裕は持つてゐる積りだ。然しこれは君にいふが、そんな見方は餘り穿ち過ぎた、從つて中核には觸れ得ない結果になる。M子だつてニンフではない。心臟は持つてゐる。女だ、人間だ。或る場合には世の中を正しく見る事も出來る筈だ。

その頃M子に對する結婚の申込みはそこにもこゝにも起つてゐた。あの家の裕かな生活と、當人の豐艷な容貌で、二十三まで結婚をしないでゐたのが不思議な位だ。M子は申込を跳ねつける度毎に委しい事情を僕に告げて

僕の喜びをそゝつた。而して眞味に二人が營んで行くべき生活の事などを語り合つた。然し僕がM子の兩親に結婚を申込まうとする段になると、M子は屹度、今はその時機でないといつて根強く反對した。

「だつてそれは駄目よ、私の所に申込みをして來るのは皆んな立派な位置もあり財産もあり經歴もある人達ばかりなんですもの。あなたなんか兩親に鼻であしらはれてしまひますわ。私を信じてゐて下さればそれでいゝぢやありませんか。やんちやな坊ちやんだ事、いつも〳〵そんな駄々ばかしこねて」

而して上手な仕草で僕を丸めこんでしまつた。

實際それは不思議だつた。M子は暗示らしい事ですらいふのではないけれども、M子と會つてゐると僕の生活觀は目に立つて變つて行つた。M子との關係が出來る前は、君も知つてる通り僕は非世間的な獨善主義者で、何か小さな仕事でも一つだけを克明に守つて行かうとするやうな男だつた。世間的な事といへば、善惡にかゝはらず蟲が好かなかつた。然しM子を知つてからは、何事によらずおもて立つた事が眼につくやうになつた。落付いて哲學上の思索でもして身を立てようと思つてゐた僕は、いつの間にか實業界に飛び込まうと考へるやうになつてゐた。經濟學や理財學といふやうな物を自己流に讀んで見ても、そこには哲學書類に見られない生に密着した生きた問題が澤山蓄へられてゐるのを發見するやうに思つた。今までとは見違へるやうに金遣ひも荒くなつてゐた。早く世間に頭を出したい氣分でいら〳〵し出した。大學の課程なんぞを踏んで行くのが馬鹿に見えてならなくなつた。うんと飛び離れた冒險的な事業でもやつて退けて、世間をあつと云はせて見たくつてたまらなくなつた。

僕が二十二の秋だつた、二人の關係が色々と親しい人々の間で噂され出したのは。今から思ふとこれはM子自身が書いた狂言なのだ。この二年の間にM子は僕との關係についてきつとさま〳〵に考へて見たに違ひない。M

子はさすがに僕の眞實にほだされてゐた。それに親がゝりの身で我儘放題に自分の好きなまねをして、青春の樂しみを引き延ばしてゐたかつた事から、思はずぶら〳〵と二十五まで未婚で通したM子の周圍には、あらぬ噂が立つと共に、求婚するものも非常に年の進んだ人だとか、後妻にとかいふ、何んとなく燻んだ色彩のものが多くなつたに違ひないのだ。それから見ればM子は僕を良人に選んで嚴しく鞭つたら、いゝ加減に出來上つた人にたよるよりも面白くもあると思つたらう。僕の家が十分な資產のある舊家である事も彼女は見のがさなかつたに違ひない。年下だといふ事も結局M子には氣安い事だつた。そこでM子はとう〳〵決心をしたのだ。決心をするとM子は思ひ通りを果さずには置かない智慧と意志とを持つてゐる。

M子の兩親は二人の關係を親類や緣者から聞かされて驚いた事だつたらう。潮時を見極めたと見えて、或る時M子は今結婚を申込めと僕に智慧を授けた。僕はすぐ自分の親の承諾を無理やりに得て先方に申込んだ。M子の思はく通りエリコはすぐ落ちた。

然し表立つて式を擧げるには僕の年が若過ぎるといふ先方の云ひ分を受入れて、僕はすぐ洋行する事になつた。世間の噂を消す爲めにもそれに限るとの事だつた。M子に未練が殘らないのではない。けれども妙に人を功名に急がすあの不思議な彼女の魅力が僕を振ひ起たした。

これからだよ、僕が君に本當に云つて聞かせようとするのは。

外遊の三年――長くはない。然しこの短い年月の間僕位死身になつて奮鬪努力したものが日本人の中に幾人あるだらう。僕は初め何處かの大學に這入つて相當の社會上の資格を附けようとしたが、日本の社會、殊に實業界が追々には實際の手腕に依賴する事が多くなると思つたので、歐洲には一年滯在したきりで、米國に移つて行つた。而して誰に紹介を賴む事もなく、新聞の廣告に應じて、アトランチック・シチーと云ふ避暑地に行つて、猶太

人の經營してゐる「球ころがし」の店に傭はれたのを手始めとして、あらん限りの商賣上の經驗を積んで見た。外遊してから二年間はM子から始終手紙が屆いて來た。それは、その熱烈な愛情の告白と、未來に對する冷靜な計畫とを以て、火の鞭のやうに僕の心を勵ました。僕は自分の生れた月日を祝福しないではゐられなかつた。一人の男の一生に、若し滿足な婦人からの滿足な愛が得られなかつたら、他の點に於てその人が如何に幸運であらうとも、畢竟不運だと云はなければならない。戀愛の成就を人生の輕い事實に過ぎないと見る人々は、ほんたうの生の要求を知らない人か、その要求を滿たす力を何等かの點で持合はさない人の負惜しみに過ぎないと云つてもいゝだらう。一度しか享け得ない人生に、女性の心からの捧誓を贏ち得た喜びは、何んと云つても男としての最大の勝利の一つだ。さうその時の僕は誇りを以て思つた。僕の心の中にはひとりでに力が後から〳〵湧き上つて、生れつき以上に快活なまめな大膽な若者になつた。實際今から考へても、M子が僕に及ぼした影響は超自然的だと云つてもいゝ位だ。

米國に渡つてから一年の短い月日の中に僕はずん〳〵西洋人の間に信用を作つて行つて、その年の終りには、非常に日本びいきな米國人で、日本政府から名譽領事の待遇を受けてゐる老紳士の事務所に這入つて、可なり重要な取引まで引受けるやうになつた。僕はその老人の祕書のやうな役目で、紐育市の大金持達と顏を合はせる機會を得次第、その交際を續ける工夫をした。而して歸朝後に僕の仕事として選むべき大會社の代理販賣店の基礎を作つて置く事に全力を注いだ。僕の保護者なる老紳士も僕の企てを賛成して、其の勢力範圍內で十分の援助を與へてくれたから、僕は四五ケ所の大製造會社と非常に有利な契約を取り結ぶ事が出來た。

僕は更に二年を費して、十分に米國の商賣上の取引の機微に通じようとした。その頃からだ、M子の消息が見る〳〵間遠になつて、ふツつりと絕えてしまつたのは。僕が絕えず送つてゐた僕の生活の微細な報知に對して、

M子から何んとなく淺薄な賞賛と激勵とが來るやうになつた。戀人の本能から、どんな短い文句の中にも僕は明かに筆者の心力の强さを感ずる事が出來た。消息が杜絕え勝ちになると共に、M子の筆からは熱が滴らずに、只の黑いインキが滴るばかりだと僕に思はせる事が度重なつた。僕は變だと思つた。その中、忘れもしない僕がM子と別れてから三年目の或る日、僕が事務上の用事で旅行したシラキウスと云ふ町で、留守宅から廻送されたM子の手紙は特に不思議なものだつた。筆の上では云ひ現はせない事情が出來て、これから當分便りを絕つ。(今から思ふとそれはM子が君の見てゐる前で書いた手紙に相違ないのだ。M子が君からいやにしつこく僕との關係の絕ち難いものであるのを諷されたので、M子がいつもの癖のやうにきかん氣らしく少し顏色を靑くして、眉頭を震はせながら、是れ見よがしに君の書翰箋を使つてさら〳〵と書き流したものに相違ないのだ。)便りがない間は死なずにゐてあなたの成功を祈つてゐると思つてくれ。手紙には書けない深い思ひが通つてゐると思つてくれ。かうだ。その手紙の表情は殊に淺薄だつた。頭からあなたが嫌ひになつたと云ふのはまだ堪へられる。冷え切つた心で暖かい言葉を送られる位その言葉を受ける人に取つて氣持の惡い事はない。僕は決してM子を疑はないでゐたのだ。少くとも僕の理性はその時はM子を堅く信じてゐた。然し僕の心に響く手紙の言葉の空虛さをどうする事も出來なかつた

僕はすぐ少し詰つたやうな手紙を出した。その手紙に對しては勿論返事が來なかつた。僕はそれでもこの奇怪な不思議に耐へ忍ばうとした。計畫したゞけは果してから歸朝しようと思つた。然し凡ては無益だつた。結局は僕のこの苦心も努力もM子の爲めなのだ。M子と一緒にこの結果を味ひたいためなのだ。だから苦しい最後の一年で僕はもう我慢が出來なくなつた。僕の乘つたスエズ廻りの汽船は、香港を出てからいかにも穩かに、煮えくりかへるやうな心の僕を乘せながら、神戶港に這入つた。久振りで見た日本の景色――それはなつかしいものでな

ければならなかつた。然し勝海舟が築いたといふ砲壘も、それに續く畫のやうな松原も、六甲山の翠を蘸して重く湛へられた美しい港内の水も、僕の眼には、何んのつやもなく映つた。船が錨を下ろす間も遲しと遠廻りに待ちうけてゐたランチや艀船は、磁石に吸ひ寄せられた鐵屑のやうに、船の周圍に集まつて來たが、誰にも歸朝を知らせなかつた僕は、それらの中に僕の存在を注意する人間を一人として見出すことが出來ないのだ。僕はすごすごとして故國の土を踏んだ。

僕は故郷にも立ち寄らずに、大事なものを入れたトランク一つを持つて、眞直に東京行の急行に乘つた。僕には始めから不思議な豫覺があつた。それは東京に着いて君に會つたら、M子の一年の沈默の謎が解かれるだらうといふ事だつた。昔からさう親しく交つてゐたのでもない君がどうして僕の念頭に浮び出たのか、それは今でも解らない。列車が東京に近づくに從つて、僕は名狀し難い一種の惡寒に襲はれ出した。交る〴〵に手が冷えたり、足が冷えたり、背中が冷えたりした。熱のさしてくる前のやうな心持の惡い一種の身震ひがぶる〴〵と胸の處についた。夜汽車で風邪にかゝつたのではないかと思つて見たが、喉にも鼻にも別條はなかつた。唯鼻の奧が妙につまつて口がから〴〵に乾いてはゐた。膝頭のがくつく脚をふみしめて停車場を出ると雨だつた。じく〴〵と長續きするらしい六月の雨が降り出してゐた。

外國にゐた習慣から、僕は煤に汚れた顏や手を洗つてシャツが替へたかつた。で、すぐ人力車を賴んで近くの旅館に案内させようとした。然し車の中で今日が丁度日曜である事を思ひ出した。僕は君が日曜には教會に行く事を知つてゐた。教會から多分外出するだらう。さうしたら明日でなければ遇ふ事が出來ない。それは堪へられない程間ぬるい事だ。時間を見ると十一時一寸前だつたから、これから急がせれば閉會までには間に合はない事はあるまいと思つて、車夫にその足ですぐ築地に行くやうに命じた。前幌をすつかり掛けた狹い車の中で、僕は氣

分ばかりでなく窒息を感じ眩暈を感じた。眼の前に小さく明けられたセルロイドの見通しも、雨の爲めに視象を亂して、見るものが悉くゆがんだり滲んだりした。丁度涙を一杯ためた眼で物を見るのと同じだつた。それが僕の心を殊更暗くした。

煉瓦造りの教會が見え出すと矢庭に僕の心は彈み出した。日本に着いてから始めて友情の籠つた言葉を交はすといふ期待だけでもその筈だつたが、僕の場合にはその後ろにもつと心を彈ますものがあつた。見ると教會の入口からはぞろ〳〵會衆が出て來る所だつた。幾組もの會集がこつちへ向いて傘をさしかけて、もうぬかるみになりかゝつた惡路を拾ひながら歩いて來た。僕は腰かけから乘り出して、甲斐がないとは知りながら、指の先きでセルロイドを押し拭ひながら眼を定めた。

君がゐた。M子がゐた。しかも君とM子とがいたはり合ふやうに兩方から洋傘を寄せ合せて、教會からの歸りといふよりは芝居からの歸りといふやうな、晴れやかな微笑を取り交はしながら歩いてゐた。

「おい、車屋卸してくれ」

皺枯れた聲が咄嗟に僕の口からをめかれた。その聲を聞くと丁度車の傍を歩いてゐたM子は、ぎよつとした風で思はず立ち止つて僕の車の方を見た。その眼――今でもその眼を思ひ出す程僕の復讐心を痛快に滿足させるものはない。あの心の底まで腐れ果てたM子も僕の聲は記憶してゐたのだ。而してその聲に脅かされるだけの本能的な貞操の斷片を持つてゐたのだ。然し僕の聲をそんな所で聞かうとはどうして思はう。M子はすぐ自分の幻覺を嘲笑ふやうな、薄氣味の惡い顏をして、君の後に追ひついて行つた。

轅棒が卸ろされて前幌がはね退けられる間も待つてゐられないで、僕は狂氣の如く車から飛び降りた。君等はもう後姿を僕に見せてゐた。嫉妬――嫉妬といふのは普通の嫉妬をいひ現はす言葉だ。そんな言葉はこの場合役に立

たない。何もかにも餘り明白だ。戀する者の本能が過たず刺し通す兩刃の劍に、僕の胸は火のやうに凍つてゐた。然し何んといふ卑劣な心だ。僕はこんな明かな姿を見せつけられても、まだ本能に裏切る餘裕を示さうとした。而してポケットの中に入れてある短銃の代りに、慇懃な聲を取り出してゐた。

「加藤君ぢやないか」

何事も知らぬ君は平氣な顏で立ち止りながら此方へふり向いた。M子も立ち止つてふり向いた。然しM子は一旦僕が車の中からかけた聲を疑ひはしたが、車が止つて中から飛び出した男が足早に近づいて來るのを氣取つた時には、既に一番忌むべき出來事に刃向ふだけの覺悟を準備しようとしてゐたものらしい。はつと驚いたらしく見せたその顏には、自然の驚きはもういくらも潛んではゐなかつた。學生時代から一躍して兎に角紳士らしい體裁に替つた僕を、而して豫報もなく君の眼の前に天降つた僕を、君は暫くは見分け兼ねたやうに、返事もせずにまじ〳〵と眺めようとした。途端に君は眞蒼になつた。

「暫く」

「まあ、ほんとに驚きましたわ」

僕が君にいつた言葉と、M子が僕にいつた言葉とが氣まづくかち合せをした。M子はいきなり僕に近づいて來て、自分の洋傘を雨ざらしになつた僕にさしかけながら、もう涙ぐんだ眼でぢつと僕を見た。二十八――女の二十八――惡むべき妖艷。やゝ小肥りになつたゞけで、すらりと素直に背丈けの高いM子は、若いまゝ熟し切つてゐた、古い葡萄酒が赤いまゝで芳醇なやうに、嘗てその美酒を心ゆくまですゝつた僕に取つて、この眼前の誘惑はどれ程だつたと思ふ。その吸はれるべく作られたやうな赤い唇は眼の前一尺の所にあるのだ。若しその時君といふものが邪魔してゐなかつたら、僕の心が眼を支配する代りに、眼が心を支配してゐたに違ひない。如何なる

程度にせよ、君がM子に觸れたと思ふと、僕の眼に映るM子の姿は美麗な獨樂のやうに見えた。その美を樂しむ爲めには、力まかせに鞭つより外に道がないのだ。

「何時お歸りになつたの。大變おやつれになつたわ。ね（といつて君の方を見た。）一體今何處にいらつしやるの。これから直ぐ宅にいらつしやいましな」

甘えるやうにM子は首をかしげて見せた。夜汽車の煤で汚れたまゝの僕の顏をやつれたと思ふのも無理はない。然しその言葉の裏には、三年の間の超人間的な勞苦の爲めに全然少年の若さを失つて、干からび切つた僕を醜く思ふ語氣が明かに窺はれた。僕は冷やかにM子から君に眼睛を移した。

學生時代に見たつきりだから君も變つてゐた。然し君はあの時分から妙に色男といつたやうな典型だつたな。何處から何處まで細々と華車に出來てゐて、聲が時々一寸かすれるのさへ君を艷めかしくした。その癖君の度胸には不思議にすわりのいゝ所があつて、誰にでも臆面なく正面を切つた。教師に對しても同輩に對しても、君は不斷の謙抑な言葉尠な樣子にも似ず、快活とも見え、輕侮とも思へるやうな態度を見せる事があつた。そんな瞬間に君が口尻に現はすゆがみ――人によつては、殊に女性などは、それを愛嬌と見るかも知れない――そのゆがみを僕は極端に厭はずにはゐられなかつた。僕は滑らかに人に取入る人間には割合にたやすく籠絡される方だつたけれども、君のその口の側のゆがみがあるだけで、僕はどうしても君に氣を許す事が出來なかつた位だ。

君は變つてゐた。君は學生時代よりも少し肉付がよくなつた爲めか、餘程重々しくなつて、左の方で綺麗に白い額の上に分けた黑漆の髮と、金緣の眼鏡とは、教養ある君の紳士振りを一段と高めてゐた。女は君を注意せずにはゐられまい。一般の男が女に與へる全體からの力强い感じは君は持ち合はしてゐないかも知れないが、女は君の細部に思はず眼を牽かれるだらう。右の耳の上で卷かれた癖髮とか、白い額にはつきりはめられた小さい黑子

とか、素直に高まつて行く鼻の線とか、例の微笑む時の口尻の奇怪なゆがみとか、櫻貝のやうな指の爪とか、臆面もなく夢みるやうに女を見る眼鏡の奥の二重瞼の眼とか、腰から下を流れるしなやかな長い線とか……

君は變つてゐた。然し君が僕に對して好意を見せるやうに、その場の仕儀を取繕ふやうに微笑んだ時、口尻に現はした例のゆがみは昔のまゝだつた。僕はそれを見た瞬間に君に對する不快の念が嘔氣のやうに胸先にこみ上げて來るのを覺えた。「如何にしても油斷のならない男だ。」僕は自分の確信を裏書きするやうに心の中でうなづいた。然しこの場合君を虜にするのが僕に取つてどれ程大切であるかを僕は忘れなかつた。僕は强ひて親しさを裝ひながら君に話しかけた。

「僕は何よりも先に君に伺ひもし御相談もしたいと思ふ事があるんだが、用がなければこれから僕の宿まで來て呉れませんか」

所がこんな場合にかけては中々づう〳〵しい筈の君は、をかしいやうにまごついてしまつた。僕はいゝ氣持で君が眼の向け所もなくせか〳〵するのを眺めやつた。

「い、行きませう。是れといつて別に用もないんですが……」

僕は咄嗟にM子の心が眼まぐるしく働いたと思つた。M子は慫ゝ平氣を裝はうとしてゐたが、その假面がどうしても小さ過ぎる程、緊張した心の素顏の大きいのを僕は見て取つた。M子は雨が僕に降りかゝる事などは忘れたやうに、洋傘を僕から遠ざけて、僕のゐるのにも構はず、よく物をいふその眼で君の眼に物をいつてゐた。

「だつて加藤さん今日は午後から組會があるのをお忘れになつて？」

「あ、さうでしたね」

君はたつたそれだけの言葉に、百萬の援兵でも得たやうに勇み立つてから答へた。

僕は何んでもかんでも先きに君に會ふに限ると思つたから、M子の家に行くのは斷つて、車屋から旅館の名を聞いて、それを君等に知らして、夕方に君とそこで會ふ約束をして又車に乘つた。

僕は宿についてから出された晝食を喰つて、顏も洗ひシャツも替へたらしかつた。然しそこいらの事は思ひ出さうとしても夢のやうだ。兎に角僕がはつきり自分を意識した時は、雨外套を着たゞけで傘もさゝずに田端の高臺を獨りぼつちで歩いてゐた。眼の前の道傍には雨氣を帶びた雜草がぞく〳〵と氣持よさゝうに葉先きを天に向けて、生ひ伸びてゐた。雨に洗はれた眞靑な葉色は、見れば見る程美しいものだつた。僕は珍らしい發見でもしたやうに、一つ〳〵綿密にそれを眺めながら目あてもない道を歩いて行つた。何んといふ惠み深い自然の姿だ。「先きを越されて引き退つてゐる俺ではないぞ。」すぐこんな惡魔のやうな氣分が肚胸をついた。君を半日僕から奪つたM子は、一體どんな奸計を廻らさうとしてゐるのだらう。敏感な彼女は僕の氣付いた事を氣付いてゐるのだ。もう遁れる道はないと思つてゐるのだ。それでもそこをどうごまかさうとするだらう。ごまかす氣ならそれで僕はごまかされた風に出て見せてやる。それとも風を喰つて姿を隱さうとでもするだらうか。馬鹿！　二人が生きてる間は、僕の眼から逃れられると思はぬがいゝ。神が二人を見失つても僕は見失ひはしない。それとも正面から凡てを告白して、僕に離婚を迫らうとするだらうか。それはM子の一番しさうな事だ。而して僕の立場を一番苦しめるやり方だ。僕の立場としてはそれを拒むべき何等の申譯もない。さう思ふと僕は急に力が拔けて、崖際に轉がしてある切石の上に腰をおろしてしまつた。

どか落ちになつた足許から、遠く〳〵隅田川と江戸川との水積地が紙のやうに平らに擴がつて、どんよりと動きもせぬ雨雲が、僕の心のやうにそれを蔽うてゐた。雨は靜かに降るともなく降つてゐる。海から流れて來たらしい白い鳥が、五六羽づゝ群れになつて、慌たゞしく飛び廻つてゐた。眼の下には工場や汽車が眼まぐるしく働い

てゐるけれども、一帶の眺めは哀れな程物靜かだ。ぼんやりその廣々とした野の景色を眺めながら、僕はM子を唯僕の情熱を飽くまで滿足さしてくれた一人の女として考へ始めた。尋常な瓣に大きく見えるその眼を、吸はれるやうに作られた赤い脣を、心持ちそれ上つた才はじけた鼻を、僕の肩にもたれかゝつたその襟頸を、感情が高まる程美しさを増すその聲を。僕はM子になぶり殺される爲めに生れて來たのだ。だから彼女を失ふ事は出來ないのだ。そんな事を思ひながらふと氣がつくと僕は思はず手を擧げて、蠱惑的な肖像を描き出した目前の空間を拂ひ退けてゐた。」離婚を拒めば僕の男は廢つてしまふのだ。男の誇り――それをどうしよう。といつて、M子を君に委ねるのは、僕に對する君の勝利を認める事だ。こゝでも僕は自分の誇りを踏み躙らなければならない。例へば僕がこの打擊から立ち直つて、どれ程素晴らしい大事業家にならうとも、どれ程勝れた新妻を迎へようとも、どれ程氣高い聖者になり遂げようとも、畢竟僕はM子を他に奪はれたその點に於ては立派な敗者だ。生活の甦生によつてこの事實を忘れ得るやうな呑氣者が或はこの世にゐるのかも知れない。然し僕にだけは忘れられない。奪ひ返すか殺すか――さうだ奪ひ返すか殺すか。「おゝ俺はM子を愛する。」この愛の正否を誰が冷やかな心で批判する事が出來る。正しからうが正しくあるまいが、價値があらうが價値があるまいが、悲壯であらうが滑稽であらうが、俺にはM子を愛すると云ふ外にM子に對する感情を云ひ現はす言葉がないのだ。M子の有する缺點なり、惡意なり、不貞操なりがそのまゝに僕には誘惑なのだ。それは病的だとも云へよう。さうだ病的だ。然し病的がどうしたといふのだ。僕にはそんな病的な感情ですら持つ機會の與へられない健かな人間が憐れまれるばかりだ。奪ひ返すか殺すか――さうだ奪ひ返すか殺すか。……僕の手は知らず〳〵衣囊の上から短銃を探つてみた。而して眼からは止度なく涙が流れた。仕舞にはたまらなくなつて、僕はすゝり上げながら泣き出した。どの位さうやつて僕は丸まつてゐたらう。

氣が付いて立ち上ると四邊は夕方の光になつてゐた。僕は今朝の約束を思ひ出して歸る支度をした。見ると今まで腰かけてゐた切石の下からも雜草は這ひ出てゐた。根は正しく石の下にあるのに、藻掻き苦しんで伸び出た葉が、いぢけながらも重い石の羈を拂ひのけて、光と雨との分け前にありつかうとしてゐる。僕は外の草の事などは忘れてしまつて、その草一つを石から自由にしてやらうと思つた。而して力まかせに切石を動かして見た。石は冷やかに、動かうとはしなかつた。「可哀さうに、秋が來ると、お前は逸早く萎んでしまふのだ。」さう思ひながら僕はその雜草を見捨てゝ立ち上つた。

その晩可なり遲くだつたな、君とM子とが僕の旅館に尋ねて來たのは。君は僕に見られる度毎にいやにおどおどしてゐた。けれどもM子は立派な覺悟が出來たらしく落付き拂つてゐた。あれは君の趣味なのだらう、M子は明治初年頃の束髮にしてゐた。而してそれに細い黑のリボンをさしてゐた。それがその髮形にさして不調和にも見えずに、その夜の情景に素晴らしくよくそぐつてゐた。M子はそんな事にかけては全く天才といつていゝ。

その時の事は君が知つてる通りだから改めて書きたてまい。然しM子が過去一年間の君との情交を情理竝び至るといふやうな筋目の立つた感傷的な調子で語り終つた時には、僕は思はず君等の境遇に同情した事をいつて置かう。その後で君は、いやに法律家じみたぎごちないロ調で、僕の友人として、基督教徒として、又一個の人間として、縱令M子に對する同情と尊敬との結果だつたとはいへ、あんな不始末をして退けた罪を陳謝して、M子に對してこれから斷然潔白な立場に還る事を男らしく誓つたね。而してM子の蹉跌を憐み許して、元のM子として愛するようにと歎願したね。そこに行くとM子は消え入るばかりに泣き出した。而して涙の中から漸く、自分の深い罪はとても僕の許しを受けるに餘り過ぎる。縱令僕が許しても自分には受けられない。告白を聞いて貰へたゞけでもう嬉しい。この上は孤兒院にでも行つて、靜かな一生を送りたいと云つたつけね。「狂言をするない。」

僕は君等二人に石でも投げつけるやうに怒鳴つてやりたかつた。それは一面だ。一面には僕の心の中で思はず躍り上る惡戲者がゐた。田端で思ひ設けてゐたのとは丸で違つた申出をされたその意外さに加へて、兎も角もM子が又僕に戻るといふその喜びは、僕の心のどん底を有頂天にしてしまつたのだ。

僕は極めて落付いてかういつた。

「加藤君よく云つて下さつた。僕はあなたの純一な氣持には感じます。仰しやる通りに考へませう。然し果して今後君に對して以前と同樣の交際が出來るかどうかは、暫く經つてからの僕の判斷に任せて下さい。M子さん、二人の運命は餘り恐ろしかつた。けれども僕は何んにもいひますまい。どうか僕に信賴して貰ひたい。僕は虛心になつてあなたを許します」

僕はさう云ひ終ると、我れ知らず熱い淚を流してゐた。君等二人もすゝり泣いた。

けれどもその時の言葉を僕の心の底で飜譯して見せようか。それはかうだ。

「加藤！　貴樣の狂言じみた言葉に俺が乘ると思ふのか。うつかりM子を俺に戾した貴樣は百年目だと思へ。今度は貴樣が苦しむ番だぞ。M子！　お前がどんなに運命を狂はせようとしたつて俺の執着に變りはないよ。俺は死ぬまでお前を愛してゐるんだ。許すも許さないもない。お前が俺のものにならなければ死ぬ所だつたんだ。危かつたんだ。さあ又俺の胸に來い」

君の方にもそれ〴〵飜譯文はあるだらう。兎も角、それでゐて、三人は眞面目腐つて聲を忍びながら泣いたのだ。……咄！

こんな風に僕等三人の間の狂つた關係が整理されて後一ケ月して精養軒で結婚式を擧げると、僕とM子とは新家庭の主人公となつた。M子は生れ代つたやうに老成なつゝましやかな主婦になつた。海外で迯つてゐた、獨り

ぽつちで波濤を泳ぎ切るやうな、荒れすさんだ険難な生活は一場の惡夢のやうに僕の記憶から薄れて行つた。然し僕はM子の本性の要求の何んであるかを知つてゐた。知つてゐたといふより感じてゐた。否、もつと明らさまに云ふなら、M子が萬事に費用を節して、廣い交際も求めず、暇さへあれば庖廚や裁縫の事に氣を配つて、ひたすら家庭の和樂に一心を籠めてゐるにも係らず、僕には自からけば〳〵した生活を追ひ求める心持が強まつて行つた。僕はM子の反對も構はずにこの豪壯な屋敷をそつくり買ひ取つた。而して海外にゐた時、そこいら中の大會社と契約しておいた代理賣捌きの業務を開始した。三年間の一心不亂な努力の結果として、齢の割合には實務を切りまくつて行く腕も出來てゐたし、傳來の財産も仕事をどん〳〵擴めて行くのに差支へなかつたから、瞬く暇に僕の店は日本中に取引先を持つやうになつた。信用はまた僕の資産を四倍にも五倍にも融通させた。商賣は見當が附くまでに早くも三年といふものだが、A商店といふ名は一年足らずで、その道の人達の間にも十分の重味をもつて取扱はれるやうになつた。

M子は然しこの素早い成功を非常に恐れるらしく見えた。彼女は明敏な頭腦で、絶えず僕から事業の様子を聞いて、あつといはせるやうな助言をしてゐたが、或る晩、食後の小休みの時、是非仕事の手をこれ以上に延ばさないようにと拜むやうに賴むのだつた。

「私にはもうこれ以上は頭が働きませんわ。もう怖くつて本當にいや。あなたどうお思ひになつて？ 私はもつと靜かな意味のある生活がしたう御座んすわ。こんなにお金の事にばかり頭をなやましてゐますと、信仰の事なんかさへ考へる暇がなくなつてしまつて。それにあなたは碌々家にはいらつしやらないし、第三者から見たらいかも知れないけれども、私はいやですわ。それにあなたはこんな仕事には本當は適していらつしやらないわね。……いやよ、そんな怖い顔をなすつちや。さういへばこの頃はお顔まで怖くなつたわ」

何を隱さう、僕は全く疲れ始めてゐた。時間といふものゝ見さかひさへもなくあせり過ぎた結果、仕事は眼の屆かない程伸びたけれども、それを支へて行く勞苦は一通りではなかつた。僕もその時少し手を擴げ過ぎたのを後悔し始めてゐる時だつた。殊にM子の態度が落付いて見える程、僕の作り元氣はしぼんで行つた。

僕の眼の前には圖らず本當の幸福が笑みかけて來たやうに思へた。齡といふものがM子にも響いて來たのだ。僕の切實な愛情がいくらか本當に浸み込んでくれたのだ。さう僕は思つた。僕の本性にかなつた生活が可能であるらしく眺めやられた。僕は占めたと思つた。M子も僕も本當に救はれる時が來たのだと思つた。僕はM子に對して警戒をゆるめると共に、ねぢくれない愛情を以て臨む事にしようと思ふやうになつた。

それは嚴冬が何時とはなしに春に變るやうな喜びだつた。手加減をしながら仕事の範圍を引きしめて行つた結果、商店の業務は店員に任せて置いてもさして案じる必要がなくなつた。二人はよく終日家で暮すやうになつた。M子を嚴しく自分に縛りつける欲念から、無殘なまでにM子に無理强ひした不自然な性慾の遂行も、二人の間の適度な要求にまで緩和された。僕は本當に女から何を要求すべきかを學び始めたと思つた。

それは或る夏の午後だつた。書齋で讀書に倦きた僕は、何一つ足りないものもないやうな豊かな心持で机から離れた。開け放つた張出し窓の外からは、蒸れた芝生の薫りと、物うげな生活のさゞめきとが、涼しい高臺の微風に送られて流れて來た。僕は靜かに書齋を出て、廣い濡緣を通つて、居間の方へ行つて見た。幅の廣い庇で影を作つたその廣間は、外光が朗らかであるだけに、餘計暗く見えて、冷え〳〵する空氣がひいやりとよどんでゐた。荷馬車の馬などが日射病にかゝつて斃れてゐるに違ひない同じ東京の市中とは思はれない程の靜かさと涼しさがそこにはあつた。餘りの靜かさに人氣のないものと思つて這入つて行つた僕は、隅の方の長椅子に深々と腰をかけて、編物を手に持つたまゝ、安らかに假睡をしてゐるM子を見出した。僕は今更に親しさを覺えてぢつと

その寝姿を見守つた。齢に似合はしいだけの華美な浴衣を少しはだけ加減に着て、寝汗にしつとりと潤つた顔をやゝ仰向けて、吸はれる爲めに作られたやうな赤い唇を少し開いて、輕い呼吸の度毎に小鼻がかすかに動いてゐた。僕は足音を偸みながら長椅子に近づいて行つて、M子の側にそつと腰をおろした。而してまたしげ〳〵と彼女の寝姿を見守つた。

何處にも二十九といふ年齢や、貞操を亂した暗い生活を暗示するM子はゐなかつた。母の膝から下ろされたばかりの童女のやうに、可愛らしい形に手の先きを逆に折り曲げて、造つたやうに美しい素足に土耳古風なスリッパーを片々はいて、汗で額に粘りついた髮のもつれも罪のないものだつた。脱げた片々のスリッパーが、足許から二三寸の所に斜になつてゐるのさへ、不思議な頑是ない感じを眺める眼に與へた。

僕はほゝゑましい氣分になつていつまでもM子の姿を見つめてゐた。……その中に僕の眼の中にひとりでに涙がたまつて來た。僕は何んともいへない淸い素直な氣持に返つてから思つた。

「もう俺は斷じてM子を疑ふ事をしまい。女として誰が女らしい本性を願はないものがあらう。正しい愛に育まれさへしてゐたら、M子も決してあんな暗い道は通りはしなかつたのだ。肉念の勝つたM子の體質は、謂れもない周圍の警戒と猜疑との爲めに、我れ知らず反抗的な蹉跌を敢てしたらうとも、それはM子として心苦しい正當防禦といつてもいゝものだつたのだ。M子を本當のM子にするには疑はずに愛する外はなかつたのだ。俺はもつとよく考へて見なければならない。眠つたM子を見ろ、この罪の無さを。彼女は俺を見、世間を見ると、我れ知らず心にもない身構へをするのだ。而して彼女にはその豐かな肉體を利用して身構へる外に、身構へのしやうがないのだ。俺はもつと男らしい大きな心に立ち歸らなければいけない」

段々自分までが淨められて行く、その感じは恐ろしく殉情的なものだつた。今までの邪慳を洗はうとするやう

に涙が流れ落ちた。

ふとM子がかすかに眼を開いた。而して輕い溜息をすると又うつら〳〵眠りに落ちようとした。が、突然自分の側に人のゐるのに氣付いたと見えて、本當に眼を開いて、眼に涙を一杯ためた僕の方を見た。僕の顏にはあらん限りの好意と愛情とがひとりでに籠められてゐた。

「あら、いやですわ、恥かしい」

さういつてM子はしなをしながら顏を隱してしまつた。

「眼が覺めたかい」

僕はさう云つて靜かに居住ひを改めながら優しくM子の手を取つた。M子の手は輕やかにほてつて居た。それがいかにも可憐な初々しい感じを僕の掌に傳へて來た。一體M子に對してこんなデリケートな感じで接して行くのは間違つてゐるのだ。M子はもつと硬化してゐる。もつとあくどい心で觸れなければ利目がないのだ。然し殉情的な所の取り切れないお坊ちやん育ちの僕は、動もすると自分の心持でM子をあしらはうとした。

「私は今日あなたに詫びをしなければならない。今日まで私は何んと云つてもあなたを疑ひ續けてゐた。女の心の鏡に一度燒きついたものが根こそぎ取り切れようとはどうしても思はれなかつたのだよ。それでも私は心の中でどれ程この疑ひに苦しめられたか知れやしない。男らしくない奴だと自分でたしなめても見るのだが、一遍心に喰ひ入つた疑ひの蛇の頭は、つぶしても〳〵また元通りになるんだものね。然し今日といふ今日こそは心が定まつたよ。私はこれまでの卑怯極まる態度を根こそぎ取つてしまふ。さうして生れ代つてあなたと一緒に暮さうと思ふ。あなたを少しでも疑ひ續けなければならないと云ふのは私には全く苦し過ぎる。全く人間が一日々々に墮落して行く。……お互に世の中を廣く生きようね。もう過去は過去として過去の中に葬つてしまふんだ。而し

てお互に明るい氣分にならう。ね、それでいゝだらう。あなたは私の信賴に背かないでくれるね。惡い夢を見たのだ。二人の世界を何時までもあんな事で暗くしてゐては損だ。さうぢやないか。もう決して心配しないがいゝぜ。あなたがあの事でいつまでも私にひけ目を見せると僕は却つて不快になるんだよ。私の幸福が何處から湧くか、あなたは十分知つてゐるだらう。……それでいゝんだ」

そんな事をくど〳〵と僕は說き始めた。それが如何にM子には甘つたるく乳臭く聞こえやうとも、M子はそれをすぐ顏に現はすやうな女ではない。M子は自分の耳を信じかねたやうに、眼を大きくして僕の言葉を聞いてゐたが、やがて僕の心持を呑み込んだらしく、いきなり僕の胸にぴつたりとすがりついて、痛ましい程激しく泣き出した。人間の心と心とがしつくりと溶け合ふやうな瞬間を僕等は一生の中に幾度味ふだらう。それは全く地上の天國といふものだ。そんな時だけ人は立派に天使になる。それを人間は意識せぬながらに求め憧れてゐるのだ。僕はそんな事を思ひながら不思議に淨化された胸にくだけよとM子を抱きすくめてゐた。

「私見たいな罪人をよくも〳〵あなたは……もう何んにも申しません。拜みます〳〵。私、心が苦しくつて死にさうです」

おい、こゝを讀む時の君の顏を僕は見てやりたいものだ。M子のこの言葉は君の胸に抱かれて云つた言葉の復習だつたのに違ひないのだ。然しこゝではまだ嘲笑ふなよ。笑ふにはまだ少し早いのだ。

それからの二人は今までよりも尙更精神的になつて行つた。事業とか金を儲けるとか云ふ事がさして僕の頭に強い響きを與へなくなつたと共に、もう少し何んとか餘裕のある上品な生活に這入つて見たいと思ふやうになつた。M子はM子で日曜日には必ず敎會に出席し、寢る前には必ず聖書を僕に讀んで聞かせた。金曜日の夕方には僕から學資の補助を受けてゐる學生達が七八人も集まつて來て、無邪氣な快活な談話や遊戲に一夜を賑はした。

僕は段々そんな事にも趣味を覺えるやうになつた。嘗てB先生の所で勝手を振舞つた僕は、若い癖にB先生のやうな心持で、M子に下知などをした。男達を引き寄せるM子の腕はやはり水際立つてゐた。「をばさん」といつて學生達は僕よりもM子を何かにつけて中心にした。袴のほころび、遠足の辨當、洋服の註文——澤山の召使がゐるにも係はらず、M子はまめまめしく自分でそんな煩はしい仕事に當つた。金曜日の朝といふとM子がいつもよりはしやいで見えるのが、僕に輕い氣まづさを起させる程だつた。

兎に角二人は幸福だつた。大くゝりな所に行くと、男だけに僕の方が正しい大きな見方をしてゐたけれども、日常の出來事をはきはき見事に纏めて行くM子の技倆は素晴らしく齒切れがよかつた。年嵩を笠に着て、ちよいちよいした事に姉らしく振舞つて見せるのも決して不快の種にはならなかつた。世間でAの奥さんはAさん以上の切れ者だなどと噂されても、或る點でM子にしつかり優れてゐるとの自信を、M子によつて持たせられてゐた僕には、それが結句嬉しかつた。是れまでM子が兎角難癖をつけてゐた兩親との同居をM子の方からいひ出した時も、たゞ一つ物足りない事として子供が欲しいと云ひ出した時も、僕は自分の誠意の勝利を心强く意識した。M子がさう云ひ出せばそれでいゝのだ。僕にはその二つの問題は大した事ではない。と云ふより、今になつて見るとそんな事の起らぬ方が結句僕には望ましい事だつた。

かうした幸福な平和な生活が何んの障りもなく半年續いた。年は冬になつて商人に忙がしい歳暮が近づいた。さすがの僕も毎日せはしい思ひをして、四方に自動車を飛ばし歩いて、取引先との總勘定をしなければならぬ日が幾日も續いた。M子はM子で、歳暮物とか、商店員や召使の心附けとか、春着の支度とかに忙殺されて、終日家の中で三越を呼んだり高島屋を呼んだりして騷いでゐた。顏を合はせれば二人とも忙がしさうに、それでも忙がしいのが幸福でゞもあるやうに、かう忙がしくちや本當に困るなどといひ合つた。

忘れもしないそれは十二月の二十四日だつた。綿のやうに疲れ果てた僕は、夜の九時頃、自家の暖かさと氣安さとを慕ひながら自動車で神田の通りを駈けさせてゐた。丁度小川町の交叉點に來た時、電車から降りようとしてゐる一人の女に眼がとまつた。外套の裾をかばひながら、こゞみ加減に車掌臺から片足を下ろした所で、黑い毛の襟卷をしてゐたから、顏ははつきり見えなかつたけれども、物腰が確かにM子らしかつた。僕は思はず座席からのし上つて、若しそれがM子ならば自動車をとめて同乘させようとした拍子に、M子に續いて電車から降りかけた男に眼がついた。加藤だな――もう自動車は十間も先を走つてゐた。僕はすぐ振り返つて小窓から後ろをすかして見た。女も男も人ごみの中になつてもう見えなかつた。

「馬鹿な」

暫く考へてから僕はかう思ひなほした。こんなやくざな疑ひが要もない波瀾を起すのだ。信ずる位なら信じ切らう。僕は自分のさもしい心を悔いながらさう考へた。

M子は留守だつたが直ぐ歸つて來た。而して黑毛の襟卷きを脫ぎながら、さも珍らしい事でも起つたやうに、

「あなた小川町の停留所の所をお通りになつたでせう。さうでせう。どうも車の形がさうらしかつたもの。明日のクリスマスに教會の子供さん達に何か上げたいと思つて中西屋まで行つて來ましたの。この忙がしいのにおせつかい至極な事ね」

何を僕は考へてゐたのだらうと思つた。それ程M子の顏は罪のない晴れやかなものだつた。

次の朝いつもの通り入浴の爲めに浴室に這入つた。脫衣室で寢衣を脫がうとすると、掃除の行屆いたモザイグの床の上に五分四方程の紙切れの落ちてゐるのを見付け出した。平常なら僕はそれを見返りもしなかつたらう。然し昨日の今日だつた。僕の心の奥の奥には、かすかながら醜い猜疑の靑鬼が覗き出てゐたと見える。僕はそれを拾

ひ上げた。西洋書翰箋の隅の部分で、二方は直角をなして眞直に裁たれてゐ、他の二方だけが鋸の齒のやうに裂かれてゐた。表には「落付か」と三字だけ見えてゐた。裏には最初の一字が半分切れてゐて「郎〻」といふ二字だけがはつきり讀まれた。その「郎〻」を見ると、僕が君の名前を直ぐ頭に浮べて見たのに不思議はあるまい。君の名前には郎がついてゐる。もしや……「畜生！」僕の手はもう震へた。而して半分になつた上の字を見極めようとした。思ひなしで梅治郎といふ君の名の字が想像されないでもなかつたが、全く違つた字のやうにも見えた。「馬鹿な」との一言で片付けてはしまへなく僕はなつてゐた。で、その紙切れを浴衣の衣嚢にしつかりと仕舞ふと、僕は氣を落付けながら湯に浸つた。而してガラスの綺麗に拭はれた小窓から、寒さうな青空をぢつと見つめながら考へた。

　それは恐ろしい瞬間だつた。白煉瓦張の淸々しい四壁がずつと傾きかゝつて來て、今にもがらつと僕の上に落ち込みはしないかと思つた。僕の體はいつもより重く湯の中に沈み込むやうだつた。

　あれは脫衣室の隅にある西洋便所にたゝき込まれた紙屑の一片に違ひない。外部から吹き飛ばされて來た筈はない。……一體こんな事を思ふのは正しい事なのか。「人を盜賊と呼べ、その人は盜賊になるだらう」とカーライルはいつてゐる。……カーライルもへちまもあるか。あれを落したものがM子であらうとは思へない。大方便所を掃除した召使の袂から落ちたものだらう。あゝM子、もう罪を犯してはいけないぞ。本當だ。これは僕が心から云ふ。僕一人の利己主義から云ふのではないのだ。もう僕も苦しみたくはない。お前も苦しましたくはない。……今朝M子はまだ寢てゐる。先に浴室に來なかつたのがM子の失態だ。知らないでゐれば僕は結局前の通りに幸福だつたんぢやないか。それにはM子が先に起きさへすればよかつたんだ。けれども、あの紙切れの名前が松次郎なりたゞの太郎なりであつたとしたら。さうでないと誰がいへよう。昨夜最後に厠に行つたのはM子だ。召使

はあすこに出入しない。だから、兎も角もあれがM子の手から落されたのに疑ひはない。さうだ、疑ひはない。……。一體この湯はぬるいのか、熱いのか、丁度いゝのか。さうだとしたら、少くともM子は或る男から手紙を受けたのだ。それだけはもう間違のない事だ。「しつかり落付かないと露はれますよ」「私は落付かない心地であなたを待ちこがれてゐます」「逐電して〇〇に落付かうぢやありませんか」「すつかりAを落付かせたあなたの腕を私は恐ろしく思ひますよ」……惡魔！……。然し馬鹿な取越苦勞をするな。馬鹿な！　へつ、俺はこんな廻り氣な、さもしい男だとは自分ながら思はなかつた。凡てが夢だつたら、凡てが何んでもない偶然だつたら、僕はこの上ない間抜けになるのだ。一片の紙切れにこんな苦勞をする女々しい男があるか……。紙切れぢやないM子だ。それは小さな問題どころか。あゝ叶ふ事なら僕は默つて眼をふさいでゐたい。實際眼をふさいでゐたのだ。それを、M子が、さうだ、M子が僕から綺麗に離れたいばかりに狂言を書いたのだ。危くその手に乘る所だつた。ふむ、危い所だつた。誰がM子を離れさすか。然し、然し、何より望ましい事は、善い事だ、平和な事だ、狂ひのない愛情だ。何故それが許されないのだ。

僕の腦は順序正しく働く力を失つて、こんな事を連絡なく、ぼんやりした自己亡失の無想の間々に考へてゐた。僕が本當の僕に歸つた時には、冷やかな意思が鋼鐵のやうに重く險しく胸の中に漲り滿ちてゐた。血みどろな一種の興味さへ加はつてゐた。命にかけても、あの紙切れから事實を探り出さなければならぬぞといふ命令が、神託のやうに僕の上に下されてゐた。

僕が寢室に這入ると、その時寢床から起き上つたM子は裾前を合せながら僕の方へにこやかに振り向いたが、僕を見るとはつとしたやうに驚いた。僕の顏色が餘程變つてゐたと見える。僕は湯の中で突然眩暈を起したが、それは多分あまり忙がしかつた結果だつたらうから暫く休むといつて、そのまゝ寢床に這入つた。

M子はいつもの通りな氣安さで色々にいたはつてくれてから、今日はクリスマスでどうしても朝から教會に行かなければならないからといつて、小間使に細々と看護から食物の注意を與へて、昨日買入れた包物をしこたま自動車に積み乘せて家を出た。

M子がゐなくなると僕はすぐ小間使を下に追ひやつてしまつた。而して寢室に錠をおろしておいて、心の中に一種の痛みを感じながら、ある限りのM子の手紙を引き出して調べにかゝつた。名前が違つてゐても、文句が普通でも、浴室に落ちてゐた紙切れと質の似かよつたものは丹念に讀み返した。然しそこには少しも怪しい所はなかつた。僕はかうして居間も客間も調べて見た。更に怪しい形跡はない。仕舞ひには物置になつてゐる屋下室に行つた。三年の間僕が旅から旅に使ひ古したトランクの中にはぎつしり文殼がつめてあるのだ。薄暗く空氣のむれ切つた天井の低い小部屋の中で、その古トランクを見るといふ事が既に十分僕を淚ぐました。トランクの中からは、濕氣をひいた數百通の思想や感情の亡骸が現はれ出たが、一束になつたM子からの手紙が出て來た時には僕は悲しかつた。而して今はもう囘復の出來ない追想の爲めに魂まで打ちくだかれようとした。さし迫つた大事な仕事も忘れて、片つ端からそれに讀み耽つた後に、その中から殊に思ひ出の多い四五通を拔き出した。(この手記の中に取り入れたあの手紙もその四五通の中にあつたものだ。)それから僕は根ほり葉ほり君からの消息を尋ね求めた。一枚の葉書には君の名が頭文字しか書いてなかつた。一通の手紙には「加藤生」と君の姓だけが書かれてゐた。その字體が紙切れのと痛く違つてゐるやうでもあつた。大分似てゐるやうでもあつた。疑ふものには、その疑ひを更に疑ふ者には、何もかも分らなくなつてしまふものだ。

然しこの物淋しい小部屋は僕に大切な暗示を與へてくれた。蒸れ切つて暑い癖に、何處までも冷やかな感じしか與へないこの部屋は、僕の心に意地惡い冷靜を强ひてゐた。落付かなければいけない。僕の心はどんなに搖れ

動かうとも、僕の顔には鐵のやうな假面を被らなければならない。事がかうと決まるまでは、自分にすら自分の心を氣取らすな。僕はこの祈願を繰り返しながらM子の手紙を握りしめて階段を下つた。

その夜M子と僕とは長椅子に膝をならべて倚り添ひながら、M子からクリスマスの景況を樂しげに聞いてゐた。M子は存分に僕の假面に欺かれてゐた。「見てゐろよ。」僕は快活にM子の膝頭をたゝいた。

「面白さうだなあ。家でも一つクリスマスをやらうぢやないか、書生さん達を呼んで。明後日の晩を都合して。元の書生に歸つて僕も騷ぎたくなつたよ。あなたが前髮を切つた晩のやうに。尤もあの頃は僕は妙に佛頂面な男だつたが、この頃になつて却つて若返つたよ。あなたゞつてはしやぐ事にかけちや、昔に變らないからな」

M子の眼は本能的に輝いた、

「でもこの節季の忙がしさに。呑氣ね。けれども書生さん方は喜びませうよ。女中達にも隨分忙がしい思ひをさせたから、一晩位は遊ばしてやりませうかね。ぢやほんとにお呼びしませうか」

といひながら。

「ほんとにやらうよ。それからあなたの教會の人達も序に呼ばうぢやないか。酒だけぬきにすれば來てくれるだらう。平常世話になつてもゐるし、僕も近付きになつておきたいから。……それからね、あなたが元ゐた築地の教會の方の人々も呼ばうや。どうせ來て貰ふなら多い方がいゝ。加藤君には是非來て貰はう」

私のにこやかな假面はくづれなかつた。それにも係らず君の名を聞くとM子はいつもの通り不快な顏をして默つてしまつた。

「あなたはまた私をおいぢめになるお積り？」

暫くしてから、彼女は恨めしさうな眼を見張つて、僕の心を讀むやうにぢつと睨んだ。それは美しいやさ睨み

だつた。

「M子、思ひ違ひをしちや困るよ。本當をいふとね、僕はどうかして加藤君とは疾うから打ち解けたいと思つてゐたんだ。けれども妙にこぢれた心がそれを許さなかつた。隱し立てをしないでいへば、あなたの心底もしつくりとは呑み込めなかつた。そんなこんなで心にもなく僕は今日までぐづ／＼してゐたんだが、もうさうやつてゐるのが如何にもあなたに濟まなくなつてしまつたんだ。M子、僕はあなたを露ほどでも疑ふのがもういやだ。M子（僕はM子の背中から腋の下に手を廻してM子を引き寄せた。而してその美しい富士額に輕く接吻した。どういふものかその時情慾の深い彼女の唇には觸れる事が出來なかつた。）あなたは本當に僕を生き返らしてくれた。僕はもう誰とも障壁を設けてはゐられなくなつた。そねんだり疑つたりするのは苦しい事だ。人間が全く下等になつてしまふ。あなたも心がきまつてさへゐたら加藤君と交際したつて、いゝだらう。交際するのを恐ろしがるやうでは却つて僕に不安を殘すやうなものだ。解つたね。いゝね、加藤君を呼んでも」

或る學者は悲しいから泣くのではなく、泣く表情をするから悲しくなるのだといつた。全く不思議なものだ。こんな事を云つてる中に、僕はいつの間にか氣分まで妙にしんみりしてしまつてゐた。心からこんな事が云へるのぢやないかとまで思つた。

それからM子が如何に突然椅子からすべり下りて僕の膝に突つ伏したか、如何に僕の寛大な取りなしを感謝したか、如何に湧き返る涙をむせび泣いたか、而して仕舞ひには、如何に二人が情に迫つて堅い抱擁の中に幾度も幾度も接吻を取り交はしたか、――それは君の想像に任せよう。M子はそれを眞情からしてゐたに違ひない、僕が空々しい自分の述懷にしんみりしてしまつたやうに。人間といふものはどうかした拍子に自分以上になつたり自分以下になつたりするものだ。人の心の險しさはそこにあるのだ。

かうしてM子がとう／＼自分を裏切らなかつたやうに、僕も仕事の切先を露ほども鈍らせはしなかつた。僕はすぐ君に向けて簡單な招待の手紙を書いた。

君の來ないのは知れ切つてゐる。然しそれは僕の目的ぢやないのだ。君の自筆の返事――それだけを君から奪ひ取りさへすれば澤山なのだ。普通毛筆ばかり使ひ慣れてる僕はわざと萬年筆を用ゐて書いた――君がペン、殊に萬年筆を用ゐるやうに（紙切れに用ゐられたものは萬年筆に違ひないと鑑定をつけてゐたから）僕は明瞭に自分の姓と名とを書いた――君も姓と名とを用ゐるやうに。僕は西洋風の封筒をつかつた――君があやまたず洋紙を用ゐるやうに。僕は「落付いてお話がしたい」と書いた――君も「落付」といふ字を何處かで用ゐるやうにと思つて。

二十六日の朝、自動車で出かける前に、僕は門前まで行つて自分でその手紙を投函した。「してはならない事をしてしまつたのではないか」といふ考へが電光のやうに僕の頭を閃いて通つた。然しそれは赤い郵便函の蓋がいちやんと音をたてゝ廻つてしまつた後だつた。僕は上野の停車場まで行つて自動車を返して、徒歩で田端の高臺に出た。手紙を出してしまつて見ると返事が來るまでM子と顏を合はしてはゐられない氣がしたのだ。

岡も野も霜枯れて、筑波からおろして來る風が、櫻の木の細かい枝をならしながらぴゆう／＼吹いてゐた。すれ違ふものは晝夜の交代をする職工の群ればかりだつた。皆んな眼を動かすのさへ寒いやうに一ケ所を見定めたまゝ、風に凭れかゝつて足早に歩いてゐた。その人達はどれもこれも貧しく持病持ちらしく見えた。風に刃向つて岡の方へ飛んで來ながら、いくら羽ばたきしても一寸も進み得ぬ鳥の群れは、申し合はして斷念したやうに、突然矢よりも早く野末に小さく押し流されて行つた。轍の跡をそのまゝ道はかん／＼に凍つてゐて、僕は幾度も足を輾した。この春新らしくされたらしい街燈のガラスは敲き破られてゐた。掛茶屋の葭簀はずた／＼に裂けてゐた。霜にいためられて漬菜のやうにべと／＼になつた叢の中から、尾花の穗だけが未練らしく頭をもたげて、

ちゞれかじかんだ穗先きを得手勝手に振り動かしてゐた。何んといふ慘めさ、何んといふ貧しさ。その中で僕だけは臘虎の冬帽子に毛襟の厚外套を着て、駱駝の頸卷に顏の半分がたをしつかり包んで歩いてゐたのだ。そして僕は眼に觸れる凡てのものより比べものにならぬ程慘めな貧しい存在であるのを知つてゐたのだ。枯葉ですら、風に乘つて走る。小鳥ですら灌木の蔭にとまり木を持つてゐる。僕には何があるのだ。

萬望君が返事をよこさないでくれ。少くとも君の手蹟が一夜の中に變化してゐてくれ。君が會社からの歸りがけに、古本屋で或る石摺りを見付け出して、急にその字體が氣に入つて、今までの字體を改めたとすれば……その些細な出來事が僕の運命を光明に導くかも知れないのだ。もう僕は人を疑つたり恨んだりしなければならない苦痛に堪へ切れない。ほんの少しばかりにせよ、正しい生活を垣間見せられた僕は、もうあの裏道の泥の中ばかりを拾つて通るやうな、凡ての物事を裏返して檢めるやうな、夜だけ眼をさまして齒がみをするやうな、太陽が黑い鐵の球にしか見えないやうな、陰慘な、酸鼻な、猜疑の生活をするのに倦き果てた。僕には、人に裏をかかせて平氣でゐられない女々しい猜疑心があり、自分の領土を露ほども侵させまいとする氣儘な利己心があり、表には卑下しながら、裏ではせゝら笑ふ高慢心があつたとしても、その奧にそれ等を卑しみ厭ふだけの欲求が全く缺けてゐる譯ではないのだ。平常は氣もつかないでゐる。然しその時のやうな切羽つまつた窮地に立つと、自分の善良と小心とにはつきり氣付くのだ。君の返事を受取るまでの僕のこの苦痛をどうしたら救ふ事が出來るだらう。

運命よ、若し少しでも親切心があるなら、M子を貞節な女であらせてくれ。お前が僕を苦しめると苦しめないとはお前の絕大な仕事の上にさう大して關係があるのではないのだ。若しお前さへ一寸加減をしてくれゝば、僕はM子に對してこの上ない忠實な勤勉な良人となるに違ひないのだ。而して僕等は他人の邪魔にならない程度に、

少しづゝ自分達の生活をよくして行く事が出來るのだ。僕は運命に對して決して僭越な望みを持たない事を誓ふ。若し富が惡ければ富を捨てる。若し事業が惡ければ事業をやめる。若し人の世話を燒くのが惡ければ人のゐない所に行つて住む。M子さへ僕の愛を——これだけは何にかけても誓へる程眞實な愛を踏みにじつてくれさへしなければ、僕は何んでもする、何にでもなる。萬望許してくれ。それだけは許してくれ。

　さう思つて僕は、願を叶へてくれるものさへあれは、誰にでもすがりついて哀願したかつた。思ひ切つて君の所に行かうか。而して眞心を打ち明けて賴まうか。君は恐らくは「笑談も程々にし給へ」といひながら、怒りの色を見せて、君にすがり付く僕の戰く手を拂ひ退けるだらう。

　何んだつて君のやうな人間が生きてゐるのだ。何んだつて僕のこの心持を氣違ひじみて狂言としか思ふ事の出來ない君といふものが生きてゐるのだ。君のやうに眞劍といふものゝ解らない人間さへゐなければ、僕は今より遙かに美しい幸福な人間になつてゐたのだ。

　けれども駄目だ。君がゐなくてもM子がゐる。M子の心が腐つてゐれば、縱令君がゐなくても、君と同じものを見附けるのは小石を拾ふやうに容易い事なのだから。M子だ、M子だ、M子だ、おゝM子なのだ。

　然しM子がどうしたといふのだ。僕がM子を愛したとしても、而してその愛がM子の受け得る最上の愛だつたとしても、M子がその愛を受けたくないとしたらどうなのだ。僕はM子を愛するだけの話だ。而してM子は僕を愛しないだけの話だ。何處に非點の打ち所がある。何處に非難の入れ所がある。

　僕は仕舞ひに何もかも解らなくなつてしまつた。僕の心はすつかり打ち摧かれた。赤子のやうに凍てた路上に突つ伏して、萬望僕が一番惡い事を考へて、一番愚かな事をした人間でありますようにと祈る外はないと思つた。たつたあれだけの紙切れで、どこまでも信じ抜かうと決心してゐたM子に對して疑ひを持ち出した僕は、一

體何んといふおほそれた馬鹿者だらう。この場限りそんなねぢけた心は捥ぎ取つて棄てゝ仕舞へと思つた。さうしたら運命が自然に僕等の關係の上に微笑んでくれるやうにも思つた。

これは前からも幾度か考へないではなかつた事だけれども、この場合に殊にきびしく考へたのは君の事だつた。不思議なのは僕の心だ。僕は君を考へ出す度毎に、君がこの世に生れ出て來た譯が判らなく思つた。君と云ふ人間は用もないのに偶然に創り出された邪魔者だとしか僕には思はれなかつた。だから君が早く死んで行くのは僕にとつては何より合理的な事だつた。「何を愚圖々々この世の中にのさばつてゐるのだ」さう僕は思つた。（君はこの手紙の冒頭に、君が僕に對して同じ事を思つてゐる推測をしてゐるのに氣がついたらう。それは明かに僕の心で君の心を推測したのだ。而してそれは間違つてはゐない筈だ）然し同時に僕は誰が想像するよりも一番深く君の立場を想像してそれに同情してゐた。僞善だと君が思はうと思ふまいと勝手だが、僕は君に同情してゐたのだ。僕がこれ程M子を愛し、M子に溺れ、M子に殉じてゐるその心で察すると、君が彼女に對して同じく執着を感ずるのは當然としか僕には思はれなかつた。のみならず君が執着を感じてゐるといふのは僕に取つて一つの誇りでさへあつた。M子の魅力は僕一人の自惚から編み出した妄想でない事が證據立てられるからだ。

然しそれ以上にまで君が切り込んで來てゐはしまいかと思ふと、僕は胸が焼け爛れた。その瞬間に僕の心からは客觀性が全然失はれてしまつた。僕は自分が崇高な利己主義者になり上つて行くのを感じた。僕とM子との外には人間はゐなかつた。僕とM子との關係の外には世界はなかつた。がむしやらに自分の運命が――運命が自分に如何に仕へようとするかを試みたい誘惑からどうしても遁れる事が出來なかつた。君からの返書を見たい衝動を退け切る事が出來なかつた。君だつてその位の僕の心持は分るだらう。成程それは正當な事ではなかつたかも知れない。若し僕がその時その誘惑に打ち勝つてゐたら、その潔い心の擴がりがM子をとう／＼僕の愛の中に抱きす

くめさせたかも知れない。ふむ、かも知れない。然し兎に角事實僕はさうはしなかつたのだ。
田端の高臺を行き盡して巣鴨に出た。巣鴨を行き盡して大塚に出た。大塚を行き盡して新宿に出た。時計を見ると二時半だつた。君から返事の來る時間さへ過ごしてしまへば、もう別に恐ろしい目に遇ふ氣遣ひがないやうな氣がして、僕は何時までも足に任せて品川の方まで東京の場末をずつと歩き廻らうと思つてゐた。所が代々木の御料地の邊を歩いてゐる時にふと大事な事が頭に浮んだ。それはM子が君の手紙を受取ると、大膽不敵にもそれを讀み終つてから、すぐ煖爐の中にくべて仕舞ひはしないかといふ疑ひだつた。
見た所さして大きな事でもないと思はれるこの疑ひは突然僕の肚胸(とむね)をつきあげて、僕は思はず知らず往來に立ち停つてしまつた。
「そんな事をさせてたまるか」——僕の心はその瞬間から鬼になつた。假面も何もあるものか。僕は殺氣立つた期待に震へながらそこからすぐ電車で家に歸つて來た。M子は明日の用意の爲めに外出してゐて不在だつた。僕はほつと安心の息をついた。
それはその夜の一時が鳴つた瞬間だつた、今か〳〵と躊躇してゐた僕が、そつと僕の肩に卷いたM子のしなやかな腕を外づして寢臺から起き上つたのは。M子は亂れた髮を羽根枕に埋めたまゝ、規則正しい可憐な呼吸をして深寢をしてゐた。足の裏に氷のやうな床(ゆか)の冷たさを感じながら、僕は素跣足(すはだし)のまゝ次室(アンテ・ルーム)に出て、ボタンを押した。電燈がぽつかりと事もなげに部屋中に輝いた。僕はすぐ書卓に近づいて引出しの錠を開けた。而して君の手紙と懷中物(ポッケットブック)とを取り出した。僕は思はず顏を寢室の方へ振り向けて耳を欹(そばだ)てた。宏壯な石造の建築は墓のやうに寒く靜かだつた。
僕はがた〳〵と震へ出してゐた。懷中物(ポッケットブック)から取り出した紙切れと君からの手紙とを兩手の間にしつかり挾ん

で額にあてがつた。突然僕は本當に謙遜な清淨な心になつてゐた。
「凡てが最善の現實であるよりは最惡な一場の夢であれ」
僕は祈つた。僕ほどの虛しい心で祈つたものが幾人あるか僕は知りたい。神託を受けようとする敬虔な巫女のやうに、僕の胸はをのゝいて熱してゐた。而して恐ろしい躊躇の何分かゞ過ぎた。
遂に僕は震へる手先を無理に引き離した。
震へる手先は封を切つた。
震へる手先は紙を撫でた。
涙に漂ひながら僕の二つの眼の光はぢつと君の姓名を刺し通した。
僕は思はず驚いた。
その瞬間に僕の心はぷつりと音をたてゝ斷ち切れてしまつたのだ。
おい加藤、君はこの心地は察せられまい。
人の心を輕く秤にかける奴は詛はれるがいゝ。
僕はもつと落付いた筆を執らなければならない。……待ち給へ。
それから僕がその部屋にゐたゝまれなくなつて、應接室まで忍んで行つて、沈默した暗闇の中に爪を磨いて僕の墮落を待ちかまへてゐた復讐といふ女の惡魔とどんな契りを結んだかを語るのは餘りに悲慘だ。兎に角その翌日寢床から起き上つた僕は、別に角も生してはゐなかつた。鱗も生えてはゐなかつた。極めてしとやかな昔のままの若い紳士だつた。
　正月の祝儀に僕が正裝で自動車を君の貧弱な玄關に乘りつけたのは確が三日だつたね。初めはいやに警戒して

ゐた君が、うま〳〵と僕の甘言に乘せられて、その夕方一緒に僕の家に來た時の僕の美事なとりなし振りを君は覺えてゐるだらう。食事を終つた時には、君はもうM子に對して、僕の前でも構はずに、親しい友人として會話を取り交はす事を恐れない迄になつてゐた。是れを手始めにして三人の間の交際が度重なると、僕は屢〻君等二人を殘したまゝで座を外したものだ。僕は他の部屋にたつた獨りゐて、君等の間に取り交はされる眼と眼との會話や、物の受け渡しをする時觸れ合ふ指と指との私語を眼で見るよりも明かに想像してゐた。さうして思ふ存分僕の嫉妬に油を注ぐ事を樂しんだ。胸まで裂けさうに憤怒が嵩じて、拳は思はず知らず鐵のやうに固く握られ、膝節がぶる〳〵と戰いて、殺氣の爲めに口の中がから〳〵に乾くのを、有る限りの意志を尖らしてぢつとこらへるあの快さは又格別だ。「もう我慢が出來ない」、「何んだそんな事で、まあも少し待ち結へ」、「俺は行く」、「まあその前に是れを見て行き給へ。そら今M子が卓の下で足先を延ばしたらう。そらあいつの足に觸つたらう。今度は顏を見るんだ。思はず笑み交はさうとして——は、やめた——ね、とう〳〵溶けるやうに微笑んだらう。そんなに急くもんぢやないよ。今度は煖爐架に立つて行つた。どうだ、顏をよせあつて、何かあの上に乘つてゐるものを探してゐるぜ。そら見つかつた。M子が、足を爪立てゝ手を延ばした。あいつが後ろから抱くやうにしてやつてゐる」、「糞つ」とう〳〵僕の脣の邊に薄氣味の惡い皮肉な笑ひが現はれる。それが嫉妬の orgasm だ。それで存分滿足すると、僕は一層巧妙な假面を被つて君等の所に這入つて行く。君等が際どい所を僕に見附けられゝば、見附けられる程、僕の上機嫌は益〻高まる。

僕はかうして僕の意志を研ぎ嫉妬を磨く事を覺えた。

僕が馬鹿になればなる程、M子の僕に對する厚意と愛情とは增して行つた。僕はそれを巧妙に煽て上げた。僕は先づM子を今までの僕の束縛からすつかり解放するのが必要だと思つた。僕は機會を見ては、生活の狀態を段

段結婚當時の有樣に戻して行つた。たゞ違ふ點は元のやうな心にもない外部の壓迫から――卽ちM子の機嫌を取るために贅澤をするのではないと云ふ點だ。僕は一つのしつかりした目的を遂行する爲めに喜び勇んで華やかな生活に乘り出したのだ。始めの中こそM子は義理らしく眉をひそめてゐたが、その本性をどうして曲げ切る事が出來よう。暫くすると思ふ存分圖に乘つて來た。庭に建てられた宏大もない溫室も、市川に買ひ入れた鴨場も、數ケ所に造つた別莊も、品川灣に浮べたヨットも悉くその時の恰好な記念碑なのだ。君までがその餘澤を蒙つて、今では僕が提供した資本で、一かどの大きな顏になつたのだ。

M子の嗜好は敎會から劇場に移り、書生さんから美少年に移つた。僕の客間は藝術愛好者のサロンになつた。大體M子は微妙な感情の所有者ではなく、粗笨な鑑賞力しかない女だつたけれども、持つて生れた才氣を働かして、上手にばつを合せて行くだけの事は出來た。彼女は忽ち藝術界の保護女神になつた。何か少し飛び離れたものか、美しいものか、あり合せの生活を無視したものか、醜いものか、魂と沒交涉なものさへ見附ければ、すぐインスピレーションを感じてしまつて、有頂天に騷ぎ立てる彼奴等藝術家といふ連中には、M子は全く持つて來いの代物だつたのだ。M子が畫になると世間は騷いだ。M子が詩になると世間は騷いだ。

僕はまた僕の目論見の一つとしてM子に虛言をつく稽古をうんとさせた。虛言をつかせるのは、金錢を浪費させる程容易い仕事ではない。或る程度まで巧妙に僕はM子の裏をかいて見せなければならないからだ。例へばM子が或る美少年と密會した事實をさぐり當てたとする。僕は巧妙な方法でそれを君の耳に入れておいて、何氣なく君を晩餐に招待する。君の心は固より平らかではない。M子は戀人の敏感からすぐそれを氣取りながら、有合せ以上の美しい甘たるさを以て君の氣分を立て直さうとする。君はさうはさせまいと無理にも感情をこぢらせてかかる。おまけに君等二人はその心のいきさつを僕に感付かれてはならないのだ。その間を苦心しながら彌縫して

行くM子を見守るのは興の深い事だつた。

固よりこんな策略をするには密偵を飼ふのが第一だつた。僕の家の使用人はM子が氣付かない程度で段々取替へられてゐた。湯水のやうに金錢を呑まされて、肥りかへつた密偵ばかりが家の内をうろつくやうになつた。M子が僕より先にその手段を講じてゐたのは勿論の事だ。二人は知らん顔をしながら、互に陰謀でせめぎ合つた。然し僕はとう〳〵勝目になつた。第一何んといつても僕の方が金を自由に使ふ事が出來た。それからM子が家の中を支配する間に、僕は世間を支配してゐた。それから一番大事なのは、僕の素行が恐ろしく非難のないものだつた事だ。僕の燒け糞は燒け糞を通り越してゐた。あいつがその氣なら俺もその氣になつて見せるぞといふやうなけちつぽい境界は通り越してゐた。どんな仕事にも身を愼むといふ事は大切な事だ。一つの事業の爲めには他の總ては犧牲に供されねばならないのだからな。で、M子の密偵は結局M子を庇ふ事は出來ても、僕に吠えつく事は出來なかつた。M子がそれをどれ程もどかしく思つたか、それはよく察せられる。

贅澤な生活、精神的な養分の枯渴、有らゆる淫靡な膳立て、虛僞の常習、そんなものがよつてたかつてその頃のM子を立派な娼婦に仕立てあげてくれた。不思議に若さを失はぬ二十九の豐滿な肉體は、湧きかへるやうな淫蕩な黑血を、やゝ靑味を帶びるまでに白い滑かな皮膚で、はち切れさうに包んでゐた。肥つたといつては當らない、充實し切つたのだ。ルーベンスの女ではない、ダネーを描いたコレッヂオの女だ。肉體にも頭の働きにもどこか男性的なきたならしくないはき〳〵した所を持ちながら、情に堪へないやうな languor が體全體から蒸れ立つてゐた。それはまるで晚春の日光に醱酵し切つた黑牡丹の花のやうだつた。彼女が欲念に燃えながら、同時に僕から骨と智慧とを奪つてしまふ爲めに、覗ひを定めてじり〳〵と近付いて來る時は、そこに一種の凄ささへ伴つた。僕はいつともなく何事も打ち忘れて、彼女から受ける狂氣のやうな死のやうな忘我に浸り切つて仕舞はうと

さへした。畢竟これが世に生れて男が摑み得る一番强い一番確かな一番滿足な事實であると感じさせられた。Ｍ子のやうな境遇に置かれた二十九の多淫な女の、節制から解き放されたその欲念はどうだ。一晚中その刺戟にさいなまれて彼女の寢ない事は珍らしくなかつた。彼女が寢床の中で體をもみながらヒステリー患者のやうに譯もなく泣き出して、仕舞ひには自分で自分を恐れ出して僕に救ひを求めるやうな事が稀れでなくなつた。

僕は然し如何なる瞬間にも根性骨は失はなかつた。Ｍ子を抱きよせて接吻の礫をばら〳〵と打ちつけてゐる時でも、Ｍ子の心に何が描かれてゐるかを火のやうに感じてゐた。Ｍ子が引吊つたやうになつた眼をふさぐのは、感情からの要求といふよりも、僕の姿を見ない爲めなのだ。Ｍ子の想像の集中力を亂さない爲めなのだ。Ｍ子の欲念が高潮すればする程、僕の存在はＭ子の心の中から霧のやうに消えて行つて、その後に君の面影が段々濃く描かれて行くのだ。何んといふあさましい不敵な錬金術だ。僕のやうに心が斷ち切れて、復讐の惡魔と怪しい契りを結んだものでなかつたら、この恐ろしい事實はその人を氣絶させるか狂亂させせてしまつたらう。僕ですらが眞蒼になつてゐた。聲を放つて怒鳴らない爲めには、碎けるまでに齒を喰ひしばつてゐなければならなかつた。Ｍ子の神經が興奮からゆるんで行つて、名狀し難いだるい快い眠りに陷るのを見すますと、僕は夜の獸のやうに顏を擡げて、かさ〳〵に乾いた眼でその寢顏を嚙むやうにいつまでも眺めた、その場をさらずずぶりとその美しい喉を刺し通したい敵意と、その血肥りに盛り上つた胸にのしかゝりたい衝動とにがた〳〵と戰きながら。然しその奧にはどうかしてＭ子を助けたい、自分が助かりたい祈願を捨てる事が出來なかつた。

そんな事ではまだ駄目だぞと、僕の胸の中の皮肉屋がそつぽを向いてから空嘯いた。

まあ仕上げを見てゐろ、さう云ひ返しながら僕はまた勇氣を鼓して仕事の完成に急いだ。浪費の爲めに落目になつた商會の仕事の齒車に油を食はせる爲めに、僕は面もふらず投機的な仕事に眼をつけて行つた。東京中の同業者

の手に汗を握らせるやうな離れ業を平氣でして退けて見せた。實際荒み果てゝ來た僕の心は、生來臆病な僕をひつぱたいて大膽不敵な男にしてしまつた。高い圓柱の上に片足で立つて、蟻程に小さく見える下界の人間達を、危い命の瀬戸際の中にあざ笑つてやりたいやうな氣分が常住なものになつてゐた。

然し本當に性格的な下地を持たないものに、そんな仕事がいつまでも成功しよう筈はない。僕の片足は見る見る疲れて來た。而して體の中心が動もすればぐらついた。それでも僕はあらん限りの意志を働かして自分自身に刃向つた。どんな事があつても僕はM子を僕の企圖の頂點まで引つ張つて行かなければ承知が出來なかつたのだ。あせる心を強ひて抑へながら僕は急いだ。兵糧の盡きない中に敵を窮地に陷れなければならないのだから。

その年の初秋の朝だつた。二人はいつもの通り上機嫌で朝餉を仕舞つてから庭に出た。芝草の葉の上には玉のやうに露が宿つて、松葉牡丹の花はまだ花瓣を閉ぢてゐた。晴れやかな空氣の中を、生活のいそしみの響きが輕い私語のやうに傳はつて來た。僕等は芝生道を曲りくねつてさまよひながらやがて溫室の所に出た。小さな水晶宮を見るやうな透明な建物の中には、熱帶の植物が鬱蒼として茂つてゐた。二人の園丁が廣葉の中に現はれたり出たり隱れ込んだりして働いてゐた。こゝにも僕の飼養する二匹の犬がゐる。

「這入らうか」

「えゝ」

何か他事を思つてゐたらしいM子はかう氣のない返事をした。二人は戸を開けて這入つた。

「まあいゝ匂ひ」

M子は眼がさめたやうに顏を晴れ〴〵させて、あたりを見廻した。

「どの花なの、この匂ひのするのは」

年とつた方の犬は、一寸僕に橫眼をくれて、一つの蘭の鉢を棚から下ろした。
「始終居つけますと匂ひなんぞ分らなくなりますが、是れでゞも御座いませうか」
とおづ〳〵云つた。
「お見せ……ちがふわ」
かういつてM子は幾鉢も匂ひを嗅いだ。而してどれもM子が思ふやうな匂ひはしないと云ひ出した。
「そりやあなた無理だ。この中の匂ひはこゝに在る花全體の匂ひなんだもの。似寄つた匂ひで我慢するより仕方がないさ」
「でも上等な葉卷きのやうな匂ひがするんですもの。そんな花はありませんわ」
僕は煙草を吸はない。いつでも上等の葉卷の匂ひをさせてゐるのは君なのだ。M子はさん〴〵そこに在る鉢物の匂ひを嗅いでから、
「ぢや是れで我慢をしておくわ」
といつて、一輪七八圓もしさうな大輪の花が鈴なりについた蘭の鉢を選んだ。僕はその鉢を持ちながらM子の後から歩いた。而してひとりでに鼻をかすめるその匂ひをかぐと、思はず君の姿が心に浮んで來た。それは全く似寄つた匂ひだつた。ふむ、面白いと思つた。胸の中で僕は目まぐるしくM子をわなにかける工夫をした。而して廣緣に昇る拍子に、その鉢をわざとしたゝか靴ぬぎ石に敲きつけた。
「まあこはい」
「しまつた」
かう同時にいつて向き合つた二人の間に、南洋の珍花は鉢の土にまみれて痛ましく橫はつてゐた。見る〳〵M

子の顏には僕に對する烈しい憎惡と輕蔑の色が明らさまに現はれた。僕の過失をいつでも笑つて庇ひなれた彼女としてはこれは遂ぞない事だつた。

「こんなにしておしまひになつて！　そゝつかしいにも程がありますわ」

覺悟をしてゐながら、さすがの僕も思はずかつとなつた。これはM子が女中にすら使はないやうな言葉ではないか。

その瞬間に然し僕は己れに返つた。とう〳〵、さうだとう〳〵藥がきゝ出したのだ。見やあがれ。來い惡魔、戰がおもしろくなつて來た。來い惡魔、俺の顏から表情を奪つてくれ。

僕は遜つた顏付をして恐る〳〵M子を下から見上げた。

「全く馬鹿つちやない。あなたの大事の花だつたのに。まあ耐へておくれ、今日僕が代りを見付けて來るから」

「この花が東京なんかにありますもんですか」

「まあ探して見るさ」

「それはお勝手よ」

僕は一日中東京を探し廻つた。而して八十七圓で漸く一鉢を見付け出して持つて歸つて來た。M子は尻眼にかけたゞけで、難有うともいはなかつた。

薄つぺらな女の心がとう〳〵僕の陷穽にはまつたのだ。今までかすかながら被衣を着てゐた彼女の驕慢と放恣とは、その醜い面框を臆面もなく僕に見せ出したのだ。嫉妬と陰謀とで精魂を盡した僕は、もう一つ屈辱といふものを忍ばなければならなくなつた譯だ。然しながら勝利は忍びやかに近づいてゐる。煮えくり返るやうな僕はM子の愛に溺れ切つて、意地も才覺も消え失せた。馬鹿々々しく肉慾的な、その癖それを女に强ひるだけの勇氣

のない、みじめな男の姿をすつぽりと假裝した。

M子が君の所に繁々出入りしたり、三日も四日も家を外にして行先も知らせずに旅に出るやうになつたのはそれからの事だ。

君は忘れようとも僕は忘れやしない。君等の密會の度數と場所とは僕の日記に丹念に書き込んであるが、それよりも明白に心の中に刻みつけてあるのだからな。而して君等がすつかり僕に油斷して、思ひ放題の歡樂に耽り切つてゐる時、いつでも僕の耳や眼は君等の傍にあつて、ぢつと樣子を見聞きしてゐたのだ。僕の心はいつの間にか立派に二重に働くやうになつてゐた。商會の事務室で机の前に腰かけてゐる時でも、自分の家の食卓に獨りぽつちで物足らなさうに箸を動かしてゐる時でも、僕の心は君等の後をつけて廻つてゐたのだ。密偵からの電話でM子を君の家に見出す時には、僕の心は君の家にゐた。電報で君等を避暑地に見出す時には、僕はその避暑地にゐた。而してM子に影のあるやうに、僕はM子の背後に佇立してゐた。夢でか、想像でか、或は夕暮時の薄暗い光線によつて惹き起される幻でか、君はどうかした拍子に、死靈のやうにやつれ切つた僕が、齒がみしながら充血した眼でM子を睨みつけてゐるのを見た事はなかつたか。この奇怪な性格の分散は僕を瘦せさせた。瘦せたゞけの肉は一箇の幻となつてM子の影にまぎれこんだ。君等が密會の夜、閉てようとする襖がぎくしやくして閉たぬ事はなかつたか。そこには僕がゐたのだ。寢起きに束ねようとしたM子の髮がほつれて、どうしても解けぬ事はなかつたか。そこには僕がゐたのだ。君等が抱擁と接吻とに倚り添はうとした時、部屋の柱がぱちんと音をたてゝはじけた事はなかつたか。そこには僕がゐたのだ。嗚呼、吸血鬼の執拗と惡意とを以て僕はM子のゐる何處にでもゐたのだぞ。消え失せようとするM子の良心の焰を煽りながら、僕はM子のゐる所には必ずゐたのだぞ。忘恩と薄情とが、愛の哀訴をすげなく退けて、その重傷に、あかぎれの切れた荒々しい荒淫の指先を觸れた時には、僕が復讐の匕

首を砥石にかけて、切れ味を自分の髪の毛に試してゐた時なのだぞ。」
　M子の驕慢は思ひ存分に募つた――それと共に厚顔無恥な淫慾も。この時機を過たず見すました僕は第二の手段を取りはじめた。
「M子、僕を嫉妬がましい事をいふ男と思つてはいけないよ。僕は何もあなたを疑ふ譯でもなく、叱る譯でもないんだが、この頃ちよい〳〵馬鹿な事を耳にすると、何を云ふかと思ひながらも矢張り心持はよくないからね」
　僕はやさしく人形のやうに美しいM子の手を取つて膝の上て愛撫するのだ。
「まあ何んて云ふの」
「何、何んでもない事だがね」
「そんなら何も氣になさらないだつていゝわ。でも私そんなに見えて」
「さう氣を廻しちや話が出來ないよ」
「よござんす。どんな事？　仰しやつて頂戴」
「一週間前の今日あなたと加藤とが新橋に落ち合つて逗子の別荘まで行つて三日滯在したとか、昨日の晩あなたが或る待合へ加藤を呼んで十二時過ぎまで藝妓をあげてふざけたとか、現に今日は向島の方へ行つたとか（是れは皆んな實際M子のしなかつた事をわざと云つたのだ）そんな事をいふ奴があるんでね。あなたの御兩親にでも聞かれたら、お互に痛くもない腹をさぐられるのが面倒だからな」
「ほゝゝ、あなたも隨分神經質ね。（M子は勝ち誇つたやうに笑ふ）少し交際らしい交際をすれば、その位の事は誰でも云はれますわ。勝手に何んとでも云はせてお置きなさいましな」
「然しM子……」

「あなたもお解りにならない（M子はもう向腹を立てゝゐる）夫婦の間で何んて水臭いんでせう。あなたは又私が忘れようとしてゐる事を思ひ出してお苦しめになる積りなのね。私にどんな落度があれば……」

「さうぢやないよM子。（僕は慌てゝ見せる。M子の引込めようとする手先を無理に引き寄せて熱い接吻をする）僕が悪かつた。もう何んにもいはない。僕の心だつて分つてゐる筈ぢやないか」

「分つてゐますから離して頂戴」

「まあさう怒らないでくれ、僕は淋しくなつちまふ。もう是れからどんな事があつてもこんな事はいはないから、ね。お互に氣まづくなるのは僕もいやなのだ。結婚のしたてには夫婦喧嘩も光澤があつたが、この頃になると心から不愉快だ。例へばお前が築地の或る待合を出る時加藤の下駄をなほしてやつたとか、大磯に泊り込んだ晩に帳場に談じつけて隣の客を逐ひ拂つたとか、（是れはほんたうにM子のした事をいふのだ）そんな出鱈目な事をいふ奴があつても、僕は決して眞には受けないから」

さすがのM子もぎよつとした表情をちらつと顏に浮べて惘れながら僕を見るのだ。

或る時はまた、M子が自動車で君としめし合はせておいた場所に行かうとすると、運轉手はM子からの命令も待たずに、その方向に車を走らせた。また或る時は定めておいた場所に君がいつまでも來ないので、遇つた時に恨みをいふと、君は驚きながら、處を變へたとM子から電話で知らして來たので、そこにいつたら待ちぼけを喰はされたとあべこべに恨みを云つた。

M子は明かに僕に對して敵意を見せるやうになつて來た。僞りで固めたなりにも、平穩だつた家の中には何處となく殺氣がたつて來た。然し僕はどれ程M子に對して腑拔けな信じ易い良人だつたらう。どんなにM子が無理をいつても、僕は唯々として盲從した。どんなにM子が怒つても、僕はおろおろして只管その怒りをなだめよう

とした。あゝ、その頃の僕の苦しみを誰が知る。乞食の土足にかけられた王者も、いつか見たあの切石にひしがれた雜草の根も、僕を見たら自分達の幸運を微笑むだらう。

この場合M子の取る道が二つよりなかつたのは君も察する事が出來ると思ふ。一つは僕に離縁を求める事だ。一つは僕との愛の爭鬪を飽くまで續けて、僕を斃してしまふ事だ。M子は健氣にも後者を選んだ。而して一方には君との醜い關係に死物狂ひに深入りしながら、あらん限りの誘惑と魅力とで僕の魂と肉體とをずた〳〵に引き裂いてしまはうとした。

健氣なM子！ 然し貴樣は要するに僕の敵ではないのだ。M子が荒淫と敵意とで自分を擦り減らしてゐる間に、僕は聖者のやうな身持で自分の肉體を愛護してゐたのだ。僕の意志がM子の思ひ入つた意志の强さに及ばないとしても、命をかけた愛の鬼子なる嫉妬がそれを補つて餘りがあつたのだ。

M子の周圍に描かれた魔術の輪は段々に狹まつて行つた。僕が傳來の資產と事業の利益とを一緒にして播き散らした鼻藥で、君等の密會に使はれてゐた場所は色々な口實の下に、君等を受け入れなくなつて來た。君等は已むを得ず君の家か僕の別莊で顏を合せる外に道がなくなつた。然しさう密會の場所が制限されると僕の方は俄然として優强の立場に立つた。君等の行動は一々手に取るやうに僕に傳はつて來た。君の家には無氣味な影が何處にともなく待ち伏せしてゐて、M子が來ると絕えず不思議を行つた。或る時はM子のコートが失くなつた。或る時はM子の枕から針が一度に三本も四本も出た。

僕は眼も放さずに君の行動を見すまして、それから君等の心が互にどう働き合つてゐるかを感知してゐた。僕には君等の心が亂れたりくつついたりし出したのが窺はれた。とう〳〵最後の打擊を加ふべき時になつたのだ。僕が手綱をゆるめた時に、M子が有頂天の餘り、女の淺慮さと惡戲好きな欲念から、弄んだ幾人もの美少年との

間に取り交はした贈物や手紙の凡てが君の所に誰の手からともなく送られたのはその時だ。M子の心と肉とを遺憾なく獨占した積りで獨り笑壺に入つてゐた君が、それを見てどんな顏をしたかも僕はちやんと知つてゐる。男を操る手段として、色々な男から挑みかけられたいきさつをM子から絶えず聞かされてゐながら、心の底に自惚れの自信を有り餘る程持つてゐた君は、根がお人よしなだけに、どれ程驚きもし腹も立てた事だつたらう。それから君等の間には妙に喰ひ違つた感情が持ち上り出した。不義な逸樂に溺れた男女ほど取りとめのない恨みを結ぶものはない。それは自分達の醜い心が、當然造り出す恐ろしい幻覺だ。

M子は自分から進んで家に引籠り勝ちになつた。毎朝彼女を侵す激しい頭痛。何んでもない事に涙ぐまれる取りとめのない悲哀。突然の激怒。今までの亂雜な性的生活から遮斷された結果、三十の女盛りをさいなみ虐げる恐ろしい欲念。M子は毎日さういふ咎の下にうめき苦しんだ。

M子の顏は段々醜くなつて來た。筋肉のゆるんだ眼のまはりに暈を取る紫色の輪や、やむ時なく左の口尻をひきつらす電光のやうな痙攣や、段々目立つて來る頰骨や、あの美しい富士額を曇らして現はれ出た竪皺や、乾いた顏の皮膚の上に、妙に鹽つぽく濕つた癖のついた髮の毛などは、彼女の齢をしみ〴〵と彼女に思ひ知らしたに違ひない。果敢なく脆い女の肉の盛りはもう過ぎようとしてゐるのだ。女が鏡の選り好みをして、地色を白く輪廓を丸く見せる不自然な鏡面に顏を映しながら、いつまでも化粧の刷毛をひねくり廻すのは、この取り返しのつかない危機がさせる業だ。哀れなM子は仕舞ひには鏡をさへ恐れるやうになつた、窃に僕の顏を恐れるやうに。

僕は然し益々親切なM子の良人だつた。M子が涙ぐむと、あらん限りの才覺をしてM子を笑はせようとしながら、場合にふさはない突飛な滑稽をして退けた。M子が怒ると、その足許に跪かんばかりに男を捨てゝ、撲たれても撲たれても這寄る犬のやうな眞似をした。M子は一緒になつて笑ふ代りに火のやうに怒つた。又機嫌をなほ

す代りに氣違ひのやうに笑ひ出した。僕はそれにも係らず根氣強くM子の求めるものを與へようと一生懸命に氣をもんだ。但し何時でも見當違ひにではあるが。唯M子が痛ましい本能の要求に鞭うたれて、敵意も反感も失ひ果てゝ、欲念の滿足を僕に强ひようとする時だけは、僕は冷然として凍つた石のやうになつてしまつた。

それは忘れもしない二月の二十九日の夜の事だつた。僕は又床の中でM子を慘たらしく、然し體裁よく却けた。けれども凍つた石は心まで凍つてゐたのではない。石は自分の弱さを地獄にまで呪ひながら、その本性の愛着にうちのめされて、根かぎりの無言の叫びををめいてゐたのだ。

突然M子ががばと起き上つて跣足のまゝ床に降りた。激しいすゝり泣きの聲が物凄く部屋中に傳はつた。而して暫く躊つてゐるやうだつたが、恐ろしい勢で次室に續く戸を開けようとした。その瞬間に僕はもう彼女を後から抱きすくめてゐた。

「離して下さい」

「何處に行くんだ、こんなに晩く」

「離して下さい」

「いけない」

「離して下さい――離さないんですか」

幽靈のやうに蒼白いM子は雪白な寢衣の下でがた／＼と震へながら、振り向いて平べつたい色のない聲でかういつた。

「M子、氣を落ち付けなくちやいけない。まあこゝにお出で。どうしたんだ一體この頃は。寢たくなければそれでいゝ、こゝに椅子がある。さ」

M子は默つたまゝ素直に椅子に腰をかけて、足の爪先をぢつと見入りながら、小刻みに震へてゐた。

「來い惡魔、もう末期だ。俺の心に憐れみを知らしてくれるなよ」と僕は口の中にいひながら、椅子の背に手をかけて、髮を解きほごしたM子の形のいゝ後頸を思ひのまゝに眼で恥かしめてゐた。骨に喰ひ入るやうな夜中の寒さか、それとも永く却けられてゐた肉の哀訴か、兎に角一種のしびれるやうな力が僕をも震ひ戰かした。

「あなた私をなぶり殺しになさるお積りね」

やがてM子は元の姿勢を少しも崩さずに落ち付いてかういつた。

「何を云ふんだね。あなた氣でも違つたのか」

「えゝ」

すぐM子が答へた。又長い沈默。

「私死んだつてあなたからは離れはしませんからね」

M子はぢつと首をひねつて僕を見上げた。眼睛の上下に白眼が見える程大きく瞼が開かれてゐた。而して左の口尻が今にも泣き出しさうに激しく痙攣した。僕は思はずぞつとした。然しその瞬間に僕はいきなり抑へる事の出來ない激情に捕へられた。僕は咄嗟にM子の前にまはつてM子の兩手を握つてゐた。

「よく云つてくれたM子。僕は嬉しい。その言葉が嬉しい。今まで我慢に我慢をしてゐたが、もう何もかも云つてしまふ。笑はないで聞いておくれ。あなたを始めて見たあの晩から僕はもう生命まであなたにやつてしまつてゐたんだ。何んたる因縁だか知らないが、僕はどうしてもあなたを僕から手離す事が出來ないんだ。おゝこの髮だつたな、あなたがあの晩惜氣もなく切つてしまつたのは。いゝ姉さんになつてあなたは僕を本當にいたはつてくれた。あの頃の事を思ふと、僕は幸福な人間だつたと思ふ。全く僕のやうな幸福な人間はなかつた。……あな

た も幸福だつたね。二人は幸福だつたね……而して二人とも情深いいゝ人間だつたね。……ちえつ惡魔！　僕は何をいつてるんだ。幸福だつたんぢやない幸福なのだ。僕はね、M子、今でもこの通り幸福なんだよ。見ろ、僕を、ね。僕の涙を間違へちやいけない。それは加藤の事を始めて知つた時には、さすがの僕もあなたをどれ程憎く思つたか知れない。いく度手が短銃に行つたか知れない。何故といつて、あなたを加藤に取られる位なら、この手であなたを殺す方がどれだけいゝか知れなかつたんだからな。それ程僕はあなたを愛してゐたんだ。……愛してゐるんだ。……おゝ愛してゐるんだM子。……けれどもあなたは加藤から綺麗に離れて僕に歸つて來てくれた。始めの中こそ僕はあなたを色々と疑ひもした。それは許してくれていゝだらう。僕がその疑ひを綺麗に心から拭ひ取るためには命をかける程の覺悟がなければ出來ない事だつたのだから。ね、M子。然し今となつては……今となつては、僕はあなたを信じ切つてゐるんだよ。惡魔にでも神にでも誓ふ、僕はあなたを毛の先ほども疑つた覺えはないんだよ。僕位幸福な男はないんだ。あゝ僕位…… あなたは死んでも僕を離れないと云つてくれるし……」

M子は突然棒のやうに立ち上つて耳を押へた。而して折りまげた右の肘で僕を突き飛ばしておいて、自分は椅子の後ろに退いて椅子を盾に取つた。

「空々しい事を……空々しい事を……そんなにまでして……私あなたがいやです、嫌ひです、憎い」

「えゝ、しめ殺してやれ」といふ心の叫びを女の惡魔はどつこいと遮(さへぎ)つた。一瞬間眞赤に見えた寢室が、再び元の夜の光の中に眺めやられるまでには、僕はくだける程歯を喰ひしばらなければならなかつた。僕は哀訴に顏をしかめながら言葉をついだ。

「M子！……M子！　何故そんな情ない事を云ひ出すんだ。僕の心を塵ほどでも察してくれたら、あれから僕が

どんな眞實な心であなたを信じ通してゐたか……」
M子は狂氣のやうに耳を押へて頭をふつた。
「もう澤山！　部屋を出て下さい。私、立派にあなたのさせたい事をして見せますから。男らしくもない方だ。出て下さいといつたら出て下さいまし」
「さういはずと……」
ぎり〳〵つと齒がみしながらM子は界のドアにかけよつてそれを開いた。
「さあ出て下さい」
僕は恨めしさうにM子を見やつた。そしてM子の心が和らぐ樣子のないのを氣取つてあきらめたやうにM子のいふまゝになつた。
「それぢや今夜は二階の客の寢室に行つて寢よう。然しこの戶の鍵をお貸し。あなたが餘り激昂してゐて心配だから、僕が外から錠をかつておくから」
M子は僕の無策を嘲笑ふやうに無言で鍵を僕の手に渡した。
僕はその部屋を出ると、たまらなくなつて聲を出して泣きながら無我夢中に階段を駈け上つて客の寢室に突き入つた。戶をしめると眞夜中の闇が喉の奧まで呼吸と共に吸ひ込まれさうだつた。それは僕の眼が暗いのか心が暗いのか分らなかつた。頭にはがら〳〵と續けさまに物のくづれ落ちる音がすさまじく聞こえてゐた。喜びの涙と悲しみの涙と、勝利の笑ひと絕望の笑ひとが旋風のやうに僕の五體から逬つた。……おゝ今M子は豫て用意してゐたモルヒネをあの卓の引出しから取り出してゐるのだ。おゝ俺には見える、M子は震へる手で今それを眼の先にかざして眺めてゐる。M子の良心よ、今こそ見納めに最後の眼をしつかりと開くがいゝ。而して生の尊さを心

ゆくまで見詰めるがいゝ。それともこの瞬間にも加藤の姿がM子の心を捕へて離れないと云ふのか。……畜生……然し待て。M子を失はうとする俺がこんなに苦しむやうに、加藤を失はうとするM子が矢張り俺程苦しんでゐるとしたら。誰が運命に敵する事が出來よう。若し俺達の間の運命が不幸にして狂つたものだつたら、俺達は運命を尻眼にかけてやる爲めにも互々に憐れみ合はなければならない筈ぢやないか。……人間といふものは何故かう淋しく生きなければならないのだ。この淋しさ……俺はもうこの淋しさに獨りでゐるに堪へない。俺はもう一度M子に行かう。而してその罪を何もかも許してやらう。今までの俺の邪慳な心を泣いて詫びよう。而して二人は又情深い美しい心の持主にならう。それは何んといふいゝ事だ。……M子が飲む。待てM子！　はゝゝゝお前はモルヒネだと思つてそれを飲むのか。モルヒネがモルヒネでは無いのだ。はゝゝゝ貴樣を良心の苦痛から救ひ出すべき靈藥は、疾うの昔に俺の手で無害な眠り藥に代へてあるのを知らないのか。馬鹿……馬鹿。死んだ積りのM子は明日の朝又ぽつかりと瞼を開くのだ。はゝゝゝ而して一入俺を恨み憎むのだ。あゝそれ程お前は俺を憎まずにはゐられないのか。俺は何んといふ月日の下に生れたのだ。M子！……えゝ飲め〳〵而して假睡するまでの斷末魔の苦痛に悶えぬけ。腐つても濁つても俺の愛の刃で心をさし貫かれてゐるお前は、いかに加藤の事ばかりを頭に浮べて死際の歡樂に耽らうとしても、耽り得ない痛い傷を持つてる筈だ。今こそ思ひ知れ。その傷の呻き叫ぶ聲を死と一緒に苦く飲め。而して、明日の朝この煩惱の娑婆に再び目ざめて來る前に地獄のどん底を思ひ存分さまよつて來い。……憐れなM子よ。お前は死ぬ覺悟をすらしてゐるのだな。死ぬ覺悟を……あゝ俺はこれ以上の不幸には堪へ切れない。許さう。矢張りM子を許さう。M子を加藤にやらう。而して俺は獨りで生きよう。それは少しはM子の心を和げて、その片隅に俺の割り込む場所が出來ないとも限らない。俺はそれだけの滿足でも取り返さなければならない急場に追ひつめられてゐるのだ。無慘ななぶり殺し……俺はそれを想像するに堪へな

くなつた。M子がすや／＼と眠つてゐる。俺が短銃をその胸にあてがつて、思ひ切つて引金をひく。天地が壞れる。俺の驚き惘れた眼の前に、血みどろになつたM子が白眼をして、びく／＼と手足を動かしながら呻いてゐる。見る／＼氣息の根が細つて行く。死ぬ。……それはまだ想像が出來る、我慢が出來る。一思ひになら今の俺だつてやり兼ねない。……M子が自分から進んで劇藥を飲むのを俺は見て知らん振りをしてゐる。それを飲む前にM子は死と根かぎりとつくまなければならないのだ。あの恐ろしい死を眼の前に見詰めなければならないのだ。彼女は俺に對する怨恨のある限りを胸に思ひ浮べるのだ。――死に對して絶望的な勇氣を振ひ起す爲めに。又死ぬ間際に訣れを告げ兼ねたが加藤に對しては溶けて流れるやうな戀慕の情にむせぶのだ――死に對して絶望的な勇氣を振ひ起す爲めに。彼女の心臟は激情の爲めに張り切つて今にも裂けようとするのだらう。M子は思ひ切つて、半分狂氣して白い粉を口に入れる。唾を吸ひ取るやうな粉藥の舌觸り。利き目を強くする爲めに思ひ切り澤山飲む水。死とがつきり抱き合ふ拍子に不覺にも起る足のよろめき。もう言葉では云ひ現はせないどす黑い深い烈しい暴力――罪の苦痛、その苦痛があの豐滿な肉をそぎ、あの多情な血をしぼり、心臟に大石を乘せ、腦味噌を熱湯で煮る呵責の地獄……それでゐてM子は地獄にでも行き得る事か、明日の太陽が出ると共に、又この俺の生きてゐる現實世界に、……それは我ながら殘酷だつた。「どうしてこんな心になつてしまつたんだ。この美しい世の中を俺は何故こんな穢らはしい僻事で汚さうとはしてゐたのだ。我ながら何んと云ふ憎むべき心だ。おゝ、今M子は藥を飲み終つて、死を覺悟して靜かに床の上に橫たはつてゐる。むごい／＼……M子許してくれ。俺は今何もかも白狀する。俺は甘んじて自分の身を退く。……死藥ではないのだお前の飲んだのは……お前を殺す位なら俺が死ぬ。何と云ふ氣違ひだ俺は……」

僕は呼吸する事さへ忘れてゐるらしかつた。而して矢庭に夢中でその部屋を飛び出した。

廊下には煌々と電燈がついてゐた。その光に眼を射られると、僕は忽ち現實の世界に歸つた。僕があの藥をすり代へたのを、M子が自分の密偵をつかつてちやんと知つてゐないと誰が云へよう。M子は又狂言を書かうとしてゐるのだ。

復讐！――復讐！　最後までの復讐！　この場になつて何んの未練だ。最惡の結果を來らすべき復讐!!　惡魔！擧つて今竅を出ろ!!　僕は足の力を失つて絨毯の上に四角に坐りこんでしまつた。而して狂人のやうに頭髮を引きむしつて泣きながら笑ひ續けた。

やがてこの現世地獄の空の端にも夜がほの〴〵と白み始めた。

その翌日の九時頃死のやうな熟睡から眼ざめたM子は、命がけの期待が裏切られて、自分が矢張り僕の住む同じ世界に住んでゐるのを知ると、突然卒倒してそれから强度のヒステリーに陷つてしまつた。意識の覆つたM子を僕は如何なる狂熱を以て愛撫したか。それは地獄にこきおろした天國だつた。天國に引きずり上げた地獄だつた。

昨日から、M子は、僕が近づくと、齒をむいて狂犬のやうに飛びかゝる。

僕の家產はM子をこゝまで引きずり込む爲めに悉く蕩盡した。明日あたりは執達吏が、この家の差押へに債主から送られるだらう。

凡てが終つた。僕は今日姿を隱くす。これから僕が何うするか又何うなるかは君の知つた事ぢやない。君のなまぬるい神經に僕等三人の運命の結末が何う映るか。兎に角僕は魂の藻拔けになつたM子を君に與へる。人間が一生の間に恐らくは一度より經驗しない尊い深い生命の燃燒を、一片の思ひやりもなく、ふざけ切つた心で弄んだ君が、果して君の戀人を死より救ひ得るか何うか、僕は何處かで樂しみに見てゐるぞ。

（一九一八年四月、太陽所載）

生れ出づる惱み

一

私は自分の仕事を神聖なものにしようとしてゐた。ねぢ曲らうとする自分の心をひつぱたいて、出來るだけ伸び／＼した眞直な明るい世界に出て、そこに自分の藝術の宮殿を築き上げようと藻掻いてゐた。それは私に取つてどれ程喜ばしい事だつたらう。と同時にどれ程苦しい事だつたらう。私の心の奥底には確かに――凡ての人の心の奥底にあるのと同樣な――火が燃えてはゐたけれども、その火を燻らさうとする塵芥の堆積は又ひどいものだつた。かき除けても／＼容易に火の燃え立つて來ないやうな瞬間には私は慘めだつた。私は、机の向うに開かれた窓から、冬が來て雪に埋もれて行く一面の畑を見渡しながら、滯りがちな筆を叱りつけ／＼運ばさうとしてゐた。

寒い。原稿紙の手ざはりは氷のやうだつた。

陽はずん／＼暮れて行くのだつた。灰色から鼠色に、鼠色から墨色にぼかされた大きな紙を眼の前にかけて、上から下へと一氣に視線を落して行く時に感ずるやうな速さで、晝の光は夜の闇に變つて行かうとしてゐた。午後になつたと思ふ間もなく、どん／＼暮れかゝる北海道の冬を知らないものには、日が逸早く蝕まれるこの氣味惡い淋しさは想像がつくまい。ニセコアンの丘陵の裂け目から驀地にこの高原の畑地を眼がけて吹きおろして來る風は、割合に粒の大きい輕やかな初冬の雪片を煽り立て／＼横ざまに舞ひ飛ばした。雪片は暮れ殘つた光の迷

子のやうに、ちか〳〵した印象を見る人の眼に與へながら、惡戯者らしく散々飛び廻つた元氣にも似ず、降りたまつた積雪の上に落ちるや否や、寒い薄紫の死を死んでしまふ。たゞ窓に來てあたる雪片だけがさら〳〵さら〳〵とさゝやかに音を立てるばかりで、他の凡ての奴等は殘らず啞だ。快活らしい白い啞の群れの舞踏――それは見る人を涙ぐませる。

私は淋しさの餘り筆をとめて窓の外を眺めて見た。而して君の事を思つた。

二

私が君に始めて會つたのは、私がまだ札幌に住んでゐる頃だつた。私の借りた家は札幌の町端れを流れる豐平(とよひら)川(がは)といふ川の右岸にあつた。その家は堤の下の一町歩程もある大きな林檎園の中に建てゝあつた。

そこに或る日の午後君は尋ねて來たのだつた。君は少し不機嫌さうな、口の重い、瘠で背丈けが伸び切らないと云つたやうな少年だつた。汚(きたな)い中學校の制服の立襟のホックをうるさゝうに外(はづ)したまゝにしてゐた、それが妙な事には殊にはつきりと私の記憶に殘つてゐる。

君は座につくとぶつきらぼうに自分の描いた畫を見て貰ひたいと云ひ出した。君は片手では抱へ切れない程油繪や水彩畫を持ちこんで來てゐた。君は自分自身を平氣で虐げる人のやうに、風呂敷包の中から亂暴に幾枚かの畫を引き拔いて私の前に置いた。而してぢつと探るやうに私の顏を見詰めた。明らさまに云ふと、その時私は君をいやに高慢ちきな若者だと思つた。而して君の方には顏も向けないで、據なく差し出された畫を取り上げて見た。

私は一眼見て驚かずにはゐられなかつた。少しの修練も經てはゐないし幼稚な技巧ではあつたけれども、その

中には不思議に力が籠つてゐてそれが直ぐ私を襲つたからだ。私は畫面から眼を放してもう一度君を見直さないではゐられなくなつた。で、さうした。その時、君は不安らしいその癖意地張りな眼付をして、矢張り私を見續けてゐた。

「どうでせう。それなんかは下らない出來だけれども」

さう君は如何にも自分の仕事を輕蔑するやうに云つた。もう一度明らさまに云ふが、私は一方で君の畫に喜ばしい驚きを感じながらも、いかにも思ひ昂つたやうな君の物腰には一種の反感を覺えて、一寸皮肉でも云つて見たくなつた。「下らない出來がこれ程なら、會心の作と云ふのは大したものでせうね」とか何んとか。

然し私は幸にも咄嗟にそんな言葉で自分を穢すことを遁れたのだつた。それは私の心が美しかつたからではない。君の畫が何んと云つても君自身に對する私の反感に打ち勝つて私に迫つてゐたからだ。

君が其の時持つて來た畫の中で今でも私の心の底にまざ〳〵と殘つてゐる一枚がある。それは八號の風景に描かれたもので、輕川あたりの泥炭地を寫したと覺しい晩秋の風景畫だつた。荒涼と見渡す限りに連なつた地平線の低い葦原を一面に蔽うた雲雲の隙間から午後の日がかすかに漏れて、それが、草の中からたつた二本ひよろひよろと生ひ伸びた白樺の白い樹皮を力弱く照らしてゐた。單色を含んで來た筆の穗が不器用に畫布にたゝきつけられて、そのまゝけし飛んだやうな手荒な筆觸で、自然の中には決して存在しないと云はれる純白の色さへ他の色と練り合はされずに、そのまゝべとべとなすり附けてあつたりしたが、それでもぢつと見てゐると、そこには作者の鋭敏な色感が存分に窺はれた。それればかりか、その畫が與へる全體の效果にもしつかりと纒まつた氣分が行き渡つてゐた。悒鬱――十六七の少年には哺めさうもない重い悒鬱を、見る者は直ぐ感ずる事が出來た。

「大變いゝぢやありませんか」

畫に對して素直になつた私の心は、私にかう云はないではおかなかつた。

それを聞くと君は心持ち顔を赤くした――と私は思つた。すぐ次ぎの瞬間に來ると、君は然し私を疑ふやうな、自分を冷笑ふやうな冷やかな表情をして、暫くの間私と畫とを等分に見較べてゐたが、ふいと庭の方へ顔を背けてしまつた。それは人を馬鹿にした仕打ちとも思へば思はれない事はなかつた。二人は氣まづく默りこくつてしまつた。私は所在なさに默つたまゝ畫を眺めつゞけてゐた。

「そいつは何處ん處が惡いんです」

突然又君の無愛相な聲がした。私は今までの妙にちぐはぐになつた氣分から、一寸自分の意見をずば〳〵と云ひ出す氣にはなれないでゐた。然し改めて君の顔を見ると、云はさないぢや置かないぞと云つたやうな眞劍さが現はれてゐた。少しでも間に合はせを云はうものなら輕蔑してやるぞと云つたやうな鋭さが見えた。好し、それぢや存分に云つてやらうと私もとう〳〵本當に腰を据ゑてかゝるやうにされてゐた。

その時私が口に任せてどんな生意氣を云つたかは幸ひな事に今は大方忘れてしまつてゐる。然し兎に角惡口としては技巧が非常に危なつかしい事、自然の見方が不親切な事、モティヴが耽情的過ぎる事などを列べたに違ひない。君は默つたまゝまじ〳〵と眼を光らせながら、私の云ふ事を聽いてゐた。私が云ひたい事だけをあけすけに云つてしまふと、君は暫く默りつゞけてゐたが、やがて口の隅だけに始めて笑ひらしいものを漏らした。それがまた普通の微笑とも皮肉な痙攣とも思ひなされた。

それから二人はまた二十分程默つたまゝで向ひ合つて坐りつゞけた。

「ぢや又持つて來ますから見て下さい。今度はもつといゝものを描いて來ます」

その沈默の後で、君が腰を浮かせながら云つたこれだけの言葉は又僕を驚かせた。丸で別な、初な、素直な子

供でもいつたやうな無邪氣な明るい聲だつたから。

不思議なものは人の心の働きだ。この聲一つだつた。この聲一つが君と私とを堅く結びつけてしまつたのだつた。私は結局君を色々に邪推した事を悔いながらやさしく尋ねた。

「君は學校は何處です」

「東京です」

「東京？　それぢやもう始まつてゐるんぢやないか」

「えゝ」

「何故歸らないんです」

「どうしても落第點しか取れない學科があるんでいやになつたんです。……それから少し都合もあつて」

「君は畫をやる氣なんですか」

「やれるでせうか」

さう云つた時、君はまた前と同樣な强情らしい、人に迫るやうな顏付になつた。

私もそれに對して何んと答へやうもなかつた。專門家でもない私が、五六枚の畫を見たゞけで、その少年の未來の運命全體をどうして大膽にも決定的に云ひ切る事が出來よう。少年の思ひ入つたやうな態度を見るにつけ、私には凡てが恐ろしかつた。私は默つてゐた。

「僕はその中鄕里に――鄕里は岩内です――歸ります。岩内のそばに硫黃を掘り出してゐる所があるんです。その景色を僕は夢にまで見ます。その畫を作り上げて送りますから見て下さい。……畫が好きなんだけれども、下手だから駄目です」

私の答へないのを見て、君は自分をたしなめるやうに堅い淋しい調子でかう云つた。而して私の眼の前に取り出した何枚かの作品を目茶苦茶に風呂敷に包みこんで歸つて行つてしまつた。

君を木戸の所まで送り出してから、私は獨りで手廣い林檎畑の中を歩きまはつた。林檎の枝は熟した果實でたわゝになつてゐた。或る樹などは葉がすつかり散り盡して、赤々とした果實だけが眞裸で果々と日にさらされてゐた。それは快く空の晴れ渡つた小春日和の一日だつた。私の庭下駄に踏まれた落葉は乾いた音をたてゝ微塵に押しひしやがれた。豐滿の淋しさといふやうなものが空氣の中にしんみりと漂つてゐた。丁度その頃は、私も生活の或る一つの岐路に立つて疑ひ迷つてゐた時だつた。私は冬を眼の前に控へた自然の前に幾度も知らず〳〵棒立ちになつて、君の事と自分の事とをまぜこぜに考へた。

兎に角君は妙に力强い印象を私に殘して、私から姿を消してしまつたのだ。

その後君からは一度か二度問合せか何かの手紙が來たきりでぱつたり消息が途絶えてしまつた。岩内から來たといふ人などに邂ふと、私はよくその港にかういふ名前の青年はゐないか、その人を知らないかなぞと尋ねて見たが、更に手がゝりは得られなかつた。硫黄採掘場の風景畫もとう〳〵私の手許には屆いて來なかつた。

かうして二年三年と月日がたつた。而してどうかした拍子に君の事を思ひ出すと、私は人生の旅路の淋しさを味はつた。一度兎に角顏を合せて、或る程度まで心を觸れ合つた同志が、一旦別れたが最後、同じこの地球の上に呼吸しながら、未來永劫復たと邂逅はない……それは何んといふ不思議な、淋しい、恐ろしい事だ。人とは云ふまい、犬とでも、花とでも、塵とでもだ。孤獨に親しみ易い癖に何處か殉情的で人なつっこい私の心は、どうかした拍子に、この已むを得ない人間の運命をしみ〴〵と感じて深い悒鬱に襲はれる。君も多くの人の中で私にそんな心持を起させる一人だつた。

しかも淺はかな私等人間は猿と同樣に物忘れする。四年五年といふ歲月は君の記憶を私の心から綺麗に拭ひ取つてしまはうとしてゐたのだ。君は段々私の意識の閾を踏み越えて、潜在意識の奧底に隱れて仕舞はうとしてゐたのだ。

この短かゝらぬ時間は私の身の上にも私相當の變化を惹き起してゐた。私は足かけ八年住み慣れた札幌――極く手短かに云つても、そこで私の上にも色々な出來事が湧き上つた。妻も迎へた。三人の子の父ともなつた。永い間の信仰から離れて敎會とも緣を切つた。それまでやつてゐた仕事に段々失望を感じ始めた。新らしい生活の芽が周圍の拒絶をも無みして、そろ〳〵と芽ぐみかけてゐた。私の眼の前の生活の道にはおぼろげながら氣味惡い不幸の雲が蔽ひかゝらうとしてゐた。私は始終私自身の力を信じていゝのか疑はねばならぬかの二筋道に迷ひぬいた――を去つて、私には物足らない都會生活が始まつた。而して、眼にあまる不幸がつぎ〳〵に足許からまくし上るのを手を拱いてぢつと眺めねばならなかつた。心の中に起つたそんな危機の中で、私は捨て身になつて、見も知らぬ新らしい世界に乘り出す事を餘儀なくされた。それは文學者としての生活だつた。私は今度こそは全く獨りで步かねばならぬと決心の臍を堅めた。又此の道に踏み込んだ以上は、出來ても出來なくても人類の意志と取組む覺悟をしなければならなかつた。私は始終自分の力量に疑ひを感じ通しながら原稿紙に臨んだ。人々が寢入つて後、草も木も寢入つて後、獨り目覺めてしんとした夜の寂寞の中に、萬年筆のペン先が紙にきしり込む音だけを聞きながら、私は神がゝりのやうに夢中になつて筆を運ばしてゐる事もあつた。私の周圍には亡靈のやうな魂がひしめいて、紙の中に生れ出ようと苦しみあせつてゐるのをはつきりと感じた事もあつた。そんな時氣が付いて見ると、私の眼は感激の淚に漂つてゐた。藝術に溺れたものでなくつて、さういふ時のエクスタシーを誰が味ひ得よう。然し私の心が痛ましく裂け亂れて、純一な氣持が何處の隅にも見付けられない時の淋しさは又何

んと喩へやうもない。その時私は全く一塊の物質に過ぎない。私には何んにも殘されない。私は自分の文學者である事を疑つてしまふ。文學者が文學者である事を疑ふ程、世に空虛な賴りないものが復たとあらうか。さういふ時に彼は明かに生命から見放されてしまつてゐるのだ。こんな瞬間に限つて何時でも決つたやうに私の念頭に浮ぶのは、君のあの時の面影だつた。自分を信じていゝのか惡いのかを決しかねて、逞ましい意志と冷刻な批評とが互に衷に戰つて、思はず知らず凡てのものに向つて敵意を含んだ君のあの面影だつた。私は筆を捨てゝ椅子から立ち上り、部屋の中を步き廻りながら、自分につぶやくやうに云つた。

「あの少年はどうなつたらう。道を踏み迷ばないでゐてくれ。自分を誇大して取り返しのつかない死出の旅をしないでゐてくれ。若し彼に獨自の道を切り開いて行く天稟がないのなら、萬望正直な勤勉な凡人として一生を終つてくれ。もうこの苦しみは俺一人だけで澤山だ」

所が去年の十月――と云へば、川岸の家で偶然君と云ふものを知つてから丁度十年目だ――の或る日雨のしよぼ〳〵と降つてゐる午後に一封の小包が私の手許に屆いた。女中がそれを持つて來た時、私は干魚が送られたと思つた程部屋の中が生臭くなつた。包みの油紙は雨水と泥とでひどく汚れてゐて、差出人の名前が漸くの事で讀める位だつたが、そこに記された姓名を私は誰ともはつきり思ひ出すことが出來なかつた。兎も角もと思つて私はナイフで巖丈な諦びきの痲絲を切りほごしにかゝつた。油紙を一皮めくるとその中に又痲絲で堅く結はへた油紙の包みがあつた。それをほごすと又油紙で包んであつた。一寸腹の立つ程念の入つた包み方で、百合の根を剝がすやうに一枚々々むいて行くと、やうやく幾枚もの新聞紙の中から、手垢でよごれ切つた手製のスケッチ帖が三冊、きり〳〵と棒のやうに卷き下げられたのが出て來た。私は小氣味惡い魚の匂ひを始終氣にしながらその手帖を擴げて見た。

それはどれも鉛筆で描かれたスケッチ帖だつた。而してどれにも山と樹木ばかりが描かれてあつた。私は一眼見ると、それが明かに北海道の風景である事を知つた。のみならず、それは明かに本當の藝術家のみが見得る、而して描き得る深刻な自然の肖像畫だつた。

「やつつけたな！」咄嗟に私は少年のまゝの君の面影を心一杯に描きながら下唇を嚙みしめた。而して思はず微笑んだ。白狀するが、それが若し小說か戲曲であつたら、その時の私の顏には微笑の代りに苦い嫉妬の色が濃く漲つてゐたかも知れない。

その晚になつて一封の手紙が君から屆いて來た。矢張り厚い畫學紙に擦り切れた筆で亂雜にかう走り書きがしてあつた。

「北海道ハ秋モ晚クナリマシタ。野原ハ、毎日ノヤウニツメタイ風ガ吹イテヰマス。

日頃愛惜シタ樹木ヤ草花ナドガ、イツトハナク落葉シテシマツテヰル。秋ハ人ノ心ニ色々ナ事ヲ思ハセマス。

日ニヨリマストアタリノ山々ガ浮キアガツタカト思ハレル位空ガ美シイ時ガアリマス。然シ大テイハ風ト一所ニ雨ガバラ〳〵ヤツテ來テ路ヲ惡クシテヰルノデス。

昨日スケッチ帖ヲ三冊送リマシタ。イツカあなたニ畫ヲ見テモラヒマシテカラ、故鄕デ貧乏漁夫デアル私ハ、毎日忙シイ仕事ト激シイ勞働ニ追ハレテヰルノデ、ツイ今年マデ畫ヲカイテ見タカツタノデスガ、ツイ描ケナカツタノデス。

今年ノ七月カラ始メテ畫用紙ヲトヂテ畫帖ヲ作リ、鉛筆デ（モノ）ニ向ツテ見マシタ。併シ勞働ニ害サレタ手ハ思フヤウニ自分ノ感力ヲ現ハス事ガ出來ナイデ困リマス。

コンナツマラナイ素描帖ヲ見テ下サイト云フノハ大ヘンツライノデス。然シ私ハイツハラナイデ始メタ時カラ

ノヲ全部送リマシタ。（中略）
私ノ町ノ智的素養ノ幾分ナリトモアル青年デモ、自分トイフモノニツイテ思ヲメグラス人ハ少ナイヤウデス。青年ノ多クハ小サクサカシクヲサマツテヰルモノカ、ツマラナク時ヲ無爲ニ送ツテヰマス。デスガ私ハ私ノ故郷ダカラ好キデス。
色々ナモノガ私ノ心ヲヲドラセマス。私ノスケッチニ取ルベキ所ノアルモノガアルデセウカ。
私ハ何トナクコンナツマラヌモノヲあなたニ見テモラフノガハヅカシイノデス。
山ハ繪具ヲドツシリ付ケテ、山ガ地上カラ空ヘモレアガツテヰルヤウニ描イテ見タイモノダト思ツテヰマス。
私ノスケッチデハ私ノ感ジガドウモ出ナイデコマリマス。私ノ山ハ私ガ實際ニ感ズルヨリモアマリ平面ノヤウデス。樹木モドウモ物體感ニトボシク思ハレマス。
色ヲツケテ見タラヨカラウト考ヘテヰマスガ、時間ト金ガナイノデ、コンナモノデ腹イセヲシテヰルノデス。
私ハ色々ナ構圖デ頭ガ一パイニナツテヰルノデスガ、何シロマダ描クダケノ腕ガナイヤウデス。
御忙ガシイあなたニコンナ無遠リヨヲカケテ大ヘンスマナク思ツテヰマス。イツカ御ヒマガアツタラ御教示ヲ願ヒマス。

十月末」

かう思つたまゝを書きなぐつた手紙がどれ程私を動かしたか。君には一寸想像がつくまい。自分が文學者であるだけに、私は他人の書いた文字の中にも眞實と虚僞とを直感する可なり鋭い能力が發達してゐる。私は君の手紙を讀んでゐる中に涙ぐんでしまつた。魚臭い油紙と、立派な藝術品であるスケッチ帖と、君の文字との間には一分の隙もなかつた。「感力」といふ君の造語は立派な内容を持つ言葉として私の胸に響いた。「山ハ繪具ヲドツ

シリ付ケテ、山ガ地上カラ空ヘモレアガツテキルヤウニ描イテ見タイ」……山が地上から空にもれあがる……それは素晴らしい自然への肉迫を表現した言葉だ。言葉の中に沁み渡つたこの力は、輕く對象を見て過ごす微溫な心の、眞似にも生み出し得ない調子を持つた言葉だ。

「誰も氣も付かず注意も拂はない地球の隅つこで、尊い一つの魂が母胎を破り出ようとして苦しんでゐる」

私はさう思つたのだ。さう思ふとこの地球といふものが急により美しいものに感じられたのだ。さう感ずると何んとなく涙ぐんでしまつたのだ。

その頃私は北海道行きを計畫してゐたが、雜用に紛れて躊躇する中に寒くなりかけて來たので、もういつそやめようかと思つてゐた所だつた。然し君のスケッチ帖と手紙とを見ると、是非君に會つて見たくなつて、一轍にすぐ旅行の準備にかゝつた。その日から一週間とたゝない十一月の五日には、もう上野驛から青森への直行列車に乘つてゐる私自身を見出した。

札幌での用事を濟まして農場に行く前に、私は岩内にあてゝ君に手紙を出して置いた。農場からはさう遠くもないから、來られるなら來ないか、成るべくならお目に懸りたいからと云つて。

農場に着いた日には君は見えなかつた。その翌日は朝から雪が降り出した。私は窓の所へ机を持つて行つて、原稿紙に向つて呻吟しながら心待ちに君を待つのだつた。而して澁り勝ちな筆を休ませる間に、今まで書き連ねて來たやうな過去の回想やら當面の期待やらをつぎ〳〵に腦裡に浮ばしてゐたのだつた。

三

夕闇は段々深まつて行つた。事務所をあづかる男が、ランプを持つて來た序に、夜食の膳を運ばうかと尋ねた

が、私はひよつとすると君が來はしないかと云ふ心づかひから、わざとその儘にしておいて貰つて、またかじり附くやうに原稿紙に向つた。大きな男の姿が部屋からのつそりと消えて行くのを、視覺のはづれに感じて、都會から久しぶりで來て見ると、物でも人でも大きくゆつたりしてゐるのに今更ながら一種の壓迫をさへ感ずるのだつた。

澁りがちな筆がいくらもはかどらない中に、夕闇はどん〳〵夜の暗さに代つて、窓ガラスの先方(むかう)は雪と闇との區別のつかない明暗(キヤロスキユロ)になつてしまつた。自然は何かに氣を障(さ)へ出したやうに、夜と共に荒れ始めてゐた。底力の籠つた鈍い空氣が、音もなく重苦しく家の外壁に肩をあてがつてうんと凭れかゝるのが、疊の上に坐つてゐても何んとなく感じられた。自然が粉雪を煽(あふ)りたてゝ、處きらはずたゝきつけながら、のたうち廻つて呻き叫ぶその物凄い氣配はもう迫つてゐた。私は窓ガラスに白木綿のカーテンを引いた。自然の暴威をせき止める爲めに人間が苦心して創り上げたこのみじめな家屋といふ領土が脆く小さく私の周圍に眺めやられた。

突然、ど、ど、ど……といふ音が――運動が（さういふ場合、音と運動との區別はない）天地に起つた。さあ始まつたと私は二つに折つた背中を思はず立て直した。同時に自然は上齒を下唇にあてがつて思ひきり長く氣息(いき)を吹いた。家がぐら〳〵と搖れた。地面から跳り上つた雪が二三度彈(はず)みを取つておいて、どつと一氣に天に向つて、謀反でもするやうに、降りかゝつて行くあの悲壯な光景が、まざ〳〵と部屋の中にすくんでゐる私の想像に浮べられた。駄目だ。待つた所がもう君は來やしない。停車場からの雪道はもう疾うに埋まつてしまつたに違ひないから。私は吹雪の底にひたりながら、物淋しくさう思つて、又机の上に眼を落した。

筆は益々澁るばかりだつた。輕い陣痛のやうなものは時々起りはしたが、大切な文字は生れ出てくれなかつた。かうして私に取つて情ないもどかしい時間が三十分も過ぎた頃だつたらう、農場の男が又のそりと部屋に這入つて來て客來を知らせたのは。私の喜びを君は想像する事が出來る。矢張り來てくれたのだ。私は直ぐに立つて事務

室の方へかけ附けた。事務室の障子を開けて、二疊敷程もある大圍爐裡の切られた臺所に出て見ると、そこの土間に、一人の男がまだ靴も脫がずに突つ立つてゐた。農場の男も、その男にふさはしく肥つて大きな內儀さんも、普通な背丈けにしか見えない程その客といふ男は大きかつた。言葉通りの巨人だ。頭からすつぽりと頭巾のついた黑つぽい外套を着て、雪まみれになつて、口から白い氣息をむら〳〵と吐き出すその姿は、實際人間といふ感じを起させない程だつた。子供までがおびえた眼付をして內儀さんの膝の上に丸まりながら、その男をうろんらしく見詰めてゐた。

君ではなかつたなと思ふと僕は期待に裏切られた失望の爲めに、いら〳〵しかけてゐた神經のもどかしい感じが更につのるのを覺えた。

「さ、ま、ずつとこつちにお上りなすつて」

農場の男は僕の客だといふので出來るだけ丁寧にかう云つて、圍爐裡のそばの煎餅蒲團を裏返した。

その男は一寸頭で挨拶して圍爐裡の座に這入つて來たが、天井の高いだゞつ廣い臺所に點された五分心のランプと、ちよろ〳〵と燃える木節の圍爐裡火とは、黑い大きな塊的とよりこの男を照らさなかつた。男がぐつしより濕つた兵隊の古長靴を脫ぐのを待つて、私は默つたまゝ案內に立つた。今はもう、この男によつて、無駄な時間がつぶされないように、いやな氣分にさせられないようにと心竊かに願ひながら。

部屋に這入つて二人が座についてから、私は始めて本當にその男を見た。男はぶきつちやうに、それでも四角に下座に坐つて、丁寧に頭を下げた。

「暫く」

八疊の座敷に餘るやうな鏽を帶びた太い聲がした。

「あなたは誰方ですか」
大きな男は一寸きまりが悪さうに汗でしとゞになつた眞赤な顔を撫でた。
「木本です」
「え、木本君!?」
これが君なのか。私は驚きながら改めてその男をしげ〳〵と見直さなければならなかつた。痔の爲めに背丈けも伸び切らない、何處か病質にさへ見えた悒鬱な少年時代の君の面影は何處にあるのだらう。又落葉松の幹の表皮からあすこゝに覗き出してゐる針葉の一本をも見逃さずに、愛撫し理解しようとする、スケッチ帖で想像されるやうな鋭敏な神經の所有者らしい姿はどこにあるのだらう。地をつぶしてさしこをした厚衣を二枚重ね着して、どつしりと落付いた君の坐り形は、私より五寸も高く見えた。筋肉で盛り上つた肩の上に、正しく嵌め込まれた、牡牛のやうに太い頸に、稍長めな赤銅色の君の顏は、健康そのものゝやうにしつかりと乘つてゐた。筋肉質な君の顏は、何處から何處まで引締つてゐたが、輪廓の正しい眼鼻立ちの隈々には、心の中から湧いて出る寛大な微笑の影が、自然に漂つてゐて、脂肪氣のない君の容貌をも暖かく見せてゐた。「何んといふ無類な完全な若者だらう。」私は心の中でかう感歎した。戀人を君に紹介する男は、深い猜疑の眼で戀人の心を見守らずにはゐられまい。君の與へる素晴らしい男らしい印象はそんな事まで私に思はせた。
「吹雪いてひどかつたらう」
「何んの。……溫くつて〳〵汗がはあえらく出ました。けんど道が分らねえで困つてると、仕合せよく水車番に遇つたからすぐ知れました。あれは親身な人だつけ」
君の素直な心はすぐ人の心に觸れると見える。あの水車番といふのは實際この邊で珍らしく心持のいゝ男だ。

君は手拭を腰から拔いて湯氣が立たんばかりに汗になつた顏を幾度も押し拭つた。

夜食の膳が運ばれた。「もう我慢がなんねえ」と云つて、君は今まで堅くしてゐた膝を崩して胡坐をかいた。「きちやうめんに坐ることなんぞはあ無えもんだから。」二人は子供同志のやうな樂しい心で膳に向つた。君の大食は愉快に私を驚かした。食後の茶を飯茶碗に三杯續けさまに飲む人を私は始めて見た。

夜食をすましてから、夜中まで二人の間に取りかはされた樂しい會話を私は今だに同じ樂しさを以て思ひ出す。戸外ではこゝを先途と嵐が荒れまくつてゐた。部屋の中ではストーヴの向座に胡坐をかいて、癖のやうに時折り五分刈の濃い頭の毛を逆さに撫で上げる男惚れのする君の顏が部屋を明るくしてゐた。君は巖丈な文鎭になつて小さな部屋を吹雪から守るやうに見えた。温まるにつれて、君の周圍から蒸れ立つ生臭い魚の香は強く部屋中に籠つたけれども、それは荒い大海を生々しく聯想させるだけで、何んの不愉快な感じも起させなかつた。人の感覺といふものも氣儘なものだ。

樂しい會話と云つた。然しそれは面白いと云ふ意味では勿論ない。何故なれば君は屢〻不器用な言葉の尻を消して、曇つた顏をしなければならなかつたから。而して私も君の苦しい立場や、自分自身の迷ひ勝ちな生活を痛感して、暗い心に捕へられねばならなかつたから。

その晩君が私に話して聞かしてくれた君のあれからの生活の輪廓を私はこゝにざつと書き連ねずには置けない。

札幌で君が私を訪れてくれた時、君には東京に遊學すべき途が絶たれてゐたのだつた。一時北海道の西海岸で、小樽をすら凌駕して賑やかになりさうな氣勢を見せた岩内港は、さしたる理由もなく、少しも發展しないばかりか。段々さびれて行くばかりだつたので、それにつれて君の一家にも生活の苦しさが加へられて來た。君の父上

と兄上と妹とが氣を揃へて氷入らずにせつせと働くにも係はらず、そろ〳〵と泥沼の中に滅入り込むやうな家運の衰勢をどうする事も出來なかつた。學問といふものに興味がなく、從つて成績の面白くなかつた君が、藝術に捧誓したい熱意を抱きながら、その淋しくなりまさる古い港に歸る心持になつたのはその爲めだつた。さういふ事を考へ合はすと、あの時君が何んとなく暗い顔付をして、いら〳〵しく見えたのがはつきり分るやうだ。君は故鄕に歸つても、仕事の暇々には、心あてにしてゐる景色でも描く事を、せめてもの賴みにして札幌を立ち去つて行つたのだらう。

然し君の家庭が君に待設けてゐたものは、そんな餘裕の有る生活ではなかつた。年のいつた父上と、どつちかと云へば漁夫としての健康は持合はせてゐない兄上とが、普通の漁夫と少しも變りのない服裝で網をすきながら君の歸りを迎へた時、大きい漁場の持主といふ風が家の中から根こそぎ無くなつてゐるのを眼のあたりに見やつた時、君はそれまでの考への呑氣過ぎたのに氣が付いたに違ひない。十分の思慮もせずにこんな生活の渦卷の中に我れから飛び込んだのを、君の藝術的欲求は何處かで悔んでゐた。その晩、磯臭い空氣の籠つた部屋の中で、枕には就きながら、陷穽にかゝつた獸のやうな焦躁さを感じて、瞼を合はす事が出來なかつたと君は私に告白した。さうだつたらう。その晩一晩だけの君の心持を委しく考へたゞけで、私は一つの力強い小品を作り上げる事が出來ると思ふ。

然し親思ひで素直な心を持つて生れた君は、君を迎へ入れようとする生活から逃れ出る事をしなかつたのだ。詰襟のホックをかけずに着慣れた學校服を脫ぎ捨てゝ、君は厚衣を羽織る身になつた。明鯛から鱈、鱈から鰊、鰊から烏賊といふやうに、四季絶える事のない忙がしい漁撈の仕事にたづさはりながら、君は一年中かの北海の荒浪や激しい氣候と戰つて、淋しい漁夫の生活に沒頭しなければならなかつた。しかも港內に築かれた防波堤

が、技師の飛んでもない計算違ひから、波を防ぐ代りに、砂をどん／＼港內に流し入れる破目になつてから、船繫りのよかつた海岸は見る／＼淺瀨に變つて、出漁には都合のいゝ目ぬきの位置にあつた君の漁場は廢れ物同樣になつてしまひ、已むなく高い駄賃を出して他人の漁場を使はなければならなくなつたのと、北海道第一と云はれた鰊の群來が年々減つて行く爲めに、さらぬだに生活の壓迫を感じて來てゐた君の家は、親子が氣心を揃へ力を合はして、命がけに働いても年々貧窮に追ひ迫られ勝ちになつて行つた。

親身な、やさしい、而して男らしい心に生れた君は、默つてこの有樣を見て過ごす事は出來なくなつた。君は君に近いものゝ生活の爲めに、正しい汗を額に流すのを悔いたり恥ぢたりしてはゐられなくなつた。而して君は驀地に勞働生活の眞中心に乘り出した。寒暑と波濤と力業と荒くれ男等との交りは君の筋骨と度胸とを鐵のやうに鍛へ上げた。君はすく／＼と大木のやうに逞しくなつた。

「岩內にも漁夫は多いども腕力にかけて俺らに叶ふものは一人だつてゐねえ」

君はあたり前の事を云つて聞かせるやうにかう云つた。私の前に坐つた君の姿は私にそれを信ぜしめる。

パンの爲めに生活のどん底まで沈み切つた十年の月日——それは短いものではない。大抵の人は恐らくその年月の間にさう云ふ生活から跳ね返る力を失つてしまふだらう。世の中を見渡すと、何百萬、何千萬の人々が、こんな生活にその天授の特異な力を踏みしだかれて、空しく墳墓の草となつてしまつたらう。それは全く悲しい事だ。而して不條理な事だ。然し誰がこの不條理な世相に非難の石を抛つ事が出來るだらう。是れは悲しくも私達の一人／＼が肩の上に背負はなければならない不條理だ。特異な力を埋め盡してまでも、當面の生活に沒頭しなければならない人々に對して、私達に尊敬に近い同情をすら捧げねばならぬ悲しい人生の事實だ。あるがまゝの實相だ。

パンの爲めに精力のあらん限りを用ゐ盡さねばならぬ十年——それは短いものではない。それにも係はらず、君は性格の中に植ゑ込まれた憧憬を一刻も捨てなかつたのだ。捨てる事が出來なかつたのだ。

雨の爲めとか、風の爲めとか、一日も安閑としてはゐられない漁夫の生活にも、爲す事なく日を過ごさねばならぬ幾日かゞ、一年の間には偶に來る。さう云ふ時に、君は一冊のスケッチ帖（小學校用の粗雜な畫學紙を不器用に網絲で綴つたそれ）と一本の鉛筆とを、魚の鱗や肉片がこびりついたまゝ、ごは〳〵に乾いた仕事着の懷ろにねぢ込んで、ぶらりと朝から家を出るのだ。

「逢ふ人は俺ら事氣違ひだといふんです。けんど俺ら山をぢつとかう見てゐると、何もかも忘れてしまふです。誰だつたか何かの雜誌で『愛は奪ふ』と云ふものを書いて、人間が物を愛するのはその物を强奪くるだと云つてゐたやうだが、俺ら山を見てゐると、そんな氣は起したくも起らないね。山がしつくり俺ら事引きずり込んでしまつて、俺ら唯惘れて見てゐるだけです。その心持が描いて見たくつて、あんな下手なものをやつて見るが、から駄目です。あんな山の心持を描いた畫があらば、見るだけでも見たいもんだが、ありませんね。天氣のいゝ氣持のいゝ日にうんと力瘤を入れてやつて見たらと思ふけんど、暮しも忙しいし、やつても俺らにはやつぱり手に餘るだらう。色も付けて見たいが、繪具は國に引つ込む時、繪の好きな友達にくれてしまつたから、俺らのやうな繪には又買ふのも惜しいし。海も見れば海でいゝが、山を見れば山でいゝ。勿體ない位そこいらに素晴らしい好いものがあるんだが、力が足んねえです」

と云つたりする君の言葉も容子も私には忘れる事の出來ないものになつた。その時は胡坐にした兩脛を手でつぶれさうに堅く握つて、胸に餘る興奮を靜かな太い聲でおとなしく云ひ現はさうとしてゐた。

私共が一時過ぎまで語り合つて寢床に這入つて後も、吹きまく吹雪は露ほども力をゆるめなかつた。君は君で、

私は私で、妙に寢つかれない一夜だつた。踏まれても〳〵、自然が與へた美妙な優しい心を失はない、失ひ得ない君の事を思つた。仁王のやうな逞ましい君の肉體に、少女のやうに敏感な魂を見出すのは、この上なく美しい事に私には思へた。君一人が人生の生活といふものを明るくしてゐるやうにさへ思つた。而して私は段々私の仕事の事を考へた。どんなに藻搔いて見てもまだ〳〵本當に自分の所有を見出だす事が出來ないで、動もするとこじれた反抗や敵愾心から一時的な滿足を求めたり、生活を歪んで見る事に興味を得ようとしたりする心の貧しさ――それが私を無念がらせた。而してその夜は、君のいかにも自然な大きな成長と、その成長に對して君が持つ無意識な謙讓と執着とが私の心に強い感激を起させた。

次の日の朝、かうしてはゐられないと云つて、君は嵐の中に歸り支度をした。農場の男達すらもう少し空模樣を見てからにしろと強ひて止めるのも聞かず、君は素足にかちん〳〵に凍つた兵隊長靴をはいて、黑い外套をしつかり着こんで土間に立つた。北國の冬の日暮しには殊更客がなつかしまれるものだ。名殘を心から惜しんでだらう、農場の人達も親身に彼れ是れと君を勞つた。すつかり頭巾を被つて、十二分に身支度をしてから出懸けたらいゝだらうと皆んなが寄つて勸めたけれども、君は素朴な憚りから帽子も被らずに、重々しい口調で別れの挨拶をすますと、ガラス戶を引き開けて戶外に出た。

私はガヲス窓をこづいて、外面に降り積んだ雪を落しながら、吹き溜つた眞白な雪の中をこいで行く君を見送つた。君の黑い姿は――矢張頭巾は被らないまゝで、頭をむき出しにして雪になぶらせた――君の黑い姿は、白い地面に腰まで埋まつて、或は濃く、或は薄く、縞になつて橫降りに降りしきる雪の中を、たゞ一人段々遠ざかつて、とう〳〵霞んで見えなくなつてしまつた。

而して君に取殘された事務所は、君の來る前のやうな單調な淋しさと降りつむ雪とに閉ぢこめられてしまつた。

私がそこを發つて東京に歸つたのは、それから三四日後の事だつた。

四

今は東京の冬も過ぎて、梅が咲き椿が咲くやうになつた。太陽の生み出す慈愛の光を、地面は胸を張り擴げて吸ひ込んでゐる。君の住む岩内の港の水は、まだ流れこむ雪解の水に薄濁る程にもなつてはゐまい。鋼鐵を水で溶かしたやうな海面が、動もすると角立つた波を擧げて、岸を目がけて終日攻めよせてゐるだらう。それにしてももう老いさらぼへた雪道を器用に拾ひながら、金魚賣りが天秤棒を擔つて、無理にも春を喚び覺ますやうな賣聲を立てる季節にはなつたらう。濱には津輕や秋田邊から集まつて來た旅雁のやうな漁夫達が、鰊の建網の修繕をしたり、大釜の据ゑ付けをしたりして、黑ずんだ自然の中に、毛布の甲がけや外套のけばけばしい赤色を播き散らす季節にはなつたらう。この頃私は又妙に君を思ひ出す。君の張り切つた生活の有様を頭に描く。君はまざまざと私の想像の視野に現はれ出て來て、見るやうに君の生活とその周圍とを私に見せてくれる。藝術家に取つては夢と現との閾はないと云つていゝ。彼は現實を見ながら眠つてゐる事がある。夢を見ながら眼を見開いてゐる事がある。私が私の想像にまかせて、こゝに君の姿を寫し出して見る事を君は拒むだらうか。私の鈍い頭にも同感といふものゝ力がどの位働き得るかを私は自分で試して見たいのだ。君の寛大はそれを許してくれる事と私はきめてかゝらう。

君を思ひ出すにつけて、私の頭にすぐ浮び出て來るのは、何んと云つても淋しく物すさまじい北海道の冬の光景だ。

五

長い冬の夜はまだ明けない。雷電峠と反對の灣の一角から長く突き出た造り損ねの防波堤は、大蛇の亡骸のやうな眞黑い姿を遠く海の面に橫たへて、夜目にも白く見える波濤の牙が、小休みもなくその胴腹に嚙ひかゝつてゐる。砂濱に繫はれた百艘近い大和船は、舳を沖の方へ向けて、互にしがみ付きながら、長い帆柱を左右前後に振り立てゝゐる。その側に、樣々の漁具と辨當のお櫃とを持って集まつて來た漁夫達は、言葉少なに物を云ひ交はしながら、防波堤の上に建てられた組合の天氣豫報の信號燈を見やつてゐる。暗い闇の中に、白と赤との二つの火が、夜鳥の眼のやうにぎらりと光つてゐる。赤と白との二つ球は、危險警戒を標示する信號だ。船を出すには一番鳥が啼きわたる時刻まで待つてからにしなければならぬ。町の方は寢鎭まつて灯一つ見えない。それ等の總てを被ひくるめて凍つた雲は幕のやうに空低く懸つてゐる。音を立てないばかりに雲は山の方から沖の方へと絕間なく走り續ける。汀まで雪に埋まつた海岸には、見渡せる限り、白波がざぶん〳〵碎けて、風が――空氣そのものをかつ浚つてしまひさうな激しい寒い風が雪に閉された山を吹き、漁夫を吹き、海を吹きまくつて、驀地に水と空との閉ぢ目を眼がけて突きぬけて行く。

漁夫達の群れから少し離れて、一團になつたお內儀さん達の背中から赤子の激しい泣き聲が起る。暫くしてそれが鎭まると、風の生み出す音の高い不思議な沈默がまた天と地とに漲り滿ちる。

稍二時間も經つたと思ふ頃、綾目も知れない闇の中から、硫黃ケ嶽の山頂――右肩を聳やかして、左を撫で肩にした――が雲の產んだ鬼子のやうに、空中に現はれ出る。鈍い土がまだ振り向きもしない中に、空は逸早くも曉の光を吸ひ初めたのだ。

模範船（港内に四五艘あるのだが、船も大きいし、それに老練な漁夫が乘り込んでゐて、他の船に駈引き進退の合圖をする）の船頭が頭を鳩めて相談をし始める。何處とも知れず、あの晝には氣疎い羽色を持つた烏の聲が勇ましく聞こえ出す。漁夫達の群れもお内儀さん達の團りも、石のやうな不動の沈默から急に生き返つて來る。

「出すべ」

そのさゞめきの間に、潮で錆び切つた老船頭の幅の廣い鹽辛聲が高くから響く。

漁夫達は力強い鈍さを以て、互に今まで立ち盡してゐた所を歩み離れて銘々の持ち場につく。お内儀さん達は右に左に良人や兄や情人やを介抱して駈け歩く。今まで陶醉したやうに他愛もなく波に搖られてゐた船の艫には漁夫達が膝頭まで水に浸つて、喚き始める。罵り騷ぐ聲が一としきり聞こえたと思ふと、船は據なさゝうに、右に左に搖らぎながら、船首を高く擡げて波頭を切り開き〳〵、狂ひ暴れる波打際から離れて行く。最後の高い罵りの聲と共に、今までの鈍さに似ず、あらゆる漁夫は、猿のやうに船の上に飛び乘つてゐる。動ともすると、舳を岸に向けようとする船の中からは、長い竿が水の中に幾本も突き込まれる。船は已むを得ず又立ち直つて沖を眼指す。

この出船の時の人々の氣組み働きは、誰にでも激烈なアレッグロで終る音樂の一片を思ひ起さすだらう。ががやと騷ぐ聽衆のやうな雲や波の擾亂の中から、漁夫達の鈍い Largo Pianissimo とも云ふべき運動が起つて、それが始めの中は周圍の騷音の中に消されてゐるけれども、段々とその運動は熱情的となり力附いて行つて、靈を得たやうに、漁夫の乘り込んだ船が波を切り波を切り、段々と早くなる一定のテンポを取つて沖に乘り出して行く樣は、力強い樂手の手で思ひ存分大膽に奏でられる Allegro Molto を思ひ出させずには置かぬだらう。凡てのものゝ緊張した其處には、いつでも音樂が生れるものと見える。

船はもう一個の敏活な生き物だ。船緣からは百足蟲のやうに艪の足を出し、艫からは鯨のやうに舵の尾を出して、あの物悲しい北國特有な漁夫の懸聲に勵まされながら、眞暗に襲ひかゝる波のしぶきを凌ぎ分けて、沖へ沖へと岸を遠ざかつて行く。海岸に一と團りになつて船を見送る女達の群れはもう命のない黑い石ころのやうにしか見えない。漁夫達は艪を漕ぎながら、帆綱を整へながら、浸水を汲み出しながら、その黑い石ころと、模範船の艫から一の字を引いて怪火のやうに流れる炭火の火の子とを眺めやる。長い鐵の火箸に火の起つた炭を挾んで高く擧げると、それが風を喰つて盛んに火の子を飛ばすのだ。凡ての船は始終それを目あてにして進退をしなければならない。炭火が一つ擧げられた時には、天候の惡くなる印と見て船を停め、二つ擧げられた時には安全になつた印として再び進まねばならぬのだ。曉闇を、物々しく立ち騷ぐ風と波との中に、海面低く火花を散らしながら青い焰を放つて、燃え上り燃えかすれるその光は、幾百人の漁夫達の命を勝手に支配する運命の手だ。その光が運命の物凄さを以て海の上に長く尾を引きながら消えて行く。

何處からともなく海鳥の群れが、白く長い翼に羽音を立てゝ風を切りながら、船の上に現はれて來る。猫のやうな聲で小さく呼び交はすこの海の沙漠の漂浪者は、さつと落して來て波に腹を撫でさすかと思ふと、翼を返して高く舞ひ上り、やゝ暫く風に逆らつてぢつとこたへてから、思ひ直したやうに打ち連れて、小氣味よく風に流されて行く。その白い羽根が或る瞬間には明るく、或る瞬間には暗く見え出すと、長い北國の夜もやうやく明け離れて行かうとするのだ。夜の闇は暗く濃く沖の方に追ひつめられて、東の空には黎明の新らしい光が雲を破り始める。物すさまじい朝燒けだ。過つて海に落ち込んだ惡魔か、肉付きのいゝ右の肩だけを波の上に現はしてゐる、その肩のやうな雷電峠の絕巓を撫でたり敲いたりして叢立ち急ぐ嵐雲は、爐に投げ入れられた紫のやうな光に燃えて、山懷ろの雪までも透明な藤色に染めてしまふ。それにしても明け方のこの暖かい光の色に比べて、何んと

云ふ寒い空の風だ。長い夜の爲めに冷え切つた地球は、今その一番冷たい呼吸を呼吸してゐるのだ。

私は君を忘れてはならない。もう港を出離れて木の葉のやうに小さくなつた船の中で、君は配繩の用意をしながら、恐ろしいまでに莊嚴なこの日の序幕を眺めてゐるのだ。君の父上は舵座に胡坐をかいて、時々晴雨計を見やりながら、變化の烈しいその頃の天氣模樣を考へてゐる。海の中から生れて來たやうな老漁夫の、皺にたゝまれた鋭い眼は、雲一片の徵をさへ見落すまいと注意しながら、顏には木彫のやうな深い落付きを見せてゐる。君の兄上は、凍つて自由にならない手の平を腰のあたりの荒布に擦りつけて熱を呼び起しながら、帆綱を握つて、風の向きと早さに應じて帆を立て直してゐる。傭はれた二人の漁夫は二人の漁夫で、二尋置きに本繩から下がつた針に餌をつけるのに忙はしい。海の上を見渡すと、港を出てからてん／″＼ばら／＼に散らばつて、朝の光に白い帆をかゞやかした船といふ船は、等しく沖を眼がけて波を切り開いて走りながら、君の船と同樣な仕事にいそしんでゐるのだ。

夜が明け離れると海風と陸風との變り目が來て、さすがに荒れがちな北國の冬の海の上も暫くは穩かになる。やがて瀨は達せられる。君等は水の色を一眼見たばかりで、海中に突き入つた陸地と海そのものゝ界とも云ふべき瀨がどう走つてゐるかを直ぐ見て取る事が出來る。

帆が下ろされる。勢ひで走りつゞける船足は、舵の爲めに右なり左なりに向け直される。同時に浮標の附いた配繩の一端が氷のやうな波の中にざぶん／＼と投げこまれる。二十五町から三十町に餘る長さを持つた繩全體が、海上に長々と橫たへられるまでには、朝早くから始めても、日が子午線近く來るまでかゝらねばならないのだ。君等の船は艪に操られて、橫波を食ひながらしぶ／＼進んで行く。ざぶり……ざぶり……寒氣の爲めに比重の高くなつた海の水は、凍りかゝつた油のやうな重さで、物凄い印度藍の底の方に、雲間を漏れる日光で鈍く光る配

繩の餌を呑み込んで行く。

今まで花のやうな模樣を描いて、海面の處々に日光を惠んでゐた空が、急にさつと薄曇ると、何處からともなく時雨のやうに霰が降つて來て海面を泡立たす。船と船とは、見る〳〵薄い糊のやうな青白い膜に隔てられる。君の周圍には小さな白い粒が乾き切つた音を立てゝ、慌だしく船板を打つ。君は小賢しいこの邪魔者から毛絲の襟卷で包んだ顏をそむけながら、配繩を丹念に下ろし續ける。

すつと空が明るくなる。霰は何處かへ行つてしまつた。而して眞蒼な海面に、漁船は蔭になり日向になり、堅い輪廓を描いて、波にもまれながら淋しく漂つてゐる。

機嫌買ひな天氣は、一日の中に幾度となくかうした顏のしかめ方をする。而して日が西に廻るに從つてこの不機嫌は募つて行くばかりだ。

寒暑をかまつてゐられない漁夫達も吹きざらしの寒さにはひるまずにはゐられない。配繩を投げ終ると、身ぶるひしながら五人の男は、舵座におこされた焜爐の火の周りに慕ひ寄つて、大きなお櫃から握飯を鷲摑みに摑み出して喰ひ貪る。港を出る時には一かたまりになつてゐた友船も、今は木の葉のやうに小さく互々からかけ隔つて、心細い弱々しさうな姿を、涯もなく露領に續く海原のこゝかしこに漂はせてゐる。三里の餘も離れた陸地は高い山々の半腹から上だけを水の上に見せて、降り積んだ雪が、日を受けた所は銀のやうに、雲の蔭になつた所は鉛のやうに、妙に險しい輪廓を描いてゐる。

漁夫達は口を食物で頰張らせながら、昨日の漁の有樣や、今日の豫想やらをいかにも地味な口調で語り合つてゐる。さういふ時に君だけは自分が彼等の間に不思議な異邦人である事に氣付く。同じ艪を操り、同じ帆綱をあつかひながら、何んといふ悲しい心の距りだらう。押し潰してしまはうと幾度試みても、すぐ後からまくしかゝ

つて來る藝術に對する執着をどうすることも出來なかつた。

とはいへ、飛行機の將校にすらならうといふ人の少い世の中に、生きては人の冒險心をそゝつて如何にも雄々しい賴み甲斐ある男と見え、死んでは萬人にその英雄的な最後を惜しみ仰がれ、遺族まで生活の保障を與へられる飛行將校にすらならうといふ人の少い世の中に、荒れても晴れても毎日々々、一命を投げてかゝつて、緊張し切つた終日の勞働に、玉の緖で炊き上げたやうな飯を食つて一生を過して行かねばならぬ漁夫の生活、それには聊かも遊戲的な餘裕がないだけに、命とかけがへの眞實な仕事であるだけに、言葉には現はし得ない程尊さと嚴肅さとを持つてゐる。況してや彼等がこの目覺ましい健氣な生活を、已むを得ぬ、苦しい、然し當然な正しい生活として、誇りもなく、矯飾もなく、不平もなく、素直に受け取り、軛にかゝつて輓牛のやうな柔順な忍耐と覺悟とを以て、勇ましく迎へ入れてゐる、その姿を見ると、君は人間の運命の果敢なさと美しさとに同時に胸をしめ上げられる。

こんな事を思ふにつけて、君の心の眼にはまざ〳〵と難破船の痛ましい光景が浮び出る。君は矢張り舵座に坐つて他の漁夫と同樣に握り飯を食つてはゐるが、何時の間にか人々の會話からは遠のいて、物思はしげに默りこくつてしまふ。而して果てしもなく囘想の迷路を辿つて歩く。

六

それは或る年の三月に、君が遭遇した苦い經驗の一つだ。模範船からすぐ引き上げろと云ふ信號がかゝつたので、今までも氣遣ひながら仕事を續けてゐた漁船は、打ち込み打ち込む波濤と戰ひながら配繩をたくし上げにかかつたけれども、吹き始めた暴風は一秒毎に募るばかりで、船頭は已むなく配繩を切つて捨てさせなければなら

なくなつた。
「又はあ錢こ海さ捨てるだ」
と君の父上は心から歎息してつぶやきながら君に命じて配繩を切つてしまつた。
海の上は唯狂ひ暴れる風と雪と波ばかりだ。縱橫に吹きまく風が、思ひのまゝに海をひつぱたくので、つるし上げられるやうに高まつた三角波が互に競つて取つ組み合ふと、取つ組み合つたゞけの波は忽ち眞白な泡の山に變じて、その巓が風にちぎられながら、すきまじい勢ひで目あてもなく倒れかゝる。眼も向けられないやうな濃い雪の群れは、波を追つたり波から遁れたり、宛ら風の怒りを挑む小惡魔のやうに、面憎く舞ひながら右往左往に飛びはねる。吹き落して來た雲のちぎれは、大きな霧のかたまりになつて、海とすれ〳〵に波の上を矢よりも早く飛び過ぎて行く。
雪と浸水とで糊よりも滑る船板の上を君は這ふやうにして舳の方へにじり寄り、左の手に友綱の鐵環をしつかりと握つて腰を据ゑながら、右手に磁石をかまへて、大聲で船の進路を後ろに傳へる。二人の漁夫は大竿を風上になつた舷から二本突き出して、動かないやうに結びつける。船の顚覆を少しなりとも防がう爲めだ。君の兄上は帆綱を握つて、舵座にゐる父上の合圖通りに帆の上げ下げを誤るまいと一心になつてゐる。而してその間にもしつきりなしに打込む浸水を急がしく汲んでは舷から捨てゝゐる。命懸けに呼びかはす互々の聲は妙に上ずつて、風に半分がた消されながら、それでも五人の耳には物凄くも心強くも響いて來る。
「おも舵つ」
「右にかはすだつてえば」
「右だ……右だぞつ」

「帆綱をしめろやつ」

「友船は見えねえかよう、ゐたらくつつけやーい」

どう吹かうかと躊つてゐたやうな疾風がやがてしつかり方向を定めると、是れまで唯あてもなく立ち騒いでゐたらしく見える三角波は、段々と丘陵のやうな紆濤に變つて行つた。言葉通りに水平に吹雪く雪の中を、後ろの方から、見上げるやうな大きな水の堆積が、想像も及ばない早さでひた押しに押して來る。

「來たぞーつ」

緊張し切つた五人の心は又更に恐ろしい緊張を加へた。眩しい程早かつた船足が急によどんで、後ろに吸ひ寄せられて、艫が薄氣味惡く持上つて、船中に置かれた品物ががら〳〵と音をたてゝ前にのめり、人々も何かに取りついて腰のすわりを定めなほさなければならなくなつた瞬間に、船は一と煽り煽つて、物凄い不動から、奈落の底までもと凄じい勢で波の背を滑り下つた。同時に耳に餘る大きな音を立てゝ、紆濤は屛風倒しに倒れかゝる。湧きかへるやうな泡の混亂の中に船を揉まれながら行手を見ると、一旦壞れた波はすぐ又物凄い丘陵に立ちかへつて、眼の前の空を高くしきりながら、見る〳〵惡夢のやうに遠ざかつて行く。

ほつと安堵の氣息をつく隙も與へず、後ろを見れば又紆濤だ。水の山だ。その時、

「危ねえ」

「ぽきりつ」

と云ふけたゝましい聲を同時に君は聞いた。而して同時に野獸の敏感さを以て身構へしながら後ろを振り向いた。根元から折れて横倒しに倒れかゝる帆柱と、急に命を失つたやうに皺になつてたゝまる帆布と、その蔭から、飛び出しさうに眼をむいて、大きく口を開けた君の兄上の顏とが映つた。

君は咄嗟に身をかはして、頭から打つてかゝらうとする帆柱から身をかばつた。人々は騷ぎ立つて艪を構へようとひしめいた。けれども無二無三な船足の動搖には打ち勝てなかつた。帆の自由である限りは金輪際船を顚覆させないだけの自信を持つた人達も、帆を奪ひ取られては途方に暮れないではゐられなかつた。船足のとまつた船ではもう舵も利かない。船は波の動搖のまに〳〵勝手放題に荒れ狂つた。

第一の紆濤(うねり)、第二の紆濤、第三の紆濤には天運が船を顚覆から庇つてくれた。しかし特別に大きな第四の紆濤を見た時、船中の人々は觀念しなければならなかつた。

雪の爲めに薄くぼかされた眞黑な大きな山、その頂からは、火が燃え立つやうに、ちらり〳〵白い波頭が立つては消え、消えては立ちして、瞬間毎に高さを增して行つた。吹き荒れる風すらがその爲めに遮りとめられて、船の周圍には氣味の惡い靜かさが滿ち擴がつた。それを見るにつけても波の反對の側をひた押しに押す風の激しさ强さが思ひやられた。艫(とも)を波の方へ向ける事も得しないで、力なく漂ふ船の前まで來ると、波の山は、いきなり、獲物に襲ひかゝる猛獸のやうに思ひきり背延びをした。と思ふと、波頭は吹きつける風に反(そ)りを打つて鞺と崩れこんだ。

はつと思つたその時遲く、君等はもう眞白な泡に五體を引きちぎられる程もまれながら、船底を上にして顚覆した船體にしがみ附かうと藻搔いてゐた。見ると君の眼の屆く所には、君の兄上が頭からずぶ濡れになつて、ぬる〳〵と手がゝりのない舷に手をあてがつては滑り、手をあてがつては滑りしてゐた。君は大聲を揚げて何か云つた。兄上も大聲を揚げて何か云つてるらしかつた。然しお互に大きな口を開くのが見えるだけで、聲は少しも聞こえて來ない。

割合に小さな波が後から〳〵押し寄せて來て、船を搖り上げたり押し卸したりした。その度每に君達は船との緣

を絶たれて、水の中に漂はねばならなかつた。而して君は、着込んだ厚衣の芯まで水が透つて鐵のやうに重いのにもかゝはらず、一心不亂に動かす手足と同じ程の忙はしさで、眼と鼻位の近さに押し逼つた死から遁れ出る道を考へた。心の上澄みは妙におど〳〵とあわてゝゐる割合に、心の底は不思議に氣味惡く落ちついてゐた。それは君自身にすら物凄い程だつた。空と云ひ、海と云ひ、船と云ひ、君の思案と云ひ、一つとして眼あてなく動搖しないものはない中に、君の心の底だけが惡落付きに落付いて、「死にはしないぞ」とちやんと決め込んでゐるのが却つて薄氣味惡かつた。それは「死ぬのがいやだ」「生きてゐたい」「生きる餘席の有る限りはどうあつても生きなければならぬ」「死にはしないぞ」といふ本能の論理的結論であつたのだ。この恐ろしい盲目な生の事實が、而してその結論だけが、眼を見据ゑたやうに、君の心の底に落付き拂つてゐたのだつた。

君はこの物凄い無氣味な衝動に驅り立てられながら、水船なりにも顚覆した船を裏返す努力に力を盡した。殘る四人の心も君と變りはないと見えて、險しい困苦と戰ひながら、四人とも君のゐる舷の方へ集まつて來た。而して申し合はしたやうに、一緒に力を合せて、船の胴腹に這ひ上るやうにしたので、船は一方にかしぎ始めた。

「それ今一と息だぞつ」

君の父上が搾り切つた生命を聲にしたやうに叫んだ。一同は又懸命な力を籠めた。

折りよく——全く折りよく、天運だ——その時船の横面に大きな波が浴びせこんで來たので、片方だけに人の重りの加はつた船はくるりと裏返つた。舷までひた〳〵と水に埋もれながらも兎に角船は眞向きになつて水の面に浮び出た。船が裏返る拍子に五人は五人ながら、すつぽりと氷のやうな海の中にもぐり込みながら、急に勢ひづいて船の上に飛び上らうとした。然ししこたま着込んだ衣服は思ふざま濡れ透つてゐて、動ともすれば人々を波の中に吸ひ込まうとした。それが一方の舷に取りついて力を籠めれば又顚覆するにきまつてゐる。生死の瀨戸際に

はまり込んでゐる人々の本能は恐ろしい程敏捷な働きをする。五人の中の二人は咄嗟に反對の舷に廻つた。而して互に顏を見合せながら、一度にやつと聲をかけ合せて半身を舷に乘り上げた。足の方を船底に吸ひ寄せられながらも、半身を水から救ひ出した人々の顏に現はれた何とも云へない緊張した表情――それを君は忘れる事が出來ない。次の瞬間にはわつと聲をあげて男泣きに泣くか、それとも我れを忘れて狂ふやうに笑ふか、どちらかをしさうな表情――それを君は忘れる事が出來ない。

凡てかうした懸命な努力は、降りしきる雪と、荒れ狂ふ水と、海面をこすつて飛ぶ雲とで表はされる自然の憤怒の中で行はれたのだ。怒つた自然の前には、人間は塵一とひらにも及ばない。人間などゝ云ふ存在は全く無視されてゐる。それにも係らず君達は頑固に自分達の存在を主張した。雪も風も波も君達を考へにいれてはゐないのに、君達は强ひてもそれらに君達を考へさせようとした。

舷を乘り越して奔馬のやうな波頭がつぎ〳〵にすり拔けて行く。それに腰まで浸しながら、君達は船の中に取り殘された得物を何んでも構はず取り上げて、それを働かしながら、死から遁るべき一路を切り開かうとした。或る者は櫓を拾ひあてた。或るものは船板を、或るものは水柄杓を、或るものは長いたゝはしの柄を、何ものにも換へがたい武器のやうにしつかり握つてゐた。而して舷から身を乘り出して、子供がするやうに、水を漕いだり、浸水(あか)をかき出したりした。

吹き落ちる氣配も見えない嵐は、果てもなく海上を吹きまくる。眼に見える限りはたゞ波頭ばかりだ。犬のやうな敏捷(すばや)さで方角を嗅ぎ慣れてゐる漁夫達も、今は東西の定めやうがない。東西南北は一つの鉢の中で擦りまぜたやうに渾沌としてしまつた。

薄い暗黑。天からともなく地からともなく湧き起る大叫喚。外には何んにもない。

「死にはしないぞ」――そんなはめになつてからも、君の心の底は妙に落ち着いて、薄氣味惡くこの一事を思ひつゞけた。

君の傍には一人の若い漁夫がゐたが、その右の顳顬の邊から生々しい色の血が幾條にもなつて流れてゐた。それだけがはつきり君の眼に映つた。「死にはしないぞ」――それを見るにつけても、君はまたしみ〴〵とさう思つた。

かう云ふ必死な努力が何分續いたのか、何時間續いたのか、時間といふものゝすつかり無くなつてしまつたこの世界では少しも分らない。然しながら兎に角君が何物も納れ得ない心の中に、疲勞といふ感じを覺え出して、これは困つた事になつたと思つた頃だつた、突然一人の漁夫が意味の分らない言葉を大きな聲で叫んだのは。今までゞも五人が五人ながら始終何か互に叫び續けてゐたのだつたが、この叫び聲は不思議に際立つて皆んなの耳に響いた。

殘る四人は思はず云ひ合はせたやうにその漁夫の方を向いて、その漁夫が眼をつけてゐる方へ視線を辿つて行つた。

船！……船！

濃い吹雪の幕のあなたに、さだかには見えないが、波の背(そびら)に乘つて四十五度位の角度に船首を下に向けながら、帆を一ぱいに開いて、矢よりも早く走つて行く一艘の船！

それを見ると何かゞ君の胸をどきんと下からつき上げて來た。君は思はずすゝり泣きでもしたいやうな心持になつた。何はさて措いても君達はその船を目懸けて助けを求めながら近寄つて行かねばならぬ筈だつた。餘の人達も君と同樣、確かに何物かを眼の前に認めたらしく、奇怪な叫び聲を立てた漁夫が、眼を大きく開いて見つめ

てゐる邊を等しく見つめてゐた。その癖一人として自分等の船をそつちの方へ向けようとしてゐるらしい者はなかつた。それを訝かる君自身すら、心が唯わく〳〵と感傷的になりまさるばかりで、急いで働かすべき手は却つて萎えてしまつてゐた。

白い帆を一ぱいに開いたその船は、依然として船首を下に向けたまゝ、矢のやうに走つて行く。降りしきる吹雪を隔てた事だから、乘組の人の數もはつきりとは見えないし、水の上に割合に高く現はれてゐる船の胴も、木の色といふよりは白堊のやうな生白さに見えてゐた。而して不思議な事には、波の腹に乘つても波の背に乘つても、舳は依然として下に向いたまゝである。風の强弱に應じて帆を上げ下げする樣子もない。いつまでも眼の前に見えながら、四十五度位に船首を下向きにしたまゝ、矢よりも早く走つて行く。

ぎよつとして氣が付くと、その船はいつの間にか水から離れてゐた。波頭から三段も上と思はれる邊を船は傾いだまゝ矢よりも早く走つてゐる。君の頭はかーんとして竦み上つてしまつた。同時に船は段々大きくぼやけて行つた。何時の間にかその胴體は消えてなくなつて、唯眞白い帆だけが矢よりも早く動いて行くのが見やられるばかりだ。と思ふ間もなくその白い大きな帆さへが、降りしきる雪の中に薄れて行つて、やがてはかき消すやうに見えなくなつてしまつた。

怒濤。白沫。さつ〳〵と降りしきる雪。眼をかすめて飛び交はす雲の霧。自然の大叫喚……その眞中心に頼りなく揉みさいなまれる君達の小さな水船……やつぱりそれだけだつた。

生死の間にさまよつて、疲れながらも緊張し切つた神經に起る幻覺だつたのだと氣が付くと、君は急に一種の薄氣味惡さを感じて、力を一度にもぎ取られるやうに思つた。

先程奇怪な叫び聲を立てたその若い漁夫は、やがて眠るやうにおとなしく氣を失つて、ひよろ〳〵とよろめく

と見る間に、崩れるやうに胴の間にぶつ倒れてしまつた。

漁夫達は何か魔でもさしたやうに思はず極度の不安を眼に現はして互に顔を見合せた。

「死にはしないぞ」

不思議な事にはそのぶつ倒れた男を見るにつけて、又漁夫達の不安げな容子を見るにつけて、君は懲りずまに薄氣味悪くさう思ひつゞけた。

君達がほんたうに一艘の友船と出喰はしたまでには、どれ程の時間が經つてゐたらう。然し兎に角運命は君達には無關心ではなかつたと見える。急に十倍も力を回復したやうに見えた漁夫達が、必死になつて君達の船とその船とを繋ぎ合はせ、半分がた凍つてしまつた帆を形ばかりに張り上げて、風の追ふまゝに船を走らせた時には、何んとも云へない幸福な感謝の心が、抑へても〳〵むら〳〵と胸の先きにこみ上げて來た。

着く處に着いてから思ひ存分の手當てをするから暫く我慢してくれと心の中に詫びるやうに云ひながら、君は若い漁夫を卒倒したまゝ胴の間の片隅に抱きよせて、すぐ自分の仕事にかゝつた。

やがて行手の波の上にぽんやりと雷電峠の突角が現はれ出した。山脚は海の中に、山頂は雲の中に、山腹は雪の中に揉みに揉まれながら、決して動かないものが始めて君達の前に現はれたのだ。それを見付けた時の漁夫達の心の勇み……魚が水に遇つたやうな、野獣が山に放たれたやうな、太陽が西を見付け出したやうなその喜び……船の中の人達は思はず足爪立てんばかりに總立ちになつた。人々の心までが總立ちになつた。

「峠が見えたぞ……北に取れや舵を……隱れ岩さ乘り上げんな……雪崩にも打たせんなよう……」

さう云ふ聲がてん〴〵に人々の口から喚かれた。それにしても船はひどく流されてゐたものだ。雷電峠から五里も離れた瀬にゐたものが、何時の間にかこんな處に來てゐるのだ。見る〳〵風と波とに押しやられて船は吸ひ

付けられるやうに、吹雪の間から眞黑に天までそゝり立つ斷崖に近寄つて行くのを、漁夫達はさうはさせまいと、帆をたて直し、艪を押して、横波を喰はせながら船を北へと向けて行つた。

陸地に近づくと波はなほ怒る。鬣を風に靡かして暴れる野馬のやうに、波頭は波の穗になり、波の穗は飛沫になり、飛沫はしぶきになり、しぶきは霧になり、霧はまた眞白い波になつて、息もつかせず後から後からと山裾に襲ひかゝつて行く。山裾の岩壁に打ちつけた波は、煮えくりかへつた熱湯をぶちつけたやうに、湯氣のやうな白沫を五丈も六丈も高く飛ばして、反りを打ちながら海の中にどつと崩れ込む。

その猛烈な力を感じてか、斷崕の出鼻に降り積つて、徐々に斜面を辷り下つて來てゐた積雪が、地面との縁から離れて、すさまじい地響と共に、何百丈の高さから一氣になだれ落ちる。嶺を離れた時には一握りの銀末に過ぎない。それが見る〳〵大きさを增して、隕星のやうに白い尾を長く引きながら、音も立てずに驀地に落して來る。あなやと思ふ間にそれは何十里にも亙る水晶の大簾だ。ど、ど、どどどしーん……さあーっ……。廣い海面が眼の前で眞白な平野になる。山のやうな五百重の大波は忽ち逐ひ退けられて漣一つ立たない。どつとそこを目懸けて狂風が四方から吹き起る……その物すさまじさ。

君達の船は惡鬼に逐ひ迫られたやうにおびえながら、懸命に東北へと舵を取る。磁石のやうな陸地の吸引力からやう〳〵自由になる事の出來た船は、また搖れ動く波の山と戰はねばならぬ。

それでも岩内の港が波の間に隱れたり見えたりし始めると、漁夫達の力は急に五倍にも十倍にもなつた。今までの人數の二倍も乘つてゐるやうに船は動いた。岸から打ち上げる目標の烽火が紫だつて暗黑な空の中でぱつと彈けると、鬖々として火花を散らしながら闇の中に消えて行く。それを目懸けて漁夫達は有る限りの艪を默つたまゝでひた漕ぎに漕いだ。その不思議な沈默が、互に呼び交はす慘らしい叫び聲よりも却つて力強く人々の胸に

響いた。

船が波の上に乘つた時には、波打際に集まつて何か騷ぎ立てゝゐる群集が見やられるまでになつた。やがて嵐の間にも大砲のやうな音が船まで聞えて來た。と思ふと救助繩が空をかける蛇のやうに曲りくねりながら、船から二三段隔たつた水の中にざぶりと落ちた。漁夫達はその方へ船を向けようとひしめいた。第二の爆聲が聞えた。繩は過たず船に屆いた。

二三人の漁夫がよろけ轉びながらその繩の方へ駈け寄つた。

音は聞えずに烽火の火花は間を置いて怪火のやうに遙かの空にぱつと咲いてはすぐ散つて行く。

船は繩に引かれてぐん〳〵陸の方へ近寄つて行く。水底が淺くなつた爲めに無二無三に亂れて立ち騷ぐ波濤の中を、互にしつかりしがみ合つた二艘の船は、半分がた水の中を潛りながら、半死の有樣で進んで行つた。

君は始めて氣が付いたやうに年老いた君の父上の方を振り返つて見た。父上は膝から下を水に浸して舵座に坐つたまゝ、ぢつと君を見詰めてゐた。今まで絕えず君と君の兄上とを見詰めてゐたのだ。さう思ふと君は何んとも云へない骨肉の愛着にきびしく捕へられてしまつた。君の眼には不覺にも熱い淚が浮んで來た。君の父上はそれを見た。

「あなたが助かつてよござんした」

「お前が助かつてよかつた」

兩人の眼は咄嗟の間にも互に親しみを籠めてから云ひ合つた。而してこの嬉しい言葉を語る眼から互々の眼は離れようとしなかつた。さうしたまゝで暫く過ぎた。

君は滿足し切つて又働き始めた。もう眼の前には岩內の町が、汚く貧しいながらに、君に取つてはなつかしい

岩内の町が、新しく生れ出たまゝのやうに立ち列つてゐた。水難救濟會の制服を着た人達が、右往左往に駈け廻る有樣もまざ〳〵と眼に映つた。

何んとも云へない勇ましい新しい力――上潮のやうに、腹のどん底からむら〳〵と湧き出して來る新しい力を感じて、君は「さあ來い」と云はんばかりに、艪をひしげる程押し摑んだ。而して矢聲をかけながら漕ぎ始めた。淚が後から〳〵と君の頰を傳つて流れた。

啞のやうに今まで默つてゐた外の漁夫達の口からも、矢庭に勇ましい懸聲が溢れ出て、君の聲に應じた。艪は梭のやうに波を切り破つて激しく働いた。

岸の人達が呼びおこす聲が君達の耳にも這入るまでになつた。と思ふと君は段々夢の中に引込まれるやうなぼんやりして感じに襲はれて來た。

君はもう一度君の父上の方を見た。父上は舵座に坐つてゐる。然しその姿は前のやうに君に何等の逼つた感じを惹き起させなかつた。

やがて船底にじやり〳〵と砂の觸れる音が傳はつた。船は滯りなく君が生れ君が育てられたその土の上に引き上げられた。

「死にはしなかつたぞ」

と君は思つた。同時に君の眼の前は見る〳〵眞暗になつた。……君はその後を知らない。

七

君は漁夫達と膝をならべて、同じ握り飯を口に運びながら、心だけはまるで異邦人のやうに隔たつてこんなこと

を想ひ出す。何んと云ふ眞劍な而して險しい漁夫の生活だらう。人間と云ふものは、生きる爲めには、厭でも死の側近くまで行かなければならないのだ。謂はゞ捨身になつて、こつちから死に近づいて、死の油斷を見すまして、かつぱらひのやうに生の一片をひつたくつて逃げて來なければならないのだ。死は知らんふりをしてそれを見やつてゐる。人間は奪ひ取つて來た生をたしなみながらしやぶるけれども、程なくその生はまた盡きて行く。さうすると又死の眼の色を見すまして、死の方に偸み足で近寄つて行く。或る者は死が餘り無頓着さうに見えるので、つひ氣を許して少し大膽に高慢に振舞はうとする。と鬼一口だ。もうその人は地の上にはゐない。或る者は年と共に意氣地がなくなつて行つて、死の姿がいよ〱恐ろしく眼に映り始める。而してそれに近寄る冒險を躊躇する。さうすると死はやをら物憂げな腰を上げて、そろ〱とその人に近寄つて來る。ガラ〱蛇に見こまれた小鳥のやうに、その人は逃げも得しないですくんでしまふ。次の瞬間にその人はもう地の上にはゐない。人の生きて行く姿はそんな風にも思ひなされる。實に果敢ないとも何んとも云ひやうがない。その中にも漁夫の生活の激しさは格別だ。彼等は死に對して喧嘩をしかけんばかりの切羽つまつた心持で出懸けて行く。陸の上では何んと云つても僞善も彌縫も或る程度までは通用する。或る意味では必要であるとさへも考へられる。海の上ではそんな事は藥の足しにしたくもない。眞裸な實力と天運ばかりが凡ての漁夫の賴みどころだ。その生活はほんとに悲壯だ。彼等がそれを意識せず、生きると云ふ事は凡てかうしたものだと諦めをつけて、疑ひもせず、不平も云はず、自分の爲めに、自分の養はなければならない親や妻や子の爲めに、毎日々々板子一枚の下は地獄のやうな境界に身を拋げ出して、せつせと骨身を惜しまず働く姿はほんたうに悲壯だ。而して慘めだ。何んだつて人間と云ふものはこんなしがない苦勞をして生きて行かなければならないのだらう。

世の中には、殊に君が少年時代を過ごした都會といふ所には、毎日々々安逸な生を食傷する程食つて一生夢の

やうに送つてゐる人もある。都會とは云ふまい。段々とさびれて行くこの岩内の小さな町にも、二三百萬圓の富を祖先から受け嗣いで、小樽には立派な別宅を構へてそこに妾を住はせ、自分は東京の或る高等な學校を兎も角も卒業して、話でもさせればそんなに愚鈍にも見えない癖に、一年中是れと云つてする仕事もなく、退屈をまぎらす爲めの行樂に身を任せて、それでも使ひ切れない精力の餘剩を、富者の贅澤の一つである癇癪に漏らしてゐるのがある。君はその男をよく知つてゐる。小學校時代には敎室まで一つだつたのだ。それが十年かそこらの年月の間に、二人の生活は恐ろしく懸け隔たつてしまつたのだ。君はそんな人達を一度でも羨ましいと思つた事はない。その人達の生活の內容の空しさを想像する十分な力を君は持つてゐる。而して彼等が彼等の導くやうな生活をするのは道理があると合點がゆく。金があつて才能が平凡だつたら勢ひあゝして僅かに生の倦怠から遁れる外はあるまいと密かに同情さへされぬではない。その人達が生に飽滿して暮すのはそれでいゝ。然し君の周圍にゐる人達が何故あんな恐ろしい生死の境の中に生きる事を僥倖しなければならない運命にあるのだらう。何故彼等はそんな境遇――死ぬ瞬間まで一分の隙も見せずに身構へてゐなければならないやうな境遇にゐながら、何故生きようとしなければならないのだらう。これは君に不思議な謎のやうな心地を起させる。ほんたうに生は死よりも不思議だ。

その人達は他人眼にはどうしても不幸な人達と云はなければならない。然し君自身の不幸に比べて見ると、遙かに幸福だと君は思ひ入るのだ。彼等には兎に角さう云ふ生活をする事がそのまゝ生きる事なのだ。彼等は綺麗さつぱりと諦めをつけて、さういふ生活の中に頭からはまり込んでゐる。少しも疑つてはゐない。それなのに君は絶えずいらいらして、目前の生活を疑ひ、それに安住する事が出來ないでゐる。君は喜んで君の兩親の爲めに、君の家の苦しい生活の爲めに、君の巖丈な力強い肉體と精力とを提供してゐる。君の父上の假初めの風邪が癒つ

て、暫くぶりで一緒に漁に出て、夕方になつて家に歸つて來てから、一家が睦まじくちやぶ臺のまはりを圍んで、暗い五燭の電燈の下で箸を取り上げる時、父上が珍らしく木彫のやうな固い顏に微笑を湛へて、

「今夜はおまんまが甘えぞ」

と云つて、飯茶碗を一寸押しいたゞくやうに眼八分に持ち上げるのを見る時なぞは、君は何んと云つても心から幸福を感ぜずにはゐられない。君は目前の生活を決して悔んでゐる譯ではないのだ。それにも係らず、君は何かにつけてすぐ暗い心になつてしまふ。

「畫が描きたい」

君は寢ても起きても祈りのやうにこの二つの望みを胸の奧深く大事にかき抱いてゐるのだ。その望みをふり捨てゝ仕舞へる事なら世の中は簡單なのだ。

戀――互に思ひ合つた戀と云つてもこれ程の執着はあり得まいと君は自身の心を憐れみ悲しみながらつくゞゝと思ふ事がある。君の厚い胸の奧からは深い溜息が漏れる。

雨の日などに土間に坐りこんで、兄上や妹さんなぞと一緒に、配繩の繕ひをしたりしてゐると、どうかした拍子に皆んなが仕事に夢中になつて、睦まじく交はしてゐた世間話すら途絶えさして、默りこんで手先ばかりを忙はしく働かすやうな時がある。かういふ瞬間に、君は我にもなく手を休めて、茫然と夢でも見るやうに、君の見て置いた山の景色を思ひ出してゐる事がある。この山とあの山との距りの感じは、界の線をかう云ふ曲線で力強く描きさへすれば、屹度いゝに違ひない、そんな事を一心に思ひ込んでしまふ。而して鋏を持つた手の先きで、自然に、想像した曲線を膝の上に幾度も描いては消し、描いては消しゝてゐる。

又或る時は沖に出て、配繩をたぐり上げる大事な忙はしい時に、君は板子の上に坐つて、二本ならべて立てら

れたビール瓶の間から縄をたぐり込んで、釣りあげられた明鯛が瓶にせかれる爲めに、針の緣を離れて胴の間にぴち〳〵跳ねながら落ちて行くのをぢつと見やつてゐる。而してクリムソンレーキを水に薄く溶かしたよりもつと鮮明な光を持つた鱗の色に吸ひつけられて、思はずぼんやりと手の働きをやめてしまふ。

これらの場合はつと我れに返つた瞬間ほど君を慘めにするものはない。居睡りしたのを見付けられでもしたやうに、君はきよとんと恥かしさうにあたりを見廻して見る。或る時は兄上や妹さんが、暗まつて行く夕方の光に、なほ氣ぜはしく眼を縄によせて、せつせとほつれを解いたり、切れ目をつないだりしてゐる。或る時は漁夫達が、寒さに手を海老のやうに赤くへし曲げながら、息せき切つて配縄をたくし上げてゐる。君は子供のやうに思はず耳許まで赤面する。

「何んといふだらしのない二重生活だ。俺は一體俺に與へられた運命の生活に男らしく服從する覺悟でゐるんぢやないか。それだのにまだ小つぽけな才能に未練を殘して、柄にもない野心を捨てかねてゐると見える。俺はどつちの生活にも眞劍にはなれないのだ。俺の畫に對する熱心だけから云ふと、畫かきになるためには十分過ぎる程なのだが、それだけの才能があるかどうかと云ふ事になると判斷のしやうが無くなる。勿論俺に畫の描き方を教へてくれた人もなければ、俺の畫を見てくれる人もない。岩内の町でのたつた一人の話相手のKは、俺の畫を見る度毎に感心してくれる。而してどんな苦しみを經ても畫かきになれと勸めてくれる。然しKは第一俺の友達だし、第二に畫が俺以上に判るとは思はれぬ。Kの言葉は何時でも俺を勵まし鞭つてくれる。然し俺は何時でもその後に、自惚れさせられてゐるのではないかといふ疑ひを持たずにはゐない。どうすればこの二重生活を突き拔ける事が出來るのだらう。生れから云つても、今までの運命から云つても、俺は漁夫で一生を終へるのが相當してゐるらしい。Kもあの氣むづかしい父の下で調劑師で一生を送る決心を悲しくもしてしまつたらしい。俺から

見るとKこそは立派な文學者になれさうな男だけれども、Kは誇張なく自分の運命を諦めてゐる。悲しくも諦めてゐる。待てよ、悲しいと云ふのはほんたうはKの事ではない。さう思つてゐる俺自身の事だ。俺はほんたうに悲しい男だ。親父にも濟まない。兄や妹にも濟まない。この一生をどんな風に過したら、俺はほんたうに俺らしい生き方が出來るのだらう」

そこに居ならんだ漁夫達の間に、どつしりと男らしい巖丈な胡坐を組みながら、君は彼等とは全く異邦の人のやうな淋しい心持になつてこんな事を思ひつゞける。

やがて漁夫達はそこらを片付けてやをら立ち上ると、胴の間に降り積んだ雪を摘まんで、手の平で擦り合はせて、指に粘りついた飯粒を落した。而して配繩の引き上げにかゝつた。

西に春き出すと日脚はどん〳〵歩みを早める。おまけに上の方からたるみなく吹き落して來る風に、海面は妙に彈力を持つた凪ぎ方をして、その上を霰まじりの粉雪がさーつと來ては過ぎ、過ぎては來る。君達は手袋を脫ぎ去つた手を眞赤にしながら、氷點以下の水でぐつしより濡れた配繩をその一端からたぐり上げ始める。三間四間置き位に、眼の下二尺もあるやうな鱈がぴち〳〵跳ねながら引き上げられて來る。

三十町に餘る位な配繩を全然たくしこんでしまふ頃には、海の上は少し墨汁を加へた牛乳のやうにぼんやり暮れ殘つて、そこらに眺めやられる漁船の或るものは、帆を張り上げて港を目指してゐたり、或るものは淋しい掛け聲をなほ海の上に響かせて、忙はしく配繩を上げてゐるのもある。夕暮れに海上に點々と浮んだ小船を見渡すのは悲しいものだ。そこには人間の生活がその果敢ない末梢を淋しくさらしてゐるのだ。

君達の船は、海風が凪ぎて陸風に變らない中にと帆を立て、艪を押して陸地を目懸ける。晴れて曇る雪時雨の間に、岩内の後ろに聳える山々が、高いのから先きに、水平線上に現はれ出る。船歌を唄ひつれながら、漁夫達

は見慣れた山々の頂きを繫ぎ合せて、港のありかをそれと朧げながら見定める。そこには妻や母や娘等が、寒い濱風に吹きさらされながら、噂取り〳〵に汀に立つて君達の歸りを待ち侘びてゐるのだ。

是れも牛乳のやうな色の寒い夕靄に包まれた雷電峠の突角がいかつく大きく見え出すと、防波堤の突先きにある燈臺の灯が明滅して船路を照らし始める。毎日の事ではあるけれども、それを見ると、君と云はず人々の胸の中には、今日も先づ命は無事だつたといふ底深い喜びがひとりでに湧き出して來て、陸に對する不思議なノスタルヂヤが感ぜられる。漁夫達の船歌は一段と勇ましくなつて、君の父上は船の艫に漁獲を知らせる旗を揚げる。その旗がばた〳〵と風に煽られて音を立てる――その音がいゝ。

段々間近かになつた岩内の町は、黃色い街燈の灯の外には、まだ燈火もともさずに黑く淋しく横はつてゐる。雪のむら消えた砂濱には、今朝と同様に女達が彼處此處にいくつかの固い群れになつて、石ころのやうにこちんと立つてゐる。白波がかすかな潮の香と音とをたてゝ、その足許に行つては消え、行つては消えするのが見え渡る。

帆が卸ろされた。船は海岸近くの波に激しく動搖しながら、艫を海岸の方に向けかへて段々と汀に近寄つて行く。海產物會社の印袢天を着たり、犬の皮か何かを裏につけた外套を深々と羽織つたりした男達が、右往左往に走りまはるその邊を目がけて、君の兄上が手慣れたさばきでさつと艫綱を投げると、それがすぐ幾十人もの男女の手で引つ張られる。船は頻りと上下する舳に波のしぶきを喰ひながら、どん〳〵砂濱に近寄つて、やがて疲れ切つた魚のやうに黑く横たはつて動かなくなる。

漁夫達は艪や舵や帆の始末を簡單にしてしまふと、舷を傳はつて陸に跳り上がる。海產物製造會社の人夫達は、漁夫達と入れ替つて、船の中に猿のやうに飛び込んで行く。而してまだ死に切らない鱈の尾をつかんで、礫のや

うに砂の上に抛り出す。濱に待ち構へてゐる男達は、眼にもとまらない早業で數を數へながら、魚を畚の中にたゝき込む。漁夫達は吉例のやうに會社の數取人に對して何かと故障を云ひたてゝわめく。一日ひつそりかんとしてゐた濱も、この暫くの間だけは、さすがに賑やかな氣分になる。景氣にまき込まれて、女達の或る者まで男と一緒になつて喧嘩腰に物を云ひつのる。

然しこの華々しい賑ひも長い間ではない。命をなげ出さんばかりの險しい一日の勞働の結果は、僅か十數分の間で他愛もなく會社の人達に處分されてしまふのだ。君が君の妹を女達の群れの中から見付け出して、忙はしく眼を見交はし、言葉を交はす暇もなく、濱の上には亂暴に踏み荒らされた砂と、海藻と小魚とが砂まみれになつて殘つてゐるばかりだ。而して會社の人夫達は後をも見ずに又他の漁船の方へ走つて行く。

かうして岩内中の漁夫達が一生懸命に捕獲して來た魚は瞬く中にさらはれてしまつて、墨のやうに煙突から煙を吐く怪物のやうな會社の製造所へと運ばれて行く。

夕焼けもなく日はとつぷりと暮れて、雪は紫に、灯は光なくたゞ赤くばかり見える初夜になる。君達は今朝の通りに幾かたまりかの黑い影になつて、疲れ切つた五體を銘々の家路に運んで行く。寒氣の爲めに五臟まで締めつけられたやうな君達は口をきくのさへ物惰くて出來ない。女達がはしやいだ調子で、その日の中に陸の上で起つた色々な出來事――色々な出來事と云つても、際立つて珍らしい事や面白い事は一つもない――を話し立てるのを、ぶつつり押し默つたまゝで聞きながら歩く。然しそれが何んといふ快さだらう。

然し君の家が近くなるにつれて妙に君の心を脅かし始めるものがある。それは近年引續いて君の家に起つた種種な不幸がさせる業だ。長病ひの後に良人に先立つた君の母上に始まつて、君の家族の周圍には妙に死といふものが執念くつき纒はつてゐるやうに見えた。君の兄上の初生兒も取られてゐた。汗水が凝り固まつて出來たやう

な銀行の貯金は、その銀行が不景氣のあふりを食つて破產した爲めに、水の泡になつてしまつた。命とかけがへの漁場が、間違つた防波堤の設計の爲めに、全然役に立たなくなつたのは前にも云つた通りだ。耐へ性のない人々の寄り集まりなら、身代が朽木のやうにがつくりと折れ倒れるのはありがちと云はなければならない。唯君の家では父上と云ひ、兄上と云ひ、根性骨の强い正直な人達だつたので、凡ての激しい運命を眞正面から受取つて、骨身を惜しまず働いてゐたから、曲つたなりにも今日々々を事缺かずに過してゐるのだ。然し君の家を襲つたやうな運命の壓迫は、そこいら中に起つてゐた。軒を竝べて住みなしてゐると、どこの家にもそれ相當な生計が立てられてゐるやうだけれども、一軒々々に立ち入つて見ると、この頃の岩內の町には鼻を酸くしなければならないやうな事がそこいら中にまくしあがつてゐた。ある家は眼に立つて零落してゐた。嵐に吹きちぎられた屋根板が、いつまでもそのまゝで雨の漏れるに任せた所も尠くない。眼鼻立ちの揃つた年頃の娘が、嫁入つたといふ噂もなく姿を消してしまふ家もあつた。立派に家框が立ち直つたと思ふとその家は代が替つたりしてゐた。そろ〳〵と地の中に引きこまれて行くやうな薄氣味惡い零落の兆候が町全體に何處となく漂つてゐるのだ。

人々は暗々裡にそれに脅かされてゐる。何時どんな事がまくし上るかも知れない――さういふ不安は絕えず君達の心を重苦しく押しつけた。家から火事を出すとか、家から出さないまでも類燒の災難に遇ふとか、持船が沈んでしまふとか、働き盛りの兄上が死病に取りつかれるとか、鰊の群來がすつかり外れるとか、ワク船が流されるとか、色々に想像されるこれ等の不幸の一つだけに出喰はしても、君の家に取つては、足腰の立たない打擊となるのだ。疲れた五體を家路に運びながら、而して馬鹿に建物の大きな割合に、それにふさはない暗い灯でそこと知られる柾葺きの君の生れた家屋を眼の前に見やりながら、君の心は運命に對する疑ひの爲めに妙におくれ勝ちになる。

それでも閾を跨ぐと土間の隅の竈には火が暖い光を放つて水飴のやうに軟かく撓ひながら燃えてゐる。どこからどこまで眞黑に煤けながら、だゞつ廣い圍爐裡の間はきちんと片付けてあつて、居心よさゝうにしつらへてある。嫂や妹の心づくしを君はすぐ感じてうれしく思ひながら、持つて歸つた漁具――寒さの爲めに凍り果てゝ、觸れ合へば石のやうに音を立てる――をそれ〴〵の處に始末すると、是れもから〳〵と音を立てる程凍り果てた仕事着を一枚々々脫いで、竈のあたりに懸けつらねて、不斷着に着かへる。一日の寒氣に凍え切つた肉體はすぐ熱を吹き出して、顏などはのぼせ上る程ぽか〳〵して來る。不斷着の輕い暖かさ、一椀の熱湯の味のよさ。

小氣味よい程したゝか夕餉を食つた漁夫達が、

「親方さんお休み」

と挨拶してぞろ〳〵出て行つた後には、水入らずの家族五人が、圍爐裡の火に眞赤に顏を照らし合ひながらさし向ひになる。戶外ではさら〳〵と音を立てゝ霰まじりの雪が降りつゞけてゐる。七時といふのにもうその界隈は夜更け同樣だ。どこの家もしいんとして赤子の泣く聲が時折り聞こえるばかりだ。唯遠くの遊廓の方から、朝寢の出來る人達が寄り集まつてゐるらしい醉狂のさゞめきだけが途切れ〳〵に風に送られて傳はつて來る。

「俺らはあ寢まるぞ」

僅かな晩酌に晝間の疲勞を存分に發して、眼をとろんこにした君の父上が、まづ圍爐裡の側に床をとらして橫になる。やがて兄上と嫂とが次の部屋に退くと、圍爐裡の側には、君と君の妹だけが殘るのだ。時が靜かに淋しく、然し睦じくじり〳〵と過ぎて行く。

「寢ずに」

針の手をやめて、君の妹はおとなしく顏を上げながら君に云ふ。

「先に寢れ、いゝから」
胡坐(あぐら)の膝の上にスケッチ帖を擴げて、と見かう見してゐる君は、振り向きもせずに、ぶつきらぼうにさう答へる。
「朝げに又眠むいとつてこづき起されべえに」につと片頰に笑みを湛へて妹は君に惡戯らしい眼を向ける。
「何んの」
「何んのでねえよ、そんだもの見こくつて何んのたしになるべえさ。皆んなよつて笑つとるでねえか、兪の兄(あん)さんこと暇さへあれば見つたくもない畫べえ描いて、何んするだべつて」
君は思はず顏をあげる。
「誰が云つた」
「誰つて……皆んな云つてるだよ」
「お前もか」
「わしは云はねえ」
「さうだべさ。それならそれでいゝでねえか。譯のわかんねえ奴さ何んとでも云はせておけばいゝだ。これを見たか」
「見たよ。……莊園の裏から見た所だなあそれは。山はわし氣に入つたども、雲が黒過ぎるでねえか」
「差出口はおけやい」
而して君達二人は顏を見合つて溶けるやうに笑み交はす。寒さはしん〳〵と脊骨まで徹つて、戸外には風の落ちた空を默つて雪が降り積んでゐるらしい。
今度は君が發意する。

「おい寢べえ」

「兄さん先に寢なよ」

「お前寢べし……明日又一番に起きるだから……戸締りは俺らがするに」

二人はわざと意趣に爭つてから、妹はとう〳〵先に寢る事にする。君はなほ半時間ほどスケッチに見入つて居たが、寒さに堪へ切れなくなつてやがて身を起すと、藁草履を引つかけて土間に降り立ち、竈の火許を十分に見屆け、漁具の整頓を一わたり注意し、入口の戸に錠前を卸し、雪の吹きこまぬやう窓の隙間をしつかりと閉ぢ、而して又圍爐裡座に歸つて見ると、ちよろ〳〵と燃えかすれた根粗朶の火に朧ろに照らされて、君の父上と妹とが爐緣の二方に寢くるまつてゐるのが物淋しく眺められる。一日々々生命から遠ざかつて行く老人と、若々しい生命の力に惱まされてゐるとさへ見える妹との寢顏は、明滅する焰の前に幻のやうな不思議な姿を描き出す。この老人の老先きをどんな運命が待つてゐるのだらう。この處女の行末をどんな運命が待つてゐるのだらう。未來は凡て暗い。そこではどんな事でも起り得る。君は二人の寢顏を見つめながらつく〴〵とさう思つた。さう思ふにつけて、その人達の行末については、素直な心で幸あれかしと祈る外はなかつた。人の力と云ふものがこんな嚴肅な瞬間には一番便りなく思はれる。

君はスケッチ帖を枕許に引きよせて、垢染みた床の中にそのまゝもぐり込みながら、氷のやうな布團の冷たさが體の溫みで暖まるまで、まじ〳〵と眼を見開いて、君の妹の寢顏を、憐れみとも愛ともつかぬ涙ぐましい心持で眺めつゞける。それは君が妹に對して幼少の時から何かの折りに必ず抱くなつかしい感情だつた。

それもやがて疲勞の夢が押し包む。

今岩内の町に目覺めてゐるものは、恐らく朝寢坊の出來る富んだ惰け者と、燈臺守と犬位のものだらう。夜

は寒く淋しく更けて行く。

八

君、君はこんな私の自分勝手な想像を、私が文學者であると云ふ事から許してくれるだらうか。私の想像は後から後からと引き續いて湧いて來る。それが中(あた)つてゐようが中つてゐまいが、君は私がかうして筆取るその目論見に惡意のない事だけは信じてくれるだらう。而して無邪氣な微笑を以て、私の唯一の生命である空想が勝手次第に育つて行くのを見守つてゐてくれるだらう。私はそれに賴つて更に書き續けて行く。

鰊の漁期――それは北方に住む人の胸にのみしみ〴〵と感ぜられるなつかしい季節の一つだ。この季節になると長く地の上を領してゐた冬が老いる。――北風も、雪も、圍爐裡も、綿入れも、雪鞋(つまご)も、等しく老いる。一片の雲のたゝずまひにも、自然の目論見と豫言とを人一倍鋭敏に見て取る漁夫達の眼には、朝夕の空の模樣が春めいて來た事をまざ〳〵と思はせる。北西の風が東に廻るにつれて、單色に堅く凍りついてゐた雲が、蒸されるやうにもや〳〵と崩れ出して、淡いながら暖い色の晴雲に變つて行く。朝から風もなく晴れ渡つた午後なぞに波打際に出て見ると、やゝ綠色を帶びた青空の遙か遠くの地平線高く、幔幕を眞一文字に張つたやうな雪雲の堆積に日が射して、萬遍なく薔薇色に輝いてゐる。何んと云ふ美妙な美しい色だ。冬はあすこまで遠退いて行つたのだ。さう思ふと、不幸を突き拔けて幸福に出遇つた人のみが感ずる、あの過去に對する寛大な思ひ出が、ゆるやかに濱に立つ人の胸に流れこむ。五ケ月の長い嚴冬を牛のやうに忍耐強く辛抱しぬいた北人の心に、もう少しでひねくれた根性にさへなり兼ねた北人の心に、春の約束がほの〴〵と惠み深く響き始める。

朝晩の凍(し)み方は大して冬と變りはない。濡れた金物がべた〳〵と糊のやうに指先に粘(ねば)りつく事は珍らしくな

い。けれども日が高くなると、さすがに何處か寒さにひゞがいる。濱邊は急に景氣づいて、納屋の中からは大釜や締框が擔ぎ出され、ホック船やワク船をつとのやうに蔽うてゐた蓆が取りのけられ、旅鳥と一緒に集まつて來た漁夫達が、綾を織るやうに雪の解けた砂濱を行き違つて目まぐるしい活氣を見せ始める。

鱈の漁獲が一先づ終つて、鰊の先驅もまだ群來て來ない。海に出て働く人達はこの間に少しの間息をつく暇を見出すのだ。冬の間から一心に覗つてゐたこの暇に、君は或る日朝からふいと家を出る。勿論懐ろの中には手馴れたスケッチ帖と一本の鉛筆とを潜まして。

家を出ると往來には漁夫達や、女でめん（女勞働者）や、海産物の仲買と云つたやうな人々が賑かに浮き〳〵して行つたり來たりしてゐる。根雪が氷のやうに磐になつて、その上を雪解の水が、一冬の塵埃に染つて、泥炭地の湧き水のやうな色でどぶ〳〵と漂つてゐる。馬橇に材木のやうに大きな生々しい薪をしこたまに積み載せて、その惡路を引つぱつて來た一人の年配な内儀さんは、君を認めると、引綱をゆるめて腰を延ばしながら、戯れた調子で大きな聲をかける。

「はれ兄さんもう濱さ行くだね」

「うんにや」

「濱で無え？　たら又山かい。魚を商賣にする人が暇さへあれば山さ突つぱしるだから怪體だあてばさ。いゝ人でもゐるだんべさ。は、は、は、……。うんすら妬いてこすに、一押し手を貸すもんだよ」

「口はゞつたい事べ云ふと鰊様が群來てはくんねえぞ。をかしな婆様よなあお前も」

「婆様だ!?　人聞きの惡い事べ云はねえもんだ。人様が笑ふでねえか」

實際この内儀さんの喋いだ雜言には往來の人達が面白がつて笑つてゐる。君は當惑して、橇の後ろに廻つて三

四間ぐん／＼押してやらなければならなかつた。

「そだ。そだ。兄さんいゝ力だ。濱まで押してくれたら己らお前に惚れてこすに」

君は惘れて橇から離れて逃げるやうに行手を急ぐ。面白がつて二人の問答を聞いてゐた群集は思はず一度にどつと笑ひ崩れる。人々のその高笑ひの聲にまじつて、內儀さんがまた誰かに話しかける大聲がのびやかに聞こえて來る。

「春が來るのだ」

君は何につけても好意に滿ちた心持でこの人達を思ひやる。

やがて漁師町をつきぬけて、この市街では目ぬきな町筋に出ると、冬中空屋になつてゐた西洋風の二階建の雨戶が繰り開けられて、札幌の或る大きなデバートメント・ストアの臨時出店が開かれようとしてゐる。藁屑や新聞紙のはみ出た大きな木箱が幾個か店先に抛り出されて、廣告のけば／＼しい色旗が、活動小屋の前のやうに立て列べてある。而して氣の利いた手代が十人近くも忙がしさうに働いてゐる。君はこの大きな臨時の店が、岩內中の小賣商人にどれ程の打擊であるかを考へながら、自分達の漁獲が、資本のない爲めに、外の土地から投資された海產物製造會社によつて捨て値で買ひ取られる無念さをも思はないではゐられなかつた。「大きな手には摑まれる」……さう思ひながら君はその店の角を曲つて割合にさびれた横町にそれた。

その横町を一町も行かない所に一軒の藥種店があつて、それにつゞいて小さな調劑所がしつらへてあつた。君はそこのガラス窓から中を覗いて見る。ずらつと列べた藥種瓶の下の調劑卓の前に、凭れのない抉拔きの事務椅子に腰かけて、黑い事務マントを羽織つた悒鬱さうな小柄な若い男が、一心に小形の書物に讀み耽つてゐる。それはKと云つて、君が岩內の町に持つてゐる唯一人の心の友だ。君はくすんだ硝子板に指先を持つて行つてほと

ほとと敲く。Kは機敏に書物から眼を擧げてこちらを振りかへる。而して驚いたやうに座を立つて來て硝子障子を開ける。

「何處に」

君は默つたまゝ懷中からスケッチ帖を取り出して見せる。而して二人は互に理解するやうに微笑みかはす。

「君は今日は出られまい」

君は東京の遊學時代を記念する爲めに、大事にとつて置いた書生の言葉を使へるのが、この友達に會ふ時の一つの樂しみだつた。

「駄目だ。この頃は漁夫で岩内の人數が急に殖えたせゐか忙はしい。然し今日はまだ寒いだらう。手が自由に動くまい」

「何、畫は描けずとも山を見てゐればそれでいゝだ。久しく出て見ないから」

「僕は今これを讀んでゐたが（と云つてKはミケランジェロの書翰集を君の眼の前にさし出して見せた）素晴らしいもんだ。かうしてゐてはいけないやうな氣がするよ。だけれども迚も及びもつかない。いゝ加減な藝術家と云ふものになつて納まつてゐるより、この薄暗い藥局で、默りこくつて一生を送る方が矢張り僕には似合はしいやうだ」

さう云つて君の友は、悒鬱な小柄な顏を一際（ひときは）悒鬱にした。君は勵ます言葉も慰める言葉も知らなかつた。而して心尤（とが）めするものゝやうにスケッチ帖を懷ろに納めてしまつた。

「ぢや行つて來るよ」

「さうかい。そんなら歸りには寄つて話して行き給へ」

この言葉を取り交はして、君はその薄汚れたガラス窓から離れる。

南へ〳〵と道を取つて行くと、節婦橋と云ふ小さな木橋があつて、そこから先にはもう家並は續いてゐない。溝泥を捏ね返したやうな雪道は段々綺麗になつて行つて、地面に近い所が水になつてしまつた積雪の中に、君の古い兵隊長靴はやゝともするとすぽり〳〵と踏み込んだ。

雪に蔽はれた野は雷電峠の麓の方へ爪先上りに擴がつて、折から晴れ氣味になつた雲間を漏れる日の光が、地面の蔭日向を銀と藍とでくつきりと彩つてゐる。寒い空氣の中に、雪の照り返しがかつ〳〵と顔を火照らせる程強く射して來る。君の顔は見る〳〵雪焼けがして眞赤に汗ばんで來た。今まで巖丈に被つてゐた頭巾をはねのけると、眼界は急に遙々と擴がつて見える。

何んと云ふ宏大な嚴かな景色だ。膽振の分水嶺から分れて西南を指す一連の山波が、地平から力強く伸び上つて段々高くなりながら、岩内の南方へ走つて來ると、そこに圖らずも陸の果てがあつたので、突然水際に走りよつた奔馬が、揃へた前脚を踏み立てゝ、思はず平頸を高く聳かしたやうに、山は急にそゝり立つて、沸騰せんばかりに天を摩してゐる。今にもすさまじい響を立てゝ崩れ落ちさうに見えながら、何百萬年か何千萬年か、昔のまゝの姿でそゝり立つてゐる。而して今は唯一色の白さに雪で被はれてゐる。而して雲が空を動く度每に、山は居住ひを直したかのやうに姿を變へる。君は久し振りで近々とその山を眺めるともう有頂天になつた。而して餘の事は綺麗に忘れてしまふ。

君は唯一途にがむしやらに本道から道のない積雪の中に足を踏み入れる。行手に黒ずんで見える楡の切株の所まで腰から下まで雪に塗れて辿り着くと、君はそれに兵隊長靴を打ちつけて脚の雪を拂ひ落しながら佇む。而して眼を据ゑてもう一度雪野の果てに聳え立つ雷電峠を物珍らしく眺めて魅入られたやうに茫然となつてしまふ。

幾度見ても倦きる事のないたゝずまひが、この前見た時と相違のある筈はないのに、全く異つた表情を以て君の眼に映つて來る。この前見に來た時は、それは嚴冬の一日のことだつた。矢張り今日と同じ處に立つて、凍える手に鉛筆を運ぶ事も出來ず、默つたまゝ立つて見てゐたのだつたが、その時の山は地面から靜々と盛り上つて、雪雲に閉された空を確かと摑んでゐるやうに見えた。その感じは恐ろしく執念深く力強いものだつた。君はその前に立つて押しひしやげられるやうな威壓を感じた。今日見る山はもつと素直な大さと豐かさとを以て靜かに君を搔き抱くやうに見えた。不斷自分の心持が誰からも理解されないで、一種の變屈人のやうに人々から取り扱はれてゐた君には、此の自然が君に對して求めて來る親しみはしみじみとしたものだつた。君はまた更に眼を擧げて、なつかしい友に向ふやうに沁々と山の姿を眺めやつた。

丁度親しい心と心とが出遇つた時に、互に感ぜられるやうな溫かい涙ぐましさが、君の雄々しい胸の中に湧き上つて來た。自然は生きてゐる。而して人間以上に強く高い感情を持つてゐる。君には同じ人間の語る言葉だが英語は解らない。自然の語る言葉は英語よりも遙かに君には解りいゝ。或る時には君が使つてゐる日本語そのものよりももつと感情の表現の豐かな平明な言葉で自然が君に話しかける。君はこの涙ぐましい心持を描いて見ようとした。

そして懷中からいつものスケッチ帖を取り出して切株の上に置いた。開かれた手帳と山とをかたみがはりに見やりながら、君は丹念に鉛筆を削り上げた。而して粗末な畫學紙の上には、逞ましく荒くれた君の手に似合はない纖細な線が描かれ始めた。

丁度人の肖像を描かうとする畫家が、その人の耳目鼻口をそれぞれ綿密に觀察するやうに、君は山の一つの皺一つの襞にも君だけが理解すると思へる意味を見出さうと努めた。實際君の眼には山の凡ての面は、そのまゝ凡

ての表情だつた。日光と雲との明暗(キャヽスキュロ)に彩られた雪の重なりには、熱愛を以て見極めようと努める人々にのみ說き明かされる貴い謎が潛めてあつた。君は一つの謎を解き得たと思ふ毎に、小躍りしたい程の喜びを感じた。君の周圍には今はもう生活の苦情もなかつた。世間に對する不安も不幸もなかつた。自分自身に對するおくれ勝ちな疑ひもなかつた。子供のやうな快活な無邪氣な一本氣な心……君の唇からは知らず／＼輕い口笛が漏れて、君の手は躍るやうに調子を取つて、紙の上を走つたり、山の大さや角度を計つたりした。

　さうして幾時間が過ぎたらう。君の前には「時」といふものさへなかつた。やがて一つのスケッチが出來上つて、輕い滿足の溜息と共に、働かし續けてゐた手をとめて、片手にスケッチ帖を取り上げて眼の前に据ゑた時、君は輕い疲勞――輕いと云つても、君が船の中で働く時の半日分の勞働の結果よりは輕くない――を感じながら、今日が仕事のよい收穫であれかしと祈つた。畫學紙の上には、吹き變る風の爲めに亂れがちな雲の間に、その頂を見せたり隱したりしながら、眞白にそゝり立つ峠の姿と、その手前の廣い雪の野のこゝかしこに叢立つ針葉樹の木立や、薄く炊煙を地に靡かして處々に立つ慘(みじ)めな農家、是等の間を鋭い刃物で斷ち割つたやうな深い峽間(はざま)、それ等が特種な深い感じを以て特種な筆觸で描かれてゐる。君はやゝ暫くそれを見やつて微笑ましく思ふ。久振りで自分の隱れた力が、哀れな道具立てによつてゞはあるが、兎に角形を取つて生れ出たと思ふと嬉しいのだ。

　然しながら狐疑は待ちかまへてゐたやうに、君が滿足の心を十分味ふ暇もなく、足許から押し寄せて來て君を不安にする。君は自分に諛(へつら)ふものに對して警戒の眼を向ける人のやうに、自分の滿足の心持を嚴しく調べてかゝらうとする。そして今描き上げた畫を容赦なく山の姿と較べ始める。

　自分が滿足だと思つた所は何處にあるのだらう。それは謂はゞ自然の影繪に過ぎないではないか。向うに見える山はその儘寛大と希望とを象徵するやうな一つの生きた塊的(マッス)であるのに、君のスケッチ帖に縮め込まれた同じ

もの〻姿は、何んの表情も持たない線と面との集まりとより君の眼には見えない。

この悲しい事實を發見すると君は躍起となつて次ぎのページをまくる。而して自分の心持を一際謙遜な、而して執着の强いものにし、粘り强い根氣でどうかして山をそのまゝ君の畫帖の中に生かし込まうとする、新たな努力が始まると、君はまた凡ての事を忘れ果てゝ一心不亂に仕事の中に魂を打ち込んで行く。而して君が晝辨當を食ふ事も忘れて、四枚も五枚ものスケッチを作つた時には、もう大分日は傾いてゐる。

然しとてもそこを立ち去る事は出來ない程、自然は絕えず美しく蘇つて行く。朝の山には朝の命が、晝の山には晝の命があつた。夕方の山には又しめやかな夕方の山の命がある。山の姿は、その線と蔭日向とばかりでなく、色彩にかけても、日が西に廻ると素晴らしい魔術のやうな不思議を現はした。峠の或る部分は鋼鐵のやうに寒く硬く、また他の部分は氣化した色素のやうに透明で消え失せさうだ。夕方に近づくにつれて、やゝ煙り始めた空氣の中に、聲も立てずに肅然と聳えてゐるその姿には、汲んでも〳〵盡きない平明な神祕が宿つてゐる。見ると山の八合目と覺しい空高く、小さな黑い點が靜かに動いて輪を描いてゐる。それは一羽の大鷲に違ひない。眼を定めてよく見ると、長く伸ばした兩の翼を微塵も動かさずに、身體全體をやゝ斜めにして、大きな水の渦に乘つた枯葉のやうに、その鷲は靜かに伸びやかに輪を造つてゐる。山が物云はんばかりに生きてると見える君の眼には、この生物は却つて死物のやうに思ひなされる。況してや平原の處々に散在する百姓家などは、山が人に與へる生命の感じに較べれば、慘めな幾個かの無機物に過ぎない。

晝は眞冬からは著しく延びてゐるけれども、もう夕暮の色はどん〳〵催して來た。それと共に肌身に寒さも加はつて來た。落日に彩られて光を呼吸するやうに見えた雲も、煙のやうな白と淡藍との影日向を見せて、雲と共に大空の半分を領してゐた山も、見る〳〵寒い色に堅くあせて行つた。而して靄とも云ふべき薄い膜が君と自然

との間を隔てはじめた。

君は思はず溜息をついた。云ひ解きがたい暗愁――それは若い人が戀人を思ふ時に、その戀が幸福であるにもかゝはらず、胸の奥に感ぜられるやうな――が不思議に君を涙ぐましくした。君は鼻をすゝりながら、ぱたんと音を立てゝスケッチ帖を閉ぢて、鉛筆と一緒にそれを懷ろに納めた。凍てた手は懷ろの中の溫味をなつかしく感じた。辨當は食ふ氣がしないで、切株の上からそのまゝ取つて腰にぶらさげた。半日立ち盡した脚は、動かさうとすると電氣をかけられたやうに痺れてゐた。やう〳〵の事で君は雪の中から爪先をぬいて一歩々々本道の方へ歸つて行つた。遙か向うを見ると山から木材や薪炭を積み下ろして來た馬橇がちらほらと動いてゐて、馬の首につけられた鈴の音が冴えた響きをたてゝ幽かに聞こえて來る。それは漂浪の人が遙かに故郷の空を望んだ時のやうなつかしい感じを與へる。その消え入るやうな、淋しい、冴えた音が殊になつかしい。不思議な誘惑の世界から突然現世に歸つた人のやうに、君の心はまだ夢心地で、藝術の世界と現實の世界との淡々しい境界線を辿つてゐるのだ。而して君は歩きつゞける。

何時の間にか君は町に歸つて例の調劑所の小さな部屋で、友達のKと向き合つてゐる。Kは君のスケッチ帖を興奮した眼付で彼處此處見返してゐる。

「寒かつたらう」

とKが云ふ。君はまだ本當に自分に歸り切らないやうな顏付で、

「うむ。……寒くはなかつた。……その線の鈍つてゐるのは寒かつたからではないんだ」

と答へる。

「鈍つてゐはしない。君がすつかり何もかも忘れてしまつて、駈けまはるやうに鉛筆をつかつた樣子がよく見え

るよ。今日のは皆んな非常に僕の氣に入つたよ。君も少しは滿足したらう」
「實際の山の形に較べて見給へ。……僕は親父にも兄貴にもすまない」
と君は急いで言ひわけをする。
「何んで？」
Kは怪訝さうにスケッチ帖から眼を上げて君の顏をしげ〳〵と見守る。
君の心の中には苦い灰汁のやうなものが湧き出て來るのだ。漁にこそ出ないが、本當を云ふと、漁夫の家には一日として安閑としていゝ日とてはないのだ。今日も、君が一日を畫に暮らしてゐた間に、君の家では家中で忙しく働いてゐたのに違ひないのだ。建網に損じの有る無し、網をおろす場所の海底の模樣、大釜を据ゑるべき位置、棧橋の改造、薪炭の買入れ、米鹽の運搬、仲買人との契約、肥料會社との交渉……その外鰊漁の始まる前に漁場の持主がして置かなければならない事は有り餘る程あるのだ。
君は自分が畫に親しむ事を道樂だとは思つてゐない。ゐない所か、君に取つてはそれは、生活よりも更に嚴肅な仕事であるのだ。然し自然と抱き合ひ、自然を畫の上に活かすといふ事は、君の住む所では君一人だけが知つてゐる喜びであり悲しみであるのだ。外の人達は――君の父上でも、兄妹でも、隣り近所の人でも――唯不思議な子供じみた戲れとよりそれを見てゐないのだ。君の考へ通りをその人達の頭の中にたんのうが出來るやうに打ちこむといふのは思ひも及ばぬ事だ。
君は理窟では何等恥づべき事がないと思つてゐる。然し實際では決してさうは行かない。藝術の神聖を信じ、藝術が實生活の上に玉座を占むべきものであるのを疑はない君も、その事柄が君自身に關係して來ると、思はず知らず足許がぐらついて來るのだ。

「俺が藝術家であり得る自信さへ出來れば、俺は一刻の躊躇もなく實生活を踏みにじつても、親しいものを犧牲にしても、歩み出す方向に歩み出すのだが……家の者共の實生活の眞劍さを見ると、俺は自分の天才をさう易々と信ずる事が出來なくなつてしまふんだ。俺のやうなものを描いてゐながら彼等に藝術家顏をする事が恐ろしいばかりでなく、僭越な事に考へられる。俺はこんな自分が恨めしい、而して恐ろしい。皆んなはあれ程心から滿足して今日々々を暮してゐるのに、俺だけは丸で陰謀でも企らんでゐるやうに始終暗い心をしてゐなければならないのだ。どうすればこの苦しさこの淋しさから救はれるのだらう」

平常のこの考へがKと向ひ合つても頭から離れないので、君は思はず「親父にも兄貴にもすまない」と云つてしまつたのだ。

「どうして？」と云つたKも、君もそのまゝ默つてしまつた。Kには、物を云はれないでも、君の心はよく解つてゐたし、君は又君で、自分は綺麗に諦めながら何處までも君を藝術の捧誓者たらしめたいと熱望する、Kの淋しい、自己を滅した、溫い心の働きをしつくりと感じてゐたからだ。

君等二人の眼は悒鬱な熱に輝きながら、互に瞳を合はすのを憚るやうに、やゝ燃えかすれたストーヴの火を眺め入る。

さうやつて默つてゐる中に君はたまらない程淋しくなつて來る。自分を憐れむともKを憐れむとも知れない哀情がこみ上げて、Kの手を取り上げて撫でゝ見たい衝動を幾度も感じながら、女々しさを退けるやうにむづかゆい手を腕の所で堅く組む。

ふと煤けた天井から垂れ下つた電球が光を放つた。驚いて窓から見るともう往來は眞暗になつてゐる。冬の日の舂き隱れる早さを今さらに君はしみじみと思つた。掃除の行き屆かない電球は埃と手垢とで殊更暗かつた。そ

れが部屋の中をなほ悒鬱にして見せる。

「飯だぞ」

Kの父の荒々しい甲走つた聲が店の方から如何にも突慳貪に聞こえて來る。不斷から自分の一人息子の惡友でもあるかの如く思ひなして、君が行くと曾て機嫌のいゝ顏を見せた事のないその父らしい聲だつた。Kは一寸反抗するやうな顏付をしたが、陰性なその表情を益々陰性にしたゞけで、きぱ〳〵と盾をつく樣子もなく、父の心と君の心とを窺ふやうに聲のする方と君の方とを等分に見る。

君は長座をしたのがKの父の氣に障つたのだと推すると座を立たうとした。然しKはさういふ心持に君をしたのを非常に物足らなく思つたらしく、君にも是非夕食を一緒にしろと勸めてやまなかつた。

「ぢや僕は晝の辨當を喰はずにこゝに持つてるからこゝで喰はうよ。遠慮なく濟まして來たまへ」

と君は云はなければならなかつた。

Kは夕食を君に勸めながら、ほんたうはそれを兩親に打ち出して云ふ事を非常に苦にしてゐたらしく、さればとてまづい心持で君を還すのも堪へられないと思ひなやんでゐたらしかつたので、君の言葉を聞くと活路を見出したやうに、少し顏を晴れ〳〵させて調劑室を立つて行つた。それも思へば一家の貧窮がKの心に沁み渡つたしるしだつた。君は獨りになると、段々暗い心になり增るばかりだつた。

それでも夕飯といふ聲を聞き、戸の隙から漏れる燒魚の匂をかぐと、君は急に空腹を感じ出した。而して腰に結び下げた辨當包を解いてストーヴに寄り添ひながら、椅子に腰かけたまゝの膝の上でそれを開いた。

北海道には竹がないので、竹の皮の代りにへぎで包んだ大きな握飯はすつかり凍てゝしまつてゐる。春立つた時節とは云ひながら一日寒空に、切株の上にさらされてゐたので、飯粒は一粒々々ぼろ〳〵に固くなつて、持つ

た手の中から零れ落ちる。試みに口に持つて行つて見ると米の持つ甘味はすつかり奪はれてゐて、無味な纖維のかたまりのやうな觸覺だけが冷たく舌に傳はつて來る。

君の眼からは突然、君自身にも思ひもかけなかつた熱い淚がほろ〳〵とあふれ出た。ぢつと坐つたまゝではゐられないやうな寂寥の念が眞暗に胸中に擴がつた。

君はそつと座を立つた。而して辨當を元通りに包んで腰にさげ、スケッチ帖を懷ろにねぢこむと、こそ〳〵と入口に行つて長靴をはいた。靴の皮は夕方の寒さに凍つて鐵板のやうに堅く冷たかつた。

雪は燐のやうなかすかな光を放つて、眞黑に暮れ果てた家々の屋根を被うてゐた。淋しいこの橫町は人の影も見せなかつた。暫く步いて例のデパートメント・ストアの出店の角近くに來ると、一人の男の子がスケート下駄(下駄の底にスケートの齒をすげたもの)をはいて、でこぼこに凍つた道の上をがり〳〵と音をさせながら走つて來た。その兒はスケートに夢中になつて、君の側をすりぬけても君には氣が付いてゐないらしい。

「氷の上が辷れ出した時はほんとに夢中になるものだ」

君は自分の遠い過去を覗き込むやうに淋しい心の中にもかう思ふ。何事を見るにつけても君の心は痛んだ。

デパートメント・ストアの在る本通りに出ると打つて變つて賑やかだつた。電燈も急に明るくなつたやうに兩側の家を照らして、そこには店の者と購買者との影が綾を織つた。それは君に取つては、その場合の君に取つては、一つ〳〵見知らぬものばかりのやうだつた。そこいらから起る人聲や荷橇の雜音などがぴん〳〵と君の頭を針のやうに刺戟する。見物の前に引き出された見世物小屋の野獸のやうないらだゝしさを感じて、君は眉根の所に電光のやうに起る痙攣を小うるさく思ひながら、むづかしい顏をしてさつさと賑やかな往來を突きぬけて漁師町の方へ急ぐ。

然し君の家が見え出すと君の足はひとりでにゆるみ勝ちになつて、君の頭は知らず識らず、俯低くうなだれてしまつた。而して君は疑はしさうな眼を時々上げて、見知り越しの顔にでも遇ひはしないかと氣遣つた。然しこの界隈はもう靜まり返つてゐた。

「駄目だ」

突然君はかう小さく云つて往來の眞中に立ち停(どま)つてしまつた。さうして立ちすくんだその姿の首から肩、肩から背中に流れる線は、若しそこに見守る人がゐたならば、思はずぞつとして異常な憂愁と力とを感ずるに違ひない不思議に強い表現を持つてゐた。

暫く釘(くぎ)づけにされたやうに立ちすくんでゐた君は、やがて自分自身をもぎ取るやうに決然と肩をそびやかして歩き出す。

君は自分でも何處をどう歩いたか知らない。やがて君が自分に氣が付いて君自身を見出した所は海産物製造會社の裏の險しい崕を登りつめた小山の上の平地だつた。

全く夜になつてしまつてゐた。冬は老いて春は來ない――その壞れ果てたやうな荒涼たる地の上高く、寒さをかすかな光にしたやうな雲のない空が、氣息(いき)もつかずに、凝然として延び擴がつてゐた。色々な光度と色々な光彩でちりばめられた無數の星々の間に、冬の空の誇りなる參宿(オライオン)が、微妙な傾斜を以て三つならんで、何かの凶徵のやうに一際ぎら／＼と光つてゐた。星は語らない。たゞ遙かな山裾から、干潮になつた無月の潮騷(しほざゐ)が、海妖の單調な誘惑の歌のやうに、なまめかしく撫でるやうに聞こえて來るばかりだ。風が落ちたので、凍り付いたやうに寒く沈み切つた空氣は、この海のさゝやきの爲めに鈍く震へてゐる。

君はその平地の上に立つてぼんやりあたりを見廻してゐた。君の心の中には先程から恐ろしい企圖(たくらみ)が眼ざめて

ゐたのだ。それは今日に始まつた事ではない。ともすれば君の油斷を見すまして、泥沼の中からぬるりと頭を出す水の精のやうに、その企圖は心の底から現はれ出るのだ。君はそれを極端に恐れもし、憎みもし、卑しみもした。男と生れながら、そんな誘惑を感ずる事さへやくざな事だと思つた。然し一旦その企圖が頭を擡げたが最後、君は魅入られた者のやうに、藻掻き苦しみながらも、じり〳〵とそれを成就する爲めには、凡てを犧牲にしても悔いないやうな心になつて行くのだ、その恐ろしい企圖とは自殺する事なのだ。

君の心は妙にしいんと底冷えがしたやうに棘々しく澄み切つて、君の眼に映る外界の姿は突然全く表情を失つてしまつて、固い、冷たい、無慈悲な物の積み重なりに過ぎなかつた。無際限な唯一つの荒廢――その中に君だけが呼吸を續けてゐる、それが堪らぬ程淋しく恐ろしい事に思ひなされる荒廢が君の上下四方に擴がつてゐる。波の音も星の瞬きも、夢の中の出來事のやうに、君の知覺の遠い〳〵末梢に、感ぜられるともなく感ぜられるばかりだつた。凡ての現象がてん〴〵ばら〳〵に互の連絡なく散らばつてしまつた。その中で君の心だけが張りつめて死の方へとじり〳〵深まつて行かうとした。重錘をかけて深い井戸に投げ込まれた燈明のやうに、深みに行く程、君の心は光を增しながら、感じを強めながら、最後には死といふその冷たい水の表面に消えてしまはうとしてゐるのだ。

君の頭が痺れて行くのか、世界が痺れて行くのか、ほんたうに判らなかつた。恐ろしい境界に臨んでゐるのだと幾度も自分を警めながら、君は平氣な氣持でとてつもない呑氣な事を考へたりしてゐた。而して君は夜の更けて行くのも、寒さの募るのも忘れてしまつて、そろ〳〵と山鼻の方へ步いて行つた。

脚の下遠く黑い岩濱が見えて波の遠音が響いて來る。

唯一飛びだ。それで煩悶も疑惑も綺麗さつぱり帳消しになるのだ。

「家の者たちはほんたうに氣が違つてしまつたとでも思ふだらう。……頭が先にくだけるか知らん。足が先に折れるか知らん」

君は瞬きもせずにぼんやり崖の下を覗きこみながら、他人の事でも考へるやうに、さう心の中でつぶやく。

不思議な痺れはどん／＼深まつて行く。波の音なども少しづゝかすかになつて、耳に這入つたり這入らなかつたりする。君の心はたゞ一途に、眠り足りない人が思はず瞼をふさぐやうに、崖の底を目がけてまろび落ちようとする。危い……危い……他人の事のやうに思ひながら、君の心は君の肉體を崖の際から眞逆樣に突き落さうとする。

突然君は跳ね返されたやうに正氣に歸つて後ろに飛び退ざつた。耳をつんざくやうな鋭い音響が君の神經をわなゝかしたからだ。

ぎよつと驚いて今更のやうに大きく眼を見張つた君の前には平地から突然下方に折れ曲つた崖の縁が、地球の傷口のやうに底深い口を開けてゐる。そこに知らず／＼近づいて行きつゝあつた自分を省みて、君は本能的に身の毛をよだてながら正氣になつた。

鋭い音響は眼の下の海産物製造會社の汽笛だつた。十二時の交代時間になつてゐたのだ。遠い山の方からその汽笛の音はかすかな反響になつて、二重にも三重にも聞こえて來た。

もう自然はもとの自然だつた。いつの間にか元通りな崩壞したやうな淋しい表情に滿たされて涯もなく君の周圍に擴がつてゐた。君はそれを感ずると、ひたと底のない寂寥の念に襲はれ出した。男らしい君の胸をぎゆつと引きしめるやうにして、熱い涙が留度なく流れ始めた。君は唯獨り眞夜中の暗闇の中にすゝり上げながら、眞白に積んだ雪の上に蹲つてしまつた、立ち續ける力さへ失つてしまつて。

九

君よ!!

この上君の內部生活を忖度したり揣摩したりするのは僕のなし得る所ではない。それは不可能であるばかりでなく、君を瀆すと同時に僕自身を瀆す事だ。君の談話や手紙を綜合した僕のこれまでの想像は謬つてゐない事を僕に信ぜしめる。然し僕はこの上の想像を避けよう。兎も角君はかゝる內部の葛藤の激しさに堪へかねて、去年の十月にあのスケッチ帖と眞率な手紙とを僕に送つてよこしたのだ。

君よ。然し僕は君の爲めに何を爲す事が出來ようぞ。君とお會ひした時も、君のやうな人が――全然都會の臭味から免役されて、過敏な神經や過量な人爲的智見に煩はされず、强健な意力と、强靭な感情と、自然に哺まれた叡智とを以て自然を端的に見る事の出來る君のやうな土の子が――藝術の捧誓者となつてくれるのをどれ程望んだらう。けれども僕は喉まで出さうになる言葉を强ひて抑へて、凡てを擲つて藝術家になつたらいゝだらうとは君に勸めなかつた。

それを君に勸めるものは君自身ばかりだ。君が唯獨りで忍ばなければならない煩悶――それは痛ましい陣痛の苦しみであるとは云へ、それは君自身で苦しみ、君自身で癒さなければならぬ苦しみだ。

地球の北端――そこでは人の生活が、荒くれた自然の威力に壓倒されて、瘦地におとされた雜草の種子のやうに弱々しく頭を擡げてゐ、人類の活動の中心から見逃がされる程隔たつた地球の北端の一つの地角に、今、一つのすぐれた魂は惱んでゐるのだ。若し僕がこの小さな記錄を公けにしなかつたならば誰もこのすぐれた魂の惱みを知るものはないだらう。それを思ふと凡ての現象は恐ろしい神祕に包まれて見える。如何なる結果を齎らすか

も知れない恐ろしい原因は地球のどの隅つこにも隱されてゐるのだ。人は畏れないではゐられない。

君が一人の漁夫として一生を過すのがいゝのか、一人の藝術家として終身働くのがいゝのか、僕は知らない。それを輕々しく云ふのは餘りに恐ろしい事だ。それは神から直接君に示されなければならない。僕はその時が君の上に一刻も早く來るのを祈るばかりだ。

而して僕は、同時に、この地球の上のそこゝに君と同じい疑ひと惱みとを持つて苦しんでゐる人々の上に最上の道が開けよかしと祈るものだ。この切なる祈りの心は君の身の上を知るやうになつてから僕の心の中に殊に激しく强まつた。

ほんたうに地球は生きてゐる。生きて呼吸してゐる。この地球の生まんとする惱み、この地球の胸の中に隱れて生れ出ようとするものゝ惱み――それを僕はしみ〴〵と君によつて感ずる事が出來る。それは湧き出で跳り上る强い力の感じを以て僕を涙ぐませる。

君よ！　今は東京の冬も過ぎて、梅が咲き椿が咲くやうになつた。太陽の生み出す慈愛の光を、地面は胸を張り擴げて吸ひ込んでゐる。春が來るのだ。

君よ、春が來るのだ。冬の後には春が來るのだ。君の上にも確かに、正しく、力强く、永久の春が微笑めよかし……僕はたゞさう心から祈る。

（一九一八年四月、大阪毎日新聞に一部所載）

運命の訴へ

こんな事々しい表題は、私が假初(かりそめ)の思ひつきからつけたもので、この記錄の筆者には迷惑なことであるかも知れない。筆者はこの記錄を人の眼に觸れさすのをすら好まないのかも知れない。第一それは人に讀ませるやうに秩序立てゝ筆を運んでないし、處々には筆者が自身にすら隱しておきたかつたらうと思はれることが、自身以外の或る力に强ひられでもしたやうに、容赦なく書き連ねてあるから。

雨くづれのした銀灰色に曇つたまゝで、寒い風を間をおいて吹きおろして來る秋の末のある日に、私は上總國の一隅を獨りで旅し歩いてゐた。日が暮れるまゝにそのまゝ泊りこんだ小さな宿屋の隣室に相客が出來た。旅のつれ〴〵から二人はあひだの襖を開いて、夜おそくまで何といふこともない往來の雜談を取り交はした。その相客といふのは、年の頃二十六七位に見える背丈の勝れて高い、瘦形の青年で、灯影に面を伏せて陰鬱に默りこむかと思ふと、どうかして調子がつくと、無表情な、それでゐて聞手の心をいら〳〵させるやうな早口な言葉で、二十分も三十分も獨りで話しつゞけるのだ。顏には何處か女性的な所があつて、眼鼻立ちさへ尋常以上であるが、それが時折り恐ろしい程緊張して來ると、まともには見てゐられない位痛々しい樣子になるのだ。單に痛々しいといふばかりではない、そこには不思議な無氣味さがあつた。讀者にはそんな經驗はないだらうか、私には稀にある奇蹟なのだが、殊に夜など對座で話をしてゐる時、相手の顏が突然人間でなくなつてしまふことがあるのだ。といつて、それは私が見知つてゐる限りの獸物のどれにも鳥類のどれにも似て來るといふのではない。私には惡

いいたづらな癖があつて、見知り越しの人の顔を人間以外の動物の顔にあてはめて、その性質にまで共通點を見出さうとすることなどがあるが、この場合はそれとは違ふ。生れて始めて出遇ふやうな顔なのだ。そこにその人の顔はありながら、骨肉の部分が氣化してしまつて、輪廓だけが幻影の如くに殘り、而してその人を導いてゐる運命そのものが、その輪廓の中から凝然として話の相手なる私を睨みつけてゐる、とでもいふやうな顔付になるのだ。そんな瞬間には、私は思はず、體中の筋肉が一時に收縮するやうな恐怖の感じを受ける。幽靈といふものを私はまだ見たことがないが……讀者は私の經驗するやうな瞬間を想像することが出來ないだらうか。恐らく私のこの經驗話が暗示となつて、讀者にも今後かゝる瞬間が起らないとは限らない。その時、讀者は私の經驗が、どれ程奇怪な無氣味なものであるかを知ることが出來るだらう。

兎も角、その夜は私に取つては稀有な夜の一つだつた。その青年が緊張する度毎に（談話の筋からいふと、さう緊張する程のことでもなかつたのだが、それ程一人に取つて強いかゝはりのある事柄でもなかつたのだが）、私は不思議な例の壓迫を受けつゞけた。來たなと思つて、謂はゞ心の手で、私の眼の前に現はれ出た運命の凝視をむしるやうにかき亂して、その青年本來の顔に引き戻すことにやうやく成功したかと思ふと、不意にそれがまた無氣味な顔に變るのだ。夜が更けるにつれて、私はその青年と談話を續けてゐるのが苦痛になつて來た。そこでそれとなしに、私は次の日の出發が夙(はや)いといふことを話の中に匂はして見た。青年はどちらかといふと神經か鈍いはずの農家の子弟らしい風體はしてゐたが、察しよく自分の部屋の方に引き上げてしまつた。だが引き上げる前に、私の机の上に載せてあつた書きかけの原稿用紙と萬年筆とに眼をやつて、

「あなたは小説を書いていらつしやるんですか」

と正面を切つて、低い聲で私にいつた。原稿用紙と萬年筆だけで私が小説作者であるのが知れる譯がない。

だから。

私は及ぶだけ冗談事のやうに暢氣に問ひ返して見た。全く私はその時堪へ切れないほど無氣味にされてゐたの

「どうしてそれが判ります」

青年は私の笑顏に引きこまれることもなく、無表情な眼を今度は私の旅鞄につけてある名刺札に落して默つてゐた。私が小說をかく人間だといふのはそれで判つたのだなと思つた。それなら青年の言葉に何の不思議もない。私は、

「見つかりましたね」

といつて又笑つて見せた。笑ひながらかの無表情な青年と顏を見合せた。而して立ちどころに私はまた不思議な戰慄に襲はれた。

隣りの部屋ではこそとの音もしない。それをいつまでも意識せねばならぬほど私の眼は冴えてしまつてゐた。こそとの音もしないのは、隣りでも寢入つてゐない證據ではないか。寢入つたのなら鼾でもかすかに聞こえて來さうなものだ、と邪推して考へたりした。町ともいへないやうな片田舍の町は、夜の更けると共に靜まりかへつたが、それでもどこからか物音は傳はつて來た。遠い水車、近い鷄舍。自然の夜の沈默の中にも細々とした囁きを持ち續けてゐることが知れた。その中で、隣りの部屋だけは、眞空が出來たやうに寂寞としてゐた。あの青年は私の部屋を退くと同時に音もなく消え失せたのではないかとふと疑つて見たりした。溶けることを知らぬ氷のやうな靜かさに隣りして、私は眠りやらぬ眼を天井に向けてゐた。

四時の時計までは確かに聞いたが、それでも私は疲勞の爲めにいつの間にか寢入つてゐたと見える。何か物に脅かされたやうに思つて、驚いて眼を覺ました時、枕許の時計を見たら五時半になつてゐた。青年に匂はした言葉

の手前、今朝は早發足をしなければならぬといふ意識が働いたのだなと、臥ながら暫くあたりを見廻してゐる中にさう氣づいて、私は寒さの中に飛び起きた。室内の空氣は秋の末の田舍らしく冴え〲と冷えてゐた。跫音を忍んで便所にたち、歸りしなに隣りの部屋の氣配を窺つて見ると、依然として音もなく靜まり返つてゐる。私はその青年に惡意どころか好意をさへ持つてゐたが、たゞ何となく一刻も早く離れたかつたので、散らかしておいたものを片付けようとして机の前まで行くと、私はぎよつとして立ちすくまねばならなかつた。昨夜出し放しにしておいた原稿用紙の上に、見も知らぬ一冊のノート・ブックがおかれてあるではないか。きちんと原稿用紙に竝行して、眞黑に古ぼけた厚とぢのそのノート・ブックは、重々しいものゝやうに載せてあるのだ。あの青年が置き忘れたのかと思つたが、それにしては變だ。その夜青年は机の据ゑてある邊には一度も近寄つたことがなかつた。それにしても…… 私は思はず隣りの部屋を肩ごしに顧みた。その時又不思議な寒さが私の背筋を傳つて流れ下つた。

何は兎もあれ、宿の人に起きて貰はねばならぬと思つて、階子段を降りて見ると、この夙さに亭主と内儀さんとはもう眼を覺まして、店火鉢に向ひあつて火にあたつてゐた。半ば開け放した戸の隙間から見ると、屋外は一面の靄で寒々と閉されてゐた。

「もう起きてゐたんですか。昨夜云つておくとよかつたんだが、今朝は早く發ちたいから飯の用意を賴みます」

といふと内儀さんは物憂さうに鈍い聲で、

「いつでもおあがんなさい、出來てゐますから。今朝はこんなに早くから起されちまつて。もう發つたお客さんがあるんです」

と答へた。

「誰です」

「あなたのお隣りにゐたお客さんさ」

「何時發ちました」

「さあ五時頃でゞもあつたらうかね」

それでは丁度私が寢入つてゐた間のことだつたのだ。私は出し拔かれたやうな心持がして、すぐ二階にかけ上つて、いきなりかのノート・ブックを取り上げて見た。紙と紙との間からはフォルマリンのやうな强い藥物の香が散じて鼻を襲つた。頁といふ頁は細かいペン字でぎつしり埋めてあつて、その處々には色々な紙片に書き散らした備忘記錄のやうなものが挿んであつた。

その不思議な記錄こそは私がこれからこゝに轉載しようとするところのものだ。私は勿論手段を盡してそのノート・ブックを持主に還さうと試みた。第一の手がゝりと思はれる隣りの客の姓名住所は宿帳で調べて早速問合せの手紙を出した。私が發つて後、同宿の他の客達にも宿屋の亭主から尋ねさすことにしておいた。四日たつて私が再びその宿に歸つて來た時聞いて見たら、同宿の客の中にはその持主はゐなかつたし、手紙は空しく附箋がついて返送されてゐた。で、私は自分の部屋に見出されたのをいゝことにして、そのノート・ブックを貰ひ受けることにしたのだ。

だからこの記錄は誰が書いたものか本當は分らないのだが、私はたゞ何となくあの青年に違ひないと思ひこんでゐるのだ。その後私は勿論かの青年らしい人にもめぐり合つたことはない。恐らく永久に遇ふ折りはないだらう。思へばそれはもう六年も以前のことになる。今そのノート・ブックを取り出して見ると、フォルマリンのやうな香も拔けてしまひ、紙はやゝ黃味を帶びて粘り氣なく厚ぼつたい感じになつた。

あの青年はあの朝あんなに夙く宿を出て一體何處に行つてしまつたのだらう。あのノート・ブックが今頃に活字

になつたのを見たら何と思ふことだらう。……否、私は恐らく永久に彼に遇ふことはあるまいとたつた今書いたではないか。私は、少し馬鹿々々しいことだが、かう信じてゐるらしい。あの青年は、睡氣の拔け切らない宿屋の亭主と內儀さんとに送り出されて敷居を跨ぐと、一歩々々影が薄れて行つて、百歩も行かない中に、あの寒々とした秋の明方の靄の中に、永久に溶けこんで失はれてしまつたのではないか、と。

* * *

內外に開けたての出來る郵便局の表戸が、私の這入つたあと、彈條じかけで、がたん〳〵と振り動いてゐる。何といふことだ。塵で眞白になつた眞鍮の金網のむかうには、鈍間臭い女事務員がぼんやり坐つてゐる。何といふことだ。兄貴が死んだぞ。私の憎み切つてゐた兄貴が死んだぞ。私はその喜びを傳へるために、姉の所に電報を打ちに、この早いのに二里近い田舎道を自轉車を飛ばしてやつて來たんだ。それだのにどいつもこいつも知らん顏をしてゐやあがる……けれども知らん顏がし續けてゐられるものならして見るがいゝ。

おういと喚く。おういと木魂がする。おういと更に小さな木魂がする。おういと更に〳〵小さな木魂がする。さうして喚いた聲が消えてしまふ。……とでも思つてゐるのだらう。憚りながら消えてたまるものか。聲は消えやしない。聲が出た以上は消えやしない。億劫を經ようとも消えるものではない。

荒れすさんだ人生といふ曠野に私もおういといふ一喚きを喚いておくのだ。鈍間臭い女事務員が知らん顏してゐた所が、それが何の藥になるかい。

「アニケサ三ジシンダヨロコベ」

と私は電報用紙に頭に浮んだまゝを書きなぐつた。女事務員はそれを受取つて讀み下すと、始めて怪訝な眼をした平べつたい顏を私の方にふり向けた。そこで私は見たまゝのその女の肖像をこゝに描いておく。

その顔は、人形芝居の端役の操り人形のやうに、ひどく幅の廣い肩の上にちよこなんと小さく乘つてゐた。眼と鼻と口とが内所話でもしてゐるらしく、くしや〳〵と寄り集まつて、鼻の下には產毛が鬚のやうに生えてゐて、而もそれが透明な洟汁で濡れてゐた。眼から飛び離れてついてゐる眉毛の左の半分からかけて、でこ〳〵した束髮の生え際まで火傷でてら〳〵になつてゐた。それが臭さうな口を常習的に開け放しにして、驚いた時にあゝなるのだらうか、鈍い藪睨みの眼をぢつと据ゑたまゝ、瞬きもせずに私の顔を見つめてゐるのだ。彼女は驚いたに違ひないのだ。その癖、頑固にも知らん顔をしようとしてゐるのだ。兄貴があんな奴の世話になるのかと思ふと、私は不意に眼頭を熱くしてしまつた。

待てよ。これはその女事務員の肖像なものか。このI町そのものゝ肖像なのだ。刳り落したやうな高い崕の下から海岸まで、十四五町の幅を以て連なる平原の片隅に、崕にもたれかゝつて、くしや〳〵と簇生してゐる古ぼけた二百戸足らずの民家は、全くあの女事務員の顔の道具そのまゝだ。而して五十瀨の命の姉さんだかを祭つたお宮の鱗葺きの屋根と、七里法華とさへいはれるこの海岸つゞきには珍らしい念佛宗の阿彌陀寺の瓦屋根とが、藪睨みの眼のやうにどんよりと空を見つめてゐる。さういへばこの町の鼻の下と思はしい所には、葦の生え茂る濕地があつて、雨が降りでもすると赤鏽のやうなものゝぎら〳〵と浮く沮洳になるのだ。

而してこの町がまた、鈍さから來る無頓着さで、何事に對しても知らん顔をしてゐるではないか。

兄貴もこんな田舍にくすぶつて、二年近くも癇癪を起しつゞけて死なうとは思はなかつたらう。それを思ふとさすがに可哀さうになる。けれども可哀さうはお互だ。あの沒義道な兄貴もどうかした瞬間には私を可哀さうだと思つてゐたに違ひないのだ。私の家では銘々が外のものを可哀さうがつて今日まで暮してゐたのだ。それが私にはこの上もない壓迫だつたのだ。何がそんな心持を私達の心に釀し出したのだと考へると、私は怒つていゝの

か、泣いていゝのか、死んでいゝのか、生きてゐていゝのか判らなくなつてしまふんだ。こんな誇張したやうなことをいつても、云ひ足りない私達の運命は全く情けない。

「ヨロコベ」とは何んだ、と一週間も經(た)つてのこ〳〵東京から歸つて來た姉が私をきめつけたつけなあ。女といふものはどうしてあんな見え透いたことをいふものなのだらう。姉だつて喜ばずにゐられる譯はないのだが。

まあいゝ、人の事なぞはどうでもいゝ。

あれから又自轉車で宮の橋邊の道のいゝ緩傾斜を、げんげの花の咲き盛つた田圃を見渡しながら歸つて行つた私は、久し振りで深々と呼吸をすることが出來た。けれどもあの玉子屋の手前の片袖地藏尊の所まで來ると、もう心が暗くなつてしまつた。

都會の人間といふものは田舍の人間とは別な世界に住んでゐる變り種(だね)だ。田舍の人間が人間なら都會の人間は人間ではないのだ。都會の人間が人間なら田舍の人間は人間ではないのだ。それだのに都會の人間は、人間全體のことを一手に引き受けたやうな顏をして、そこに人類の文明といふものを作り上げた積りでゐる。思想といふものも都會の一手專賣なら、藝術といふものも都會の一手專賣だし、道德だつてさうなら、習慣だつてさうだ。その都會人が田舍のことを田園とか何とかいつて、樂園のやうな所に仕立て上げようとしてゐるのだ。成程田舍人はどれもこれも顏を見知つてゐて、道で遇へば挨拶もする。都會人が來れば謙遜らしく頭を低く下げて、手堅い應答(うけごたへ)をする。春には營々として田に下り立つて働いてゐるし、秋になれば家といふ家には納屋にも藏にも收穫物が積み入れられて、いかにも豐かな平和な姿を見せる。その邊までを一寸覗いた都會人は、有頂天になつて田舍を讃美するのだ。これは極く表面的な淺薄な手合である。然し少し前までは歌人といはれる藝術家が、物の眞相を最も銳く徹視すると考へられてゐる藝術家が、全く田舍が樂園であるかの如く讃美したものではないか。現在で

はかゝる古めかしい見方は餘程減じて來たらう。而も私のやうな田舍者から見れば矢張五十歩百歩なのだ。若し都會で生み出された思想なり、藝術なり、道德なりが本物だとするなら、田舍には思想もなければ、藝術もなければ、道德もありはしないのだ。

兎に角五六年都會の飯を喰つてゐた私にはあの片袖地藏尊を見るにつけて、私の家の在る谷內に住んでゐる十軒の百姓家で起つた忌はしいことが、つぎ〳〵に頭に浮んで來たのだ。十軒の中五軒までは私と同姓なのだ。

＊　　＊　　＊

丁度八つの年だつた。私のこの眼でちやんと見て、物珍らしい中にも、妙に氣味の惡い心持になつたのを覺えてゐる。古市場の學校に行く道で、外の子供達が物に怯えたやうに眼を丸くして噂し合つてゐるのを小耳に挾んで一目散に駈け出して、氣息を切らしながら、あの地藏尊の立つてゐる所まで來て見ると、もうそこには村の人たちが黑くなる程たかつて、興奮して話し合つてゐる。ひとりでにひそ〳〵と物をいふやうになつてゐるのだけれども、それががや〳〵と聞こえる程人だかりがしてゐた。私は物珍らしいまゝに人の間をかき分け〳〵、とう〳〵頭をあの古ぼけた石地藏の鼻先に突き出した。自分が日頃村の人達から遠々しく扱はれてゐることなどは忘れてしまつてゐたし、村の人達も私の顏を見ながら不斷の仕向け方はしなかつた。見ると紅絹裏のついた、田舍にしては晴衣といつていゝ綿入れの片袖の、袖つけがびり〳〵に裂けたのを、袖口からすつぽりと涎掛のやうにその地藏樣の頭にはめてあるのだ。霜どけがし始めて、一面の畑が紫がゝつて見えるやうな寒い朝だつた。大人の人たちのいふ言葉に私は熱心に耳を傾けて見たりしたが、この不思議な光景の本當の原因といふやうなものは理解が出來なかつた。兎に角、左五郎のお上さんが堰に身を投げて死んだといふことだけはわかつた。あのお上さんは顏は中凹みな意地の强さうな人だつた。人ずきも惡く言葉には愛想がなかつたが、私は何んだか嫌ひではなかつた。

人の見てゐない所では、思ひもかけない親切な言葉で物を云つたり、ちよいとした菓子をくれたりなどする人だつた。といつて、別に子供心に慕はしいと思ふやうな人でもなかつた。ゐてもゐなくつても、その谷が格別淋しくなるでもなく賑やかになるでもないといつたやうな人だつた。けれどもいよ／＼あのお上さんが堰にはまつて死んだと聞かされると、私は變に物足らない氣持にさせられてゐた。

その日學校から歸るとやうやく一伍一什がわかつた。そんなことが降つて湧いた以上、谷の人間が默つてゐよう譯はないのだ。私が學校から歸りがけに、あの祖父の建てた碑の在る山の鼻――今は半分方立木を賣り拂つたので、慘めな坊主山になつてしまつたが、その頃は松と杉とが茂りかへつてゐて、冬になると一日中霜解けの泥で足駄の齒を吸ひこまれたもんだ――あたりに來ると、上さんや婆さまが、寒いのにめげもせず、田の畔にかたまつて、左五郎の家の方を見い／＼大きな聲で噂話をしてゐた。左五郎の家には、羽織などを着た人が出たり這入つたりするのが見えた。谷中が久し振りで緊張するものを見附けたやうに緊張してゐた。私は子供心ながら、それを心に感じながら家に歸りついた。

あの田舍家に似合はない物々しい玄關を上つた流れ四疊には、傾きかゝつた黄色い夕陽を浴びて、おやぢが啣へ煙管をしながら、傲慢な顏をして貧乏ゆすりをしてゐた。一段下座には、同姓を名乘る作造といふ叔父が、いつもの通り酒臭さうな樣子をして、太い指さきで、齒糞の一面にたまつた黄色い齒をせゝつてゐた。私にはその頃からおやぢと叔父の顏は禁物だつた。何だか急に自由を失つて、恐ろしい一喝が今にも投げつけられるかと思ふ不安でぎごちなくなつた。で、上段から座敷ににじり上ると、おやぢの前に出て、兩手をついて、例の「只今もどりました」をやるが否や、すぐ中間をつきぬけて緣側に出た。そこではその日も祖母が日なたぼつこをしながら覺束ない手つきでつぎものをしてゐた。憐れな祖母。今でも眼をつぶるとその姿が見える。大ぴらには孫も

可愛がり得ないやうな一生をして死んで行つた祖母。たゞれ眼を氣にして、蠅を取つては溜めておいて、それをつぶした汁で眼を拭ひ〳〵した。私も蠅を取る手傳ひをその頃はしたものだつたが、あの汚らしい酷い習慣を除いて見ると、田舍には珍らしいいゝ趣味を持つた婆さんだつたが。もう死んだ。何處にか行つてしまつた。

作造叔父が左五郎のお上さんの不幸の顚末をおやぢに話してゐるのだ。私は祖母の針の手の動きを見詰めながら、ぢつと聞耳を立てゝゐた。左五郎の兩親が、殊に母の方が、何故かそのお上さんを眼の仇のやうにして、さんざん虐めぬいた擧句、夫婦の間には一人の乳吞兒まであつて、互に思ひ合つてゐる仲であるのを、親達の一存で離緣してしまつたといふことは、かねてから聞かされてゐるのだ。而してそのお上さんといふのが、自分の里は堰上の先方にあるのに、この谷に現はれて、物の蔭などからそつと自分のゐた家の樣子を窺つてゐるのを見たこともあつた。作造叔父のいふ所によると、お上さんは遠くから家の樣子を窺つてゐたばかりでなく、詫びを入れにやつて來たのださうだが、その度每にすげなく斷られたのださうだ。私には分る、あの田舍者特有な、情といふものの丸でない、意地つ張りな調子で、その親達とお上さんとは鼎座に默りこんで坐つてゐたに違ひない。而して氣の弱い左五郎は、お上さんがやつて來ると、煙つたい人でも來たやうな顏をして背戶口から裏の方にでも出て行つてしまつたのだらう、何事も知らない乳吞兒を抱きすくめながら。お上さんも仕舞には還らしてくれとも云ひ出せず、乳房が張つて苦しくて仕樣がないから、赤坊に乳を吞ませることだけさせて貰ひたいと申し込んだが、それすらすげなく彈ねつけられたのださうだ。それからお上さんは暫くの間姿を見せなくなつた。と思ふと寒い日の前の晚、左五郎の一家が早くから寢込んでしまつたを見すまして、大膽にもお上さんはその家から乳吞兒を盜み出したのだ。何んでも十一時近く古市場の知合ひの家に、お上さんがどつちかといふと不斷より晴れやかな顏をしてひよつこり姿を現はしたさうだ。乳吞兒を大事さうに胸に抱いたまゝで、「まあこのおそいにどうして」とそ

この家の人が尋ねたら、いよ〳〵詫びが叶つて家に戻れるやうになつたから、といふのもこの兒の可哀さからだつたので（といひながら赤坊の寢顏をにこやかに見やつてゐたさうだ）、おそくも寒くもあつたけれども地藏様まで御禮參りに來たのだと答へた。その時は暗いのでよくはわからなかつたが、たしかに兩袖ともあつたやうだつた。お上さんは暫く上り框の所に佇んでゐたが、急に暗い顏になつて「いかお邪魔しました、そんだらお休み」といふかと思ふと、提灯を貸さうといふ聲も待たずに、戸外の闇に消えてしまつたさうだ。

その翌朝早く、麥を踏みに出かけたその邊の人が、堰の方を何の氣なしに見ると、一人の女が赤坊を背負つて、土堤の上を行つたり來たりしてゐた。この寒いのにあんな所を何しに歩いてゐるのだらうと思つたが、すぐ自分の仕事に取りかゝつたので、そのまゝにしてしまつたとのことだ。

さうしたらあの騷ぎが持ち上つてしまつたのだ。深夜にお上さんが顏を見せた家では、あれは確かに幽靈が來たに違ひないといふし、堰の土堤でその姿を見た人は、あの時まで生きてゐたのだから、幽靈の筈はないといひ張つてゐるといふことまで作造叔父が附け加へていつてゐるのを私は小耳に挾んだ。おやぢは默つて作造叔父が醉ひにまかせて饒舌り立てるのを聞いてゐたが、とゞめでも刺すやうに、煙管をとんとはたいて、

「何んせ、今の若い奴等はをへねえ」

といひ終ると大きな欠伸をしたのも私は聞きもらさなかつた。

その晩私は何がなしに怖くつて寢つかれなかつたのも覺えてゐる。

それから間もなくだつた、左五郎が自分の家の裏の柿の木で首をくゝつて死んだのは。

本當にその頃から始まつたことなのか、それともその前からだつたのを氣付かずにゐたのか、兎も角左五郎の家の雨戸は三四寸がた引かれずにあつて、毎夜そこから細く灯の光が漏れた。今から思へば多分建てつけが惡く

つて締らなかつたのだらう。然し谷の中では、誰いふとなく妙な噂を立てた。戸締りをきちんとして寢ると、その晩は夜つぴて何處からともなく「開けてくれ〳〵」といふ聲がして眠れないので、用心は惡いけれども戸をたて切らずに寢るのだといふのだ。怖いもの見たさに灯ともし頃になると、私はよく兄貴や姉と一緒になつて門の外に出て見た。霜枯れた田を越えて、むかうの楢林の中に建てられたその家の軒下から地べたに向けて、縦一文字を引いたやうに灯の光が見えてゐた。重苦しい怖ろしさが、それを見る度毎に私を襲つて、一人では後架には行けなくした。

*　　*　　*

さういへばこんな事も思ひ出す。これは近年になつてのことだが、私のおやぢが死んだ年だから、さうだ、三年前だ。私が徴兵檢査を受けた年だ。だから左五郎のお上さんのあの事とは違つてまざ〳〵とした記憶がある。

彌助は日露戰爭が濟むと上等兵で歸つて來た。私の谷からは彌助だけが戰爭に出てゐたので、谷では暫くの間彌助の噂と歡迎の下相談とで夢中になつてゐた。小旗や長旒を持つた男女の一群れに圍まれて彼がこの谷に歸つて來た時、その顏色の土氣色に黒くなつて眼がぎら〳〵と光つてゐたのに驚かない人はなかつたが、それよりも私を驚かしたのは、あの極端な悒鬱な男が、生れ代つたやうに晴れ〴〵とした少し高慢にさへ見える男となつてゐたことだ。彌助は自分の家に草鞋をぬぐ前に、眞先に私の所にやつて來て、おやぢに留守中の禮を述べて挨拶した。彌助の家だつてあの通りこの谷ではどつちかといふと大百姓らしい門戸を張つてゐたのに、私のおやぢに對しては、妙に一目おいてゐた。而しておやぢの前に出ると、小作が地主にでも對するやうに堅くかしこまつて、小言でも教訓でも謹み切つて聞いてゐた。しかもそれが心から悦服してゐるらしいのだから、おやぢの平生を知つて滿腔の不平を持つてゐた私達兄弟にはをかしな位だつた。内氣ではあるが中々頭の堅い彌助にしては不思議

なことだ。なめくぢと蛙といつたやうな間柄なのだらうと兄貴などは輕蔑した口調で蔭口をいつたりしたものだ。その爲めなのだらう、彌助は第一番に私の家に來た。おやぢはあの頃から體の加減が惡く、それにつれてひどくむら氣な癇癪持になつてゐたのだが、彌助を見ると笑顏一つくれないで、

「堅固で歸つて來たは先づ目出たいが、一ツぱしの手柄でもしでかしたなどゝ思はねえこんだぞ。禁廷樣の御威光で戰は勝てたゞ。留守の間は隣り合壁の世話で米もはあおツつかツつに取れたゞから、これからは又もとの百姓に立ち返つて、みつしり働くだぞ。金鵄勳章位いたゞいたつて、俺らあそれで驚くことぢやねえかんな」

と親達や、お上さんのお照を前において、がみ〳〵とたしなめた。彌助は土黑い顏を眞赤にして眼を伏せたまゝ謹んで聞いてゐた。あの正直な男のことだから、自分の心の奧底に潜んでゐた虛榮心を見事に云ひ退けられたのを感じたのだらう。而して鞠躬如として自分の家の方に歸つて行つた。

あれは明治三十九年の二月のことだつたが、その年の九月に彌助の家では子が生まれた。その頃から彌助はまた段々ともとのやうな陰鬱な性質の男に逆戾りした。谷の中では誰いふとなく彌助の赤坊のことについて物好きらしい噂がたち始めた。夫婦一緒になつてやつと九ケ月にしかならないのに子が生まれたといふことが大きな問題の種になつたのだ。おまけに二人は結婚してからもう何年にもなるが、それまでには子寶は授かつてゐなかつたのだ。それがまたこの問題を一入複雜にした。同時に生まれた子は如何にも早產らしく弱々しい小さな赤坊だとのことだつた。又お照といふ女は谷中の褒めものとなつてゐる位、見伊達もよければ、心がけも感心な女だつた。だから谷中の輿論は自然二手にわかれねばならなかつた。男だちの多くは間違ひがあつたに違ひないといふし、女連殊に小姉などはお照に同情した。小姉は惡い噂でも聞くと自分のことのやうに腹を立てた。

彌助はまた彌助でお照を愛し切つてゐたし、根が滅多に物を疑ふやうなことをしない男だから、谷の人達が餘

計な馬鹿々々しいことを口走りさへしなければ、そのまゝ家内は無事だつたかも知れないのだが、憎み足りないのは女の毒々しい口の端だ。お松婆にちがひない。あいつは助産に何處にでも賴まれて行く女だが、惡い噂の種を蒔くのはいつでもあいつなのだ。あいつが、お前だけに大事な祕密を打ち明かすのだといつた調子で、彌助の耳に何を囁いたかは大抵想像がつくことだ。けれども結局は運命の例の小意地の惡い惡戲なのだ。運命はあのお松婆を敎唆して、自分は懷手で彌助の狂ひ死を冷やかに見守らうとしたのだ。

然しお松婆も、魔女が遂に自分の取り殺した人間の數だけの無慘な死に方を一身に集めて死なねばならぬやうに、あんな慘めな、のたれ死をしくさつたのだ。私のやうな人間は、世の中のことは目茶苦茶だと思ひながら、不思議にも因果應報の極端な信者になつてゐる。

津久志村の久我の主人が亡くなつた時、お松婆は養子夫婦に强ひられて、冬の眞最中、腰のきかない體で、大きな貧乏德利をさげて山越しに津久志村まで葬式の振舞酒を貰ひにやらされたのださうだ。晩おそくなつて、あの小作の庄の奴が、小枝を集めて山から歸る途中、田の畦に半身落ちこんで肩息になつてゐるお松婆を見つけたので、驚いて養子夫婦の所に駈けつけて知らせてやると、二人は圍爐裡に向ひ合つて、ぬくもり返つて晩飯を喰つてゐたが、庄の手前打ち捨てゝもおけないといふ風で、何かぶつ〳〵小言を言ひながら、男が袢天を引つかけながら出て行つたさうだ。

翌朝お松婆の死骸は、腰から下が畦の水に凍りついたまゝ、悶き死にゝ死んだのが發見された。私が行つて見た時は、東の山に太陽が覗き出たばかりで、身を切るやうな寒さだつたから、襤褸の衣物を板のやうにこはゞらした氷の中に、半身だけ畦の上にのたうたして、仰向けに眼を見開き齒を嚙みしばつて、訴へるやうに落命したその姿を見ると、思はず總身が怖毛だつてしまつた。庄の話を聞いて谷の人達もさすがに默つてゐられずにその養

子を詰じると、「何んの、俺ら寒いに出かけて行つて、歩けねえことあんめえと聞いたら、歩けねえことはねえとさういつただ。いつたから、重かんべえと思つて德利だけ持つて歸つてくれたんだが」と、それが何の不思議だといふ顏をして、しら〱と答へたさうだ。

これであの婆はあたり前に死んだものゝやうに葬られてしまつたのだ。平和に葬られたのだ。田園といふものはそんな風に平和なんだからな。

あの年は諸物價が騰貴して、米の値が馬鹿によかつたが、彌助はどうしたものかすつかりそれを賣りそこなつてしまつた。この不合理をどう考へればいゝのだ。田が惡いのではない。粒々辛苦といふその辛苦が足らないのでもない。自然は同量の日光と雨滴とを隣り近所の田と同樣に惠んでゐるのだ。それだのに隣りの田では勿體ないやうな高値に米が賣れて、彌助の田のは手間にも廻らないといふのはどういふ譯だ。田舍の人間が米を作つて、都會の人間が坐つたまゝで値を作る。都會の人が値を作るのはいゝとして、何故彌助には相場に通ずるだけのことをしてやらないのだらう。自然は私達百姓を惠みもするが虐げもする。思ひどほりに私達を使ひまはす。けれども私達はそれをつぶやくことには何百代かゝつて慣れてしまつた。どんな凶年凶作に遭つても私達はたゞ默つて首を垂れてゐるばかりだ。而して、少しでも力が餘つてゐれば、次の春には靑い顏をしながらも、田畑に出かけて汗を肥料にせんばかりな働きをする。而して力が餘つてゐなければ、家が一塊の浮草のやうになつて、何處とも定めず根を卸すことの出來る國に漂つて行く。それほど私達は自然に對して從順にさせられてしまつた。これだけで私達にはもう十分ではないか。それだのに都會の人達は、自然が百姓に與へようとするものまでを、手も濡らさずに奪ひ取らうとするのだ。自然に虐げ慣らされて、極度に卑屈になつた私達農民は、都會の暴逆に對しても首を垂れて從順であらうとする。然しながら、二重の苛斂は餘りに强過ぎる。彌助は遂にその人身御供に擧

げられてしまつたのだ。

彌助はその頃から變に抑默つた人間になつてしまつた。田に出て人並以上に働きまくるのは今までと違ひはしなかつたけれども、不思議なことには誰とも口をきかなくなつてしまつた。而してその眼が不思議に澄んで來た。作物の育ち具合でも檢べてゐる時には、何ともいへない可憐なにこやかな表情が、その眼と唇の邊に湧いて出るのだが、それは深い綠を映して音もたてずに流れる山の泉のやうな淸らかさと無邪氣さとを持つてゐた。明治四十年の四月に私がやつと中學だけ卒業して家に歸つた時にはそんな風だつた。隣近所の人はよく、うつかり彌助にかゝづらつたらひどい目を見るから決して構つてはならないといつてゐたけれども、私の眼に映つた彌助はどうしてもそんな人とは思へなかつた。或る日――あれは國に歸つて間もなくだつたから五月だな、樹の葉といふ葉がもう眞黑に靑くならうとしてゐる頃だつたから。田圃では蛙が鳴きはじめてゐた。あの頃から格段に私は今私があるやうな人間にならうとしてゐたのだ。中學はどうかかうか卒業したが、私の行く手はぶツつりとおやぢの暴逆の手でからめられてしまつてゐた。私の大祖父は癲病患者だ。おやぢとおふくろと兄貴とは肺病人だ。さういふ意識が私の心の根つこに蛆蟲のやうにうざ〳〵とからみついてゐた。俺はもう半腐れのデカダンだつた。二十といふ若さで生々の氣に滿ち溢れた春に逢ひながら、俺の心は底もなく淋しかつた。何にも知らずに、おやぢの暴逆にも、おふくろの癇癪にも屈せずに、ひたすら延びて行つた十四五時代の新鮮な官能は無理往生にひしやがれて、惰性で生きてゐたのだ。たゞ苦しい氣息をしてゐるだけだつた。靑葉のきらめき一つにも胸を躍らすやうな、雲の光りにも、鳥の聲にも、水の音にも、常に何事をか感じ、何ものをか見出すやうな、そんな晴れ〴〵しい靑年の情緖はもう自分から逃げてしまつてゐたのだ。自分で自分の鋭敏な官能をごじ〳〵と失望のやすりにかけて磨り減らした間は命が縮むほど痛かつた。その痛さもうぼんやりした思ひ出になつてしまつたのだ。そんな

境界にはまり込んで、人間並の人間に對しては頭から反感を湧かしてゐた俺には、あの彌助の顏がなつかしいものに思へてたまらなかつた。人のゐない時こちらの心持を僞らないで聲をかけて見よう。さうしたら彼は思ひの外素直な人間であることが知れるに違ひないと思つた。用事が出來て一寸町まで行つた歸りに——それはもう夕方で、谷のものは仕事を仕舞つてゐた——彌助の田の邊を通ると、後ろ手をして苗床を檢べてゐた彌助がひよつくりこちらを向いた。苗床から振り向いたばかりの顏だつたから、人間離れがするほど澄んで清々しい微笑を湛へてゐた。狂人と白痴にのみ見るあの神々しい笑顏、絶望のどん底に人間の知らない樂しいものを見付け出したやうなあの笑顏、俺はそれを見たばかりでもう涙ぐましいやうな氣持にさせられてゐた。同じやうに人間の生活から蹴落されながら、俺は心も魂も荒み切つてゐるのに、彌助は易々と俺の及びもつかぬ境界に救ひ出されてゐるのだ。俺は嫉ましいといふよりも崇めたいやうな心になつてゐたのだ。俺の顏は思はず知らず日頃の苦々しさから解放されて、人間らしい好意の色を表はしてゐたに違ひない。俺は田舍で先輩に對してする禮儀を守つて鳥打帽子を脱いで輕く頭を下げた。さうして、

「いゝお晩になりやした」

と田舍そのまゝの言葉で挨拶した。

と、彌助は苗床から振り向けたそのにこやかなまゝの顏で暫く俺をまじ〳〵と見續けてゐたつけが、突然假面を脱いだやうに一瞬間の前とは似もつかぬ表情になつた。本當にそれは瞬きする間もなかつた。眞蒼だ、唇までが。裂けるやうに見開かれた瞼はびり〳〵と烈しく痙攣した。脂汗が滴をなして見る〳〵その高い顴際から滴り出した。俺はこの突然の變化に、本能的に猛獸の襲撃を防ぐ時のやうな身構へをして立ちすくんでしまつた。あの逞ましい拳固が、嚙みつくばかりな怒罵が、今にも俺の面を目がけて落雷のやうに飛んで來るだらうと覺悟もし

た。その瞬間は然し何事もなく過ぎてしまつた。襲ひかゝつた獅子がそのまゝ凍りついたかと、彌助は恐ろしい身構へをしたまゝ動かなかつた。俺の頭の中はしーんと縮こまつて冷え切つてしまつた。本能的な恐怖の外に何の分別も浮ばなかつた。彌助の身邊だけが夕暮の中にぎら〳〵と紫色に光つて俺には見えた。かうしたまゝで堪へ切れない程の長い時間が過ぎたやうに思つたが、それは存外短い間だつたかも知れない。兎に角その長く思はれた時間の後、ふと不思議な氣合を感じて俺は後ろを向く間も見せず草履も何も脫ぎ捨てゝ遁げ出した、同時に彌助が韋駄天走りに俺を追ひかけたのを後ろに感じた、死の如く默りこくつたまゝで。

俺にも聲を出す餘裕などはなかつた。自分の屋敷の坂を夢中で駈けあがつて、大門を潜りぬけてから門柱を楯に始めて後を振り返つて見た。彌助は遠くに小さく見えてゐた。いつの間に取り上げたのか、右手に持つた鎌がこぼれ日の光を受けてゐるほかに、彼の姿は薄ぼんやりと黑ずんで、こちらを向いて立つてゐた。畦道にたつた一人薄ぼんやりとこちらを向いて立つてゐた。

俺は始めて安堵の氣息(いき)をほつ、とついた。胸はまだ高鳴りをして波打つてゐた。而して門柱に手をかけたまゝ、その手の二の腕のところが痙攣したやうにぴくり〳〵と震へるのを感じながら、彌助の姿から眼を放さないでゐた。

俺は本當はその眼で泣いてゐたんだ。同じく運命に呪はれたものが二人向ひ合ひながら、生れつきの仇同志ででもあるやうに、命がけで隱れん坊見たやうなことをしなければならぬとは、何といふ情けないことだと俺は心の底から情なく思つてしまつた。彌助の黑い姿は俺の眼の中で淚のために溶けて行つた。と思ふと俺の喉は子供のやうに泣きじやくりをし始めてゐた。

その頃から彌助はそのお上さんに對して狂暴な振舞を見せ出したといふことだ。いたいけな何んにも知らない

その長男に對しても。彌助はとう〳〵田に出て働くこともなくなつてしまつた。男手の少ないあの家だつたから、その田にはいつでも六十いくつかのお母さんと、赤坊をきり〳〵と背中におんぶしたお照とが二人きりでせつせと働いてゐるのを見た。でも女ばかりでは仕方がないもので、剋明に働いてゐるやうでも、給水のことなどが甲斐々々しくいかぬと見え、彌助の田には青みどろが浮いたり、雜草が稻より高く生えたりしてゐた。お照が——あれは俺が忘れることの出來ない女の一人だが——身だしなみでもすれば美しい、怜悧な、小じんまりした商家のお上さんとも見えよう姿を、痛々しく臺なしにして、それでもどこか健氣に引きしまつた顏つきで挨拶をしながら、右の肩には田鍬、左の手には眞黑になつた藥罐を持つて、お母さんと一緒に田を仕舞つて歸つて行く姿を、俺はぶら〳〵とせう事なしにする散歩の途中などでよく見かけたものだ。

稼ぎをしない彌助は何をしてゐるかといふと、朝飯をしまふと——それも決してお上さんには給仕をさせないのださうだ。お袋にだけ汁をかけて貰つた——踵のすり切れた貧乏草履をひつかけてのろりと家を出てしまふ。天氣であらうが雨が降らうがそんなことには頓着しない。而して自分の山といはず人の山といはず氣の向くまゝに出かけて行つて、木の蔭にぢつと坐りこんでしまふのだ。不思議なことにはその木の蔭といふのが赤松の木にきまつてゐた。赤松の根方には下萠がたんと茂らないものだ。さういふ所に蹲つて、天氣なら太陽の光を、雨ならば雨の脚を、襟許から侵し込むまゝに侵させて、晝飯も喰はずに夕方まで考へてゐるのだ。少くとも屈託し切つたやうに頭を垂れて、ぼう〳〵と延びた髮の毛の中に兩手を突つこんで、背中を丸くしてゐる姿は考へこんでゐるやうに見えたのだ。落葉をかきに這入つたお婆さんだの、秣を刈りに行つた若者だの、茸を集めに出かけた女子供などが、目前の仕事に夢中になつてあちこちと動きまはる中に、ふと物の氣配を感じて眼を上げて見ると、土が自然に盛り上つて出來たやうな男が、その土の塊り見たいな顏に虎のやうな眼を光らして、針でもみこむや

うにこつちを見つめてゐるのに魂を消して、集めたものも投げすてたまゝ逃げて來るのださうだ。女子供であらうとも若者であらうとも、それを踏みこたへ得る人間は一人もあるまいと谷では評判した。「清水の湧くところに來たら蝮蛇に用心しろ。赤松の根つこでは彌助に用心しろ。」諺のやうにかういふ言葉が谷の人々にいひ擴げられた。

彌助の顏は見る〳〵荒れすさんだ。單に太陽と雨とがその皮膚を樹の皮のやうにしたばかりではなく、その表情から人間らしさがなくなつて行つた。といつて、あの狂人の或る者に見るやうな神々しさ——それは彼自身が少し前に持つてゐた——も姿を隱した。人間といふ王國の花園なるその顏ほ、荊と薊との亂れ茂つた廢土になつてしまつた。而してその廢土は永久に沈默してしまつたのだ。醫學上で默狂といふのださうだ。露西亞とか亞弗利加の或る地方——地味の荒れた曠原で、人口の稀薄な所には殊に多く惹起される病氣だといふ。日本でも信州の高原や那須野の原などには時々かゝる無言の狂亂人を見るとのことだ。彼等の有するたゞ一つのものは、亂雜無慚な渾沌の中から惡鬼の如く生まれ出る烈しい實行力だ。云はず、叫ばず、罵らず、呻きと共に何といふ嫌ひもなく撲つ。……俺は東京にゐる時友達に連れられて能といふものを一度見たことがある。曲の一つに黑塚といふのがあつた。安達ケ原の鬼婆だ。後シテになつて誠の姿を現はした老婆が、寢屋を窺つた旅僧に仇をしようと、物凄い鬼女になつて現はれる。旅僧が法力を便りに珠數をもみ〳〵近づくと、耳まで口の裂けた惡鬼は見開いたままの眼を爛々と光らしながら、珠數を睨みつけて右肩を聳やかし、あらん限りの力を足の爪先にこめて、居丈け高に延びあがる。而して錫杖を摑んだ右の手をしづ〳〵と空高く揚げて、ぢつと力を滿身にこめる。俺は身の毛がよだつやうな思ひをしてあの磨ぎすまされた技巧に見とれてしまつた。惡鬼は死の如く默したまゝだ。全くその瞬間、佛法を屠るか自分が碎けるかの別れ道に惡鬼が立つてゐるのを十分に思はせる。その頃の彌助の姿を見る

と俺は何よりも先にあの惡鬼の姿を思ひ出した。苦しさのあまりには叫ぶのが生きとし生けるものゝ本能だ。それを彌助は叫ぶことすらせぬやうになつてしまつたのだ。而もそれが曠原の眞中で起つたことではない。人の香の稀な所で起つたことでもない。妻があればこそ、子があればこそだ。俺は今でも彌助の姿を思ひ浮べると、人生の悲慘の重なり重なつたその重味はどれ程強いものなのかと惘れるばかりだ。

お照は彌助に殺されかゝつて幾度赤坊を連れて里に逃げ歸つたか知れなかつた。それでも懲りるといふことを知らないやうに、手土産（てみやげ）をさげては歸つて來た。而して姑と心を合せてなりふりを構はず働いてゐた。彌助が歸つて來るとお照は大急ぎで子を抱いて裏の桑畑に身を隱すのだつた。お母さんが俺の所に來ての歎き〳〵の話に、どうかして桑畑から子供の泣き聲でも聞こえて來ると、彌助は急に血相を變へて、ぢつと俯向いたまゝ聞耳を立てゝゐる。いつ飛び出してどんなことをするかも分らないと思ふと、老年の身で止め隔ても出來ないし、全くお照のゐてくれるのが苦になる位だが、氣だてのすぐれてやさしい女ではあるし、孫はかはゆし、活計にもどうしようもないので、二六時中はら〳〵と薄氷をふむやうな氣苦勞をしながらもゐてもらつてゐるのだが、お照に限つてそんなことのありやう筈は微塵もないのに、彌助の奴は何を勘ちがへをしたものか、これが何かの前世事とでもいふんだらう、といつてゐた。小姉（ちひあねえ）などは悲しがつたり口惜しがつたりして人目も憚らずに泣いてゐた。

谷の人達も段々お照の殊勝な心がけに濡れて來て、誰一人（ひとり）前のやうな噂を立てようとするものがないのみか、何かにつけて心からの親切を見せるやうになつて行つた。俺はよく彌助の田にこつちの人あつちの人が這入りこんで手助けをしてやつてゐるのを見た。畜生！　だから俺は人間といふ動物が嫌ひなんだ。人間つて奴はあんな小つぽけな親切をするのに適當した程大きな惡戲を心なしにやつて退（の）けるのだ。それ位の親切で彌助の病氣が治るとでも思つてゐるのか。貴樣達がしでかしたことがどんな結果を生んだか、眼を見張つて見て見るがいゝ。

彌助はとう／＼子供さへ見れば誰彼の見界もなく死物狂ひで追ひかけるやうになつた。學校の退け時時分になると、彌助はそつと山から里道の方に降りて來て、小鳥を覗ふ梟のやうに子供の歸りを待つてゐるのだ。子供達の間には本當に身の毛もよだたせるやうな恐慌が來た。或る時彌助は惣兵衞の家のあの神經質な女の子を追ひかけた。女の子は自分の家まで逃げ遂せる隙もないので、がむしやらに泣きたてながら俺の家の土間にころげこんで來た。氣が狂つてからでも俺のおやぢにだけは恐れをなしてゐた彌助ではあつたが、その時は全く前後を忘れてしまつたと見えて、その子に追ひすがつて俺の屋敷にのつそりと這入りこんで來た。俺の所の女子供はそれを見るとひとたまりもなく慌てふためいて納戸の方に身をかくした。彌助は土間の方には行かずに上戸房の緣の端に兩手をついて佛壇の方をぢつと見詰めてゐた。奧の間の床側で寢ころんで讀書をしてゐた俺は、物音にふと前庭の方を振り返ると、午後の光線を背にうけて、黑い塊りに見える彌助が、前こゞみになつて佇んでゐるのを見つけたので、いつぞや追ひかけられて以來の恐怖が急にこみあげて來て、思はずはね起きて片膝をついた。而して手には投げつけるに手頃な書物を鷲摑みにしてゐた。

おやぢは中間に床を敷いて臥てゐたが、俺の慌てた擧動が、鏡に投げた彌助の影のやうに映つたのだらう、俺の眼の向いてゐる方を辿つて、おやぢの眼はすぐ座敷を隔てゝ立つてゐる彌助を見出した。かく書くと、これらの凡てが長い廻り道をして行はれたやうだが、女の子が泣きわめいて駈けこんで來てから、おやぢが彌助のゐるのに氣がついたまでの間は、ぱた／＼とからくりが廻るやうな早さだつた。

「彌助ぢやねえか」

さう疳高なしやがれた聲でおやぢが怒鳴つたのと、起重機が重々しく靜かに動いて行くやうな彌助の眼がおやぢの方に向けられたのとは同時だつた。彌助はおやぢを一と眼見ると、絕えて久しいあの少し臆病さうな神々し

い微笑を顏のどこやらに漏らして、腰を低く挨拶した。そのいたいけな無害な謙遜さ。

「馬鹿野郎！　何しにこけへはうせた」

雷のやうに怒鳴りつけたかつたのだらう。けれどもその聲は小さくかすれて、おやぢはもう喉笛をひゆう〳〵鳴らしてゐた。それからおやぢは起きなほつて彌助の不心得を早口にならべ出したが、彌助はそこを立退く樣子もなく、俺には不思議ななつかしさをもつたあの微笑を續けながら突つ立つたまゝでゐる。おやぢはとう〳〵枕許に備へつけてある樫の木劍を取つて、寢衣のまゝ玄關から躍り出た。あの時俺はどういふ心持でゐたのか本當に分らない。おやぢが一日でも早く死んでくれたら少しは樂な呼吸が出來るだらうと思ひくらさない時とてはなかつた俺だ。それだのに俺は彌助に對する恐怖も何も忘れてしまつて、おやぢに續いて前庭に走つて出てゐた。俺が走つて出た時にはもう彌助は、俺の時のやうに獅子でもしさうな身構へをして、病みづかれのしたおやぢの喉輪でも握りしめてゐるだらうと豫期してゐた。所が飛び出して見ると意外なことが起つてゐた。怒りの爲めに溶けた金屬のやうに震へてゐるおやぢの前に、身をすぼめ切つた彌助が、おど〳〵と地びたに手をついてかしこまつてゐた。それを見るとおやぢもさすがに木劍のやりどころに困つたらしく、それに病體をよせかけて力杖にしてゐた。この不思議な光景はちよつと俺を面喰はした。矢張りおやぢには何處かえらいところがあるのかなと思つた。午後四時に近い日ざしは、油で煎りつけるやうな暑さを、この二人の氣違ひ（俺の眼からはおやぢも氣違ひだ）に横ずつぱうから投げつけてゐた。おやぢのひよろ長い影が彌助を通りこしてむかうまで延びてゐたその妙な印象だけが、殊更に鮮かに今でも俺の記憶に殘つてゐる。

おやぢはやがて頑是ない惡童でも嚇しつけるやうに、かん〳〵に乾いた土を木劍でどしん〳〵と打ちながら、例の皮肉な憎々しい能辯で彌助のふしだらを隙間もなく責めたてた。それが約三十分。俺だつたらあの小言の三分

一位で嚇つとなつてしまつて、比目魚にならうともおやぢを睨みかへしてその座を蹴立てたらうものを、而してそれから推しはかつて彌助がいつ腹にすゑかねて吽き叫んで立ち上らないとも知れないと手に汗を握つてゐたものを、彌助の奴はいつまでも恥ぢ入るやうに顏を赤くしながらてれ切つてしやがんでゐるのだ。おやぢが咳をしい〳〵云ひたいことを云つてしまふと、もう一度木劍で一と際強く大地をなぐつて彌助に立てと命じた。彌助は言下に立ち上つて次ぎの命令を待つた。

「さあこれから家へ歸るだ。門を出たら右さ行ぐだ。行け！」

彌助はにや〳〵しながら低く頭を下げてから始めて立ち上つて、おやぢにいはれたとほりにすご〳〵と門を出て行つた。おやぢもあとからついて門を出た。俺も何んのことはなくおやぢの後から門を出て見た。おやぢは藤平の屋敷の曲り角まで、木劍で大地をうち〳〵彌助のあとをつけた。

「これから又今日のやうな眞似をして見ろ、たゝき殺されつから。家さかへつたら女房子供を大事にして、おとなしくして暮すだぞ。戸外へなんぞ出て來るぢやねえだ。のみこんだか……又はあ出て來やがつたらこれだぞ……見ろこつちを」

恐る〳〵振り向く彌助に向つて、おやぢは木劍を土がめいりこむほど強く二三度地びたにたゝきつけた。彌助はそのたんびに自分が打たれるやうに頭を下げた。

「性根がついたか。えゝ。性根がついたらこゝから一人でおとなしく歸るだ。馬鹿野郞。谷のものに迷惑ばつかりかけやがつて……」

彌助はよく白痴がするやうに、兩手を帶の少し上の所に重ね合せて、肩を張るといふよりは首を落して、しやがれ聲で罵るおやぢの言葉につれて合點々々した。俺を追ひにかゝつた彌助は何處に行つてしまつたかと思はれ

るやうな臆病さうな、憐れまるべき彌助になつてゐた。

彌助はやがて又おやぢにせき立てられて、横ざしに油ぎつた光を投げる太陽の方を向いて歩き出した。

「まつすぐに家さ歸るだぞ。駄馬が來たらよけてとほすだぞ。ぐづ〳〵して蹴られんな、馬鹿。まつすぐに歸んねえと、見ろ彌助、これだぞ」

彌助がのろりと振り返るとおやぢは二度三度木劍で大地を打ちたゝいて見せた。彌助はにやりと笑ひながら又合點をしてとぼ〳〵と里道を遠ざかつてゆく。おやぢがこゝを先途と威張り散らすのが面憎くもありをかしくもあつて、俺はそこに立つたまゝで、氣息を肩でつきながら木劍にすがつたおやぢの後姿をまぢ〳〵と見やつてゐたおやぢはいつまでもそこに突つ立つてゐた。彌助の姿が岸のむかうに隱れてもまだ突つ立つてゐた。で、俺もせうことなしに突つ立つてゐた。やゝ暫くしてからおやぢは俺の後にゐるのを忘れてゐたものゝやうに俺のゐる方に向きなほつて歩き出したが、俺のそこにゐるのに氣がつくとひどく慌てたらしい顏つきをしてそつぽを向いてしまつた。その瞬間俺はおやぢの眼に一杯涙がたまつてゐるのをたしかに見屆けてしまつたのだ。その時俺はおやぢももう長い命ではないなと思つた。臥てばかりゐるとさうではないが、大きな自然の中に持ち出して見ると、自然の中にはあんなになつてまで命をつないでゐるものは一つだつてないと思はせられる。ましてそれは小學校もやがて休みにならうとする七月の末のことだ。空氣にも土にも新らしい生命ばかりが漲つてゐるのだ。人間てものは業の深いものだなあと俺は情けなくなつたつけ。

その晩おやぢは彌助のお上さんを家に呼びつけて、不便でも何んでも、他人に迷惑をかけては濟まぬから、彌助を戸外に出さない工夫をしなければならぬと說きつけたらしい。お照が背中の赤坊をゆすり上げながら、手拭で涙を押へ〳〵歸つてゆくのを俺はとぼ口の側にある据風呂につかりながら覗いて見てゐた。

おやぢの氣持では座敷牢にでも入れろといふのだつたらう。お照もその意味は分つてゐたが、自分の亭主をそんな目にあはせるのは身を切られるよりもつらいからいやだと云つてお袋に泣きの涙でかきくどいたさうだ。お袋も口では俺のおやぢのいふことを尤もだと云ひ張つて見たものゝ、自分の腹を痛めた一人ぽつちの子であつて見れば、嫁の言葉を胸の中では手を合せて飲み込んでゐたのかも知れない。結局は學校の退け時ごろにはお互に氣をつけて彌助の見張りをしようといふ位な相談の落ちになつたらしい。

その翌日はひどい朝燒けがして、それが雨にもならずにぎら〳〵と眼をさすやうな晴日和になつたので、むせ返る程な暑さだつた。その日にあの身の毛もよだつやうな悲劇が眞晝間に起つたのだ。やつちやんが學校に出かけて行つてから、野良で一と仕事して家に歸つた俺達は早晝食を喰はうと、汲みたての水で顏や手の汗芥を洗ひ落して、土間の方に廻らうとしてゐると、そこに彌助の所の小作の若い男が息せき切つてかけこんで來た。

彌助はその前の晩にお照が俺のおやぢに呼びつけられたのをどうかして知つてゐたのださうだ。この悲劇はそれと關係があるのかどうかは知らない。兎に角彌助はその朝は例になく機嫌がよく、格別お照を沒義道に取りあつかふ樣子もなかつたので、お照は赤坊を家において裏の桑畑に仕事に出かけたのださうだ。彌助はおとなしく納戸に這入つて何かこそ〳〵やつてゐたが、やがて中間でつぎものをしてゐたお袋の所にやつて來て、立つたなりで針を運ぶお袋の手を見つめてゐた。お袋が、

「今日はあつくなるなあ」

といつて見上げたらにこ〳〵して、

「うむ」

と答へながら途轍もなく、

「おつかあ……俺らがには嗅なんぞいんねえなあ」

と獨語のやうに問ひかけた。お袋は何をまたいゝ加減なことをいひ出すのかと少し情けなく思つたか、折角の機嫌をこぢらかすでもないとおもつて、

「さうだともさ」

と合槌をうつてやつた。すると彌助はひとしほにこやかな顔付になつてまた納戸に引きかへして、軈て足早に家を出てゆく氣配がしたので、お袋は何げなしに庭さきに眼をやると、ちらつと眼にとまつたのは、納戸にしまつてあつた古ぼけた朱鞘の大刀(だんびら)だつた。しなしたりと思つて、起き上つて後を追はうとする拍子に、身近(みぢか)に赤坊を入れておいたいんちこにけつまづいて、それをひつくりかへした。赤坊の泣き出したのも構ふことが出來ず、手に抱いてゐては萬一の時の邪魔になると思つて、いんちこを起してそれに抛りこんだまゝ、草履もはかずにおもてに飛び出して見ると、裏口から眞直に桑畑につゞく作道を彌助が韋駄天走りに駈けてゆくのが可なり遠くになつて眺められた。お袋はそこまで走り出はしたものゝ、この有様を一眼(ひとめ)見ると、一歩も足が前には出なくなつた。聲も出ない。やうやく側の椎の木に凭(もた)れかゝつたまゝ、ぐら〳〵と眼のくらむのを堪へてゐた。魂消(たまぎ)るやうなお照の聲が遠くでしたと思つた。お袋は知らず〳〵そこに坐つてしまつて、眼だけを作道にすゑてゐた。そこに彌助が血みどろになつた大刀(だんびら)を、玩具を買つてもらつた子供のやうに、右手にぎら〳〵ときらめかしながら、ふら〳〵とよろけて歸つて來た、白晝に、にた〳〵と薄笑ひをたゝへながら。

これはあとで聞いた話だ。小作の男はたゞ旦那にお上さんが殺されはぐつた。來てくれといふばかりだつた。家の内に病氣でぶら〳〵してゐた兄貴と俺とは、その一言に氣が張り切つて、すぐ駈け出した。道々隣近所の若い者や上さんが同じ方を向いて駈けて行くのと一緒になつた。彌助の屋敷の入口にある綺麗に刈りこんだあの日よ

けの椎の木の列をくゞりぬけて庭さきに出て見ると、森閑とした眞夏の沈默の中に、一人打ち捨てられた赤坊が燒きつくやうに啼いてゐるのだけが聞こえてゐて、世にも恐ろしい凶事が起つたといふ樣子はどこの隅にも見出されなかつた。

お照は不意に肩さきを斬りつけられて、右の腕が半分がた千切れたのだが、氣丈な女だけにその場を逃げのびて、大聲に救ひを呼びながら、往來まで來るとばつたり倒れてしまつたのだといふことだ。

彌助は否應なしに母屋の後ろにしつらへた檻のやうな小屋に押し込められることになつた。そこは俺の家からは優に五丁の餘を離れてゐるのだが、彌助が羽目板を力一杯たゝいて、野獸のやうに叫く聲は、夜など手に取るやうに聞こえて來るのだ。殊に彌助はその冬頃から不思議な口笛を自然に發明した。それは拇指をぬかした四本の右の指を揃へて口の中にさしこみ、舌と唇に加減を加へて思ひ切り氣息を吹き出すのだ。百舌鳥の啼聲を長く引き延ばしたやうな鋭い悲しい聲が生まれ出る。氣候が險惡になるとこの口笛は殊更滋く吹き出される。冬の眞夜中など木枯が烈しく吹きすさぶ間を、鋭い刃物で空氣を劈くやうなあの口笛の斷續を聞いた人は、殊に彌助の身の上を知つてゐる人は、蒲團を被つて耳を押へずにゐられないだらう。

それよりも奇怪なことはお照に起つたいま〳〵しい變化だ。お照は里に療治に行つたなりもう赤坊の所には歸つて來なかつた、あの生れながらの節婦らしかつたお照が。而してお照は幾度男をかへたか知れないといふ噂がたつた。俺は時々お照と顏を合せることがあつた。お照のあの張り切つた顏は崩れてしまつてゐた。淫肉とでもいつていゝやうな脂ぎつた肉が顏にも體にも加はつて、俺に對してゞさへ云ひ寄りさうな眼付を見せるのだ。……おゝ、お！　本當に何といふことだ。

＊　＊　＊

現におあさを見ろ。あの女は俺が小學校に通つてゐた時には同級で、而かも齢も同じだつた。俺はあの女の子が好きだつたから何かにつけてひどくいぢめてやつた。俺の手下も俺を見ならつておあさをいぢめたものだ。さうすると俺は嫉妬のやうなものを感じてその手下をひどい眼に合はせたつけ。けれどもそれは見たやうでもあり、見ないやうでもある夢位ぼんやりした過去になつてしまつた。俺が千葉の中學校に行くやうになつてからおあさの噂さへ聞かなくなつた。俺の方から進んで聞くやうなことは迚も出來なかつた。俺が中學の四年になつた時、おあさが長濱の或る漁師の所に片づいたといふことを誰かゝら知らされた。知り合ひの女が身を固めたと聞かされた時、男の胸にふと起つて靜かに消えてゆくあの淋しい氣持（あれは俺達の先祖が實行してゐた多妻主義の暗翳とでもいふのだらうか）、その氣持を俺もその時かすかに感じはしたが、見界（みさかひ）のない野心に驅り立てられてゐた俺は、それつきりでおあさのことなどは忘れてしまつてゐた。

　そのおあさは今自分の里に歸つてゐるのだ。腹が脹（ふく）れて痛むといふのだから腹膜炎でゞもあるのか、兎に角そんな病氣になつて治（なほ）りさうもないからといつて、その憐れな女は緣付先きから自分の家に歸されたのだ。おあさの家は谷（やと）の中では相當にやつてゐる家なのだ。それだのに醫者らしい醫者には一度もかけないで、加持、御祈禱といふやうなものでその病氣をなほさうとした。謂はゞそれは家の中から惡魔の這入りこむ小さな孔をあけたやうなものだ。そこからすぐ天理教が忍び込んだ。おあさは毎日御神水ばかりいたゞかされた。あのしわん坊な親達にとつてはこれほど難有い藥はあるまい。その癖からめ手からは、知らず〳〵の中に醫者に拂ふより莫大な金が飛び散つてゐるのには氣がつかないのだ。おあさはそんな取り扱ひを受けて、一日々々と病氣が重つて行つた。而して苦しまぎれに親達を怨むやうな言葉を口走つたものと見える。おあさはとう〳〵納戸に押しこめられてしまつた。而して見殺し同樣なあつかひを受けてゐるのだ。床と疊との間には蛆蟲（うじむし）が湧いて、ともするとそれが奧間（おくんま）

に這ひ出して來ることがあるとその家を訪ねた人が云ひふらすやうになつた。うめき聲を漏らすまいと閉め切つた部屋の中は暑氣と臭氣とで蒸れるやうなのださうだが、暑いからといつておあさが疲れ切つた手で團扇を使つてゐると、働くこともしないで贅澤な眞似をするなといつて、その團扇さへもぎ取つてしまふのださうだ。

「聲が段々細くなつて來た。可哀さうにもうはあお陀佛だんべ」

と人々は「可哀さうに」といふ言葉を枕言葉ほどの重さもなく使つて噂してゐるのを俺は聞いた。

親子の間であるべきことかといふ人もあるだらう。所があるべきことなのだ。親であらうが孫であらうが喰はずにはゐられないのだ。何とかいふ伊太利の大名は、親子が牢屋に入れられて食物を斷たれた時、とう〳〵一番若い子供の肉を喰つてまで生きようとしたといふではないか。俺達百姓は今決して伊太利のその大名のやうな境界におかれてゐるのではない。けれども俺達の祖先には、生きてゐる以上は、自分で喰ふだけの働きをしないと、他人の生活を脅かさなければならなくなるやうな時代があつたのではなからうか。家庭全體の生活が脅かされない爲めには、働けなくなつた人間を見殺しにしてすまさなければならない時代があつたのではなからうか。而して田舍の人の間にはいまだにかうした心持がしみこんでゐるのではなからうか。おあさの場合などを考へて見ると、俺にはさう考へて見る外に考へやうがないのだ。子供の爲めには親は命でも捨てゝかゝる。こんな神々しい道德は、俺達とはかけはなれた文明人が考へ出したものゝやうに思へるのだ。こゝに腹をすゑて考へて見るとおやぢのすることも母のすることも、俺には少しは同情が出來るやうに思へるのだ。こんな原始的な生活の中に投げこまれた俺は全く陸の上に抛り出された魚のやうだといつていゝ。小さい時から妙に田舍に對して反感を持つてゐた俺は、中學時代を都會で過したおかげで、迚も田舍にはゐたゝまれなくなつた。一寸見には人間は共通な人間の生活をしてゐて、色々變つて見えるのは極く表面的な部分だけだと大抵の人は思つてゐるやうだが、俺見たいな

兩棲類にはそんな速斷は皆んなうそつぱちに見える。文化の頂上を步いてゐると信じ切つてゐる都會の人間が本當に人類らしい人間なのか、それとも自然と隣り合せに生活してゐて、あの無關心な殘虐性を持つた自然（都會人たる俺の一面から見た自然はどうしてもさう見える）のすることを無反省に見習つて生きてゐる田舍者が本當に人類らしい人間なのか、俺には手取り早く決めてしまふことが出來ない。俺は常住この二つの矛盾に苦しみぬいてゐるのらしい。俺にはかういふ風に活きて行きたいといふ一定の方針はない。けれども人のしてゐることが一一馬鹿に見える。噓に見える。迷ひに見える。

＊　＊　＊

まあいゝ、俺はこれから今まで過ごして來た生活をこゝに書きならべて見る。俺はこの若さで大分頭を惡くしてしまつてゐるから、迚も秩序立つたことは書けない。行きあたりばつたりに、心のまゝに書きなぐつて行つて見る。然しこの手記を書き上げてしまつたら、或は俺の生活の內容がはつきりして來るかも知れない。さうしたら俺のこれからの方針が自分にはつきりと分つて來るかも知れない。……けれども……はつきり分つたらどうすると、一體俺は思つてゐるのだ。その方針に從つて、俺は一定の進路を取つて、生活を完成することが出來るとでも思つてゐるのか。それは自分ながら蟲のよ過ぎる考へかたではないか。何んにもはつきりとは知らないで、亂雜な心のまゝで、今日々々を過ごして行く方が、結局はなし易いことかも知れない。なまじつか俺がどんな運命の下に生みつけられたかを知つて見ろ。その瞬間に俺は氣違ひになるか自殺する外に道がなくなるのかも知れない。

一と眼覗いて見たら氣が遠くなつてひとりでに輾げ落ちるほどに險しい千丈の谷があるとする。その谷に渡された釣橋、その橋の橋桁は處々腐りが入つて、それをからめた藤蔓も摩擦の爲めに細くなつて、何時ぷつりと千

切れるか判らない。そこをどうしても渡つて向うの崖まで辿りつけと、否應なしに命令された場合、恐らく眼をつぶつて手さぐり足さぐりでそれを渡る外にいゝ渡り方はあるまい。眼を開いてゐるために一歩々々死の恐怖に脅かされてゐなければならないとは、迚も人間業には及ばないことだ。けれども同時に人間には不思議な欲求がある。眼をつぶつて行けばいゝものを、時々眼を開いて見たくなることだ。それは一番危險なことに極り切つてゐる癖に、眼を開いて見たら萬が一にも奇蹟のやうな不思議が現じてゐて、その釣橋が最新式の鐵橋に變つてゐはしないかとでもいふやうな妄想に誘はれるのだ。そんなことが出來たらこの世の中にまだ〳〵生きてゆく便りが十分にある。決してかゝる奇蹟は起り得ることではない。さう立派にたんのうしてゐながら、矢張り途中まで來ると眼を開けて見たくなるのだ。而してその誘惑に敗けた人は殆んど一人殘らず谷の底を眼がけて眞逆樣に落ちこんでしまふのだ。それさへ俺は知らないのではない。それだのに俺はかうして筆を執つて書きつゞけようとしてゐる。……殆ど一人殘らず……全くの一人殘らずではない。俺は自身が僅に安全である極く少數な人間の一人であらうとしてゐるのか。さうかも知れない。兎に角今でも俺に確かなことは何といつても生きてゐたいといふことだ。萬一を僥倖しても生きてゐたいといふことだ。このさもしい俺を俺は單に憫笑ばかりしてはゐられないのだ。總ての俺の過去を書き上げて見た時、俺が俺自身をはつきり眼の前に据ゑて見ることが可能になつた時、生きてゐられる筈のなさゝうな俺だけれども、どうかして奇蹟のやうにそこから確かな生に對する一路が開けゐたりはしないか、自信を以て生命を續けて行けるやうな視野が開けて來はしないだらうか……そんなことを！それは馬鹿々々しい夢想だとは思ふけれども……矢張俺は自分の過去を見詰めて見ずにはゐられなくなつたのだ。

俺は今自分の足の下にどんな深淵が思ひ存分に口を開けて俺を待つてゐるかを、眼を開いて見ようとしてゐる

のだ。俺のさうするのを誰も賛成してくれる人はない。……而して可なり淋しいことには誰も妨げようとする人もない。

呀！　あぶない。眼を開くな！……さういふ聲を俺は今まで求めあぐねてはしなかつたか。けれどもそれは何處からも來る聲ではない。俺の周圍は永遠の死の如く靜かだ。俺は眼を開く……俺は書く。

*　　*　　*

おあさは納戸の中に閉ぢこめられて徐ろに近づいて來る死を待つてゐるのだ。

俺の祖父もさうだつた。而しておあさよりはもつと不幸だつたのかも知れない。然し幸不幸は分らない。祖父の心持は俺には分らないのだから。

俺が九つの夏に祖父は七十三で亡くなつた。祖父が死んでも誰も俺に祖父のあるのを敎へてくれるものはなかつた。俺には祖父なんてものはないのだと思つてばかりゐたのだ。

俺が十二になつた年小學校を優等で卒業して無試驗でC市の中學校に入學した時、兄貴はその市の師範學校に學んでゐたが、C市からわざ〳〵迎へに來てくれた。俺は大嫌ひな家であつたが、家を出るのがやつぱり悲しかつた。皆んなに大門際まで送り出されて、とぼ〳〵と兄貴のあとを、兩手に風呂敷包二つをさげて跟いて歩いた。四月に似合はない寒い雨の間遠に降る日だつた。風がやむ……一つ二つ蛙の鳴き聲がする。新米の泥坊が人の寢息でも窺ふやうに、臆病さうに鳴き出す。急に寒い風が吹く。多勢をあてにして思ひ切つて鳴き出したやうな蛙の聲が一氣にやむ。兄貴は可なりな大きさの葛籠を背負つて、ひよろ長い脚を克明に運ばして歩いてゐたが、何か思ひ入つたやうな樣子でひどく不機嫌らしかつたから、俺は言葉もかけずに默つてあとにくつついてゐた。長榮寺の手前の山端まで來ると、兄貴は後ろを俺に見せたまゝで、そこに立つてゐる石碑をよく覺えておけといつた。そ

れはこの邊では一寸珍らしいやうな大きな黑つぽい平らな面に、漢文で何か長たらしく書き連ねてある石碑で、その頃の俺に讀めるやうな文字はさう澤山はなかつた。兄貴は何を考へてあんなことをいふのかと俺は思つた。山を登つて切通しの邊に來ると、雨の脚が急にしげくなつて時雨のやうだつたから、二人は石段を上つて明神の社で暫く雨宿りをした。その廣緣に腰かけてゐる間でも兄貴は妙に默りこくつてゐたが、思ひ出したやうに、鳥居の所まで行つてそこに上げてある額を見て來いといつた。俺は仕方なしに雨の降る間をじよび〳〵やりながら一度潛つた鳥居の所に行つて、上の方を振り仰いだ。雨の滴が顏中に降りそゝいで邪魔になつたが、それでもそこにかけてある古ぼけた額に「照明威神」と彫りつけてあるのだけは讀めた。俺は緣に腰かけると、せう事なしに默つたまゝで廣前に生ひ茂つた草原を見入つて、雨の爲めに花瓣をつぼめてしまつた蒲公英の花を數へはじめた、端の方から數へて行つて十五位まで來ると、數へた花と數へない花との差別がつかなくなつて、又始めからやりなほさねばならなかつた。動ともすると水月にこみあげて來る淚を追ひやるつもりで俺は一心になつて數へなほしてゐた。と、やゝ暫くしてから兄貴がはじめて俺に向つてものを云ひ出した。生れつきの持ち前ではあつたが、その時の兄貴の聲は薄氣味が惡いほどに沈んでゐた。その話の筋はかうだつた。

俺の祖父といふのは信右衛門といつて、明神の社の後から、行く手の坂下に見える森の中の家から俺の所に養子に來た人ださうだ。俺の祖父の曾祖父といふのが分家してはじめて一家を立てたのだが、無上に働いた人だと見えて、一代の中に谷では本家を淩ぐ位に身代を盛り上げて、今のあのだゞつ廣い屋敷を立てた。曾祖父は一人の娘の外に子寶は授からなかつたので、信右衛門を養子に貰ひ受けたのだ。信右衛門といふ人は田舍には珍らしい學問の好きな人で自分の名を信衛と改め、文章の號を則天、書の號を米谷といつた。學問は殆ど獨學だつたが、書は米庵に學んで、師匠から十哲の一人に選ばれたといふのだ。曾祖父は割合に早死をしたが、祖父はその祖父に

あたる俺の家の創立者の志を嗣いで家業にも精を出した。朝は夏冬の差別なく今の三時半頃には起きて、昨日捕つておいた鰌を馬に積んで、山越えをして六里も離れた濱野村の市まで賣りに行き、晝近く歸つて來ると晝飯もそこ〳〵に田におり立つて、小作と一緒に百姓に精を出した。而してそれを一日も怠ることがなかつた。そのお蔭で家業は益〻裕かにはなるし、隣り近所の人達も信衞には萬事一目おいて、その指圖に從つた。祖父は吉田松陰の崇拜者で、自分は朱子學を修めた人だつたけれども、革命家肌の所があつて、自分の屋敷の中に小さな小屋をしつらへて、そこで近所の子弟の教育をやり始めた。「則天草舍」といふ小つぽけな名札が今でもその小屋の入口に煤ぼけてかゝつてゐる。祖父の義弟にあたる參助といふ人と、その友達の三輪益といふ人とが、祖父の刎頸の友で、この三人が心を合せて夜學の仕事を分擔した。三輪益といふ人は戊辰の役に田舍を飛び出して官軍に從つて、敵彈を三所に受けて戰死したといふことだ。祖父はそれから妙に氣が摧けて稼々家の世話などはしなくなつたが、學問の方には益〻凝り出して、仕舞には氣が變になりはしないかと參助などが心配し出した程だつた。而して段々參助とも仲が思はしくなくなつて行つた。一體が克明な、眞正直な、一轍な人だつたゞけに、さうした思ひ屈した氣分になると、どん〳〵加速度が加つて、仕舞には則天草舍といふ例の夜學塾の一間から滅多に顏を見せなくなつて、夜晝作詩と習字ばかりに過すやうになつた。夜學に通ふ子供達も何となく窮屈に思ふのだらう、一人減り二人減りして、段々數少なになつた。明治十年の西南役が勃發した時は、祖父は頻りと西郷隆盛に同情して、大久保利道を奸臣だと憎んで、その當時半年ばかりC町に出て勉強してゐたが、そこにある小さな新聞のやうなものに、時の政府に對する可なり過激な彈劾を送つたとかいふので、警察から睨まれたりしたことがあるが、皇室に對してはどこまでも柔順な臣民であらうとした。だから戰爭が終ると七言の長詩を作つて、時の太政官に獻じたりした。それはかういふのだと兄貴は小倉服の衣嚢の中から小さな手帳を取り出して、その手帳にはさん

である細い鉛筆ですら〳〵とその詩を書いて俺に讀んで見ろといつた。俺には勿論讀めなかつた。その詩があの山端の石碑に彫りつけてある漢字の塊りだといふ事を兄貴は敎へてくれた。C市に住むやうになつてから、兄貴がよくその詩を朗吟して俺にも眞似をさせたので、今だに俺はそれを諳記してゐる。それはかういふのだ。

「兵氣消作太平春。柳綠花紅天地新。家國休咎賓由人。俯仰乾坤感泰眞。至德馨香格明神。明神眷顧降福頻。吾生幸遇隆治辰。眼看邦威罩四隣。不才固非李杜倫。弄翰亦不免套陳。只能憂道不憂貧。毀譽一瞥輕如塵。世苦俗酸比八珍。文雅有味美於醇。行路不復說嶙峋。吟嘯悠然作鶯脣。想汝去歲辭雙親。官學遂作遠遊身。莫向仙源漫問津。須察包魚不及賓。莫慕才人漫效顰。須省魯聖泣鱗遇。着決所不要逡巡。宜由屈裡求大伸。世波滔滔易沈淪。力行孜孜乃近仁。何亦進爲廊廟臣。承業三世亦妙因。更願養志厚且旬。武質文華期彬彬。庠序有設敎可中。安定民志護紫宸」

これで祖父の漢學の力量が大したものでなかつたのが略〻想像することが出來る。祖父は太政官にその詩を獻ずると共に、それを石碑に彫りつけさせてあの山端に建てたのだ。今だつて俺の谷にはそんなものはあれ一つしかありはしない。その當時のことだつたから、それは大變な谷中(やと)の評判だつたさうだ。

―けれどそれが祖父さんの最後の仕事だつたのだ。それから」―

と兄貴の顏は段々悒鬱(いふうつ)になつて行つた。若い時分の基督はあんな顏だつたらうと、俺は始終思ふのだが、兄貴のあの長めな、輪廓の極めて正しい、從つて不斷でもどこか淋しいその顏は、その時殊更曇りはてゝ、俺は何事をいひ出すのかと、次の瞬間が恐ろしいほどだつた。

明治十四年、即ち兄貴の生れる前の年から祖父には恐ろしい業病の徵候が見え出した。祖父は前にも云つたやうに則天草舍に籠りがちで、仕舞には寢食もそこでするやうになつてゐたから、家のものも始めは氣がつかない

でゐたが、やがてその顔面に徴候が現はれ出すと、家中には死神が取りついたやうな不安が漲り始めた。母のゐない留守におやぢと祖母とがひそ／＼と顔を近寄せて、神でなければ知らないやうな私語を取り交はした。而してその結果、祖父には實家まで行つて來ねばならぬやうな用が出來た。その假初(かりそめ)の用といふのは二時間か三時間で濟む筈のことだつたけれとも、祖父は死ぬまで再び養家には歸らなかつた。

實家では祖父は母屋の裏の納屋に續いて建てゝあつた小屋に住むやうにさせられた。如何なる人もそこに近づくことは許されなかつた。義弟の參助さへふつと顔を見せなくなつた。祖父はその小屋の中で段々に皮も肉も骨も腐つて行つたに違ひない。祖父の五體が利(き)かなくなると、食物さへ碌々あてがはなくなつたと村の人は誰いふとなく噂したさうだ。牛のやうな鈍い呻(うめ)き聲がやゝともすると道行く人の耳を襲つた。祖父はその家の爲めに一日も早く死なねばならなかつたのだ。

かくして俺の祖父は業病で死ぬよりも餓ゑの爲めに呻きながら死んで行つたらしい。それは俺が九つ、兄貴が十五の時のことだつたのだ。俺は片袖地藏尊のことは八つの歳でも知つてゐたが、祖父のことは兄貴の話を聞くまでは夢にも知らないでゐたのだ。

雨は降りつゞけてゐた。兄貴はそこまで話すと默つて下を向いてしまつた。俺は子供心にその場合何といつて纏まつた感じは起らなかつたけれども、俺の體中から有る限りの力をひつこ抜かれたやうで、耳がかーんと聾返つた氣持になつてゐた。雨は降りつゞけてゐた。生え揃つた青い草の上に、茅葺きの屋根から間遠に落ちる雨垂れが光つては落ち光つては落ちしてゐた。姦淫をし合つた兄弟のやうに俺達は顔を見合せる力もなく、物の音も聞こえず、寒暖もわきまへず、たゞ雨垂れがきらつ／＼と光つて落ちるのを意識の戸口で感じながら、身内を震はして並んで坐つてゐた。兄貴は祖父が死ぬ前からそのことは薄々氣付いて、怖(こは)いものを是非見たいといふあの氣

持から、人の噂や蔭口に耳を尖らしてゐたといふのだから、今更騷ぐべきではなかつた筈だが、何にも知らなかつた現在の弟がぶる／＼と震へて身じろぎもせずにゐるのを見ると、さすが自分の身にふりかゝつてゐる恐ろしい運命に、又新しくぴつたり觸れたのだらう。俺は默つて下を向いてゐながら、兄貴のあの澄み切つた眼から涙がこぼれかけてゐるのをまざ／＼と感ぜずにはゐられなかつた。

「これから人がどんなことをいふかも知れない。俺達が偉くなればなるほど、あの村の人達は何とか、かんとか、けちを附けるにきまつてゐる。けれども俺達はそんなことで氣を落しちやならねえぞ。……それからな、どんなことがあつてもこの事は他人にはいふな」

さういひ終らない中に兄貴はとう／＼泣き出してしまつた。それを見ると俺は胸がぎゆつと締まつて來て涙も出なかつた。

それから小半晌たつて、二人は默つたまゝでそこを發つたが、鳥居をくゞる時兄貴はふり返つて、「照明威神」と彫りつけてある頭の上の額に向つて心からのやうに頭を下げた。俺も買つて貰ひたての大黑帽を取つて兄貴のするとほりにした。祖父の書いた字だといふことがその時ひとりでに俺には會得されたから。

十二だつたけれどもその時から、その時から子供の心は俺から千里も遠くに逃げて行つてしまつたのだ。田舍では癩病の家柄をどれ程忌み嫌つてゐるかを誰でも知つてゐるだらう。俺だつて小さかつたけれどもその一人だつた。かつたい坊の乞食巡禮にでも出喰はすと俺達少年はどんな氣持でどんな眞似をしてゐたか。癩病やみといふものこそ俺達とは何の縁もゆかりもない罰あたりだとばかり思つてゐた。人間の顏を出すところには、地びたに額をすりつけなければ顏出しの出來ない因果者だとばかり思つてゐた。人間の掃き溜めだと思つてゐた。人間の瘡痂だと思つてゐた。天子樣になる時はあつてもかつたい坊にはなれないものと思つてゐた。さう思ふ外に思ひ

やうが無かつたのだ。而してその病氣の人にでも行き遇ふと、公然と口から鼻に手をあてがつてやりすごした。而してその後から聲を揃へて、

「かーつたい坊、かつたい坊。花(鼻)はちりぢり、實(身)は壞える。かつたい坊の樫ん木棒やーい」

と唄ひはやしたものではなかつたか。

何處であらうと癩病患者を出した家は、隣りから隣りに戒め合つて、人なみの交際をしないのが習はしだ。緣組をした以上、俺の祖父の家族にはそれまでさうした病人が出たことはなかつたのかも知れない。然し兎に角兄貴のいふところはいゝ加減であらう譯がない。いゝ加減にそんなことをいふ必要が兄貴にあらうとはその時の俺にも考へられなかつた。俺は全くおびえてゐた。けれども事實そのものはどうしても信ずることが出來なかつた。俺は兄貴に跟いて歩きながら、とつおいつ考へこんでしまつてゐた。

でもかう考へることがすつかり俺を子供ではなくしてしまつたのだ。俺は子供のやうな心持をいつまでも失はないでゐる人を見ると羨ましく思ふ。羨ましく思ふといつた所が、その羨ましく思ふ心持は並大抵のことではない。多分俺でなければそんな心持は分らないとさへ思ふ。本當の仕事の出來る人間は、笑ふ時に子供のやうな顏になることとの出來る人ばかりだ。さういふ人は笑つてゐる時にも仕事が出來る。笑ふことが出來なくなると、その笑ひ方を恢復するために又仕事が出來る。けれども子供のやうな笑顏を金輪際封じつけられた人間には仕事の出來よう筈がないのだ。人間といふものは結局子供のやうな心と生活とに歸りたいが爲めに、ありとあらゆる努力をしてゐるのだ。人間の生活に起つて來る問題のどれを考へて見ても、その底を割つて行くと皆んなそこに納まつてしまふ、それが俺のやうに子供を奪ひ取られてしまつたものには一番よく分る。一番よくわかる俺のやうなものには、この樂しい仕事に參加する特權は根こそぎ奪はれてゐるのだ。だから俺は呪ひたい程度に子供の笑ひ

を失はない人間が美ましい。

十二の俺だつたけれども、兩手に風呂敷包をさげて、しよぼ〳〵と降る雨を、細い針金で織つたやうなごはした釣鐘マントに凌ぎながら、兄貴のあとに跟いて行つたその時は淋しかつた。祖父のことなどは信ずることが出來ないながら淋しかつた。それは今から考へて見ると、別れてはならない少年の心を、無理やりにもぎ取られつゝあつた爲めの淋しさだつたのだらう。祖父の里方のあるといふあの森を遙か左の方に見て、水嵩の增さつた精進川を渡ると、廣々と左右に擴がつた麥畑の間に、あの何時通つて見ても淋しい白砂の里道がうね〳〵と古市場の高臺の方に續いてゐた。麥は眞靑に延びて、葉每に雨滴が宿つてゐた。溝川にはもう水が引きこまれて、百姓達はあすこゝで苗代を作るに忙はしい樣子だつた。馬鍬を牽く馬も、それを追ふ人もいとだてに身をつゝんでゐたが、それが心まで濡れ透つてゐるのが遠くからでも十分わかつた。十日を過ぎればもう籾種の播き付けも來るのだと俺はその有樣を見やりながら思つてゐた。作男のやり方がいゝの惡いのとおやぢが疳の筋を額の眞向に高々と立てゝ、家中の空氣をどす黑く濁らす時が來るんだ。俺は今年はあのいやな目を見ないですむとほつとした心になりながらも、そのあとから何ともいへない淋しさが湧いて來て、熱い淚がさしぐまれたつけ。古市場に來た頃にはもう日ざしも思ひ存分傾いてゐた。燻ぶつたい夕餉の煙が霞のやうに低く往來に棚引いて、味噌汁や燒魚のしつこい香の漂ふ間を、兄貴はこの家あの家へと步きながら挨拶を送つてゐた。小學校の前を通る時には俺は我慢にも喉をぐび〳〵やつて泣かずにはゐられなかつた。糞でも喰らへと思つてゐたこの學校は、どうして俺をかう泣かせるのだらうと俺は口惜しくさへ思つた。而して重い風呂敷諸共右の手をマントから出して、汚ない握り拳でやたらに眼と鼻とをこすり付けた。

「信ちやん、どけへ行くだ」

同級生のそんな聲が時々暗い家の中からすることもあつた。そんな時だけは淋しい中にも俺はやゝ得意で、買ひ立ての帽子が氣になつたりした。無試驗で入學が出來るばかりで、俺は中學などにやられることになつたのだが、この界隈で小學以上の教育を受けるやうな子は一人もなかつたのだ。

「中學に行つたらくたばる位勉强してくれるぞ」

俺は歩きながら、何かの刺戟を受ける度毎に思ひ入つてゐた。祖父のことについての兄貴の言葉がもう俺にはいゝ加減形をかへて響いてゐたと見える。

二人は濡れたまゝで默りこくつて歩き續けた。不斷から口重もな質ではあつたけれども、その日の兄貴は又格別だつた。理由は勿論判らないが、俺の中學に這入るやうになつたことでもひどく癇癪の種にしてゐるのではないかと思ふほどだつた。古市場はいつの間にか後になつて、俺達は桑畑の間を歩いてゐた。やがて俺達は片袖地藏の所に來た。名も分らないやうな灌木が滅茶苦茶に一叢茂つてゐる、その下に小つぽけな石塔や、卒塔婆が眞黑に雨に濡れて亂雜に列んでゐた。その眞中に例の地藏樣が、柔和な相をしてやゝ俯向ぎにぽつりんと立つてゐた。俺はそれを見るとふと例の左五郎のお上さんの事をまざ〳〵と思ひ出して折からの暮色に一種の無氣味さも感じたし、兄貴にお世辭をするといふ程でもないが、何か話の緒口でも引き出して見たい氣になつたので、後から、

「兄ちやん、左五郎がお上さんの死んだ時はおつかなかつたなあ」

といつて見た。所が何とかいつて答へるだらうと思つた兄貴は、いきなり振り向くと、險のある眼付をして俺を暫くの間睨みつけてゐた。謂はゞ「情けない奴だなあ」といふやうな表情が俺を全くまごつかした。何しろ兄貴とは年が六つも違つてゐるのだから、而も三年近くも別れてゐたのだから、俺には兄貴の思はくが皆目わからなくなつて、そのまゝ又默りこんでしまはねばならなかつた。俺はこの時ほど自分の骨肉を遠々しく思つたこと

はない。

今になつて見るとその時の兄貴の心持が俺にも分る。兄貴がそれまで心一つに仕舞つておいた佐間田一家の大祕密を、俺の年が進むにつれて他人の口からでも聞くやうなことがあつてはならぬと思ひ、一つには俺の心を引き締めておくいゝきつかけだと思つて、腸をかきむしられるやうな心持で打ち明けたに違ひないのだが、俺の最初に兄貴に切り出した言葉は途轍もない左五郎のお上さんのことだつたので、兄貴は例の氣性から思はず知らず嚇となつたに違ひないのだ。

物の三四町も行つた頃、兄貴はまた後を俺に向けたまゝで、

「信次はこれから俺のことを兄ちやんなんかいふと人に笑はれるぞ。兄さんといふだぞ」

といつてたしなめた。その時の俺は何を兄貴があんなに怒つてゐるのだらうと不審に思つてゐた矢先なので、兄貴のその言葉を聞くと何よりも情なかつた。そんなことで何もあんな怖い顔をして見せなくつたつていゝぢやないかと思つた。さうしたら俺は、重くつて仕樣のなかつた風呂敷包を、その場で泥道に投げ捨てゝわつと聲を立てゝ泣きたくなつてしまつてゐた。

それから半年ばかりの間、俺は兄貴のことを兄ちやんとも兄さんともいはなくなつてしまつたつけ。

I町に這入つた時には、もう家々にランプがともされてゐた。俺の眼に這入る光はどの光といはず、輪廓が薄ぼんやりとしてゐて、先の尖つた十字形が、ちか〳〵と光つて、神經質な磁針のやうに右に動いたり左に動いたりしてゐた。涙が眼にたまつてゐたのでさう見えたのだらう。

その晩は作造叔父の家で厄介になつた。疲れたらうといふので、飯を仕舞ふと俺は帳場の隣りのむさつ苦しい六疊の間に寢かされた。帳場では叔父夫婦と兄貴とが晩くまで俺の家のことについての話をしてゐた。薄つぺらな

板戸にランプの灯が射すので、眞黑になつた六疊の間から見ると處々が血のやうに赤かつた。俺はそれまで他人の家で寢たことがつひぞなかつたので、眠られも何もすることではなかつた。血の色の板戸が眼に邪魔になるので寢返りをうつと、そこにある中塗りのまゝの泥壁は少しばかりの光でも吸ひ込んでしまつてたゞ眞暗だつた。それも何か無氣味だつた。

寢られぬまゝに俺は先から先へと種々なことを妄想に描いてゐた。一番手近かに考へられるのは祖母の寢床だつたやうだ。祖母は早起きだつたから、竈に火をたきつけるのが役目で、臺所に近い座敷に俺と寢るのだつた。俺の側には姉が寢てゐた。佛壇のすぐ前に祖母が寢てゐたが、どうかした物音で俺がふと眼が覺めると、帶をほどいて寢支度をしてゐる姉と祖母とが、低い聲で話をしてゐることなどがあつた。姉は今時分に寢るんだなとうつゝ心で思ひながら、何時とも見當のつかない夜の闇の中に、俺は安心した心持になつて、引き入れられるやうに又寢入つて行く、その安々とした氣持の快さといつたらなかつた。今夜は屹度祖母は寢つかれないでゐるだらう。さうしてさういふ晩に限つてするやうに、煙草を呑んでは煙管をいきなり灰吹きにたゝきつけずに、骨ばつた手の平にあてゝこつり〳〵と鈍い音をたてゝゐることだらう。さう思ふと闇の中でぽかり〳〵と一つ光る眞赤な火の色や、それにつれて鼻をかすめるいがらつぽい匂ひまでが俺にはまざ〳〵と想像された。ひよつとするとそのいがらつぽい匂ひは叔父のゐる隣りの部屋から漏れて來るのではないかと思ふほどまざ〳〵としたものだつた。

「お前はやつと師範學校だに、信次の奴、中學校とは强勢なものだな」

「わしがの時は家の暮しがいつち惡い時だつたから」

「それだとつて兄貴をさしおいたやうな仕打ちつたらなかつぺい」

「さうでもねえ、師範でも中學でも大した變りはないから」

さういふ會話が帳場の方から聞こえたりした。俺は思はず耳を欹てた。兄貴は叔父に向つて口の先ではあゝいつてゐるが、本心はどんなものだらう。兄貴が今日特別に默りがちに不機嫌なのも叔父の云ひあてたやうなことが原因になつてゐるのではないか。兄貴があの通り几帳面で、決して親のいふことなど反かない質であるのに、妙におやぢに疎々しくもてあつかはれて居り、俺は又片意地が強くて、何につけても我を通したがる生まれであるのに、而しておやぢは眼の敵のやうに俺を叱りつけてゐる癖に、考へて見ると俺に一番心を入れてゐるやうにも見える、そんなことまで幼いながら俺は考へて、何んだか兄貴に濟まないやうな氣持になつてしまつた。

「中學は月いくらかゝる」

と又叔父の聲がした。

「さあ二十圓もかゝつかなあ」

と兄貴は氣の無さゝうな答へをしてゐた。

「ふむ」

と叔父が煙管を右手に持つたまゝ、腕組をして考へなくてもいゝことを考へるやうな風付をしてゐるらしい氣配がした。

「來年の四月には俺が卒業すつから、そしたら初代でも呼んで、三人で家でも持つたら安くあがるかと思つてゐます」

兄貴が暫くしてから、古くから計畫してゐたことを切り出すやうにいひ出した。俺は苦しいほど眼が冴えて、又杉戶の方に寢返りをうつた。帳場の話聲が一入はつきり耳にとゞく。

「そしたら百姓の方をどうするだえ」

叔母が兄貴の言葉を引つたくるやうに小やかましい聲でかういつた。
「全くだ。お前の所では學問だ〳〵ばかりいつて、まるで暮しのことなんざ考へては爲ねえがだ。……元はといふとおやぢが悪いだ。百姓の癖にやたら見識ばあでつけいかんな」
叔父は叔母の言葉に同じてとゞめをさすやうに、少し聲を大きくかういつた。兄貴は何にも答へなかつた。おやぢの前に出ると、おやぢのいふことを何でもかんでも尤も〳〵と合槌を打つてゐる叔父が、こんなことをいひ出さうとは俺には意外なことだつた。兄貴が何にも云ひ返さないのが齒痒くさへあつた。
いつの間にか可なり夜は更けてゐるらしかつた。叔父の家からは十四五丁も離れてゐるのに、さすがは外海だけに岸が荒いと見えて、鈍い、力の強い波の音が、斷續のない遠雷のやうに聞こえ始めた。而して俺はやゝともすると隣りの話聲よりも、その音の方に引き入れられて、遠い國にでも來てしまつたやうな心になりながら、少しづゝ睡氣を催してゐた。
「お前等いまに學問でもして威張り散らす氣でゐるだらうが……」
そんな叔父の聲がした。
「明日は俺もIまで種物の買出しに行くかんな……この茶はこれでこゝいらには無い上種だあ……何せ費用のかからないやうにやつていかねえとお前のとこはぶつつぶれるかんな……」
叔父の聲ばかりが切れ〳〵に俺の耳に這入つた。眠むい中にも俺は叔父の心持が知りたかつたのだらう。
その晩俺は夢ばかり見續けてゐたやうに思ふ。眼が覺めたら、俺の右と左に祖母と姉との起き出した空の寢床がある代りに、兄貴が床の上に胡坐をかいて、俺の持つて來た風呂敷包みの一つから齒楊子や手拭を出してゐた。
俺は、どうした譯だつたか、眼が覺めると同時に祖父のことを思ひ出してゐた。而していやあな氣持にさせられ

てゐた。

それからといふもの、俺が祖父の晩年に起つた忌はしい事件を思ひ出すのは決つたやうに朝眼が覺めた時といふことになつた。一番快活な、勇み立つた氣分になるべき時に。（未完結）

（一九二〇年春作）

星　座

＊

その日も、明けがたまでは雨になるらしく見えた空が、爽やかな秋の朝の光となつてゐた。
咳の出ない時は仰向けに寢てゐるのがよかつた。さうしたまゝで清逸は首だけを腰高窓の方に少しふり向けて見た。夜のひきあけに、いつもの通り咳がたてこんで出たので、眠られぬまゝに厠に立つた。その歸りに空模様を見ようとして、一枚繰つた戸がそのまゝになつてゐるので、三尺程の幅だけ障子が黄色く光つてゐた。それが部屋を餘計小暗く感じさせた。
隣りの部屋は戸を開け放つて戸外のやうに明るいのだらう。さうでなければ柿江も西山もあんな騷々しい聲を立てる筈がない。早起きの西山は朝寢の柿江をとう〳〵起してしまつたらしい。二人は慌てゝ學校に出る支度をしてゐるらしいのに、口だけは悠々とゆうべの議論の續きらしいことを饒舌つてゐる。やがて、
「おい、その馬鹿馬(はかま)をこつちに投げてくれ」
といふ西山の聲が殊更際立つて聞こえて來た。清逸の心はかすかに微笑んだ。
ゆうべ、柿江のはいてゐるぼろ袴に眼をつけて、袴ほど今の世に無意味なものはない。袴をはいてゐると白痴の馬に乘つてゐるのと同じで、腰から下は自分のものではないやうな氣がする。袴ではない馬鹿馬だと西山がいつたのを、清逸は思ひ出したのだ。
隣りのドアがけたゝましく開いたと思ふと清逸のドアがノックされた。

「星野、今日はどうだ。まだ起きられんのか」

さう廊下から不必要に大きな聲を立てたのは西山だつた。淸逸は聞こえる聞こえないもかまはずに、障子を見守つたまゝ「うん」と答へたゞけだつた。朝から熱があるらしい、氣分はどうしても引き立たなかつた。その上淸逸にはよく考へて見ねばならぬ事が多かつた。

けれども西山達の足音が玄關の方に遠ざからうとすると、淸逸は淺い物足らなさを覺えた。それは淸逸には奇怪にさへ思はれることだつた。で、自分を強ひるやうにその物足らない氣分を打ち消すために、先程から明るい障子に羽根を休めてゐる蠅に強く視線を集めようとした。その瞬間に然し淸逸は西山を呼びとめなければならない用事を思ひついた。それは西山を呼びとめなければならない程の用事であつたのだらうか。兎に角淸逸は大きな聲で西山を呼んでしまつた。彼は自分の喉から老人のやうにしはがれた虛ろな聲の放たれるのを苦々しく聞いた。

「さあ園の奴まだゐたかな」

さう西山は大きな聲で獨語しながら、けたゝましい音をたてゝ階子段を昇るけはひがしたが、又ころがり落るやうに二階から降りて來た。

「星野、園はゐたからさういつておいたぞ」

その聲は玄關の方から叫ばれた。傍若無人に何か柿江と笑ひ合ふ聲がしたと思ふと、野心家西山と空想家柿江とはもつれあつてもう往來に出てゐるらしかつた。

淸逸の心はこの些やかな擾拌の後に元どほり沈んで行つた。一度聞耳を立てるために天井に向けた顏をまた障子の方に向けなほした。

十月の始めだ。けれども札幌では十分朝寒といつていゝ時節になつた。淸逸は綿の重い掛蒲團を頸の所にたく

し上げて、輕い咳を二つ三つした。冷え切つた空氣が障子の所で少し暖まるのだらう、かの一匹の蠅はそこで靜かに動いてゐた。黄色く光る障子を背景にして、黑子のやうに黑く點ぜられたその蠅は、六本の脚の微細な動きかたまでも清逸の眼に射込んだ。一番前の兩脚と、一番後ろの兩脚とをかたみがはりに拜むやうにすり合せて、それで頭を撫でたり、羽根をつくろつたりする動作を根氣よく續けては、何んの必要があつてか、素早くその位置を二三寸づゝ上の方に移した。乾いたかすかな音が、その度毎に清逸の耳をかすめて、蠅の元ゐた位置に眞白く光る像が殘つた。それが不思議にも清逸の注意を牽きつけたのだ。戸外(おもて)では生活の營みが色々な物音を立てのゝゐるに、清逸の部屋の中は秋らしく物靜かだつた。清逸は自分の心の澄むのを部屋の空氣に感ずるやうに思つた。

　矢張りおぬいさんは園に頼むが一番いゝ。柿江は駄目だ。西山でも惡くはないが、あのがさつさはおぬいさんにはふさはしくない。そればかりでなく西山は剽輕(へうきん)なやうで油斷のならない所がある。あの男はかうと思ひこむと事情も顧みないで實行に移る質だ。人からは放漫と思はれながら、いざとなると大摑みながらに急所を押へることを知つてゐる。おぬいさんにどんな心を動かして行くかも知れない。……

　蠅が素早く居所をかへた。

　俺はおぬいさんを要する譯ではない。おぬいさんは度々俺に眼を與へた。おいぬさんは異性に眼を與へることなどは知らない。それだから平氣で度々俺に眼を與へたのだ。おぬいさんの眼は、俺を見る時、少し上氣した皮膚の中から大きくつや〳〵しく輝いて、或る羞(はにか)みを感じながらも俺から離れようとはしない。心の底からの信頼を信じて下さいとその眼は云つてゐる。眼はおぬいさんを裏切つてゐる。おぬいさんは何にも知らないのだ。

　蠅がまた動いた。輕い音……

　おぬいさんのその眼のいふ所を心に氣づかせるのは俺にとつては何んでもないことだ。それは今までも俺には

可なりの誘惑だつた。……

清逸はそこまで考へて來ると眼の前には障子も蠅もなくなつてゐた。彼の空想の魔杖の一振りに、眞白な百合のやうな大きな花が見る〳〵蕾の弱々しさから日輪のやうにかゞやかしく開いた。清逸は香りの高い蕊の中に顏を埋めて見た。蒸すやうな、燒くやうな、擽るやうな、悲しくさせるやうなその香り、……その花から、まだ誰も嗅がなかつた高い香り……清逸は暫く自分をその空想に溺れさせてゐたが、心臟の鼓動の高まるのを感ずるや否や、振り捨てるやうに空想の花からその眼を遠ざけた。

その時蠅は右の方に位置を移した。

清逸の心に或る未練を殘しつゝその萬花鏡のやうな花は跡形もなく消え失せた。

園ならばいゝ。あの純粹な園にならおぬいさんが與へられても俺には不服はない。あの二人が戀し合ふのは見てゐても美しいだらう。二人の心が兩方から自然に開けて行つて、遂に驚きながら喜びながら互に抱き合ふのはありさうなことであつて、而していゝことだ。俺は兎に角誘惑を避けよう。俺はどれ程蠱惑的でもそんな處にまごついてはゐられない。而も今のところおぬいさんは處女の美しい粹潔さで俺の心を牽きつけるだけで、これは何時かは破れなければならないものだ。然しそれは誘惑には違ひないが、それだけの好奇心でおぬいさんの心を俺の方に眼ざめさすのは殘酷だ。……

清逸は下らないことをくよ〳〵考へたと思つた。而して前どほりに障子にとまつてゐる一匹の蠅に總ての注意を向けようとした。

しかも園が……清逸が十二分の自信を以て摑み得べき機會を……今までの無興味な學校の課業と、暗い淋しい心の苦悶の中に、たゞ一つ清淨無垢な光を投げてゐた處女を根こそぎ取つて園に與へるといふことは……清逸は

何んといつても微かな未練を感じた。而して未練といふものは微かであつても堪へがたい程に苦い……。清造は不圖この間讀み終つたレ・ミゼラブルを思ひ出してゐた。老いたジャン・ヴルジャンが、コーセットをマリヤスに與へた時の心持を。

階子段を規律正しく靜かに降りて來る足音がして、やがてドアが輕くたゝかれた。

その瞬間清逸は深く自分を恥ぢた。それまで彼を困らしてゐた未練は影を隱してゐた。

顏は十七八にしか見えない程若く、それ程規則正しい若さの整ひを持つてゐるが、二十二になつたばかりだと思へない位落付きの備はつた園の小さな姿が、淸逸の寢床近くきちんと坐つたらしかつた。

淸逸は園が側近く來たのを知ると、何故ともなく心の中が暖まるのを覺えて、今までの物臭さに似ず、急いで窓から戸口の方に寢返つた。が、それまで眩ゆい日の光に慣れてゐた眼は、そこに瞳を痛くする暗闇を見出だすばかりだつた。その暗闇の或る一點に、見つゞけてゐた蠅が小さく金剛石のやうに光つてゐた。

「學校は休んだの」

眼をつぶりながら、それと思はしい方に顏を向けて淸逸はいつて見た。

「一時間目は吉田さんだから……僕に用といふのは何?」

低いけれども澄んだ聲、それは園のものだ。

「さうか。吉田のペンタゴンか。カルキュラスもあんないゝ加減ですまされては困るな。高等數學はしつかり解つておく必要があるんだが……」

淸逸は當面の用事をそつちのけにしてこんなことをいつた。そんなことを云ひながら、吉田教授をペンタゴンといふ異名で呼んだのが園に對して氣がひけた。吉田といふのは、まだ若くつて頭のいゝ人だつたが、北海道と

いふやうな處に赴任させられたのが不滿であるらしく、やゝともすると肝心な授業を捨てゝおいて、舊藩主の奥御殿に起つたといふ怪談めいた話などをして、學生を笑はせてゐる人だつた。さうした人に對しても、園は異名を用ゐて噂することなどは絶えてしなかつた。

「ほんとに困る。然しどうせ何んでも自分でやらないぢやならない學校だから構はないといへば構はないことだが……今日は少しはいゝの」

澄んで底力のある聲が、清逸の眼に段々明瞭な姿を取つてゆく園の方から靜かに響いた。健康を尋ねられると清逸はいつでも不思議に苛立つた。それに答へる代りに、何んとなくいひ澁つてゐた肝心の用事を切り出す外はなくなつた。清逸は首をもたげ加減にして、机の方に眼をやつた。而してその引き出しの中にある手紙を出してくれと頼んでしまつた。

園はすぐ机の方に手を延ばして、引き出しを開けにかゝつた。その時清逸は、自分の瞳が光つて、園の方に或る鋭い注意を投げてゐるのを氣付かずにはゐられなかつた。園が手紙を取り出した時、星野とだけ書いてある封筒の裏が上になつてゐたので、名宛人が誰であるかは固より判りやう筈がないのに、園の顏にはふと或る混亂が浮んだやうにも思へ、少しもそんなことがないやうにも清逸には思へた。清逸は又かゝることに注意する自分を腑甲斐なく思つた。而して思はずいら〳〵した。

「僕は多分明日親父に會ひに千歲まで歸つて來る。都合ではむかうの滯在が少し長びくかも知れない。出來るなら僕は秋の中に……冬にならない中に東京に出たいと思つてゐるんだがね。そんな事は貧乏な親父に相談して見た所で埒は明くまいけれども、順序だから話だけはして見る積りなのだ。……でその手紙をおぬいさんにとゞけてくれないか。僕は熱があるやうだから行かれないと思ふから……おぬいさんが聞いたら千歲の番地を知らせて

やつてくれ給へ、……聞かなかつたらこつちからいふには及ばないぜ……それからね、手紙にも書いておいたが、僕の留守の間、おぬいさんの英語を君に見てもらふ譯には行かないかね」

いら／＼しさにまかせて、清逸はこれだけのことを疊みかけるやうにいつて退けた。總てを清逸は今まで園にさへ打ち明けないでゐたのだつた。清逸に取つてはこれだけの言葉の中に自分を苦しめたり鞭つたりする多くのものが潜んでゐるのだ。

清逸は何んといふことなく園から眼を放して仰向けに天井を見た。白い安西洋紙で張りつめた天井には鼠の尿でゞもあるのか、雲形の汚染が所々に出來てゐる。象の形、スカンディナヴィヤ半島のやうにも、背中合せの二匹の犬のやうにも見える形、腕の附け根に起き上り小法師の喰付いた形、醜い女の顔の形……見なれ切つたそれらの奇怪な形を清逸は順々に眺めはじめた。

さすがの園も色々な意味で少し驚いたらしかつた。最後の瞬間までどんなことでも胸一つに納めておいて、切り出したら最後貫徹しないではおかない清逸の平生を知らない園ではない筈だ。だがあの健康で明日突然千歳に歸るといふことも、おぬいさんに英語を敎へろといふことも、凡てがあまりに突然に思へたらしかつた。清逸が、象の形、スカンディナヴィヤ半島のやうにも、背中合せの二匹の犬のやうにも見える形、腕の附け根に起ち上り小法師の喰付いた形から醜い女の顔の形へ視線を移した頃、

「では君もいよ／＼東京に行くの」

と園が云つた。而しておぬいさんの手紙を素直に洋服の內衣嚢にしまひこんだ。

園はおぬいさんに牽きつけられてゐる、おぬいさんについては一言もいはないではないか。……清逸はすぐさう思つた。それともおぬいさんには全く無頓着なのか。兎に角その人の名を園の口から聞かなかつたのは……そ

れは矢張り物足らなかつた。園の感情がいくらかでも動くのを清逸は感じたかつたのだ。
「西山君も行くやうなことをいつてゐたが……」
園は間をおいて無理につけ足すやうにこれだけのことをいつた。
西山がそんなたくらみをしてゐるとは清逸の知らないことだつた。清逸は心の奥底ではつと思つた。自分の思ひ立つたことを西山づれに魅けされるのは、清逸の氣象として出抜かれたといふかすかな不愉快を感じさせられた。
「尤も西山君のことだから、云ひたい放題をいつてゐるかも知れないが……」
清逸の心の裏をかくとでもいふやうな言葉が暫くしてからまた園の唇を漏れた。清逸はかすかに苦しい顔をせずにはゐられなかつた。
二時間目の授業が始まるからといつて園が座を立つたあと、清逸は溜息をしたいやうな衝動を感じた。それが惡るかつた。自然に溜息が出たあとに味はれるあの特殊な淋しいくつろぎは感ずることが出來ながつた。園が出て行つた戸口の方に物憂い視線を送りながら、このだゞ廣い汚ない家の中には自分一人だけが殘つてゐるのだなとつくづく思つた。
ふと身體中を內部から輕く蒸すやうな熱感が萠して來た。この熱感はいつでも清逸に自分の肉體が病菌によつて蝕まれて行きつゝあると云ふことを思ひ知らせた。喀血の前には屹度この感じが先驅のやうにやつて來るのだつた。
清逸はわざと沒義道に身體を窓の方に激しく振り向けて見た。窓の障子は大分高くなつた日の光で前よりも更に黃色く輝いてゐた。
然し何處に行つたのか、かの一匹の蠅はもうそこにはゐなかつた。

た。

"Magna est veritas, et praevalebit."

それが銘だつた。園はその夜拉典語の字書をひいてはつきりと意味を知ることが出來た。いゝ言葉だと思つた。

＊　＊　＊

段と段との隔たりが大きくておまけに狹く、手欄もない階子段を、手さぐりの指先に細かい塵を感じながら、折れ曲り折り曲りして昇るのだ。長い四角形の筒のやうな壁には窓一つなかつた。その暗闇の中を園は昇つて行つた。何んの氣だか自分にもよくは解らなかつた。左手には小さなシラーの詩集を持つて。頂上には、主に堅い木で作つた大きな齒車や槓杆の簡單な機械が、どろ〳〵に埃と油とで黑くなつて、秒を刻みながら動いてゐた。四角な箱のやうな機械室の四つ角にかけわたした梁の上にやつと腰をかけて、おづ〳〵手を延ばして小窓を開いた。その小窓は外から見上げると指針盤の針座のすぐ右手に取りつけられてあるのを園は見ておいたのだ。窓は易々と開いた。それは西向きのだつた。そこからの眺めは思ひの外高い所にあるのを思はせた。直き下には、地方裁判所の樺色の瓦屋根があつて、その先には道廳の赤煉瓦、その赤煉瓦を圍んで若芽をふいたばかりのポプラが土筆のやうに叢がつて細長く立つてゐた。それらの上には春の大空。光と軟かい空氣とが小さな窓から犇めいて流れ込んだ。

機械室から暗窖のやうに暗み亙つた下の方へ向けて、太い二本の麻繩が垂れ下り、その一本は下の方に、一本は上の方に靜かに動いてゐた。繩の末端に結びつけられた重錘の重さの相違で繩は動くのだ。繩が動くにつれて齒車はきり〳〵と低い音を立てゝ廻る。

左の足先は階子の一番上のをどり段に賴んだが、右の足は宙に浮かしてゐるより仕やうがなかつた。その不安

定な坐り心地の中で詩集が開かれた。「鐘の賦」といふ長い詩のその冒頭に掲げられた有名な鐘銘に眼がとまると、園はこゝの時計臺の鐘の銘をも知りたいと思つた。ふと見ると高さ二尺程の鐘はすぐ眼の先に塵まぶれになつて下(さが)つてゐた。“Magna est veritas, et praevalebit.”……園にはどうしても最後の字の意味が考へられなかつた。寫眞で見る米國の自由の鐘のやうに下の方でなぞへに裾を擴げてゐる。その擴がり方といひ勾配の曲線の具合といひ、並々の匠人の手で鑄られたものでないことをその鐘は語つてゐた。

農學校の演武場の一角にこの時計臺が造られてから、誰と誰とが危險と塵とを厭はないでこゝまで昇る好奇心を起したことだらう。修繕師の外には一人もなかつたかも知れない。而して何年前に最後の修繕師がこゝに昇つたのだらう。

札幌に來てから園の心を牽きつけるものとてはさう澤山はなかつた。唯この鐘の音には心から牽きつけられた。寺に生れて寺に育つた故なのか、梵鐘の音を園は好んで聞いた。上野と淺草と芝との鐘の中で、增上寺の鐘を一番心に沁みる音だと思つたり、自分の寺の鐘を撞きながら、鳴り始めてから鳴り終るまでの微細な音の變化にも耳を傾け慣れてゐた。鐘に慣れたその耳にも、演武場の鐘の音は美しいものだつた。

殊に冬、眞晝間でも夕暮れのやうに天地が暗らみ亙つて、吹きまく吹雪の外には何の物音もしないやうな時、風に揉みちぎられながら澄み切つて響いて來るその音を聞くと、園の心は涼しくひき締つた。而して熱いものを眼の中に感ずることさへあつた。

夢中になつてシラーの詩に讀み耽つてゐた園は、思ひもよらぬ不安に襲はれて詩集から眼を放して機械を見つめた。今まで安らかに單調に秒を刻んでゐた齒車は、急に氣息(いき)苦しさうにきしみ始めてゐた。と思ふ間もなく突然暗い物隅から細長い鐵製らしい棒が走り出て、眼の前の鐘を發矢(はつし)と打つた。狹い機械室の中は響だけになつた。園

の身體は强い細かい空氣の震動で四方から押さへつけられた。又打つ……又打つ……丁度十一。十一を打ち切るとあとにはまた齒車のきしむ音が暫く續いて、それから元通りな規則正しい音に還つた。

餘りの嚴肅さに園は暫く茫然としてゐた。明治三十三年五月四日の午前十一時、——その時間は永劫の前にもなければ永劫の後にもない——が現はれながら消えて行く……園は時間といふものをこれほどまじ〳〵と見つめたことはなかつた。

心から後悔して園は詩集を伏せてしまつた。この學校に學ぶやうになつてからも、園には別れがたい文學への憧憬があつた。捨てよう〳〵と思ひながら、今までずる〳〵とそれに引きずられてゐた。一事に沒頭し切らなければ濟まない。一人の科學者に詩の要はない。科學を詩としよう。歌としよう。園は讀みなれた詩集を犧牲の如くに機械室の梁の上に殘したまゝ、足場の惡い階子段を靜かに下りた。

"Magna est veritas, et praevalebit."

その夜彼はこの鐘銘の意味をはつきり知つた。いゝ言葉だと思つた。「眞理は大能なり、眞理は支配せん」と譯して見た。一人の科學者に取つてはこれ以上に尊い箴言はない。而して科學者として立たうとしてゐる以上、今後は文學などに未練を繫ぐ姑息を自分に許すまいと決心したのだつた。

*　　*　　*

札幌に來る時、母が餞別にくれた小形の銀時計を出して見ると四時半近くになつてゐた。その時計はよく狂ふので、あまりあてにはならなかつたけれど、反射鏡を如何に調節して見ても、クロモゾームの配列の具合がしつかりとは見極められないので、およその時間はわかつた。園は未練を殘しながら顯微鏡の上にベル・グラスを被せた。いつの間にか助手も學生も研究室にはゐなかつた。夕闇が處まだらに部屋の中には漂つてゐた。

三年近く被り慣れた大黑帽を被り、少しだぶ／＼な焦茶色の出來合ひ外套を着込むともうすることはなかつた。廊下に出ると動物學の方の野村教授が、外套の衣囊の邊で癖のやうに兩手を拭きながら自分の研究室から出て來るのに遇つた。教授は不似合な山高帽子を丁寧に取つて、煤け切つたやうな鈍重な眼を强度の近眼鏡の後ろから覗かせながら、含羞むやうに、

「ライプチッヒから本が少しとゞきましたから何んなら見に入らつしやい」

と挨拶して、指の股を思ひ存分はだけた兩手で外套をこすり續けながら忙がしさうに行つてしまつた。何んのこだはりもなく研究に沒頭し切つてゐるやうな後姿を見送りながら、園は何んとなく恥を覺えた。それは教授に向けられたのか、自分に向けられたのか、はつきりしないやうな曖昧なものであつたが。

時計臺の丁度下にあたる處にしつらへられた玄關を出た。そこの石疊は一つ／＼が踏みへらされて古い砥石のやうに彎曲してゐた。時計の直ぐ下には東北御巡遊の節、岩倉具視が書いたといふ木の額が古ぼけたまゝかゝつてゐるのだ。「演武場」と書いてある。

芝生代りに校庭に植ゑられた牧草は、三番刈りの前で可なりの丈けにはなつてゐるが、一番刈りのとはちがつて、莖が細々と痩せて、折からのさゝやかな風にも揉まれるやうに靡いてゐた。而して空はまた雨にならんばかりに曇つてゐた。何んとなく荒凉とした感じが、もう北國の自然には逼つて來てゐた。

園の手は自分でも氣附かない中に、外套と制服の釦をはづして、內衣囊の中の星野から託された手紙に觸れてゐた。表に「三隅ぬい樣」、裏に「星野」とばかり書いてあるその封筒は、滑らかな西洋紙の觸覺を手に傳へて、膚ぬくみになつてゐた。園は淋しく思つた。而して氣がついてゆるみかゝつた步度を早めた。

碁盤のやうに規則正しい廣やかな札幌の往來を南に向いて步いて行つた。一しきり明るかつた夕方の光は、早

くも藻巖山の黑い姿に吸ひ込まれて、少し靄がゝつた空氣は夕べを催すと吹いて來る微風に心持ち動くだけだつた。店々には既に黄色く灯がともつてゐた。灯がともつたその低い家並で挾まれた町筋を、仕事をなし終へたと思しい人々が可なり繁く往來してゐた。道廳から退けて來た人、郵便局、裁判所を出た人、さう思はしい人々が辨當の包みを小脇に抱へて、園とすれちがつたり、園に追ひこされたりした。製麻會社、麥酒會社からの歸りらしい職工の群れもゐた。園はそれらの人の間を肩を張つて歩くことが出來なかつた。だから伏眼がちに益ゝ急いだ。

　大通りまで出ると、園は始めて研究室の空氣から解放されたやうな氣持ちになつた。而して自分が憚らねばならぬやうな人達から遠ざかつたやうな心安さで、一町に餘る廣々とした防火道路を見渡した。いつでも見落すことの出來ないのは、北二條と大通りとの交叉點にたゞ一本立つエルムの大樹だつた。その夕方も園は大通りに出るとすぐ東の方に眼を轉じた。エルムは立つてゐた。獨り、靜かに、大きく、寂しく……大密林だつた札幌原野の昔を語り傳へようとするものゝ如く、黄ばんだ葉に鬱蒼と飾られて……園はこの樹を望み見ると、それが經て來た年月の長さを思つた。その年月の長さがひとりでにその樹に與へた威厳を思つた。人間の歴史などからは受けることの出來ない底深い悲壯な感じに打たれた。感激した時の癖として、園はその樹を見る毎に、右手を鍵形に折り曲げて頭の上にさしかざし、二度三度物を打つやうに烈しく振り卸ろすのだつた。

　その夕方も園は右手を振らうとする衝動を何處かに感じたけれども、何かまたはゞむものがあつてそれをさせなかつた。衝動は徒らに內訌するばかりだつた、彼は急いだ、大通りを南へと。

　三隅の家の軒先で、園はもう一度衣嚢の手紙に手をやつた。釦をきちんとかけた。而して拭掃除の行き屆いた硝子張りの格子戸を開けて、默つたまゝ三和土(たゝき)の上に立つた。

　待ち設けたよりももつと早く――園は少し恥らひながら三和土の片隅に脫ぎ捨てゝある紅緒の草履から素早く

眼を轉ぜねばならなかつた――しめやかながらいそ〳〵近づく足どりが入口の障子を隔てた疊の上に聞こえて、やがて障子が開いた。おぬいさんがつき膝をして、少し上眼をつかつて、にこやかに客を見上げた。つゝましく左手を疊についた。その手の指先がしなやかに反つて珊瑚色に充血してゐた。

意外なといふ極々さゝやかな眼だけの表情、必ずさうであるべき筈のその人ではなかつたといふ表情、それが現はれたと思ふとすぐ消えた。園は兎にも角にもおぬいさんに微かながらも失望を感じさせたなと思つた。それはまた當然なことでなければならない。園を星野以上に喜んで迎へる譯がおぬいさんにはある筈がない。おまけにその日は星野が英語を敎へに來べき日なのだ。

「まあ……どうぞ」

といつておぬいさんは障子の後に身を開いた。園に對しても十分の親しみを持つてゐるのを、その言葉や動作は少しの誇張も飾りもなく示してゐた。……園は上り框に腰をかけて、形の崩れた編上靴を脱ぎはじめた。

いつ來て見ても園はこの家に女といふものばかりを感じた。園の訪れる家庭といふ家庭には勿論女がゐた。然しそこには同時に男もゐるのだ。けれどもおぬいさんは產婆を職業としてゐるその母と二人だけで暮してゐるのだから。

客間をも居間をも兼ねた八疊は楕圓形の感じを見る人に與へた。女の用心深さを以つてもうストーヴが据ゑつけてあつた。而してそれが鉛墨で見事に光つてゐた。柱のめくり曆は十月五日を示して、餘白には、その日の用事が赤心の鉛筆で細かに記してあつた。大きな字がお母さんで、小さな字がおぬいさんだといふことさへきちんと判つてゐた。部屋の中央にあるたものちやぶ臺には讀みさしの英語の本が開いたまゝ伏せてあつたが、その表紙には反物のたとう紙で綿密に上表紙がかけてあつた。男である園は、その部屋の中では異邦人であることをい

つでも感じないではゐられなかつた。
けれどもその感じは彼を不愉快にしないばかりでなく、反對に彼を慰めた。たゞ若いおぬいさんが普通の處女であつたなら、その處女と二人でさし向ひに永く坐つてゐるといふことは、園には自分の性癖から堪へがたいことだつたらう。彼はどんなに無害なことでも心にもない口をきくことが出來なかつたから。又處女に特有な嬌羞といふものをあたりさはりなく軟らげ崩して、安氣な心持で彼と向ひ合ふやうにさせる術を全く知らなかつたから。而して一般に日本の處女が持ち合はしてゐる話題は一つとして園の生活の圈内にはいつて來るやうな性質のものではなかつたから。童貞でありながら園は女性に對して無駄なはにかみはしなかつた。然し相手がはにかむ場合には園は默つて引きさがる外はなかつた。
けれどもおぬいさんの處ではそんな心配は無用だつたから園はなぐさめられたのだ。彼は持ち出された座蒲團の處にいつて坐つた。おぬいさんは机の上の讀みさしの本を慌てゝ押し隱すやうなこともせずに、靜かにそれを取り上げて部屋の隅に片づけた。
「學校の方で星野さんにお遇ひになりまして」
簡單な挨拶が終るとおぬいさんの尋ねた言葉はこれだつた。園は先づ星野のことが尋ねられるのが殊の外快かつた。その理由は自分にも解らなかつたけれども。
「星野君は今日も學校を休みました。この二三日また身體の具合がよくないさうで」
「まあ……」
おぬいさんの顏には痛ましいといふ表情が眼と眉との間にあからさまに現はれて、染まり易い頰がかすかに紅く染まつた。園はそれをも快く思つた。

「だから今日の英語は休みたいからといつて、今朝白官舍を出る時この手紙を賴まれて來たんですが……」

さういひながら園は內衣嚢から星野の手紙を取り出した。取り出して見ると自分の膚の溫みがそれに沁みついてゐたのに氣がついた。園はそのまゝ手紙をおぬいさんに渡すのを躊躇した。而してそれを手渡しする代りに、そつとちやぶ臺の冷たい板の上においた。

何んの氣なしに少しいそがしく手をさし出したおぬいさんは、園の輕い心變りに一寸度を失つて見えたが、さし出した手の向きをかへて机の上からすぐ手紙を拾ひ上げた。すぐ拾ひ上げはしたが、自分の膚の溫みはあの手紙からは消えてゐるなと園は思つた。園はさう思つた。園は右手の食指に染みついてゐるアニリン染色素をぢつと見やつた。

おぬいさんは園のゐる前で何んの躊躇もなく手紙の封を切つた。封筒の片隅を指先で小さくむしつておいて、結ひ立ての日本髮（極くありきたりの髷だつたが、何といふ名だか園は知らなかつた）の根にさした銀の平打の簪を抜いて、その脚でする〳〵と一方を切り開いた。その物慣れた仕草から、星野からの手紙が何通もあゝして開かれたのだと園に思はせた。それも然し彼に取つてゆめ〳〵不快なことではなかつた。

おぬいさんは立つてラムプに灯をともした。おぬいさんは生まれ代つたやうになつた……凡ての點に於いて。部屋の中も著しく變つた。恐らく夜の灯の下で變らないのはその場合園一人であつたに違ひない。

藍がゝつてさへ見える黑い瞳は素ばしこく上下に動いて行から行へ移つてゆく。而してその瞳の働きに應ずるやうに、「まあ」といふかすかな驚きの聲が唇の後ろで時々破裂した。半分程讀み進んだ頃おぬいさんはしつかりと顏を持ち上げてその代りに胸を落した。

「星野さんは明日お家にお歸りなさるさうですのね」

「さういつてゐました」
園もまともにおぬいさんを見やりながら。
「大丈夫でせうか」
「僕も心配に思つてゐます」
この時園とおぬいさんとは生れて始めてのやうに深々と顏を見合はせた。二人は明かに一人の不幸な友の身の上を案じ合つてゐるのを同情し合つた。園はおぬいさんの顏に、その外のものを讀むことが出來なかつたが、おぬいさんには園がどう映(うつ)つたらうか。と不埒にも園の心があらぬ方に動きかけた時は、おぬいさんの眼は再び手紙の方へ向けられてゐた。園は又自分の指先についてゐる赤い藥料に眼を落した。

おぬいさんが段々興奮してゆく。極めて薄手(うすで)な色白の皮膚が斑らに紅くなつた。斑らに紅くなるのは或る女性に於ては、極めて醜く而して淫(みだ)らだ。然し或る女性に於ては、赤子の外に見出されないやうな初々(うひうひ)しさを染め出す。おぬいさんのそれは固(もと)より後者だつた。高低のある積雪の面に照り映えた夕照のやうに。

讀み終ると、おぬいさんは折れてゐた所で手紙を前通りに二つに折つて、それを掌の間に挾んで暫くの間膝の上に乘せて伏眼になつてゐたが、やがて封筒に添へてそれを机の上に戻した。而して兩手で火照(ほて)つた顏をしつかりと押へた。互に寄せ合つた肘がその人の肩をこの上なく優しい向ひ合せの曲線にした。

園はおぬいさんのいふまゝに星野の手紙を讀まねばならなかつた。

「前略この手紙を園君に託してお屆け致候連日の乾燥の餘りにや健康思はしからず一昨日昨日は續けて喀血致候やうの始末につき今日は英語の稽古休みに致度不惡御容赦可被下候尙明日は健康の如何を問はず發足して歸省可致用事有之滯在日數の程も不定に候得者今後の稽古も何時に可相成や是亦不定と可被思召候就いては後々

の事園君に依賴しおき候得者同君に就き精々御勉强可然と存候同君は御承知の通り小生會心の一友年來起居を共にし共性格學殖は貴女に於ても御知悉の筈小生如きひねくれ者の企圖して及び得ざる幾多の長所あれば貴女に取りても好箇の畏友たるべく候（この邊まで進んだ時、おぬいさんが眼を擧げて自分を見たのだと思ひながらなほ讀みつゞけた）兎角は時勢轉換の時節到來と存候男女を問はず靑年輩の惰眠を貪り雌伏し居るべき時には候はず明治維新の氣魄は元老と共に老い候得者新進氣銳の徒を待つて今後のことは甫めて成すべきものと信じ候小生如きは既に起たざるべからざるの齡に達しながら碌々として何事をも爲し得ざること痛悔の至りに候殊に生來病弱事志と違ひ候は天の無爲を罰して然るものと自ら憫むの外無之候貴女はなほ弱年殊に我國女子の境遇不幸を極め居候得者因習上小生の所存御理解なり難き節もやと存じ寧ろ御同情を禁じ難く候得共決して女子の現狀に屛息せず艱難して一路の光明を求め出でられ候樣祈上候時下晩秋黃落頻りに候御自護可相成御母堂にも呉々も宜敷御傳へ可被下候

一八九九年十月四日夜　　星野生

三隅ぬい樣

どんな境遇をも凌ぎ凌いで進んで行かうとするやうな氣稟、いくらか東洋風な志士らしい面影、おぬいさんを遙かの下に見おろして、しかも僞らない親切心で物をいふ先生らしい態度が、蒼古とでも評したい程枯れた文字の背ろに燃えてゐると園は思つた。

同時に園の心はまた思ひも寄らぬ方に動いてゐた。それは或る發見らしく見えた。星野とおぬいさんとの間柄は園が考へてゐたやうではないらしい。おぬいさんは平氣で園の前でこの手紙を開封した。而してその內容は今

彼が自ら讀んだ通りだ。若し以前におぬいさんに送つた星野の手紙がもつと違つた內容を持つてゐたとすれば、おぬいさんがこの手紙を開封する時、あゝまで園の存在に無頓着でゐられるだらうか。

園はまた下らぬことにこだはつてゐると思つたが、心の奧で、自分すら氣付かぬやうな心の奧で、或る喜びがかすかに動くのを如何することも出來なかつた。それは何んといふ暖かい喜びだつたらう。その喜びに對する微笑ましい氣持が顏へまで波及するかと思はれた。園は愚かなはにかみを覺えた。

園は自分の前にしとやかに坐つてゐるおぬいさんに視線を移すのにまごついた。彼は自分が曾て持たなかつた不思議な經驗の爲めに、今まで女性に對して示してゐた態度の劇變しようとしてゐるのを感ぜずにはゐられなかつた。少なくともおぬいさんといふ女性に對しては。

星野のおぬいさんに對する態度はお前が考へたやうであるかも知れない。然しながらおぬいさんの心が星野の方に如何動いてゐるかを確かに見窮めて知つてゐるか……

園ははつと思つた。而してふと動きかけた心の奧の喜びを心の奧に葬つてしまつた。それは固より淋しいことだつた。然しむづかしいことではないやうに園には思へた。それらのことは瞬きする程の短かい間に、園の心の奧底に俄然として起り俄然として消えた電光のやうなものだつたから。而しておぬいさんがそれを氣取らう筈は固よりなかつた。

けれどもそれまで何んのこだはりもなく續いて來た二人の會話は、妙にぽつんと切れてしまつた。園は部屋の中が急に明るくなつたやうに思つた、おぬいさんが遠い所に坐つてゐるやうに思つた。

その時農學校の時計臺から五時をうつ鐘の聲が小さくではあるが冴え〴〵と聞こえて來た。

おぬいさんの家の界隈は貧民區といはれる所だつた。それ故夕方は晝間にひきかへて騷々しいまでに賑やかだ

つた。音と聲とが鋭角をなしてとげ〳〵しく空氣を劈いて響き交はした。その騷音をくゞりぬけて鐘の音が五つ冴え〴〵と園の耳もとに傳はつて來た。

それは胸の底に沁み透るやうな響きを持つてゐた。鐘の音を聞くと、その時まで考へてゐたことが、その時までしてゐたことが、捨ておけない必要から生まれたものだとは園には思はれなくなつて來た。來なければならぬ所に來てゐるのではない。會はなければならぬ人に會つてゐるのではない。云はなければならぬことを云つてゐるのではない。上ついた調子になつてゐたのだ。それはやがて後悔を以つて報いられねばならぬ態度だつたのではないか。園は一人の勤勉な科學者であればそれで足りるのに、兄のやうに畏敬する星野からの依賴だとはいへ、格別の因緣もない一人の少女に英語を敎へるといふこと。或る勇みを以つて……或る喜びをすら以つて……柄にもない啓蒙的な仕事に時間を潰さうとしてゐること。それらは呪ふべき心のゆるみの仕事ではなかつたか。……園は自分自身が苦々しく省みられた。

やがて園は懺悔するやうな心持で、努めて心を押し鎭めて、いつも通りの靜かな言葉に還りながら云ひ出した。

「話が途切れましたが、……僕は今學校の鐘の音に聞きとれてゐたもんですから……あれを聞くと僕は自分の家のことを思ひ出します。僕の家は淨土宗の寺です。だから小さい時から釣鐘の音やあの宗旨で使ふ念佛の鉦の音は聞き慣れてゐたんです。それは今でも耳についてゐて忘れません。その爲めか鐘の音を聞くと僕は妙に考へさせられます。特別、學校のあの鐘には僕は或る忘れられない經驗を持つてゐます。……さうですね、その話はやめておきませう……兎に角僕はあの鐘を聞くと、父と兄とに無理に賴んで、こんな所に修業に出て來たのを思ひ出すんです。……」

こゝまで重いながら言葉を運んで來ると、園はまた云はないでもいゝことを云ひ續けてゐるやうな氣尤めがし

た。園は今日は自分ながらどうかしてゐると思つた。それでこれまでの無駄事の取りかへしをするようにと、
「そんな譯で僕は研究室にさへゐればいゝ人間ですし、さうしてゐなければいけない人間です。ですから星野君はこの手紙のやうなことを云つてゐますが、僕は辭退したいと思ひます。どうか惡しからず」
と出來るだけ言葉少なに思ひ切つていつてしまつた。
伏目になつたおぬいさんの前髮のあたりが小刻みに震へるのを見たけれども、而して氣の毒さのあまり何か云ひ足さうとも思つて見たけれども、園の心の中には或る力が働いてゐてどうしてもさうさせなかつた。
園は靜かに茶を啜り終つた。星野の手紙をおぬいさんの方に押しやつた。古ぼけた黑い毛繻子の風呂敷に包んだ書物を取り上げた。もう何んにもすることはなかつた。座を立つた。
暗い夜道を急ぎ足で歩きながら園は地面を見つめて頻りに右手を力強く振りおろした。
急に遠くの方で急雨のやうな音がした。それが見る〳〵高い音をたてゝ近づいて來た。と思ふ間もなく園の周園には霰が篠つくやうに降りそゝいだ。それがまた見る間に遠ざかつて行つて、かすかな音ばかりになつた。
第二陣、第三陣が間をおいて襲つて來た。
大通りまで來て園は突然足をとゞめた。おぬいさんの家から遠ざかるに從つて、小刻みに震ふ前髮が段々はつきりと眼につき出して、とう〳〵そのまゝ歩きつゞけてはゐられなくなつたからだ。星野の行つてしまふといふことだけであの感じ易い心は十分に痛んでゐるのだつた。それは十分にに察してゐた。察してゐながら、自分は斷りをいふにしても斷りのいひやうもあらうに、あんな最後の言葉を吐いてしまつたのだ。けれどもあんな最後の言葉を吐かせたのは誰の罪だらう。單に英語を園に敎へろといつた星野にその罪はない。固よりおぬいさんでもない。あの座敷にゐた間中、始終あらぬ方にのみ動搖してゐた自分の心がさせた仕業ではなかつたか。自分自身

を鞭たなければならない筈であつたのに、その筈を言葉に含めて、それをおぬいさんの方に投げ出したのではなかつたか。さういへば園は千歳の星野の番地をおぬいさんに敎へることをせずにあの家を出た。おぬいさんはそれを尋ねはしなかつた。尋ねなければ敎へるには及ばないと星野はいつてゐた。だから園は平氣でゐてもいゝやうにも思はれる。然し園にあの最後の言葉を投げつけられたおぬいさんがそれを尋ねる餘裕を持ち得られるかどうか。……それよりも園はおぬいさんがそれを尋ねるだらうと最後の瞬間まで待ち設けてゐたのだ。その事は始めから仕舞まで氣にかけてゐたのだ……或る好奇心なしにではなく……しかもとう〳〵敎へずにしまつた。さうした仕打ちの後ろには何んにもないといひ切ることが出來るか。……園はぐつと胸に手を重くあてがはれたやうに思つた。

又の序での時に知らせようか。……それではいけない。氣がすまない。園は大通りの暗闇の中に立つて眞黒な地面を見つめながら、右の腕をはげしく三度振り卸ろした。

園はそのまゝもと來た道に取つて返した。

＊　　＊　　＊

坂といふものゝ一つもない市街、それが札幌だ。手稻藻巖の山波を西に負つて、豐平川を東にめぐらして、大きな原野の片隅に、その市街は植民地の首府といふよりも、寧ろ氣づかれのした若い寡婦のやうにしだらなく丸寢してゐる。

白官舍はその市街の中央近いとある街路の曲り角にあつた。開拓使時分に下級官吏の住居として建てられた四戸の棟割長屋ではあるが、亞米利加風の規模と豐富だつた木材とがその長屋を巖丈な丈け高い南京下見(したみ)の二階家に仕立てあげた。而してそれが舶來の白ペンキで塗り上げられた。その後に出來た掘立小屋のやうな柾葺き家根

の上にその建物は高々と聳えてゐる。

けれども長い時間となげやりな家主の注意とが殘りなくそれを蝕んだ。ずり落ちた瓦は軒に這ひ下り、そり返つた下見板の木目と木節は鮫膚の皺や吹出物の跡のやうに、油氣の抜け切つた白ペンキの安白粉に汚なくまみれてゐる。けれども夜になると、どんな闇の夜でもその建物は燐に漬けてあつたやうにほの青白く光る。それは全く風化作用から來た或る化學的の現象かも知れない。「白く塗られたる墓」といふ言葉が聖書にある……あれだ。

深い綿雲に閉ざされた闇の中を、霰の群れが途切れては押し寄せ、途切れては押し寄せて、手稻山から白石の方へと秋さびた大野原を駈け通つた。小躍りするやうな音を夜更けた札幌の板屋根は反響したが、その音のけたたましさにも似ず、寂寞は深まつた。霰……北國に住み慣れた人は誰でも、この小賢かしい冬の先驅の跡の音の淋しさを知つてゐよう。

白官舍の窓――西洋窓を格子のついた腰高窓に改造した――の多くは死人の眼のやうに暗かつたが、東の端れの三つだけは光つてゐた。十二時少し前に、星野の部屋の戸がたてられて灯が消えた。間もなく西山と柿江とのゐる部屋の破れ障子が開いて、西山がそこから頭を突き出して空を見上げながら、大きな聲で柿江に何か物を云つた。柿江が出て來て、西山と頭をならべた。二人は大きな聲をたてゝ笑つた。而して戸をたてた。灯が消えた。

二階の園の部屋は前から戸をたてゝあつたが、その隙間から光が漏れてゐた。針のやうに縱に細長い光が。

霰はいつか降りやんでゐた。地の底に滅入りこむやうな寒い寂寞がぢつと立ちすくんでゐた。

農學校の大時計が一時をうち、二時をうち、三時をうつた。遠い〳〵所で遠吠えをする犬があつた。その頃になつて園の部屋の灯は消えた。

氣づかれのした若い寡婦ははじめて深い眠りに落ちた。

「おたけさんのクレオパトラの眼がトロンコになつたよ。もう歸り給へ。星野のゐない留守に伴れて來たりすると、歸つてから妬かれるから」

＊　＊　＊

「柿江、貴樣はローランの首をちよん切つた死刑執行人が何んといふ名前の男だつたか知つてゐるか」

前のは人見が座を立ちさうにしながら、抱きよせたクレオパトラの小さな頭を撫でつゝ、にやりと愛嬌笑ひをしてゐるおたけにいつた言葉だか、それをおつ被せるやうに次の言葉は西山が放つた。滅茶苦茶だつた。けれども西山は愉快だつた。隅の方で、西山が圖書館から借りて來たカアライルの佛蘭西革命をめくつてゐた園が、ふと顏を上げて、まじ〳〵と西山の方を見續けてゐた。濛々と立ち罩めた煙草の烟と、食ひ荒した林檎と駄菓子。

柿江は腹をぺつたんこに二つに折つて、胡坐の膝で貧乏ゆすりをしながら、上眼使ひに指の爪を嚙んでゐた。

程遠い所から聞こえて來る鈍い砲聲、その間に時々竹を破るやうに響く小銃、早拍子な流行歌を唄ひつれて、往來をあてもなく騷ぎ廻る女房連や町の子の群れ、志士やごろつきで賑ひかへる珈琲店、大道演說、三色旗、自由帽、サン・キュロット、ギヨティン、そのギヨティンの形になぞらへて造つた玩具や菓子、四人馬車、護民兵の行進……それが興奮した西山の頭の中で跳ね躍つてゐた。一緒に演說した奴等の顏、聲、西山自身の手振り、聲……それも。

「おい、何とか云ひな、柿江、」

「貴樣の演說が一番よかつたよ」

柿江は爪を嚙みつゞけたまゝ、上眼と橫眼とを一緒につかつて、ちらつと西山を見上げながら、途轍もなくこんなことをいつた。

猿見たいだつた。少しそねんでゐることが知れる。西山は無頓着であらうとした。
「そんなことを聞いてゐるんぢやない。知らずば教へてつかはさう。サムソンといふんだ」
綺麗な背高い、少し野趣を帯びた笑聲が彈けるやうに響いた。皆んながおたけの方を見た。人見がこゞみ加減に何か話しかけてゐた。異名ガンベ（ガンベッタの略稱）の渡瀬がすぐその側にゐて、聲を出さずに、醜い顏中を笑ひにしてゐた。
「皆んな一寸聽け一寸聽け、人見が今西山の眞似をしてゐるから……うまいもんだ」
ガンベが兩手を高くさし上げて、手の先だけを「お出で〳〵」のやうに振り動かした。部屋中が一時靜になつた。
聲の色は丸で違つてゐた。人見は然し西山の癖だけは腹立たしい程よく呑み込んでゐた。
「けれどもです、佛國革命の血は無駄に流されはしなかつた。人間全體の解放ではなかつたか知れない。商工業者の爲めに一般の人民は利用されたのだつたか知れない。けれどもです、貴族と富豪と僧侶とは確實にこの地面の上から、この……地面の上から一掃され……」
「馬鹿！　幇間じみた眞似をするない」
西山は呶鳴らないではゐられなかつた。今日の演說を座興も座興、一人の女を意識に上せて座興にしようとしてゐる人見の輕薄さには全く腹が立つた。第一似過ぎる程似てゐるのが癪に障つた。
「けれどもだ、全くうまいもんだな」
ガンベがさういつた。而して一同が高く笑ひ崩れるに従つて、片方の牡蠣のやうに盲ひた眼までを輝かして顏だけで滅茶々々に笑つた。
西山はせき込んでうつかり「けれどもだ」と云はうとしたが、危くそれを呑み込んだ。而していつた。

「俺は不愉快だよこの場合。俺は今日は練習の爲めに演說をやつたんぢやないからな。冗談と冗談でない時とはちつと區別して考へるがいゝんだ」

園が西山のいきまくのを少し恥ぢるやうに書物の方に眼を移した。おたけはぎごち無さゝうに人見から少し座をしざつた。たつた今までの愉快さは西山から逃げて行つた。西山自身があまりな心のはずみ方に少し不安を抱きはじめた時ではあつたが……

「それはさうだ。一つの西山のいつたことを話題にして話し合つて見よう」

いつも部屋の中でも帽子を取ることをしない小さな森村が、眉と眉との間をぴく／＼動かしながら、乾き切つた唇を大事さうに開け閉てした。

「私もう歸りますわ」

おたけは急につゝましくなつた。肉感的に帶の上にもれ上つた乳房をせめるやうにして手をついてゐた。西山のけんまくに少し怖れを催したらしい。クレオパトラは七歲になつたばかりの大きな水晶のやうな眼を眠さうにしばたゝいて、座中の顏を一つ／＼見廻はしてゐた。

「誰か送つてやれ」

人見が送りたがつてゐるのを知つてゐるから西山はかういつた。人見には送らせたくなかつたのだ。西山にさういはれると人見はたつた今の失敗で懲りたらしく自分を薦めようとはしなかつた。

送り手の資格について六人の青年の間に暫く冗談口が交はされた。六人といつても園だけは何んにもいはなかつた。ガンベがいつた。

「一番資格のない俺の發言を尊重しろ。人見の奴は口を拭つてゐやがるが貴樣は僞善者だからなあ。柿江は途中

で道を間違へるに違ひないしと。西山、貴樣は又天から駄目だ。氣まぐれだから送り狼に化けぬとも限らんよ。おたけさん、まあ一番安全なのは小人森村で、一番思ひやりの深いものは聖人園だが、どつちにするかい」

おたけは送つて貰はないでもいゝといつて、森村と園とを等分に流し眄で見やつた。西山はもう萬事そんなことに興味を失つてしまつた。園が送ることになつておたけと一緒に座を立つて行つた。その時星野からの葉書を自分の側に坐つてゐた柿江に何かいひながら手渡した。

兎に角一人の娘の見送手などに選ばれるといふのはブルジョア風の名譽に過ぎない。

「園にはいやにブルジョア臭い所があるね」

自分の言葉が侮蔑的に發せられたのを西山は感じた。

「そりや貴樣、氏と生れださ。貴樣のやうな信州の山猿、俺のやうなたゝき大工の倅には考へられないこつた。ブルジョアといへば森村も生れは土百姓の癖にいやに臭いな」

ガンベはつけ／＼からいつた。

けれどもおたけがゐなくなると部屋の調子が謂はゞ一オクターヴ低くなつた。その代り誰も彼もが、より誰も彼もらしくなつた。會話は自然に纒まつて本筋に流れこんだ。人見は輕い機智の使ひどころがなくなつて蔭に廻つた。西山の氣分は又前通りの默つて坐つてはゐられないやうな興奮に歸つて行つた。

「さうかなあ」

三時下つてから獨語のやうな返事をして、森村は眠さうな薄眼をしながら澄してゐた。

マラーは彼が宮殿と呼ぶ襤褸籠のやうな借家の浴室で、湯にひたりながら書きものをしてゐる。その眼の前の壁には、學校で使ひ古したらしい佛蘭西の大掛圖が、皺くちやのまゝ貼り付けてある。突然玄關の方で、彼の情

婦が、聞き慣れない美しい聲を持つた婦人と烈しくいひ爭つてゐるけはひがする。マラーは暫くの間眉をひそめて聞耳を立てゝゐたが、仰向に浴槽に浸つてゐるまゝで大聲に情婦を呼び立てる。而して聞き慣れない美しい聲の持主といふのはジロンド黨員の陰謀を密告する爲めに、わざ〳〵カンヌから彼を訪れたのだといつて、昨日以來面會を求めてゐる年の若い婦人だと知れる。その婦人に對して或る好奇心が動く。破格の面會を許す。

もうそこにはマラーはゐない。醜い死骸になつて、浴槽から半身を乘り出したまゝ、その胸は短劍に貫かれて横はつてゐる。カンヌから來たといふ美いし處女シャーロット・コルデーは血の氣の失せた唇から「私は自分の仕事を仕遂げてしまつた。今度はあなた方の仕事をする番が來た」と云ひながら、惡魔のやうに殺氣立つた群衆に取り圍まれて保安裁判所に引かれて行く……

佛國革命に現はれ出る代表的人物の中で殊に氣に入つたマラーの最後の有様は、これだけ込み入つた光景を唯一瞬間に集めて、兎もすれば西山の頭にまざ〳〵と浮び出た。それは西山に取つてはどつちから見てもこの上なく嚴肅な壯美な印象だつた。西山は屢〻それに驅り立てられた。

「さうかなあ」と森村が云つたあとに、云ひ合はしたやうな沈默が來た。その時西山の頭をこの印象が強く占領した。

「西山は本當に東京に行くつもりなのか」

睫の明かなくなつたやうな眼の上に皺を寄せながら森村は西山の方に向いた。それが部屋の沈默を僅かに破つた。西山は聲よりも首で餘計うなづいた。今までの馬鹿騒ぎに似ず、凡ての顏には今までの馬鹿騒ぎに似ぬ眞面目さと緊張さとが描かれた。

「學資はどうする」

渡瀬が泣き出すとも笑ひ出すとも知れないやうな顏をした。稀にではあるが彼もその奇怪な性格の中から見事なものを顏まで浮き出させる事がある。その時の顏だ。

西山はそれを感ずると妙に感傷的にさせられてゐた。

「勞働者になる積りでゐれだどうにかなるだらう」

もう一度長い沈默が來た。

「貴樣は夢を見てゐるんぢやあるまいな」

と渡瀬が遂に本氣になつて口を開き始めた。

「今日の演說を聞きながらもさう思つたんだが、社會運動なんてことは實際をいふと、餘裕のある人間がすることぢやないかな。ブルジョア氣分のものぢやないかな。俺なんかはそんなことは考へもしないがなあ。學問だつて俺や勘定づくでしてゐるんだ。無理でも何んでも大學程度の學問だけはしておかないと、是れからはうそだと思ふもんだから俺はかうやつてゐるんで、學問の尊嚴なんて、そんなものがあるもんかい。それは餘裕のある手合ひがいふことだ。照り降りなしに一生涯家族まで養はうといふにはこれが一番元資のかゝらない近道なんだ。俺にはそれ以上を考へる餘裕はないよ。俺と同じ境遇の人間を救つてやるの、來るべき時代をどうするのといふやうな餘裕は俺には正直な所出て來ないよ。……貴樣このカアライルにでもかぶれてゐると飛んだ間違ひになるぜ。貴樣の考へは馬鹿に平民的だが、考へ方……考へぢやない、考へ方だ……その考へ方に何處かブルジョア臭い所があるんぢやないかなあ」

人見はをかしな男だつた。西山には何んとなく氣を兼ねてゐたが、西山がどうかすると受身になりたがるガンベの渡瀬に對してつけ〳〵と無遠慮をいつた。つまり三人は三すくみのやうな關係にあつたのだ。

「新井田の細君の所に行つて酒ばかり飲んでうだつてゐる癖に餘裕がないはすさまじいぜ」
「貴樣はそれだからいけねえ。あれも勘定づくでやつてゐる仕事なんだ。いまに御利益が顯はれるから見てろ」
「ぢやこゝに來て油を賣るのも勘定づくなのか」
「馬鹿あいへ。俺だつて貴樣、俺だつて貴樣……兎に角貴樣見たいな僞善者は千篇一律だから駄目だよ…… なあ西山」
牡蠣のやうな片目が特別に光つて西山の方に飛んで來た。不思議だつた。西山は涙を感じた。
森村が眠さうな顏をしながら會心の笑みのやうなものを漏らした。而してしびれでも切らしたやうにゆつくり立ち上つて、碌々挨拶もせずに歸つて行つた。十時近いことが知れた。森村はどんなことがあつても十時には屹度寢る男だつたから。西山の演說を主題にして論じようといつておきながら、知らん顏をして歸つて行つた。
「ガンベのいふ事はそりやあんまり僞惡的ぢやないか。さうだらう。俺が今日いつたやうな考へは凡ての階級の人間が多少づゝは持つてるんだ。さう俺は思ふな――といふより斷言出來る。俺は何しろ星野に今日の演說を聞いてもらひたかつた。兎に角俺はやつて見る。こんな處で神妙に我慢してゐることはもう俺には、どうしても出來んよ。ちつとやそつとの橫文字の讀める百姓になつた處で貴樣、それが何んの足しになるかさ。東京に行つて一つ俺は暴れ放題に暴れるだ。何をやつたつても人間一生だ。手ごたへのある處にいつて暴れて見ないぢや腹の蟲が承知しないからな。けれどもだ。ペンタゴンなんか相手にしてゐたんぢやなあ……柿江なんぞも、田舍新聞にひとりよがりな投書位載せてもらつて得意になつてゐないで、ちつと眼を高所大所に向けて見ろ。…… 何んといつてもそこに行くと星野は話せるよ」
ガンベは實際何處かに堅實な所があつて、それが言葉になるとうつかり矢面には立てなかつた。今の言葉にも

西山は一寸たじろいたので、一層心の奥の有様そのまゝを誰を相手ともなくいひ放つた。それは却つて彼の心をすが／＼しくした。而して演壇に立つて以來鎮まらずにゐる熱い血液が、又もや音を立てゝ皮膚の下を力強く流れるのを感じた。

西山は奇行の多い一人の暴れ者として教師からも同窓からも取り扱はれ、勉強はするが、さして獨創的な所のない青年として見られてゐるのを知つてゐた。彼は何んと無くその中に輕侮を投げられてゐるやうな氣がして、その裏書を否定するやうな言動を殊更に試みてゐたのだが、今日の演説と今の言葉とで、それをはつきり云ひ現はしたのを感じた時、心臓への或る力の注入を自覺せずにはゐられなかつた。生涯の進路の出發點が始めて定まつたと思へた。彼の周圍が彼を見なほしたのは、彼が彼の周圍を見なほす結果になつてゐた。例へばおたけだ。おたけが星野に對して特別な好意を示すのを見極めた或る夜に、彼は一晩中寢なかつたことがあつた。愚かな屈辱……處が今日は人見がおたけを意識しながら彼の演説の眞似をしたりするのを見ると、或る忌はしい羨望の代りに唾棄すべき奴だと思はずにはゐられなくなつてゐた。女性——彼を待つてゐる女性は一人よりゐない。而してその一人はおたけなどとどの點に於ても比較になるやうな人ではなかつた。それが故に彼の未來を切り開いて、自分の立場に一日でも早く立ち上がらうとする焦躁は激しくなつた。萬事につけて彼の氣持はそんな風に動いて行つた。

突然柿江が能辯になつた。彼が能辯になるのは一種の發作で、無害な犬が突然恐水病にかゝるやうなものだ。じく／＼と考へてゐる彼の眼が急に輝き出して、湯氣を立てんばかりな平べつたい脂手が、空を切つて眼もとまらぬ手眞似の早業を演ずる。さういふ時仲間のものは默つてそれが自然に收まるのを待つてゐるより外はない。彼は貧乏ゆすりをしながら園から受取つた星野の葉書を手脂だらけにして丸めたり延ばしたりしてゐた。それを棒のやうに振り廻はし始めた。

高所大所とは一體何を意味する積りだといふ所から柿江は始めた。高所は札幌の片隅にもある、大所は女郎屋の廻し部屋にもあると叫んだ。よく聞けよく聞けといつて彼は段々西山の方に乘り出して行つた。西山は自分の机に腰をかけたまゝ受太力になつて呆氣に取られてそれを眺めてゐなければならなかつた。

「敎授の手にある講義のノートに手垢が溜まると云ふのは名譽なことぢやない。クラーク、クラークとこの學校の創立者の名を咒文のやうに稱へるのが名譽なことぢやない。當世の學問なるものが畢竟何に役立つかを考へて見ないのは名譽なことぢやない。現代の社會生活の中心問題が那邊にあるかを知らないのは名譽な事ぢやない。それを知つて他を語るのは更に名譽なことぢやない。日淸戰爭以來日本は世界の檜舞臺に乘り出した。この機運に際して老人が我々靑年を指導することが出來なければ、靑年が老人を指導しなければならない。是れであり得ねば彼だ。停滯してゐることは斷じて出來ない。……言葉は俺の方が上手だが、貴樣もそんなことを云つたな。けれども貴樣、それは漫罵だ。貴樣は一體何を提唱した。つまりくだらないから俺はこんな沈滯した小つぽけな田舍にはゐないと云うたゞけぢやないか。成程貴樣は社會主義勞働運動の急を大聲疾呼したさ。けれども、貴樣の大聲疾呼の後ろはからつぽだつたぢやないか。さうだとも。よく聞け。ガンベの眼玉見たいなもんだ。神經の連絡が……大腦と眼球との神經の連絡が（ガンベが『貴樣は』といつて力自慢の拳を振り上げた。柿江は本當に恐ろしがつて招き猫のやうな恰好をした）亂暴はよせよ。……貴樣の議論にはその議論を統一する哲學的背景が全く缺けてるんだ。輕薄な……」

「何が輕薄だ。輕薄とは貴樣のやうに自分にも譯の判らない高尙ぶつたことをいひながら實行力の伴はないのを輕薄といふんだ。けれどもだ、俺は兎に角實行はしてゐるぞ。哲學はその後に生れて來るものなんだ」

西山は輕薄といふ言葉を聞くと癪にもさはつたが、柿江の長談義を打ち切るつもりで威かし氣味にかういつた。

けれども柿江は殆ど泥醉者のやうになつてしまつてゐた。その薄い唇は言葉を巧妙に刻み出す鋭い刃物のやうに眼まぐるしく動いた。人見はいつの間にかこそ〳〵と二階の自分の部屋に行つてしまつた。

そこに園が靜かに這入つて來た。夜寒で赤らんだ頰を兩手で撫でながら、笑みかけようとしたらしかつたが、少し殺氣だつたその場の樣子にすぐ氣がついたらしく、部屋の隅をぐる〳〵と廻つて窓の方に行つて坐つた。

柿江はまだ續けてゐた。西山はもう實際うるさくなつた。自分の生活とは何んの關係もない一つの空想的な生活が石ころのやうにそこに轉がつてゐるやうに思つた。

「寒いか」

戶外の方を顎でしやくりながら、柿江には頓着なく園に尋ねた。

その拍子に柿江がぷつつりと默つた。憑いてゐた狐が落ちでもしたやうに。而して極まり惡るげにそこにゐた三人の顏に眼を走らすと慌てゝ爪を嚙みはじめた。

「渡瀨君まだゐたんだね。僕は若し歸つてしまふといけないと思つて可なり急いだ」

「おたけさんから何か傳言があつたらう」

「いゝえ」

園は丸でおとなしい子供のやうににこついた。

「柿江君先刻の葉書はどうしたらう。渡瀨君に見せてくれたの」

笑ふべきことが持ち上つてゐた。星野の葉書は柿江の手の中に揉みくだかれて、鼠色の襤褸屑のやうになつて、林檎の皮なぞの散らかつてゐる間に撒き散らされてゐた。

「困るなあ、それにね、三隅のおぬいさんの稽古を君に賴みたいからと書いてあつたんだのに……それだから渡

瀨君に渡してくれつて賴んでおいたぢやないか」

「君にとは俺にかい」

園に顏を見つめられながら、半分は剽輕から、半分は實際合點が行かない風でガンベは聞き返した。法螺吹で、頭のいゝことは無類で、禮儀知らずで、大酒呑で、間歇的な勉强家で、脫線の名人で、不敵な道樂者……ガンベはさういふ男だつたのだから、少なくとも人が彼をさう見てゐることを知つてゐたから。

「さうだ、君にだ」

さう園のいふのを聞くと、ガンベは指の短かい、そして恐ろしく掌の厚ぼつたい兩手を發矢と打ち合せて、胡坐のまゝ躍り上がりながら顏を滅茶苦茶にした。

「星野つて奴は西山、貴樣づれより矢張り偉いぞ」

西山は日頃の口輕に似ず返答に困つた。西山が星野を推賞した、その矛を逆まにしてガンベは切りこんで來た。星野が衆評などを全く眼中におかないで、いきなり物の中心を見徹して行くその心の腕の冴えかたにたじろいたのだ。仕方なしに彼は方向轉換をした。而して、

「園君、君が最初に賴まれたんだらう」

と搦手からガンベの陣容を崩さうとした。

「いゝえ別に、僕は手紙をおぬいさんにとゞけるやうに賴まれたゞけだつた」

それが園の落ち着いた答へだつた。

「俺が札幌にゐりや、この幕は貴樣なんぞに出しやばらしてはおかなかつたんだが」

さういつて西山は取つて附けたやうに傍若無人に高笑ひするよりのがれ道がなかつた。

柿江は三人の顏にかはる〴〵眼をやりながら爪をかみ續けてゐた。あのまゝで行くと狂癲にでもなるんではないかとふと西山は思つた。兎に角夜は更けて行つた。何かそこには氣のぬけたやうなものがあつた。六年近く兄弟以上の親しさで暮して來たこの男達とも別れねばならぬ四辻に立つやうになつた……その淡い無常を感じて、机からぬつくと立ち上りながら西山は高笑ひを收めた。而して大きな欠伸をした。

＊　＊　＊

その時清逸は茶の間に母と一緒にゐたのだが、おせいの綿入を縫つてゐた母は針を置いて迎へに立つて行つた。清逸は膝の上に新井白石の「折焚く柴の記」を載せて讀んでゐた。年老いた父が今麥稈帽子を釘にひつかけてゐる。十月になつても被りつゞけてゐる麥稈帽子、それは狐が化けたやうな色をしてゐる。而してそれは父が自分の家族の爲めにどれほど身をつめてゐるかを人に見せびらかすシムボルなのだ。清逸はそれをまざ〳〵と感ずることが出來た。そればかりではない。今日の父は用向きが全く失敗に終つたこと、父が侮蔑だと思ひこみさうなことを先方からいはれて胸を惡くして歸つて來たこと、それをも手に取るやうに感ずることが出來た。清逸にはその結果は前から分つてゐる事だつた。

わざとらしい咳拂ひを先立てゝ襖を開き、疊が腐りはしないかと思はれる程常住坐りつきりなその座になほると、顏中をやたら無性に兩手で擦り廻はして、「いやどうも」といつた。それは父が何か輕い氣分になつた時いつでもいふ言葉だ。然しそれを今日はてれ隱しにいつてゐる。

母が立つた序にラムプを提げて這入つて來た。而してそれを部屋の眞中にぶらさがつてゐる不器用な針金の自在鍵にかけながら、「降られはしなかつたけえ」と尋ねた。

「なに」

といつたぎりで又顔を撫でた。と、思ひ出したやうに探りを入れるやうな大きな眼を母の方にやりながら、

「時雨れた時分には丁度先方にゐたもんだから何んともなかつた」

と附け加へた。父は一度も清逸の方を見ようとはしない。

札幌のやうな靜かな處に比べてさへ、七里隔たつたこの山中は滅入る程淋しいものだつた。殊に日の暮には。千歳川の川音だけが淙々と家のすぐ後ろに聞こえてゐた。清逸は煮切らない部屋の空氣を身に感じながら、その川音に耳をひかれた。こつちの方からの話の緒口を引き出して、父の失敗が氣にかける程のものではないのを納得させたものだらうか、それとも話の出ないのをいゝことにして有耶無耶に濟まして仕舞つたものだらうかと考へた。久振りで戸外に出た父は、無駄話の材料をしこたま持つて歸つてゐるに違ひない。思出話ばかりを繰り返してゐる反動に、それを一つ〳〵持ち出されるのは清逸には一寸我慢の出來ないことらしかつた。さらぬだにいら〳〵し勝ちな氣分と、消耗熱の爲めに我慢が薄くなつてゐるのとで、清逸はそれを恐れた。清逸はつまらぬこととは思ひながら白石の父の賢明さを思ひ浮べた。父子で身にしみ〴〵と話しこんで、顔にとまつた蚊が血に飽き過ぎて、ぽたりと膝の上に落ちるまで拂ひもせずにゐたといふ、さういふ父子の間柄であつたのを思ひ浮べた。その挿話は前から清逸の心を強く牽いてゐたものだつた。

父は煙草をのんでは頻りに吐月峰をたゝいた。母も默つたまゝ針を取り上げてゐる。

店の方に物を買ひに來た人があつた。母はすぐ立つて行つた。

どうも矢張り北海道米はなあ增えが惡るうて。したら內地米の方に……何等どころにしますかなあ」

買手の聲は聞こえないけれども、母のさういふ聲ははつきりと聞こえた。父は例の探りを入れるやうな眼をちよつとそつちに向けた。而してこの機會にと思つたか始めて清逸の眼をさけるやうにしながら忙がしく話しかけた。

中島は會はないでその養子といふのが會つたのだつたが、老爺が齡がいつてゐるので、そんな話はうるさいと云つて聞きたがらないし、自分の一存としていふと、當節東京に出ての學問は豫想以上の金がかゝるから、こちらは話によつては都合しないものでもないけれども、何しろ學問が百姓とは全く緣のないことだし、長い間にはそちらが當惑なさるやうにでもなると、折角今までの交際にひゞが入つて却つて面白くないから、子息さんがそれ程の秀才なら、卒業の上採用されるといふ條件で話し込んだら、會社とか銀行とかゞ喜んで學資を出しさうなものだ。一つ校長の方からでもかけ合つて貰ふのが得策だらうとの返辭だつたと父は云つた。

そこに母が前掛についた米の粉をはたきながらはひつて來た。父は話を途切らさうか續けようかと躊らつた風だつたが、急に調子を變へて、中島の養子といふのを眼下扱ひにして話を續けた。

「中島に養子に這入るについちやあれはわしが口をきいてやつたやうなものだ。碌な元資も持たずに七年前に富山から移住して來た男だつたが、水田にかけては經驗もあるし、人間も馬鹿ではないやうだつたから、……その……何んとか云つたなあのもう一人の養子は……何んとか云つた、それにわしが推薦したのがもとになつたんだ。それをおみさ（と今度は母の方に）今日會ふとな、『金でもあり餘つてゐることなら兎に角、さもなければ學問はまあ常識程度にしておいて、實地の方を小さい時から仕込むに限りまつさ』とかうだ」

而して惘れ果てたといふ顏を母にして見せた。

それは然し父が淸逸の弟について噂する時誰にでも云つて聞かせる言葉ではないか。淸逸の學資の補助（淸逸は自分の成績によつて入校二年目から校費生になつて授業料を免除されてゐる上每月五圓の奬學金を受けて居た）を送金する時にも、父は母に向つて偶には同じやうなことを云つたかも知れないのだ。

淸逸はもうその外に何んにも聞く必要はなかつた、札幌に學んでゐることすらも淸逸の家庭に取つては十二分

の重荷であるのを淸逸はよく知つてゐる。弟の純次は低能に近いといつていゝから尋常小學だけで學校生活をやめたのは先づいゝとしても、妹のおせいに小樽で女中奉公をさせておかねばならぬといふのは、淸逸の胸には烈しくこたへてゐた。淸逸が會社か銀行にでも勤めてゐたら（そんな所にゐる自分を想像する程矛盾と滑稽とを感ずることはなかつたが）おせい一人位を家庭に取りかへすのは何んでもないことだつたらう。一人の妹、淸逸が殊に愛してゐる一人の妹の身を長い間不自由な境界において我慢してゐるのは、淸逸だから出來るのだと淸逸は考へてゐた。然しどうかすると淸逸はその爲めにおそくまで眠りを妨げられることがあつた。けれどもどんな時でも、淸逸が學問をするために牽き起される近親の不幸（父も母もその爲めに確かに老後の安樂から少なからぬものを奪はれてはゐるが）は、淸逸は益々學問の方に驅り立てはしても、躊躇させるやうな事は斷じてなかつた。

淸逸は小學校の三年を卒業する時から、自分は優れた天分を持つて生れた人間だとの自覺を持ちはじめたことを記憶してゐる。田舍の小學校のことだから、卒業式の時には尋常三年でも事々しい答辭を級の代表生に朗讀させるのが常だつた。その時その役に當つたのは加藤といふ少年だつたが淸逸は加藤の依賴に應じて答辭の文案を作つてやつた。受持敎員はそれを讀んで仰天した。而してそれが當日郡長や、孵化場長や、郡農會の會長やの列座の前で讀み上げられた時、淸逸は自分の席からその人達が苦々しい顏をして聞いてゐるのを觀察した。彼等の凡ては、その答辭が、敎師の代作でなければ、剽竊に相違ないと信じ切つてゐるのが淸逸にはよく知れた。淸逸はその時子供らしい誇りは感じなかつた。唯、一般に偉い人といはれる人が、必ずしも偉いといふ程の人ではないとはつきり感じたのだつた。偉人として、人の稱讚を受ける位のことはさうむづかしいことではないとはつきり感じたのだつた。それ以來淸逸の自分に對する評價は渝ることがない。而してそれに特別の誇りを感じないのも亦同じだつた。この心持が凡ての思想と行動を支配した。家族の人達に對しても彼はそれに手加減をする理由は露

ほども見出さないのだ。

清逸は上京の相談で家に歸りはしたが、自分の健康が掘り出したばかりの土塊のやうな苛辣な北海道の氣候に堪へないからとは云ひたくなかつたので、更に修業を續けたいのだといふより仕方がなかつた。父は清逸が物をいひ出す以上は、自分の智慧では迚も突き崩せないだけの考慮をめぐらした上で物をいふと知りぬいてゐたから、母に向ふ時のやうに、頭からけなし付けて二の句を吐かせないといふやうなやり方はしようにも出來なかつた。然しながら今度の事は父に取つて確かに容易ならぬ難題であつたに相違ない。清逸は始めから學資は自分で何んとかするといつて見たが、父としてはそれが堪へられないことだつたらしい。清逸のことだから元來羸弱な健康を害ねても何んとかするであらうが、それまでの苦心を息子一人にさせておくのは親の本能が許さなかつたらう。然しそれにも增して父に不安を與へたのは、かくては清逸が段々父母から離れて行くだらうといふことだつたに違ひないのだ。

父は自分が一種の怠け者で、精一杯に生活をして來なかつたのを氣付いてゐる。始終窮境に滅入りこむその生活は、だから不運ばかりの仕業ではない。清逸への仕送りの不足勝なのも、一人娘を女中奉公に出さねばならなかつたのも、人知れぬ針となつてその良心を刺してゐるのだ。それを清逸が知つてゐるのを父は知つてゐた。それをまた清逸は知つてゐた。清逸はそのことを責める氣持は決してなかつたけれども、父が輕薄な手段をめぐらしてその非を蔽ひ、あはよくば自分の要求すべき資格のないものを家族のものに要求しようとするのを見付け出すと快くなかつた。

父が三里も道程のある島松まで出かけて行つて、中島の養子に遇つた氣持にはさうしたものがあつた筈だ。清逸はそれには及ばないと幾度となくとめて見たけれども、必ず吉報を持つて歸るからといひながら一人で勇んで

出かけて行つたのだ。而してその結果は淸逸の思つたとほりだつた。

ラムプに黃色く灯がついてから、弟の純次は腰から下をぐつしより濡らして、魚臭くなつて孵化場から歸つて來た。彼は店の方に行つて駄菓子を取つて來てそれを立ち喰ひしながら、駄々子のやうに母に手傳はせて和服に着かへた。淸逸に挨拶一つしなかつた。淸逸一人が都會に出て、手足にあかぎれ一つ切らさず、樂をしながら出世する、その犧牲になつてゐるのだぞといふ素振りを、彼は機會ある每に言葉にも動作にも現はした。それは淸逸の心を暗くした。

貧しい氣づまりな食卓を四人の親子は圍んだ。父の前には見なれた德利と、鹽辛のはいつた蓋物とが据ゑられて、父は器用な手酌で酒を飮んだ。然し不斷ならば、盃を取つた場合に父の口から繰り出される筈の「いやどうも」といふ言葉は一つも出て來なかつた。純次は食卓から胸にかけて、麥澤山な爲めにぽろ〳〵する飯をこぼし散らかすと、母は丹念にそれを拾つて自分の口に入れた。母はいゝ母だが全く敎育がない。敎育のないのを自分のひけめにして、父から壓制されるのを天から授かつた運命のやうに思つてゐるらしかつた。末子の純次に對しては無智な動物のやうな溺愛を送つてゐた。その母が淸逸に對しての態度は知れて居る。

「もう鮭は澤山上(のぼ)つて來だしたのか」

淸逸はたまりかねて純次にから尋ねて見た。

「うむ」

といふ答へが飯を頰張つた口の奧から出るだけだつた。

「今年は何臺卵を孵(か)へすんだね」

「知らねえ」

母がさすがに氣をかねて、
「知らねえ筈はあるめえさ」
と口添へすると、純次は低能者に特有な殺氣立つた眼を母の額の邊に向けて、
「知らねえよ」
と云ひながら持ち合はせた箸で食卓を二度たゝいた。
大食の純次はまだ喰ひつゞけてゐたし、父はまだ飯にしないので、母も箸を取らずにゐたが、清逸は熱感があつて座に堪へないので、輕く二杯だけ無理に喰ふと、父の自慢の蓬茶といふ香ばかり高くて味の惡い蓬の熱い浸液をすゝりこんで中座した。
純次の部屋にあてゝある入口の側の獨立した三疊の小屋にはいつてほつとした。母がつゞいてはひつて來た。丸々と肥えた背の低い母は、清逸を見上げるやうにして不恰好に帶を搖りあげながら、
「やつぱりよくないと見えるね」
と心配を顏に現はしていつてくれた。
「寒さが增して來るとどうしてもよくないさ。けれどもそんなに酷いことはない。熱があるやうだから先に寢かしてもらひます」
「そだ／＼、それがいゝことだ」
而して純次の床を部屋の上に、清逸の床を部屋の下にとつた程無智であるが、愛情の偏頗も手傳つてゐた。清逸が横になると、まめ／＼しく寢床をまはり歩いて、清逸の身體に添うて掛蒲團をぽん／＼と敲きつけてくれた。
清逸は一昨日こゝに歸つて來てから割合によく眠ることが出來た。海岸のやうに斷續して水音のするのはひど

く清逸の心を焦立たせたが、晝となく夜となく變化なしに聞こえる川瀨の音は、清逸の神經を按摩するやうだつた。清逸はやゝともすると讀みかけてゐる書物をばたつと取り落して眼がさめたりした。それは生れてからないことだつた。

清逸は寢たまゝ含嗽をすると、頸に卷きつけてゐる眞綿の襟卷を外して、夜着を深く被つた。而して眼をつぶつて、ぢつと川音に耳をすました。そこから何んの割引もいらぬ靜かな安息がひそやかに近づいて來るやうにも思ひながら。

その夜は然し思ふやうには寢つかれなかつた。彼の疲勞が恢復したのかも知れなかつた。或は神經が更に鋭敏になり始めたのかも知れなかつた。

ふと眼がさめた。清逸は矢張りいつの間にか淺い眠りを眠つてゐたのだつた。盜汗が輕く頸の邊りに出てゐるのを氣持ち惡く手の平に感じた。

川音がしてゐた。

何時頃だらうと思つて彼はすぐ枕許のさらし木綿のカーテンに頭を突込んで窓の外を覗いて見た。

珍らしく月夜だつた。夜になると曇るので氣づかずにゐたが、もう九日位だらうかと思はれる上弦といふより左弦ともいふべき可なり肥つた橢形の月が、川向うの密生した木立の上二段程の所に昇つてゐた。月よりも遠く見える空の奥に、シルラス雲がほのかな銀色をして休らつてゐた。寂び切つた眺めだつた。裏庭のすぐ先を流れてゐる千歲川の上流をすかして見ると、五町程の所に火影が木叢の間を見え隱れしてゐた。瀨切りをして水車がかけてあつて、川を登つて來る鮭がそれにすくひ上げられるのだ。孵化場の所員に指揮されてアイヌ達が今夜も夜通し作業をやつてゐるのに違ひない。シムキといふアイヌだつた。その老人が樺炬火をかざして、その握り方

で光力を加減しながら、川の上に半身を乘り出すやうな身構へで、鰭や尾を水から上に出しながら、眞黑に競合つて鮭の昇つて來る具合を見つめてゐた……それは清逸が孵化場の給仕をしてゐた頃に受けた印象の一つだつたが、火影を見るにつけてそれがすぐに思ひ出された。氣を落付けて聞くと淙々と鳴りひゞく川音の外に水車のことん／＼と廻る音がかすかに聞こえるやうでもある。窓のすぐ前には何年頃にか純次やおせいと一本づゝ山から採つて來て植ゑた落葉松が驚くほど育ち上がつて立つてゐた。鐵鎖のやうに黄葉したその葉が月の光でよく見えた。二本は無事に育つてゐたが、一本は雪にでも折れたのか梢の所が天狗巣のやうに丸まつてゐた。そんなことまで清逸の眼についた。

　突然清逸の注意は母家の茶の間の方に牽き曲げられた。馬鹿げて聲高な純次に讓らない程父の聲も高く尖つてゐた。云ひ爭ひの發端は判らない。

「中島を見ろ、四十五まであの男は木刀一本と褌一筋の足輕風情だつたのを、函館にゐる時分何に發心したか、島松にやつて來て水田にかゝつたんだ。今ぢやお前水田にかけては、北海道切つての生神樣だ。何も學問ばかりが人間になる資格にはならないことだ」

「ぢや何んで兄さんにばつか學問をさせるんだ」

「だから云つて聞かせてゐるぢやないか。清逸が學問で行くなら、お前は實地の方で兄さんを見かへしてやるがいゝんだ」

　純次は默つてしまつた。父は少し落ち着いたらしく、半分は云ひ聞かすやうな、半分は獨語をいふやうな調子になつた。

「中島は水田をやつてゐる中に、北海道ぢや水が冷つこいから、實のりが遲くつて霜に傷められるとそこに氣が

ついたのだ。そこで田に水を落す前に溜を作つておいて、天日で暖める工夫をしたものだが、それが圖にあたつて、それだけの事であんな一代分限になり上つたのだ。人つてものは運賦天賦で何が……」

そのあとは聲が落ち着いて行くので、かすれ〴〵にしか聞こえなくなつた。

「兄さんは惡い病氣でねえか」

暫くしてから突然純次のかう激しく叫ぶ聲が聞こえた。今度は純次は母と言ひ爭ひを始めたらしい。母も何か云つたやうだつたが、それは聞こえなかつた。

「肺病はお母さんうつるもんだよ」

純次の聲がまた。それは聞こえよがしといつてよかつた。

「さうした譯のものでもあるまいけんど」

「うんにやさうだ」

そのあとはまた靜かになつた。清逸は早く寢入つてしまふに限ると思つて夜着の中に顏を埋めた。寢入りばなの咳が殊に邪魔になつた。

純次が鼻緒のゆるんだ下駄を引きずつてやつて來る音がした。清逸は今夜はもう相手になつてゐたくなかつたので寢入つたことにしてゐようと思つた。

思ひやりもなく荒々しく引戸を開けて、ぴしやりと締め切ると、錠をおろすらしい音がした。純次は必要もない工夫のやうなことをして得意でゐるのだが、その錠前も恐らくその工夫の一つなのだらう。こんな空家同然な離れに錠前をかけて寢る彼の心持が笑止だつた。

やがて純次は、清逸の使ひふるしの抽出も何もない机の前に坐つた。机の上には三分芯のラムプがホヤの片側

を眞黑に燻らして暗く灯つてゐた。机の片隅には「青年文」「女學雜誌」「文藝倶樂部」などのバック・ナムバアと、ユニオンの第四讀本と博文館の當用日記とが積んであるのを淸逸は見て知つてゐた。机の前の壁には、純次自身の下手糞な手跡で「精神一到何事不成陽氣發所金石亦透」と半紙に書いて貼つてあつた。

純次は博文館の日記を開いて鉛筆で何か書いてゐるらしかつたが、もぞ〳〵と十四五字も書いたと思ふ間もなく、ぱたんとそれを伏せて、吐き出す如く、

「かつたいぼう」

とほざいて立ち上つた。而して手取り早く卷帶を解くと素裸かになつて、ぽり〳〵と背中を搔いてゐたが、今まで着てゐた衣物を前から羽織つて、ラムプを消すや否や、ひどい響を立てゝ床の中にもぐり込んだ。

純次はすぐ鼾になつてゐた。

淸逸の耳にはいつまでも單調な川音が聞こえつゞけた。

* * *

何んといふ不愛想な人達だらうと思つて、婆やはまたハンケチを眼の所に持つて行つた。

上りの急行列車が長く横たはつてゐるプラットフォームには、乘客と見送人が混雜して押し合つてゐた。

西山さんは機關車に近い三等の入口のところに、いつもとかはらない顏付をしていつもとかはらない着物を着て立つてゐた。鳥打帽子の袴なしで。そのまはりを白官舍の書生さんをはじめ、十四五人の學生さん達が取りまいて、一人が何かいふかと思ふと、わーつ〳〵と高笑ひを破裂させてゐた。夜學校から見送りに來たらしい男の子が一人と女の子が二人、少し離れた所で人ごみに揉まれながら、それでも一心にその人達の樣子を見つめてゐた。三隅さんのお袋とおぬいさんとは、妹を連れて來たおたけさんと一かたまりになつて、混雜を避けるやうに待合

室の外壁に身をよせて立つてゐた。西山さんはその人達を見向かうともしなかつた。外の書生さん達もさういふ見送人に對して遠慮するらしい氣振も見せようとはしない。

　婆やはもう一度西山さんをつかまへて何かもつと物をいひたいと思つて、書生さん達の後から隙をうかゞつてゐるけれども、容易に其の機會は來さうもなかつた。人の心も察しないで何んといふ不愛想な人達だらうと思つて腹立たしかつた。其の時軟かく自分の肩に手を置く人があつた。振り向いて見るとおぬいさんだつた。娘心は夥しい群衆のぞよめきに輕く醉つたらしく頰のあたりを赤くしてゐた。

「あなたそんな所にゐるとあぶなう御座います。こちらにいらつしやいな」

　さういつておぬいさんは誘つてくれた。婆やはそれをしほに諦めて、おぬいさんにやさしくかばはれながら三隅さんのお袋の所に一緒になつて、相對よりも少し自分を卑下したお辭儀をした。おぬいさんは婆やの涙ぐんだ眼を見ると一層赤くなつたやうだつた。婆やは、近頃の若い人に似ぬ何んといふいとしい娘さんだらうと思つた。兎に角婆やは默つてはゐられなかつた。いひたいことは山ほどあるのだが、書生さん相手では、婆やのいふことなどは上の空に聞き流されるのだから腹が立つばかりだつた。誰かに聞いてもらひたいと思つてゐる矢先だつたので、婆やは何事をおいても能辯になつた。

「星野さんはお留守だし、西山さんは急に東京にな、お發ちなさるし、婆やは淋しいこんです。いゝ人でな、あなた。あんな人並外れて大きいがに、赤坊のやうな人でなもし。婆や〳〵たらいつて、大事にしておくれなさつたが……ま、行く〳〵は皆が皆あゝして羽根が生えて飛んで行かれるは定なれど、何んとやら悲しうてなもし。私もお知りのたんだ一人の息子を二十九年になもし、臺灣で死なしてから、一人ぽつちになりましたけに、世話をしとる若い衆がどれも我が子同樣に思はれてな、すまんことぢやけれどなもし。それ故離れるがどうもなりま

せん。……それがなもし、若い衆の不思議といふたら、家を出るさいには、私の頰げたをかう敲いてな、あなた『婆やきつい世話』……ではなうて『婆や色々に世話をかけて難有う。達者でゐてくれや、東京に行つたら甘いものを送るぞよ』……」

婆やは西山さんの口調を眞似ようとしたら、涙で物がいへなくなつてしまつた。所が次のことを考へると腹が立つて來た。それで又言葉がつげた。

「と涙の出るやうなことをいうてだつたが、こゝに來たら最後、見なさるとほり、婆やなどは眼にも入らぬげでなもし」

婆やはそこにゐる四人に萬遍なく聞き取らせようとするので容易でなかつた。肥つた身體を通りすがりの人にこづかれながら、手眞似をまじへて大きな聲になつた。

おたけさんが我慢がし切れなくなつたらしく、急に口もとに派手な模樣の袖口を持つて行つた。三隅さんのお袋はさすがに同情するらしく神妙にうなづいてゐたが、おぬいさんも大分怪しかつた。婆やは今度はおたけさんの方に鉾を向けた。

「あなたも年をとつて見るとこの味は分つて來なさるが……」

皆まで聞かずにおたけさんはとうとう顏を眞赤にして笑ひ出してしまつたが、ふと眼を西山の方にやると驚いたらしく、

「まあ新井田の奧さんが」

と仰山にいつた。

ガンベさんが取りなすやうに三十恰好に見える立派な奧さん風の婦人と西山さんとの間にゐて、外の書生さん

達は少し輪を大きくしてそれを傍觀してゐた。奥さんといふのは西山さんに何か餞別物を渡さうとしてゐる所だつた。そこらにゐる群衆の眼は申し合はせたやうに奥さんの方に吸ひ寄せられてゐた。

婆やも驚いておたけさんに尋ねた。

「あれはどなたゞなもし」

「あなた知らないの。あれがそら渡瀨さんのよく行く新井田さんの奥さんなのよ」

とおたけさんは奥さんから眼を放さない。重さうな黑縮緬の羽織が、撫で肩の圓味をそのまゝに見せて、拔け上るやうな色白の襟足に、藤色の半襟がきちんとからみついて、手絡も同じ色なのが映りよく似合つてゐた。着物の地や柄は婆やにはよく見えなかつたが、袖裏に赤いものがつけてあるのはさだかに知れた。斜め後ろから見たゞけでも珍らしく美しさうな人に思はれた。

驛夫が鈴を鳴らして構内を歩きまはりはじめた。それと共に場内は一時にざわめき出して、人々はひとりでに浮足になつた。婆やはもう新井田の奥さんどころではなかつた。「危ない」と後ろからかばつてくれたおぬいさんにも頓着せず、一生懸命に西山さんの方へと人ごみの中を泳いだ。

人波の上に頭だけは優に出さうな大きな西山さんがこつちに向いて近づいて來た。婆やはされぱこそと思ひ乍ら寄つて行つて取りすがらうとするのを西山さんは見も返らずにどん〳〵三隅さん達の方に行つて、鳥打帽子を取つた。而して大きな聲でかう挨拶をした。

「ぢや行つて來ます。萬事難有う御座いました。左樣なら。御大事に」

婆やはつく〴〵西山さんが恨めしくなつた。あれ程長い間世話を燒かせておきながら、矢張り若い娘の方に餘計未練が殘ると見える。齡を取るといふのは何んといふ情ないことだらう。……婆やは西山さんから顔を背けてし

まつた。
いきなり痛い程婆やの左の肩を平手ではたくものがゐた。それが西山さんだつた。
「ぢや婆やいよ〳〵お別れだ。寒くなるから體を大事にするんだ」
さういふ譯だつたのかと思ふと婆やは難有い程嬉しくなつて、西山さんの手を握つて何んにもいはずにお辭儀をした。
「もういゝから」
西山さんは手を振り切つてどん〳〵列車の方に行く。婆やはそのすぐあとから樂々と跟いて行くことが出來た。
人見さんが列車の窓から、
「おいこゝだ、こゝだ」
といつて西山さんを招いてゐた。
「危ないよ婆さん」
知らない學生が婆やを引きとめた。婆やは客車の昇降口のすぐそばまで來てまごついてゐたのだ。そこから人見さんが急いで降りて來た。
見ると人見さんの顏を出してゐた窓の所には西山さんの顏があつた。がや〳〵いひ罵る人ごみの中を驛員があつちでもこつちでも手を上げたり下げたりしたと思ふと、婆やは飛び上らんばかりに魂消させられた。汽笛がすぐ側で鳴りはためいたのだ。婆やは肥つた身體をもみまくられた。手の甲をはげしく擦る釘のやうなものを感じた。「あ痛いまあ」といつて片手で痛みを押へ乍らも、延び上つて西山さんを見ようとした。と、押しあひへしあひされながら婆やの體はすうつと横の方に動いて行つた。それは然しさうではなかつた。汽車が動き出したのだ

つた。窓といふ窓から突き出された澤山な首の中に、西山さんも平氣な顏をして、近眼鏡を光らせながら白い齒を出して笑つてゐた。それが見る〳〵遠ざかつて見えなくなつてしまつた。それだけのことだつた。

三隅さんのお袋とおぬいさんとが親切に介抱してくれるので、婆やは倒れもせずに改札口を出たが、急に張りつめてゐた氣がゆるんで涙がこみあげて來さうになつた。送りに來た書生さん達はと見ると、丸で暢氣な風で高笑ひなどをしながら遠くから冗談口を取りかはしたりして、思ひ〳〵に散らばつて行つてしまつた。何んの氣で見送りに來たのか分らないやうな人達だと婆やは思つた。白官舍の人達も、柿江さんは夜學校の生徒の手を引いて行つてしまふし、その外の人の姿はもう何處にも見えなかつた。

停車場前のアカシヤ街道には街燈がともつてゐた。おたけさんとはぐれたので婆やは三隅さん母子と連れ立つて南を向いて歩いた。

「星野さんがお歸りてから何んとかお便りがありましたか」

と大通り近くに來てからお袋が婆やに尋ねた。

「何があなた。皆んな鐵砲丸のやうな人達でな」

婆やはさう不平を訴へずにゐられなかつた。

「私の方にもありませんのよ」

とおぬいさんがいつた。

大通りから婆やは一人になつた。これでやうやく歸りついたと思ふと、書生さん達はとうの昔に歸つて來てゐて、早く飯にしろとせがみ立てるに違ひない。これから支度をするのにさう手早く出來てたまる事かなと婆やは思ひながらもせはしない氣分になつて丸つこい體(からだ)を轉(ころ)がるやうに急がせた。

急に手の甲がぴり〳〵し出した。見ると一寸ばかり蚯蚓脹れになつてゐた。涙がまた何んとなく眼の中に湧いて來た。

＊　　＊　　＊

おぬいは手さぐりで夢中に母にすがり附かうとしてゐたらしかつた。眼をさまして見ると、母は背面向きになつてはゐるが、自分のすぐ側に、安らかな鼾を小さくかきながら寝入つてゐた。

ほつと安心はした。けれどもどうしてこんないやな夢ばかり見るのだらうとおぬいは情けなかつた。枕紙に手をやつて見ると果してしとゞに濡れてゐた。夢の中で絶え入るやうに泣いてしまつたのだから、濡れてゐると思つたら矢張り濡れてゐた。眼のあたりを觸つて見ると、右の眼頭から左の眼に、左の眼尻から鬢の髪へとかけて、涙の跡はそこにも濡れたまゝ殘つてゐた。おぬいは袖口を指先にまるめてそつと押し拭つた。それと共に、泣きじやくりのあとのやうな溜息が唇を漏れた。

覺めてから覺えてゐる夢も覺えてゐない夢も、母にはぐれたり、背いたり、厭はれたりするやうな夢ばかりなことは確かだつた。今見た夢もはつきりは覺えてゐないのだつたが、覺えてゐないのは覺えてゐるよりも一層悲しい夢であるやうな氣がした。

今のおぬいの身の上として、天にも地にも頼むものは母一人きりなのだ、その母がおぬいを全く見忘れてゐる夢らしかつた。怖いものを見窮めたいあの好奇心と同じやうな氣持で、おぬいは今見た夢のそこゝを忘却の中から拾ひ出さうとし始めた。

母があれはおぬいではありませんときつぱり人々にいつてゐた。をかしなことをいふ娘だといひさうな快活な笑ひを唇のあたりに浮べながら。まはりにゐる人達もおぬいに加勢して、あれはあなたのお孃さんですよといひ張

つてくれてゐるのに母は冗談にばかりしてゐるらしかつた。おぬいは若しやと思つて自分を見ると、確にいつもの通りの着物を着て、それは情けなさうな顔付はしてゐたけれど自分の顔に相違なかつた。(をかしなことには他人の顔を見るやうに自分の顔をはつきりと見ることが出來た)……おぬいは家に留守をして私の歸るのを待つてゐますから、家にさへ歸れば會へるにきまつてゐますと母は平氣であるけれども、それは飛んでもない間違だといふことをおぬいは知り拔いてゐた。家に歸つて見てどれ程驚きもし悲みもするだらうと思ふと、母が不憫でもあり殘される自分がこの上もなくみじめだつた。その不幸な氣持には、おぬいが不斷感じてゐる實感が殘りなく織り込まれてゐた。若し萬一母を失ふやうなことがあつたらどうしようと思ふとおぬいはいつでも動悸がとまる程に途方に暮れるのだが、そのみじめさが切り込むやうに夢の中で逼つて來た。それからその夢の續きは唯恐ろしいといふことの外にはつきりと思ひ出されない。おぬいが母を見てゐる前で、おぬいでないものに段々變つて行くので、我を忘れてあせつたやうでもある。母がどん／＼行つてしまふのであとを追ひかけようとするけれども、二人の間にはガラスのかけらがうざ／＼する程積まれてゐて、脚を踏み入れると、それが磁石に吸ひつく鐵屑のやうに蹠にさゝり込んだやうでもある。

兎に角おぬいは死物狂ひに苦しんだ。眼も見えないまでに心が亂れて、それと思はしい方に母戀しさの手を延ばしてすがり寄つた。而して聲を立てゝひた泣きに泣いたのだつた。

夢が覺めてよかつたと安堵するその下からもつと恐ろしい本物の不吉が、これから襲つて來るのではないかとも危ぶまれた。綠色の絹笠のかゝつたラムプは、海の底のやうな憂鬱な光を部屋の隅々まで送つて、何處とも知れない深さに沈んで行くやうなおぬいの心をいやが上にも脅かした。

おぬいは思はず肘を立てた。そしてさうすることが隱れてゐる災難を眼の前に見せる結果になりはしないかと

恐れ惑ひながらも、小さな聲で、

「お母さん」

と呼んで見ないではゐられなかつた。十二時頃病家から歸つて來た母の寢息は少しもその爲めに亂れなかつた。もう一度呼んで見る勇氣はおぬいにはなかつた。自分の聲におびえたやうに彼女はそつと枕に頭をつけた。濡れた枕紙が氷の如く冷えて、不吉の豫覺に震へるおぬいの頬を驚かした。

おぬいの口からはまた長い嘆息が漏れた。

身動きするのも憚られるやうな氣持で、眼を大きく開いて、老境の來たのを思はせるやうな母の後姿を見やりながらおぬいは色々なことを思ひ耽つた。

何かに不安を感ずるにつけていつまでも思ふのは、おぬいが十四の時に亡くなつた父のことだつた。細面で痩せぎすな彼女の父は、いつでも靑白い顏に濃い不精髯を生やした、而してぢつと柔和な眼をするゑて物を見やつてゐる、さうした形でおぬいには思ひ出されるのだつた。或る小さな銀行の常務取締だつたが、銀行には一週に一度より出勤せずに、漢籍と聖書に關する書物ばかり讀んでゐた。煙草も吸はず、酒も飮まず、道樂といつては讀書の外には、書生に學資を貢ぐ位のものだつた。その關係から白官舍やその外の學生達も今だに心おきなく遊びに來たりするのだつた。

父はおぬいの十二の時に脊髓結核にかゝつて、仕舞には半身不隨になつたので、床にばかりついてゐた。氣丈な母は良人の病が不治だといふことを知ると、每晩家事が片附いてから農學校の學生に來てもらつて、作文、習字、生理學、英語といふやうなものを勉强し始めた。そして三月の後には區立病院の產婆養成所の入學試驗に及第した。その名前が新聞に載せられた時、それを父に氣付かれまいとして母が苦心したのを、おぬいは昨日のこ

とのやうに思ひ出すことが出來る。
その父はいゝ父だつた。少なくともおぬいに取つては汲み盡せない慈愛を惠んでくれた親だつた。
「あれは何處から何處まであまり美しいから早死をしなければいゝが」
さう父が母に云つてゐるのを偸み聞きしたこともあつた。而して病氣勝ちなおぬいが加減でも惡くすると、自分の床の側におぬいの床を敷かせて、自分の病氣は忘れたやうに檢溫から藥の世話まで他人手にはかけなかつた。
それよりも何よりも、おぬいが父を思ひ出す時思ひ出さずにはゐられないのは、父が死ぬ丁度一週間前、突然おぬいに、部屋の中を一まはり歩いて見たいから肩を貸してくれといひ出した時のことだつた。おぬいも固より驚いたが、母はそれを思ひよらぬことだとさへいつてとめて聽かなかつた。父は母とおぬいとを靜かに見やりながらいつた。
「お前がたは分らないかも知れないが、男には、一生に一度、自分の力がどれ程あるものだか、それを出し切らなければ死ねないやうな氣持が起るものだ。わしは今までお前がたに牽かされてそれをようしなかつた。……もう然しわしは死ぬものと略相場がきまつた。今日は一つわしの心にどれ程力があるかやつて見るのだ。腰から下に通ふ神經は腐つて死んでゐると醫者もいふが、わしはお前がたに奇蹟を見せてやらう。案じることはない」
父は歩いた。おぬいも自分の肩に思つたより輕い父の重みを感じながら歩いた。歩き乍ら父はいつた。
「おぬい、お前はもう十四になるなあ。强い肩になつた。立派にお父さんの力になつてくれる。……お前もやがて人の妻になるのだが、なつたら、今日の心持を忘れないで良人と一緒に歩くんだぞ。忘れちやあいけないよ」
父の手がおぬいの肩でかすかに震へはじめた。
父が首尾よく部屋を一周して病床に腰を卸すと親子三人はひとりでに手を取り合つてゐた。而して泣いてゐた。

「お前がたは何をさう泣くのだ。わしは喜んで涙を流してゐるのに。……今日のやうな嬉しい日はない。……だがこんなことは醫者にさへいふ必要はないことだよ。こんな嬉しいことは銘々の心の中に大事にしまつておくべきことだからな」

苦しい呼吸の間から父はやうやくこれだけのことをいつて横になつた。

この出來事については母もおぬいも父の言葉通りに誰にもいはないでゐる。いはないでゐる中におぬいに取つては、それが迚も口には出せない程尊いものになつてゐた。

おぬいは老境に來たのを思はせるやうな母の後姿を見つめ乍ら、これを思ひ出すと、涙が又もや眼頭から熱く流れ出して來た。啜泣きにならうとするのをぢつと堪へた。……不斷は柔和で打ち沈んだ父だつたけれども何んといふ男らしい人だつたらう。あの強い烈しい底力、それはもうこの家には、どの隅にも塵ほども殘つてゐない。……淋しい。父が欲しい。父がもう一度欲しい。父のあの骨ばつた手をもう一度自分の肩に感じて見たい。力の不足、自分一人ではどうしようもない力の不足――倚りすがることの出來るものに何もかも打ち任かして倚りすがりたい憧れ、――而して何處にもそんなものゝない喰ひ入るやうな物足らなさ。……氣を鎭めて眠らうとすればする程、悲しみはあとから〳〵と湧き返つて、涙の爲めに痛み乍らも眼が冴えるばかりだつた。

おぬいはとう〳〵そつと起き上つた。而して箪笥の上に飾つてある父の寫眞を取つて床に歸つた。父がまだ達者だつた頃のもので、細面の淸々しい顔がやゝ横向きになつて遠い所をぢつと見詰めてゐた。おぬいはそれを幾度も〳〵自分の頰に押しあてた。冷たいガラスの面が快い感觸をほてつた皮膚に傳へた。おぬいはその感觸に甘やかされて、今度は寫眞を兩手で胸の所に抱きしめた。

涙がまた新たに流れはじめた。

二度と惡夢に襲はれない爲めに、このまゝで夜の明けるのを待たうとおぬいは決心した。

夜は深いのだらう。母の寢息は少しも亂れずに靜かに聞こえつゞけてゐた。おぬいはようこそ母を起さなかつたと思つた。

＊　＊　＊

夜學校を敎へる爲めに、夜食を濟ますとすぐ白官舍を出た柿江は、創成川つぷちで奇妙な物賣に出遇つた。その町筋は車力や出面（でめん）（勞働者の地方名）や雜穀商などが、殊に夕刻は忙がしく行き來してゐる所なのだが、その奇妙な物賣だけは殊に柿江の注意を牽いた。

鉢卷の取れた子供用の羅紗帽を長く延びたざんぎり頭に乘せて、厚衣（あつし）の恰好をした古ぼけたカキ色の外套を着て、兵隊脚絆をはいてゐた。二十四五と見える男で支那人のやうな冷靜で悧巧な顏付をしてゐた。それが手頃の風呂敷包を二枚の板の間に挾んで、棒を通して挾み箱のやうに肩にかついでゐた。而して右の手には鼠色になつた白木綿の小旗を持つてゐるのだが、その小旗には「日本服を改良しませう。すぐしませう」と少しも氣取らない、しかもかなり上品な書體で黑く書いてあつた。

その小旗が風に靡（なび）いて擴がれば擴がつたまゝ、風がなくなつて垂れゝば垂れたまゝで、少しの頓着もなく賣聲は固より立てずに悠々と歩いて行くのだつた。

柿江も二十五だつた。彼は何んとなくその物賣に話しかけたくなつた。而してつか〳〵とその方に寄つて行かうとした。その時彼は先夜西山と鬪はした議論のことを思つた。

「貴樣のやうに自分にも譯の判らない高尙ぶつたことをいひながら實行力の件はないのを輕薄といふんだ」と西山の言つた言葉がどうも耳の底に殘つてゐて離れないでゐた。それとこれとは何んの關係もないやうだが、柿江に

は急にその物賣に話しかけるのに氣がひけ出した。それ故彼は物賣をやり過ごして創成川を渡つてしまつた。

次の瞬間に、柿江は今夜の夜學校の修身の時間にはあの物賣の話をして聞かせようと考へてゐた。實行家とはあゝいふ人間のことをいふのだと敎へて見よう。而して若しうまく書けたら新聞の寄書としても十分役立つに違ひないとも思ひめぐらしてゐた。左手を深々と内懷から帶の下にさし入れて、右手の爪をぶつり〳〵と嚙み切りながら。

*　*　*

柿江は自分で又始まつたなと思つた。けれども何んといつても、その興奮が來ると、無理に抑へつける氣持にはなれなかつた。自分の眼の前には、二十四五人の高等科の男女の生徒が、柿江の興奮に誘はれて銘々の度合ひに興奮しながら、眼を輝かして柿江の能辯に聞き入つてゐた。それに誘はれて柿江は自分が更に興奮してゆくのを感じた。

「いゝか、その旗には『日本服を改良しませう。すぐしませう』と書いてあるんだ。とう〳〵その男は先生が一生懸命に介抱してやつたにもかゝはらず、段々氣息が細つて死んでしまつた。……何しろ深い谷の底のことではあるし、堅雪にはなつてゐたが、上部の解けた所に踏み込むと胸まで埋まる位積もつてゐるのだから、先生にはどうしていゝか分らなかつた。……とう〳〵そのえらあい若者は、日本服の改良を仕遂げない中に、無殘にも谷底にすべり落ちて死んでしまつたんだ。なんぼう氣の毒なことではないか」

醜いほど血肥りな、肉感的な、而してヒステリカルに涙脆い渡井といふ十六になる女の生徒が、穢ない手拭を眼にあて〳〵聞いてゐたが、突然教室中に聞こえわたるやうな啜泣きをやり始めた。その女の生徒は谷底で死んだといふえらあい男を、自分の心の中で情人に仕立てあげてしまつて、その死んだのを誠に自分の戀人の上のこ

とのやうに痛み悲しんでゐる……さうだなと柿江は直感すると、嫉妬といふのではないが、何か苦々しい感情を胸の中に湧き立たせた。男の生徒達はおほつぴらに女の方を見やる機會を得て、等しく物好きらしい眼を、渡井のしやくり上げる肩の所から、手拭の下に眞赤にしてゐる横顔へと向けた。

兎に角柿江はまた一つのセンセーションを惹き起した。柿江はぢつと渡井を見やりながら、今までの感傷的な顏色をやはらげて、なだめるやうな笑顔を見せた。

「はゝゝ、何もさう泣かんでもいゝよ。……その男は氣の毒な死に方をしたけれども、謂はゞ自分の大切な使命の爲めに死んだんだから、悔むこともなかつたらう……」

「それだでなほのこと氣の毒だ、わし」

と渡井が涙の中から無分別げな、自分の感情に溺れ切つたやうな聲を出した。男の生徒達は「大袈裟なまねをする奴だ」といふやうに、柿江の笑ひに同じた。

その時尋常四年生の教室——それは壁一重に廊下を隔てた所にあるのだが——急に賑やかになつて、砂きしみのする引戸を開くとがや〳〵と廊下に飛び出す子供等の跫音がうるさく聞こえ出した。銘々が硯を洗ひに、ながしに集まるのだつた。柿江は話の腰を折られて……

「先生その人はそれからどうかして生き返るんだらう」

と一人の男生がその騷がしさの中から中腰に立ち上つて柿江に尋ねた。

終業の拍子木が鳴つた。

「いや死んでしまつたんだ」

大半の生徒は拍子木の聲に勇みを覺えたやうに、机の蓋をばたん〳〵と音させて風呂敷包を作りはじめる。そ

の中にも今まで聞いてゐた話の後を知らうとあせるものがあつた。
「先生、先生はどうしてその人を谷底から上に持ち上げた？」
「先生か、先生は持ち上げられなかつたから、一人で崕を這ひ上つて、村の人に告げた」
「先生、その旗を見せてくれえよ」
柿江は話の都合上、自分は一枚の珍らしい旗を持つてゐる。その旗の持主がまた珍らしい人なのだと前置きをして、その夜の修身を語りはじめたのだつた。
「よし〳〵次の晩旗も見せてやるし、先生がその男の死んだのを村の人に告げてからの話もしてやる。村の人がどれ程その男の偉さに感心したか……」
柿江はさういふと、耳を聾がへらせるやうな騷々しさの中で、今までの話を續けたい氣持にされてゐた。自分でも思ひ設けぬやうな戲曲的な光景があとから口を衝いて出て來さうな氣がした。その時突然、
「先生それは皆んな作り話だなあ」
といふものがあつた。柿江はぎよつとした。而してその聲のする方を見ると、それは少し低能じみた、そんな見分けのつきさうもない小柄な少年の戸澤だつた。柿江は安心して大膽になつた。
「いゝや、本當も本當、先生が自分で遇つて來た出來事なんだ」
この會話で教室內の空氣が一寸鎭まつた。生徒達は隙でも窺ふやうに柿江の顏付に注意した。
「だつて俺今夜こけへ來る時、その人に往來で遇つたもの」
柿江はしまつた……と思つたが、思つた瞬間に努力したのはそれを顏色に現さないことだつた。而して咄嗟に、習慣的になつてゐる彼の不思議な機智は彼をこの急場からも救ひ出した。

「戸澤は夢でも見たんだらう。……あ、解つた。戸澤はその男の似而非者に遇つたんだな。その男のことが先生の生れた釧路の方で評判になると、似而非者が五六人出來て、北海道をあちこちと歩き廻るやうになつたんだ。……それに違ひない。それにお前は遇つたんだ」

その少年はまだ疑はしさうな顏をしながら默つてしまつた。而してそこにはもう、その問題をなほ追究しようといふやうな生徒はなかつた。一同は立つたり居たりして歸り支度に忙はしかつたから。

柿江は兎に角戸澤が疑はしげながら納得するのを見ると、自分の今まで能辯に話して聞かせてゐた全くの作り話がいよ〳〵本當の出來事のやうに思へ出した。

そこの貧民小學校の敎師をして農學校に通ふ學生の二三人が自炊してゐる事務所を兼ねた一室に來ると、尋常四年を受持つてゐる森村が一人だけ、こはれかゝつた椅子に腰をかけて、いつでも疲れてゐるやうな瘦せしよびれた小さな顏を上向き加減にして、股火鉢をしてゐた、干からびた唇を大事さうに結びながら。

煤けたホヤのラムプがそこにも一つの簡單な鐵條の自在鍵にぶら下つて、鈍い光を黄色く放つてゐた。柿江はそれを見ると、ふと又考へてはならぬものを考へ出してしまつてゐた。自分だけに向つて送つてよこす女の笑顏、自分と女との外には侵入者のない部屋、凡てを忘れさす酒、その香ひ、化粧の香ひ……而してそれらの凡てを淫らに包む黄色い夜の燈火。……柿江は思はずそれを考へてゐる自分の顏付が、森村といふ鏡に映つてゞもゐるやうに、素早くその顏を竊み見た。然し森村の顏は木彫のやうだつた。

「おい貴樣この包を歸り途に白官舍に投げこんでおいてくれないか」

と何げない風にいひながら、柿江はぼろ〳〵になつた自分の袴を脫いで、それに書物包みをくるみ始めた。森村は見向きもせずに前どほりな無表情な顏を眼の前の窓の鴨居あたりに向けたまゝで、

「これからまた何處かに行くんか」
とぼんやりいつた。柿江は、
「うむ」
と事もなげに答へるつもりだつたが、自分ながら悒鬱だと思はれるやうな返事になつてゐた。
「そこにおいとけ」
やゝ暫くしてから森村がかういつた。
まだ生徒達は歸りきらないで、廊下で取組合ひをするものもあるし、玄關に五六人づゝかたまつて、敎師と一緒に歸らうと待ちながら、大聲でわめいてゐるものもあるし、煤掃きのやうな音を立てゝ、敎室の椅子卓を片づけてゐるものもあつた。柿江が戸外に出れば、「先生」と呼びかけて、取りすがつて來る生徒が十四五人もゐるのはわかり切つてゐた。柿江はそは〳〵した氣分で、低い天井とすれ〳〵にかけてある八角時計を見た。もう九時が十七分過ぎてゐた。然し愚圖々々してゐると、他の敎師達がその部屋に這入つて來るのは知れてゐる。それは面倒だ。柿江は已むを得ず、
「それぢや貴樣賴むぞ」
と云ひ殘して、留守番の臺所口に亂雜に脫ぎ捨てゝある敎師達の履物の中から、自分の分を眞暗な中で手さぐりに搜しあてゝ、戸外に出た。
戸外は寒く眞暗らだつた。するとそこで柿江は自分の顏が急にあつくなつて、醉つた時のやうに赤らんだのを感じた。心臟が音を立てんばかりに強く打ち出したのを感じた。成るべく生徒の眼に觸れぬやうにと、生垣に沿うて素早く步き出したが、小さな生徒達の銳い眼は勿論それを見のがしはしなかつた。柿江の身のまはりには鈴

なりに子供達がからみついてゐた。
「ゆんべはおつかなかつたよ、先生、醉つぱらひのおやぢが、兩手を擴げて追つて來るんだもの」
「なあ」
「先生は今夜はわしの方へと廻つておくれよ」その外色々な言葉が一度に、不思議な後ろめたさに興奮してゐる柿江の耳に騷々しく響いて來た。柿江はわざと例のとぼけたやうな聲を取り出して、生徒達から成るべく早くのがれようと試みつゝ、暗い貧乏町の往來に出た。
自分にまつはりついてゐる生徒達の外に、そこにもこゝにも子供がゐて、動ともすると柿江に話しかけようとした。
「先生は今日は用事があるんだから、明日の晩……ぢやない、明後日の晩には皆なを送つてやるから、今日は銘銘で歸つてくれ、な。おい、いかんよ、そんなにからまりついちや」
そんなことを云つて柿江はとう〳〵子供達から離れて夜道を西へ向いて急いだ。
創成川を渡ると町の姿が變つて急に小さな都會の町らしくなつてゐた。夜寒ではあるけれども、町並の店には灯が輝いて人の往來も相當にあつた。
ふと柿江の眼の前には大黑座の繪看板があつた、薄野遊廓の一隅に來てしまつたことを柿江は覺つた。そこには一丈もありさうな棒矢來の塀と、昔風に黑澁で塗られた火の見櫓があつた。柿江はまた思はず自分の顏が火照るのを痛々しく感じた。
ガンベだつた、その奇怪な世界の中に柿江を誘つて行つたのは。恐らく彼は何んの意味もない醉興から柿江をそこに連れて行つたのだらう。然し柿江にとつては、この上もない迷惑なことであつて、この上もない蠱惑的な

冒險だつた。「俺はいやだよ、よせよ」と自分にからみついて來るガンベの鐵のやうな力强い腕を拂ひ退けながら、柿江の足は我にもなくガンベの歩く方に跟いて行つた。二人はいつの間にか制帽を懷ろの中にたくし込んでゐた。晝間見たら垢光りがしてゐるだらうと思はれるやうな、厚織りの紺の暖簾を潜つた。白官舍のとは反對に、新しくはあるけれども、踏む度每にしなひきしむ階子段を登つて、油じみと燒けこげだらけな疊の上に坐らせられた。眼をそむけたい程淫らな感じのする女が現はれて、べた〳〵と柿江の膝の上に乘りかゝらんばかりに横とんびに坐つた。ガンベが何か大聲で一人ではしやいでゐる中に酒が出た。柿江は早く自分を忘れたいばかりに、さゝれる盃を受けつゞけた。飮むといふ程飮んだことのない酒はすぐ頭へとひどくこたへ出した。眼の中が熱くなつて、そこに映るものが不斷とは變つて來た。こんな場合、當然起つて來べき筈の性慾は益ゝ退縮して、唯わく〳〵するやうな興奮で身の內が火のやうに震へ出した。而して時々氷が……それは言葉通りに氷だつた……氷の小さい塊が溶けながら喉許から胸の奧にと薄氣味惡く流れ下つた。

「どうだ、難有からう」

床の正面に、半分枯れかゝつた樺色と白との野菊を生けて、駄菓子でこね上げたやうな花瓶のおいてあつたのを、障子の隅におろしてしまつて、その代りに自分の懷ろから制帽を取り出して恭しく飾りながら、ガンベが拜むやうな樣子をしてからういつたつけ。柿江はいやな夢でも見てゐるやうな心持になつたが、どういふ積りだつたか、奇怪にも我れ知らず笑ひ出した。大聲を上げていつまでもげら〳〵と。女達がそれををかしがるとなほ笑つた。

柿江は大黑座を左に折れて、遊廓の大門を大急ぎで通り越しながら、こんなことを不安に滿たされた胸の中で回想してゐた。

柿江は自分が何の氣なしにすることが、どうかすると人には頓狂に見えて、それが一つの愛嬌にされてゐるの

を意識してゐた。あの時もそんな氣持が動いてゐたのだなと思つた。取り返しのつかないやうないやな心持がした。どうせあゝいふ種類の女だ、構ふものかとも思つた。それから今考へても自分に愛想の盡きるやうな氣持を起させるのはその翌日のことだ。眼を覺ますと、もう朝日が一杯に射してゐたが、小恥かしい氣分の中で眞先に意識に上つて來たのはガンベのあの醜い皮肉な片眼の顏だつた。彼奴は憎々しいほくそ笑みを今頃何處かで漏してゐるのだらう。しかも話の合ふ仲間の處に行つて、三文にもならないやうな道德面をして、女を見てもこれが女かといつたやうな無頓着さを裝つてゐる柿江の野郎が、一も二もなく俺の策略にかゝつて、すつかり面皮を剝がれてしまつたと、仲間をどつと笑はすことだらう。さう思ふと柿江は自分といふものが目茶苦茶になつてしまつたのを感じた。さういへばかん〳〵と日の高くなつた時分に、その家の閾を跨いで戶外に出る時のいふに云はれない焦躁がまのあたりのやうに柿江の心に甦つた。

そこで柿江の足は依然として行くべき方に歩いてゐた。いつの間にか彼は遊廓の南側まで歩いて來てゐた。往來の少ない通りなので、そこには枯れ〴〵になつた苜蓿が一面に生えてゐて、遊廓との界に一間ほどの溝のある九間道路が淋しく西に走つてゐた。そこを曲りさへすれば、鼻をつまゝれさうな暗さだから、人に見尤められる心配は更になかつた。柿江は眼まぐろしく自分の前後を窺つておいて、飛び込むやうにその道路へと折れ曲つた。溜息がひとりでに腹の底から湧いて出た。

何、構ふものか。ガンベは日頃からちやらつぽこばかりいつてゐる男だから、あいつが何んといつたつて、俺がそんなことをしたと信ずる奴はなからう。若しガンベが何か言ひ出したら俺はさうだガンベのいふ通り昨夕薄野に行つて女郎といふものと始めて寢て見たと逆襲してやるだけのことだ。それを信ずる奴があつたら「へえ柿江がかい」と愛嬌にしないとも限らないし、然し大抵の奴は「ガンベのちやらつぽこもいゝ加減にしろ」と笑つて

しまふに違ひない。かう柿江は腹をきめて何喰はぬ顔で教室に出て見た。ガンベも教室に來てゐた。が彼は昨夜のことなどは全く忘れてしまつたやうなけろりとした顔をしてゐた。柿江はガンベを野放圖もない男だと思つて、妙な所に敬意のやうなものを感じさへした。而してその日は出來るだけさしひかへて神妙にしてゐた。いつガンベに小賢かしいといふ感じを與へて、油を搾られないとも限らない不安がつき纏つて離れなかつたから。

「俺はその時、こんな經驗は一度だけすればそれでいゝと決めてゐたんだ。全くそれに違ひないのだ。これ以上のことをしたら俺は確かに墮落をし始めたのだといはなければならない」

淋しい道路に折れ曲ると急に步度をゆるめた柿江は、しんみりした氣持になつてから自分にいひ聞かせた。彼は始めて我に返つたやうに、謂はゞ今まで興奮の爲めに緊張し切つてゐたやうな筋肉をゆるめて、肩を落しながらそこらを見廻はした。夜學校を出た時眞暗らだと思はれてゐた空は實際は初冬らしくかう〳〵と冴え渡つて、無數の星が一面に光つてゐた。道路の左側は林檎園になつてゐて、大方葉の散り盡した林檎の木立が、高麗垣の上にうざ〳〵する程枝先を空に向けて立ち連なつてゐた。思ひなしか、そのずつと先の方に惠庭の奇峰が夜目にもかすかに見やられるやうだ。柿江にはその景色は親しましいものだつた。彼がひとりで散策をする時、それは何處にでもゐて彼を待ち設けてゐる山だつた。習慣として彼は家にゐるより戶外にゐる方が多かつた。而して一人でゐる方が多かつた。さういふ時にだけ柿江は朋輩達の輕い輕侮から自由になつて、自分で自分の評價をすることが出來るのだつた。慣れ過ぎて、今は格別の感激の種にはならなかつたけれども、それだけ札幌の自然は彼の心をよく知り拔いてくれてゐた。

「さうだ、もう歸らう」

柿江は可なり强い決心を以て、西の方を向いてゆる〳〵と步みを續けた。而して道路の右側には成るべく眼を

やるまいとした。

然しそれは出來ない相談だつた。窓といふ窓には眼隱しの板が張つてあつて、何軒ともなく立ちならんでゐる妓樓は、唯眞黑なものゝ高低（たかひく）の連なりに過ぎないけれども、そのどの家からも、女のはしやぎ切つた、すさんだ聲が手に取るやうに聞こえてゐた。本通りの大まがきの方からは、拍子をはずませて打ち出す太鼓の音が、變に肉感と冒險心とをそゝり立てゝ響いて來た。たゞ一度の遊興は柿江の心を餘計空想的にして、僅かな光も漏らさない窓の彼方に催されてゐる婬蕩な光景が、必要以上にみだらな色彩を以て思ひやられた。彼よりも先に床にあつて、彼の方に手をさし延べて彼を誘つた女、童貞であるとの彼の正直な告白を聞くと、異常な興味を現はして彼を迎へた女、少しの美しさも持つてはゐないが、女であるだけに、柿江が嘗て觸れて見なかつた、××××らかさと、×らかさと、×かさと、×ひとを以つて彼を×××にした女、……柿江は單なる肉慾の如何に力強いかを感じはじめねばならなかつた。彼は自分が恐ろしくなつた。自分がこんなものだとは夢にも思はなかつたのだから。これはいけないと自らをたしなめながら、すがりつくやうに左の方の淋しい林檎園を見入つたけれども、それは何んの力にもならなかつた。自分の家のことを大急ぎで思ひ出して見た。何んの感じもない。白官舍のもの達の思はくを考へて見た。何んの利き目もない。夜學校の教師たる自分の立場を省みて見た。所が驚くべきことには、そこにゐる女の生徒の顏や、襟足や、手足が、今までにも或る感じを與へられてゐないことはなかつたが、すぐ無視することの出來たそれらのものが……柿江は本當に恐ろしくなつて來た。……全身は惡寒ではなく、病的な熱感で震へはじめてゐた。頭の中には血綿らしいものが一ぱいにつまつて、鼻の奥まで塞がつてゐた。頭の重さといふものが感ぜられる程何かで一杯になつてゐた。而して柿江が何かを反省しようとすると、彈ね返すやうに斷定的な答へを投げつけてよこした。例ば、世の中にはづつと淸淨な心と自制心とを持つた男がと考へる暇もなく、そ

れは嘘だ、皆んな貴様と同樣なのだ、多分貴樣以上なのだ。法螺吹きの辯に正直者の貴樣には今までそれが見えなかつたゞけだ』と彼の頭は斷定的に答へるのだ。彼は而してその答へに一言もないやうな氣がした。

それなら行かう、と柿江が實際自分の體を遊廓の方にふり向けようとすると、まあ待つてくれと引きとめるものが何處かにゐた。女に引きとめられたらそんな感じがするのだらうか、その力は弱いけれども、何かしら沒義道にふり切ることが出來なかつた。今度が二度目だ。二度行つたら三度行くだらう。三度行つたら四度、五度、六度と度重なるだらう。何處からそんなことをする金が出て來るか。その中に凡ての經緯が人に知れ亙つたら一體どうする。

柿江は急に頭から寒くなつた。何んといつてもそれは重大な問題だ。柿江は自分がどういふ骨組で成り立つてゐるかを知りぬいてゐるのだから。彼奴は妙に並外れた空想家で、おまけに常識はづれの振舞ひをする男だが、あれできまり所は案外きまつてゐて、根が正直で生れながらの道德家だ、さういふ印象を誰にでも與へてゐる。彼はそれを意識してゐた。而してそれに倚りかゝつて自分といふものゝ存在を守つてゐた。萬一、人々が彼に對して持つてゐるこの印象を我から進んで崩したら、彼は立つ瀬がなくなるのだ。

柿江はいつの間にか遊廓に沿うてその西の端れまで步いて來てしまつてゐた。そこには新川といふ溝のやうな細い川がせゝらぎを作つて流れてゐる、その川音が上ずつた耳にも響いて來た。柿江はその川を越して遊廓から離れるべきだつたのに、離れる代りに、又東の方に向いて元と來た道を步きはじめた。柿江の心がどつちに傾いてもその足は目指す處を離れようとはしなかつた。のみならず、彼は吸ひ寄せられるやうに、遊廓に沿うて流れてゐる溝川の方へと段々寄つて行つて、右手の爪を血の出る程深くぶつり〳〵と嚙みながら少し步いては立ち停り、又少し步いては立ち停つた。而してとう〳〵一本だけ渡してある小さな板橋の所に來て動かなくなつてしまつた。

柿江は自分をそこに見出すと、又窃むやうにきよと〳〵とあたりを見廻した。人通りは全く途絶えてゐた。そこいらには煙草の吸殻や、菓子の包んであつたらしい析木や、まるめた紙屑や、缺けた瀬戸物類が一面に散らばつてゐた。柿江はその一つゞゝに物語を讀んだ。凡てが旣に亂れ切つた彼の心を更にときめかすやうな物語だつた。

突然柿江は橋の奥の路地をこちらに近寄つて來る人影らしいものに氣がついた。はつと思つた拍子に彼は、たつた今大急ぎでそこに來かゝつたのだといふやうな早足で、驀地に板橋を渡りはじめてゐた。而して危くむかうからも急ぎ足で來る人――使ひ走りをするらしい穢ない身なりの女だつたが――に衝きあたらうとして、その側を夢中ですりぬけながら、ガンベと一緒に來た時のやうに制帽を懷ろにたくしこんだ。廓内の往來に出ると、暖かい黄色い灯の光に柿江は眩しく取り卷かれてゐた。彼は慌てゝ袖の中を探つた。財布はたしかに左の袖の底にあつた。今夜は餘所の家にはいるのが得策だと心ではあせつたが、どういふものかそれが出來ないで、まづいことだとは知りながら、彼はひとりでにガンベに誘ひこまれた敷波樓の暖簾を飛びこむやうにして潜つた。

「日本服を改良しませう、すぐしませう」と書いた旗が、どういふきつかけだつたか、その瞬間に柿江の眼にまざ〳〵と映つて、それが見る間に煙のやうにたなびいて消えて行つた。

＊　　＊　　＊

「星野清逸兄。

「俺はやつぱり東京は面白い所だと思ふよ。室蘭か、函館まで來る間に、俺は綺麗さつぱり北海道と今までの生活とに別れたいと思つて、北海道の土のこびりついてゐる下駄を、海の中に葬つてくれた。葬つても別に惜しいと思ふ程の下駄では無論ないがね。あれは柿江と共通にはいてゐたんだが、柿江の奴今頃は困つてゐるだらう。

青森では夜學校の生徒の奴等が餞別にくれた新しい下駄をおろして、久しぶりで內地の土を步いた。けれどもだ、北海道に行つてから足かけ六年內地は見なかつたんだが、ちつとも變つてはゐない。貴樣にはまだ內地は Virgin soil なんだな。

「鄉里にも一寸寄つたがね、おやぢもおふくろも、額の皺が五六本ふえて少ししなびた位の變化だつた。相變らずぼそ〳〵と生きるにいゝだけのことをして、內輪に內輪にと暮してゐる。何をいつて聞かせたつて碌々分りはしないのだから、俺は札幌の方を優等で卒業したから、これから東京に出て、もつとえらい大學で研きをかけるんだといひ聞せておいた。何しろ英語を三つ四つ話の中にまぜれば、何をいつても偉い事のやうに聞こえるんだから、實に簡單で氣持がいゝよ。例ばかういふ具合だ。

『おとうさまは知るまいが東京には University といふ大學があつて、象山先生の學問に輪をかけたやうな偉い學問が出來る。そこに行くと俺でも Student といふ名前を貰つて、Sociology and English grammar and Chinese literature といふやうなむづかしいものを習ふだ。どうだね、もう二三年がところ留守にしてもいゝづら』

『げえも無えことを……象山先生より偉くなつたらどうする氣だ』

俺の方では佐久間象山より偉い人間は出て來ようがないとしてあるんだ。けれどもだ、おやぢは俺が大の自慢で、長男は俺の後嗣ぎ相當に生れついてゐるが、次男坊はやくざな暴れ者だで、餘所の空でのたれ死でもしくさるだらうと、近所の者をつかまへて眼を細くしてゐる。おふくろは六年も留守にしてゐた俺がいとしくつて手放しかねるやうだが、何一つ口を出さない。而して土間の隅で洗ひものなどをしながら、鼻水を盥に垂らして、大急ぎですゝり上げたりしてゐた。

「けれどもだ、何をいふにも東京なら近いからといふことで、俺はとう〳〵鄉里を出た。Student になると學資

位は自分で働き出すのだといつて聞かせたら感心してゐたやうだつた。

「東京は俺にとつてはVirgin soilだ。俺は眞先に神田の三崎町にあるトゥキンビー館に行つて圓山さんに會つた。丁度晝飯時だつたが、先生、臺所の棚の上に膳を載せて、壁の方に向いて立つたなりで飯を喰つてゐた。湯づけにでもしてゐたのだらう、それをかつこむ音が上り口からよくきこえた。東京にこんなことをやつて生きてゐる人間があらうとは俺は思はなかつたよ。トゥキンビー館といへば、札幌の演武場位を俺は想像してゐたんだが、行つて見たら、白官舍を半分にして黴を生やしたやうな建物だつた。俺も矢張英語に出喰はすと、國のおやぢにひけを取らない田舍者だと思つて感心した。

『ダントン小傳』を寄稿したのは俺だといつて自分を紹介したら、圓山さんは佛頂面に笑ひ一つ見せないで、そんなら上れといつた。俺もそんなら上つた。兎に角西洋館で、——兎に角西洋窓のついた日本座敷で、日曜學校で使ひさうな長い腰かけと四角なテーブルがおいてあつた。圓山さんといふのが一體西洋窓のついた日本座敷見たいに、こちん〳〵した無愛想な男だ。『何しに來た』、『修業に來た』、『何んの修業に來た』、『社會問題の修業に來た』、『學資がないんだらう』、『さうだ』、『俺に周旋しろといふのか』、『まあさうだ』、『家は貧乏か』、『信州の土百姓だ』、『俺達と一緒に働く氣か』、『それはまだ分らない』、『その答はよし』(なんだべら棒め——べら棒といふ言葉は東京の書生が事毎に使ふ言葉で、俺はその後に使ひ覺えた。けれどもだ、この場合の俺の心持を現はすには實に都合がいゝ。本當は俺はその時、圓山さんは恐ろしく高飛車に出たもんだなと、胸の中で長たらしく感心してゐたんだ)。圓山曰く『どこで修業するつもりだ』、『W專門學校に行つて矢部さんの講義を聞かうとおもふ』、『札幌から紹介狀でも貰つて來たか』、『來ん』、『ぢや俺が書くからこれから行つて見ろ』……辭儀を一つする……貰ひものゝ下駄をはく……歩く(こゝは長し)…………早稻田といふ所は田圃の多いところだ。名詮

自性だ。……大隈の大きな屋敷を外から見た。W專門學校に着いた：他の奇なし。
「矢部さんは圓山さんより餘程愛想がいゝ。寫眞で片眼のべつかんこなのは知つてゐたが、ひどい若白髪だ。これは大分クリスチヤンらしかつた。俺も相當鞠躬如たらざるを得なかつた。知合ひの信者の家に空間があるかも知れないから一緒に出かけて見ようといつて、學校から七八町位だ、表書きの家は。そこに連れて行つてくれた。そこのお内儀さんが矢部さんを見るとマルタが基督にでも出喰はしたやうに頭を下げるので、俺は困つた。俺は白狀すると矢部さんよりもマルタの方に餘計頭が下げたい位だつたから。東京の女は俺の眼から見ると皆な天使のやうだぞ。
「俺の部屋は四疊半で二階の西角だ。東隣りは大きな部屋だが疊を上げて物置になつてゐて、どういふものか鼠の奴がうんとゐる。夜になると盛んに遊弋をやつて賑やかでいゝ。けれどもだ、俺の所には喰ふものはないから動もすれば足の先及び耳鼻の類が危險だから、俺はかじられないだけの用心はしてゐる。是より先、實は俺は足の先を旣にかじられかゝつたんだ。けれどもだ、緣の先には大きな葡萄棚があつて、來年新芽を吹き出したら、俺は王侯の氣持になれさうだ。
「何しろ學校で袴と草履をはかないのは俺だけだ。足の裏が丈夫なら草履ははかなくともいゝが袴ははかなければいかんといやがる。けれどもだ、袴をはけとは規則書に書いてないから勝手ぢやないかと俺はいうた。足の裏は固より丈夫だが、脛つぷし――といふものがあるかないか、腕つぷしがある以上はありさうなものだ――だつて丈夫だからな。俺はこれをサンキロティズムに對してサンバカミズム（Sansbakamism）と呼ぶだ。
「矢部さんの講義は何んといつても異色だ。嶄然足角を現はしてゐる。經濟學史を講じてゐるんだが『富國論』と『資本論』との比較なんかさせると中々足角が現はれる。馬脚が現はれなければいゝなと他人ながら心配か

る位だ。圖書館の本も札幌なんかのと比べものにならない。俺は今リカードの鐵則と取つ組合をしてゐる。
「偖てこれから又取つ組むかな。
「大事にしろよ。

西山犀川

十月二十五日夜

＊　＊　＊

「ガンべさん、あなた今日から三隅さんの所に敎へにいらしつたの」
渡瀬は敎へに行つた旨を答へて、丁度顏の所まで持ち上げて湯氣の立つ黃金色を眺めてゐた、その猪口に口をつけた。
「おぬいさんつて可愛いゝ方ね」
さういふだらうと思つて、渡瀬は酒をふくみながらその答へまで考へてゐたのだから、
「あなたほどぢやありませんね」
とさそくに受けて、今度は「憎らしい」と來るだらうと待つてゐると、新井田の奥さんは思ふ壺どほり、やさ睨みをしながら、
「憎らしい」
といつた。そこで渡瀬はをかしくなつて來て、片眼をかゞやかして鬼瓦のやうな顏をして笑つた。笑ふ時にはなほ鬼瓦に似て來るのを渡瀬はよく知つてゐた。
「この女は俺の顏の醜いのを見て、どんなに氣をゆるしてふざけても、遠慮から滅多なことはしない位に俺を見

くびつてゐるな。醜い奴には男の心がないとでも思つてゐるのか。一ついきなり齧り付いてどの位俺が苦しめられてゐるか思ひ知らしてやらうか知らん」

渡瀬は眞劍にさうおもふことがよくあつた。その位新井田の夫人は渡瀬に對して開けつ放しに振舞つたし、渡瀬は心の中で、あり得ない誘惑に誘惑されてゐたのだ。この瞬間にも彼にはさうした衝動が來た。渡瀬は笑ひからすぐ澁い顏になつた。

「あら變ね、何がそんなにをかしいこと」

といひながら、銚子の裾の方を器用に支へて、渡瀬の方にさし延べた。渡瀬もそれを受けに手を延ばした　親指の股に仕事疣のはいつた嚴丈な手が、不覺にも心持ち戰へるのを感じた。

「でもおぬいさんは星野さんに夢中なんですつてね」

女郎上りめ……渡瀬は不思議に今の言葉で不愉快にされてゐた。「おぬいさん」と「夢中」といふ二つの言葉が一緒に使はれるのが何んといふことなしに不愉快だつた。人の噂からおぬいさんを辯護する、そんなしやら臭い氣持は渡瀬には頭から無かつたけれども、矢張り不愉快だつた。

「燒けますかね」

渡瀬は額越しに睨みかへした。

「それはお門違ひでせう」

今度は奥さんの方が待ち設けてゐたやうにぴつたりと迫つて來た。

「はゝあん、この女は矢張り俺をすつかり虜にした氣で得意なんだが、おぬいさんに少々プライドを傷けられてゐるな……一つやつてやるかな」

渡瀨の胸の中でいたづら者がむづ〳〵し始めた。奥さんが、極く僅かの間であつたけれども、苦界といふものに身を沈めてゐて、今年の始に新井田氏の後妻として買ひ上げられたのだといふ事實は渡瀨の心を餘計放埒にした。うんと飜弄してやらう……若しも冗談から駒が出たら――何構ふもんか、その時はその時のことだ……といふ萬一の僥倖をも、心の奥底では度外視してはゐなかつた。

「圖星をさゝれたね」

渡瀨はまたから〳〵と笑つて、酒に火照つて來た顏から、五分刈が八分程に延びた頭にかけて、無茶苦茶に撫でまはした。

「處が奥さん、あれは高根の花です。ピュリティーそのものなんです。さすがの僕もおぬいさんの前に出ると、愼みの心が無性に湧き上るんだから手が附けられない……そんなに笑つちや駄目ですよ、奥さん、それは全くの話です。……何、信用しない……それはひどいですよ、奥さん。僕なんざあ迚もおぬいさんのマッチではない。マッチですか。マッチといふと相方かな（これはしまつたと思つて、渡瀨は素早く奥さんの顏色を窺つたが、案外平氣なので、おつかぶつせて言葉を續けた）相手かな……相手になれないと諦める氣ばかり先に立つのです。おぬいさんの前に出ると、このガンベも全く前非を後悔しますね」

「そんなに後悔することが澤山おありなさるの」

「馬鹿にしちやいけません。馬鹿にしちやあ……」

渡瀨はまたあとを高笑で塗りつぶした。この女は生れてから滿足した男に出遇つたことがないに違ひない。隨分色々な男の手から手に渡つたらしいのに、それだから偶には不愉快なほど人擦れがしてゐる癖に、何處かさぐり寄るやうな人なつゝこい所も持つてゐる。かういふ女に限つて若い男が近づくと、どんなにしやんとしてゐる

やうに見えても、變に誘惑的な隙を見せる。おまけにこの女は少し露骨過ぎる。星野に對してはあの近づき難いやうな頭の良さと、色の青白い華車な姿とに興味をそゝられてゐるらしいし、俺を見ると、遠慮つ氣のない、開けつ放しな頑强さにつけ入らうとしてゐる。その癖いゝ加減な所に埒を造つて、そこから先には中々出て來ようとはしない。謂はゞ星野でも、俺でも、その外あの女の側に來る若い男達は、一人殘らず體のいゝおもちやにされてゐるんだ。おもちやにされるのが不愉快ぢやないが、それで濟まされたのでは間尺に合はない。埒に手をかけて搖ぶつてやる位の事はしても、而してこの女がぎよつとして後ずざりをする位なことになつても、藥にはなるとも毒にはなるまい。渡瀨は片眼をかゞやかしながら、膳から猪口を取り上げて、無遠慮に奥さんの方にそれをつき出した。奥さんは失禮だといふ顔もせずに、すぐに銚子を近づけた。

「奥さん、あなたも杯を持つて來ませんか。一人で飲んでるんぢや氣がひけますよ」

渡瀨はさう無遠慮に出かけて見た。

「私、飲めないもの」

酌をしながら、美しい眼が下向きに、滴り落ちる酒にそゝがれて、上瞼の長い睫毛のやゝ上反りになつたのが、黑い瞳のほゝ笑みを隱した。やゝ荒んだ聲で云はれた下卑たその言葉と、その時渡瀨の眼に映つた奥さんの睫毛の初々しさとの不調和さが、渡瀨を妙に調子づかせた。

「飲めないことがあるものか、始終晩酌の御相伴はやつてゐる癖に」

「ぢやそれで一杯いたゞくわ」

渡瀨はこりやと思つた。埒がゆさ〱と搖ぶられても、この女は逃げを張らないのみか、一と足こつちに近づからうとするらしい。構へるやうに膝の上に上體を立て直して、企みもしないのに、肩から、膝の上に上向きに重

ねた手の平までの、やゝ血肥りな腕に美しい線を作つて、ほゝ笑んだ瞳をそのまゝこちらに向けて、小首をかしげるやうにしたその姿は、自分のいひ出した言葉、しようとしてゐることを、全く知らない無邪氣さかと見える程平氣なものだつた。渡瀨に殘された唯一つのことは、どたん場で背負投げを喰はない用心だけだ。

「いゝんですか」

「何がよ」

すぐかういふ答へが出た。

「はゝゝ、何がつていはれゝばそれまでだが、ぢやいゝんですね」

「だから何がつていつてるぢやありませんか」

「だから何がつていはれゝばそれまでだが……それまでだから一つ上げませう。循環小數見たいですね」

固よりそこに盃洗などはなかつた。渡瀨は膳の角でしづくを切つて……もう俺の知つたことぢやないぞ……胡坐から坐り直つて、正面を切つて杯を奧さんの方にさし出しかゝつた。

「一人で飮んでゐちや氣が引けると仰しやられるとね」

と落着いた調子でいひながら奧さんは躊らひもせず手を出すのだつた。

「御同情いたみ入ります」

渡瀨は冗談ぢやないぞと心の中でつぶやきながら急場で踏みこたへた。而して杯に一寸默禮するやうな樣子をして手を引き込めた。

「あら」

「味が變つてゐるといけないと思つてね、はゝゝ……奧さん、僕はこれで己惚れが強いから、大抵の事は眞に

受けますよ。これから冗談は豫め斷つてからいふことにしませう」

「全くあなたは己惚れが強いわねえ」

といひ切らない中に奧さんは口許に袖口を持つて行つて漣のやうに笑つた……眼許には過ぎる程の好意らしいものを見せながら。思つたより手ごはいぞと考へつゝも、渡瀨は矢張りその眼の色に牽かれてゐた。而して奧さんの今の言葉は、渡瀨を大きなだゞつ子にしていつてゐるものゝやうにも取れば取れないこともなかつた。渡瀨は然し面倒臭くなつて來た。謂はゞ結局互に何んの結果に來るものではないのを知り拔いてゐながら、强ひて不意な結果でも來るかの如く銘々の心に空想を描いて、けち臭い操りつこをしてゐるのが多少馬鹿らしくなつて來た。而して渡瀨の腹には、どうせほんものにはなる氣づかひはないといふ諦めも働いてゐないではなかつた。おまけに新井田氏の歸宅が近づいてゐるのも考への中に入れなければならなかつた。

丁度その時、渡瀨の後ろのドアがせはしなく開いたとおもふと、そこに新井田氏が小柄な瘦せた姿を現はしたらしかつた。渡瀨は前のやうに考へながらも、矢張奧さんに十分の未練を持つてゐる自分を見出ださねばならなかつた。何故といふと新井田氏が這入つて來た瞬間に、その眼は思はず鋭くなつて、奧さんが良人をどういふ態度で迎へるかを觀察するのを忘れなかつたからだ。

「お歸りなさいまし」

と簡單にいふと、奧さんは體全體で媚びながらいそ〳〵と立ち上つた。渡瀨が注意せずにゐられなかつたのは立ち上つた奧さんの節長に延びた腰から下に垂れ下つてゐる前垂の、いふにいはれないなまめかしい感じだけだつた。そんなものが眼に燒き付くほどに、奧さんは平生と少しも異ならない奧さんに過ぎなかつた。彼は坐りなほした自分の膝頭を見やりながら俯つ向いて、苦笑ひの影を唇に漂はせる外はなかつた。

強い黄色い光を部屋中に送る大きな空氣ランプの下にゐても、新井田氏は血色の悪い人だつた。一種の空想家らしくぎら〳〵とかゞやく大きな眼が、強度の眼鏡越しに、すわり悪く活き〳〵と動いた。

「どうも失禮。おはじめでしたか。え、どうぞ。ちよつと用が片付かなかつたもんですからおそくなつて。……日が短かくなりましたなあ。それに戸外は隨分寒う御座んすよ」

新井田氏は蛇の皮のやうに上光りのする綿入の上ん前を右手できりゝと引張りつけながら奥さんの今まで坐つてゐたところにきちんと坐つた。而して煙管筒を大きな音をさせて抜き取ると、女持ちのやうな華車な煙管を摘み出した。

三十分程の後、新井田氏と渡瀬とは夕食を濟ませて、二人の間に研究室と呼びならされる暗室のやうな窓のない小部屋に、四角な粗末な卓を隔てゝ向ひあつてゐた。小さなランプのえがらつぽいやうな匂ひと、今まで人氣のなかつた爲めの寒さとが重くよどんでゐた。

渡瀬は、代數の計算と下手な機械のダイヤグラムとが一面に書きつゞられてゐるフールス・キャップ四枚を自分の前において、イーグル鉛筆を固く握りしめながら新井田氏に項式の説明を試みてゐるのだつた。新井田氏はその頃流行し始めた活動寫眞機に興味を持つて、その研究なるものをやつてゐたのだ。自分の手で發聲蓄音機を組立てゝ見たいといふのが氏の野心だつた。映畫用のフヰルムの運動の遲速によつて蓄音機の方の速度が調節されるやうにするのがあたり前だと渡瀬は考へた。然し日本に來てゐる蓄音機は簡單な機械である爲めに、勢ひ蓄音機の方の改造は諦めて、それが有する速さに應じて寫眞機の方の速度を調節するやうに研究せねばならなかつた。これなら然し割合に簡單なことで、渡瀬の工夫になる小さな中間機を使用すれば、實際に於て或る程度までの効果を擧げることが出來たのだ。新井田氏はその成功に喜び勇んで早く實用的な機械の製作にかゝりたいとあせるの

だけれども、渡瀬に取つてはそれはさして興味のあることではなかつた。渡瀬は蓄音機の機械をどれだけ複雑にすれば、最小限度の複雜化によつて最大の効果を擧げ得るかを數理的に解決したかつたのだ。それ故彼は毎日その計算にばかり熱中して、新井田氏が機械の製作に取りかゝらうといふのを一日延ばしに延ばさせてゐた。始めの間こそは新井田氏もより進んだ發見が工作費用を節減するものと感じて根氣よくその成就を待つてゐるやうだつたが、計算の仕事がいつまで經つても片付かないのを知ると、而してその問題が解決されても、日本ではさういふ蓄音機を實際に製作するのが困難らしいといふ事をほのめかされると、段々性急になつて來た。計算々々といつて長びいてゐるのは、單に仕事を長びかせるための渡瀬の魂膽ではないかと邪推し出したらしいのを渡瀬は感じた。いゝ加減に切り上げようかと渡瀬の思つたのも度々だつたが、さうするとこの方の研究は早速打ち切りになつて、他の研究がはじまるのを覺悟せねばならない。それは彼に取つては惜しいことだつた。それ故彼は新井田氏の思はくを出來るだけ無視しようとした。

渡瀬は今日も亦新井田氏と罫紙とをかたみ代りに見やりながら續けた。

「これがシャッターの回轉數と蓄音機の圓盤の回轉數との關係を示した項式です。かういふ具合にシャッターの方をAとし、圓盤の方をBとすると、AとTとの積は、一定時間に於けるAのヴェロシティ卽ちVだから、それからこの項式が出て來るのです。そこに持つて來てBの方はかうなるでせう」

新井田氏は半分解らないながらも、中腰になつたまゝ、卓によりかゝつて、神妙に渡瀬の說明に耳を傾けてゐるらしく見えた。渡瀬は出來るだけ解り易くと、嚙みくだくやうにものをいつてゐたが符號や數字が眼の前に數限りなくならんでゐるのを辿つて行くと、新井田氏の存在などは段々薄ぼやけて來た。今まで奧さんを眼の前にするてふやけてゐた彼の頭は見る〳〵緊張して、水晶のやうな透明さを持ちはじめた。數字が單なる數字ではな

くなつた。謂はゞそれらは大きな兵士の群のやうだつた。その各〻が持つてゐる任務と力量とを彼は指揮官のやうに知つてゐた。彼はそれを用ゐて或る勝敗を爭うとするのだ。彼の得意とする將棋や圍碁以上にこれは興味のあるものだつた。どんな弱い敵に向つても、どんな優秀な立場にあつても、天運といふものが思はざる邪魔をしないとも限らない、そこに自分の力量をだけ信用してはゐられない投機的な不思議があると共に、さうした場合自分の力量が、どれ程しなやかに機變に應じ得るかを見きはめたい誘惑は大きかつた。

渡瀨は說明を續けてゐる中に、段々一つの不安心な箇所に近づいていつた。その個所を突破しさへすれば問題の解決は著しくはかどるのだ。そこにもう一度ぶつかつて、それを征服してしまはうとの熱意がいよ〳〵燃えて來た。彼の眼の前で數字が堂々たる陣容を整へて展開した。それが罫紙の上を或は右に、或は左に、前後上下に働きはじめた。渡瀨は仕事たこの出來た太い指の間にイーグル鉛筆を握つて、數字と數字との間を縱橫に驅けめぐつた。暫くの間鉛筆は紙の餘白に細かい數字を連ねてゐたが、而して渡瀨は神文でも現れて來るのを見る人のやうに夢中で鉛筆のあとを追つてゐたが、やがて鉛筆ははたとまつてしまつた。その瞬間に渡瀨は眼がさめたやうになつて、今まで書き續けてゐた所を讀み辿つて見た。計算に間違はなかつたけれども、項式はもう發展出來ないやうな橫道に來てゐた。

「奇體だなあ」

彼は思はず鉛筆を心もち紙の表面からもち上げて、自分に對して必死の抵抗を試みようとする項式をまじ〳〵と眺めた。

「そこがどうなんです」

新井田氏が依然としてそこにゐたのを渡瀨は知つた。新井田氏の存在をおぼろげながら意識すると彼がその顧

問(新井田氏自身は渡瀨を助手と呼んでゐたが)となつて、學資の大部分を得てゐるのを考へ合はさない譯ではなかつたが、それが他人事(ひとごと)のやうにしか感じられなかつた。渡瀨は「え」といつて一寸新井田氏を見上げたゞけで、又もや手をかへてその難問題にぶつからうとした。大きな數が見事に割り切れた時のやうな、あのすがすがしい氣持を味ふまでは、渡瀨の胸のこだはりはどうしても晴れようとはしなかつた。彼は鞭つやうに罫紙を裏返した。それは見るまに數字で埋まつてしまつた。又一枚を裏返した。それも忽ち埋まつて行かうとする。然し計算は益益迷宮に入るばかりで、何時そこから拔け出られるのか豫想は逆もつかなくなるばかりだつた。

「變だなあ」

さう渡瀨の唇はおのづから言葉となつた。而して鉛筆は堅くその手に握られたまゝ停止してしまつた。

「そんなむづかしい計算をしなければこれは分らないのですか」

と新井田氏がそのきつかけをさらつて口を入れた。直ぐ癇癪を立てる、こらへ性のない調子が今度の言葉には明かに潛んでゐた。渡瀨はそれを聞くと、これはいけないぞと思つた。而してはじめて新井田氏の存在を正當に意識の中に入れてその人を見やりながらつくろふやうな笑顏を見せた。口をゆるめると、今まで固く嚙み合つてゐた齒なみが、齒齦(はぐき)からゆるみ出る輕い痛みを感じた。

不斷はいかにも平民的で、高等學府に學んでゐる秀才を十分に尊敬してゐるといひたげな態度を示してゐる新井田氏でありながら、かういふ場合になると、にはかに顏付まで變つてしまつて、少し加減して見せるとすぐつけあがつて來やがると云はんばかりの、傲慢な、見くだしたやうな眼の色を、遠慮もなく渡瀨の顏に投げてよこすのだつた。然しながら渡瀨はそれしきのことで自分の仕事を中止する氣にはなれなかつた。彼は好んでとぼけた樣子をしながら、

「それは出來ないことはありませんがね……ま、もう少し待つて下さい。ぢきです。これさへ解ければ完全なものになるんですから……」

といつて、再び罫紙に眼を落した。新井田氏はそれに對して別に何んともいはなかつた。けれどもしぶとい奴だと云はんばかりな眼が、渡瀨の額の生え際のあたりを意地惡くさまよつてゐるのは、明かに渡瀨の神經にこたへて來た。まだ大丈夫と渡瀨は思つた。そこで彼は再び新井田氏をそつちのけにして、行きづまつた計算の緒口をたぐり出しにかゝつた。

今度こそはと意氣組を新たにしてかゝつた。數字が段々とその眼の前で生きかへり始めた。彼は今度は同じ項式の分解を三角法によつてなし遂げようと企てた。彼の頭の中にはこの難問題の解決に役立つかとおもはれるいくつかの定理が隱見した。鉛筆を下す前にその中からこれこそはと思はれる一つを選み取らねばならぬ。彼は鉛筆の尻についてゐるゴムを嚙みちぎつて、彈力の强い小さな塊を齒の間に弄びながら色々と思ひ耽つた。

突然インスピレーションのやうに一つの定理が思ひ出された。胸にこみ上げて來る喜びをぢつと押し殺して、參謀の提出した方略を採用する指揮官のやうに、わざと落ちつき拂ひながら鉛筆を動かし始めた。今度こそは凡てが豫期通りに都合よく行きさうに見えた。一度分解した項式が結合をしなほして、段々單純化されて行くところから見ると、遂には單一の結論的項式に落ち付きさうに見えた。渡瀨は今まで口の中に入れてゐたゴムを所きらはず吐き捨てゝ、嚙りつくやうに罫紙の上にのしかゝつた。

けれども矢張り無駄だつた。八分といふ所に來て、やうやく二つに纏め上げた項式をいよいよ一つに結び合せようとする段になつて、どうしてもそれが不可能であるのを發見してしまつた。

「畜生」

思はず渡瀨は鉛筆を紙の上にたゝきつけてから叫んだ。

「渡瀨さん、私はもう行きます」

その瞬間にかう鋭くいひ放された新井田氏の聲を聞いて、渡瀨は又もや現實の世界に引き戻された。もうそこいらには新井田氏の痼癪の氣分が一ぱいに漂つてゐた。渡瀨は思はず突つ立つた。

「どうも私はかういふことは困りますな。成程研究には違ひなからうけれども、私のは機械が兎も角出來てさへくれゝばそれでいゝんです。君のなさるやうなことを、こゝでかうしてぼんやり眺めてゐたところが、何んの薬にもなりませんから、私は御免蒙ります。すつかり冷えこんでしまひましたお蔭で……」

「はゝん、先生、腹立ちまぎれに明日から俺を抛り出さうと考へてゐるな。こりやかうしちやゐられないぞ」……渡瀨の頭に咄嗟に浮んだのはこれだつた。然し彼は驚きはしなかつた。彼にはこの危地から自分を救ひ出す方策はすぐに出來上つてゐた。彼は得意先を丸め込まうとする呉服屋のやうな意氣で、ぴよこ／＼と頭を下げた。その癖その言葉は圖々しいまでに磊落だつた。

「やあ濟みません全く。こちらに來るまでに計算はこの通りやつておいて、結果が出るばかりになつてゐたのだから、すぐ出來ると高をくゝつてゐたんですが、……これで計算といふ奴は曲者ですからなあ。今日はそれぢや僕は失敬して家でうんと考へて見ます。作る位ならあんまり不器用な……」

「そりやさうですとも、作る以上は完全なものにしたいのは私も同じことぢやありますが、計算までこゝでやつてるんぢや、私は手持無沙汰で、まどろつこしくつて困りますよ」

計算だつて研究の一つだい。道具を家で研ぎすましておいて仕事場に來る大工があつてたまるものか。いゝ加減な眼腐れ金をくれてゐるのにつけあがつて、我儘も程々にしろ。渡瀨は腹の中でかう思ひながらも、顏付には

その氣配(けはひ)も見せなかつた。

「實は僕もこの仕事は早く片をつけたいんです。學校のラボトリーでやつてゐる實驗ですが、五升芋（馬鈴薯の地方名）から立派なウヰスキーの採れる方法に成功しさうになつてゐるんです。これがうまく行きさへすれば、それも一つ見ていたゞきたいと思つてゐるもんだから……」

新らしがりと、好奇心と、慾との三調子で生きてゐるやうな新井田氏にこれが訴へて行かない筈がない。渡瀨は新井田氏の顏が、今までの冷やかにも倨傲な表情から、少し取り入るやうな――しかもその急激な變化に自分自身多少のうしろめたさを示さないではない――それに變つて行くのを見てしすましたりと思つた。

「それもまあそれでせうがね。それにつけてもこつちの方を片付けていたゞかないぢやあね」

澁い顏には相違なかつたが、それは喉の奧から手の出さうな澁い顏だつた。發聲蓄音機の方は成功したところが、さう需用の澤山ありさうなものではない。日本酒が高價になるばかりな時節に、ウヰスキーは當るに違ひない。これは新井田氏がすぐ氣のつきさうなことだ。ウヰスキーといふ新時代のものらしい名前そのものも、新井田氏には十分の誘惑になつてゐる筈だ。

渡瀨は計算用の原稿紙を一まとめにして懷ろにしまひこみながら、馬鈴薯から安價な燒酎と、その頃恐ろしく高價なウヰスキーとが造り出される化學上の手續を素人わかりがするやうに話して聞かせた。新井田氏の顏は段々和らいで來た。投機者に通有らしい、めまぐるしく動く大きな眼――それはもう一歩といふ所で詐欺師のそれと一致するものだが――の眼尻に、この人に意外な愛嬌を添へる小皺が出來はじめた。それは自分の意見に他人を牽き寄せようとする時には、いつでも自然に現はれて來るのだつた。人相見にでもいはせたら、これはこの人が天から授かつた德相だとでもいふのだらう。

研究室は全く寒い部屋だつた。渡瀨は計算に夢中でゐる間は少しも氣がつかなかつたが、これでは新井田氏が不平をこぼしたのも無理がないと思つた。火鉢一つでは、こんな天井の高い家ではもう凌げる時節ではない。それに宵も大分ふけたらしかつた。おまけに酒の醉ひもさめぎはになつてゐた。

玄關に來て歸りの挨拶をしかけると、新井田氏が急に思ひついたやうに、一寸待つてくれといつてそゝくさと奥に這入つて行つた。渡瀨はやむを得ずそこに突立つて自分の下駄と新井田氏が脫ぎ捨てた履物とを較べなどしてゐた。その時頭のすぐ上で突然音がした。一寸驚いて見上げて見ると玄關のつきあたりの少しすゝけた白壁に、金緣の大きな丸時計がかゝつてゐて、その金色の針が丁度九時を指してゐた。玄關に時計をおくとは變な贅澤をしたもんだなあと思ひながら、渡瀨はまじ〳〵と大ぎやうな金色に輝くその懸時計を見守つて値ぶみをしてゐた。

間もなく新井田氏が奥さんに附きまとはれるやうにして出て來た。渡瀨が夕食の馳走になつた部屋のドアが開けぱなしにしてあるので、生暖かい空氣と共に、今まで女がゐたらしいなまめかしい匂ひが、遠慮なく寒い玄關の空氣の中に漂ひ出て來た。

「どうもお待たせしてすみませんでした」

新井田氏の口調は、第三者の前でいつでも新井田氏が渡瀨に對して見せるあの尊大で同時に慇懃な調子になつてゐた。

「今月の何んです、今月のお禮ですが、都合がいゝから今夜お渡しゝておきます。で、と、明日はおいでのない日でしたな。所が明後日は私一寸はづせない用があるんですが、どうでせう明日に繰り上げていたゞいちや、おさしさはりになりますか」

「はゝん、活動寫眞は明日から廢業だな。先生ウヰスキーで夢中になつてゐるな。子供だなあ」

月末にはまだ三日もある今夜報酬をくれるといふのもそれで讀めた。所で俺の方からいふと、報酬を貰つた以上、今月はもう來ないといふのは豫定の行動だ。

「えゝ差支へありません。來ますとも」

「どうぞいらしつて頂戴ね」

奧さんが‥‥主人の加勢をするやうに主人には聞こえ、渡瀨を誘惑するやうに渡瀨には聞こえるそんな調子で。

「何しろ新井田は果報者だて」

渡瀨は往來に出て、寒い空氣に觸れるにつけて、暖かさうな奧さんの笑顏と肉體とを實感的に想像して、かう心の中で呟いた。けれども同時に、彼の懷ろの內も暖いのを彼は拒むことが出來なかつた。あれだけをおつかあに渡して、あれだけを卯三公にやつて、あれだけであの本を買つて‥‥と、殘るぞ。二晚は遊べるな。‥‥と、待てよ。急にさつきまで考へつめてゐた計算のことが頭に浮んだ。ふむ‥‥待てよ。渡瀨は忽ち總てを忘れてしまつた。數字の連なりが眼の前で躍りはじめた。渡瀨はしたり顏に一度首をかしげると、堅く腕を胸高に組合せて霜の花でもちら〳〵飛び交はしてゐるかと冴えた寒空の下を、深く考へこみながら、南に向いてこつり〳〵と歩いて行つた。

*　　*　　*

ガンベが「園にさう度々ねだるのだけはやめろ、よ。あんなお坊ちやんをいぢめるのは貴樣可哀さうぢやねえか。貴樣ああんまりけちだぞそれぢや。俺なんざあこれで一度だつて園にせびつたことはないんだ。それに、まさかといふ時の用意に一人位とつときを作つておかないとうそだぞ貴樣、はゝゝゝ」といつて笑つたことがあつた。

つて話を持ちかける外に道がないのだ。

人見は瘦せてひよろ長い體を机の前に立ちあがらせると、氣持の惡い生欠伸をした。彼は自體、園にこんなことを度々頼むのは、自分の見識からいつても、いかゞなものだとは知つてゐたんだが、先づ何んといつても一番無事に話のつきさうなのは、園の外にはないのだから仕方がない。取りあつてくれない奴だの、馬鹿にして話に乘らない奴だの、自分の金の不足になつた事だけを知つてゐて、油を搾らうとする奴だのにかゝつては全く面倒だ……それとももう一度婆やを泣かせようかとも思つたが、はした金にありつくのに、婆やの長たらしい泣き言を辛抱して聞いてゐるのはやり切れない。矢張園が一番いゝ。凡ての點に於て抵抗力が最も少ない。よからう……

人見は自分の部屋を出て、隣りの部屋のドアに手をかけた。また生欠伸が出た。

「園君ゐる？」

「あゝ、這入りたまへ」

すぐからういふ返事が小さく響いたが、机に向いたまゝでいつてゐるらしく、聲がゆがんで聞こえて來た。勉强をしてゐるなとおもひながら、人見はそつと戸を開いた。

きちんと整頓した廣い部屋の一隅に小さな机があつて、ホヤの綺麗に掃除された置ランプの光の下で、園は果して落ち着いて書見してゐた。戸外では雨も雪もまじへない風が物凄く吹きすさんでゐたが、この部屋はしんみりとなごいてゐた。人見は音のしないやうに戸をたてると、靜かに机の方によつて行つた。やがて園ははじめて顔を擧げて人見を見かへつた。光に背いて暗らくはあつたけれどもその顏には格別不快らしい色は見えないやうに見えた。而して「ひどい風になつたねえ」といひながら、靜かに座を立つて、座蒲團の上に敷きそへてゐた、毛布の

疊んだのを火鉢の向うにおきなほした。人見は一寸遠慮するやうな恰好でそれに坐つた、それは園の體溫で丁度よく暖たまつてゐた。

綺麗に掃除されたラムプの油壺は瑠璃色のガラスで、その下には乳色のガラスの臺がついてゐた。ありきたりの品物だけれども、大事に取り扱はれてゐるためか、その瑠璃色の部分が透明で、美しい光澤を持つてゐた。骨を入れて蝙蝠傘のやうな形に作つた白紙の笠、これとてもありきたりのものだが、何んとなく淸々しくつて、注意して見ると、一ケ所、針の先でいくつとなく孔を明けた所があつた。園が何か深く考へこみながら、無意識にその邊にあつた縫針でいたづらをしたものに違ひない。あの子供のやうに澄んだ眼でぢつとラムプを見つめながら、ぷつり〳〵と乾いた西洋紙に孔を明けてゐる園の樣子が見えるやうだつた。

「何を勉强してゐるの」

園に對してはどうもひとりでに人見は聲を柔らげなければならなかつた。

「僕には少し方面ちがひのものだけれども、星野君が家に歸る時、讀んで見ろつておいて行つたものだから」と答へながら園は書物を裏返して表紙を人見に見せた。濃い藍の表紙に、金文字で單に" Mutual Aid "とだけ書いてあつた。

「倫理學の問題でも取りあつかつたものかい」

「著者は Prince P. Kropotkin といふ人で……」

「何、クロポトキン……それぢや君、それは露西亞の有名な無政府主義者だ」

人見は星野や西山達が議論する座に加はつて、この人の名は度々耳に入れたのだが、自分は學校で「農政及び農業經濟科」を選んでゐる癖に、その人にどんな著書があるかをさへ調べて見たことはなかつたのだ。

「さうだつてね。僕にはその無政府主義のことはよく分らないけれども、この本の序文で見るとダーウヰン派の生物學者が極力主張する生存競爭の外に、動物界にはこの mutual aid …何んと譯すんだらう、兎に角この現象があつて、それはダーウヰンもいつてゐるのださうだ。……さうだ、いつてはゐるね。『種の起源』にも『旅行記』にも僕は書いてあつたと思ふが…。それがこの本の第一編には可なり綿密に書いてあるやうだよ」

「科學的にも價値がありさうかい」

「隨分ダータばよく集めてあるよ」

さういひながら園はそこにあつた葉書をしをりにはさんで書物を伏せた。柿江――彼は驚くべき多讀者だが――などが書物を讀んでゐるのを見ても、さうは思はないが、園の前に書物があるのを見ると、人見は或る壓迫を感じない譯には行かなかつた。園はあの落ち着いた態度で書物の言葉の重さを一つづゝ計りながら、そこに蓄へられてゐる滋養分を綺麗に吸ひ取つてしまひさうに見えた。而して讀み終へられた書物には少しの油氣も殘つてはゐまいと思はされた。實際園が書物に見入つてゐるところを傍から見てゐると、一刻々々園が成長してゆくのが見えるやうで、人見はおいてきぼりを喰ひさうで、不安になる位だつた。といつて彼の書見に反對を稱へる理由は更にないのだ。

話題が途切れると、園は靜かな口調で、今まで讀んだ所を人見に話し始めたが、人見に取つては初耳で珍らしい事實が次から次へと語り出されるのだつた。而して園は著者の提供した議論に對しても相當に見識があると思はれる批評を下すのを忘れなかつた。生娘のやうに單純らしく思はれる園の頭がよくこれだけのことを吸收し得るものだ。つまりあいつの頭は學者といふ特別な仕事に向くやうに出來てゐるんだと人見は（自分の持つてゐる實際的の働きに或る自信を加へて）思つた。從つて園の話すところは、珍らしく、驚くべき事實であるには相違ない

けれども、人見に取つては直接何んの關係もないことだつた。そんなことを覺えてゐたところが、それは彼に取つては鷄肋のやうなもので、捨てるにもあたらないけれども、仕舞込んでおくには何處におくにも始末の惡い代物だつた。結局その場のばつを合はせる爲めに、さうかといつて聞いて置けば、それで濟むやうな事柄なのだ。で、人見は聞きながらも段々興味からは遠ざかつて行つた。それよりも機を見計らつてこつちから切り出さうとする問題が、やゝもとすると彼の頭を餘計支配した。

人見の顏からは興味の薄らいでゆくのを見て取つてか、園はやがて話を途中で切つて默つてしまつた。それが然し人見を輕蔑しての上のことでないのはその顏色にもよく窺はれるし、却つて自分で出過ぎたことをいつて退けたと反省して遠慮するらしい樣子が見えた。

この邊でこつちが今度は切り出す番だ。丁度いゝ潮時だと人見は思つたが、園に向つてゐると變にぎごちない氣分が先き立つた。彼は自分を促し立てるやうに、明日に迫る月末の苦しさを一度に思ひ起して見た。それと同時に、何度も園からせびり取りながら、而して一時的な融通を賴むやうなことをいつでもいひながら、一度も返濟したことのない後ろめたさが思ひ起されるのだつた。今度借りたら、今度こそは一度でも綺麗に返金しておかないとまづいことになる。さうしよう。さうして借りようととう〳〵人見は腹をきめた。

人見は星野の眞似をして襟首に卷いてゐた古ぼけたハンケチに手をやつて結びなほしながら上眼で園を見やつた。

「時に園君どうだらう。君の所に少しでも餘分の金はないだらうか。(おつかぶせるやうに)實は君には度々迷惑をかけてゐるので濟まないんだが、又すつかり行きつまつちやつたもんだから……西山か星野でもゐるとどうにかさせるんだが(これや少しうそが過ぎたかなと思つたが園がその言葉には無關心らしく見えるのですぐ追つか

けて）丁度ゐないもんだから切羽つまつたのさ。本屋の拂ひが嵩み過ぎて……もう三月ほど支拂を滯らしてゐるから今度は拂つておいてやらないとあとがきかなくなるんだ。……さうだねえ五圓もあれば（五圓といへば一ケ月の食費だが少し大きくいひ過ぎたか知らんと思つて人見はまた園の様子を窺つた）……何、それだけがむづかしければ內輪になつてもかまはないんだが……」

園は人見の眼に射られると、却つて自分で恥ぢるやうに視線をそらして、火鉢の火のあたりを見やつたが、ぢつとそれを見やつて暫く考へてゐるらしく、返事をしなかつた。

人見は園が格別裕福な書生であるとは思はれなかつた。が、少なくとも白官舍にまがりこまねばならぬほどの書生ではなく、こゝに來たのは星野が一緒にゐようと勸めたからのことであるのを知つてゐた。それにしても、足りないながらも國許から每月自分に送つて來る學資をよそに消費しておいて――消費するといふと大きく聞こえるが、ほんの少し許りをおたけとクレオパトラの爲めに消費するだけなのだ――不足を園にぶちかけるのは少し蟲がよすぎるやうだ。然しこの場合金がいることだけは確かなのだ。園が何んと返事をするかと人見はそれに興味をさへかけた。

「大分切迫して必要なの」

どやゝ暫くして園がはじめて顏を上げて靜かに人見を見た。これは又園があまり眞劍に考へ過ぎたなと思ふと、人見には卽座に返事をするのが躊躇された。その時ふつと考へついた思案をすぐ實行に移した。彼は懷中を探つて蟇口を取り出した。而してその中からありつたけの一圓五十錢だけ、大小の銀貨を取りまぜて摑み出した。

「尤もこれだけはあるんだが、これは何んの足しにもならないが、僕の君に對する借金の返濟の一部とするつもりで取つておいたんだ。所が昨日本屋の奴が來やがつて、いやに催促がましいことをいふもんだから、一先づ君

には濟まないが――そつちを綺麗にして鼻をあかしてやれといふ氣になつたのさ。で、これを先づ君の方に納めて、改めて五圓にして貸してくれる譯には行くまいかな」

「いゝとも」

園はその長口上を少しまどろこしさうに聞いてゐるらしかつたが、人見の言葉が終るとすぐにかういつて、机の方に向きなほつた。園は例の通り、ポッケットの中から、机の抽出しから、手帳の間から、札びらや銀貨を取り出した。あの几帳面に見える園には不思議な現象だと人見の思ふのはこのことだけだつた。あれで園は何時何處にいくら入れたといふことをちやんと諳記してゐるのかも知れないとも思つた。園は取り出した金を机の上で下手奠に勘定してゐたが、やがて丁度五圓だけにしてそれを人見の前においた。而して自分の方が金を借りでもしたかのやうに、男には珍らしい滑らかな頬の皮膚をやゝ紅くした。

「どうも濟まないよ。どうも難有う」

人見は思はずせき込んでかういつたが、何か自分の言葉が下品に響いたやうだつた。

戸外では寒いからつ風が勢ひこんで吹きすさんでゐるらしく、建てつけの惡るい障子が磨りへらされた溝ときしり合つて、けたゝましい音を立てゝゐた。この時始めてそれに氣がつくと、人見は話の絲目を探りあてたやうに思つて、落着きを見せて疊の上の金を蟇口にしまひ込みながら、

「これやいよ〳〵冬が來るんだよ。また今年も天長節には大雪だらうね。星野はどうしてゐるか知らん」

と園の心を占めてゐるらしく見える名前の方に漕ぎ寄せて行つた。

「星野君からは昨日手紙を貰つたつけ。すつかり冬が來るまでは千歳にゐるのださうだ。別に健康が惡いといふのでもなさゝうだが、氣候の變り目はあの病氣に矢張りよくないのだらうね」

さういつて園は靜かに人見を見上げたが、その眼は人見を見てゐるといふよりも、遠い千歳の方を見すかしてゐるやうに見えた。人見は人見で、今蟇口をしまひ込んだポッケットの中に、おたけから來た手紙が二つに折つてしまひこまれてあるのを意識してゐた。彼はそれを撫でゝ見た。園に對して感じるとは全く違つた暖かい、ふくよかな感じが、見る〳〵胸一杯に漲つて來た。

「君はこの頃はどうなの」

園が暫くしてからかういつた。園の眼は今度はまさしく人見を見やつてゐた。人見は不意を衝かれたやうに思つて、一寸尻ごみをしてゐたが、慌て氣味に手が襟卷の所に行つたと思ふと、今まで少しも出なかつた咳が輕く喉許を擽るのを覺えた。然し人見はわざとその咳を呑み込んでしまつた。

「なあに、僕のは大したことはないんだよ」

全く醫者が見てくれる度每、大したことはないといふのだが、それが何か物足らないのだけれども、この場合やはり醫者がいふやうにいふのが恰好だと人見は思つたのだ。而して園といふ男は變にストイックじみた奴だなと思つた。

* * *

紺の上つぱりを着て、古ぼけた手拭で姉さんかぶりをした母が、後ろ向きに店の隅に立つて、素麵箱の中をせせりながら、

「またこの寒いにお前どこかに出けるのけえ」

といふのを聞き流しにして淸逸は家を出た。

夕方だつた。道を隔てゝ眼の前にふさがるやうに切り立つた高い崕の上に、やゝ黃味を帶びた靑空が寒々と冴

えて、ガラス板を張りつめたやうに平らに廣がつてゐた。家の中にゐても火種の足りない火鉢にしがみついて、頻に盜風の忍びこむのに震へてゐなければならぬ淸逸に取つては、屋外の寒さもさう氣にならなかつたが、兎に角冬が紙一重に逼つて來た山間の空氣は針を刺すやうに身にこたへた。彼は首をすくめ、懷ろ手をしながら、落葉や朽葉と共にぬかるみになつた粘土質の縣道を、難澁し拔いて孵化場の方へと川沿ひを溯つて行つた。

風は死んだやうにをさまつてゐる。それだのに枝頭を離れて地に落ちる木の葉の音は繁かつた。かさこそと雜木の葉が、ばさりと朴の木の廣葉が、……朴の木の葉は雪のやうに白く曝れてゐた。

自分の家からやゝ一町も離れた所まで來ると、淸逸は川べりの方に自分で踏みならした細道を見出して、その方へと下りて行つた。赤に、黄に、紫に、から〳〵に乾いて蝕まれた野葡萄の葉と、枯蓬とが蟲の音も絕え果てた地面の上に干からびて縱橫に折り重なつてゐた。常住濕り氣の乾き切らないやうな黑土と混つて、大小の丸石が步む人の足を妨げるやうに夥しく轉がつてゐた。その高低を體の中心を取りながら辿つて行くと、水嵩の減つた千歲川が、四間程の幅を眼まぐるしく流れてゐた。淸逸はいつもの所に行つて落葉をかきのけた。一夜の間に落ちる木の葉の數はそれ程夥しかつた。袂の中から紙屑をつぎ〳〵に取り出してそれをそこの穴に捨てた。夕方のかすかな光の中に靑白い印象を淸逸の眼に殘して、その紙屑は一つ〳〵地に落ちた。喀痰の中に新鮮な血の交つたのがいくつも出て來るのを見ると、知らず〳〵溜息が出た。古い紙屑の上に新しい紙屑がぼろ〳〵と白く重なつて行つた。淸逸はやがて大儀さうにその上をまた落葉で掩うて立ち上つた。而して何んといふこともなくそこに佇んで川面を眺めやつた。半年といふ長い眠りに這入り込まうとするやうな自然は、それを眺める人の心を、寒く閉ざして行く靜かさを以て、靜かに最後の呼吸をしてゐるやうだつた。枝を離れた一枚の木の葉が、流れに漂ふ小舟のやうに、その重く澱んだ空氣の中を落ちもせず、ひら〳〵と辷つて行くのを見た。淸逸はふとそれに氣を

取られて、どこまでもその靜かに動いて行く行く手を見とゞけようとした。澤山な落葉の中でその木の葉だけは、動くともなく岸から遠ざかつて行つたが、凡そ十間近くも下流の方に下つて、一つの瀬に近づいたとおもふ頃、その瀬によつて惹き起される空氣の動搖に捲き込まれたのだらうか、忽ち慌だしく動き始め、もんどりを打つて、横さまに二三度閃いたと思ふと、見る〳〵水の方へと吸ひ込まれて見えなくなつた。そこまで見とゞけると清逸は胸の奥に何かなしに淋しいほゝ笑みを感じた。而して又溜息が出た。

どこもこゝも住み憂い所のやうにこの頃清逸は感ずるのだつた。札幌にゐて、入らざる費用をかけてゐながら學校に出ないのは馬鹿らしいし、學校に出るのも馬鹿らしかつた。彼が專門に研究してゐる農政の講義などは、一日引籠つて讀書すれば、半月分の講義の材料が出來る程稀薄なものだつた。自然科學の研究なども、プレパラートと見取り圖とを作ることに彼は不器用だつたが、それさへ除けば、あまり分りきつた事實の排列に過ぎなかつた。應用農學は學といふべきものではなかつた。百姓のしてゐることに秩序を立てゝ、それに章節を加へたまでのものと思はれた。語學だの數學だのといふ基礎學は、癇癪にさはるほど同級の者達が呑込みがおそいのでたゞもどかしさをそゝられるばかりだつた。それ故彼は第一學期の試驗が來るまで、ぢつと自分の家にゐて養生をしながら過ごさうと思ひついたのだ。然しながらこゝも住みよい所ではなかつた。あの父、あの母、あの弟。父は暇さへあれば母をつかまへて小言と自慢話ばかりしてゐるし、弟は誰の神經でもいら立たせずにはおかないやうな鈍いしぶとさを臆面もなくはだけて、一日三界人々の侮蔑と嘆きとの種になつてゐる。而してその上に、健康を著しく損じて、自分でさへ可なり我儘で氣むづかしくなつたと思ふやうな清逸自身が加はるのだ。自分の家に歸ると、清逸は一人の高慢な無用の長物に過ぎないのだ。しかもそれは恐ろしい傳染性の血を吐く危險な厄介物でもあるのだ。朋友の間には畏敬をもつて迎へられる清逸だけれども、自分の家では掃除一つしようともしない怠け

者になつてしまふのだ。彼の歸つたのは彼の家にどれだけの不愉快な動搖を與へる結果になつたか。その爲めに父の酒はまづくなる。母と弟とはいひ爭ひをする。これまで兎にも角にも澱んだなりで靜かだつた家の內が、急にいら／＼した氣分でかき亂されはじめた。淸逸はその不愉快な氣持を舌の上に乘せてゐるやうに思つた。彼の口は自然に唾を吐いて捨てたいやうな衝動を感じた。

と云つて彼は卽刻東京に出かけてゆく手段を持つてはゐないのだ。神經衰弱の養生の爲めに、家族を擧げて亞米利加に行つてゐる戶田敎授でもゐたら、相談に乘つてくれるかも知れない。新井田氏でも、三隅のをばさんでも賴んで見たら、考へてくれないこともないかも知れないが、淸逸としては假りにもそんな所に賴むのはいやだつた。それにつけて、淸逸はその瞬間ふと農學校の一人の先輩の出世談なるものを思ひ出した。品川彌二郞が農商務大臣をしてゐた頃、その人は省の門の側に立つて大臣の退出を待つてゐた。大臣が勢ひよく馬車に乘つて出て來るのを見ると、すぐ駈け出して行つて、否應なしにその馬車に飛び乘つた。而して馬車が官舍に着くまで滔々と意見を披露して大臣に口をきく暇をさへ與へなかつた。官舍に着くと大臣に先立つて官舍に驅け込んで、自分がその家の主人でゞもあるやうに大臣を迎へた。而して自分の意見の續きをしやべりこくつた。大臣もとう／＼根氣負けがして、注意深くその人のいふことを傾聽するやうになつたが、その結果としてその人は歐米への視察旅行を命ぜられ、歸朝すると、すぐ所謂要路の位置についたといふのだ。淸逸はそれを聞いた時、木下藤吉郞の出世談と甲乙のない程卑劣不愉快なものだと思つた。實力がないのではない、實力があればこそ、そんな突飛な冒險にも成功したのだ。けれども藤吉郞もその人も、自分の實力を認めさせないで、認められようとした。それが惡いことだとはいはれない。結局認めさせるのも、認められるのも同じやうなことだ。それにもかゝはらず、淸逸にはそれが迚も我慢の出來ない惡い趣味だとより思へなかつた。この氣持は三隅にも新井田氏にも彼自身を訴へて見る企

てをどこまでも否定させた。渡瀨にでもさせておけば似合はしいことかも知れないと淸逸は思つた。淸逸は、どん〳〵夜になつて行かうとする河の面をぢつと見つめ續けながら考へた。

「俺は世話を燒くのも嫌ひだ。世話を燒かれるのも嫌ひだ。……俺はエゴイストに違ひない。所が俺のエゴイズムは、俺の頭が少し優れてゐるといふところから來てゐると誰もが考へさうなことだが、そんな淺薄なものではないんだ。縱令頭は少しは優れてゐようとも、俺は貧乏でしかも死病に取りつかれてゐるんだから、喜んで世話を燒いてもらふ資格は十分にあるんだ。それにもかゝはらず、俺は世話を燒かれるのはいやだ。……俺はもつと自然に近くありたいのだ。自然は俺をこんなに生みつけた、こんなに病氣にした。しかもそれは自然の知つたことぢやないんだ。自然といふものは心憎い姿を持つてゐる」

淸逸はどん〳〵流れてゆく河の水を見つめながらこんなことを考へた。そしてそのとたん、氣がついたやうに眼をあげてあたりを眺めまはした。實際淸逸に見やられる自然は、淸逸とは何んのかゝはりもないものゝやうに、たゞ忙がしく夜につながらうとしてゐた。河は思ひ存分に流れてゐた。空は思ひ存分に暗くなりまさつてゐた。木の葉は思ひ存分に散つてゐた。枯枝は思ひ存分に强直してゐた。その間には何等の連絡もないものゝやうに。淸逸は深い淋しさを感じた。同時に强いいさぎよさを感じた。長く立ちつゞけてゐた彼の足は少ししびれて、感覺を失ふほど冷えこんでゐた。それに反してその頭は勇ましい興奮をもつて熱してゐた。

興奮が祟つたのか、寒い夜氣がこたへたのか、歸途につかうとしてゐた淸逸はいきなり激しい咳に襲はれ出した。喀血の習慣を得てから咳は彼には大禁物だつた。死の脅しがすぐ彼には感ぜられた。彼は殆んど衝動的にその場にうづくまつて、胸をかゞめて、膝頭に押しつけるやうにして、成るべく輕く咳をせかうと勉めたが、胸の中から破裂するやうにつきあげて來る力には容易に勝てないで、二三十度も續けさまに重い氣息をはげしく吐き出さ

ねばならなかつた。一度血管が破れたら、そこからどれ程の血が流れ出るか、それは誰も知ることが出來ない。若し四合五合といふ血が出たら、それで命は彼から易々と離れて行くのだ。淸逸は喀血の度每にそれを物凄く感ぜねばならなかつた。

「兄さんでねえか」

道の方から木叢ごしにかう呼びかける弟の聲がした。淸逸は面倒な所で嗅ぎつけられたと思つて、勿論答へることも出來なかつたが、答へようともしなかつた。

やがて咳をしるべに純次が小道を下りて來た。孵化場から今歸りがけの所と見えて、彼が近づくと生臭い香ひがあたりに香つた。ぼんやりした黑い影が淸逸の後ろに突つ立つた。

「今頃何んだつてこんな所に來るだ。病氣が惡るくなるにきまつてるに。兄さんは丸で自分の病氣を考へねえから駄目だよ。皆んな迷惑するだ」

いかにも突慳貪にその聲はほざかれた。

「背中をさすつてくれ」

淸逸はきれ〴〵な氣息の中からさういつた。ごつ〳〵した手の平がぶきつちやうに淸逸の背中を上下に動いた。淸逸はその手の下で暫く〻の間咳きつゞけた。

咳がやんでも純次は矢張りさすり續けてゐた。淸逸は喀痰を紙に受けていくらかの明るみにすかして見た。黑い色に見えて血が可なり多量に吐き出されてゐた。彼は咄嗟にそれを丸めて水中に投げようとしたが、思ひかへして自分の下駄の下に踏みにじつた。この川下に住む人達は河の水をそのまゝ飲料に用ゐてゐるからだ。

純次はまだ懸命に兄の背中をさすり續けてゐた。淸逸は一種の親しみを純次に感じて、

「もうよくなつた。さあ歸らう。お前は仕事が終へると隨分疲れるだらうな」
といつてやつた。
「あたりまへよ」
純次の答へはからだつた。而して河岸まで行つて、清逸の背中を撫でゝゐた兩手をごしごしと洗つた。清逸は同情なしにではなく、ぢつと淋しくそれを見やつた。
弟が泥靴のまゝでぬかるみの中を構はず歩いてゆく間に、清逸は下駄をいたはりながら、遲れがちに續いた。たそがれといふべき暗らさになつて、行く手には淸逸の家の灯だけが、枯れた木叢の間にたつた一つ見やられた。純次は時々立ち停つては、もどかしさうに兄の方を顧みた。先に歸れと淸逸がいつてもさうはしなかつた。
「兄さん、お前はまた札幌に歸るのか」
と或る所で純次は兄を待ちながら突然にいつた。淸逸はさうだと答へた。
「死んでしまふぞ。歸らねえがいゝ」
それがいつか、母に向つて「肺病はうつるもんだよ」といつた弟の言葉だつた。純次はどうせ辻褄の合はないことをいふ低能者ではあつた。然し今の言葉に淸逸は、低能でない何人からも求められない純粹な親切を感ぜずにはゐられなかつた。
純次は兄の近づくのを待つてまたかういつた。
「お前は偉くならうとそんなことばかり思つてゐるから肺病に取りつかれるんだ。田舍にゐろよ、ぢきなほるに」
「さうだなあ、俺もこの頃は時々さう思ふ。おせいにも可哀さうだしな」
「そんだとも、皆んな可哀さうだな。姉さん泣いてべえさ」

清逸は不思議にも默つて考へこみたいやうな氣分になつた。而して凡ての人から輕蔑されてゐるだらしない純次の姿が、何となくなつかしいものに眺めやられた。その上彼の偶然な言葉には一つ〳〵逆說的な誠があると思つた。純次はどことなく締りのない風をして、無性に長い足をよぢれるやうに運ばせながら、兩手を外套の衣囊に突つ込んだまゝ、覺束なく清逸の眼の前を步いて行つた。人生といふものが暗く清逸の眼に映つた。

その夜清逸は純次の部屋でおそくまで働いた。純次の机の上からつまらぬ雜誌類や下らぬ玩具じみたものを排ひのけて、原稿用紙に向つた。純次はそのすぐそばで前後も知らず寢入つてゐた。丹前を着て、その上に毛布を被つてもなほ滲み透つて來るやうな寒さを冒して、清逸は「折焚く柴の記と新井白石」といふ論文をし上げようとした。物に熱中した時の徵候のやうに、不思議にも咳は出て來なかつた。たまさかに木の葉の落ちる音と、遠い川音との外には、純次の鼾がいぎたなく聞こえるばかりだつた。清逸は時折りペンを措いて、手を火鉢にかざさねばならなかつた。その度每に弟の寢顏をふりかへつて見た。仰向けに寢て（清逸には仰向けに寢るといふことがどうしても出來なかつた。仰向けに寢る奴は鈍物だときめてゐた）放圖なく口を開いて、鼻と口との奧にさはるものでもあるらしい、苦しさうな呼吸を大きくしてゐた。うす眼を開いてゐるのだが、その瞳は上瞼に隱れさうにつり上つてゐた。helpless といふ感じが、そのしぶとさうな顏の奧に積み重なつてゐるやうに見えた。

清逸は手のあたゝまる間、それを熟視して、また原稿紙に向つた。清逸は白石は德川時代に於ける傑出した哲學者であり、又人間であると思つた。儒學最盛期の荻生徂徠が濫りに外來の思想を生嚙りして、それを自己といふ人間にまで還元することなく、思ひあがつた態度で吹聽してゐるのに比べると、白石の思想は一見平凡にも單調にも思へるけれども、自分の面目と生活とから生れ出てゐないものは一つもなく、しかもその範圍に於ては、すべての人がかりそめに考へるやうな平凡な思想家では決してなかつたといふことを證明したかつたのだ。徂徠

が野にゐたのも、白石が官儒として立つたのも、單なる表面觀察では誤りに陷り易いことを論定したかつた。この事業は清逸に取つては單なる遊戲ではなかつた。彼はこの論文に於て彼自身を主張しようとするのだ。これは西山、及び西山一派の青年に對する挑戰のやうなものだつた。

白石文集、殊に「折焚く柴の記」からの綿密な書きぬきを對照しながら、清逸は殆ど寒さも忘れ果てゝ筆を走らせた。彼は有らゆる熱情を胸の奧深く葬つてしまつて、氷のやうに冷かな正確な論理によつて、自分の主張を事實によつて裏書きしようとした。やゝもすれば筆の先に迸り出ようとする感激を、强ひて呑み下すやうに抑へつけた。彼のペンは容易にはかどらなかつた。

アイヌと、熊と、樺戶監獄の脫獄囚との隱れ家だとされてゐるこの千歲の山の中から、一個の榴彈を中央の學界に送るのだ。而してそれは同時に清逸自身の存在を明瞭にし、それが緣になつて、東京に遊學すべき手蔓を見出されないとも限らない。清逸は少し疲れて來た頭を休めて、手を火鉢に暖ためながらかう思つた。而して何事も知らぬげに眠つてゐる純次の寢顏を、つく〴〵と見守つた。それと共に小樽にゐる妹のことを考へた。三人のきやうだいの間にはさまつた夥しい距離……人生の多樣を今更ながら恐ろしく思ひやつて見ねばならぬ距離……。けれども彼はすぐその心持を女々しいものとして鞭つた。兎に角彼は彼の道を何物にも妨げられる事なく突き進まねばならない。小さな顧慮や思ひやりが結局何になる。木の葉がたつた一つ重い空氣の中を群から離れて漂つて行く。さうだ自然のやうに、あの大自然のやうに。清逸は冷然として弟の顏から眼を原稿紙の方に振り向けた。そこには餘白が彼の頭の支配を待つもののやうに橫たはつてゐた。彼はゐずまひを正して、掩ひかぶさるやうにその上にのしかゝつた。而して彼は書いて〳〵書き續けた。

ふとラムプの光が薄暗くなつた。見ると、小さな油壺の中の石油は全く盡き果てゝ、灯は芯(しん)だけが含んでゐる

油で、盛んな油煙を吐き出しながら、眞黄色になつてともつてゐた。芯の先には大きな丁子が出來て、もぐさのやうに燃えてゐた。氣がついて見ると、小さな部屋の中はむせるやうな瓦斯で一杯になつてゐた。それに氣がつくと淸逸は急に咳を喉許に感じて、思はず鼻先で手をふりながら座を立ち上つた。

純次は何事も知らぬげに寢つゞけてゐた。

石油を母屋まで取りに行くには色々の點で不都合だつた。第一淸逸は咳が襲つて來さうなのを恐れた。しかも今、淸逸の頭の中には表現すべきものが群がり集まつて、はけ口を求めながら眼まぐるしく渦を卷いてゐるのだ。この機會を逸したならば、その思想の或るものは永遠に彼には歸つて來ないかも知れないのだ。淸逸は慌てて机の前に坐つて見たが、灯の壽命はもう五分とは保つやうに見えなかつた。芯をねぢり上げて見た。と、光のない眞黄色な灯が急に大きくなつて、ホヤの内部を眞黑にくすべながら、物の怪のやうに燃え立つた。

もう駄目だ。淸逸は思ひ切つて芯を下げてからホヤの口に氣息をふきこんだ。ぶす〳〵と臭の香ひを立てゝ燃える丁子の紅い火だけを殘して灯は消えてしまつた。煙つたい暗黑の中に丁子だけがかつちりと燃え殘つてゐた。絕望した淸逸は憤りを胸に漲らしながら、それを睨みつけて坐りつゞけてゐた。

「おい純次起きろ。起きるんだ、おい」

と淸逸は弟の蒲團に手をかけてゆすぶつた。暫く何事も知らずにゐた純次は氣がつくといきなり我破と暗闇の中に跳び起きたらしかつた。

「純次」

返事がない。

「おい純次、お前母屋まで行つて、ランプの油をさして來い」

「ラムプをどうする？」
「このラムプに石油をさして來るんだ。行つて來い」
清逸は我れ知らず威丈け高になつて。さう嚴命した。
「お前、行つて來ればいゝでねえか」
薄ぼんやりと、しかもしぶとい聲で純次がかう答へた。清逸は夜氣に觸れると咳が出るし、石油のありかもよくは知らないから、行つて來てくれと頼むべきだつたのだ。然しそんなことをいふのはまどろしかつた。
「馬鹿、手前は兄のいふことを聞け」
弟は何んとも答へなかつた。少しばかりの沈默が續いた。と思ふと純次はいきなり立ち上つて、清逸の方に近づくが早いか、拳を固めて清逸の頭から顏にかけて處きらはず續けさまになぐりつけた。それは思はず清逸をたじろがす程の意外な素早さだつた。
「出て行け、これは俺の部屋だい。出て行かねばたゝき殺すぞ」
やがて牛のうめき聲のやうな口惜し泣きが、立つたまゝの純次の口からおめき出された。
清逸は體中がしびれるのを覺えて、俯向いたまゝ默つてゐる外はなかつた。
「出て行かねえか」
純次は泣きじやくりの中から、かう叫んでいら立ち切つたやうに激しく地だんだを踏んだ。次の瞬間には何をし出すか分らないやうな狂暴さが清逸に迫つて來た。
清逸はしいんとした心の中で、孵化場あたりから來るらしい一番鷄の啼き聲をかすかに聞いたやうに思つた。部屋の中は然し眞暗闇だつた。

純次は何か手頃の得物をさぐつてゐるのらしくごそ〳〵と臥床のまはりを動きはじめてゐた。段々激しくなり增さるやうな泣きじやくりの聲だけが物凄く部屋中に響いてゐた。

「待て純次、俺は母屋に行くから待て」

淸逸は不思議な恐怖に襲はれ、不意の襲擊に對して用心をしながら座を立つて二三步入口の方に動かねばならなかつた。然しその瞬間に、しかけてゐた仕事の事を考へると、慌てゝ立つた所から上體を机の方に延ばして、手に觸れるにまかせて原稿紙をかき集めた。而してそれを大事に小脇にかゝへて、板壁によりそひながら入口へとさぐり寄つた。

部屋の中では純次が狂暴に泣きわめいてゐた。淸逸は誰のとも知れない下駄を突つかけて、身を切るやうな明け方近い空氣の中に立つた。

その時淸逸はまた或る一種の笑ひの衝動を感じた。然し彼の顏は笑つてはゐなかつた。

＊　　＊　　＊

隣りの間で往診の支度をしてゐた母が、

「ぬいさん」

と言葉をかけた。おぬいはユニオンの第四讀本からすぐ眼を放して、母のゐる方に少し顏を向け氣味にして、

「はい」

と答へたが、母は暫く言葉をつがなかつた。

「今日は渡瀨さんがいらつしやる日ね」

やがてさういつた。おぬいは母が何か胸に持ちながらものをいつてゐるのをすぐ察することが出來た。

「あなたはあの方をどう思つてだえ」

おぬいがさうだと答へると、母は又やゝ暫くしてからいつた。

おぬいは變なことを尋ねられるとおもつた。而して渡瀬さんに對する自分の考へをいはうとしてゐる中に、母は支度を濟して茶の間にはいつて來た。いつもの通り地味過ぎるやうな被布を着て、こげ茶のショールと診察用の器具を包んだ小さい風呂敷包とを、折り曲げた左の肘の所に上抱きにしてゐた。一切の香料を用ゐないで、綺麗さつぱりとした身だしなみは母にふさはしいものだつた。母はストーヴの火具合を見てから、親しみ深くおぬいのそばに來て坐つた。而して遊んでゐる右の手でおぬいの羽織の衣紋がぬけかけてゐるのを引き上げながら、

「どう思ふの」

ともう一度靜かに尋ねた。

「快活なおもしろい方だと思ひますわ」

とおぬいは平氣で思つたとほりを答へた。

「あなたにあつては誰でもいゝ方になつてしまふのね」

ほゝゑみながらさういつて母は一寸言葉を途切らしたが、

「私もほんとはあなたの思つてる通りに思ふのだけれども、世間ではさうはいつてゐないらしい。中にも敎會の方などには聞き苦しいとおもふ程ひどい評判をなさるのもあつて、どうして星野さんが、あんな人を推薦なさつたんでせうと、星野さんまで疑ふらしい口ぶりでした。私としてもあなたのやうにあの方をいゝ方だとばかり極める譯には行かないと思ふところもあるのだけれども、星野さんが仰しやつて下さるのだから私は信じてゐていゝと思ひます。……けれども噂といふものもあながち馬鹿には出來ないから、あなたもその邊は考へておつきあひな

さいよ。遊廓なんぞにも平氣でいらつしやるといふ人もあるんだから……」

おぬいは遊廓といふ言葉を母の口から聞くと、身がすくみさうに恥ぢらはしくなつて、顏の火照るのを覺えた。母はそれを見て少し違つた意味に取つたらしい。

「さうね、私は星野さんや渡瀨さんを信ずるよりあなたを信じませうね。渡瀨さんに用心するより、あなたが眞直な心をさへ持つてゐれば少しもこはいことはありませんよ。どんなことがあつても人樣を疑ふのはよくないものね。正しい心がけで、その外は神樣におまかせしておけば安心です。……ではこれから出かけて來ますからね、渡瀨さんがいらしつたらよろしく」

かういひ殘して母は甲斐々々しく、雪のちら〳〵降る中を病家へと出かけて行つた。

母を送り出して茶の間に歸つたおぬいは、ストーヴに薪を入れ添へて、火口の所にこぼれ落ちた灰を掃除しながら時計を見るともう三時になつてゐた。部屋の中は綺麗に片付いてゐて、客を迎へるのに少しの手落ちもなかつた。自分の身なりをも調べて見て、再び机の前に坐らうとした時、ふと母のいひ殘した言葉が氣になつた。渡瀨さんの來る時には今までいつでも折りよく母がゐたのに今日は留守になるので、それであれだけのことをいひおいたのかと思へた。さう思つて見ると、その言葉の一つ〳〵には假初めに聞き流してはゐられないものがあるやうだつた。さういへば渡瀨さんといふ人は、星野さんや園さん、その外農學校にゐる書生さん達とは少し違つたところがある。あの人の前に出るとはじめから自由な氣持で何んでもいへさうだけれども。而して困つたことでもあつた時、相談をしかけたら、すぐてきぱき始末をつけてくれさうだけれども、その先の先がどう變つてゆくのか、渡瀨さん自身でさへ無頓着でゐるやうにも見える。他人のことはすぐ見ぬいてしまつて、しかも決して急所を突くやうなことはしない代りに、自分のことになると自由過ぎる程暢氣なやうにも見える。さうかと思ふと、どん

な些細なことでも自分を中心にしなければ取り合はないやうなところもある。けれどもあの人は眞から惡い人ではない、而して眞から惡いといふ人が世の中には本當にあるものだらうか。……おぬいは讀本に眼をやりながら、その一語をも讀むことなしに、こんなことを考へた。渡瀨はがさつで下品でいけないと家に來られる書生さん達はよくいふけれども……私にはつひぞさうしたやうなことは見當らない。……私は一體、他の人達とは生れつきがちがふのだらうか。少しぼんやりし過ぎて生れて來たのではないだらうか。餘りに人々と自分との考へ方はかけちがつてゐる。……本當にかけちがつてゐる。まだ何んにも知らないからなのだらう。……おぬいは非常に恥かしいところに突きあたつたやうな氣がした。而して知らず識らず體中が熱くなつた。

そんなことを思つてゐると、ふとおぬいは心の中に不思議な警戒を感じた。彼女は緋鹿の子の帶揚が胸のところにこぼれてゐるのを見つけ出すと、慌てたやうに帶の間にたくしこんで、胸をかたく合せた。藤紫の半襟が、成るべく隱れるやうに襟元をつめた。束髮にはリボン一つかけてゐないのを知つて、やゝ安心しながら、後れ毛のないやうにかき上げた。而して袖口をきちんと揃へて、坐りなほすと、はじめて心が落着くのを感じた。おぬいはしんみりと讀本に向いて勉强をしはじめた。

やゝ暫くしてから、格子戸が力强く引き開けられた。それは渡瀨さんに違ひなかつた。おぬいは別に慌てることもなく、すなほな氣持で立ち上つて迎ひに出ようとしたが、部屋の出口の柱に、母とおぬいとの襷がかけてあるのを見ると、派手な色合ひの自分の襷を素早くはづして袂の中にしまひこんだ。

「いつもの通り胡坐をかきますよ。敲き大工の息子ですから、几帳面に長く坐つてゐると立てなくなりますよ」

渡瀨さんはさういつて、片眼をかゞやかしながら、から〳〵と笑つて膝を崩した。から〳〵といつても、渡瀨さんの笑ひには聲は出なかつた。

「茶なんざあ、あとでいゝですよ。さあやりませう」

　おぬいは渡瀬さんのいふ通りにして、その人と向合ひに坐つた。渡瀬さんの氣息はいつものやうに酒くさかつた。飲んだばかりの酒の匂ひではなく、常習的な酒癖の爲めに、體臭になつたかと思はれれやうな匂ひだつた。おぬいはそのすえたやうな匂ひをかぐと、輕い嘔氣をさへ催すのだつた。けれども、それだからといつて渡瀬さんを卑しむ氣にはなれなかつた。父の時代から一滴の酒も入れない家庭に育ちながら、而して母も自分も禁酒會の會員でありながら、他人の飲酒を一概に卑しむ心持は起らなかつた。これは自分の心持に忠實な態度だらうかとおぬいはよく考へて見るのだつた。禁酒會員である以上は、自分の力の及ぶかぎり飲酒を諫めなければならないとも思つた。その人が溺れてゐる惡い習慣の結果を考へるなら、不愉快を忍んでも諫め立てをするのが當然だつた。けれどもおぬいには心持としてそれがどうしても出來なかつた。何故だかおぬい自身には判らないけれどもどうしても出來なかつた。自分が卑怯だからさうなのかと考へても見たが、あながちさうでもない。面倒だからか。さうでもない。どういふ心持なのだらう……おぬいはその解決を求めるやうに渡瀬さんの方を見た。酒燒けといふのだらうか、きめの荒さうな皮膚が紫がゝつてゐて、顏全體にむくみが來て、鋭い光を放つてかゞやく眼だけれども、その白眼は見るも痛々しいほど充血してゐた。……酷たらしい、どうして渡瀬さんは酒なんぞお飲みなさるのだらう。それにしても、あれ程の害をまざ〳〵と受けながら、飲みつゞけてゐられるのは、自分たちには分らない譯があることに違ひない。私は渡瀬さんが何んだかお氣の毒だ。けれども何も知らない私の力ではどうしようもないではないか……つまりこれだけしか分らなかつた。

「偖てと、今日はどこから……おや、あなた僕の顏を見てゐますね。はゝゝゝ。僕の顏は出來損ひですよ。それとも何かついてゐますか」

渡瀨さんはいきなりそのこね固めたやうな奇怪な顏を少し突き出すやうにした。おぬいは大變な惡いことをしたとおもつた。人の醜い部分に臆面もなく注意を向けてゐたのを……その積りではなかつたのだが……濟まなく思つた。といつても、いひ譯も出來なかつた。たゞ渡瀨さんの顏の醜いのを物好きに眺めてゐたのではない。それを知らせたい爲に、十分の好意をもつて、かすかに微笑んだ。

するとと渡瀨さんは途轍もなく、

「失禮、あなたはいくつになりますね」

と尋ねた。素直に十九だと答へると感心したやうに、

「ふーむ、珍らしいな、奇體だなあ」

と嘆息するやうにいひながら、今度は渡瀨さんがしげ〳〵とおぬいの顏を見た。おぬいは輕い羞恥と、更にかすかな恐れをも感ぜずにはゐられなかつた。けれどもその場合、恥かしがることも恐れることも少しもない筈だと思ふと、すぐに不斷の通りの氣持に歸ることが出來て、

「それでは始めていたゞきます」

といひながら、書物を机の眞中の方に持つていつた。渡瀨さんもその積りらしく、上體を机の上に乘り出した。

おぬいは何もかも忘れて、懸命にこの前教へられたところを復習した。第四讀本は少し力に餘るのだけれども、書いてあることが第三讀本より遙に身があるので、讀むには勵みがあつた。アーヴィングといふ人の「悲戀」(Broken Heart)といふ條りだつた。星野さんがこの書物を始める時、目次によつて內容をあらかた話してくれた時、この章に書いてあるのは、アイルランドの或る若い勇ましい愛國者と、その婚約の娘との間に起つた實際の出來事だといつたので、おぬいには餘計興味のあるものだつた。渡瀨さんがこの前それを講義してくれた時も、

おぬいは幾度となく美しい悲しさを覺えて、涙のこぼれ落ちさうになるのをぢつと我慢しながら、平氣な顏をして、數學でも解くやうに講義してゐる渡瀨さんを不思議に思つた。而して渡瀨さんが歸つてから、その一伍一什を母に話して聞かせようとして、ふと母の境涯を考へると、飛んでもないことをいひかけたと思つて、そのまゝ口には出さないでしまつたのだつた。

今日その章を聲を出して讀むことは、おぬいには可なり苦しいことだつた。若しもこの前のやうに感情が書いてあることに誘ひこまれたら、どうしようと危ぶまずにはゐられなかつた。どこまでも作り話だと思つて讀まうと勉めながら、おぬいは始めの方から意譯して行つた。けれども冒頭からもう涙ぐましい氣持にされてゐた。おぬいはかねてから、自分の身の上にも、いつかは戀愛が來るだらうとは覺悟してゐた。けれどもそれは、本當に來るのだらうかと疑はねばならぬほど遠いところにあるもので、しかもそれに襲はれたが最後、知りながら否應なしに、苦しみと悲しみとに落ちこんで行かねばならぬものと何故とはなく思ひこんでゐた。彼女の心の底をゆり動かす怖れといつては實際それだけだつた。今おぬいの眼の前には、彼女の心の怖れを裏書きするやうな事實が語られてゐるのだ。讀んでゆく中におぬいの心は幾度となく悲しさと惱ましさとのために戰いた。或るところでは言葉が震へ、或るところでは涙が溢れ出ようとしたけれども、おぬいは露ほどもそれを渡瀨さんに氣取られたくはなかつた。さういふ所に來ると彼女は已むを得ず口を噤んで、解らないところに出遇はしたやうに裝つた（おゝ何んといふ惡いことだらう、私はこの頃人樣の前で自分を僞らねばゐられないやうになつて來た、とおぬいは心の中で嘆息するのだつた）。

「そこですか。それは何んでもないぢやありませんか」

と渡瀨さんは無遠慮にいつて、頭のいゝ人らしくはつきり解るやうに敎へてくれた。おぬいはその間にやうやく

感情を抑へつけて、また先きを讀みつゞけてゆくことが出來た。而してかういふ事が二度三度と重なつて行つた。おぬいはまた烈しい感情で心を搖り動かされて、胸の所に酸つぱく衝き上げて來るやうなものを感じながら默つてしまつた。然し渡瀬さんは今度は卽座には敎へてくれなかつた。不思議には思ひながらも、暫くたつてから、やうやく顏を上げて見ると、渡瀬さんは充血して、多少ぼんやりしたやうな顏付で、おぬいの額際をぢつと見つめてゐたのだと知れた。おぬいは不思議にもそれを知ると本能的にはつと思つた。渡瀬さんも日頃の渡瀬さんに似合はず、少し慌てながら顏を紅くして、すぐ書物に眼を落したが、

「えゝと、それは……何處でしたかね」

といひながら、やきもきと顏を書物の方につき出した。

おぬいはその時圖らず母のいひおいて行つた言葉を思ひ出してゐた。而して渡瀬さんに對して、恐ろしい不安を感じないではゐられなくなつた。渡瀬さんと向ひ合つて人氣のない家にゐるのがたまらない程無氣味になつた。おぬいは思はず「天にある父様」と念じながら（神様といふ言葉はきらひだつた。父が亡くなつてからは天にある父様といふ言葉がこの上もなくなつかしかつた）、力でも求めるやうに、素早くあたりを見まはした。「若し私が知らずに渡瀬さんを誘惑しましたら、どうか〳〵お許し下さいまし」

「正しい心がけで、その外は神様におまかせしておけば安心です」……その母の言葉、それがまた思ひ出された。おぬいは眼がさめたやうに自分の今までの卑怯な態度を思ひ知つた。自分の心の姿を渡瀬さんに見せまいとしてゐたのが間違ひだつたと氣がついた。そこに氣がつくと、急にすが〳〵しく力を感じた、落着いて再び書物に向ふことが出來た。讀んでゆく間に、勿論感情は昂められたけれども、口を噤む程のことはなくて、仕舞まで讀みつゞけた。渡瀬さんもそれからは可なり注意しておぬいの譯讀を見てゐてくれた。

讀み終へるとおぬいは眼に涙をためてゐた。もうそれを渡瀨さんに隱さうとはしなかつた。

「度々讀みつかへたのを御免下さいまし。意味が分らなかつたのではないんですけれども、あんまり悲しいことが書いてあるものですから、つひ默つてしまひましたの。作り話ではどんな悲しいことが書いてあつても、私そんなに悲しいとは思ひませんけれども、こんな本當のお話を讀みますと……」

ハンケチで涙を拭ひながら何事も打ち明けてからういつた。

「これは本當の話ですか」

渡瀨さんは恥かしげもなくかう聞き返した。

「星野さんがさういふやうに仰しやつてゞしたけれども」

「本當であつたところが要するに作り話ですよ。文學者なんて奴は、尾鰭をつけることがうまいですからね」

渡瀨さんはこだはりなさゝに笑つたが、やがていくらか眞面目になつて、

「今日はお母さんは……お留守ですか」

「診察に出かけました……よろしくと申してゐました」

正しい心がけで……おぬいは怖れることは露ほどもないと心を落ちつけた。

「ぢや先をやりますかな……」

渡瀨さんは書物を手に取り上げて、暫く何處ともなく頁をくつてゐたが、少し失禮だと思ふほどまともにおぬいを見やりながら、

「おぬいさん」

といつた。渡瀨さんから自分の名を呼ばれるのはおぬいには始めてだつた。

「はい」

おぬいもまじろがずに渡瀬さんを見た。

「やあ困るな、さう眞面目に出られちや……あなたは今の話で涙が出るといひましたが、……あなたにもそんな經驗があつたんですか」

「いゝえ」

「それで泣くといふのは變ですねえ」

おぬいはこゝぞと思つて、きつぱりと答へた。

渡瀬さんは少し大ぎやうにかういひながら、立ち上つてストーヴに薪をくべに行かうとした。おぬいも反射的に立ち上つてその方に行きかけたが、二人が觸れあはんばかりに互に近寄つた時、渡瀬の全身から何か脅かすやうなものが迸り出るのを感じて、急いで身をひるがへしてもとの座になほつた。

渡瀬さんは薪をくべると手をはたき合せながら机の向うに歸つた。

「經驗のないところに感動するつて譯はないでせう」

この二の句を聞くと、おぬいは餘りに押しつけがましいと思つた。噂のとほり少し無遠慮過ぎると思つた。

「これはたゞさう思ふだけで御座いますけれども、戀といふものは恐ろしい悲しいものゝやうに思ひます。私にもそんな時が來るとしたら、私は死にはしないかと、今から悲しう御座います。だもんですから、あゝいふお話を讀みますと、つひ自分のやうに感じてしまふので御座いませうか」

「あなたは實際、例へば星野か園かに戀を感じたことはないのかなあ」

おぬいはもうこの上我慢がしてゐられなかつた。母がゐてくれさへすればと思つた。口惜涙を抑へようとして

も抑へることが出來なかつた。而してハンケチを取り出す暇もないので、兩方の中指がしらの所にあてゝ、俯向いたまゝぢつと涙腺を押へてゐた。

渡瀨さんは暫くぼんやりしてゐたが、急に慌てはじめたやうだつた。

「惡かつたおぬいさん。僕が惡かつた。……僕はどうもあなた見たいな人を取りあつかつたことがないものだから……失敬しました。……僕はこんな亂暴者だが、今日といふ今日は、我を折りました。……許して下い。僕はかうやつて心からあやまるから」

おぬいは眼をふさいでゐたけれども、渡瀨さんが坐りなほつて、頭を下げてゐるのがよくわかつた。而して切れ〴〵にいひ出された今の言葉が決して出まかせでないのが一つ〳〵胸にこたへた。

然しおぬいが一たび受けた感じは容易に散りさうにはなかつた。で、仕方なしにはずみ上る言葉をやうやく抑へつけながら、

「えゝもう何んとも思つてはゐませんから……ゐませんから、私をこそお許し下さいまし。けれども今日は、もうこれで、お歸りを願ひたう御座いますの」

とだけやうやくいつて退けた。

「え、……歸ります」

渡瀨さんはさういつたなり、立ち上つて部屋を出た。おぬいは何かもつと和解の心を現はして、渡瀨さんの心をやすめたいと思つたけれども、何かいふのがどうしても不自然だつたので何もいはないことにして、上り口まで送つて出た。

「どうか許して下さい」

下駄をはくと、渡瀨さんはこつちを向いてから挨拶した。おぬいも好意をもつて眼を上げた。渡瀨さんはにこにこしてゐた。そして意外だつたのは、つぶれてゐない方の眼に涙がたまつてゐるのではないかと思へたことだつた。

たつた一人になるとおぬいはほつと溜息が出た。何か自分が思ひもかけない結果を渡瀨さんに與へたのではないかと思ふと、自分といふものが怖ろしいやうだつた。彼女の知らない力があつて、兎もすると願ひしもない所に彼女を連れ込んで行かうとするかにさへ感じられた。さういふ時に父のゐないのがこの上なく淋しかつた。おぬいは障子を半ば締めたまゝ、こん／＼と大降りになり出した往來の雪を、ぼんやりと瞬きもせずに眺めながら、渡瀨さんを送り出したその姿勢から立ち上り得ずにゐた。

やゝ暫くして、何んといふ弱々しいことだと自分をたしなめて、おぬいは立ち上ると、障子を締め、その足でラムプを茶の間に運んで火をともした。時計はもう五時半近くになつてゐた。夕方の支度がおそくなりかけてゐた。

おぬいは大急ぎで書物を仕舞ひ、机を片付け、臺所に出て、白いエプロンを袂ごと胸高に締め、しばられた袂の中からやう／＼の思ひで襷をさぐり出すと、それをつむりに潜らせようとしたが、華やかなその色が、夕暗の中で痛いやうに眼に映つた。おぬいは一度のばしたその襷を、ぐちや／＼に丸めて、それを柱にあてがつて顔を伏せると、誰の爲めにとも、誰にともなく祈りたい氣持で一杯になつた。

おぬいはさうしたまゝ、灯もともさない臺所の隅で、暫くの間慄へるやうな胸をぢつと抑へて、何んとなくそこにつき上げて來るえたいの知れない不安を逐ひ退けようとして佇んでゐた。

＊　　＊　　＊

創成川を渡る時、一つ下の橋を自分と反對の方向に渡つてゆく婦人は、降りはじめた雪のためにいくらかぼんやりしてゐたけれども、三隅のをばさんに違ひないと渡瀨は見て取つた。今日こそはおぬいさん一人だぞといふ意識がすぐいたづららしい微笑となつて彼の頰を擽つた。

行つて見るとおぬいさん一人らしかつた。脫ぎ取つた帽子の雪をその人が丁寧に拂つてくれた。いつもの通り茶の間はストーヴでいゝ加減に暖まつてゐた。而して女世帶らしい細やかさと香ひとが、家中に滿ちてゐて、何處から何處まで亂雜で薄汚ない彼の家とは雲泥の相違だつた。渡瀨はその茶の間にしめやかな落着きを感ずるよりも、或る强い誘惑を感じた。けれども机に向つておぬいさんと對坐すると、どうしてもいつもの彼の調子が出にくかつた。道々彼が思ひめぐらして來たやうな氣持は否應なしに押しひしやがれさうだつた。いつ見てもおぬいさんはきちんとし過ぎる程つゝましく身だしなみをしてゐた。そんな氣持でしてゐるのではないかも知れないが、而してさうでない證據には凡ての擧止が如何にもこだはりのない自然さを持つてゐるのだが、後れ毛一つ下げてゐない程それを淸く守つてゐるのを見ると、どこといつてつけ入る隙もないやうに見えた。けれども、それが渡瀨に取つては却つて冒險心をそゝる種になつた。何、おぬいさんだつて女一疋に過ぎないんだ。びく〳〵してゐるがものはない。崩せるだけ崩して見てやれといふ氣がむら〳〵と起つて來て、彼はいきなり胡坐をかきながら、

「いつもの通り胡坐をかきますよ。敲き大工の息子ですから、几帳面に長く坐つてゐると立てなくなりますよ」

といつて思ひ切り彼らしい調子を上げて笑ひ崩した。おぬいさんはその時立つて茶棚の前に行つてゐたが、肩越しにこちらを振り返つて、別に驚きもしないやうににこ〳〵しながら「どうぞ」といつた。

茶なんぞ飮むよりもおぬいさんと一分でも長く向ひ合つてゐたかつた。茶はいらないといふと、折角茶器を取

り出しかけてゐたおぬいさんは素直にそのまゝそれをそこにおいて、机の座に戻つて來た。こゝで彼は新井田の奥さんとおぬいさんとを眼まぐるしく心の中で比較してゐた。迚も駄目だ、比べものなんぞになるものか。二十近い年までこんなに色氣といふものなしに育つて來た娘が一體あるものだらうか。新井田の奥さんの方が顔の造作は立ち勝つてゐるかも知れないが……待てよさう一概にはいへないぞ。第一こつちは丸で化粧なしだ。おまけにコケトリなしだ。それだのにこの娘から滴り落ちる……滴り落ちる何んだな……滴り落ちるX、そのXの量と來たらどうだ。それがしかも今のところ丸つきり無駄になつて滴り落ちてゐるんだ。おぬいさんはそれを惜しいものとも思つてはゐないのだ。そこに行くと新井田の奥さんの方はさもしさの限りだ。一滴落すにもこれ見よがしだ。あれで色氣が出なかつたら出る色氣はない。中央寺の坊主のいひ草ではないが珍重々々だ。おぬいさんがあのXの全量を誰かに滴らす段になつて見ろ……。渡瀬は思はず身ぶるひを感じた。

先づ作戰はあと廻はしにして、

「偖て、今日はどこから……」

といひながらおぬいさんを見ると、書物に見入つてゐるとばかり思つてゐたその人は、潤ひの細やかなその眼をぱつちりと開けて、探るやうに彼を見てゐるのだつた。渡瀬はこの不意撃ちに一寸どぎまぎしたが、すぐ立ち直つて如何なる機會をも摑まうとした。

「おやあなた僕の顔を見てゐますね。はゝゝ。僕の顔は出來損ひですよ。それとも何かついてゐますか」

さういつて彼は剽輕らしくわざと顔をつき出して見せた。この場合あたりまへの娘ならば、眞紅な顔になつてはにかんでしまふか、おたけさん級の娘なら、低能じみた高笑ひをして、男に隙を見せるか、悧巧を鼻にかけた娘なら、已惚れはよして下さいといはんばかりにつんとするに極つてゐるのだつた。渡瀬はそのどれをも取りひ

しぐ自信を持つてゐた。所がおぬいさんは顏をあからめもせず、澄ましもせず、高笑ひもせずに、不斷の通りの心置きない表情に少しほゝ笑みながら「いゝえ」とだけいつて、俯向き加減になつた。
似而非物では斷じてない。俺がいつたんでは不似合だが、先づ神々しい innocence だ。さういふことを許してもいゝ。十九……十九……全くこれが十九といふ娘の仕業だらうか。渡瀨は少し憚りながらも、まじ〳〵とおぬいさんを眺めなほさずにはゐられなくなつた。骨節の延び〳〵とした、やゝ瘦せぎすのしなやかさは十六七の娘といふ方が適當かも知れないが、爭はれないのは胸のあたりの暖かい肉付、小鼻と生え際の滑かな脂肪だつた。そしてその顏には一寸見よりも堅實な思慮分別の色が明かに讀まれた。それにしてもあまり自然に見える、子供のやうに神々しい無邪氣。渡瀨は承知しながら〳〵おぬいさんの齡を聞いて見たくなつた。而して突然、
「失禮、あなたはいくつになりますね」
と尋ねて見た。さすがにおぬいさんは少し顏を赤らめたが、少しも隱し隔てなく、渡瀨を信賴し切つてゐるやうに、
「もう十九になりますの」
とおとなしやかに答へた。Xは常に滴り落ちてゐる。然しながら瀨瀨は容易にそこに近寄れないのを知らねばならなかつた。而して感歎のあまり、
「ふーむ、珍らしいな、奇體だなあ」
と口に出してしまつた。實際考へて見ると、渡瀨が今まで交涉を持つたのは、多少の程度こそあれ男といふものを知つた娘ばかりだつた。本當に男を知らない女性が、こんなに不思議なものを祕してゐようとは全く思ひもかけなかつた。渡瀨にはその寶に觸れて見る資格が取り上げられてゐるやうにさへ見えた。彼は少しあつけに取

られた。

「それでは始めていたゞきます」

さうおぬいさんが凛々しく響くやうな聲でいつて、書物をぼんやりしかけた渡瀨の前にひろげたので渡瀨はやうやく我に返つた。おぬいさんの復習したのは、アーヴィングの「スケッチ・ブック」の中にある、或る甘つたるい失戀の場面を取りあつかつたもので、渡瀨がこの前讀んで聞かせた時には、下らない夢のやうなことを、男の癖によくかうのめ〳〵書いたものだと思つたのだが、今日おぬいさんがそれを復習してゐるのを聞いて見ると、あながち夢のやうなことには思へなかつた。誰に專ら聞かさうといふそれは聲なのだらう。何處までも澄み切つてゐながら、しかも震ひつきたいほどの暖かみを持つたそのしなやかな聲は、悲しい物語を、見るやうに渡瀨の耳の奥に運んで來た。始めの中は、おぬいさんがつかへるとすぐに見てやつてゐたが、段々そんな注意は遠退いて、ほれ〴〵とその聲に聽き入らずにはゐられなくなつた。おぬいの聲にも次第に熱情が加はつて來るやうに見えた。渡瀨は知らず〳〵書物から眼を離して、自分のすぐ前にあるおぬいさんの髮、額、鼻筋、細長い眉、睫毛、物いふ毎にかすかに動くやゝ上氣した頰の上部、それらを見るともなく見やりはじめた。凡てが何んといふ憎むべき蠱惑だらう。これはやり切れない御馳走だ。耳と眼とが醉つたくれていふことを聽かなくなつてしまふ、と渡瀨はわく〳〵しながら考へた。それが渡瀨には容易に專有することの出來ない寶だと考へれば考へる程、無體な欲求は激しくなつた。敎師としてこれ程信頼されてゐるのをといふ後ろめたさを彼は知らず〳〵段々に踏み越えて行つた。しびれるやうな欲望の熱感が健康過ぎる程な彼の五體をめぐり始めた。

色慾の遊戲に慣れた渡瀨には、戀愛などといふしやら臭いものは、要するに肉の接觸に衣をかけたまやかしものに過ぎない。男女の間の情愛は肉をとほして後に開かれるのだと、今までの經驗からも決めてゐる渡瀨には、

これ程嵩じて來た恐ろしい衝動を堰きとめる力はもう無くなりかけてゐた。彼は顔にまで充血を感じながら、
「おぬいさん逃げるなら今の中だ。早く逃げないと僕は何をするか、自分でも分らないよ」と惽れむが如くに自分の前にうづくまる豐麗な新鮮な肉體に心の中でさゝやいたが、同時に、「逃げるなら逃げて見ろ。逃げようとて逃がしてたまるか」と頑張るものが益々勢ひを逞しくした。眼の前がかすみ始めた。
いつの間にかおぬいさんの聲がしなくなつてゐた。それに氣付くとさすがに渡瀨は我れに返つた。而してさすがに自分を恥ぢた。おぬいさんは渡瀨が今まで妄想してゐた所よりあまりかけ離れた淸い所にゐた。彼は書物の方に顔を寄せながら、兎も角、
「えゝと、それは」
といつたが、どこに不審の箇所があるのか皆目知れなかつた。
「何處でしたかね」
自分ながら薄のろい聲で彼はかう尋ねゝばならなかつた。
おぬいさんは屹とした、少し恨めしさうに靑ざめた顔を心もち震はせながら、つかへた所を指さした。それがまた無暗にやさしい所だつた。渡瀨は、今日はおぬいさんも變だなと思つた。
復習を終へたおぬいさんはひどく顔色を靑くしてゐた。しかも眼には淚がたまつてゐた。渡瀨はそれを見ると自分の心持が氣取られたなと思つた。出來ない相談には決つてゐるが、縱令おぬいさんとの結婚ををばさんに打ち出して見たところが、ひと彈きに彈かれるのは知れ切つてゐる。萬が一おぬいさんを彼の力の下において見たところが、どこまで一緒にやつて行けるかそれも覺束ない。何故といふに渡瀨はおぬいさんのやうな人をどう取り扱へばいゝかの自信があり得なかつたから。それだからといつて、この氣持を捨てられないのも知れ切つてゐる。

一層……さう思つた時、おぬいさんが靜かに、

「度々讀みつかへたのを御免下さいまし。意味が解らなかつたのではないんですけれども、あんまり悲しいことが書いてあるものですから、つひ默つてしまひましたの」

といつて、少し恥ぢらふやうにこちらに瞳を定めた。渡瀨は背負投を喰つたやうに思つた。例へば憎惡でもかまはない、自分についておぬいさんが惱んでゐてくれたら渡瀨は嬉しかつたらう。彼は思ひ存分の皮肉がいひ放ちたくなつた。而してわざと高笑ひをしながら、

「文學者なんて奴は、尾鰭をつける事がうまいですからね」

といつた。勿論それだけでは復讐がし足りなかつた。何等の手管もなく、たつた純潔一つで操られてゐると思ふと渡瀨は心外でたまらなかつた。純潔――そんなもの〻無力を心で常に主張してゐる彼には（而して彼は十七歳の時から立派に純潮を踏みにじつて來てゐるのだ）小癪にさはつた。それにしても何んといふ可憐な動物だ。彼の酷たらしい抱擁の下に、死ぬ程に苦しみ悶えながら彼女の純潔が奪はれて行く瞬間を想像すると、渡瀨は再び眩惑するやうな欲望の衝動を感じないではゐられなかつた。その後に彼女が彼から離れてしまはうと、益〻牽きつけられて來ようと、それは大した問題ではなかつた。

渡瀨は茶の間を見廻はした。而して眞劍な準備を假想的に目論見ながら、

「今日はお母さんはお留守ですか」

と尋ねて見た。この言葉はおぬいさんを（若し彼女があたり前の事を知つた女なら）怖れさすに十分だと同時に、反抗か屈服かの覺悟を强ひるに十分な言葉な筈だ。

所がおぬいさんはその言葉にすら怖れる樣子は見せなかつた。而して自分の敎師を賴み切つてゐるやうに、

「診察に出かけました…… よろしく申してゐました」

と他意なく母の留守を披露した。赤子の手をねぢり上げることが出來ようか。渡瀨はまた腰を折られてせうことなしに机の上にある讀本を取り上げて、いぢくりまはした。

けれども渡瀨はどうしてもそのまゝ引き下る氣にはなれなかつた。彼は無恥らしい眼を擧げておぬいさんを見上げ見おろした。その時、ふと考へついたのは、おぬいさんが旣に意中の人を持つてゐるなといふことだつた。戀に醉つてゐる女ほど、他の男に對して無慾に見えるものはない。おぬいさんの無邪氣らしさに欺かれかけたのは餘り馬鹿らしいことだつた。十九の女に戀がない……彼は何を考へてゐたのだらうと思つた。

彼はおぬいさんを見やりながら、

「おぬいさん」

と呼んだ。彼は馬鹿々々しい嫉妬の情の中にも、自分の聲に醉ひしれたやうになつた。おぬいさんに向つてその名を呼びかけたのはこれが始めてなのだ。

「あなたは今の話で涙が出るといひましたが、……あなたにもそんな經驗があつたんですか」

今度はとつちめて見せるぞ。

卽座に、

「いゝえ」

と答へた彼女の答へは、少しの隱しだてもなく、きつぱりとしたものだつた。渡瀨は明かにそれを感じないではゐられなかつた。何んといふ、簡單な敗北を見なければならないだらう。あまりに簡單だ。然しあまりに明快だ。何もかも素直に投げ出して、背水の陣を布いたらしく見える彼女を思ふと、渡瀨はふと奇怪な涙ぐましさを

さへ感じた。渡瀬はもとよりおぬいさんを憎んでゐるのではない。けれども一日おきに向ひ合つてゐる中に、二人の距離と、彼自身の中に否應なしに育つて行く無體な欲念との間に、殆ど憎しみともいへさうな根深い執着を感じはじめてゐた。或る殘虐な心さへ萠してゐた。けれどもおぬいさんと面と向つて、その淸々しい心の動きと、白露のやうな姿とに接すると、それを微塵に打ち壞さうとあせる自分の焦躁が恐ろしくさへあつた。凡てが終つたあとにおぬいさんが受けるであらうその惱みと苦しみとを考へて見たゞけでも、心が寒くなつた。不思議な女もあつたものだと思ふ外はなかつた。不思議な自分の心だと思ふ外はなかつた。……それにつけても渡瀬はいらだつた。

　構ふものか、もつといぢめてやれ。渡瀬は何んとなしに殘虐なことをして見たい心になつてゐた。而して自分で自分をけしかけるやうに、大ぎやうな表情を見せながら、

「それで泣くといふのは變ぢやありませんか」

　と無理に追窮した。

「經驗のないところに感動するつて譯はないでせう」

　彼は自分ながら皮肉な氣持の增長するのを感じた。

　おぬいさんはほつと小さく氣息をついた。而して暫くしてから、やゝ俯向いたまゝ震へた聲で、然しはつきりといひ出した。

「これはたゞさう思ふだけで御座いますけれども、戀といふものは恐ろしい悲しいものゝやうにおもひます。私にもそんな時が來るとしたら、私は死にはしないかと今から悲しう御座います。だもんですからあゝいふお話を讀みますと、つひ自分のことのやうに感じてしまふので御座いませうか」

この女は俺の說でも承らうとするがいゝんだ。そんな抽象論で引きさがるかい。

「あなたは實際、例へば星野か園かに戀を感じたことはないのかなあ」

この位いつても應へないか。

と、今まで素直にくとしてゐたらしいおぬいさんの顏色がさつと變つて、死んだものゝやうに靑ざめた。俯向けた前髮が激しく震へ出した。今度こそは眞から腹を立てゝ、貞女らしい口をきくだらう、さう渡瀨が思つてゐると、おぬいさんは忙がしく袂を探らうとしたが、それも間に合はなかつたか、いきなり兩手を眼のところにもつて行つて、ぢつと押へた。石になつたかと思はれる程彼女は身動きもしなかつた。

渡瀨は不意を喰つてきよとんとした。……はじめて彼は今まで自分が何をしてゐたかを知つた。彼は自分がこれ程酷たらしい男だとは思はなかつた。どうして殘虐な氣持があとからくと湧き出して、彼に露骨な言葉を吐かしたかゞ怪しまれ出した。俺は惡黨だ。俺は惡人だ。その俺にもおぬいさんが善人なのはよくわかる。何、それは前からわかつてゐたんだ。それだのに俺は何んの爲めにおぬいさんに嫌はれるやうなことをたて續けにしやべつてゐたのだらう。俺は惡黨だが善人を惡黨の群に引張り込む程の惡黨ではないんですよ、おぬいさん。

「惡かつたおぬいさん、僕が惡るかつた。……僕はどうもあなた見たいな人を取りあつかつたことがないもんだから……失敬しました。……僕はこんな亂暴者だが、今日といふ今日は我を折りました。……許して下さい。僕はかうやつて心からあやまるから」

さういつて、彼は几帳面に坐りなほると、膝の上に兩手をついて、頭を一寸下げた。彼は全くさうした氣持にされてゐたのだ。

何をどういつたか、そのあとはよく分らなかつたが、渡瀨はとにかく居心地がいやに惡くなつて、尻から追ひ

立てられるやうに急いでおぬいさんの家を飛び出した。

　とつぷりと日が暮れて、雪は本降りに降りはじめてゐた。北海道にしては大粒の雪が、やゝともすると襟頸に飛び込んで、その度毎に彼は寒けを感じた。

　彼はとつとと新井田氏の家の方を指して歩いた。「あゝいけねえ」と獨りごちた。何んだか打ちのめされたやうだつた。力が拔けてしまつた。馬鹿々々しく淋しかつた。寒いやうに淋しかつた。

「新井田の方はあと廻はしだ」さう彼は又獨りごちて、狸小路のいきつけの蕎麥屋にはいつた。而して煮肴一皿だけを取りよせて、熱燗を何本となく續けのみにした。十分に醉つたのを確めると彼は店を出た。

　然し渡瀬は醉ひが直ぐ覺めさうで不安だつた。で酒屋の店に出喰はすと、その度毎に立ち寄つて盛切をひつかけた。

「何、俺は結局おぬいさんとどうしようといふのではなかつた。唯何んとしてもおぬいさんが可愛いゝんだ。可愛いゝ犬ころをいぢくり廻はして、きやんといはさなければ、氣がすまなくなるあれなんだ。いはゞあれなんだな。だが待てよ、さうでもないのかな」

　或る酒屋では小僧がからかふやうに、

「學生さん、お前さん醉つてゐますね」

といつた。ふむ、俺の醉つてるのが分るのは感心な小僧だ。

「お前はまだ女郎買ひはしめえな」

「冗談ぢやないよ、學生さん」

　渡瀬は十三四らしいその小僧の丸つこい坊主頭を撫でまはした。

「お前は俺が醉つたまぎれに泣いてるとでも思ふんか。……よし、泣いてると思ふなら思へ。淚は水の一種類で小便と同じもんだ」

かういひながら彼は、またふら〳〵とその店を出た。

彼は人通りの少ないアカシヤ通の廣い道を、何んだか弱りしよびれた氣持になつて、北の空から吹きつける雪に刃向つて步いて行つた。彼は自分が忠義深い士のやうな心持だつた。伏姬にかしづく八房のやうでもあつた。あゝ俺は全くあの畜生だな。全く淚がほろりと流れて來た。何んだか馬鹿々々しいと彼は思つた。

新井田氏の玄關によろけこむと、渡瀨は拳固で淚と鼻水とを目茶苦茶に押しぬぐひながら、

「奧さあん」

と大聲を立てゝ、式臺にどつかと尻餠をつけた。

奧さんはすぐドアを開けて駈け出して來た。

「あら大變。あなた、戶も締めないで雪が吹き込むぢやないの」

といひながら、そこにあつた下駄を片方の足だけにはいて、斜に身を延ばして、玄關の戶を締めた。股をはだけた奧さんの腰から下が渡瀨のすぐ眼の前にちらついた。

「無禮者……とは、かく申す拙者のことですよ……醉つてゐる？　醉つてゐるかと問はれゝば、醉つてゐます。……ガンベの醉つたのを見たことがありますか……現在はゝゝ……現在を除いてさ……」

奧さんのしなやかな手が、渡瀨の肩の雪を輕く拂つてゐた。

「いた、……いた、……痛いですよ、奧さん」

「あなた今日は本當にどうかしてゐるわね……さあお上りなさいな」

渡瀬は奥さんの手のさはつた所をさすりながら、情けなくなつて、そのあでやかな、その癖性(せい)といふものばかりで出來上つてゐるやうな顔を見上げた。

「情けないね全く……あなたの顔を見るとガンベは……まあいゝ、……それはそれとして、と……奥さん、僕は今日は、こんなへゞれけの醉つぱらひになつちまつたから、レコ……ぢやないあなたにだ……あなたのいふ『あなた』さ……はゝゝ、その『あなた』に、へゞれけの醉つぱらひになつちまつたから、今日は休む……休むといつて下さい。左樣なら」

渡瀬はやをら腰を上げにかゝつたが、また醉のさめるのが不安になつた。彼は腰をすゑた。

「奥さん、ウヰスキーを一杯後生だから飲ませて下さい」

「あなた、そんなに飲んでいゝの」

奥さんは本當に心配らしく、立ちながら、眉を寄せて渡瀬の顔を覗きこむやうにした。渡瀬は確信をもつて默つたまゝ深々とうなづいた。物をいふと泣き聲になりさうだつた。

「いけませんよ……ぢやあ待つていらつしやいよ」

待つてゐる間、涙がつゞけさまに流れ落ちた。

渡瀬の眼の前につき出されたのは、なみ〳〵と水を盛(も)つた大きなコップだつた。渡瀬は無茶苦茶に悲しくなつて來た。それを一呑みに飲み干したい欲求は一杯だつたが、醉ひがさめさうだから飲んではならないのだ。

「や、左樣なら」

あつけに取られて、コップを持つたまゝ見送つてゐる奥さんに胸の中で感謝しながら、渡瀬は玄關を出て往來に立つた。

雪は益〻降りしきつてゐたが、渡瀨はどうしても自分の家に歸る氣にはなれなかつた。薄野々々といふ聲は、酒を飮みはじめた時から絕えず耳許に聞こえてゐたけれども、手ごはい邪魔物がゐて――熊のやうな奴だつた、そいつは――がつきりと渡瀨を抱きとめた。渡瀨の足はひとりでに白官舍の方に向いた。

「おぬいさん……僕は君を守る……命がけで守るよ……守つてくれなくつてもいゝつて……そんなことをいふのは殘酷だ……僕は君見たいな神樣をまだ見た事がなかつたんだ……何んにも知らなかつたんだ……星野つて奴はひどい事をしやがる奴だな……あいつのお蔭で俺は、……俺は今日、救はれない俺の墮落を見せつけられつちまつたんだ。美しいなあおぬいさんは……淚が出るぞ。土下座をして拜みたくならあ……それだのに、今でも俺は、今でも俺は……機會さへあれば、手ごめにしてゞも思ひがとげたいんだ。俺は一體、氣狂か……けだものか……はゝゝゝ、けだものがどうしたといふんだ。俺だつて、おぬいさん位美しく生れついて、銀行の重役の家に育つて、いゝ加減から貧乏になつて見ろ、俺だつて今頃は神樣になつてゐるんだ……神樣もけだものもあるかい。……おぬいさんが可哀さうだ……俺は何んといつてもおぬいさんが可哀さうだ。……理窟なしに可哀さうだ……可愛さ餘つて可哀さうだ……俺は何んといつても惡かつたなあ……生れ代つてゞも來なけば、おぬいさんの指の先きにも、……現在觸つて見たところが結局觸つたにならない俺なんだ……俺は自分までが可哀さうになつて來たぞ……」

いつの間にか彼は白官舍の入口に立つてゐた。

暗いラムプの下のチャブ臺で五人程の頭が飯を食つてゐた。渡瀨はいきなりそれらの間に割り込んで坐つた。

「ガンベか。唯今食事中だ、あすこの隅にいつて遠慮してゐろ。今夜は馬鹿に景氣がいゝぢやないか」

といつたのは人見だつた。そこには園もゐた。あとは誰と誰だかよく解らなかつた。

「貴様は誰だ。（顔を近づけると知れた）うむ柿江か。誰だそこにゐる貴様二人は」
「森村と石岡ぢやないか。西山の代りに今度白官舍にはいつたんだよ。臭いなあ……貴様はまた石岡にやられるぞ。そつちにいつてろつたら」
と又人見がいつた。渡瀬は動かなかつた。
「何をいふかい。今日は石岡も石金もあるもんか……醉つた位で人を馬鹿にしやがると承知しないぞ、はゝゝ……おい人見、こゝには酒はないのか、酒は。……無え？　無えと來りや買ふだけだ。おい婆や……もつとよく顔を見せろ。ふむ、お前も末座ながら善人の顔だ……酒を買つて來てくれ。誰かそこいらに金を持つてゐる奴はないか。俺の壽命を延ばすとおもつて買つて來てくれ。飯なんぞもぞく／＼と食つてる奴があるかい、仙人見たいな奴等だな」
柿江が匆々に飯をしまつて立たうとした。それを見ると渡瀬はぐつと癪にさはつた。
「柿江……貴様あ逃げかくれをするな。俺は今日は貴様の面皮を剝ぎに來たんだ。まあいゝから坐つてろ。……俺は柿江の面皮を剝ぎに來た、と。……だ、さうでもねえ。俺は皆んなに泣いて貰ひに來たんだ。石岡、貴様は駄目だ。貴様のやうなファナティックは駄目だとしてだ、……おい、皆んな立つなよ。……何んだ、試驗だ……試驗位貴様、敎場に行つて居眠りをしてゐりやあ、その間に書けつちまふぢやねえか」
「俺に用がなければ行くぞ」
石岡が顔色も動かさずにさういひながら座をはづしかけた。
「石岡、貴様はクリスチャンぢやねえか。一人の罪人が……貴様はいつでも俺のことをさういふな。いんやさういふ。……罪人が泣いて貰ひたいといつてゐるのが聞こえなかつたんか。……縱令俺が駄目だといつた所が、貴様

の方で……まあ坐れ、坐つてくれ。……一人でも減ると俺は面白くないんだ……坐れえおい。俺が命令するぞ」

婆やが何かいひながらチヤブ臺を引いた。壁際に行つてばら〳〵にそれに倚りかゝつてゐる五人が、朦朧と渡瀨の眼に映つた。唯何んといふこともなく淚が湧いて來た。彼は馬鹿々々しくなつて大聲〻揚げて笑つた。

「園君ぢやねえ、園はゐるか園は。それか。君……君はぢやぬえ樣貴はおぬいさんに惚れてゐるだらう。白狀しろ。うむ俺は惚れてる。悲しいかな惚れてゐる。悲しいかなだ。眞に悲しいかなだ。俺は罪人だからなあ。悔い改めよ、その人は天國に入るべければなり……へゝ、悔い改めら、ら、られるやうな罪人なら、俺は初めから罪なんか犯すかい。わたくしは罪人で御座います。へえ悔い改めました。へえ天國に入れてもらひます……馬鹿……おやぢが博奕打の酒喰らひで、お袋の腹の中が梅毒腐れで……俺の眼を見てくれ……澤庵と味噌汁だけで育ち上つた人間……が僭越ならけだものでもいゝ。追從にいつてるんではねえぞ。俺は今日け――だ――も――のといふことがはつきり分つたんだから。星野の奴がたくらみやがつたことだ」

「おいガンベ、そんなに泣き〳〵物をいつたつて貴樣のいふことはよく分らんよ。今日はこれだけにして醉つてゐない時にあとを聞かうぢやないか」

それが石岡の聲らしかつた。

「馬鹿いへ貴樣、さう急にわかつてたまるものか。飲んだくれ本性たがはずといふことを知らんな。……婆や、酒はどうした、酒は……。けれどもだ……貴樣のけれどもだ、おい西山……ふむ、西山はもうゐねえのか。兎に角けれどもだ、貴樣達は俺が罪人なることを悲しんでゐないと思ふと間違つてるぞ。……はゝゝそんなことはどうでもいゝ。それは第一貴樣達の知つたこつちやないや、なあ。……兎に角……皆んな貴樣達はおぬいさんを知つてるな。けれども、貴樣達は一人だつて、どれ程あの娘が天使であるかつてことは知るまい。俺は今日それを

知つたんだ。この發見のお蔭で俺はこの通り醉つた。わかるか」
「わからないな」
それは人見だつた。申し合はせたやうに二三人が笑つた。
「はゝゝ……（彼はやたらに涙を拭つた）俺にもわからんよ。……園、貴樣はおぬいさんに惚れてるだらう」
園はほゝゑみながら靜かに頭をふつた。
「そんなことはない」
「ぢや惚れろ。斷じて惚れろ。いゝか。俺は萬難を排して貴樣達に加勢してやる。俺は死を賭して加勢してやる。……園、俺は今日一つの眞理を發見した。人生は俺が思つてゐたより遙かに立派だつた。ところが……ぢやいかん……だからだ。whereas ぢやない。therefore だ。それ故にだ……俺のやうなやつが、住むにはあまりに不適當だ。かういふんだ。悲觀せざるを得ないぢやないか。……然し俺は貴樣達を呪ふやうなことは斷じてしないぞ。……安心しろ貴樣達を祝福してやるんだ、俺は死を賭して貴樣達に加勢してやる。……はゝ……とか何んとかいつたもんだ。どうだ石岡。石金先生、……相變らず貴樣は忙はしいんか。貴樣が俺に酒の小言さへいはなけりや、一枚男が上るんだがなあ……然し貴樣の老爺親切には俺は竊かに泣いてるぞ。……餘子碌々……おい〳〵貴樣達は何んとか物をいへよ、俺にばかりしやべらしておかずに……園、貴樣惚れろ。いゝか惚れろ」
「ガンべは駄目だよ。貴樣いつでも獨りぎめだからなあ。他人の自由意志を尊重しろ、園君には園君の考へがあるだらう」
帽子を被つたまゝのが云つたんで、森村だと渡瀨にも分つた。
「ふむ、さうか。……そんなものかなあ……」

「園君、君はもうあつちに行くといゝ……。而してガンベもう歸れ、俺が送つていつてやるから。今夜は雪だからおそくなると難儀だ」

さう人見がとりなし顏にいつたけれども、園は座を立たうともしなかつた。渡瀨はどうしてもうんといはせたかつた。園が不斷から言葉少なで遠慮勝ちな男だとは知つてゐたけれども、これだけいふのに默つてゐられるのは、癪にさはらないでもなかつた。それよりも渡瀨は凡てが頼りなくなつてきた。自分でも知らずに長く抑へつけてゐた孤獨の感じが一度に堰を切つて迸り出たかと淋しかつた。

「園、貴樣何んとかいつてもいゝぢやないか。俺は醉つぱらつてゐるさ。……醉つぱらつてゐるからつて渡瀨作造は渡瀨作造だ。それとも渡瀨作造なるものに……まあいゝ園、俺と握手をしろ。さうだもつと握れ。俺が貴樣の自由意志を尊重してゐないとしたらだな……俺はあやまる……。どうだ」

澄んだ眼を持つた園の顏はすぐ眼の前にあつた。それを淚がぼやかしてしまつた。園の手が堅く渡瀨の手を握つたかと思ふと、

「僕は君の言葉を難有くさつきから聞いてゐたんだよ。よく考へて見よう」

「考へて見よう？……好男子、惜しむらくは兵法を知らず……まあいゝ、もう行け」

「僕も人見君と一緒に君を送らう」

「醉不成歡慘欲別か……柿江、貴樣ははじめから默つたまゝ爪ばかり嚙んでゐやがるな……皆な聞け、あいつは僞善者だ。あいつは俺と一緒に女郎を買つたんだ」

「おいおいカンベ、醉ふのはいゝが恥を知れ」

それは凡てを冗談にしてしまはうとするやうな調子だつた。

「恥を知れ？　はゝゝゝ、うまいことを云ひやがるな。……」

まだいひ募りたかつたが、その時渡瀬は醉のさめて來るのを感じた。それは何よりも心淋しかつた。寢込んでしまつて自然に醉ひがさめるのでなければ、醉ざめの淋しさは迚も渡瀬には我慢が出來なかつた。彼は立ち上つた。

「便所か」

と人見も同時に立つて來た。渡瀬は用を足しながら、

「婆や、小便は涙の一種類で、水と同なじもんだ……ぢやなかつたかな……とにかくさういふことを知つてるか、はゝゝゝ」

といつて強ひて笑つてみたが、自分ながら少しもをかしくはなかつた。何しろ酒にありつかなければもうゐられなくなつた。

彼は人見と園とに附き添はれて、白官舍から、眞白に雪の降りつもつた往來へとよろけ出た。

＊　＊　＊

どうしても氣の許せないやうな所のある男だつた。それが、兎も角表向は信じ切つてゐるやうに見える父の前に書類をひろげて又しやべり出した。(父は實際はその言葉を少しも信じてはゐないのに、おせいの前をつくろつて信じてゐるらしく見せてゐるのではないか。つまり父までがぐるになつてゐるのではないかとさへ疑つた)

「かうした依賴を受けてゐるんです。土地としては立派なもんだし、この通り七十三町歩が一寸切れてゐるだけだから、中々大したものだが、金高が少し嵩むので、勸業が融通をつけるかどうかと思つてゐるんですがね……尤もこの外にもあの人の財産は偉いもので、十勝の方の牧場には、あれで牛馬併て五十頭からゐるし、自分の住

居と云ふのが是れ亦中々なことでさあ。その外有價證券、預金の類をひつくるめると、十五萬は確かな所ですから、銀行の方でも信用をしてくれるとは思つてゐるんですが」

さういふ間にも、その男は金緣の眼鏡の奥から、おせいの樣子をちらり〳〵と探るやうに見た。優しいかと思ふと急に怖くなるやうな眼だつた。

「で、その金を借り出してどうなさらうといふのかな」

父は書類を取り上げながらから尋ねた。待つてゐたと云はんばかりに、その男は又折鞄の中から他の書類を取り出した。

「それがこれにならうと云ふんです。これがまた偉いもんですぜ。膽振國長萬部字トナツブ原野ですな。あすこに百町步程の貸下げを道廳に願ひ出て、新たに開墾を始めようといふんです。今日來がけに一寸道廳に寄つていたゞいたが、その用といふのがこれです。大抵大丈夫行きます。……何しろあの若さでこれだけの事をやり上げようといふんだから……若さといつても四十だが、なあに男の四十ぢやあなた、これから花といふところです。やあ、どうも話がわき道に外れちやつたが、どうでせうな、お孃さんのお考へは……たゞどうも問題になりさうなのは年のちがひぢやあるが」

と、まともにおせいの方を見て、

「あなたが三十におなんなさる時を思やあ、むかうはやつと四十九だ。丁度いゝつり合ひになりまさあ。どうも男つて奴は、これで五十やそこらの中に細君が四十だ四十一だなんてことになると、つひ浮氣になりたがるものですよ。……ねえお父さん、お互にまんざら覺えのないことでもないしさ」

おせいはこんなことをいはれるのを聞いてゐると、迚もこの話は承諾は出來ないと思つた。聞いてゐる中に、

その人が憎らしくなつて、いつそ歸つてしまはうかとも思つた。父は袖の下に腕を組んでぢつと考へ込むやうにしてゐた。おせいは二日前に兄の清逸から屆いた手紙のことを心の中で始終繰り返してゐた。お父さんは家のものに何んにも相談しないが、お前の結婚のことを考へてゐるらしい。昨日も淺田といふ元孵化場で同僚だつた鞘取のやうな男が札幌から來て、長いこと話をして行つた。お母さんが立ち聽きした樣子から考へると、どうもさうらしい。しかもお前を貰ひたいといふのは札幌の梶といふ男ぢやないかと思ふ。それならその男は評判な高利貸でしかも妾を幾人も自分の家の中に置いてゐると云ふ男だ。どんなことがあつてもいふ事を聽いてはいけない。自分の所は極端に貧乏してゐる。しかも自分がいつまでも書生生活をしてゐるばかりで、お前にまで長い間苦勞をかける。お前の婚期がおくれる位になつてゐるのを知りながら、それをどうすることも出來ない自分を思ふと、自分は苦しい。けれども今度のだけは是が非でも斷れ。そんなことが書いてあつた。

「どうでせうな」

五つ紋の古い紬の羽織を着たその男は、おせいの方をも一度ぢつと見て、その眼を父の方に移した。

「どうだな、おせい」

父はまたその男の眼を避けるやうにおせいを見るのだつた。おせいは身がすくむやうな氣がして、恨めしさうに父を見かへした。

「淺田さんもさつきから是れほど事をわけて話をして下さるんだから、お前、何んとか御挨拶をしないぢやならんぞ。お父さんもさう度々千歳からかけて足を運ぶ譯には行かないしよ」

と父は、一層腕を固く組んで、顏を落して說き伏せるやうに一語々々に力を入れた。

それでもおせいは何んと答へようもなかつた。やうやくのことで唾を呑み込んで、居住まひをなほしながら下

を向いた。

「いや、これや私がゐちや却つて御相談がまとまりますまい。私は勸業の方の人に用もありますししますから、これで一先づお暇とします。……ぢやお孃さん、一つよくお考へなすつて。仲人口と取られちや困りますが、お父さんと私とは古いおなじみだから、決して仇やおろそかに申すんぢやないんですから、どうか、そこんところをお忘れなく……」

而してその人は父と簡單な挨拶を取り交はすと、そこにあつた書類を一々綿密に鞄の中にしまひ込んで座を立つた。おせいが父のあとについて送り出さうとすると、淺田は、

「お孃さん、もうよう御座います。何、星野さん一寸お顏を」

いつたので、おせいはわざと遠慮した。二人は部屋の外の階子段の上で、彼れ是れ十分程もほそ〴〵と話をしてゐた。何故ともなく五體が震へるのを、寒さのせゐかと思つて、腰を折つて火鉢の上に手をかざした。壁が崩れ落ちたと思ふところに、日章旗を交叉した間に勘亭流で「祝開店、佐渡屋さん」と書いたびらをつるして隱してあるやうな六疊の部屋だつた。建てつけの悪いガラス窓が風の爲めにひどい音を立てゝ、盜風が屋外のやうに流れこんだ。

父はやがて小むづかしい顏をして歸つて來た。「寒い家だどうも」とあたりを見まはしてゐるのが、千歳の家を知りぬいてゐるおせいには氣恥かしい位だつた。

「どうだ」

「私はいやです」

おせいは卽座に答へた。父はむつとしたらしかつたが、やがて强ひて言葉を和らげながら、

「さう膠(にべ)なくいつては話も何も出來はしないがな。淺田さんのいふ通り、年の所に行くと少し明き過ぎるやうだが、わし等のやうな暮しでは一から十まで註文通りに行かないのは覺悟してゐてくれんと埒はあくものではないぞ。……先方では支度も何もいらないと云ふのだ。支度がいるやうでは恥かしい話だが、今のところお父さんには何んとも工面がつかんからなあ」

「先樣は何んといふ人です」

「先方はお前、今も淺田さんがいふ通り中々の〇持ちで、自分が貧乏から仕上げたのだから、嫁は學問がなくても矢張り苦勞して育つたしとやかなのが欲しいと、先づ當世に珍らしい……」

「何といふ人なんです」

「名か、名はその、梶といつて、札幌では……」

果して兄からいつて來た通りだつた。おせいは餘りといへば父も餘りだと思つた。

「そんなら私はどうしてもいやです。幾人も妾を持つてゐるやうな高利貸のところになんぞ……お父さんもちつと考へて下さればいゝに」

といふ中に、彼女は胸が熱くなつて涙ぐんでしまつた。兄さんですら、小さい時、あれほど自分を可愛がつてくれた兄さんですら、丸で自分の事しか考へてはゐないし、お父さんはお父さんで、自分の娘だか、他人の娘だか區別のないやうな仕向け方をする、と思ふと、おせいは誰にたよる的(あて)もないのを感じた。彼女はこの五年の間の苦しい女中奉公の生活――それは光明も何もない、長い苦しみの一つらなりだつた――を思ひめぐらした。始めて小樽に連れ出されたのは十七だつた。丸で山の中から拾つて來た猿のやうなあしらひを受けた。箸の上げおろしにも笑ひさいなまれ、枕につく度毎に、家戀しさと口惜(くや)しさの爲めに忍び泣きで通した半年程。貰つた給金は殘

らず家の方に仕送つて家からたまに屆けてよこす衣類といつては、迚も小樽では着られないものばかりなので、奧さんからは皮肉な眼を向けられ、朋輩からは蔭口をたゝかれる。それをぢつと堪らへて、はい〳〵といつてゐなければならぬ辛らさ。月日は經つたけれども、小學校で少しばかり習ひ覺えた文字すら忘れがちになるのに、そこのお孃さん達が裕かに勉强して、一日々々と物識りになり、美しくなつて行くのを、默つて見てゐなければならぬ恨めしさ。七時過ぎまでは食事も出來ないで、晩食後の片付けに小皿一つ粗匆をしまいと血眼になつてゐる時、奧では一家の人達が何んの苦もなく寄り合つて、馬鹿騷ぎと思はれる程に笑ひ興じてゐるのを聞かなければならぬ妬ましさ。それにも增して苦しかつたのは奧さんの意地惡だ。妙な癖で、奧さんは家内のものゝ中に必ず一人は目のかたきになる人を作つておかなければ氣がすまないのだ。その呪ひの的になる人は時々變りはしたけれども、どういふものかおせいはよく貧乏籤をひいた。露程の覺えもないことをひがんで取つて、奧樣一流の針のやうな皮肉で、ゐたゝまれない程責めさいなむのだつた。これが嵩じると自分迄ヒステリーのやうになつて、暇を取つた位では氣がすまないで、面あてに首でも縊らうかと思ふ時さへあつた。更にそれにも增していやらしかつたのは旦那樣の淫らなことだつた。奧さんの目棲を忍んでその老人のしかけるいたづらは丸で蛇に卷かれるやうだつた。それをおせいは輕く受け流して逃げなければならなかつた。誰に訴へやうもないやうな醜いことだつた。更に〳〵、それにも增して苦しかつたのは、若樣といはれるその家の長男の情けだつた。その人は誰が見ても綺麗な男と云ふやうな人だ。おまけに旦那とはうらはらに、上品で、感情の强い人で、家の人達には何んとなく憚られてゐるらしかつた。淋しい感じの人だ。おせいは住み込んだ時からこの若樣と云ふ人に惹き寄せられた。明輩がその人の噂を好いたらしくするのを聞くと、心がひとりでにときめいて、思はず顏が紅くなつた。けれども何を思つても及ばないことゝしてすつかり諦めてゐた。諦めようと苦しんでゐた。ところが去年のこと、ふと

した折りにその人からおせいは挑みかけられた。おせいは眼をつぶるやうにして一生懸命にその誘惑からのがれた。而して底のないやうな淋しさから聲を立てゝ泣いてしまつた。二十といふ年までぢつと、ぢつと押へつけ、守りぬいてゐた火のやうな悲しい思ひが、それからの度々の危い機會に一度に流れ出ようとしたのだつたが、而してその人が苦しんでゐる樣子をみると、いとしくなつて何もかも忘れようかとさへ思ふ瞬間は毎時もあつたのだけれども、彼女はいつでも自分の家の貧しさを思つた。健康の弱い兄を思つた。白痴同樣な弟を思つた。貧乏はしても父の名に泥を塗るなと、千歳を出る時きびしくいひ渡した父の言葉も思つた。自分の心をゆがめ切つてしまひはしないかと思はれるやうなこれらの辛らさ、悲しさ、妬ましさ、苦しさを今まで堪へに堪へて來たのは一體何んの爲め。

おせいは水月に切り込むやうにこみ上げて來る痛みを、帶の間に手をさしこんでぢつと押へた。父はおせいの餘りに思ひ入つた樣子に思はず躊らつて、暫くは言葉をつぐことも出來なかつた。

二人はお互の間に始めてこんな氣づまりな氣持を味ひながら、顏を見合せるのも憚つて對座してゐた。

「どうしてもお前はいやといふのか」

おせいはもう涙も出なかつた。乾いたまゝで唇が無性に震へた。

「お父さん、それだけはどうか勘忍して下さい」

父は地聲になつて口をとがらした。

「勘忍して下さいといつたところが、これはお前のことだからお前の勝手にするがいゝのだが、どういふ譯だか譯を云はにや、唯許してくれではお父さんも困るぢやないか」

「お父さんは私を……私を高利貸の……妾になさる積りなんですか」

「飛んでもないことを……お前はさつきから高利貸々々々と云ふが、それは働きのない人間共が他人の成功を猜んでいふことで、泥棒をして金を儲けた譯ぢやなし、お前、金を儲けようといふ上は、泥棒をしない限り、手段に選み好みがあるべき譯がない。金儲けがいやだとなれば、これは又別で、お父さんのやうになるより仕方のないことだ。安田でも岩崎でも同じこつた、妾圍ひとてもさうだ。妾を持つてる手合ひは世間ざらにある。あの人は同じ妾圍ひをしても、隱しだてなどをしないから、世の中で兎や角いふのだが、お父さんは梶はそこは却つて見上げたものだと思つてる位だて。それもお前を妾にくれといふのぢやなしさ……」

「けれども、あの人にはちやんと奥さんがあるんぢやありませんか」

「そ、それだが……先方では妻にくれろといふのだから、今の細君をどうするとかかうするとかそれはむかうに思はくがあつてのことに違ひないとお父さんは思つてるがどうだ。何しろこつちは先方の云ひ分を信用して……」

おせいは惘れるばかりだつた。父がどうしてこんなになつたのか、どう思つて見やうもなかつた。いくらなんにも知らないおせいにも、自分のやうな貧乏な、無學な、知り合ひもないやうな人間を正妻に迎へる譯がないのは分り切つてゐるのに、しら〳〵しい顏付をして、自分の娘をごまかさうとするらしい父が邪慳の鬼のやうにも思へた。

「お前は何んでも世間の見るとほりに物を見ようとするからいけない。高利貸といへばすぐ鬼のやうな無慈悲な奴、妾を持つといへばすぐ狒々のやうな淫亂者、さう頭から決めてかゝるんだが、さう一概にはいへるもんぢや無い。何んでも淺田の話では、見た所は小作りな、あれが評判の梶といふ人かと思ふ程物わかりのいゝやさしい人だといふことだ。それが合田さんの所でお前を二度程見かけて、是非といふことになつたものらしい。お前がお茶でも持つて出た覺えはないかな。膀の左の方に一寸眼に立つほどの火傷のあとがあるさうだが……」

おせいはそれを聞くと身がすくむやうだつた。體がかたくなつた。肩が凝り切つた時のやうに、頸筋から背中がこはばつて、血のめぐりが鈍く重く五體の奥の方だけを動くやうで、それが胸のところを下の方から氣味惡るく衝き上げた。眼界が段々狹まつて、火鉢にかざされた、長い指の先がぶる〳〵震へどほしてゐる。皺くちやな父の兩手だけが、切り放したやうにぼんやり見えてゐた。「何時私はその人に見られてゐたんだらう」と思ふと、怖ろしさと無氣味さに氣息がとまつた。

「お前見たことはないか」

「いゝえ」

おせいの眼は父の手から辷り落ちて、膝の上に乘せてある自分の手の方に行つた。涙にしとつたハンケチを丸めてぎゆつと握りつめてゐるそのかぼそい手も他人の手のやうだつた。若樣が自分の手の間に挾んで、やさしく撫でゝ下さらうとした手だ。それを無理にふり放した手だ。……涙がはら〳〵と彼女の眼から新しくこぼれ出た。

氣まづい沈默がそのあとに續いた。

いつそ……あゝ若樣と私とは身分がちがふ。すぐ見棄てられるにきまつてる。その時の苦しさを思ふとどうしても今までどほりにしてゐる外はない……といつて、私は屹度いつかは敗けてしまふに決つてゐる……縱令、見棄てられても、一度だけでも……おせいは切羽つまつた氣持の中で、悲しい嬉しい瞬間を心に描いた。それがせめてもの腹いせだつた。……而して死んでしまへばそれでいゝんぢやないか……

「お父さんはたつてと勸めるんぢやない……が、お前はどうしても氣が向かないと云ふのだな……」

おせいはびくりとして夢のやうな所から浚義道にひきもどされた。彼女はいつの間にかハンケチを眼にあてゝゐた。

「まあお父さんの胸の中も一通り聞いてくれ。俺ももう五十二になる。昔なら殿樣に隱居を願ひ出て樂にくつろぐ時分だが、時世とはいひ條……また、淸逸の奴がどういふ積りなのか、あの年になつてゐて、見さかひのなさ加減はない。この頃もお前、家にゐて、毎日の家の樣子は見てゐる癖に、箒一つ取るでもなく、家一杯にひろがつて橫着をきめてゐる始末だ。學問が出來るのなんのつて人がちやほやするのを眞に受けてしまつてからに、有頂天になつてゐる。あんな病氣を背負込んで藥代だけでもなみ大抵でないのに、東京へ出かけようといつて更に聞かんのだ。俺もかうやつてはゐるがいざとなればその位の工面はつくから、苦しいながらあちこち世話をやいてやつて見ると、そんな所から金を出して貰ふのは嫌だとか何んとか、つべこべいひ腐る。……」

かういふ不平をきつかけに父は母が少しも甲斐性のないことや、純次が益〻物わかりが惡くなつて、親を睨めかへすしぶとさばかりが募るといふことや、孵化場の所長が代ると經費が節減されて、店の方の實入りが思はしくないといふことや、今度の所長の人格が下司のやうだと云ふことや、あらん限りの憤懣を一時にぶちまけ始めた。それをぢつとして聞いてゐるおせいはさすがに父が哀れになつた。五十二といふのに、その人は六十以上に老い耄けてゐた。これ程の貧乏に陷るのももとはといへば何んといつても父の不精から起つたことだと、苦しいにつけ、辛らいにつけ、おせいは父を恨めしく思ふ氣持になるのだつたが、眼前世の中が力に餘つて、當惑してゐるやうな父の姿を見ると、母も母だ、兄も兄だといふ心が起つた。

「愚痴には違ひない……愚痴には違ひないがお前にでも聞いて貰はにやお父さんは愚痴をこぼすせきもないやうな身柄になつたよ、いやどうも……それに、これもお前だけに聞いて貰ふことだが、實は俺も、その、苦しさか

ら淺田さんに賴んで、金をば六百圓程融通して貰つてゐるので……」
おせいはそれが祟つてゐるのだと始めて始終が見え切つたやうに思つた。
「尤もあれはあれで親切人だから、その事を根に持つやうな人柄ではないが、俺は頑固な昔氣質だから、どうも寢ざめがようないのだ。俺は困つとるよ……」
と父は膝のまはりを尋ねまはして、別々になつてゐる煙草入と煙管とを拾ひ上げると、慌てるやうにして煙草をつめたが、吸ふかと思ふと火もつけずに、溜息と共にそれを疊の上に戻してしまつた、おせいはおづおづ父の顏を窺つた。垢染みて、貧乏皺の夥しくたゝまれた、澁紙のやうな頰げたに、平手で押し拭はれたらしい涙のあとが濡れたまゝで殘つてゐる。そこには白髮の三本程生えた大きな疣もあつた。小さい時、きやうだいで寄つてたかつて、おちゝだといつてしやぶつた疣だ。……思案に餘るといふのはこれだらうか。彼女の心はしーんとしたなりで少しも働かうとはしなかつた。おせいはひとりでに襟の中に顏を埋めた。無性に悲しくなるばかりだつた。
力がなえ切つて見えた父は、最後の努力でもするやうに、おせいの方に向きなほつて、膝の上に兩肱をついて丸つこくかごまつた。
「おせい……」
鼻をすゝりながらそれを横撫でにした。
「甲斐性のないおやぢと下げすんでくれるなよ。俺も若い時に、なまじつかな樂な暮しをしたばかりに、この年になつての貧乏が、骨身にこたへるのだ。俺一人が樂をしようと云ふでは決してないがな、何しろ、今日日々の米にも困つてな……この四年あまりと云ふもの、お前のして來た苦勞も、俺は胸の中でよつく察してゐる。親といふものは子にかけちや神樣のやうに何んでも分る。お前は小さい時から素直な子だつたが、素直であればある

程……」

「お父さんそんなことをいふのはもうよして下さい……」

おせいは殆ど憤りたいやうな悲哀に打たれて思はずから叫んでしまつた。

兎に角二三日中にはつきりした返事をすると約束しておせいはやうやく父の宿を出た。

もう全く日が暮れてゐた。ショールに眼から下をすつかり包んで、やゝともすると足をさらはうとする雪の坂道を、つまさきに力を入れながらおせいはせつせと登つて行つた。港の方からは潮騒のやうな鈍い音が流れて來た。その間に汽船の警笛が、耳の底に沁みこむやうに聞こえてゐる。空荷になつた荷物橇が、大きな鈴を喉にぶらさげて毛の長い馬に引かれながら何臺も何臺もおせいのそばを通りぬけた。顔をすつかり頭巾で包んで、長い手綱で遠くの方から橇を操つてゐる馬方は、寄り道をするやうにしておせいを覗きこみに來た。幾人となく男女の通行人にも遇つた。吠えつきに來た犬もあつた。けれどもおせいにはそれらのものが、どれもこの世界のものではないやうだつた。今まで父と一緒にゐたといふのも嘘のやうだつた。萬人が行つたり來たりする賑かな往來、そこでおせいが何百人何千人となく行き遇つた人々、その中には、おせいが歩いてゐるやうな氣持で歩いてゐる人が矢張りゐたのだらうか。それにしては自分は今まで何んと云ふ暢氣な自分だつたらう。そんな苦勞を持つてゐるらしい人は一人だつて見當らないやうだつたが。……人間つていふものは矢張りこんな離れ〳〵な心で生きてゆくものなのだ。底のないやうな孤獨を感じて彼女はさう思つた。

主家の大きな門の前に來た。朋輩達がおせいの歸りの遲いのをぶつ〳〵云ひながら、彼女の分までも働いてゐるだらうと思ふと氣が氣でなかつた、大急ぎで門を駈けこんだ。

こちらから挨拶もしない中に、臺所で働いてる女中の一人が、

「早かつたわね。奥さんがお待ちかねよ」
といつた。
「若樣もお待ちかねよ」
ともう一人のがいつた。おせいは何んともいへない淫りがましいいやなことをいふ人だと思つた。
おせいは取りあへず奥の間に行つて、講談物か何かを讀み耽つてゐるらしい奥樣の前に手をついた。而して、
「唯今戻りました。おそくなりまして相すみません。父がよろしくと申されました」
といふと、いつもの癖の眼鏡の上の方から眼を覗かせて、睨むやうにこつちを見てゐた奥樣は、
「父がよろしくと申されましたかね。あの（といつて柱時計を見かへりながら）お前もう御飯を召し上りましたらうね」
と憎さげに又書物を取り上げた。どうかすると氣味が惡るい程親切で、どうかするとこちらがヒステリーになりさうに皮肉なのがこの人の癖だとは知りながら、おせいは涙ぐまずにはゐられなかつた。
奥樣に釘を打たれて、その夜おせいは食事を取らなかつた。實際喰べたくもなかつた。
けれども夜中になると、何んとしても我慢が出來ない程餓じくなつて來た。そつと女中部屋を出て、手さぐりで冷え切つた臺所に行つて、戸棚を開けた。而してそこにあるものを盜み喰ひをしようとした。
その瞬間におせいはどつと悲しくなつた。而してそこに體を倚せかけたまゝ、兩袖を顏にあてゝ聲をひそめながら泣きはじめた。

*　　　　*　　　　*

父が死んだといふ電報を受け取つたのは、園がおぬいさんの所に敎へに行つて、もう根雪になつた雪道を、灯

がともつてから白官舍に歸つて來た時だつた。

隣りの人見の部屋には柿江と森村とが集つてゐるらしく、話聲で賑はつてゐたが、園はそこを覗いて見る氣持にもなれないで、そつと素通りして自分の部屋にはいつた。

渡瀨がひどく醉拂つて白官舍に訪ねて來た翌日から、どうしてもおぬいさんを教へるのはいやだといひ出したので、而して頻りに園に敎へに行けといつて聽かないので、彼は已むを得ず、一日おきに又その家に通ふやうになつたのだつた。それがもう半ケ月の餘も續いてゐた。

幾度も玄關に出てその歸りを待つてゐたといふ婆やが、何か不吉の豫感らしいものを顏に現はして園にその電報を手渡した時、園も一種の不安を覺えないではなかつたが、まさかあの頑丈な父が死ぬものとは思つてゐなかつた。文言を讀んだ時でも父が死んだやうには考へられなかつた。たゞ眼の前に自分の家の樣子が普段のまゝな姿で明かに思ひ出されたばかりだつた。

何か變つたことがあつたのではないかと婆やが尋ねるのに對しても、はつきりしたことは告げ知らせもしないで、自分の部屋に歸つて來たのだつた。

不思議なことには……と園が不圖思つたほど……自分の部屋は何んの變化もない自分の部屋だつた。机の側には婆やのいけておいてくれた炭火がかすかに光つてゐた。園はいつもの通り、ドアの蔭になつてゐる釘に、外套と帽子とをかけて、本箱の隅におきつけてあるマツチを手探りに取り出してラムプに灯をともした。机の上には二三通の手紙がおいてあつた。その中の一つは明かに父からの手紙だつた。園は坐りも得せず、その手紙を取り上げて見た。確に父の手蹟に相違なかつた。ちびた筆で萎縮したやうに十一月二十三日と日附がしてあつた。それを見ると稍〻あわてたやうな氣持になつて、衣嚢の中から電報を取り出して、今度はその日附を調べて見た。

十一月二十五日午前九時四十分の發信になつてゐた。

園は手紙と電報とを机の上に戻しながら始めて座についた。而して暫くは手紙を開封することもなく、人さし指を立てゝ机の小端を輕く押へるやうに續けさまにたゝきながら、ぢつと眼の前の壁を見つめてゐた。自分ながらそれが何んの眞似だかよく解らなかつた。然しながら豫ねてから或る不安なしにではなく考へてゐたことが、驀地に近づいて來てゐるやうな一種の心の壓迫を感じ始めてゐるのは明かだつた。自分の研究に一頓挫が來さうな氣持が次第に深まつて行つた。

園は父の手紙をわざと避けて、他の一通を取り上げて見た。それは絶えて久しい幼友達の一人から送られたもので、園に取つてはこの場合さして興味あるものではなかつた。他の一通は書體で星野から來たものであるのが明かだつた。園は忙しく封を破つて、中から細字で書き込まれてある半紙三枚を取り出した。長い手紙であればある程その場合の園には便りが多かつた。園は念を入れてその一字一句を讀みはじめた。

「皚々たる白雪山川を封じ了んぬ。筆端の自ら稜峭たる亦已むを得ざるなり」

とそれは書き出してあつた。

「昨夜二更一匹の狗子窓下に來つて頻りに哀啼す。筆硯の妨げらるゝを惡んで窓を開き見れば、一望月光裡にあり。寒威慘として搖がず。彼の狗子白毛にして黑斑、惶々乎とし屋壁に跼蹐し、四肢を側立て、眼を我に擧げ、耳と尾とを動かして訴へてやまず。その哀々の狀諦視するに堪へず。彼果して那邊より來れる。思ふに村人悉く眠り去つて、灯影の漏るゝ所偶ゝ我が小屋あるのみ。彼行くに所なくして、敢てこの無一物裡に一物を庶幾し來れるにあらざらんや。座邊一片の食なし。假りに彼を屋内に招かば、狂弟の虐殺するところとならんのみ。我れの有するもの唯一篇の文章のみ。文章は畢竟彼に於て何するところぞ。我れ遂に斷じて窓を閉づ。

翌、彼の狗子命を我が窓下に絕ちぬ。

嗚呼何んぞ獨り狗子を云はんや。自然の物を遇する凡て正に此の如し。我が茅屋の中常にかの狗子にだに如かざるものを絕たず。日夜の哭啾聞こえざるに聞こゆ。筆を折つて世と共に濁波を擧げて笑ひ且つ生きんとしたること幾度なりしを知らざるは、偶〻我が耿々の志少なきを語るものに過ぎずといへども、或は少しく兄の憐みを惹くものなきにしもあらじ。而かも古人の蹟を一顧すれば、忽ち慚汗の背に流るゝを覺ゆ。貧窮、病弱、菲才、雙肩を壓し來つて、動〻もすれば我れをして後へに瞠若たらしめんとすといへども、我れ敢て心裡の牙兵を叱咤して死戰することを恐れじ。

『折焚く柴の記と新井白石』は辛じて稿を了るに近し。試驗を終らば兄は歸省せん。若し然らば幸ひに稿を携へ去つて、四宮霜嶺先生に示すの機會を求むるの勞を惜しまざれ。先生にして我が平生忖度するところの如くんば、この稿によつて一點靈犀の相通ずるあるを認めん。我が東上の好機も亦之によつて光明を見るに至らんやも保し難し。更に兄に依囑し得べくんば、我が小妹のために一顧を惜しまざれ。彼女は我が一家の犧羊なり。兄の知れる如く今小樽にありて具さに辛酸を嘗めつゝあり。若し更に一二年を放置せば、心身共に萎靡し終らんとす。坐視するに忍びざるものあり。幸ひにして東京に良家のあるありて、彼女の爲めに適所を供さば、單に心身の更生を僥倖し得るのみならず、その生得の才能を發揮するの機緣に遇ひ得るやも計るべからず。我が望むところは、彼女が東上して圓山氏に就き、勤勞に服するの傍ら、現代的智識の一班に通ずるを得ば、極めて幸ひなり」

園はこれだけのことを讀む間にも、幾度も自家の方の有樣を想像してゐた。想像したといふよりは自分がずつと育つて來た東京郊外の田舍じみた景色や、父、母、兄などの面影やが、見るやうに現はれたり隱れたりしてゐ

た。その爲めに園は星野からの手紙を靜かに讀み終ることが出來ないで、それを机の上に置いたなりで、細かく書連ねられた達者な字を見入りながら、段々と自分の家のことを思ひ耽りはじめた。

有るか無いかに薄い眉の上に、深い横皺を一本たゝんで、黑白半ばする程の髮毛のまだらに生え殘つた三分刈りの大きな頭を少し前こゞみにして、じろりと横ざまに眼を走らしながら人の顏を見る父の顏……今年の夏休暇の終に見たその時の顏……その時、父と兄との間にはもう大きな龜裂が入つてゐて、いつも以上に不機嫌になつてゐた。兄は病氣の加減もあつたのか殊更に陰鬱だつた。若い癖に喘息が嵩じて肺氣腫の氣味になつてゐたが、やゝともすると誰にも口をきかないで一日でも二日でも頑固に押し默つてゐるやうなことがあつた。園に對しては舐めるやうな溺愛を示すのに引きかへて、兄に對しては事毎に氣持を悪るくしてゐるらしい愛憎の烈しい母が、二人の中に挾まつて、二人の間を却てかき亂してゐた。いら〳〵してゐるのが指の先までも傳つてゐるやうな樣子で、驚くほど烈しく煙管で吐月峰をたゝきつけながら、自分のすぐ後ろにある座敷金庫から、十圓札を二枚取り出し、乞食にでもやるやうに、それを園の前に抛り出して苦がり切つてゐた父の顏、それを取り上げるまでに園は自分でも解らぬやうな複雜した氣持を味はねばならなかつた。園が默つたまゝお辭儀一つして、それに手を延ばすまでの一擧一動は固より、どういふ風に氣持が動いてゐるかを嚴しく看守しながら、聊かでも父の權威を冒すやうな風があつたら、そのまゝにはしておかないぞといふやうに見えた父の顏……自分の生みの父ながら、あの眉の上の深い横皺は園にはこの上なくいやなものだつた。どうかして鏡に向ふやうなことのある度毎に、園は自分の顏にそれが現はれ出はしないかと神經質に注意した。年の故か園にはなかつた。然し兄には明かにそれが出てゐた。さういふ父の顏……それが何よりも色濃く園の眼の前を離れなかつた。死顏などはどうしても現はれては來なかつた。父の死んだといふことが第一不思議なほど信ぜられなかつた。毎日葬式や命日といふやうな儀式は

見慣れて來てはゐたけれども、自分の家から死者の出たのは、園が生まれてから始めてのことなので、餘計さうした感じが起らないのかも知れなかつた。母の顏も平生の通りの母の顏、兄の顏も今年の夏別れる時に見たまゝの兄の顏。玄關からなだら上りになつた所に、重い瓦を乘せてゆがみかゝつた寺門がある。その寺門の左に、やや黄になつた葉をつけたまゝ、高々とそゝり立つ名物の「香ひ櫻」。朝の光の中で園がそれを見返つた時、荒くれて黝ずんだその幹に千社札が一枚斜に貼りつけられてあつて、その上を一匹の毛蟲が匐つてゐた。そんなことまでが、夏見たまゝの姿で園の眼の前に髣髴と現はれ出た。

而かもこれらのあまりといへば變化の無さ過ぎるやうな心の印象(イメージ)の後には、何か忌々しい動搖が起らうとしてゐるやうに思へた。實際をいふと、園は歸京せずに、札幌で靜かに父の死を弔らひもし、一家の善後といふことも考へて見たかつたのだが「スグカヘレ」といふ電文に背くべき何等の理由もなかつた。

園は星野の手紙の下から父の手紙を取り出して見た。封を切らうとしたが何んの故ともなくそれが出來なかつた。どうもその中からは不意な事件が飛び出して來て、準備のない園の心に、簡單に片付けることの出來ない混亂を與へさうで仕方がなかつた。園はまた父の手紙を見つめたまゝ、右手の指で机の木端(こば)を敲きながら長く考へつづけた。

「兎に角今夜すぐ歸らう」

ふつとさういふ考へが斷定的にその心に起つた。それだけのことを決心するのに何んでこれ程長く考へねばならなかつたかといふやうなそれは簡單な決心だつた。

然しさう決心すると同時に、園は心臟が急に激しく打ち出して、顏が火照(ほて)るまでに慌たゞしい心持になつてゐた。彼はそれをいまいましく思ひながらもすぐ立ち上つて部屋の中を片付けはじめた。然しそこには別に片付け

るといふやうなものもなかつた。ズツク製の旅鞄に、二板の着換へを入れて、四冊の書物と日記帳とを加へて、手拭の類を收めると、その外にすることゝいつては、鍵のかゝるところに鍵をかつて、本箱の上に自分のと別にしてならべてある借用の書物を人見か柿江に頼んで返却して貰へばそれでいゝのだつた。彼は心の中にわく〳〵するやうないやな氣分を持ちながらも、割合に落ち着いた擧止でそれだけの仕事を濟ませた。而して机の上にあつた三通の手紙を洋服の内衣嚢に大事にしまひこんだ。机の上にはラムプとインキ壺と硯箱との外に何んにもなかつた。そこで園はもう一度思ひ落しはないかと考へて見た。缺席屆があつた。彼は再び机の引出の錠を開けて、半紙を取り出してそれを書いた。而してその序に星野にあてゝ一枚の葉書を書いた。

「兄の手紙今夕落手。同時に父死去の電報を受取つたので今夜發ちます。御返事はあとから」

然し園はさう書いて來ると、もう一つ書き添ふべき大事なことのあるのに氣付いた。それはおぬいさんのことだつた。然しそれは葉書には書き得ることではなかつた。凡ての事を知らせるのはあとからにしよう、さう思ひながら園は星野への葉書を破つて屑籠に抛りこんだ。

隣の部屋では人見達が盛んに笑ひながら大きな聲で議論めいた話をしてゐる。それに引きかへて、ずつと見廻はして見た園の部屋は森閑として、片付き過ぎる程隅まで片付いてゐた。それを見ると園は父の死んだといふ事實をちらつと實感した。何んの意味もなく胸の迫るのを覺えた。然しそれはすぐ通り過ぎてしまつた。

隣の部屋をノックして急な歸京を知らせると、そこにゐ合はせた三人は等しく立ち上つて、少し頓狂なほど興奮して園を玄關まで送つて來た。婆やは、食事がもう出來るから食べていつたらいゝだらうと勸めながら、慌てゝ下駄を引つかけて門の外まで送つて出た。而して袖口を顏に押しあてながら、遠くなるまで見送つてゐた。

園は鞄一つをぶら下げて、もう十分に踏み固まつてゐる雪道を足早に東に向いて歩いた。肘を押しまげて頭の

上から強く打ち下さうとする衝動が、鞄を不必要に前後に搖り動かさした。彼は今夜といふ今夜、凡てのことをおぬいさんと其の母とに申し出ようといふ決心を易々としてしまつてゐたのだ。それは東京に歸らうと決めたと同時に、特別な考慮を廻らさないでも自然に出來上つた決心だつた。園は固よりおぬいさんが彼をどう考へてゐるかも知らなかつた。その母がどう考へるかも考へては見なかつた。園はたゞおぬいさんを愛してゐることをこの十日程の間にはつきりと發見したのだ。彼は幾度か出來るだけ冷靜になつて自分の氣持を考へても見、容赦なく解剖しても見た。然しそこに何等か輕薄な氣持が動いてゐることを認めることが出來なかつた。渡瀨が醉つたまぎれに「おぬいさんに惚れろ」といひ續けた時、園はさういふ問題を取り上げる氣持は少しもなかつたが、その後四五日經つてから、どうした機會だつたか、園はふとおぬいさんに對する自分の心持を徹底的に決めておかなければならぬといふ強い要求を感じ始めた。その爲めに晝は研究が出來ず、夜は眠ることの出來ない三日四日が續いたが、それには何等の焦燥も苦惱も伴ひはしなかつた。彼はたゞ神聖な存在の前に引き出されたやうな氣分で、何事をも僞ることなく心をこめて考へた。而して最後に彼はおぬいさんにこの上なく深い愛と親しみとを持つてゐることをはつきり見出だした。さうなることが園に取つては極めて自然なことだつた。この發見は園の心を嘗て覺えのない暖かさと快さとに誘ひこんだ。ふとその時星野のことを思ひ浮べて見た。然しこれはもう園に取つて聊かの暗らい影にもなつてはゐなかつた。凡ての良心に於てこの上なく深く、この上なく暖かくおぬいさんを愛してゐる、そのすがすがしい滿足に障りとなるものは一つもなかつた。おぬいさんが園を愛してゐない、その疑ひすらも氣にはならなかつた。實際さうであつたところが、園は恐らく平氣だつたらうと思はれる程園の心は靜かに滿ち足つてゐた。

たゞ、し殘された一つのことは、自分の氣持をゆがめずに三隅母子に傳へる時機と方法とをつくることだけだ

つた。然しそれさへ園に取つては格別むづかしいことではなく見えた。父死亡の電報を見た時でも、この場合その問題をどう片付けるかさへ考へはしなかつたのだが、缺席屆を書き終へた時、保證人なる槍田氏は三隅の小母さんの知り合ひだから、通知かた〴〵三隅家に立ち寄つてその判を貰ふやうに賴まうと思ひ付くと同時に、自分の心持もその序でにいつてしまはうと決心したのだ。

園は往來を歩きながら、不思議な力が、徐かに、然し確かに自分の體中に滿ちて來るのを感じた。嘗て知らなかつた大きな事業、それが成功しようとも失敗しようとも、事業そのものゝ値打をいさゝかも傷つけないやうな大きな事業が、今眼の前に行はれようとしてゐるのだ。而してこの事業に手をつけるについては、果してそれに當るだけの力量のあるなしは分らないとしても、あらゆる點に於て殘るところなく考へぬき、而かも露ほどの心の後ろめたさも感じてはゐないといふことにかけて、園の心は小ゆるぎもしなかつた。一種の勇氣をもつてその五體は波打つた。彼の眼に映る大通りの雪景色は、その廣さと潔さに於て彼の心に等しかつた。夜の闇が逼り近づいて紫がゝつた雪の平面を、彼は親しみの吐息を以て果て遠く眺めやつた。

先程の通りに小母さんもおぬいさんも家にゐて、臺所で夕食の支度をしてゐる所だつた。二人は先刻歸つたばかりの園が、不意に又訪づれて來たのを驚きながらも喜ぶやうに、もつれ合つて入口に走り出た。毎日同じやうなことを繰り返しながら、淋しく暮してゐる母子二人に取つては、これほど聊かな不意なことも、これほどに氣を引き立たせるのだらう。少なくとも園がこの家で邪魔物あつかひにされてゐないのを知るのは彼にとつても限りなく快いことだつた。

おぬいさんは慌て氣味に襷とエプロンとを外づしながら、茶の間に行つてラムプの芯をねぢ上げた。その釣りラムプの下には彼の見慣れたチヤブ臺の上に、小さづくめの食器がつゝましく準備されてゐた。小母さんを見、

おぬいさんを見、その可憐なチャブ臺の上の樣を見ると、園の心は思ひもかけず小さく激しく沸き立ちはじめた。

「その鞄は」

と小母さんは怪しむやうに尋ねた。

「今お話します」

園は小母さんの怪訝さうな顏に曖昧な答へをしながら、美しい楕圓の感じのする茶の間に通つて、いつもの所に、……柱を背にして倚りかゝることの出來る……胸の動悸を氣にしながら坐つた。

「どうなすつたのです……明りの故か知らん、……お顏の色がお惡るいやうですが……」

火鉢のわきに小母さんが、園からずつと離れて茶簞笥の前におぬいさんが座をしめた時には、園の前にはチャブ臺は片付けられてゐた。園は自分の顏が醜い程充血してゐるだらうとばかり信じてゐたのに、さう小母さんにいはれて見ると、手の先までが寒さの爲めばかりでなく冷え切つてゐるのを感じた。自分の氣持をそのまゝ先方に移すことが出來るだらうか、さういふ不安がかすかに動いた。彼はその場になつて、かすかにでもさう感ぜねばならぬのが苦しかつた。それ故彼は已むを得ず益ゝ口少なになつた。何もかも一度に二人に云ひ切つてしまつた時に感じるだらう心のすがすがしさと、それを曲つて取られはしないかといふ不安とが、もどかしく心の中で戰ひ合つた。

いつもの通りの落ち着いたしとやかさでおぬいさんが茶を入れてゐた。小母さんは茶を飮み終るまでも、大事な問題は延ばしておかうとでもするやうに、途中が寒かつたらうなどゝ、世間なみの口をきいてゐた。園は自分の氣持が何んとなく小母さんに通じてゐるのだなと思つた。長い生活の經驗と、親といふものゝ力が美しく働いてゐるらしいのを感じて、その月並な會話にも決して不快は感じなかつた。

園はおぬいさんが進めてくれた茶を靜かにすゝつた。少しそれは熱過ぎた。彼は冷えた兩手でほとぼりの沁み殘つた茶碗を握りしめて見た。そこからも快い感觸が神經の奥に暖かく移つて行つた。ふと眼を擧げるとそこにおぬいさんの眼があつた。何んの恐れ氣もなく、平和に、純潔な、而して園の心におのづと涙ぐましさを誘ふやうな淋しさ、――淋しさではない。淋しさといふことは出來ない。淋しさに似てもつと深いもの、いゝ言葉はない――を籠めた。黑眼勝ちな眼。愼しみ深い顏の中にその眼だけがほのかにほゝゑんで、そこにつぎ〳〵に開けてゆく世界をより深く眺めようとするやうに見えた。おぬいさんのその眼があつた。而してそれがやはらかく、まともに園の方に寒いまでに澄んで而かもこの上なく暖かい光を送つてゐた。園はその眼を思はずぢつと眺めやつた。その瞬間に園の覺悟は定まつた。彼は柱から身を起して端坐した。而して臆することなく小母さんの方に面を向けた。口を切らうとする時、父のことを先づいひ出さうとしたが、すぐそれが間違つてゐるのを自分で悟つた。

「こんなことをいふのはまだ早過ぎはしないかと思ひますのですけれども、事情がこれ以上躊躇するのを許さないやうですから……」

園は兩手に握つてゐる茶碗を感じた。而してその茶碗の中に更に一杯の茶を欲した。けれども彼は續けた。

「僕は自分としてはこれ以上は考へられないといふ所まで考へたつもりです。若し失禮に當つたら許して下さいまし。僕はおぬいさんとお約束をすることが出來たらと思ふんです……さう願つてゐます」

園はおぬいさんに向つても同じことをいひたかつたのだ。然しそれを聞きつゝあるおぬいさんの苦痛を察すると、どうしてもそちらに眼をやることが出來なかつた。それにもかゝはらずおぬいさんが處女らしい羞ぢらひの爲めに、深々と顏を伏せたのが痛むほどきびしく園の感覺に傳つて來た。

小母さんは切れ〲な園の言葉を聞くと、思はずはつと胸をつかれたらしく、かすかに口をゆるめて、鋭い色を眼にひらめかしたが、やがて、といふ程もなく、園をしげ〲と見やりながら默つたまゝで深くうなづいて見せた。而してかすかな血の氣をその疲れたやうな頰に現はした。自分は今答へようにも答へられないから、もつと何んとかいへとその顏は促がしてゐた。園は何か云はうとした。然しそこには云ふべき何事も殘つてはゐなかつた。それ以上をいふのは冒瀆にすら感じられた。

園と小母さんとは無言のまゝで互ひの眼から離れて下を向いてしまつた。ストーブの中の薪がゆるく燃えてゐる。その音だけがしめやかに狹い部屋の中に擴がつてゐた。

と、おぬいさんが無言のまゝで立ち上つて、間の襖を開けて靜かに隣の部屋に去つた。小母さんはそのきつかけにおぬいさんに何かいはうとしたらしかつたが、思ひ返したか、心許なげな眼付でその後姿を目送しただけで何もいはなかつた。

襖が靜かに締まつた。

園はもう一つ言つておかねばならぬものを思ひついた。それ故再び顏を上げて小母さんを見た。小母さんは園を避けながら、焦立つてゐるやうな風で火鉢の炭をせゝつてゐた。然しそれは焦立つてゐるのではなく、少し心の落ち着きを失つてゐるのだといふことが園にはよく解つた。彼は小母さんの引きしまつた橫顏を見やりながら口を切つた。

「僕ははじめこのことをあなただけの所で申し上げようか、おぬいさんだけに聞いていただかうかと迷ひました……然し結局お二人の前で申し上げるのが一番いゝとおもひました。……本當は槍田さんにでもお願ひするのがいゝのかも知れません……けれども、さうお願ひして萬一僕の氣持がそのまゝ現はれないやうなことがあると…

…苦しいことだと思つたものですから……どうか僕を信じて下さいまし。僕はどんな御返事をいたゞいても……それは十分に覺悟してゐます……」

さういひ出して見ると、今度は云つておきたい事が後から後へと無限にあるやうに感じられた。何處まで行つても果てしがあらうとは思はれなかつた。園は少し自分に惘れてまた默つてしまつた。而して氣がついて、手にしてゐた茶碗を茶托に戻した。

やゝ暫く思案してゐるらしかつた小母さんは、急に居住まひをなほして園の方にまともに顏を向けた。

「園さん。仰有ることは一々私にもよく解りました。それだけ仰有つて下さるのを私は親として誠に難有く存じますけれども、娘は不束かで、さういふことを考へて見たこともないやうで御座いますし、……尤もゆつくりよく尋ねては見ませうけれども、……それによく考へて見なければならないことでも御座いますしゝますから……今夜はそれを伺つておくだけにさせていたゞきたう御座いますが……惡るくお取り下さいますなよ……あなたのやうにさう隱し立てなく言つていたゞくと、私は嬉しう御座います、本當に。……どんな仕合せになりませうとも、ぬいもあなたのお志はうれしく存じますでせう」

小母さんの聲は意外にも曇つて震へてゐた。園は固より今夜の告白からすぐ結果を望まうとなどはしてゐなかつたのだ。心の中では、勿論そんなことを卽座に伺はうなどゝは思つてゐませんといひたかつたのだけれども、それが言葉にはならなかつた。

隣の部屋でおぬいさんが忍び泣きをしてゐる……それを園ははつきり感じた。彼は身の內が氷のやうに引き締まるのを覺えた。强い緊張の爲めに、肩の凝り切つた時のやうな感じが體全體に漲つた。自分の少しばかりの言葉がおぬいさんを泣くほどに苦しめたかと思ふと、園は今夜の淺慮を悔いるやうな氣にもなつた。然しながらそ

れは決して淺慮ではないと園は思ひ返した。おぬいさんを本當に愛するなら、おぬいさんの氣持に絕對自由を與へなければならない。何等かの義務を感じさせておぬいさんを苦しめては忍んでゐられない。さういふ氣持が何よりも先きに立つた。

「何んだか僕は自分のしたことが亂暴過ぎたかと思ひもします……若しさうでしたら、御免下さい。僕は決してどんな結果をも恐れてはゐませんから、どうか十分自由なお氣持で今までのことをお聞き下さいまし。……僕は今夜急に東京に歸らなければなりません。少し思ひがけない不幸に遇ひましたから。そのことは何れ手紙で申し上げます。……それではもう時間がありませんからお暇します。……英語の方をまた休まなければならなくなつて……」

と出來るだけ冷靜な言葉で云はうとしたが、自分ながら意氣地なく聲が震へを帶びた。若し事が破れたら、この家にはもう來られないのだ。ふと彼はさう思ふと限りなく淋しかつた。

園は缺席屆書を小母さんに託し、不幸といふのは父が頓死したのだといふことを簡單に告げて、座を立つことになつた。彼は見納めをするやうな氣持で、きちんと整頓されたその茶の間を眼早く見まはした。時計の下の柱暦に小母さんとおぬいさんとの筆蹟がならんでゐるのも――彼が最初にその家に英語を敎へるのを斷りに來た時に氣が付いたものだけに――なつかしかつた。彼は自分のしたことが、思つた以上に彼に取つて致命的であるのを知つた。

「ぬいさん、園さんがお歸りだからお見送りなさいな。東京の方にお歸りだといふから――」

小母さんは立ち上つて園を入口に送り出しながら、奧の方にかう聲をかけた。けれどもおぬいさんの出て來さうな樣子はなかつた。園はそれがおぬいさんらしいと思つた。さう思ひはしたものゝ、云ひやうのない物足らな

さが胸の奥底に濃く澱むのをどうすることも出來なかつた。

園が編上靴を穿き終つて、外套を着て、もう一度小母さんに簡單な別れの挨拶をして格子戸を開けようとした時、おぬいさんが奥から出て來るのを感付いて、彼は思はず後を振り向いた。果しておぬいさんが小刻みに駈けるやうにして母の後ろまで來ると、その蔭に倚りそつて坐るが早いか頭を下げた。園も默つて帽子を取つた。その時見えた小母さんの眼には涙が一杯たまつてゐた。

園は格子戸を立てゝから、未練だとは思ひながらもちらつとおぬいさんを見た。おぬいさんは、疊についた兩手をしやんと延ばして寄せ合はせて、肩さへいつもより細々と見えるのに、襟足がのぞかれるまで顏を重く伏せてゐた。眼上のものに心から詫び入る姿のやうに。かと思ふと死ぬ程の口惜しさをぢつと堪らへる形のやうに。園にはもどかしい程に、その何れであるかゞどうしても分らなかつた。

園は歩きながら、我にもなくやゝともすると、熱い涙が眼に迫るのを感じた。而して振り拂ふやうに眼を瞑つて、雪になるらしく曇つた夜の空に、幾度も顏を仰向けねばならなかつた。

思ひもかけぬ重い苦痛と疑惑とが、若い心を老いしめると思ふ程に押し寄せて來た。彼は自分の腑甲斐なさに呆れる程だつた。市街の此處彼處に立つ老いた楡の樹を見る毎に、彼はそれによつて自分の心を勵まさうとした。……科學の爲めに一身を獻げようとするものに何んといふ不覺なことだ。昔から學者の生活が世の常の立場から見て、淋しく暗らいものであるのは知れ切つたことだ。それは始めから或る誇りを以て覺悟してゐたことではなかつたか。誰にも省みられないけれども、春が來る毎に默つて葉を連ねてゐるあの楡の大樹、あの老木が一度でも分外な涙を流したか。貴樣にはまだ文學者じみたセンティメンタリズムが影を潛めてはゐないのだ。科學者らしい雄々しさを持て。眞理の前には何事を犧牲にしても、微笑してゐられるだけの熱情を持て。その熱情を誰に

も見えない胸の深みに靜かに抱いてゐろ。おぬいさんを愛するのを止めろといふのではない。貴樣の愛し方は間違つてゐるとはいへない。その愛がその人の前に明かに表明された以上、貴樣の心は朗に晴れて行かねばならぬ筈だ。それだのに結果は反對ではないか。何んといふ愚かな苦しみを喜ばうとしてゐるのだ。……貴樣の科學は今何處に行つてしまつたのだ。そんな風に園は無茶苦茶に停車場の方に向つて歩きながら、自分で自分を鞭つて見た。

さうだつたと眼が覺めるやうに思ひ上る瞬間もあつた。同時に、玄關で別れ際に見たいたいたしいおぬいさんの姿が、手を延ばせば摑めさうに眼の前にちらついて離れない瞬間もあつた。仕舞には園は自分を憐みたくさへなつた。而かもそれが父の死を知つたばかりの悲しみの中に在るべき身でありながら――園はさながら魍魎の巣の中を喘ぎ喘ぎ歩いて行くもののやうに歩いた。

停車場には白官舍の書生だけが三人で送りに來てゐてくれた。柿江は夜學校の日だと云ふので顏を見せなかつた。婆やも來てはゐなかつた。人見が「東京に行くと面白い議會が見られるね。伊藤が政友會を率ゐてどう元老輩をあやつるかゞ見ものだよ」といつてゐた。その言葉が特別に園に緣遠い言葉として却つていつまでも耳底に殘つた。

三等車の中央部に在るまん丸な鑄鐵製のストーブは眞赤に熱して、そのまはりには遠くから來た旅客がいぎたなく寢そべつてゐた。八時に札幌を發つた列車は、雪さへ黑く見えるやうな闇の中を驀地に走り出した。園はストーブから可なり離れた席に腰けて外套の襟を立てゝ、默然として坐つてゐた。床の上を足を動かす度に、先客の喰荒らした廣東豆（南京豆のこと）の殼が氣味惡くつぶれて音をたてた。車内の空氣は固より腐敗し切つて、油燈の灯が震動に調子を合はせて明るくなつたり暗くなつたりした。

（一九二一年一月「新潮」に「白官舍」と題して所載〔二一三七頁五行迄〕、一九二二年四月脫稿）

青黃ろく澄み渡つた夕空の地平近い所に、一つ浮いた旗雲には、入日の桃色が靜かに照り映えてゐた。山の手町の秋のはじめ。

ひた急ぎに急ぐ彼には、往來を飛びまはる子供達の群れが小うるさかつた。夕餉前の僅かな時間を惜しんで、釣瓶落しに暮れてゆく日ざしの下を、彼等は喚きたてる蝙蝠の群れのやうに、ひら〳〵と通行人にかけかまひなく飛びちがへてゐた。まともに突つかゝつて來る勢ひを外づすために、彼は急に步行をとゞめねばならなかつたので、幾度も思はず上體を前に泳がせた。子供は、よけて貰つたのを感じもしない風で、彼の方には見向きもせず、追つて來る子供にばかり氣を取られながら、彼の足許から遠ざかつて行つた。その悉く利己的な、自分よがりな我儘な仕打ちが、その時の彼には殊更憎々しく思へた。彼はかうしたやんちや者の渦卷の間を、言葉通りに縫ふやうに步きながら、頻りに急いだ。

眼ざして來た家から一町ほどの手前まで來た時、彼はふと自分の周圍にもや〳〵とからみ附くやうな子供達の群れから、すかんと靜かな所に步み出たやうに思つて、あたりを見廻して見た。そこにも子供達は男女を合せて二十人位もゐるにはゐたのだつた。だがその二十人程は道側の生垣のほとりに一塊りになつて、何か饒舌りながらも飛びまはることはしないでゐたのだ。興味の深い靜かな遊戲に耽つてゐるのであらう、彼がそのそばをじろじろ見やりながら通つて行つても、誰一人振り向いて彼に注意するやうな子供はなかつた。彼はそれで少し救はれ

たやうな心持になつて、草履の爪さきを、上皮だけ播水でうんだ堅い道に突つかけ〳〵先きを急いだ。

子供達の群れからはすかひにあたる向側の、格子戸立ての平家の軒さきに、牛乳の配達車が一臺置いてあつた。水色のペンキで塗りつぶした箱の横腹に、「精乳社」と毒々しい赤色で書いてあるのが眼を牽いたので、彼は急ぎながらも、毒々しい箱の字を少し振り返り氣味にまでなつて讀むほどの餘裕をその車に與へた。その時車の梶棒の間から後ろ向きに箱に倚りかゝつてゐるらしい子供の脚を見たやうに思つた。

彼が然しすぐに顏を前に戻して、眼ざしてゐる家の方を見やりながら歩みを早めたのは無論のことだつた。而してそこから四五間も來たかと思ふ頃、がたんとかけがねの外づれるやうな音を聞いたので、急ぎながらももう一度後を振り返つて見た。然しそこに彼は不意な出來事を見出して思はず足をとめてしまつた。

その前後二三分の間にまくし上つた騷ぎの一伍一什を彼は一つも見落さずに觀察してゐた譯ではなかつたけれども、立ち停つた瞬間からすぐに凡てが理解出來た。配達車のそばを通りすぎた時、梶棒の間に、前扉に倚りかかつて、彼の眼に脚だけを見せてゐた子供は、不斷から惡戲が激しいとか、愛嬌がないとか、引込み思案であるとかで、ほかの子供達から隔てをおかれてゐた子に違ひない。その時もその子供だけは遊びの仲間からはづれて、配達車に身をもたせながら、つくねんと皆んなが道の向側で面白さうに遊んでゐるのを眺めてゐたのだらう。一人坊つちになるとそろ〳〵腹の空いたのを感じ出しでもしたか、その子供は何の氣なしに車から尻を浮かして立ち上らうとしたのだ。その拍子に牛乳箱の前扉のかけがねが折り惡しくもはづれたので、子供は背中から扉の重みで押へつけられさうになつた。驚いて振り返つて、開きかゝつたその扉を押し戻さうと、小さな手を突つ張つて力んで見たのだ。彼が足を停めた時は丁度その瞬間だつた。やう〳〵六つ位の子供で、着物も垢じみて折目のなくなつた紺の單衣で、それを薄寒さうに裾短かに着てゐた。薄ぎたなくよごれた顏に充血させて、口を喰ひしば

つて、倚りかゝるやうに前扉に凭たれてゐる樣子が彼には笑止に見えた。彼は始めの中は輕い好奇心にそゝられてそれを眺めてゐた。

扉の後には牛乳の瓶がしこたま仕舞つてあつて、抜きさしの出來る三段の棚の上に乘せられたその瓶が、傾斜になつた箱を一氣に辷り落ちようとするので、扉は殊の外の重みに押されてゐるらしい。それを押し返さうとする子供は本當に一生懸命だつた。人に救ひを求めることすらし得ない程恐ろしいことがまくし上つたのを、誰も見ない中に氣がつかない中に始末しなければならないと、氣も心も顚倒してゐるらしかつた。泣き出す前のやうなその子供の顏、……かうした suspense の狀態が物の三十秒も續けられたらうか。

けれども子供の力は迚も扉の重みに打ち勝てるやうなものではなかつた。あゝしてゐるとやがておほ事になると彼は思はずにはゐられなくなつた。單なる好奇心が少しぐらつき出して、後戾りしてその子供の爲めに扉をしめる手傳ひをしてやらうかとふと思つて見たが、あすこまで行く中には牛乳瓶がもうごろ〳〵と轉げ出してゐるだらう。その音を聞きつけて、往來の子供達は固より、向三軒兩隣の窓の中から人々が顏を突き出して何事が起つたかとこつちを見る時、あの子供と二人で皆んなの好奇的な眼でなぶられるのも難有い役廻りではないと氣づかつたりして、思つた通りを實行に移すにはまだ距離のある考へやうをしてゐたが、その時分には扉はもう遠慮會釋もなく三四寸がた開いてしまつてゐた。と思ふ間もなく牛乳のガラス瓶があとから〳〵生き物のやうに隙を眼がけてころげ出しはじめた。それが地面に響を立てゝ落ちると、落ちた上に落ちて來る外の瓶が又からん〳〵と音を立てゝ、破れたり、はじけたり、轉がつたりした。子供は……それまでは自分の力にある自信を持つて努力してゐたやうに見えてゐたが……かういふはめになるとかつと慌(あわ)てはじめて、突張つてゐた手に一と際力をこめるために、體を前の方に持つて行かうとした。然しそれが失敗の因だつた。そんなことをやつたお蔭で子供の姿

勢は慘めにも崩れて、扉は忽ち半分がた開いてしまつた。牛乳瓶はこゝを先途とこぼれ出た。而して子供の胸から下を滅多打ちに打つては地面に落ちた。子供の上前にも地面にも白い液體が流れ擴がつた。
かうなると彼の心持はまた變つてゐた。子供の無援な立場を憐んでやる心もいつの間にか消え失せて、牛乳瓶ががらり〳〵と止度なく瀧のやうに流れ落ちるのをたゞ面白いものに眺めやつた。實際そこに惹き起された運動といひ、音響といひ、ある惡魔的な痛快さを持つてゐた。破壞といふことに對して人間の抱いてゐる奇怪な興味。小さいながらその光景は、さうした興味を唆り立てるだけの力を持つてゐた。もつと激しく、ありつたけの瓶が一度に地面に散らばり出て、ある限りが粉微塵になりでもすれば……
果してそれが來た。前扉はぱくんと大きく口を開いてしまつた。同時に、三段の棚が、吐き出された舌のやうに、長々と地面にずり出した。而してそれらの棚の上にうんざりと積んであつた牛乳瓶は、思つたよりもけたゝましい音を立てゝ、壞れたり碎けたりしながら山盛りになつて地面に散らばつた。
その物音には彼もさすがにぎよつとした位だつた。子供はと見ると、もう車から七八間のところを無二無三に駈けてゐた。他人の耳にはこの恐ろしい物音が屆かない中に、自分の家に逃げ込んでしまはうと思ひ込んでゐるやうにその子供は走つてゐた。然しそんなことの出來る筈はない。彼が、突然地面の上に現はれ出た瓶の山と乳の海とに眼を見張つた瞬間に、道の向側の人垣を作つてわめき合つてゐた子供達の群れは、一人殘らず飛び上らんばかりに驚いて、配達車の方を振り向いてゐた。逃げかけてゐた子供は、自分の後に聞こえたけたゝましい物音に、すくみ上つたやうになつて立ち停つた。もう逃げ隱れは出來ないと觀念したのだらう。而してもう一度何とかして自分の失敗を彌縫する試みでもしようと思つたのか、小走りに車の手前まで駈けて來て、そこに默つたまま立ち停つた。而してきよろ〳〵とほかの子供達を見やつてから、當惑し切つたやうに瓶の積み重なりを顧み

た。取つて返しはしたものゝ、どうしていゝのかその子供には皆目見當がつかないのだ、と彼は思つた。

群がり集まつて來た子供達は遠卷きにその一人の子供を取り卷いた。凡ての子供の顏には子供に特有な無遠慮な殘酷な表情が現はれた。而してやゝ暫く互に何かいひ交してゐたが、その中の一人が、

「わーるいな、わるいな」

とさも人の非を鳴らすのだといふ調子で叫び出した。それに續いて、

「わーるいな、わるいな。誰かさんはわーるいな。おいらのせゐぢやなーいよ」

といふ意地悪げな聲がそこにゐる凡ての子供達から一度に張り上げられた。しかもその糺問の聲は調子づいて段々高められて、果ては何處からともなくそは／＼と物音のする夕暮の町の空氣が、この癇高かな叫び聲で埋められてしまふ程になつた。

暫く躊躇してゐたその子供は、やがて引きずられるやうに配達車の所までやつて來た。もうどうしても遁れる途がないと覺悟をきめたものらしい。しよんぼりと泣きも得せずに突つ立つたそのまはりには、あらん限りの子供達がぞろ／＼と跟いて來て、皮肉な眼付でその子供を鞭ちながら、その擧動の一つ／＼を意地悪げに見やつてゐた。六つの子供に取つて、これだけの過失は想像も出來ない大きなものであるに違ひない。子供は手の甲を知らず／＼眼の所に持つて行つたが、さうしても餘りの心の顚倒に矢張り涙は出て來なかつた。

彼は心まで堅くなつてぢつとして立つてゐた。がもう默つてはゐられないやうな氣分になつてしまつてゐた。肩から手にかけて知らず／＼力がこもつて、唾を呑みこむとぐつと喉が鳴つた。その時には近所合壁から大人までが飛び出して來て、憫れた顏をして配達車とその憐れな子供とを見比べてゐたけれども、誰一人として事件の善後を考へてやらうとするものはないらしく、かゝはり合ひになるのを面倒臭がつてゐるやうに見えた。そのて

いたらくを見せつけられると彼は益〻焦立つた。いきなり飛びこんで行つて、そこにゐる人間共を手あたり次第になぐりつけて、呆氣に取られてゐる大人子供を尻眼にかけながら、

「馬鹿野郎！　手前達は木偶の棒だ。卑怯者だ。この子供が例へば不斷いたづらをするからといつて、今もいたづらをしたとでも思つてゐるのか。こんないたづらがこの子に出來るか出來ないか、考へても見ろ。可哀さうに。はずみから出たあやまちなんだ。俺はさつきから一伍一什をこゝでちやんと見てゐたんだぞ。筵棒奴！　配達屋を呼んで來い」

と存分に痰呵を切つてやりたかつた。彼はいぢ〳〵しながら、もう飛び出さうかもう飛び出さうかと二の腕をふるはせながら青くなつて突つ立つてゐた。

「えい、退きねえ」

といつて、內職に配達をやつてゐる書生とも思はしくない、純粹の勞働者肌の男が……配達夫が、二三人の子供を突き轉ばすやうにして人ごみの中に割りこんで來た。

彼はこれから氣のつまるやうな忌々しい騷ぎがもちあがるんだと知つた。あの男は恐らく本當に怒るだらう。あの泣きもし得ないでおろ〳〵してゐる子供が、皆んなから手柄顏に名指されるだらう。配達夫は怒りにまかせて、何の抵抗力もないあの子の襟がみでも取つてこづきまはすだらう。あの子供は突然死にさうな聲を出して泣き出す。まはりの人々はいゝ氣持さうにその光景を見やつてゐる……彼は飛び込まなければならぬ。飛び込んでその子供のために何とか配達夫をいひなだめなければならぬ。

處がどうだ。その場の樣子が物々しくなるにつれて、もう彼はそれ以上を見てゐられなくなつて來た。彼は思はず眼をそむけた。と同時に、自分でもどうすることも出來ない力に引つ張られて、すた〳〵と逃げるやうに行

手の道に歩き出した。しかも彼は胸の底で、手を合はすやうにして「許してくれ〳〵」といひつゞけてゐた。自分の行くべき家は通り過ぎてしまつたけれども氣もつかなかつた。たゞ譯もなくがむしやらに歩いて行くのが、その子供を救ひ出すたゞ一つの手だてゞあるかのやうな氣持がして、彼は息せき切つて歩きに歩いた。而して無性に癇癪を起しつゞけた。

「馬鹿野郎！　卑怯者！　それは手前のことだ。手前が男なら、今から取つて返すがいゝ。あの子供の代りにいひ開きが出來るのは手前一人ぢやないか。それに……歸らうとはしないのか」

さう自分で自分をたしなめてゐた。それにもかゝはらず彼は同じ方向に歩きつゞけてゐた。今頃はあの子供の頭が大きな平手でぴしや〳〵はたき飛ばされてゐるだらうと思ふと、彼は知らず識らず眼をつぶつて齒を喰ひしばつて苦がい顏をした。人通りがあるかないかも氣にとめなかつた。嚙み合ふやうに固く胸高に腕ぐみをして、上體をのめる程前にかしげながら、泣かんばかりの氣分になつて、彼はあのみじめな子供からどん〳〵行手も定めず遠ざかつて行つた。

（一九二〇年十月二十三日、北海道旅行中）

酒狂

淡い寒さが寂寞の中にしみ〴〵と融けこんでゐるやうな晩秋の夜だつた。

私は兎も角も寢床を出た。おびえたやうな女中を追ひ越して玄關に行つて見た。玄關の開戸の上部三分目程に切り明けてある櫺子窓にぴつたり顏を寄せて、濁つた聲でわめいてゐるBの眼があからさまに光つてゐた。たうとう醉ひどれをこの深夜に相手にせねばならぬのか、と思ひながらもお人好しに出來上つた私は、裸足のまゝ三和土に降り立つて戸を開いた。立てかけてあつた重い荷物そのまゝに、Bは倒れかゝつて來た。私は肩と兩手とで危ふくそれを受け止めた。がくりと膝頭を折つて轉ろげかけた彼は、やうやく立ち直つて私の首玉に噛りついた。酒ぼてりのする油ぎつた皮膚と、そこに疎らに生え延びた粗剛な頬髭とが、長く人膚に觸れなかつた私の感覺におぞましい不快さを傳へた、菜食に慣れた鼻先きに血生臭い獸肉をつきつけられたやうな。

私はお前と話すのを厭ふのではないが、アルコールと話すのは閉口だ。アルコールを道伴れにしないで出直して來てくれといふやうなことを、出來るだけ穩かに云つて聞かせた。が、Bは極度に肉感的に私にしなだれかゝりながらげら〳〵と笑つた。私はそれを見ると、確かに笑つてゐるとは見てゐながら、泣いてゐるなと思つた。だから念を押すやうにその眼を覗き込んだ、鼈甲緣の近眼鏡——それは上等の舶來物だが——にすれ〴〵になる程のBの出眼は然し涙を溜めてはゐなかつた。私は救はれたやうな氣がした。

醉つたら惡いか。惡けりやなぐつてくれ。殺してくれ。その殺してくれを馬鹿にしたやうな輕い調子で云ひな

がら、私に詰め寄せて來る。私が成るべく好意を示して笑ひながら取り合はないでゐると、いきなり熱い手で私の手頸を握るなり、それで自分の頰げたを立てつゞけに打たうとするのだ。私は力かぎりそれを拒んだ。Bは私の手を離してくれた。と思ふと、自分の平手で思ひきり自分をなぐりはじめた。餘りな眞劍さに私は思はず、彼の頰と彼の手との間に割つてはいつた。

何んでも命じろ、その通りにするから。命じろ、命じろ、といつてBはまた逼つて來るのだ。まあ靜かに寢るんだなと云つたら、さうかと云つて、いきなり式臺を枕に、少しじめ〳〵する三和土の上に長々と臥そべつてしまつた。私は思はずかつとなつて蹴返してやらうかと思つた。然し我慢した。その中に私の心はまたなごんで來た。私はたうとうBを私の書齋まで引きずり込んだ。

薄寒い感じに袷衣をはだけて着亂したBの姿が、丸い石ころを不規則に積み重ねたやうに、白いテーブル掛けを隔てゝ私と對ひ合つた時、ふと對等の交際をするのを恥ぢるやうな氣になつた。慘めな男だなと憐みたい氣になつた。それが私を不快にもし、不滿足にもした。私は默つたまゝそつぽを向いて、Bが惡いのか私が惡いのかと自分に問ひ詰めてゐた。

「酒を飲む奴は幸福だとお前はいふべ」

酒で一時凌ぎの出來る男はまだ幸福だといつか私が云つたことがある、それをBは忘れかねてゐたと見える。彼が書齋にはいつてから最初に云つた言葉はそれだつた。二人を照らすには五十燭の電燈はあかる過ぎた。部屋の中があまり冴え〴〵と見えた。

きよとんとして濁りきつた出眼も、半分開きかゝつた袋の口のやうなだらしのない厚い唇も、白皙な逞しい胸や腕から、熟柿臭い酒氣と共に噴き出されるらしい油ぎつた肉の匂ひも、一切その時の私には避け退けたい刺戟

だつた。私の理不盡な潔癖はそれらのものを醜く汚なく感じた。而かもBが無頓着に、そのまゝの姿で私にのしかゝつて來るのを知ると、私は自分の生活の根城を、わざと平氣で踏みにじらうとする無禮者に出喰はしたやうにさへ思つた。誰によつてゞもあれ、私の生活が無理强ひにゆすぶられるほど不愉快なものは私にはなかつた。Bは明らさまにそれを敢へてしてゐるのだ。私はBにデリカシーのいかなるものであるかを敎へようかとも思つた。けれども、それが一言の下に笑ひ捨てられるに決つてゐると知つては、Bには私の意味しようとするところが逆も解る筈がないと思つては、それをする氣にさへならなかつた。人は偶には夜一夜を惡夢に襲はれとほすこともあるものだ。その一夜だと今夜を思はう、さう私は已むなく觀念した。それにしてもBは何んだつて唇をきりつと結ぶこと位しないんだと齒がゆかつた。

Bは座にも堪へないやうに、上半身をテーブルに凭せかけて、椅子から崩れ落ちようとする體を支へながら、はち切れさうに顏に上つて來る醉ひを、骨のゆるんだ大きな手の平で追ひ拂ふしぐさをしてゐた。私は丹前を着流しながらも少し寒さを感じて、まじ〳〵と默つたまゝでそれを見やつてゐた。

三年の過去になる、Bが始めて私をこの同じ書齋に訪ねて來たのは。米國風の立派な背廣と外套とを着こんで、高價な金口の百本入りのブリキ箱を外套の衣囊から取り出して、たて續けにふかしながら……この時もかけてゐた眼鏡だ。それだけが今も殘つてゐる。私はもう一度眼鏡に注意した。眼鏡の太い金の脚がいつの間に折れたのか、それを黑のカタン糸で不器用にからめてある。その眼鏡がまだ完全だつた時からBの生活は壞れかけてゐたのだ。何處から見ても金目のかゝつた服裝をした彼ではあつたが、その言葉は亂れて切れ〴〵だつた。人は彼を氣狂ひと疑つたらう。初對面の私にBは始めから終りまで壓迫的だつた。よろ〳〵と千鳥足を踏んで彼が歸り去つたあと、私には妙な淋しさが殘された。それは何んであるか自分でもはつきりしない。然したしかに、見

ずにおきたいものを見てしまつたといふ淋しさだつた。
それから三年、お互は時に會ひもし文通もしたが、たうとうBは黒表中の人間にされて、凡ての社會的の位置を失ひ、彼の最も愛し最も憎んだ妻と娘とに振り捨てられて（或は振り捨てゝ）酒に醉ひつぶれて今夜私の前にゐるのだ。Bはからつぽになつて私の前にゐるのだ。
「酒飲まねえお前は偉らいよ（淫らなほどの哄笑）。俺らは酒飲んだどもなあ…飲まねえでゐるとこゝさ（胸をさしながら）何んだか詰つて、詰つて、苦しくなるでや。氣息がつまるでや……物がいへねえもの。だからお前は酒が物いふだといふべさ。……俺ら駄目なんだなあ……駄目なんだ、駄目なんだ。俺らころつと死ねば先づ……」
Bは突然醉ひから醒め切つたやうにしやんとなつて眼を見張つた。而して煌々と明るい灯の光の下でがたがたと震へ出した。片唾を呑まねばならぬやうな暫くの沈默の後、
「おい武郎（大きな聲）……俺らは死ぬのが怖いよ」
たじろぐやうな氣持にされた。小刻みに震へるBの大きな手が私の二の腕を最後の藁屑のやうに捉つてぶるぶると。……玄關でもBは死を云つた。……私は辛らく自分を制しながら、アルコールが何をいふかと自分を說き伏せた。私の腕は恐ろしい力で握り締められて行く。
「おい、お前ごまかしても駄目だでや……俺らもお前も、この地球も何んもかも、消えて無くなるのだよ。いゝか、これも、これも、あれもあれも皆んな皆んな……何一つ殘るべさ。皆んな破れてなあ……崩れてなあ……皆んな無くなつて、無くなつて、あとにたんだ一つ殘るものは……おゝ死だ、死だ、死だ。Death だ。……俺らはおつかねえ。何んも無え、何んもかも無え…… ごまかしてゐるんだ。人間は皆んな皆んな……俺ら何んも無え……死だ

けが、おい、確かなものはなあ死だけが……」

Bの手は力なく私から離れた。彼の首はくづをれた胸の上に埋まる程垂れ下つた。而して……Bはたうとう泣きはじめたなと私は思つた。私に取つては苦手だ。ごまかしでも何んでもいゝ、自分を救ふために、私はBに涙を拭はせなければならないと思つた。

夜は死の寂寞にまで深まつてゐた。思ひ出したやうに洟をすゝるBの激しい呼吸の外に、聞こえるものとては無かつた。私には咄嗟に云ひ出すべき言葉が不幸にも失はれてゐた。而してその代りに、酒で一時凌ぎの出來る奴はまだ幸福だと嘗て私の云つた言葉を思ひ出して、自己嫌惡を感じてゐた。その言葉は固よりBを酒から遠ざけようとする方便をも含んでゐたものにせよ、私のしら〴〵しく云へる言葉か……

突然Bの狂暴な笑聲が私の耳許で破裂したと思ふと、Bはその巖丈な兩腕を車輪に振り廻はしてゐた。

「何んの皆んな作りごとだてば……俺らは卑怯だ、ごまかしだ。泣いたな俺らは、今……さうだべ。俺ら酒飲んで醉つて、醉つたふりしてよ、何んにも無え……何んにも無え(哄笑)……ごまかしだ、俺らは駄目だ。……ここはお前の家で無えか。俺ら何しに來た。俺らは酒飲んだ、さうだべ。俺ら死ぬのがおつかない。お前おつかなく無えか。だから俺らごまかしてゐるよ。俺らこと可愛がるとお前……おゝ何んといふ僞瞞だ……何んといふ僞瞞……何んといふ僞瞞だ……俺らが僞瞞だといふ俺らが僞瞞では無えか。さうだべ、なあ。……おい何んとか云へ。(大聲に)何んとか云へ。……お前そんなところでごまかしてゐられなくなつたらどうする。どうする……どうする……」

Bの聲は段々低まつて、眠りこけてゆくやうに、眼を細めながら、猫背になつて、ゆるくはたげた下膊をテーブルにすれ〳〵に持つて行つた。而してけだるい微笑を顏一面に漂はして、ふら〳〵してゐた。

「今夜は晩いから寢たらどうだい」

私はその勢ひに乘じてなだめるやうにいひかけた。

「酒こ飮ませてけれや」

同時にBが、而して鎌首を擡げた蛇のやうに、屹と居直ると、充血して少しも動かない眼を定めてぢつと私を見入つた。

「無いよ」

「無えか……」

而して急にしらふのやうな調子になつて、好人物らしく、

「俺らペケ喰つてよ、女房に。だアめだ。俺ら略奪するかんなあ。女房の方に金こあつて、俺ら方に無ければ、俺ら略奪する。俺ら方に金こあつて、女房の方に無ければ、女房が略奪する。仕方無えで無えか。俺ら略奪した。二番目が生れたら秀子と一緒に連れて行つてしまつた。小樽さ行つた。……四日俺ら拘留された。ひつぱたくぞ、警察の奴。俺ら三度左の頬を拳固でひつぱたかれて……椅子から轉ろげ落ちたてば。俺ら何んも知らねえつて云つたべ。したら知らねえこと貴樣の仲間が知つてゐるかつて、ひつぱたかれた。腰の番ひを、こゝを、長靴で蹴られもした。營業停止を喰つて店さ歸つたら、女房はもう小樽さ歸つてゐた。……駄目だよ俺らは」

細君がBの爲めにどれ程苦しみながら愛したか、私はOから聞いて知つてゐた。又Bがどれ程細君を心の底で愛してゐるかも知つてゐた。けれどもBの捨鉢な行跡が募るにつれて、段々成長してゆく秀子といふ少女が、自然に受けねばやまないであらう恐ろしい父の影響を細君は忍んではゐられなくなつたのだ。彼女は二子を火事場から救ひ出すやうな氣持で、良人から離れて行つたのだ。それも私は知つてゐた。「何んも無え」とBがいふ時、

私はBの心の奥底を見抜くやうに思つた。
「君は子供も可愛いゝとは思はないのか」
さう私は聞いて見た。
「可愛いゝ？……俺ら知らねえ。……俺ら可愛いゝさ。可愛いゝ時は俺ら秀子と一緒に子供になつてよ、ころつころつと皆んな忘れて遊ぶども、……俺ら惡いよ、……ふつと氣がつくと俺ら何んといふ馬鹿を、何んといふごまかしをしてゐるだべと思ふと、胸が、こゝが（Bははだけて油ぎつた胸のあたりを平手で無性に撫で廻はした）かうなつて來て、俺ら地獄だ。俺ら秀子が見つたくなくなるてば……（段々狂暴に）俺ら……俺ら、い、い、い、いとなつてよ、……おゝ秀子、秀子は俺らによく似てゐるよ……俺ら男だとも、あいつが成長して、……おゝ武郎！お前俺らは惡黨なんだ。……秀子は今日も今もおがつてゐるのだから……あいつが大きくなつて見ろ。而して俺らのやうになつて見ろ……」
Bは頭に上げた自分の兩手に押しつぶされた。而してやゝ暫くしてから涙に震ふ小聲で呻くやうにさゝやいた。
「何んも無え……何んも無え――僞瞞もごまかしも何んも無えよう。俺らも生れた。秀子も生れた。そんだ、何んのために生れた。俺ら知らねえ。……人間の作つた神で無えか。佛でねえか。……人間が死んだら神も佛も何んも無えんだ。皆んな獨りだ。からつぽだ、なあ……」
彼はさういふ風にしみ〴〵と自分に云ひ聞かせはじめた。もう彼には私の存在などはあるやうには見えなかつた。
「責任……それも僞瞞だべさ。僞瞞だればこそ、皆んな責任を背負つて平氣で生きてゐるだべさ……いゝよ、いいよ、俺ら何んも解らねえ……俺らかうして酒飲んでよ、醉つてよ……いゝでねえか……俺ら責任なんか解らね

え。そんだもの重いよう。重くて、重くて、俺らにはかつげねえよう。僞瞞ださ……僞瞞だ？……俺らはごまかしがうめえなあ。世の中の奴等よりもつとうめえなあ。からつ〳〵と皆んな〳〵投げてしまつて、獨りぽつちになつて、略奪してゐるのだから……何んといふ僞瞞だ……おゝ、これ俺らの手でねえか……」

頭に上げてゐた手――西洋人のやうに白皙な而して西洋人のやうに大きな手――を徐ろに眼の前まで卸ろして來ると、Bは金魚のやうな出眼に涙を一杯ためて、しげ〳〵とそれを見入りながらまた獨語を續けた。その聲は自然に吠えるやうに大きくなつて行つた。

「おゝ手よ、手よ、……手よ……なんぼ俺らの手は……俺ら何んも無えどもな、この手がよう……手がよう……俺ら、俺ら……」

Bは烈しく興奮してゐた。而して一つの手首を他方の手で握り締めると、いきなり掌を唇に持つて行つて押しあてゝ、強く鋭く幾度も幾度も接吻しはじめた。さすがに私は涙を催して顏をそむけてしまつた。

Bの興奮は然し持續はしなかつた。掌で半分顏を掩うたまゝ彼は寢入つてゆくものゝやうに、うつら〳〵とテーブルの上に上體を凭せかけた。凡てのものを地の底深く引き込んで行くやうな夜の寂寞の中に……

私はBをどうたしなめやうも、どう慰めやうもなかつた。少なくともBは私より良心が足らないのではないのだ。Bは放埒といつていゝ程に捨てゝしまつた。私は吝嗇なほど執着してゐる。「何んといふ僞瞞だ」とBが叫んだ時、私は頭の頂點をたゝかれたやうには思はなかつたか。……やゝ暫くしてから私は靜かにBの肩に手をかけた。

「おい、もう寢よう。僕は君の言葉を聞いてゐるのがいやになつた。明日またゆつくり話さうぢやないか。……苦しいのは判るけれども……」

さういつて、靜かに肩をゆすぶつて見た。

暫くしてからBは夢から覺めたやうに、徐ろに顏を上げた。何事もなかつたやうな顏をしてゐた。

「何……苦しいのがわかる？……俺ら苦しんでなんどゐねえよ。お前に同情してもらふやうなこと俺ら今云つたべか。そんだ、云つた。云つたなあ。……俺らさうした男だよ。矢張り淋しくなつてよ。淋しいふりしてよ。お前のところさ來て略奪するべと思つて……おい、俺らに酒飲ましてけれ。錢こ無くなつたでや……營業停止を喰つてから。本屋の店をたゝき賣つたら八百圓になつた。いゝさ、八百圓ならいゝさ……本だけ千圓も入れたどもな……嬶に五百圓やつて、殘りで質さ請け出したら八十圓殘つたよ……もう無えよ、それが。俺ら今日山川のところさ行つた。お前は勞働問題を論ずるさうだが、お前にその資格があるか。お前は勞働者か。だら今日は何を働いて、いくら儲けたといつてくれた。山川は俺らのこと無政府主義だと云つた。俺ら何んも解らねえ。社會主義だか無政府主義だか、俺ら何んも解らねえ。俺ら今日も昨日も何んもしねえで、電車切符が一枚あるだけださ。山川より俺ら方が餘つぽど猾いべなあ。……お前俺らにだまされると馬鹿見るぞ。俺らもう駄目だてば、……面白いことは何んもねえ。何したつてお前、何になるべさ。よつく考へて見ろ……考へて見ろ……俺ら何んも考へられねえども……お前酒飲ませてけれや」

「解るよ」

私は眞劍な氣持になつてゐた。あすこまで落ちるのが本當だ。本當でないまでも當然だ。私も幾度あゝした恐ろしい影を、自分の生活の前途に描いたらう。然し私は今日まで踏みとゞまり、踏みとゞまつて來た。それが私の健全性から來たのか、不徹底さから來てゐるのか、私には疑へた。だから今の言葉は、私には異邦の言葉ではない。

「僕等のやうに過去の生活をうんと背負ひ込んだ人間には、君のはいり込んだ道は解るよ。然し……」

「解る？（Bは皮肉に聲高く笑つた）俺らにも解らねえことがお前に解るか。お前は藝術家だべさ、その點で。……ぼうつと頭の中で人間のこと考へてゐればそれでいゝんでねえか。

人間は生きるためにごまかしてゐる。

何んでも無えそれだけだ。

烏だ……烏だ。

人間は生きるためにごまかしてゐる……何んも無え……何んも無え……烏だ烏だ……烏だ……これ俺の詩だ。いゝ詩だべ。これ俺らが最後の詩にすべし。俺らもう詩も作らねえ。……皆んな、皆んな、……皆んな重過ぎるてばや……」

Bの眼は眼の前一尺程のところを見入るやうに睛が寄り合つて、顏一面には可憐な嬰兒をあやす時のやうな微笑が漂ひ始めた。Bの皮肉な高笑ひを聞かされた私は、自分の殉情的な言葉を悔いるよりは、彼が私を身近かにも寄せつけないのを感じて思はずいらだつてゐた。醉つたまかせに何を勝手な熱を吐くんだ。何んだつて私は人間並みにこの夜更けまでBのいふことを取り上げてゐなければならないんだ。お人好しにも程がある。さう思はずにはゐられなくなつて來た。實際「解る」なぞといつたのも思へば輕薄だつた。私は現在の氣持ちでどこまでも彼を處置すべきだつたのだ。玄關先きで思ひ切り彼をなぐり付けてやらなかつたのが謬りの第一歩だつた。私は自分の性格のなまぬるさをつくづく腑甲斐なく思つた。さう思ひ出すと私の眼の前で、目あてもなく微笑(ほゝゑ)みながらふらふらしてゐるBが、又おほそれた侵入者のやうに見えた。

「おいB、歸るなら歸つてくれ。寝るなら寝てくれ。僕はこれ以上君のお相手をしてゐるのはいやになつた。…

：歸るか、寢るか、どうする」

と睨み据ゑるやうに、いひ放つた。

さすがにBも改つた顏付になつて私を見た。而してむつとしたらしく、

「歸るさ……腹が減つたなあ……酒がなければ湯漬けを喰はしてけれ」

といふのだ。

私は怒りを以て立ち上つた。しかも私は何をした。一人殘らず寢しづまつた女中部屋の前を忍び足で、廊下傳ひに臺所に出かけて行つたではないか。腹の中では私はぶり〳〵腹を立てゝゐるのだ。手さぐりで電燈をともすと、能舞臺のやうな廣い臺所がきれいに片付いて寒々と私の眼の前に擴がつた。自分の家の臺所でありながら、何處に何がしまつてあるかを知らなかつた。私は戸棚を開けた。而して灯蔭になつた暗闇の中を手さぐりで、積み重ねられた茶碗や皿を撫でまはした。醤油入れに指先を突き込んであやふくそれをぶちまけようとした。右手はぬら〳〵に粘つた液で被はれた。躊躇もなくその手を寢衣の裾で拭き取つたほど私の氣分はいら〳〵してゐた。やうやくのことで給仕盆に、福神漬と茄子の辛子漬とを副へた食器を整へて、忍び足で書齋まで戻つて見ると、Bははだけた胸の合せ目から、兩手を素膚に突つ込んで腕組みして、思ひ入つたやうに俯向いたまゝぢつとしてゐた。私は無言のまゝ、投げるやうに食器を載せた盆をBの前につきつけた。而してすぐ寢衣の上前（うはんまへ）を灯の下であらためて見た。白い紀州ネルに、手形（てがた）をした古血色のしみがべつとりと着いてゐた。私はむず〳〵するやうな不快に襲はれた。

Bはと見ると、自分の前に据ゑられた食器に眼がつくや否や、頑童のやうなはしたなさで飯櫃から飯をよそつて、湯をしたゝかにかける間もおそしと口に運びはじめた。けうとい音を立てゝ彼は湯漬けをそのだらしのない

唇の間にかつこんでゆく。そのがつ〳〵した有樣は野獸に等しかつた。私は不快のあまりに眉根に縱皺を寄せてゐたらしい。その口のまはりに取りついてゐる飯粒は、湯のために粘り氣を失つてゐて、ぽろ〳〵と胸から膝前に落ちてゆく。床にも落ちることだらう。明日の朝氣がつかずに、足の裏にそれをにちつと踏みつける不快な感じさへが私にはいら〳〵と響いて來た。私は寧ろ呆氣に取られて、二杯三杯と立て續けに貪り食ふBの樣子を苦苦しく眺めてゐた。Bは餓鬼のやうに湯の最後の滴りを飮み終ると、

「食つたあ」

と云つて、からつと箸を投げ捨てたその手で胸板を二度三度撫でまはした。

この樣子を見ると、思はずも不思議なほゝゑましさが私の胸の底の方にうづついて來た。私はその思ひ寄らざる心の不意打ちをいま〳〵しく思つたけれども如何することも出來なかつた。何んといふ野蠻人だ、こいつは。何んといふ取りつくろひの無さ加減だ。私は自分の繩張りの中に平氣で侵し込む彼を惡みながらも、どうしても何時までも自分の不快を立て通す譯には行かなくなるのだ。

私は全く方がつかなくなつて、投げ捨てるやうに、

「B、もういゝかい。それぢや今度は寢る番だ。歸るのはやめて泊つて行き給へ」

といふより仕方がなかつた。

「俺ら歸る。俺らの働き口を探してけれ」

「働き口つていつたつて、働き出すが早いかいやになるんぢや迚もありやしないよ」

「そんだ〳〵。俺らぢきいやになるんだものなあ。……俺らどうすればいゝんだ。……死ぬのがおつかないてば、ごまかして生きてゆくより仕方がねえんだべ……そんだ……したら何んで俺ら働かねえんだ。……そんだ……俺

らずるいよ……何んとずるいんだ俺らは……」

少し顏色も平生の蒼白にかへりかけてゐたBは、あの淋しさに堪へない醉の醒めぎはの豫覺を感じ始めたのか、いかにも不安げに椅子から立ち上つて、おど〱とそこらを見廻はした。酒といふものから離れてゆく彼の姿には、獨り世の中に放り出された赤子のやうな不憫な樣子が見やられた。彼の心は、本當に孤獨なんだらう。この世の生活に夢を持つてゐる人が、執着の多い人が、最も死を怖れるやうに見えるけれども、考へて見るとさうではないのだ。彼等は死をさへ彩色することが出來る。Bにはそれが出來なくなつてしまつたのだ。とそれが私にはよく解つた。それを十分に思ひ知らせるやうな當惑し切つた姿をして、Bは居ても立つてもゐられないやうに、五十燭の煌々とした電燈の下に立ちすくんでゐた。

「さあ寢よう」

私はテーブルを廻はつて行つてBを促がした。

「俺ら歸るよ」

「けれどもう一時だ、電車もありはしないよ」

「俺ら歸るべ」

「眼鏡の脚が折れたね」

「刑事になぐられた時……堅えよこの合金は……折れた」

「さうか。……まあこつちに來給へ」

Bの歩みはふら〱しながら、その肩に置いた私の手の力のまゝに書齋を出て座敷に向つた。女中が寢る前に敷いておいた寢床は、十疊の眞中に小さく展べられてあつた。

なほ物足らなさうにしてゐるBをそこに殘して私は自分の寢床の方へ別れて行つた。母の休んでゐる部屋を通り過ぎて、次ぎの部屋にはいると、私のと枕を並べて二人の子供は熟睡してゐた。丹前を脫がうとして、寢衣の醬油のしみを思ひ出したが、それを着かへるのも物臭かつたし、第一不思議にそれがもう氣にならなくなつてゐた。

蟲だけが何處かで、細々と鳴いてゐた。私は寢床の中で、まじ〳〵しながらBの部屋の樣子を想像した。着のみ着のまゝで、夜着を被るとすぐ鼾になつた彼も考へられた。魂の拔け殼のやうに、懷手でもして蒲團の上につくねんと坐つてゐる彼も考へられた。兎にも角にも、その何れの姿でも憐れを誘ふものとして考へられた。けれども、そんな事に頓着なく、私の心の底には、自分自身に對する憐みと嫌惡との情が一緒くたになつて澱んでゐた。

眼を覺ました時は、次ぎの日の早い光が戶の隙間に射してゐた。眼を覺ますと共に頭にはBが浮んだ。朝からまたBと顏を見合せるのかと思つたら急に私は不快を感じた。あの無神經に他人の領分を侵して來るやうな物腰、それは考へたゞけで不快だつた。別れてしまふと、どうして不快な氣持を見せてしまつたらうと心から悔いられる癖に、會ふとなると不快な心の陰影なしには會へない、それがBに對して持つ私の關係なのだ。

それにしてもBは寢坊をするだらう。朝の氣持だけは亂されずに濟む。さう思ひながら私はそこらにゐた女中にBの樣子を尋ねて見た。女中は知らないで玄關番の書生が知つてゐた。

「二時頃でしたか、玄關の方に人の跫音がするので起きて見ましたらお客さんで、是非歸るから戶を開けろと云はれるのです。頻りとお引き留めしましたが、どうしても歸ると云はれるのでお歸しゝました」

さういふ答へだつた。

それを聞くと今までの不快に似ず、私は妙に淋しい氣分になつた。而してすぐ座敷に行つて見た。寢床も寢衣も手が觸れてはなく、明るくなつてゆく朝の光の中に電燈が薄黃色くともつてゐた。

私は暫くそこに立つたまゝ淋しい氣持で、行つてしまつたBの上を考へた。

（一九二三年二月、「泉」所載）

或る施療患者

無害な平凡な良民、それが私の生れつきだつた。世が世なら、私は生れたまゝの幼兒のやうな心でのんびりと育つて、特別な野心もなく、人を驚かす力量もなく、靜かなこの一生を靜かな墓場の土へとつないだことだらう。墓場――どこのでもいゝ、そこに行つてぢつとしてゐることを想像すると、今の私にも一番穩かな心が芽ざす。

けれども今の世は全く亂世だ。私のやうなものを氣違ひにしてしまふほどの亂世だ。私の生活とは何んのかゝはりもない飛行機が、大空の青いガラス板に三稜針でむごたらしい孔をあける。私の生活とは何んのかゝはりもない自動車が、淫亂な暗闇を窓被の內部に滿載して、白晝の大道をかまいたちと共に馳けぬける。私の生活とは何んのかゝはりもない……そのとほりだ。私の時といふものはない。私の處といふものはない。子供が親に孝行をする世の中だ。妻が良人に貞節を盡す世の中だ。畫かきが孕み女の裸體を描いてゐる間に、あの可憐な小雀どもは生れる間も遲しと自害する。名も無い雜草がそのほこりがに生ひ育つてゐる野の果から誘拐されて、見事な片輪に育てあげられ、貴夫人の胸に飾られ、その情夫との抱擁の間に、意味もなく燒け爛れて萎んでしまふ。誰でもが誰かに何かしなければ生きてゐられないといふのだ。それが森羅萬象に誓言として書かれてゐる。亂世でなくて何んだらう。

偖て私は生れた。

母は私を孕むために生き、産むために死んだ。蜘蛛の生殖でなく、人間のそれであつたためか、三年の間父は

母を生き延びた。而して叔母の家の藏前の三疊敷でしたゝか血を吐いて死んだといふ。それからもう一つ、父が死ぬ時、どこにどうして貯へてゐたか、二百圓といふ金を叔母の良人、卽ち私の憎むべく憐むべき命の敵に遺して死んだといふ。それは誰が私に話して聞かせたのだつたか判らない。然しさういふ傳言は空氣の務める役目らしい。何故なら空氣には口がないから、私が勝手にそれを吸ひこんでも、喜びをいひ不平をいふ口がないから。あとは白紙。幼兒。

よく稼げ、今まで育てあげた恩を思へ。「稼ぎやうによつては、ゆく〳〵俺の屋臺をお前に任せないまでも、暖簾を分ける位はしてやるかんな。」帳場格子の中にゐた叔父がかういつて、眼の中から、私が後年に名づけたところのサーチ・ライトをひらめかした。間口四間の雜貨店、立體が崩れ落ちさうに歪んで積み上げられ、色彩が午前の陽を受けて鬼ごつこをしてゐた。町會議員に似合はしい叔父の額の縱皺（右の眉を左の眉より高く見せる）、それが私の眼に燒きついた。私は嬉しくも何んともなかつた。垂氷が胸から喉にぬるりと持ち上つて溶けた。私は七つだつた。往來を私と同齡の誰彼が手を組み合つて通つた。カバンと辨當風呂敷とが誇りがほに跳つてゐた。その時だけは私も學校に行きたくなつてゐたのだ。

記憶は馬鹿々々しいことだけ大事に貯へてゐるものだ、死んだ息子の血だらけな肩章を佛壇の扉に縫ひつける婆さんのやうに。ごは〳〵した前垂れの紐を、角帶の結び目の上にかけて、そこを叔母がぽんとたゝいた。小僧のあとについて敷居をまたぐ時けつまづいた。そんな記憶が今でも私を不幸にしくさるのだ。

桃の花が赤くむせんでゐた。桑の木が繩のいましめから解かれて、その枝がすべて欠伸とのびとをしてゐた。晴れながら曇つてゐる暖かい空には、雌にはぐれた雄の憂鬱があつた。小僧は私を草生の岡に連れて行つた。そこからは海が見えた。帆があるので海といふこと、凧があるので空といふことがわかつた。

空と海とは本當に姉妹で、大地は腹ちがひだ。私は大地に生れた土くれだよ。それはその時考へたのではないんだが。

小僧はそこにゐる子供の一人から凧をひつたくつた。知らなかつたが彼は凧上げの名人だ。おまけに御用聞きの竹籠の中から「敷島」を出してそれを皆にわけて自分もすつた。あいつはおまけに謀叛人だつたのだ。私はいぢけてそれらのことを眼から一杯に呑みこんでゐた。……凧のうなりが空の遠くで……私は父母を思つた。

小僧は歸り道で色々な智慧を授けてくれた。私はあいつがどうして命の儉約をしてゐるのかを知つた。それであいつが兎に角活きてゆける譯がわかつた。けれども店に歸つたらあいつは私の叔父にがん〳〵怒鳴られた。叔父は小僧のして來たことを皆んな知つてゐるやうだつた。私は叔父に恐れをなした。小僧が馬鹿のやうに見えた。けれどもその翌日、あいつは叔父の知らないことを知つてゐて、叔父の小言と相殺しても、なほ十分利益のあるやうなことを私にして見せた。今度はあいつが利巧に、叔父が馬鹿に見えた。けれども私には小僧のまねは出來なかつた。

私は竹籠を背負つて歩かねばならなかつた。海苔の罐詰、荒神箒、龜の子たわし、淺草紙、サイダーの栓ぬき、割箸十本、おゝこはれ易い上海渡來の鷄卵、……それは病的な內臟のやうに私にこびりついて離れなくなつた。祭禮の御旅所のやうなものが私のために町のこゝかしこに定められた。そこに私は竹籠の神輿をおろして氣息をつくのだ。神輿は毎日私を引きずつて町中をとほる。音なく天の玻璃天井が裂けて、粉碎した破片が私を目がけて冷たく落ちる日も、途方に暮れて大空がすゝり泣く日も、やさしい太陽が飴のやうなとろりとした光で安息へと凡ての人をあまやかす日も、晝月のあるのにもかまひなく、烈風が膚からぬくみをさらつてゆく日も、……私の踵は道路と共にわれ裂け、樹木の喉と共に私は渴いた。私に親切なお內儀さんの家は破產して、因業な娘のゐ

るあの店は表町に發展した。さういふことを私は見た。或る日、私の小さい肩には血が滲んでゐた。私は夜寢る時、父親が血を吐いて死んだ三疊敷の小便色の疊をさすりながら泣いた。

私は人に對して抵抗するといふことを知らなかつた。だから私は嘘をつくことを覺えた。けれども私には小僧のやうな嘘は出來なかつた。私が十の時、あいつは十六だつた。あいつは始終「枕草紙」を懷中してゐた。十の私にも眼のくらむやうな色と線とがべつとりとなすりつけてあつた。あいつは私の見てゐる前で、私が愛したいやうな年齡の小娘を强姦した。本能がわな〳〵と震へた。私の喉は或る渴きでひからびついた。あいつの年になつたら……私は矢張り駄目だらう。豆本、叔父の收入から少しづゝくすねた小金で買つた豆本、それが私の戀人だつた。懷からそつと出すと、本の上下がさゝくれて末廣のやうに擴がつた。「宮本武藏」「猿飛佐助」「丸橋忠彌」「橘中佐」……その時、每晚眠むい私を打ちのめしていろはを敎へてくれた叔母に感謝すべきだつた。飛行機に乘れる世界は私にはそこの外にはなかつたのだから。私は御旅所で竹籠によりかゝりながら、身のまはりと豆本とを一緒くたに讀んだ。

黑の紋付と仙臺平の袴とが町會議員の叔父を夕方から深夜にかけてどこかに引つ張り出すことがあつた。金庫の鍵ががちや〳〵鳴る。黑い羽織に包まれて炬燵のやうな後ろ向きの叔父から發射されるサーチ・ライトが、さういふ時には短く鋭く叔母に向けられる。私は叔父を恐れてもゐ、嫌つてもゐたから、叔母を可哀さうだと思つた。叔父がゐなかつたら然し、私は叔母を恐れもし、嫌ひもしたことだらう。私は他人の家を內部から覗いた事はなかつた。私の天地では叔父と叔母とがいがみ合つてゐた。叔父と叔母とが小僧と私とを目のかたきにしてゐた。どこにも拔け穴はなかつた。だから私は自分をさう不幸な人間だとは思はなかつた。人間は皆んなかうして生きるのだと思つてゐた。今、私がその頃の私の肖像畫を心の壁に描いて見ると、そこにぽツつりと、小さな鼻つたら

しが、途方に暮れた顔付をして、足が土の上にへばりついて、默つて、ゆがんで、眼ばかり光らして立つてゐる。それでも、その頃、私は自分をそんな自分だとは想つてゐなかつたのだ。

おいくがこの家に貰はれて來た。顏の道具が氷りついたやうな八つの娘だつた。それは私が小僧に敎へられて自瀆に成功した十一の年だつた。おいくは叔父の緣續きだつたので、叔母が私を大事にし始めた。けれども私にもその位の理窟はわかつた。私は叔母を憎んだ。而してそんなことはどうでもよかつた。赤い色が……沓脫ぎには草履の鼻緖の赤が、衣桁には袖の長い小さな羽織の裏の赤が、物干竿には布巾程のゆもじの赤が、私の體內に不思議な毒素を滲み出させた。私は色素の意味を十一の時に初めて感じたのだ。

「おいくの草履をそろへておけよ」

飯のつまつた口から叔父がかういふ。

「おのきよ」

邪慳な聲と共に骨ばつた手が私の肩をこづき退ける。店の敷臺から土間に滑り落ちさうになつて手を延ばしてゐる私は、そのまゝ本當に滑り落ちようとする。おいくは出て行く、鞄と辨當箱とを邪魔物あつかひにしながら。何んのためにおいくなんていふ餘計なものが貰はれて來たんだ。

「龜、序でに土間をもう一遍掃いときな」

その時土間には塵一つなかつた。私は暗い中に、かじかんだ手に氣息を吐きかけながらそこを掃いたんだ。けれども私は尻切草履をつつかけた。けれども私は矢張赤を考へてゐた。おいくの持つて來た赤だつた。癪にさはるおいくだけれども、赤だけは失ひたくなかつた。赤だけ殘ればいゝのか。然しさうでもなかつた。

あゝ人間は一體如何して生きればいゝのだ。私は或る晩薄い蒲團の中に小僧とならんで震へながらかういふ會

話を聞いた。小僧は大きな鼾をかいてゐた。

「俺の知つたこつちやないよ」

「お前さんが知らないで誰が……しと、馬鹿にして」

「おいくを學校にやるんなら龜吉だつて……」

「うるせえなあ、俺ら龜なんか學校にやる義理合ひは無え……こゝに置くつてえせえが理窟の無えことだ」

「そんなに私を踏みつけにするなら……」

「あの出來損ひを學校に上らせたつて……」

「出來損ひだらうが何んだらうが……あれでも甥だから……」

「あいつのおやぢに俺らいくら金を無駄に捨てたか考へて見ろ」

「お前さん一人で作つた身代ぢやあるまいし……資金（もとで）はどこから出たえ……」

「何、資金ばかりで金がふえるなら俺ら明日から寢て暮す分よ。藝も無えことをこきやがるない」

「勝手に寢て暮すがいゝ。ぢや資金を返して貰ひませうか」

「又めそ／＼と泣きやがるな。……飲んだ酒が水に返らあ」

「お前さんはまあ……」

「しつ、大きな聲をするない、税がかゝらねえと思つて……おいくが眼をさまさあ」

「二言目にはおいく／＼つて……龜吉をどうしてくれる氣だえ」

「馬鹿……龜の野郎は大飯ばかり喰つてゐやがるぢやねえか」

そこで私は鼾ばかりになつてゐる小僧が羨しくなつた。私は本當に恐ろしくなつた。私は枕から頭を上げて、

どこと的もなく見廻はした。暗闇がもや〳〵と冷たく眼をふさいで、それが頭の中へ沁みこんだ。奥の間から聞こえて來る聲は私に向けて連發される散彈だつた。私には彈の意味などは解らない。恐ろしさに耳をふさぎたいほど聲では無くなつてしまつた。化物の夢を見た時するとほりに私は小僧をゆり起して見たが、この時は途中でやめてしまつた。私は闇の中に眼をきよろつかせながらすくんだ。

荒物が空中に浮いて積み上げられてゐた。品物と品物との間に隙間があつた。それでも品物は崩れ落ちなかつた。だからしんとして靜まりかへつてゐた。そのしんとした中に、荒物の堆積の中に、おやぢの手首から先きだけが現れて、五本の指をもや〳〵と動かしてゐた。品物が大きくなつてゆくと手だけが段々小さくなり、手だけが大きくなつてゆくと、品物は見る〳〵小さくなつた。私の考へが無氣味に伸びたり縮んだりした。寂寥がしんしんと澱みわたつてゐる。この夢は私を心の髓からをのゝかした。私はその時も小僧を起した。夢の話を聞かせるつもりだつたのだ。小僧が目をさますと私はすがり附くやうに私の夢をぶちまけたのだが、彼は怒るばかりだつた。而してすぐ寢がへりをうつて後ろを向けて、口小言をいふ間もなく鼾をかきはじめた。私はこんな場合によく小僧をゆり起したが、結果はいつでも同じだつた。だから叔父叔母のいさかひにおびやかされたこの場合にも、途中で斷念してしまつたのだ。

いつまでも寢つかれない。同じ部屋に枕をならべて寢てゐても、どうせ離れ〴〵で何んのかゝはり合ひもないものだといふことを考へた。それは前から思つてゐたことだつたが、この時ばかりは道理として考へたやうだつた。父とか母とかいふものがゐたらどんなものだらうかとも想像して見た。それは迚も分らなかつた。

それから一週間程の間、私はこの夜のことばかり考へていろ〳〵に迷つた末一つの決心をした。十一の頭に苦味丁幾のやうな智慧が湧いた。それは凡そ貯へ得るものは何にかゝはらず人知れず貯へるといふことだ。何より

貯へいゝものはおいくが散らかし放しにしておいた品物。

「おつかさん、あたいの青い鉛筆は」

「知らないよ」

「だつてあたい今こゝにおいといたばかりなんだもの」

「嘘おいひよ、いつでもいふのにお前は何んでもぶちなげてばかりゐるからだよ。いけすかない子だよ、自分でお探しなね」

あゝその苦澁い甘味、私は十一ながらに大泥棒と寸分ちがはない享樂をしてゐたのだ。竹行李の中の私の着替への疊み目のこゝかしこに、私の嘗て欲することも敢へてしなかつたやうなものが隱しこまれてゐるのを、人氣のない僅かなひまに盜み見る滿足さは、御用聞きの仕事を生甲斐あるものに思はせる程十分だつた。それは叔父だ。叔父が私にかゝる習慣を敎へこんだのだ。叔父のは金庫で、私は竹行李だといふ相違があるばかりだつた。

いつ放り出されるか知れない運命だ。その時の始末を今の中につけて置かなければ駄目だ。さう固く思ひこんだから、私はおいくから段々叔母へ、叔父へ、得意先へと私の略奪の手を擴げて行つた。

帳場格子の中に飛びこんで行つて私は見廻はす。往來を人が通つてゆく。然しそれは安全だ。この習慣がついてからいつまでたつても、かゝる場合私の心臟は痛いほど早く打つた。然しその底には冷たい覺悟の落ち付きを持つてゐた。叔母は茶の間で針仕事をしてゐる。而して叔父が小用を足しに立つたあとなのだ。縞目もわからなくなつた煎餅のやうな蒲團は私の裸かな足の裏にまだ暖か味を感じさせる。硯箱の抽出しは鍵がかゝつてゐないでする〳〵と開く。賣りための銀銅貨に小札が、帳場机の下の小暗い中で魚の皮のやうに光つてゐる。懷に入れると同時に私は素早く又見廻はす。何事も考へてはゐない。震へる有頂天だ。便所の開き戸がきしみながら開く。猿

飛佐助のやうに、私はもとゐたところに飛んで歸る。前からそこに坐つてゐた形を天才のやうに再現する。裾の折れかたまでを間違はない。

むつつりと叔父が帳場に歸つて來て、私といふ人間が存在するのを無視したやうに、にがり切つた顏を一應往來に向けて、何か考へ〳〵大きな眞鍮の煙管をひろひ上げる、それをそつぽを向きながらも見るとほりに感ずると、私の胸からは蟲唾のやうな安心がこみ上げて來るのだ。

見やあがれ！

けれども今から思ふと、そんな私だつたけれども矢張子供の一人だつたのだ。私にはこの叔父と叔母とが何んといつても結局はかけがへのない力だつた。あき〳〵する程小言まじりの長文句を聞かせたあとで、雪の朝の腹痛に對して一服の賣藥をくれるものは、この廣い世界に叔父夫婦の外にはやはりなかつたのだから。子供といふものゝあの神のやうな信頼の心、それは祝さるべきものだか、呪はるべきものだか私にはよくは分らないが、而して私一箇としては、それがあつたばかりに幾度も幻滅に襲はれて、その度毎に逆な方に飛び退いて行く結果になつたのだが、兎に角それが私にもあつたのだ。いよ〳〵力に餘ると、私の眼は不本意ながらも叔父夫婦の方に凭たれかゝつて行かうとした。

こんなことを書きつらねてゐては切りがない。私は十七になつた。私の町には二三年前から突然の變化が起つた。汽車が通じて停車場が出來たのだ。東京まで半日かゝつたのが四十分で行けるやうになつた。煉瓦工場と電機用磁器の工場とが創立された。而して私立の中學校が起された。私の叔父は勿論、二つの工場の創立委員になつて、歐洲大戰を背景とした經濟界のどさくさ紛れに乘つたものだから、忽ち一かどの地方的富豪になり上つた。而して裏に自分の邸宅を控へた西洋風の事務所を停車場前に造つて運送業を開始した。而して中學校の學務委員

に推擧された。「大きな聲をするない、税がかゝらねえと思つて……」とわめき立てた頭が、校務會議の上席どころに傲然ところがり出るのだ。

荒物屋は續いて經營されてはゐたが、それまでの叔父に取つての唯一の城壘であつたその店は、叔父の眼からも町の眼からもみじめなものに成つてしまつた。叔父の店は昔の街道筋の中心にあつて、四間の間口は一つの壯觀だつた。ところが停車場の入口は自分の前に一つの素晴らしい市街を吐き出した。そこの家並みに比べると、今までの叔父の店は裏町の小店に過ぎない。

おいくは勿論叔母と共に本店の方に連れてゆかれた。小僧がいつの間にか番頭らしい身なりをして荒物屋の方を預かることになつた。而して㊂運送店主の血脈を立派に受けた私は、小僧の小僧になり下つたのだ。「もう少しの間この店に佐太郎と一緒にゐて仕事を見ならふがいゝ、その中には何んとかしてやるから」

小僧め、佐太郎め。この男は叔父に丸めこまれて頭をひよこつかせてゐるやうに見せて、もう一つ大きく叔父を丸めこんでしまつたのだ。彼の年期修業は確實に效果を擧げた。彼は結局叔父が彼を使用したやうに叔父を使用したのだ。私に對して「龜さん」とさん附けにするところだけが叔父と彼とは違つてゐた。店を預かつてからの彼は、切つてかへしたやうに私に對する態度を一變してゐた。私も小僧時代の佐太郎らしく振舞ふべきであつたかも知れない。けれども私には十一の少女を强姦してそれをそのまゝ消しかくすやうな過剩精力と不敵さとはなかつた。彼と軋轢すると私はごり〳〵と擦りへらされた。

たうとう我慢の出來ないことを私は發見した。高等小學に通つてから裁縫の稽古にまはるおいくが、裁縫をすつぽかして私の店に上りこむやうになつた。今日はおいくが來るなと靈感する日に限つて私には大急ぎで品物を遠い得意先にとゞける用が出來てゐた。私は燃えた。私はおいくを憎んでゐた。叔父の家の次の時代の由々しい

競爭者であるからといふよりも、天然自然に憎んでゐた。しをれかゝつた草は容赦なく寒い北風を憎まないか。おいくは北風のやうに冷淡で、自分勝手で、傍若無人な奴だつた。私は後年あいつの肖像を、往來を歩いてゐる藝者といふものに見出だした。金で賣買する眼だ、金のない奴を見てゐてたまるものか、見られたければ金を拂つて見られに來いといふ廣言を吐き散らして、あの魔性は私のやうな生活の劣敗者の傍らを人もなげに通り過ぎて行く。さもしいことには違ひない。何んのかゝはりもないことには違ひない。けれど彼等が、塵ほどでもいい、潤ひをもつた眼で私を見たら、私はそればかりで瞬間たりとも暖まることが出來るかも知れない。……馬鹿な……彼等もあの眼で食つて行かねばならぬのだ。私はあの無關心に同情すべきなんだらう。けれどもおいくはさうしたものを性格的に持つてゐるのだ。末恐ろしい少女だつた。末恐ろしいといつては賞讃になる。兎に角私に取つては憎むべき女だつたのだ――さうだ、心臓といふものを取り落して生れて來た女だつたのだ。

今になつて思へばおいくも亦憐まるべき女なのかも知れない。

それにもかゝはらず私は燃えた。佐太郎づれに見かへられたゝめに燃えた。勿論それは理窟として謂れのない燃燒だ。輕蔑してゐる男と、憎惡してゐる少女とが、どんなことをしようと私の知つたことではない筈だ。おいくが私に眼もくれないのは當然だと私の方から思はねばならぬことなのだ。それにもかゝはらず私は劣敗者として私自身を感ぜずにはゐられないのだ。而してその外にも私は燃えた。恥かしながら私はおいくをも異性といふものゝ中に數へてゐたからだ。極めて臆病で控へ目な私に取つて、私のその頃の生活にとつて、異性といふものはおいくの外にはなかつたのだ。

私は歩きながら失戀者のみが知るらしい悒鬱に襲はれた。而かもそれは卑劣な失戀者の、失はれたといふよりは奪はれたといふ意識に動かされる苦惱である。凡ての場面が最大級の誇張を以て、あやしい力で張り切つた私

の神經をそゝり立てるのだ。

而して私は幾度佐太郎とおいくとの祕密な場面の祕密な觀客であり聽衆であつたらう。私は一日々々と墮落してゆく自分を意識しながら忌むべき冒險の犬となつた。

而して誰が見ても單純な少女に過ぎないおいくが、强制的な誘惑に打ち負かされたものゝ如くに、佐太郎に對する彼女の誘惑を成就した日、私は自分のこの家に於ける運命が明かに定まつたのをはじめて覺ることが出來た。おいくはおいくの道を、佐太郎は佐太郎の道を歩んでゐたのだ。佐太郎は㊂運送店の二代目となるべき祕密の鍵を確實に握つたにちがひない。叔母の反噬もゝう恐らく無益だらう。

佐太郎が私の位置にゐたら、佐太郎を起き上り得ないほどたゝきのめすのはこの場合を逸してはならなかつたらう。私もその時叔母への耳こすりを思はないではなかつた。けれども佐太郎を向うにまはしては所詮敗北を見拔かない譯にはゆかなかつた。一歩踏み出す前にいつでも一歩たじろいでゐるのが私の持つて生れた弱點だ。

私はやはり土藏の前の三疊に寢るのだつたが、床につくとすぐ淚がこみ上げて來た。私自身が、處女性を許した純潔な少女の感じさうな馬鹿々々しい感傷に陷つてゐた。他人の家庭に垣間見たところや、豆本の中の傳說から、父母といふものゝ幻影を作り上げて、それにしがみついて、自分の不幸な生ひ立ちを歎き訴へた。父が死んでから既に十五年、その前に何年使はれてゐた疊なのか。だからそれは秋風の過ぎた草原のやうにさゝくれてしまつてゐた。その部屋も見納めかと思つたりした。晝間の中に帳場から持つて來ておいた蠟燭に灯をともして(そこには電燈もひいてはなかつたのだ)行李の蓋の中に立てゝ奥の間に光のゆくのを遮つて、行李の中を整理しはじめた。盜み貯へて札にかへたものは三十圓足らずであつた。叔父のハンケチ、角帶、叔母の帶留、西洋手帳、おいくの簪、手柄、文房具、繪本、……それと着換とを風呂敷に小さく包みかへた。帳場の賣り溜めが三圓近く

そのまゝになつてゐた。その中から音を盜んで札だけを拾ひ取つた。
十二月二十三日。もう雨がやんだなと思つて納屋の方に通ふ戸を繰ると、雪に降りかはつてゐた。
「龜さんか」
聲の釘が耳にさゝつた。私は思はずそこに手をやつた。
「今頃何んだつて戸を開けたりするんだい」
「なあに、晩に蓆を取りこんでおくのを忘れたから……雪になつたよ」
「雪になつたつて」
「あゝ」
今でも、今でも「あゝ」と薄ぼんやりいつた私の憐れな聲を自身で忘れることが出來ない。父が血を吐いて死んだ三疊の間から往來までの私の足跡は、驚いてかけつけた叔父や叔母やの眼の前の雪の上に、なだらに凹んで痕づけられてゐたことだらう。
私は東京に來てゐた。
何んのために東京に出たのか、私には今でも分らない。東京は若いものに取つての宿命であるらしい。東京は私を入れたけれども、私を入れないところだとはその時は知らなかつた。須田町の交叉點に立つて赤い旗と青い旗とを魔術のやうに振り動かしてゐる黑裝束の男を見てゐると、私は譯もなくいら〳〵して電車線路の中に飛びこみたくなつた。
私は手近かなものを掴んだ。撒水夫になつた。山の手の或る町に撒水車を引つぱりながら、私と同じ姿をした青年が撒水車を引つぱりながら、私のその時歩いてゐた同じ地點を歩いて、私と同じことを考へはしなかつたか、

又考へることがあるのではならうか。その青年が私にも思はれた。私がその青年にも思はれた。それはまだ戰爭後の不景氣の攻め寄せて來ない歳の暮れだつた。よく〳〵の能なし猿でなければ、私の年頃で撒水夫になる男などはなかつた。

冬だから朝は九時過ぎで、午後は四時には切り上げることが出來た。朝、詰所に出かけて、地面にぶちまけた炭火にあたつてゐると、水洟が落ちても氣のつかないやうな老人達が寄つて來た。どれが私の父だらうと思つた。

「お前その若さで、何かい、讀み書きの方はからつきしいけねえのかい」

十八の春から夜學に通ひはじめた。私の頭は然し壞れてゐた。豆本や人情倶樂部の持つ興味は算術や讀本には見出だされないのだ。而してその敎師、補習夜學科の敎師は疲れ切つた半老人か、牛鍋に一つでも多く、女郎買ひに一度でも餘計ありつかうといふやうな生意氣盛りの小學校の敎師で、それが時間をつぶすために目あてもなくしやべつてゐるのだ。私はすぐ倦きた。もう規則正しく頭を使ふ習慣は綺麗にゑぐり取られてしまつてゐたのだ。全く私は興味といふものを去勢されてしまつてゐた。

ふとしたことが私を勃起させた。それは撒水夫の地獄なる八月を過ぎてからのことだつた。ふとしたこと――世の中の人がさう呼ぶから私もさう呼ぶのだ。或る暑い日の午後二時頃、私は餓ゑと渴きとを感じてゐた。腹はこしらへておかぬと駄目だと仲間から聞かされてゐたが、私はそれだけの金を持ち合せてゐなかつた。八分目もまだ水の殘つてゐる車を引いて四谷の或る坂を登つてゐた。黃色に火で敷きつめた道路は、濡してはいてゐる草鞋を忽ちにから〳〵に干しあげた。上體を梶棒にあてがつて前の方にのめらす度毎に、大粒な汗が地面に落ちて、それが飛び上るやうに、砂にまみれて小さな泥球になつた。眼がくら〳〵した。私は喘息やみのやうにその坂道を千鳥に縫つて登りながら、一と足ごとにその泥球の五粒六粒が眼の前に出來るのを他人事のやうに見やつてゐ

た。地球が急に高まつて、脳味噌がそれに吸ひこまれてゆく。世界がしん〳〵と引きしめられた。餓ゑの結果が來たのだ。坂の上まで登りつめればどうにかなるだらうが、けれどもゝう駄目だ。立ち留つて氣息を吐かうとすると同時に、私の車は私を後ろに引きずりおろしはじめた。それは復讐のやうなきびしい力だつた。私は死ぬのだと明かに思つた。而してさうしたいと望んでゐたやうな膝を地面についてしまつた。梶棒に煽られて、私は後向きに彈ね返された。大地が車の中の水を貪つて吸ひ込んで黑く笑つたらうなと思つた。私は白日の下で卒倒した。

このふとしたことで、私は東電の技師の岡田といふ人の家に運びこまれた。岡田とその細君とがその場に通りかゝつてゐたのだ。私は空氣のやうに輕く思つた。それだけ蒲團が軟らかだつたのだ。岡田夫人が私の額の濕濕布をしかへながら、私の父母について尋ねた。答へることの出來ない私は、夫人の世にも稀れなる眼の潤ひに全く魅せられてしまつた。私は全く純靈的だつた。このまゝ死んだ方がいゝと思つた。人はそれを必要としない程の生命の危機に陷つた時にのみ、美しい瞳の色を惠まれるものらしい。つまり美しい眼は體のいゝ死の宣告なのだ。

全くあの時死ねばよかつたのだが……

一體人間は誰の許しがあつて美しい女性を專有する權利を持つてゐるのか。それに心を動かされるのを他の人に拒む權利を持つてゐるのか。こんな簡單なことが世界中の人間に分らないとはをかしなことだ。

粉のふいたやうな彈力のある白い……薄桃色の……私には云ひ現はすことの出來ない色の皮膚、暖い雪があつたとして、それが圓い地表に疵なく降りたまつて、茜を照りかへした、それでも寒い、そのふくよかな高低に圍まれ、凡ての表情を兼ね備へた眉に護られた眼。そこに溜りきつた潤ひ。いかなる姿の水もその潤ひの前には固

體に過ぎない潤ひ。……誰が私を信用するだらう。私は馬鹿だ。

私は實物のその眼を盜んで三日ゐた。私はその眼の持主が造つたソップを啜つた。それは私の血になつた。

南に向いた格子窓の前には三尺幅の露地を隔てゝ、三階建の下宿屋の板壁が終日陽を遮つた。その板壁に沿うた泥溝からは糞臭と糠蚊とが黑くなつて滲み出た。その借間に人力車で送りかへされた翌日、私は叔父夫婦やいくから盜み取つた品物を、その家の持主に與へてしまつた。彼等はそれと引きかへに粥をつくることだけを私のためにしてくれた。

然しそのことがあつてから、どんな思ひもかけぬ現象が起つたか。私の貯蓄は、岡田夫婦から惠まれた金まで、見る〳〵失はれてゆかねばならなかつたのだ。つまり私は白い齒を見せたのだ。第一には、たつた一人で木賃に住んでゐる盲目の老婆が現はれた。次に、良人におきざりを喰つた、乳呑子を抱へたお內儀さんが現はれた。怪我をして働きに困つたといふ五十がらみの土工夫、横根の注射をしたら全身に病毒がひろまつて困るといふなま靑い靑年、凡てが相當の不運を以て、凡てが相當の理由を以て、凡てが相當の圖々しさを以て。而して私はそれを拒むほどに意志强くもなく幸福でもなかつたのだ。出入りにつけて巡査に睨まれず、又交番につき出されもしない財源を、小ひさいながら彼等は私に見出だしたのだ。彼等に私は憎しみと好意との兩方を持つことが出來た。何故なら彼等は私の貧しいといふことを知らないではないのだから。而して同時に彼等は私が彼等の仲間でないといふことを知つてゐるのだから。

實際私は彼等の仲間にはなりたくなかつた。誰がなりたがる奴があるものか。然し私を追つて來るものがある。一步逃げのびると一步追ひせまる。右にかはすと右に、左にさけると左に。夢の中で見慣れてゐたものが現實に現はれたのだ。おゝ而して岡田技師の安穩な生活、そこから生れ出た岡田夫人のあの濕ひある眼の蠱惑。

學問に失敗した私は、底無しの泥沼から這ひ出るためには手職を覺えねばならぬと思つた。私は岡田技師の周旋で或る電燈會社の火夫に採用された。一日おきの夜業までして私はじたばたした。少し金がたまると私は泣かされた。而して吸ひ取られた。どれ程完全に手職を覺えたところがそれが畢竟何になる。岡田技師はどうしてああした安穩な生活が出來るのか。彼等はどうして私から吸ひ取つたりして平氣で活きてゐられるのか。不運故に孤獨になつた私は、不運故に孤獨になれないのだ。

私はたうとう女を買ふことを覺えた。手の屆かない所にゐる美しい女を見ると、私はその衣裳の柄までを綿密に記憶しておく。而して汚れ切つた女を抱きにゆく。そこには澤山私自身の複寫がゐた。彼等は私を緣にして彼等の遂げ得ざる戀を夢みた。私も彼等を緣にして同じことをした。美しい夢が誰にも知られずに踏みにじられる欲情の遂行。

私はそこに或る女を發見した。それは姉に等しかつた。彼女は私の望むところの凡てを知つてゐた。而して彼女の能ふかぎりそれを滿たしてくれた。何んにも持つてゐない彼女がどうして私に與へることが出來たのか、それは今でも私にとつて一つの不思議だ。彼女のすることゝいつては默つて考へこむことだけだつた。私が怒つても笑つても彼女は靜かに考へこむ。唇を求めれば素直にそれを與へ、胸を求めれば素直にそれに巣喰はせた。彼女は暖かみを見せない程に暖かく私をいだいてくれたと私には思へた。

孤獨ではないといふ意識……生れてはじめての……私は有頂天にならずにゐられようか。

けれどもその有頂天はこの世に對する希望を私に回復したか。私は生甲斐を感じたか。反對に私は無力を感ずるばかりだつた。私のなし得るどんなことでも、彼女の沈默に閉ぢられた悒鬱(いふうつ)を癒すことは出來ないのだ。私は彼女によつてたしかに運命づけられた。

唯うつら〳〵とするやうな朝夕が私の眼の前に續いた。その間に時折り、一閃の火で全存在を空に歸する爆彈の形が私の眼の底にひらめきはじめた。何に向けて投下さるべきだか知らない。けれども何かに向けて……而してその壞滅するものゝ中には常に私自身が加はつて……

秋口、小春日和といふやうな日、私は汽罐室の外の煉瓦壁にうづくまつて非番の五體を丸めてゐた。市街の騷音が或るリヅムを以て空中に漂ひ、櫻の落葉が折り重なつて小さな工場の草原にしめやかな匂ひをたてゝゐた。排出される蒸氣の匂ひがそれに交つて鼻をかすめた。餘りに乾燥した空氣の爲めか私の頭は重く、咽はかさ〳〵してゐた。私は手で頭を支へながら地面を見た。ひそやかにぬくまつた土の上を收穫に忙がしい蟻共が、落ちて死んだ蟬に寄りたかつてゐた。

痰が出たと思つた。咽がなまぬるくなつた。それを地面に吐き捨てたら鮮明な血液だつた。私はすぐ癖だといつて始終はつと思つた。その瞬間に私は靑ざめた。靑ざめたのが自分にはつきりわかつた。私はすぐ癖だといつて始終血を吐いてゐたあの女を思ひついた。……癖ではなかつたのだな……。

どうして私は死を怖れなければならないのか。兎に角私は油じみたハンケチを口にあてがつて、出來るだけ靜かに立ち上つた。脚は既に絞首臺に登る死刑囚のやうに激しく震へてゐた。もう一度喀血が來たら、五體中の血を吐き盡してそのまゝに散亂するだらうといふ豫感は心臟に血を逆流させた。

私はその場で火夫をやめた。勤務日數が規定に足らないばかりで手當ては貰へなかつた。

醫者は第二期の結核で養生一つで治る性質のものだといつた。自分の感じからいつてもさうに違ひたかつた。けれども……

世の中が急に私から立ち退いて河の向岸に立つてゐた。一ケ月遊んで醫者に通ふ間に私の貯蓄は根こそぎ無く

なつてゐた。
　行李から夏物を取り出して質屋に運ぶことを考へてゐる時、袂の中から皺をかんだ印刷物が出て來た。社會主義の宣傳ビラだつた。津守……私はその名をあてにして淺草へと足を向けた。
　巡査教習所にゐて大膽な宣傳をしたゝめにその筋から餘計睨まれてゐるといふ津守、彼は慓悍な男に見えた。
「肺病位で腰をぬかしてどうする……然しまあころがつてゐ給へ」
　さういつて彼は振り向きもせずに書きものをしてゐた。
　私はいはゞ寒い感じのするそのだゞつ廣い家に拾ひ上げられた。三人の同志は始終酒を飲んで、私には解らないやうな言葉で談り合つてばかりゐた。
「そんな箆棒なことがあるものか。その岡田つてのに談判して治療代も出させるがいゝし、叔父にだつて手傳はせるさ。……こつちは金にはいつでも困つてゐるんだからな」
　津守には得體の知れない女がゐた。その女は金の指輪を二つもはめて、仕出屋から料理を取りよせてゐた。
　或る晩一言二言云ひ爭つたと思ふと津守がいきなりその部屋につめかけてゐた同志の一人のどこかをなぐつた。私は次ぎの部屋でそのはげしい音を聞いた。
「出て行く出て行かないの論ぢやない。この家の借主はお互ひ皆んなぢやないんですか。……あの女を置くのを惡いといふんぢやないさ。けれどもあの金の使ひ道はどうしたんだ、雜誌に使ふつて君は……」
「それがどうしたといふんだ。そんなことを云やあの原（私の名は原龜吉だ）は何んだ。主義もへちまもないものを引張り込んで藥代まで拂つてゐるんだよ。僕等は慈善家の集まりぢやないんだよ。一橋、君があれを置けつて主張したんだ。原についちや君が責任を負ふがいゝ」

「負ひませう。その代りあの女もあなたが責任を負つてどこかに追ひ出してもらひたいもんだ。屁理窟ばかりこねやがつてちつとも譯はわかつてゐやしない。……妾なら妾でいゝから外に圍つてもらひたいもんだ」
「一橋、君は何をいふんだ……貴樣の犬だつてことはちやんと前からふんでるぞ」
亂鬪、亂打、亂罵。
一橋は憤激してゐた。津守のことを純然たる勞働ブローカーだと罵り、岡田のことを典型的なブルジョアだと蔑んだ。私は他の同志の口添へで、一橋が叔父からの返事を齎らすまで津守の家に寢てゐた。何んといふ屈辱だつたらう。私は存分の腰拔けに過ぎない。ブルジョアでもないものがブルジョアを賴み、主義者でもないものが主義者を賴むとは。けれども岡田は每月三十圓を惠むことを約し、同志の人は見かけによらず、私に牛乳と暖かい粥とを作つてくれた。而して私と心おきのない冗談を交へてくれた。けれども凡ては私の心を針で刺した。
私の病氣は段々重くなつてゆくやうに見えた。潛熱が五臟六腑に籠つて生命が無益に燃えかすれてゆく。今の中に養生をすれば私は生き永らへることが出來るのだけれども……おゝ岡田夫人の眼が……
一橋は更に憤激してゐた。叔父は高利貸以上な奴だといつた。勝手に家を出た奴だから緣戚でも何んでもない。世間體もあるから二十圓づゝ支出しよう。而して私が大島に行きたいといふのを聞いて最小限の旅費をよこしたさうだ。
然し私は叔父なればこそと思つた。叔母に對する一種のなつかしみさへが芽ぐんだ。私はその金を受け取るべき少しの權利をさへ感じた。
大島に上陸した時、私は自分の運命の拙なさを自分であざ笑ふ外はなかつた。稀有な荒れが私の船を襲つたのだ。私は氣體を失つたゴム風船のやうになつて、美しい汀にへたばつてゐた。

相當の滋養品と金とを持つて、そこに一年を過ごし得る私を考へて見た。この簡單に想像され得ることが、然しこの地球の上では金輪際實現され得ないのだ。そこには三原山がある。その巓の薄い噴煙、中腹に延び上つた畑と放牧地、而して絲のやうにほつれた小道の綾、つや〳〵した厚い葉に繁る椿と柑橘、而して石塀に圍まれて平和らしい人家、而して新鮮な魚と牛乳。誰の享樂をでも待ち望むやうな空と海。私は凡てが準備されてゐる地の上に立つてゐるのだが、或る脅威はその凡てから私に迫つた。貧しい私には、而して航海の爲めに極度に健康の打ちくだかれた私には、いゝ醫者を頼む外に頼むものはない。

私はそれでも我慢して一ケ月をそこに過ごした。思つたより健康は囘復したかに見えた。けれども岡田からの三十圓は、恐らく津守の手で半減されて私の手に屆いたが、叔父からは直接に一通の手紙が來たばかりだつた。要するにそれは叔父のいひさうなことだつた。都合があつて月々の手當は送れなくなつた。歸つて來たら手許に死ぬまでおいてやる。

「あまねく神佛に願を立てたがお前の病氣は難病で見込みなしとのこと故そのつもりでおいで可有之候。」

私は叔父の家で死なう。

私の產屋であり、父の死場所である土藏前の三疊に私は重たい頭を枕に埋めた。あれから五年になる。而して私の逃亡した十二月二十三日は眼の前に迫つてゐた。

叔父の家に歸る時、私は岡田の補助をことわつてしまつてゐた。

店には滋養物の罐詰や瓶詰が、私のゐた時のとほりにあるはずだ。けれども私の三度々々口に入れるものは、外國米の粥と梅干が而かも一つきりだ。それをおいくに出來た赤子を背負つた小女が、ざら〳〵と膳をかしげておいてゆくのだ。佐太郎だけが時々顔を見せた。あいつの枕草紙はどうしたか、それをどう探りやうもない風な

顏を彼はしてゐた。私と話する少しの間でも彼は金儲けの事を頭の中で不休の機械のやうに思ひめぐらしてゐるのだ。

骨までしみ通る程十分寒くなつてゐた。然し寒さで寢つかれない程私の夜着はみじめだつた。

父もかうして死んだのだらう。血を吐いて……私は泣くまいと思つても泣かずにはゐられなかつた。

意氣地のないのは私の性分だ。意氣地のない人間は惡人でも善人でも、のたれ死にをすればそれで天道が立つのか。それならそれでいゝんだが。

「叔父さん……私はちよつと聞いたやうに思ふんですが、おやぢが死ぬ時、二百圓とかをお前さんに預かつてもらつて、私が一人前になつたら……渡すやうに賴んだとかつて、そんなことがあつたら……」

「ふむ、あつた、それやあつた」

「あつたらこの際……」

「箆棒な……十七の年までお前を養ふにいくらかゝつたと思ふ。こつちで釣錢を貰ひたい位のもんだ……今度のかゝりだつて、お前、なみ大抵のことぢやあるまいし」

私は思はず飛び上らうとした。叔父の不規則な眉を割る縱皺が焦り返つた私の憤怒をもたじろがした。得物もなく飛びかゝつたところが……

「人間てものは恩を知らねえぢや立ち行かねえよ。お前のおやぢはおやぢとして、お前は三つの年からこの家で手盥にかけられたんだ。それを何不足でか勝手に飛び出しちまつて……こんなになつてからに又轉がり込むのは、つまり得手勝手といふもんだ。叔母さんが彼れこれいふから俺も見ぬ振りはしてゐるものゝ……」

私は堰き上げる淚を飮みこみ〳〵、半時間程この叔父の談義を聞いた。

私はすつかり分つた。悲しいことだがすつかり分つた。實際この世の中では踏み倒して生きる外には生きやうがないんだ。私はそれを前から知らないではなかつた。けれどもそれと併行するもう一つのものがあると思つてゐた。……そんなものがあるものか。「情けは人のためならず」だ。

岡田や岡田夫人のなまぬるさよりも、私は叔父やその高弟佐太郎の徹底さが無闇にうれしくなつてしまつた。私の二十二のどんづまりに來て、私は始めて世の中といふものに眼が開けたのだ。

そこには五燭の電燈がひかれてゐた。細い鋼線が血のやうに燒けて、かい卷きにかゝつた私の氣息が薄く露となつて凝つてゐた。私は泣きじやくりながら又三疊の疊を撫でまはした。父の血が深く染みこんでゐるに違ひないその疊を。恐らく不徹底な人情といふものを持つて生れた父、從つて弱い父、從つて他人に厄介をかけねば死ねなかつた不義理な父は、死ぬ間際に、私のその夜叔父のおかげで開いた尊い悟りを感じて、後悔したのかも知れないのだ。

叔父は叔母をこゝには寄せつけないのだらう。それもよく解る。何にもかも私には全く無關係だつたのだ。岡田夫人の眼も、あの肺病の女の姉らしげな抱擁も、だから私は遂に飽くことが出來なかつたのだ。

その翌日、私は佐太郎だけに挨拶をして家を出た。箒の柄を切りちゞめた一本の杖が私の肉體の大切な一部分になつてゐた。生きるのが望ましいのではない、死ぬのが怖ろしかつたのだ。

岡田に私の寄留屆を證明させた。無能力の貧人が入院する公立の肺病療養所に、東京在住の證明がいるのだ。而かもそれは東京に住居する相當の人間が證明しなければならぬといふのだ。行旅病者は野たれ死をしろといふに等しいことだ。私は岡田にそれをさせた。してもらつたとはもういふまい。

大晦日近い寒さの中に、――さすがにさういふ時には入院志望者は少ない――私は二時間以上もがらんとした

患者待合室で待たされた。私はそこで寒さのためにがた〳〵と震へてゐた。世界中の人はそれを知るまい。何を私はひとりで不幸なものらしく威張つてゐるのだ。それは私が意氣地がないから、自分をありとしあるものゝ中で一番不幸なものらしく思つてゐるのに過ぎないだらうけれども。

廊下を一人の重患者らしいのが看護婦に運ばれて行つた。薄ぎたないシーツが頭からかぶせられてゐた。私がそれを死人でないと知つたのは、その擔架が看護婦の手から落ちかゝつて、患者がかう云ひ出したからだ。

「おたのみ申しますよ。かう見えても此の雪の山の下にキンが二つ、タンもしこたまあるんだからね」

看護婦は色情狂のやうにげら〳〵笑つた。

あの駄洒落は炭鑛夫だらうか。あの聲は喉頭結核だらうか。私は胸がつまつた。

私は決心した。無害な平凡な良民であるべき私は決心した。治るといつたら治つてやらう。而して亂世にふさはしい立派な人間樣に生れ代つて、やれるところまでやつてやらう。治らないといつたら……さうだ私はいつか爆彈の空想を描いたことがあつたが……

（これはその施療患者の手記ではない。彼の話さうとするところを私が不完全ながら筆記したのだ。）

（一九二三年二月、「泉」所載）

たうとう勃凸は四年を終へない中に中學を退學した。退學させられた。學校といふものが彼にはさつぱり理解出來なかつたのだ。教室の中では飛行機を操縦するまねや、活動寫眞の人殺しのまねばかりしてゐた。勃凸にはそんなことが、興味といへば唯一の興味だつたのだ。

どこにも行かずに家の中でごろ〳〵してゐる中におやぢとの不和が無性に嵩じて、碌でもない口喧嘩から、おやぢにしたゝか打ちのめされた擧句、みぞれの降りしきる往來に塵のやうに掃き出されてしまつた。勃凸は退屈を持てあますやうな風付で、濡れたまゝぞべ〳〵とその友達の下宿にころがり込んだ。

安菓子を目茶々々に腹の中につめ込んだり、飲めもしない酒をやけらしくあふつて、水のしたゝるやうに研ぎすましたジャック•ナイフをあてもなく振り廻したりして、することもなく夜更しをするのが、彼に取つてはせめてもの自由だつた。

その中に勃凸は妙なことに興味を持ち出した。廊下一つ隔てた向ひの部屋に、これもくすぶり込んでゐるらしい一人の客が、十二時近くなると毎晩下から澤庵漬を取りよせて酒を飲むのだつたが、いかにも齒切れのよさゝうなばり〳〵といふ音と、生ぬるいらしい酒をずるつと啜り込む音とが堪らなく氣持がよかつたのだ。胡坐をかいたまゝ、勃凸は鼠の眼のやうな可愛らしい眼で、强度の近眼鏡越しに友達の顏を見詰めながら、向ひの部屋の物音に聞き耳を立てた。

「あれ、今澤庵を喰つたあ。をつかしい奴だなあ……ほれ、今酒を飲んだべ」
その澤庵漬で酒を飲むのが、あとで勃凸と腐れ緣を結ぶやうになつた「おんつぁん」だつた。
いつとはなく二人は帳場で顏を見合すやうになつた。勃凸はおんつぁんを流動體のやうに感じた。勃凸には三十そこ〳〵のおんつぁんが生れる前からの父親のやうに思はれたのだつた。而してどつちから引き寄せるともなく勃凸はおんつぁんの部屋に入りびたるやうになつた。
「まるで馬鹿だなあお前は……俺にはそんなことといふ資格は無いどもな」
勃凸が醉つたまぎれに亂暴狼藉を働くと、おんつぁんは部屋の隅にいざり曲つて難を避けながら、頭をかゝへてから笑つた。勃凸はさういふ時舐めまはしたい程おんつぁんが慕はしくなつてしまふのだつた。
さうかと思ふとおんつぁんは毛嫌ひする老いた牝犬のやうに、勃凸をすげなく蹴りつけることもあつた。手前のやうな生れそこなひはおやぢのところに歸つて、小さくなつてぶつたゝかれながら、馬鹿樣で暮すのが一番安全で幸福なことだ。おやぢが汗水たらして稼ぎためた大きな身代に倚りかゝつて愚圖々々してゐる中には、ひとりでにその身代が手前のものになるから、それで飯を食つて死んでしまへば、この上なしの極樂だ。うつかり俺なんぞにかゝはり合つてゐると、鯱鉾立ちをして後悔しても取り返しのつかないことになるぞ。自分だけで俺は澤山だ。この上もてあましものが俺のまはりに噛りつくには及ばないことだ。俺一人だけ腐つて行けばそれでいゝんだから……おんつぁんはそんなことをいひながら、二本の指で盃をつまんで、甘さうに眼を寄せて、燗のぬるい酒を口もとに持つて行つた。勃凸はおんつぁんにそんな風に物を云はれると妙にすくみあがつた。而して無上に腹が立つた。
おんつぁんはやがて何處から金を工面したか、小細工物や、古着賣の店の立ち列んだやうな町に出て小さな貸

本屋を開いた。始めの中こそ多少の遠慮はしてゐたが、いつといふことなく勃凸はおんつぁんの店の仕事まで手傳ふやうになつてゐた。

おんつぁんも勃凸も仕事に興味が乘ると普通の人間の三倍も四倍も働いた。互に口もきゝあはない程働いた。從つて賣上げも決して馬鹿にはならない位あつた。おんつぁんはそれで自分の好きな書物を買ひ入れた。けれどもおんつぁんの好きな書物は、あながち一般の讀者の好きな書物ではない。おまけに眞先に貸本に樂書をするのがお客でなくておんつぁん自身だつた。それがおんつぁんを黑表に載る人間にしようとは誰もが思はなかつたらう。

どうかしたはずみを喰ふとおんつぁんも勃凸も他愛がなくなつて、店に出入りする若者達と一緒にどこかに出かけて、賣溜めを綺麗にはたいて、商賣道具を手あたり次第に質草にするのが嵬りだつた。

或る時勃凸が、店先でいきなり一冊の書物を土間にたゝきつけた。

「何をしやがるんだ馬鹿。お前氣ちがひにでもなる氣か」

とおんつぁんが吹き出しさうな顏をして、聲だけはがなり立てた。勃凸は眞靑に震へて怒つてゐた。

「おんつぁん……こんなちやくいことしてゐて、これでいゝのかい」

相當に名のあるその書物の作者が公けにしたもう一冊の書物を勃凸が書棚から引きぬいて來て、それをおんつぁんの前においた。今土間にたゝきつけられた書物と比べて見ると、表題こそは全く違つてゐるけれども、內容は殆ど同じだつた。

二人はそれだけで興奮してしまつた。持つて行き場のないやうな憤怒で、二人は定連と一緒に酒のあるところに轉がり込んだ。而して目茶苦茶に醉つぱらつて、勃凸は例の研ぎすましたジャツク・ナイフを自分の脚に突き刺して、その血を顏中に塗りこくつて、得意の死の踊りといふのを氣違ひのやうに踊つた。

そのおかげで二人は二三日の間靑つしよびれてしまつてゐた。

おんつぁんがたうとう出て行けといつた。勃凸にはおんつぁんの氣持がすつかり判つてゐた。それだからふて腐れて赤いスエターを頭からすつぽりと被つて、戸棚の中で泣いてゐた。

それでも勃凸は素直に野幌に行つて小學校の代用敎員になつた。少し金が溜るとそれを持つて、おんつぁんに會ひに札幌まで出かけて來た。身錢を切る嬉しさ、おんつぁんと、六つになるおんつぁんの娘とをおごつてやる嬉しさで夢中だつた。カフヱーのテーブルの上に一寸眼に立つ灰皿を見つけると、頰の筋肉がにや〳〵し出した。カフヱーを出てドアを締めるが早いか、懷からその灰皿を取り出しておんつぁんの眼の前にふり廻して見せた。

「馬鹿！　またやつたなお前。お前にやり〳〵してゐたからまたやるなと思つて、俺眼を放さないでゐたから、今日は駄目だと思つたら、矢張りだあめだよお前は。ぺつちやんこだよ」

といつておんつぁんが途方に暮れたやうに高々と笑つた。勃凸も大笑ひをした。而してその灰皿を新川の水の中に思ひきり力をこめてたゝきこんだ。

はじめの間こそ、おんつぁんに怒鳴りつけられるまゝに、すご〳〵と野幌に歸つたが、段々圖々しくなつて、いつ學校の方をやめるともなく又おんつぁんの店に入りびたるやうになつた。

その中にあの大亂痴氣が起つた。刑事は隣りの家の二階から一同の集まるのを見張つてゐて、もう集まり切つたといふところで、署長を先頭に踏みこんだのだ。平服だつたがおんつぁんはすぐそれだと見て取つた。ところが勃凸は一切お構ひなしに、又仲間が集まつて來たとでも思つたらしく、羽織つたマントの端をくるつと首のまはりに卷きつけて、伊太利どころの映畫の色男をまねた業々しい身振りで、右手で左の肩から膝頭へかけてぐるつと大きな輪をかいて恭しい挨拶をした。而してひしやげるほど橫面をなぐり飛ばされた。

おんつぁんも勃凸もほかの仲間三人も留置場に四日ゐた。勃凸は珍らしく悒鬱になつてゐた。それは恐ろしい徵候だつた。爆彈なり、短銃なり、ドスなりは、謂はゞ勃凸の肉體の一部分のやうなものだつたのだから。青白い華車な顏にはめこまれた、鼠の眼のやうな可愛らしい眼がすわつて來ると、勃凸の全身は鞘を拂つた懷劍のやうに見えた。

兎に角證據不十分といふことで放免になる朝、寫眞機の前に立たされた勃凸は、シャッターを切られるはずみに、そつぽを向いて、目茶苦茶に顏をしかめてしまつた。さういふのが彼の悒鬱の一面だつた。

留守中におんつぁんの店は根太板まで引きはがされる程の綿密な搜索を受けてゐた。札幌で營業を停止されたばかりでなく、心あたりの就職の道は悉く杜絕してしまつた。

おんつぁんは細君も子供も仲間も皆んな振り切つて、たつた一人の人間にならうと思ひ定めた。それを勃凸が逸早く感づいた。

「おんつぁん俺らこと連れて行つてくれ、なあ」

と甘えかゝつた。

「だアめだ」

おんつぁんはほろりとかう答へた。

「よし、行くなら行つて見ろ、おんつぁん。俺屹度停車場でとつちめて見せるから」

けれどもおんつぁんはたうとう勃凸をまいて東京に出て來てしまつたのだ。而して私に今までのやうな話をして聞かせた。而して、

「とても本物だよあいつは。俺らあいつが憎めて〳〵仕方がないべ。けれどあいつに『おんつぁん』と來られる

と俺らぺつちやんこさ。まるでよれ〳〵になつてるんだから駄目なもんだてば」と言葉を結んだが……

そんな噂話を聞いて程もなく、勃凸がおんつぁんを追ひかけて、着のみ着のまゝで札幌から飛び出して來たといふことを知つた。

或る日、おんつぁんが來たと取り次がれたので、私は例の書齋に通すやうに云つておいて、暫くしてから行つて見ると、おんつぁんではない生若い青年だつた。背丈は尋常だが肩幅の狹い、骨細な體に何所か締りのぬけた着物の着かたをして、椅子にもかけかねる程氣兼ねをしながら、おんつぁんからの用事をいひ終ると、

「ぢや歸るから」

といつて、止めるのも聽かずにどん〳〵歸つて行つてしまつた。私はすぐその男だなとは思つたが、互に名乘り合ふこともしなかつた。

二三日するとおんつぁんが來て、何か紛失物はなかつたかと聞くのだつた。あすこに行つたら記念に屹度何かくすねて來る積りだつたが、何んだか氣がさして、その氣になれなかつたと云つてはゐたが、あいつのことだから何が何んだか分らないといふのだ。然し勿論何にも無くなつてはゐなかつた。

「めんこいとつつぁんだ。額と手とがまるつでめんこくて俺らもう少しで甜めるところだつた。ありやとつつぁんぼつちゃんだなあ」

ともいつたさうだ。私は笑つた。而して私がとつつぁんぼつちやんなら、あの男はぼつちやんとつちやんだと云つた。而してそれから私達の間でその男のことを勃凸、私のことを凸勃といふやうになつたのだ。だから勃凸とは札幌時代からの彼の異名ではない。

その後勃凸と私との交渉はさして濃くなつて行くやうなこともなく、唯おんつぁんを通じて、彼が如何に女に

愛着されるか、如何に放漫であるか、いざとなれば如何に拔け目のない强烈さを發揮するかといふことなどを聞かされるだけだつたが、今年になつて突然勃凸と接近する機會が持ち上つた。

それは急におんつぁんが九州に旅立ち、その旅先きから又世界のどのはづれに行くかも知れないやうな事件が起つたからだ。勃凸の買つて來た赤皮の靴が法外に大き過ぎると冗談めいた口小言を云ひながらも、おんつぁんはさすがに何處か緊張してゐた。私達は身にしみ通る夜風に顏をしかめながら、八時の夜行に間に合ふやうにと東京驛に急いだ。そこには先着の勃凸が、ハンティングの庇を眉深かにおろし、トンビの襟を高く立てゝ私達を待ち受けてゐた。おんつぁんは始終あたりに眼を配らなければならないやうな境涯にゐたのだ。

三等車は込み合つてゐたけれども、先に乘りこんで座席を占めてゐた勃凸の機轉で、おんつぁんはやうやく窓に近いところに坐ることが出來た。おんつぁんはいつものやうに笑つて勃凸と話した。私は少し遠ざかつてゐた。勃凸が涕を拇指の根のところで拭き取つてゐるのがあやにくに見えた。おんつぁんの顏には油汗のやうなものが浮いて、見るも痛ましい程青白くなつてゐた。飽きも飽かれもしない妻と子とを殘して、何んといつても住心地のいゝ日本から、どんな窮乏と危險とが待ち受けてゐるかも知れないいづこかに、盲者のやうに自分を投げ出して行かうとする。行かねばならないおんつぁんを、親身に送るものは、不良靑年の極印を押された勃凸が一人ゐるばかりなのだ。こんな旅人とこんな見送り人とは、東京驛の長い步廊にも恐らく又とはゐまい。私は思はず感傷的になつてしまつた。而してその下らない感情を追ひ拂ふためにセメントの床の上をこつ〳〵と寒さに首を縮めながら步きまはつた。

勃凸との話が途切れるとおんつぁんはぐつたりして客車の天井を眺めてゐた。勃凸はハンティングとトンビの襟との間にすつかり顏を隱して石のやうに突つ立つてゐた。

長い事々しい警鈴の音、それは勃凸の胸をゑぐつたらう。列車は旅客を滿載して闇の中へと動き出した。私達は他人同士のやうに知らん顏をし合つて別れた。

勃凸と私と而してもう一人の仲間なるＩは默つたまゝ高い石造の建築物の峽を歩いた。二人は私の行く方へと從つて來た。日比谷の停留場に來て、私は鳥料理の大きな店へと押し上つた。三人が通されたのはむさ苦しい六疊だつた。何しろ土曜日の晩だから宴會客で店中が湧くやうだつたのだ。

驚いたのは暗闇から明るい電燈の下に現はれ出た勃凸の姿だつた。私の心には步廊の陰慘な光景がまだうろついてゐたのに、彼の顏は無恥な位晴れ〴〵してゐた。

「たまげたなあ。とつても素晴らしいところだなあ」

彼は宛ら子供のやうな好奇心をもつてあたりを眺めまはした。

その家の特色なる電氣鍋が出た。

「これ札幌にもあるよ」

その腹の底からの無邪氣さが遂に私をもほゝゑましてしまつた。私達は輕く酒を飮んで飯にした。Ｉが飯をつがうとすると、

「うんと盛つてくれ、てんこ盛りによ、な」

佛家の出なるＩが器用に圓く飯を盛り上げた茶碗を渡すと、勃凸はと見かう見しながら喜び勇んだ。

「見ろてんこ盛り。まるつで鎌倉時代見たいだなあ。ほら賴朝がかうして飯を食つたんだ。さうだべ、なあ」

さうした言葉の端にも彼にはどこまでも彼らしいところがあつた。一般に日本人に缺けてゐる個性の持ち味といふやうなものがあつた。勃凸と私とは段々兩方から親しみこんで行つた。勃凸は私の書齋であつた勃凸ではな

くなつてゐた。天才色とでもいふ靑白い皮膚が、少しの酒ですぐ薄紅くなつて、好きだとなつたら男女の區別なくしなだれかゝらずにはゐられない、そんな人懷こい匂ひがその心からも體からも蒸(む)れ出るやうに見えた。註文のものを運んで來る女中が、來る度毎に、二十になるやならずの彼の方に注意深い眼を短かく送りながら立つて行つた。あの若さで、あいつの生命はすつかり世帶くづれがしてゐると、それを私は痛ましいやうな氣持で考へたりした。

　互ひの話聲が聞き取れぬほどあたりは物騷がしかつた。階子段の上から帳場に向けて註文をとほす金切聲の間に、かういふ店の客に似合はしいやうな、書生上りの匂ひのからまり付いた濁聲(だみごゑ)がこゝを先途とがなり立てられてゐた。鼻も眼も醬油と脂肪の蒸氣でむされるやうだつた。

　同じ家に寢起きしてゐる勃凸とIとは、半分以上も私には分らない樂屋落ちらしい言葉で、おんつぁんと勃凸とが神樂坂邊に試みた馬鹿々々しい冒險談に笑ひ興じてゐた。

「勃凸の奴、Sの名刺を貰つて來て、壁に張りつけておいて、朝晩禮拜をしてゐるんだからやりきれやしない」

　極めて堅氣なIだけれども、初めから良心を授からないで生れて來たやうな勃凸の奇怪な自由さには取りつく島もないといふ風で、そのすつぱぬきさへが好意をこめた聲になつてゐた。

「とつてもいゝから、俺なんぞ相手にする奴、この世の中に一人だつてゐねえと思つてたべ。したら、一晩中だもの。泣けてさ。とつてもいゝ……」

　停電した。店中から鯨波(とき)の聲が起つた。せうことなしに私達は眞暗な部屋の中で、底の方に引きこまれるやうな氣持でうづくまつてゐねばならなかつた。焜爐(こんろ)の中の電線だけが、べと／＼した赤さで熱を吐いてゐるだけだつた。始めこそはこの不意打ちに飛び上らんばかり興じてゐた勃凸もやがて默つた。三人の顏は正面だけが、薄

れゆく焜爐の中の光に照らされて闇の中にぼんやりと浮いてゐた。

「おんつぁんもうどこまで行つたらう」

突然勃凸がぽつりとかういひ出した。私達はそれから又默つて焜爐を見つめてゐた。部屋の外には男衆や女中が蠟燭だの提灯だのを持つて右往左往に駈け廻つてゐた。私達の部屋が後廻はしになるのは當然だつた。焜爐の中の光が薄れ切つてしまつた頃、而して店の中に兎に角蠟燭の火が分配され終つた頃、惡戲者らしく家中の電燈がぽつかりと點つた。然し停電をきつかけに私達の話題は角度をかへてゐた。

勃凸が謂はゞ正面を切つて、おんつぁんを思ひ出すやうなことを話しはじめた。

「俺おんつぁんが好きだ。何んといつても好きだ。おんつぁんのことなら俺何んでもするよ」

かういふ風に勃凸はしんみりと口を切つた。

「俺にはとつても續けて勉强なんか出來ないべ。學校でも遊んでばつかしゐたさ。したらたうとう退校になつた。うん。俺おやぢが大嫌ひだつた。何んもしないで金ばつか溜めてゐるんでねえか。俺ぶつたゝかれた。皷膜が千里の餘も飛んじまつたべと思ふほどこゝんところをたゝかれた。そしてあとはもうまるつで駄目さ。

おんつぁんはあれでひでえおつかねえんだよ。藤公と三人で酒飮んだ時、おんつぁんが藤公に忠告したら藤公がまるつで怒つてさ。いきなりおんつぁんことなぐつたべ。したらな、おんつぁんがぐうんと藤公の胸をついたと思つたら、二十貫もある藤公が店のはめ板に平らべつたくなる程はたきつけられたつけ。その時のおんつぁんのおつかねえ顏つたら、俺今でも忘れねえ。藤公はもう殺されるなと思つた。藤公も藤公だからすぐ起きあがつて又かゝつて行つた。したらおんつぁんは眞蒼になつて、眼に淚を一杯ためて、ぢつと坐つたまゝ、藤公が來てたゝくのを待つてゐた。藤公はおんつぁんを一つ二つなぐつたが氣拔けがしてそれ切りさ。電燈の笠がこはれてそこ

いらに散らばつてゐたつけ。

おんつぁんは藤公をたゝき殺さうとしたんだが、仲間だなと思つたら、急に手も足も出なくなつて、涙ばつか出たとさういつてゐた。……俺、おんつぁんに殺されるなと思つたことが二度も三度もある。ぎつと見詰められたゞけでそんな氣がするんだ。ほれ、いつかの晩もさ、俺夜中にカルメンの歌を歌つてゐたら、おんつぁんが『がつ』といつていきなり部屋を出て行つたべ。あの時も俺出刄庖丁がいきなり胸にさゝるべと思つて床の中で震へてゐたさ」

Iはおんつぁんの不思議な一面を知つたやうな顔をして聞いてゐたが、

「けれどおんつぁんは親切だなあ」

と言葉を入れた。

「俺と同じでおんつぁんには手前と他人とが縺れ合つてゐるんだものなあ」

勃凸は說明するやうにかういつて更に語りつゞけるのだつた。

「俺が野幌で敎師をしてゐた時……

敎師といへば……子供つてたまらなくめんこいねえ。子供も俺になづき切つてゐたつけ。めんこいども、俺その中でも出來る子と出來ない子とがめんこかつた。俺出來ない子をうんといぢめたさ。出來る子は顏がめんこいけども、出來ない子は心がめんこいんだ。出來ない子を學校がひけてから殘して俺敎へてやるんだ。一度俺ら方が泣けてしまつて、机の板で頭をなぐりつけてやつたら、板が眞二つになつた。その子はかうして頭を抱へたきり泣きもしなかつた。俺、奴が馬鹿か氣狂ひになるべと思つてい丶加減心配したさ。したどもな、俺あやまる氣がしねえで敎員室にはいつて、皆の歸るのを待つて敎場に行つて見たら、その子がたつた一人、頭をかゝへ

て泣きながらまだ殘つてゐた。頭を撫でゝ見たら大きな瘤が出來てゐた。あいつ俺らこと死ぬまで恨むのだべさ。

したども學校もすぐ倦きたあ。おんつぁんのとこさ行くと歸れ〳〵といふべ、俺やけ糞になつて、何もしねぇで町の中をごろつき歩いてゐた。したら俺の叔父さんが、盲目の叔父さんが小樽から俺らことおんつぁんのとこに捜しに來たつけ。おんつぁんのとこさ行つたらおんつぁんがいつた。

『お前今日から俺んところに寄りつくんでねぇぞ。俺は俺だしお前はお前だからな。お前おやぢのとこさ歸れ、よ。俺の病氣が傳染つたら、お前御難を見るから。……俺はお前のことで心配するのはもういやになつた。自分一人を持てあましてゐるんだよ、俺は』

俺は何んにもいへなかつた。寒い雨の降る日で、傘が無かつたから俺頭からずつぷり濡れて足は泥つけさ。おんつぁんはバケツに水を汲んで來て、お袋のやうに俺の足を洗つてくれた。而して着物を着かへさせてくれた。俺太て腐れてゐたら、おんつぁんが……いつもさうだべ、なあ……額に汗をかき〳〵俺のものを綺麗に風呂敷に包んで、さあ出て行けと俺の坐つてゐるわきさ置いてよ、自分はそつぽを向いてもう物をいはねえでねえか。

糞つと思つて俺裏口からおんつぁんのところを出たが、何處に行くあてがあるべさ。軒下に風呂敷をおいて、その上に腰を下ろして晩げまでぶる〳〵震へたなりぢつとしてゐた。おんつぁんが時々顏を出して見ては默つて引込んだ。夜になつたら物も云はないでぴつたり戸をたてゝしまつたさ。

俺おんつぁんの心持が分り過ぎる位ゐ分るんだから唯泣いてたつた。

その晩俺はおんつぁんの作つてくれた風呂敷包を全部質において、料理屋さ行つてうつと飲んで女を買つたら、次ぐの朝拂ひが足らなかつた。仕方なしに牛太郎と一緒におやぢのとこさ行つたらお袋が危篤で俺らこと捜しぬ

いてるところだつた。

それから三日目にお袋が死んぢやつたさ。俺のお袋はいゝお袋だつたなあ。おやぢに始終ぶつたゝかれながら俺達をめんこがつてくれたさ。獸物が自分の仔をめんこがるやうなもんだ。何んにもわからねぇでめんこがつてゐたんだ。だから俺はこんなに馬鹿になつたども、俺はお袋だけは好きだつた。

死水をやれつて皆んながいふべ。お袋の口をあけてコップの水をうつと流しこんでやつたら、ごゞゞと三度むせた。それだけよ。……それつきりさ」

勃凸は他人事のやうに笑つた。Iも私も思はず釣りこまれて笑つたが、すぐその笑ひは引つ込んでしまつた。氣がついて見ると店の中は存外客少なになつてゐた。時計を見るといつの間にか十時近くなつてゐるので、私は家に歸ることを思つたが、勃凸はお互ひが別れ〳〵になるのをひどく淋しがるやうに見えた。

それでも勘定だけはしておかうと思つて、女中を呼んで拂ひのために懷中物を出しにかゝつた時、勃凸も氣がついたやうに蟇口を取り出した。Iが金がないのにしやれたまねをするとからかつた。勃凸は耳もかさずに蟇口をひねり開けて、半紙の切れ端に包んだ小さなものを取り出した。

「これだ」

と私達の眼の前に出さうとするのを、Iがまた手で遮つて、

「おい〳〵御自慢のSの名刺か。もうやめてくれよ」

といふのも構はず、それを開くと折り目のところに小さな齒のやうなものがころがつてゐた。

「何んだいそれは」

今度は私が聞いて見た。

「これ……お袋の骨だあ」
と勃凸は珍らしくもないものでも見せるやうにつまらなさうな顏をして紙包みを私達の眼の前にさし出した。
私達はまた暫く默つた。と、突然Iが袂の中のハンケチを取り出す間もおそしと眼がしらに持つて行つた。
勃凸はやがてまたそれを蝦口の中にはふり込んだ。その時私は彼の顏にちらりと悒鬱な色が漲つたやうに思つた。おんつぁんが危險な色だといつたのはあれだなと思つた。
「俺は何んにもすることがないから何んでもするさ。糞つ、何んでもするぞ。見てれ。だどもおやぢの生きてる中は矢張駄目だ。俺はあいつを憎んでゐるども、あいつがゐる間は矢張駄目だ。……おんつぁんがゐねえばもう俺は目茶苦茶さ。……馬鹿野郎……」
勃凸は誰に又何に向けていふともなく、「馬鹿野郎」といふ言葉を、押しつぶしたやうな物凄い聲で云つた。
私は思はず凄慘な氣に打たれてしまつた。どうしたらそんな氣持から彼を立ち戻らすことが出來るかを私は知らなかつたから。
その後一週間ほどして、意外にもおんつぁんが再び東京に舞ひ戻つて來た。おんつぁんの豫期してゐたやうなことは全く齟齬して、結局九州まで有り金の凡てを費ひ果たしに行つたやうな結果になつた。
それでもおんつぁんは勃凸のことは忘れなかつた。而しておんつぁんの言葉でいへば二人はまたよれ〳〵になつて寢起きを共にするやうになつたが、兎に角にも勃凸に一通りの手職は覺えさせるのがおんつぁんの生活のためにも必要になつたので、又何處からか辛うじて金の工面をして勃凸を自動車學校に入れることになり、勃凸は勃凸でそれを子供のやうに喜んだ。而して凛とした運轉手服を着て大家に乘り込んで、そこにゐる女達を片端から征服してやると、多少の豫期なしにではなく揚言したりした。

或る晩、勃凸が大森の方に下宿するから、送別のために出て來ないかといふ招きが來た。それはもう九時過ぎだつたけれども私は神樂坂の或る飲食店へと出かけて行つた。

「お待ちかねでした」といつて案內する女中に導かれて三階の一室にはいつて行つた時には、おんつぁんも、勃凸も、Iも最上の元氣で食卓を圍んでゐた。

勃凸は體中が彈み上るやうな聲を出して叫んだ。

「ほれえ、おんつぁん、凸勃が來たあ。畜生！　いゝなあ。おい、おんつぁん、騷げ、うつと騷げ、なあI、もつと騷げつたら」

「うむ、騷ぐ、騷ぐ」

場慣れないIは、はにかんで笑ひながら、大急ぎで箸を刺身皿に持つて行つた。勃凸のさうした聲を聞くと私もよしといふやうな腹がすわつた。而してさゝれる酒をぐい〳〵と飮んだ。些かの虛飾も上下もないのが私の不斷の氣持を全く解放したらしい。

勃凸は着物を腰までまくり上げて、粗い縫縞のやうな綿ネルの下着一つで胡坐をかいてゐた。その若々しい色白の顏は燃えるやうに充血して、彼の表情を寧ろ愛嬌深くする亂杭齒が現はれどほしに現はれてゐた。

「おい凸勃、今夜こそ、お前待合に行け、俺達と一緒に。どうだ行くか」

おんつぁんが杯にかじりついたまゝで詰問した。

「行くとも」

私は笑ひながら答へた。

「畜生！　面白れえなあ。凸勃が沈沒するのだよ。畜生。……飮めや」

勃凸はふら〳〵しながら私の方に杯をよこした。

「お前いつ大森に行くんだ」

と私が尋ねて見た。

「明日(あす)行くよ。僕立派な運轉手になつて見せるから……藝者が來ないでねえか。畜生」

丁度その時二人の藝者がはいつて來た。さういふところに來る藝者だから、三味線もよく彈けないやうな人達だつたけれども、その中の一人は、まだ十八九にしか見えない小柄な女の癖に、あばずれたきかん氣の人らしかつた。

「私ハイカラに結つたら醉はないことにしてゐるんだけれども、お座敷が面白さうだから飲むわ。ついで頂戴」

といひながら、そこにあつた椀の中のものを盃洗(はいせん)にあけると、もう一人の藝者に酌をさせて、一と息に半分がた飲み干した。

「馬鹿でねえかこいつ」

もう眼の据(すわ)つたおんつぁんがその女をためるやうに見やりながら云つた。

「田舎もんね、あちら」

「畜生！　田舎もんがどうした。こつちに來い」

と勃凸が威丈(いだ)け高になつた。

「田舎もん結構よ」

さういひながらその女は、私のそばから立ち上つて、勃凸とIとの間に割つてはいつた。

座敷はまるで目茶苦茶だつた。私はおんつぁんと何かいひながらも、勃凸とその藝者との會話に注意してゐた。

「お前どつちの商賣だ」
「卑しい稼業よ」
「藝者面しやがつて威張るない」
「いつ私が威張つて。こんな土地で藝者してゐるからには、肉だつて操だつてどん／＼賣つて上げるわよ」
「お前は女郎を馬鹿にしてるだべ」
「いつ私が……」
「見ろ、畜生！」
「畜生たあ何」
「俺は世の中で女郎が一番好きなんだ。いつでも女郎を一番馬鹿にするのはお前等ださ。……糞、見つたくも無え」
「何んてこちらは獨り合點な……」
「いゝなあ、おい、おんつぁん、とろつとしてよ、とろつと淋しい顏してよ。いゝなあ女郎。女郎屋に行くと、俺まるつで本當の家に歸つたやうだあ。畜生。こんな高慢ちきな奴。……」
「憎らしいねえ、まあお聞きなさいつたら。……學生さんでせう、こちら」
「お前なんか學生とふざけてゐれや丁度いゝべさ」
「よく／＼根性まがりの意地惡だねえ……ごまかしたつて駄目よ。まあお聞きなさいよ。私これでも二十三よ。姉さんぶるわけぢやないけど、修業中だけはお謹みなさいね」
「馬鹿々々々々々々……ぶんなぐるぞ」

「なぐれると思ふならなぐつて頂戴、さ」

勃凸は本當にその藝者の肩に手をかけてなぐりさうな氣勢を示した。おんつぁんとIとが本氣になつて止めた。その藝者も腹を立てたやうにつうつと立つてまた私のわきに來てしまつた。そしてこれ見よがしに私にへばりつき始めた。私はそれだけ勃凸の作戰の巧妙なのに感心した。巧妙な作戰といふよりも、溢れてゆく彼の性格の迸りであるのを知つた。

私達はさういふ風にして他愛もなく騷いだ。醉ひがまはり切ると、おんつぁんはいつものやうに凄惨な美聲で松前追分を歌ひはじめた。それは彼の附け元氣の斷末魔の聲だ。それから先きにはその本音が物凄く現はれはじめるのだ。泣いてもゐられない、笑つてもゐられないやうな虛無の世界が、おんつぁんの醉眼に朦朧と映り出す。おんつぁんは肩息になつて醉ひながらもだえるのだ。

「おい、凸勃、ごまかしを除いたら、あとに何が殘るんだ。何にも無えべ。だども俺ずるいよ。自分でもごまかして、他人のごまかしまで略奪して生きてゐるで無えか。俺一番駄目なんだなあ」

かういふ段になると勃凸の醉ひは一時に醒めてしまふかのやうだ。彼はまるでじやれ附く猫のやうに、おんつぁんの上にのしかゝつて行つて、芝居のせりふや活辯の文句でかき廻はしてしまふのだ。それも私には出來ない藝當だつた。おんつぁんは勃凸にさう出られると、何時の間にか正體がくづれて、もとのまゝの醉ひどれに變つてゐた。それのみならず勃凸がどれほどおんつぁんを便りにし、その身の上をも懸念してゐるかゞ感ぜられると、私は妙に涙ぐましい氣分にさへなつた。

それでもやゝともするとおんつぁんは沈みこみさうになつた。絕望的な眼の色が痛ましく近眼鏡の奥に輝やいた。「駄目、おんつぁん」をきつかけに勃凸は急に待合の事をいひ出した。おんつぁんは枯れかゝつた草が水を得たや

うに、目前の誘惑へとのしかゝつて行つた。勃凸も自分の言葉に自分で酔つて行くやうに見た。
「畜生！　さあ來い。何んでも來い。おんつぁん、凸勃に沈没させてやるべなあ。とつても面白いなあ。おい凸勃、今夜こそお前のめんこい額さ甜めてやつから。畜生！」
　勃凸は大童とでもいふやうな前はだけな取り亂した姿で、私の首玉にかじりつくと、何處といふきらひもなく私の顔を甜めまはした。藝者までが腹をかゝへて笑つた。
「今度はお前ことキスするんだ、なあ」
　勃凸はさつきの藝者の方に迫つて行つた。藝者はうまく勃凸の手をすりぬけて二人とも歸つて行つてしまつた。
　私達もそれに續いてその家を出た。神樂坂の往來はびしよ〳〵にぬかるんで夜風が寒かつた。而して人通りが杜絶えてゐた。私達は下駄の上に泥の乘るのも忘れて、冗談口をたゝきながら毘沙門の裏通りへと折れ曲つた。屋臺鮨の暖簾に顔をつツこむと、會計役を承つた勃凸があとから支拂ひをした。
　たうとう私達は盛り花のしてあるやうな家の閾をまたいだ。ビールの壜と前後して三人ばかりの女がそこに現はれた。すぐそのあとで、山出し風な肥つた女中がはいつて來て、勃凸に何かさゝやいた。勃凸は、
「輕蔑するない。今夜は持つてるぞ。ほれ、これ見れ」
　といひながら皆の見てゐる前で蟇口から五圓札の何枚かを取り出して見せてゐたが、急に顔色をかへて、慌てゝ蟇口から根こそぎ中のものを取り出して、
「あれつ」
　といふと立ち上つた。

「何んだ」
先程から全く固くなつてしまつてゐたIが、自分の出る幕が來たかのやうに眞面目にかう尋ねた。
勃凸は自分の身のまはりから、坐つてゐた座蒲團まで調べてゐたが、そのまゝ何んにも云はないで部屋を出て行つた。
「勃凸の馬鹿野郎、あいつはよつくあんな變なまねをするんだ。まるつで狐つきださ」
と云つておんつぁんは左程怪訝に思ふ風もなかつた。
「本當に剽輕な奴だなあ、あいつは又何か僕達をひつかけようとしてゐるんだらう」
Iもさういつて笑ひながら合槌をうつた。
やゝ暫くしてから勃凸は少し息をはずませながら歸つて來たが、思ひなしか元氣が薄れてゐた。
「何か落したか」
とおんつぁんが尋ねた。
勃凸は鼠の眼のやうな眼と、愛嬌のある亂杭齒とで上ベツ面のやうな微笑を漂はしながら、
「うん」
と頭を強く縱にゆすつた。
「何を」
「こつを……」
「こつ？」
「骨さ。ほれ、お袋のよ」

私達は顔を見合はせた。一座はしらけた。何んの譯かその場の仕儀の分らない女達の一人は、帶の間からお守りを出して、それを額のところに一寸あてゝ、毒をうけないおまじなひをしてゐた。

勃凸はふとそれに眼をつけた。

「おい、それ俺にくれや」

「これ？　これは上げられませんわ」

とその女はいかにもしとやかに答へた。

「したら、名刺でいゝから」

女はいはれるまゝに、小さな千社札のやうな木版刷りの、名刺を一枚食卓の上においた。

「どうぞよろしく」

勃凸はそれを取り上げると蟆口の底の方に押し込んだ。而して急に元氣づいたやうな聲で、

「畜生！　駄目だ俺。おんつぁん、俺この方が似合ふべ、なあ」

と呼びながら、蟆口を懐に抛りこんでその上を平手で輕くたゝいた。而して風呂場へと立つて行つた。

おんつぁんの顔が歪んだと思ふと、大粒の涙が流れ出て來た。

女達は不思議さうにおんつぁんを見守つてゐた。

（一九二三年三月十二日）
（一九二三年四月「泉」所載）

親子

彼は、秋になり切つた空の樣子を硝子窓越しに眺めてゐた。

水々しくふくらみ、はつきりした輪廓を描いて白く光るあの夏の雲の姿はもう見られなかつた。薄濁つた形のくづれたのが、狂ふやうにさゝくれだつて、澄み切つた青空のこゝかしこに屯(たむろ)してゐた。年の老いつゝあるのが明かに思ひ知られた。彼は先程から長い間ぼんやりとその樣を眺めてゐたのだ。

「もう着くぞ」

父はすぐそばでかう云つた。銀行から歲暮によこす皮表紙の懷中手帳に、細手の鉛筆に舌の先きの濕りをくれては、丹念に何か書きこんでゐた。スコッチの旅行服の襟が首から離れるほど胸を落して、一心不亂に考へごとをしながらも、氣ぜはしなくこんな注意をするやうな父だつた。

停車場には農場の監督と、五六人の年嵩(としかさ)な小作人とが出迎へてゐた。彼等はいづれも、古手拭と煙草道具と背負ひ繩とを腰にぶら下げてゐた。短かい日が存分西に廻つて、彼の周圍には、荒らくれた北海道の山の中の匂ひだけが漂(たゞよ)つてゐた。

監督を先頭に、父から彼、彼から小作人達が一列になつて、鐵道線路を默りながら步いてゆくのだつたが、橫幅のかつた丈(た)けの低い父の步みが存外しつかりしてゐるのを、彼は珍らしいもののやうに後ろから眺めた。

物の枯れてゆく香ひが空氣の底に澱(よど)んで、立木の高みまで這ひ上つてゐる「つたうるし」の紅葉が黑々と見え

る程に光が薄れてゐた。シリベシ川の川瀬の音に搖られて、いたどりの廣葉が風もないのに、かさこそと草の中に落ちた。

五六丁線路を傳つて、一寸した切崖を上るとそこは農場の構(かま)への中になつてゐた。まだ收穫を終らない大豆畑すらも、枯れた株だけが立ちつゞいてゐた。斑(まだ)ら生えのした頑(かたく)なゝ雜草の見える場所を除いては、紫色に黑ずんで一面に地膚をさらけてゐた。而して一箇所、作物の殼を燒く煙が重く立ち昇り、こゝかしこには暗らい影になつて一人二人の農夫がまだ働きつゞけてゐた。彼は小作小屋の前を通る毎に、氣をつけて中を覗いて見た。何處の小屋にも灯はともされずに、鍋の下の圍爐裡火(いろりび)だけが、言葉通り幽かに赤く燃えてゐた。そのまはりには必ず二三人の子供が騷ぎもしないできよとんと火を見つめながら車座に蹲(うづく)まつてゐた。さういふ小屋が、草を積み重ねたやうに離れ〴〵にわびしく立つてゐた。

農場の事務所に達するには、凡そ一町程の嶮はしい赤土の坂を登らなければならない。丁度七十二になる彼の父はそこにかゝるとさすがに息切れがしたと見えて、六合目程で足をとゞめて後をふり返つた。傍見(わきみ)もせずに足にまかせてそのあとに蹤いて行つた彼は、あやふく父の胸に自分の顏をぶつけさうになつた。父は苦々しげに彼を尻目にかけた。負けじ魂の老人だけに、自分の體力の衰へに神經をいら立たせてゐた瞬間だつたのに相違ない。而かも自分とは餘りにかけ離れたことばかり考へてゐるらしい息子の、輕率な不作法が癪にさはつたのだ。

「おい早田」

老人は今は眼の下に見亙される自分の領地の一區域を眺めまはしながら、見向きもせずに監督の名を呼んだ。

「こゝには何戸はいつてゐるのか」

「崖地に殘してある防風林の疎(まば)らになつたのは盜伐ではないか」

「鐵道と換へ地をしたのはどの邊にあたるのか」
「藤田の小屋はどれか」
「こゝにゐる者達は小作料を完全に納めてゐるか」
「こゝから上る小作料がどれ程になるか」
から矢繼早やに尋ねられるに對して、若い監督の早田は、格別のお世辭氣もなく穩かな調子で答へてゐたが、言葉が少し脇道にそれると、すぐ父からきめつけられた。父は監督の言葉の末にも、曖昧があつたら突つ込まうとするやうに見えた。白い齒は見せないぞといふ氣持が、世故に慣れて引き締まつた小さな顏に氣味惡い程動いてゐた。
　彼にはさうした父の態度が理解出來た。農場は父のものだが、開墾は全部矢部といふ土木業者に請負はしてあるので、早田は謂はゞ矢部の手で入れた監督に當るのだ。而して今年になつて、農場がやうやく成墾したので、明日は矢部もこの農場に出向いて來て、すつかり精算をしようといふ譯になつてゐるのだ。明日の授受が濟むまでは、縱令永年見慣れて來た早田でも、事業の上　競爭者の手先と思はなければならぬといふ意識が、父の胸には蟠つてゐるのだ。謂はゞ公私の區別とでもいふものをこれほど露骨にさらけ出して見せる父の氣持を、彼は何故か不快に思ひながらも驚嘆せずにはゐられなかつた。
　一行はまた歩き出した。それからは坂道はいくらも無くつて、すぐに廣々とした臺地に出た。そこからずつとマッカリヌプリといふ山の麓にかけて農場は擴がつてゐるのだ。なだらかに高低のある畑地の向うにマッカリヌプリの規則正しい山の姿が寒々と一つ聳えて、その頂きに近い西の面だけが、かすかに日の光を照りかへして赤ずんでゐた。いつの間にか雲一ひらもなく澄み亙つた空の高みに、細々とした新月が、置き忘れられた光のやう

に冴えてゐた。一同は言葉少なになつて急ぎ足に歩いた。基線道路と名づけられた場內の公道だつたけれども畦道をやゝ廣くした位のもので、畑から抛り出された石ころの間なぞに、酸漿の實が赤くなつてぶら下つたり、轍にかけられた蕗の葉がどす黑く破れて泥にまみれたりしてゐた。彼は野生になつたティモシーの莖を拔き取つて、その根もとのやはらかい甘味を噛みしめなどしながら父のあとについた。而して彼の後ろから來る小作人達のさゝやきのやうな會話に耳を傾けた。

「夏作があんなだに、秋作がこれぢや困つたもんだ」

「不作つゞきだからやり切れないよ全く」

「さうだ」

ぼそ〳〵としたひとりごとのやうな聲だつたけれども、それは明かに彼の注意を引くやうに目論まれてゐるのだと彼は知つた。それらの言葉は父に向けてはうつかりいへない言葉に違ひない。然し彼ならばそれを耳にはさんで默つてゐるだらうし、そしてそれが結局小作人等に取つて不爲めにはならないのを小作人達は知りぬいてゐるらしかつた。彼には父の態度と同樣、小作人達のかうした態度も快くなかつた。東京を發つ時から何んとなくいら〳〵してゐた心の底が、いよ〳〵はつきり焦らつくのを彼は感じた。而して彼は凡てのことを思ふまゝにぶちまけることの出來ない自分をその時も齒痒ゆく思つた。

事務所にはもう赤々とランプが點されてゐて、監督の母親や內儀さんが戶の外に走り出て彼等を出迎へた。土下座せんばかりの母親の挨拶などに對しても、父は監督に對すると同樣に嚴格な態度を見せて、やをら靴を脫ぎ捨てると、自分の設計で建て上げた座敷にとほつて、洋服のまゝきちんと圍爐裡の橫座に坐つた。而して眼鏡を外づす間もなく、兩手を顏にあてゝ、下の方から、禿げ上つた兩鬢へとはげしく撫で上げた。それが父が草臥れ

た時の仕草であると同時に、何か心にからんだ事のある時の仕草だ。彼は座敷に荷物を運び入れる手傳ひをした後、父の前に座を取つて、その仕草に對して不安を感じた。今夜は就寢が極めて晩くなるなと思つた。

二人が風呂から上ると內儀さんが食膳を運んで、監督は相伴なしで話相手をするために部屋の入口に畏まつた。父は風呂で火照つた顏を雙手で撫で上げながら、大きく氣息を吐き出した。內儀さんは座にたへない程ぎごちない思ひをしてゐるらしかつた。

「風呂桶をしかへたな」

父は箸を取り上げる前に、監督をまともに見てから詰るやうに云つた。

「あまり古くなりましたんでついこの間……」

「費用は事務費で仕拂つたのか……俺しの方の支拂ひになつてゐるのか」

「事務費の方に計上しましたが……」

「矢部に斷つたか」

監督は別に斷りはしなかつた旨を答へた。父はそれには別に何もいはなかつたが、默つたまゝ銳く眼を光らした。それから食膳の豐か過ぎることを內儀さんに注意し、山に來たら山の產物が何よりも甘いのだから、明日からは必ず町で買物なぞはしないやうにと云ひ聞かせた。內儀さんはほと〳〵氣息づまるやうに見えた。

食事が濟むと煙草を燻らす暇もなく、父は監督に帳簿を持つて來るやうに命じた。監督が風呂は勿論食事もつかつてゐないことを彼が注意したけれども、父は唯「うむ」と云つたゞけで、取り合はなかつた。

監督は一抱へもありさうな書類をそこに持つて出た。一杯機嫌になつたらしい小作人達が挨拶を殘して思ひ思ひに歸つてゆく氣配が事務所の方でしてゐた。冷え切つた山の中の秋の夜の靜まり返つた空氣の中を、その人達

の跫音が段々遠ざかつて行つた。熱心に帳簿の頁を繰つてゐる父の姿を見守りながら、恐らく父には聞こえてゐないであらうその跫音を彼は聞き送つてゐた。彼には、その人達が途中でどんなことを話し合つたか、小屋に歸つてその家族にどんな噂をして聞かせたかゞ色々に想像されてゐた。それが彼に取つてはどれもこれも快いと思はれるものではなかつた。彼は征服した敵地に乘り込んだ、無興味な一人の將校のやうな氣持ちを感じた。それに引きかへて、父は一心不亂だつた。監督に對して有らゆる質問を發しながら、帳簿の不備を詰つて、自分で紙を取りあげて計算しなほしたりした。監督が算盤を取り上げて計算をしようと申し出ても、構ひつけずに自分で大きな數を幾度も筆算しなほした。父の癖として、このやうに一心不亂になると、極めて簡單な理窟が如何しても判らないと思はれるやうなことがあつた。監督が小言を云はれながら幾度も說明しなほさなければならなかつた。彼も出來るだけ穩かにその說明を手傳つた。さうすると父の機嫌は見る〳〵險惡になつた。

「そんなことはお前に云はれんでも判つてゐる。俺しの聞くのはそんなことぢやない。理窟を聞かうとしとるんではないのだ。早田は俺しのいふことが飲み込めてをらんから聞きたゞしてゐるのぢやないか。もう一度俺しのいふことをよく聞いて見るがいゝ」

　さういつて、父は自分の質問の趣意を、はたから聞いてゐると極めて廻はりくどく說明するのだつたが、よく聞いてゐると、成る程と肯かれる程急所にあたつたことを云つてゐたりした。若い監督も彼の父の質問をもつと有り來たりのことのやうに取つてゐたのだ。監督は、質問の意味を飲み込むことが出來ると礑たと答へに窮したりした。それは何も監督が不正なことをしてゐたからではなく會計上の智識と經驗との不足から來てゐるのに相違ないのだが、父はそこに後ろ暗らいものを見つけでもしたやうにびし〳〵とやり込めた。

　彼にはそれがよく知れてゐた。けれども彼は濫りなさし出口はしなかつた。聊かでも監督に對する父の理解を

補はうとする言葉が彼の口から漏れると、父は彼に向つて惡意をさへ持ちかねない權幕を示したからだ。彼は單に、農場の事務が今日までどんな工合に運ばれてゐたかを理解しようとだけ勉めた。彼は五年近く父の心に背いて家には寄りつかなかつたから、今までの成り行きが如何なつてゐるか皆目見當がつかなかつたのだ。この場になつて、その間の父の苦心といふものを考へて見ないではなかつた。父がかうして北海道の山の中に大きな農場を持たうと思ひ立つたのも、つまり彼の將來を思つてのことだといふこともよく知つてゐた。それを思ふと彼は默つて親子といふものを考へたかつた。

「お前は夕飯は如何した」

さう突然父が尋ねた。監督はいつものとほり無表情に見える聲で、

「いえなに……」

と曖昧に答へた。父は蒲團の左角にひきつけてある懷中道具の中から、重さうな金時計を取りあげて、眼を細めながら遠くに離して時間を讀まうとした。

突然事務所の方で彈條のゆるんだらしい柱時計が十時を打つた。彼も自分の時計を帶の間に探つたが十時半になつてゐた。

「十時半ですよ。あなたまだ食はないんだね」

彼は少し父にあたるやうな聲で監督にかういつた。

それにもかゝはらず父は存外平氣だつた。

「さうか。それではもういゝから行つて食ふといゝ。俺しもお前の年頃の時分には、飯も何も忘れてからに夜更かしをしたものだ。仕事をする以上は外のことを忘れる位でなくては面白くもないし、甘くゆくもんでもない。

……然し今夜は御苦勞だつた。行く前にもう一言お前に云つておくが」

さういふ發端で明日矢部と會見するに當つての監督としての位置と仕事とを父は注意しはじめた。それは懇ろといふよりもしちくどい程長かつた。監督はまた半時間位、默つたまゝ父のいひつけを聞かねばならなかつた。

監督が丁寧に一禮して部屋を引き下がると、一種の氣まづさを以て父と彼とは向ひ合つた。興奮のために父の頰は老年に似ず薄紅くなつて、長旅の疲れらしいものは何處にも見えなかつた。然しそれだといつて少しも快活ではなかつた。自分の後繼者であるべきものに對して何んとなく心置きのあるやうな風を見せて、例へば懲しめのためにひどい小言を與へたあとのやうな氣拙い沈默を送つてよこした。まともに彼の顏を見ようとはしなかつた。かうなると彼はもう手も足も出なかつた。こちらから快活に持ちかけて、冗談話か何かで先方の氣分をやはらがせるといふやうなタクトは彼には微塵も無かつた。親しい間のものが氣まづくなつた程氣まづいものはない。彼は殆ど悒鬱といつてもいゝやうな不愉快な氣持に沈んで行つた。おまけに二人をまぎらすやうな物音も色彩もそこには見つからなかつた。なげしにかゝつてゐる額といつては、黑住教の教主の遺訓の石版と、大禮服を着ていかめしく構へた父の寫眞の引き延ばしとがあるばかりだつた。而してあたりは靜まり切つてゐた。墓石の底のやうだつた。唯耳を澄ますと、遙か遠くで馬鈴薯をこなしてゐるらしい水車の音が單調に聞こえて來るばかりだつた。

父は默つて考へごとでもしてゐるのか、敷島を續けざまにふかして、膝の上に落した灰にも氣づかないでゐた。彼はせうことなしに監督の持つて來た東京新聞の地方版をいぢくりまはしてゐた。北海道の記事を除いた凡ては一つ殘らず青森までの汽車の中で讀み飽いたものばかりだつた。

「お前は今日の早田の說明で農場のことは大抵呑みこめたか」

やゝ暫くしてから父は取つてつけたやうにぽツつりとこれだけいつて、はじめてまともに彼を見た。父がくどくどと早田に色々な報告をさせた譯が彼には解つたやうに思へた。

「大抵解りました」

その答へを聞くと父は疑はしさうにちらつともう一度彼を鋭く見やつた。

「隨分面倒なものだらう、これだけの仕事にでも眼鼻をつけるといふことは」

「さうですねえ」

彼は仕方なくかう答へた。父はすぐ彼の答への響きの惡さに感づいたやうだつた。而して又もや忌はしい沈默が來た。彼には父の氣持ちが十分に解つてゐたのだ。三十にもならうとする息子をつかまへて、自分がこれまでに拂つて來た苦勞を事新しくいつて聞かせるのも大人氣ないが、さうかといつて、農場に對する息子の熱意が憐れなほど燃えてゐないばかりでなく、自分に對する感恩の氣持も格別動いてゐるらしくも見えないその苦々しさで、父は老年に兎もすると附きまつはるはかなさと不滿とに惱んでゐるのだ。而して何事もずば〳〵とは云ひ切らないで、ぢつと獨りで胸の中に湛へてゐるやうな性情に或る憐れみさへを感じてゐるのだ。彼はさうした氣持が父から直接に彼の心の中に流れこむのを覺えた。彼ももどかしく不愉快だつた。然し父と彼との間隔が餘りに隔たり過ぎてしまつたのを思ふと、無闇なことはいひたくなかつた。それは結局二人の間を彌縫が出來ない程離してしまふだけのものだつたから。而してこの老年の父をそれ程の目に遇はせても平氣でゐられるだけの自信がまだ彼の方にも出來てはゐなかつた。だから本當をいふと、彼は誰に不愉快を感じるよりも、彼自身にそれを感じねばならなかつたのだ。而してそれが益〻彼を引込思案の、何事にも興味を感ぜぬらしく見える男にしてしまつたのだ。

今夜は何事も云はない方がいゝ、さう仕舞に彼は思ひ定めた。自分では氣付かないでゐるにしても、實際は可なり疲れてゐるに違ひない父の肉體のことも考へた。

「もうお休みになりませんか。矢部氏も明日は早くこゝに着くことになつてゐますし」

それが父には暢氣な言ひごとゝ聞こえるのも彼は承知してゐないではなかつた。父は果して内訌してゐる不平に油をそゝぎかけられたやうに思つたらしい。

「寢たければお前寢るがいゝ」

とすぐ答へたが、それでもすぐ言葉をつゞけて、

「さう、それでは俺しも寢るとしようか」

と投げるやうに云つて、すぐ厠に立つて行つた。足は痺れを切らしたらしく、少しよろ〳〵となつて歩いて行く父の後姿を見ると、彼はふつと深い淋しさを覺えた。

父はいつまでも寢つかないらしかつた。いつもならば頭を枕につけるが早いかすぐ鼾になる人が、いつまでも靜かにしてゐて、しげ〳〵と厠に立つた。その晩は彼にも寢つかれない晩だつた。而して父が眠るまでは自分も眠るまいと心に定めてゐた。

二時を過ぎて三時に近いと思はれる頃、父の寢床の方から幽かな鼾が漏れはじめた。彼はそれを聞きすましてそつと厠に立つた。縁板が蹠に吸ひつくかと思はれるやうに寒い晩になつてゐた。高い腰の上は透明な硝子張りになつてゐる雨戸から空をすかして見ると、一寸指先きに觸れたゞけで硝子板が音をたてゝ壞はれ落ちさうに冴え切つてゐた。

將來の仕事も生活も如何なつてゆくか分らないやうな彼は、この冴えに冴えた秋の夜の底にひたりながら、い

ひやうのない孤獨に攻めつけられてしまつた。

物音に驚いて眼をさました時には、父はもう隣りの部屋で茶を啜つてゐるらしかつた。その朝も晴れ切つた朝だつた。彼が起き上つて緣に出ると、それを窺つてゐたやうに內儀さんが出て來て、忙がしくぐるりの雨戶を開け放つた。新鮮な朝の空氣と共に、田園に特有な生き〳〵とした匂ひが部屋中に漲つた。父は捨てどころに困じて口の中に啣んでゐた梅干の種を勢ひよくグーズベリーの繁みに放りなげた。

監督は矢部の出迎へに出かけて留守だつたが、父の膝許には、もう澤山の帳簿や書類が雜然と開きならべられてあつた。

待つほどもなく矢部といふ人が事務所に着いた。彼ははじめてその人を見たのだつた。想像してゐたのとは丸で違つて、四十恰好の肥つた眇眼の男だつた。はき〳〵と物慣れてはゐるが、浮薄でもなく、解るところは氣持よく解る質らしかつた。彼と差向ひだつた時とは反對に、父はその人に對して殊の外快活だつた。部屋の中の空氣が昨夜とはすつかり變つてしまつた。

「なあに、疲れてなんか居りません。こんなことは每度で御座いますから」

朝飯をすますとかういつて、その人はすぐ身支度にかゝつた。而して監督の案內で農場內を見て廻はつた。

「私は實はこちらを拜見するのは始めてゞ、帳場に任かして何もさせてゐたもんで御座いますから、……尤も報告は確實にさせてゐましたから決してお氣に障はるやうな始末にはなつてゐない積りで御座いますが、何しろ少し手を延ばして見ますと、體がいくつあつても足りませんので」

さういつて矢部は怯げに日の光りをまともに受けながら聲高かに笑つた。その言葉を聞くと父は意外さうに相手の顏を見た。而して不安の色が、ちらりとその眼を通り過ぎた。

農場内を一通り見て廻はるだけで十分半日はかゝつた。晝少し過ぎに一同は丁度いゝ疲れ加減で事務所に歸りついた。

「先づこれなら相當の成績で御座います。私もお賴まれ甲斐があつたやうなものかと思ひますが、如何な思召しでせう」

矢部は肥つてゐるだけに額に汗を滲ませながら、高椽に腰を下ろすと疲れが急に出たやうな樣子でかういつた。父にもその言葉には別に異議はないらしく見えた。

然し彼は矢部の言葉をそのまゝ取り上げることは出來なかつた。六十戶にあまる小作人の小屋は、貸附を受けた當時とどれ程改まつてゐるだらう。馬小屋を持つてゐるのは僅に五六軒しかなかつたではないか。たゞだゞつ廣く土地が掘返されて作づけされたといふだけで成績が擧がつたといふことが出來るものだらうか。

玉蜀黍殼といたどりで周圍を圍つて、麥稈を積み乘せたゞけの狹い掘立小屋の中には、床も置かないで、ならべた板の上に蓆を敷き、どの家にも、まさかりかぼちやが大鍋に煮られて、それが三度々々の糧になつてゐるやうな生活が、開墾當時のまゝ續けられてゐるのを見ると、彼は如何しても或るうしろめたさを感じないではゐられなかつたのだが、矢部は一體それを如何見てゐるのだらうと思つた。然し彼はそれについては何もいはなかつた。

「兎も角これから一つ帳簿の方のお調べをお願ひ致しまして……」

その人の癖らしく矢部は滅多に言葉に締めくゝりをつけなかつた。それが如何にも手慣れた商人らしく彼には思はれた。

帳簿に向ふと父の顏色は急に引き締まつて、監督に對する時と同じやうになつた。用のある時は呼ぶからとい

ふので監督は事務所の方に退けられた。

きちやうめんに正坐して、父は例の皮表紙の懷中手帳を取り出して、豫てからの不審の點を、からんだやうな云ひ振りで問ひつめて行つた。彼はこの場合、懷手をして二人の折衝を傍觀する居心地の惡い立場にあつた。その代り、彼は生れてはじめて、父が商賣上のかけひきをする場面にぶつかることが出來たのだ。父は長い間の官吏生活から實業界にはいつて、主に銀行や會社の監査役をしてゐた。而して名監査役との評判を取つてゐた。一體監査役といふものが單に員に備はるといふやうな役目なのか、それとも實際上の威力を營利事業の上に持つてゐるものなのかさへ本當に彼にははつきりしてゐなかつた。又彼の耳にはいる父の評判は、營業者の側から云はれてゐるものなのか、株主の側から云はれてゐるものなのか、それもよくは解らなかつた。若し株主の側から出た噂ならだが、營業者間の評判だとすると、父は自分の役目に對して無能力者だと裏書されてゐるのと同樣になる。彼はこれらの關係を知り拔くことには格別の興味を有つてゐた譯ではなかつたけれども、偶然にも今日は眼のあたりそれを知るやうなはめになつた自分を見出したのだ。まだ見なかつた父の一面を見るといふ好奇心も動かないではなかつた。けれどもこれから展開されるだらう場面の不愉快さを想像することによつて、彼の心はどつちかといふと暗らくされ勝ちだつた。

矢部は父の質問に氣輕く答へはじめた。その質問の大部分が矢部に取つては物の數にも足らぬ小さなことのやうに、

「左樣ですか。さういふ事ならさう致しても私共の方では決して差支へ御座いませんが……」

といつて、輕く受け流して行くのだつた。思ひ入つて急所を突くつもりらしく質問をしかけてゐる父は、屢々背負ひ投げを喰はされた形で、それでも念を押すやうに、

「はあさうですか。それではこの件はこれでいゝのですな」

と附け足して、あとから訂正なぞはさせないぞといふ氣勢を示したが、矢部はたじろぐ風も見せずに平氣なものだつた。實際彼から見てゐても、父の申出での中には、餘りに些末のことに亙つて、相手に腹の細さを見透かされはしまいかと思ふ事もあつた。彼はさういふ時に思はず知らずはら〳〵した。何處までも謹恪で細心な、その癖商賣人らしい打算に疎い父の性格が、あまりに痛々しく生粹の商人の前にさらけ出されようとするのが劍呑にも氣の毒にも思はれた。

然し父はその持ち前の熱心と粘り氣とを武器にしてひた押しに押して行つた。さすがに商魂で鍛へ上げたやうな矢部も、こいつはまだ出くはさなかつた手だぞと思ふらしく、ふと行き詰まつて思案顏をする瞬間もあつた。

「事業の經過は大體得心が行きました。そこでと」

父は開墾を委託する時に矢部と取り交はした契約書を、「緊要書類」と朱書きした大きな狀袋から取り出して、

「この契約書によると、成墾引繼の上は全地積の三分の一をお禮としてあなたの方に差上げることになつてるのですが……それがこゝに認めてある百二十七町四段歩なにがし……これだけの坪數になるのだが、その通りですな」

「はいその通りで……」

と粗い皺の出來た、短い、然し形のいゝ指先きで數字を指し示した。

「さうですな。えゝ百二十七町四段二畝歩也です。ところがこれつぱかりの地面をあなたがこの山の中にお持ちになつてゐたところで、萬事に不便でもあらうかと……これは私だけの考へを云つてるんですが……」

「その通りで御座います。それで私もとうから……」

「とうから……」

「左樣、とうからこの際には土地はいたゞかないことにして、金でお願ひが出來ますれば結構だと存じてゐたので御座いますが……然し、何、これとても謂はゞ我儘で御座いますから……御都合も御座いませうし」

「とうから」と聞きかへした時に父の方から思はず乘り出した氣配があつたが、すぐとそれを引き締めるだけの用意は缺いてゐなかつた。

「それはこちらとしても都合のいゝことではあります。然し金高の上の折り合ひがどんなものですかな。昨夜早田と話をした時、聞きたゞして見ると、この邊の土地の賣買は思ひの外安いものですよ」

父は例の手帳を取り出して、最近賣買の行はれた地所の價格を披露しにかゝると、矢部はその言葉を奪ふやうに大體の相場を自分の方から切り出した。彼は昨夜の父と監督との話を聞いてゐたのだが、矢部のいふところは(始終札幌にゐてこの土地に來たのは始めてだと云つたにもかゝはらず)決してけたを外づれたやうなものではなかつた。それを聞く父は意外に思つたらしかつたが、彼も一寸驚かされた。彼は矢部と監督との間に何か話合ひがちやんと出來てゐるのではないかとふと思つた。まして父がさううたぐるのは當然なことだ。彼はすぐ注意して父を見た。その眼は明かに猜疑の光を含んで、鋭く矢部の眼をまともに見やつてゐた。

最後の白兵戰になつたと彼は思つた。

もう夕食時はとうに過ぎ去つてゐたが、父は例の一徹からそんなことは全く眼中になかつた。彼はかくばかり迫り合つた空氣をなごやかにするためにも、暫くの休戰は都合のいゝことだと思つたので、

「もう大分晩くなりましたから夕食にしたら如何(どう)でせう」

といつて見た。それを聞くと父の怒りは火の燃えついたやうに顏に出た。

「馬鹿なことをいふな。この大事なお話がすまない中にそんな失禮なことが出來るものか」

と矢部の前で激しく彼をきめつけた。興奮が來ると人前などを構つてはゐない父の性癖だつたが、現在矢部の前でこんなものゝいひ方をされると、彼も思はずかつとなつて、謂はゞ敵を前において、自分の股肱を罵る將軍が何處にゐるだらうと憤ろしかつた。けれども彼は默つて下を向いてしまつたばかりだつた。而して彼は自分の弱い性格を心の中でもどかしく思つてゐた。

「いゝ手前で御座いますならまだいたゞきたくは御座いませんから……全くこのお話は十分に御了解を願ふことにしないと何んで御座いますから……然し御用意が出來ましたのなら……」

「いや出來て居つても少しも構はんのです」

父は矢部の取りなし顏な愛想に對して膠なく應じた。父はすぐ元の問題に返つた。

「それは早田からお聞きのことかも知れんが、仰有つた値段は松澤農場に望み手があつて折合つた値段で、村一帶の標準にはならんのですよ。先づ平均一段歩二十圓前後のものでせうか」

矢部は父の餘りの素朴さにユウモアでも感じたやうな態度で、にこやかな顏を見せながら、

「それや……然しそれぢや全く開墾費の金利にも廻りませんからなあ」

といつたが、父は一氣にせきこんで、

「然し現在、さうした賣買になつてるのだから。あなた今開墾費と仰有つたが、かうつと、お前一つ算盤をおいて見ろ」

先程の荒い言葉の埋合せでもするらしく、父は稍ゝ面をやはらげて彼の方を顧みた。けれども彼は父と同樣珠算といふものを全く知らなかつた。彼がやゝ赤面しながらそこらに散らばつてゐる白紙と鉛筆とを取り上げるの

を見た父は、又しても理財にかけての我が子の無能さをさらけ出したのを悔いて見えた。けれども息子の無能な點は父にもあつたのだ。父は永年國家とか會社銀行とかの理財事務にたづさはつてゐたけれども、筆算のことにかけては、極度に鈍重だつた。そのために、自分の家の會計を調べる時でも、父はどうかすると一寸した計算に半日も坐りこんで考へるやうな時があつた。だから彼が赤面しながら紙と鉛筆とを取り上げたのは、そのまゝ父自身のやくざな肖像畫にも當るのだ。父は眼鏡の上からいま〳〵しさうに彼の手許をながめやつた。而して一段歩に要する開墾費の大體をしめ上げさせた。

「それを百二十七町四段二畝歩にするといくらになるか」

父はなほ彼の不器用な手許から眼を放さずにかう追つかけて命令した。そこで彼はもうたじろいでしまつた。彼は矢部の眼の前に自分の愚しさを暴露するのを感じつゝも、たど〳〵しく百二十七町を段に換算して、それに四段歩を加へはじめた。然し待ち遠しさうに二人から覗き込まれてゐるといふ意識は、彼の心の落着きを狂はせて、動ゝともすると簡單な九々すらが頭に浮かび上つて來なかつた。

「そこは七ぢやなからうが、四だらうが」

父はこんな差出口をしてゐたが、その言葉が段々荒々しくなつたと思ふと、突然「えゝ」といつて彼から紙をひつたくつた。

「その位のことが出來んでどうするのか」

明かに怒號だつた。彼は寧ろ呆氣に取られて思はず父の顔を見た。泣き笑ひと怒りと入れ交つたやうな口惜しげな父の眼も烈しく彼を見込んでゐた。而して極度の侮蔑を以て彼から矢部の方に向きなほると、

「あなた一つお願ひしませう、一寸算盤(そろばん)を持つて下さい」

とほと〳〵好意をこめたと聞こえるやうな聲で云つた。

矢部は平氣な顏をしながらすぐさま所要の答へを出してしまつた。

もうこれ以上彼のゐる場所ではないと彼は思つた。而してふいと立ち上ると榯はずに事務所の方に行つてしまつた。

座敷とは事かはつて、すつかり暗らくなつた圍爐裡のまはりには、集まつて來た小作人を相手に早田が小さな聲で浮世話をしてゐた。內儀さんは座敷の方に運ぶ膳のものが冷えるのを氣にして、椀のものをまたもとの鍋にかへしたりしてゐた。彼がそこに出て行くと、見る〳〵その一座の態度が變つて、いやな不自然さが漲つてしまつた。小作人達は慌てゝ立ち上るなり、草鞋のまゝの足を爐ばたから抜いて土間に下り立つと、恭しく彼に向つて腰を曲げた。

「若い旦那、今度はまあ御苦勞樣で御座います」

その中で物慣れたらしい半白の丈けの高いのが、一同に代つてのやうにかういつた。「御苦勞はこつちのことだぞ」さうその男の口の裏は云つてゐるやうに彼には感じられた。不快な冷水を浴びた彼は改めて不快な微溫湯を見舞はれたのだ。それでも彼は能ふかぎり小作人達に對して心置きなく接してゐたいと願つた。それは單にその場合のやり切れない氣持から自分がのがれ出たかつたからだ。小作人達と自分とが、本當に人間らしい氣持で互に膝を支へることが出來ようとは、夢にも彼は望み得なかつたのだ。彼と雖もさすがにそれほど自己を僞瞞することは出來なかつた。

けれども餘りといへば餘りだつた。小作人達は、

「さあ、ずつとお寄りなさつて。今日は晴れてゐるためかめつきり冷えますから」

と早田が口添へするにもかゝはらず、彼等はあてこすりのやうに暗い隅つこを離れなかつた。彼は輕い捨て鉢な氣分でその人達に構はず圍爐裡の横座に坐りこんだ。

内儀さんがランプを座敷に運んで行つたが、歸つて來ると父からのいひ附けを彼に傳へた。それは彼が小作人の一人々々を招いて、その口から監督に對する訴訟と、農場の規約に關する希望とを聞き取つておく役廻りで、昨夜寢る時に父が彼に命令した仕事だつた。小作人がつぎ〳〵に事務所をさして集まつて來るのもそのためだつたのだ。

事務所に薄ぼんやりと灯が點された。燻製の魚のやうな香ひと、燃えさしの薪の煙とが、寺の庫裡のやうにがらんと黝ずんだ廣間と土間とに籠つて、それが彼の頭の中へまでも浸み透つて來るやうだつた。何んともいへない嫌惡の情が彼を焦ら立たせるばかりだつた。彼はそこを飛び出して行つて畑の中の廣い空間に突立つて思ひ存分の呼吸がしたくて堪らなくなつた。壁訴訟じみたことを發いてかゝつて聞き取らねばならない程農場といふものゝ經營は入り組んでゐるのだらうか。監督が父の代から居ついてゐて、着實で正直なばかりでなく、自分を一人の平凡人であると見切りを付けて、滿足して農場の仕事だけを守つてゐるのは、彼の歩いて行けさうな道ではなかつたけれども、彼はさういふ人に對して暖かい心を持たずにはゐられなかつた。その人を除けものにしておいて、他人にその噂をさせて平氣で聞いてゐることは如何しても彼には出來ないと思つた。

兎も角、彼は監督に賴んで執務室に火を入れて貰つて、小作人を一人々々そこに呼び入れた。而して農場の經營に關する希望だけを聞くことにした。五六人の人が出はいりする前に、彼は早くもそんなことをする無益さを思ひ知らねばならなかつた。頭の鈍い人達は、申立つべき希望の端くれさへ持ち合はしてはゐなかつたし、才覺のある人達は、滅多なことは決して口にしなかつた。去年も今年も不作で納金に困る由をあれだけ匂はしておき

ながら、いざ一人になるとそんな明らかなことさへ訴へようとする人はなかつた。彼はそれでも十四五人までは我慢したが、それで全く絶望してもう小作人を呼び入れることはしなかつた。而して火鉢の上に掩ひかぶさるやうにして、一人で考へこんでしまつた。何んといふこともなく、父に對する反抗の氣持が、押へても押へても湧き上つて來て、如何することも出來なかつた。

程經てから內儀さんが恐る〳〵やつて來て、夕食の支度が出來たからといつて來た。食慾は不思議に無くなつてゐたけれども、彼はせう事なしに父の座敷へと歸つて行つた。そこはもうすつかり片付けられてゐて、矢部を正座に、父と監督とが鼎座になつて彼の來るのを待つてゐた。彼は押し默つたまゝ自分の座についたが、部屋にはいると共に感ぜずにはゐられなかつたのは、そこに漂つてゐる何んともいへぬ氣まづい空氣だつた。先程まで少しも物にこだはらないで、自由に話の舵を引いてゐた矢部が一番小むづかしい顏になつてゐた。彼の來るのを待つて箸を取らないのだと思つたのは間違ひらしかつた。

矢部は彼が部屋にはいつて來るのを見ると、餘計顏色を險はしくした。而してたうとう堪りかねたやうにその眇眼で父を睨むやうにしながら、

「折角のおすゝめでは御座いますが、私は矢張御馳走にはならずに發つて札幌に歸ると致します。何、あなた一晩先きに歸つてゐませば一晩だけ餘計仕事が出來るといふもので御座いますから……私は御覽の通りの靑造では御座いますが、幼少から商賣の方では隨分たゝきつけられたもんで……然し今夜ほどあらぬお疑ひを被つて男を下げたことは前後に御座いますまいよ。兎に角商賣だつて商賣道と申します。不束ながらそれだけの道は盡した積りで御座いますが、それを信じていたゞけなければお話には繼ぎ穗の出ようがありませんです。……ぢや早田君、君のことは十分申上げておいたから、これからこちらの人になつて一つ堅固にやつて上げて下さいまし。…

…私はこれで失禮致します」

とはき〳〵云つて退けた。彼にはこれは實に意外の言葉だつた。父は默つてまじ〳〵と癇癪玉を一時に敲きつけたやうな言葉を聞いてゐたが、父にしては存外穩かななだめるやうな調子になつてゐた。

「何も俺しはそれ程あなたに信用を置かんといふのではないのですが、事務はどこまでも事務なのだから明かにしておかなければ私の氣が濟まんのです。時刻も遲いからお泊りなさい今夜は」

「難有う御座いますが歸らせていたゞきます」

「さうですか。それでは已むを得ないが、では御相談の方は今までのお話通りでよいのですな」

「御念には及びません。よいやうにお取り計ひ下さればそれでもう結構で御座います」

矢部はこの上口をきくのも嫌やだといふ風で挨拶一つすると立ち上つた。彼と監督とは事務所の方まで矢部を送つて出たが、監督が急がしく靴をはかうとしてゐるのを見ると、矢部は押しかへすやうな手つきをして、

「早田君、君が送つてくれては困る。荷物は誰かに運ばせて下さい。それでなくてさへ旦那はお互の間を妙にからんで疑つておいでになるのだ。然し君のことはよくお話しておいたから……萬事が落着するまでは君は私から遠退いてゐるやうにしてくれ給へ。送つて來ちやいけませんよ」

それから矢部は彼の方に何かいひかけようとしたが、彼に對してさへ不快を感じたらしく、監督の方に向いて、

「六年間只奉公して擧句の果に痛くもない腹を探られたのは全くお初つだよ。私も今夜といふ今夜は、慾もへちまもなく腹を立てちやつた。ぢやこちらがすつかり片付いた上で、札幌にも出ておいでなさい。その節萬事私の方の片はつけますから。御免」

「御免」といふ挨拶だけを彼に殘して、矢部は星だけがきら〳〵輝いた眞暗らなおもてへ駈け出すやうに出て行

つてしまつた。彼はそこに立つたまゝ、こんな結果になつた前後の事情を想像しながら遠ざかつてゆく靴音を聞き送つてゐた。

その晩父は、東京を發つ時以來何處に忘れて來たかと思ふやうな笑ひ顏を取りもどして晩酌を傾けた。そこに行くと餘り融通の利かない監督では物足らない風で、彼を對手に話を擴げて行かうとしたが、彼は父に對する胸一杯の反感で見向きもしたくなかつた。それでも父は氣に障へなかつた。而して仕方なしに監督に向きなほつて、その父に當る人の在世當時の思ひ出話などをして一人興がつた。

「元氣のいゝ老人だつたよ、どうも。醉ふといつでも大肌ぬぎになつて、坐つたまゝ獨り角力を取つて見せたものだつたが、どうした癖か、唇を締めておいて、ぷつ〳〵と唾を霧のやうに吹き出すのには閉口した」

そんなことを大袈裟に云ひ出して父は高笑ひをした。監督も懷舊の情を催すらしく、人のいゝ微笑を口のはたに浮べて、

「ほんとにさうでした」

と氣の無さゝうな合槌を打つてゐた。

その中に夜はいゝ加減更けてしまつた。監督が膳を引いてしまふと、氣まづい二人が殘つた。然し父の方は少しも氣まづさうには見えなかつた。矢部の前で、十一二の子供でも叱りつけるやうな小言をいつたことなどもからつと忘れてしまつてゐるやうだつた。

「うまいことに行つた。矢部といふ男は豫てから中々手ごはい悧巧者だと睨んでゐたから、俺しは今日の策戰には人知れぬ苦勞をした。その甲斐あつて、先方がたうとう腹を立てゝしまつたのだ。掛引きで腹を立てたら立てた方が敗け勝負だよ。貸し越もあつたので實は餘計心配もしたのだが、そんなものを全部差引くことにして報酬

共に五千圓で農場全部がこちらのものになつたのだ。これでこの農場の仕事は成功に終つたといつていゝ譯だ」
「私には少しも成功とは思へませんが……」
　これだけをいふのにも彼の聲は震へてゐた。然し日頃の沈默に似ず、彼は今夜だけは思ふ存分に云つてしまはなければ、胸に物がつまつてゐて、當分は寢ることも出來ないやうな暴れた氣持になつてしまつてゐたのだ。
「今日農場内を歩いて見ると、開墾のはじめにあなたとこゝに來ましたね、あの時と百姓の暮し向きは同じなのに私は驚きました。小作料を徴收したり、成墾費が安く上つたりしたことには成功したかも知れませんが、農場としては一體どこが成功してゐるんでせう」
「そんなことを云つたつてお前、水呑百姓といへば何時の世にでも似たり寄つたりの生活をしてゐるものだ。それが金持になつたら汗水垂らして畑をするものなどは一人もゐなくなるだらう」
「それにしてもあれはあんまりひど過ぎます」
「お前は百歩を以て五十歩を笑つとるんだ」
「然し北海道にだつて小作人に對してずつといゝ分割りを與へてゐるところは澤山ありますよ」
「それはあつたとしたら帳簿を調べて見るがいゝ、屹度損をしてゐるから」
「農民をあんな慘めな狀態におかなければ利益のないものなら、農場といふ仕事はうそですね」
「お前は全體本當のことがこの世の中にあるとでも思つとるのか」
　父は息子の融通の利かないのにも呆れるといふやうにそつぽを向いてしまつた。
「思つてはゐませんがね。然し私には如何しても現在のやうにうそばかりで固めた生活ではやり切れません。矢部といふ人に對してのあなたの態度なども、お爲へになつたらあなたもおいやでせう。丸でぺてんですものね。

始めから先方に腹を立てさす積りで談判をするなどゝいふのは、馬鹿々々しい位私にはいやな氣持です」
彼は思ひ切つてこゝまで突込んだ。
「お前はいやな氣持か」
「いやな氣持です」
「俺しはいゝ氣持だ」
父は見下だすやうに彼を見やりながら、徐に眼鏡を外すと、兩手で顏を逆撫でに撫で上げた。彼は憤激ではち切れさうになつた。
「私はあなたをそんな方だとは思つてゐませんでしたよ」
突然、父は心の底から本當の怒りを催したらしかつた。
「お前は親に對してそんな口をきいていゝと思つとるのか」
「どこが惡いのです」
「お前のやうな薄ぼんやりには解るまいさ」
二人の言葉はぎごちなく途切れてしまつた。彼は堅い決心をしてゐた。今夜こそは徹底的に父と自分との間の黑白をつけるまでは夜明かしでもしよう。父はやゝ暫く自分の怒りをもて餘してゐるらしかつたが、やがて强ひてそれを押へながら、ぴちり〳〵と句點でも切るやうに話しはじめた。
「いゝか。よく聞いてゐて考へて見ろ。矢部は商人なのだぞ。商賣といふものはな、どこかで嘘をしなければ成り立たん性質のものなのだ。昔から士農工商といふが、あれは誠と嘘との使ひわけの程度によつて、順序を立てたので、仕事の性質がさうなつてゐるのだ。一寸見ると何んでもないやうだが、古人の考へにはおろそかでない

ところがあるだらう。俺しは今日その商人を相手にしたのだから、先方の得手に乘せられては、見す〳〵自分で自分を馬鹿者にしてゐることになるのだ。と云つてからに俺しには商人のやうな噓は出來ないのだから、無理押しにでも矢部の得手を封ずる外はないではないか」

彼はそんな手にはかゝるものかと思つた。

「そんなら或る意味で小作人を詐いて利益を壟斷してゐる地主といふものはあれはどの階級に屬するのでせう」

「かういへばあゝいふそのお前の癖は惡い癖だぞ。物はもつと考へてからいふがいゝ。土地を貸し付けてその地代を取るのが何が詐りだ」

「さういへば商人だつて幾分人の便利を計つて利益を取つてゐるんですね」

理につまつたのか、怒りに堪へなかつたのか、父は押し默つてしまつた。禿げ上がつた額の生え際まで充血して、手あたり次第に卷煙草を摘み上げて圍爐裡の火に持つてゆくその手は激しく震へてゐた。彼は父がこれ程怒つたのを見たことがなかつた。父は煙草をそこまで持つてゆくと、急に思ひかへして、そのまゝ疊の上に投げ捨てゝしまつた。

やゝ暫くしてから父は極めて落ち着いた物腰でさとすやうに、

「それ程父に向つて理窟がいひたければ、立派に一人前の仕事をして、立派に一人前の生活が出來た上でいふがいゝ。何一つようし得ないで物を云つて見たところが、それは得手勝手といふものだぞ。……聞いてゐればお前はさつきから俺しのすることを噓だ〳〵といひ罵つとるが、お前は本當のことを何處でしたことがあるかい。人と生れた以上、かういふ娑婆にゐればいやでも譃をせにやならんのは人間の約束事なのだ。噓の中でも出來るだけ噓をせんやうにと心懸けるのが德といふものなのだ。それともお前は俺しの眼の前に噓をせんでいゝ世の中を

作つて見せてくれるか。そしたら俺しもお前に未練なく兜を脫ぐがな」

父のこの言葉はしつかと彼の心の眞唯中を割つて過ぎた。實際彼は刃のやうなひやつとしたものを肉體のどこかに感じたやうに思つた。而して凝り上がるほど肩をそびやかして興奮してゐた自分を後ろめたく見出した。父は更に言葉を續けた。

「こんな小さな農場一つをこれだけにするのにも俺しがどれ程苦心をしたかお前は現在見てゐた筈だ。いらざる取越し苦勞ばかりすると思ふかも知れんが、あれ程の用意をしても世の中の事は水が漏れたがるものでな。そこはお前のやうな理窟一遍では迚も解るまいが」

成る程それは彼に取つては手痛い刃だ。そこまで押しつめられると、今迄の彼は何事もいひ得ずに默つてしまつてゐた。然し今夜こそはそこを突きぬけよう。而して父に彼の本質をしつかり知つて貰はうと心を定めた。

「解らないかも知れません。實際あなたが東京を發つ前からこの事ばかり思ひつめていらつしやるのを見てゐると、失禮ながらお氣の毒にさへ感じた程でした。……私は全くさうした理想屋です。夢ばかり見てゐるやうな人間です。……けれども私の氣持もどうか考へて下さい。私はこれまで何一つ仕出來してはゐません。自體何をすればいゝのか、それさへ見極めがついてゐないやうな次第です。ひよつとすると生涯かうして考へてゐるばかりで暮すのかも知れないんですが、兎に角嘘をしなければ生きて行けないやうな世の中が無我無性にいやなんです。一寸待つて下さい。も少し云はせて下さい。……嘘をするのは世の中ばかりぢや勿論ありません。私自身が嘘のかたまり見たいなものです。けれどもさうでありたくない氣持がやたらに私を攻め立てるのです。だから自分の信じてゐる人や親しい人が私の前で平氣で嘘をやつてるのを見ると、思はず知らず自分のことは棚に上げて腹が立つて來るのです。これも仕方がないと思ふんですが……」

「遊んでゐて飯が食へると自由自在にそんな氣持も起るだらうな」

何を太平樂をいふかと云はんばかりに、父は憎々しく皮肉を云つた。

「せめては遊びながら飯の食へるものだけでもこんなことを云はなければ罰があたりますよ」

彼も思はず皮肉になつた。父に養はれてゐればこそこんな辱しめも受けるのだ。何んといふ弱い自分だらう。彼は皮肉をいひながらも自分の腑甲斐なさをつく〴〵思ひ知らねばならなかつた。それと同時に親子の關係がどんな釘に引かゝつてゐるかを垣間見たやうにも思つた。親子と雖も互ひの本質に來ると赤の他人に過ぎないのだなといふ淋しさも襲つて來た。乞食にでもなつてやらう、彼はその瞬間はたとさう思つたりした。自分の本質のために父が甘んじて衣食を給してくれてゐるとの信頼が、三十にも手のとどく自分としては蟲のよ過ぎる事だつたのだと省みられた。

恐らく彼のその心の動きが父に鋭く響いたのだらう、父は今までの怒りに似げなく、自分にも思ひがけないやうな溜息を吐いた。彼は思はず父を見上げた。父は疊一疊程の前をぢつと見守つて遠いことでも考へてゐるやうだつた。

「俺しがかうして齷齪とこの年になるまで苦勞してゐるのもをかしなことだが……」

父の聲は改まつてしんみりと獨りごとのやうになつた。

「今お前は理想屋だとかいつたな。それだ。俺しはこの通りの男だ。土百姓同樣の貧乏士族の家に生まれて、生まれるとから貧乏には慣れてゐる。物心のついた時には父は遠島になつてゐて母ばかりの暮しだつたので、十二の時にもう元服して、お米倉の米札を書いて母と子二人が食ひつないだもんだつた。それに俺しには道樂といふ道樂も別段あるではなし、一家が暮して行くのには勿體ない程の出世をしたといつてもいゝのだ。今のやうな贅

澤は實は俺しに取つては法外なことだがな。けれどもお前はじめ五人の子を持つて見ると、親の心は奇妙なもので先きの先きまで案じられてならんのだ。……それにお前は、俺しのしつけが惡るかつたとでもいふのか、生まれつきなのか、お前の今云つた理想屋で、てんで俗世間のことには無頓着だからな。譬へばお前が世過ぎの出來るだけの仕事にありついたとしても、弟や妹達にどんなやくざ者が出來るか、不仕合が持ち上がるか知れたものではないのだ。さうした場合にこの農場にでもはいり込んで土をせゝつてゐれば兎にも角にも食ひつないでは行けるだらうと思つたのが、こんな面倒な仕事をはじめた俺しの趣意なのだ。……長男となれば、日本では、何んといつてもお前にあとの子供達の面倒がかゝるのだから……」

父の言葉は段々本當に落ち着いてしんみりして來た。

「俺しは元來金のことにかけては不得手至極な方で、人一倍に苦心をせにや人並みの考へが浮かんで來ん。お前達から見たら、この年をしながら金のことばかり考へてゐると思ふかも知らんが、人が半日で思ひつくところを俺しは一日がゝりでやつと追ひついて行く有樣だから……」

さういつて父は取つてつけたやうに笑つた。

「今の世の中では自分が轉んだが最後、世間はふり向きもしないのだから……まあお前も考へどほりやるならやつて見るがいゝ。お前が何んと思はうと俺しは俺しだけのことはして行くつもりだ。……『その義にあらざれば一介も受けず。その義にあらざれば一介も與へず』といふ言葉があるな。今の世の中で先づ嘘のないのはかうした生き方の外にはないらしいて」

かういつて父はぽつゝりと口をつぐんだ。

彼は何もいふことが出來なくなつてしまつた。「よしやり抜くぞ」といふ決意が鐵丸のやうに彼の胸の底に沈む

のを覺えた。不思議な感激――それは血のつながりからのみ來ると思はしい熱い、然し同時に淋しい感激が彼の眼に涙をしぼり出さうとした。

厠に立つた父の老いた後姿を見送りながら彼も立ち上がつた。緣側に出て雨戸から外を眺めた。北海道の山の奥の夜は靜かに深更へと深まつてゐた。大きな自然の姿が遠く彼の眼の前に擴がつてゐた。

（一九二三年四月、十二日拂曉）
（一九二三年五月、「泉」所載）

童話集

眞夏の夢

——ストリンドベルヒ——

北の國も眞夏の頃は花嫁のやうな裝ひを凝らして、大地は歡びに滿ち、小川は走り、牧場の花は眞直に延び、小鳥は歌ひさへづります。その時一羽の鳩が森の奧から飛んで來て、寢付いたなりで日を暮す九十に餘るお婆さんの家の窓近く羽を休めました。

物の二十年も臥せつたなりのこのお婆さんは、二人の息子が耕すさゝやかな畑地の外に、窓越しに見るものはありませなんだが、お婆さんの窓の硝子は、虹のやうな樣々な色のを篏めてあつたから、そこから覗く人間も世間も、普通のものとは異つて居ました。枕の上でちよつと頭さへ動かせば、眼に見える景色が赤、黃、綠、靑、鳩羽と云ふやうに變りました。冬になつて樹々の梢が、銀色の葉でも連ねたやうに霜で包まれますと、お婆さんは枕の上で、一寸身動きしたばかりでそれを綠にしました。實際は灰色でも野は綠に空は蒼く、世の中はもう夏の通りでした。お婆さんはこんな風で、魔術でも使へる氣でゐると退屈をしませんでした。そればかりではありません。この窓硝子にはもう一つ變つた所があつて、硝子の刻み具合で見るものを大きくも小さくもする事が出來るやうになつて居りました。だから若し大きな息子が腹を立てゝ歸つて來て、庭先で怒鳴りでもするやうな事があると、お婆さんは以前のやうな、小さい、言ふ事を聽く子供にしようと思つたゞけで、即座に小つぽけに見る事も出來ましたし、孫だちがよち／＼步きで庭に出て來るのを見るにつけ、その生ひ先を考へると、ワン、ツー、スリー、擴大の硝子から覗きさへすれば、見るまに背の高い、育ち上つた見事な大男になつてしまひました。

こんな面白い窓ではありますが、夏が來るとお婆さんはその窓を閉け放させました。いかな窓でも夏の景色ほどな景色は見せてくれませんから。扨て夏の中でも優れた美しい聖ヨハネ祭に、そのお婆さんが畑と牧場とを見渡してゐますと、ひよつくり鳩が歌ひ始めました。聲も美しくエス・キリスト、偖は天國の歡喜をほめ讃へて、重荷に苦しむものや、浮世の辛さの限りを嘗めたものは、殘らず來いと呼び立てました。

お婆さんはそれを聞きましたが、その日はこの世も天國程に美しくつて、是れ以上のものを欲しいとも思ひませんでしたから、禮を云つて斷つてしまひました。

で鳩は今度は牧場を飛び越して、ある百姓が頻りと井戸を掘つてゐる山の中の森に來ました。その百姓は深い穴の中に居て、大空も海も牧場も見ないこんな人こそは、きつと天國に行きたいに違ひないと思ひましたから、鳩は樹の枝の上で天國の歡喜を鳩らしく歌ひ始めました。

所に這入つて、頭の上に六尺も土のある樣子はまるで墓の穴の底にでも居るやうでした。

所が百姓は、

「厭やです。私は先づ井戸を掘らんければなりません。でないと夏分のお客さんは水に困るし、あの可哀さうな奥さんと子供衆も居なくなつてしまひますからね」

と云ひました。

で鳩は今度は海岸に飛んで行きました。そこでは先程の百姓の兄弟にあたる人が曳き網をしてゐました。鳩は蘆の中にとまつて歌ひました。

その男も云ひますには、

「厭やです。私は何より先に家で食ふだけのものを作らねばなりません。でないと子供等が饑じいつて泣きま

す。あとの事、あとの事。まだ天國の事なんか考へずともよろしい。死ぬ前には生きると云ふ事があるんだから」

で鳩は又百姓の云つた可哀さうな奥さんが夏を過ごしてゐる、大きな田舍の住宅にとんで行きました。その時奥さんは緣側に出て手ミシンで縫物をしてゐました。顏は百合の花のやうな血の氣ない顏、頭の毛は喪の面被（ベール）のやうな黑い髮、而して罌粟（けし）のやうな赤い毛の帽子を被つて居ました。奥さんは聖ヨハネの祭日に娘に着せようとて、美しい前掛を縫つて居ました。娘はお母さんの足許の床の上に坐つて、布切の端を切りこまざいて遊んで居ました。

「何故パパは歸つていらつしやらないの」

とその小さい兒が尋ねます。

是れこそはその若いお母さんには一番辛い問であるので、答へる事が出來ませんかつた。お父さんはお母さんよりもつと深い悲しみを持つて、今は遠い外國に行つてゐるのでした。

ミシンは少し損じては居ますが、それでも縫ひ進みました。――人の心臟であつたら出血のために動かなくなつてしまふ程澤山針が布をさし通して、一と縫每に絲をしめて行きます――不思議な。

「ママ今日私は村に行つて太陽が見たい、此處は暗いんですもの」

とその小さな兒が申しました。

「晝過ぎになつたら、太陽を拜みにつれて行つてあげますからね」

さう云へば此處は、此の島の海岸の高い崖の間にあつて暗らい處でした。おまけに住宅は松の樹蔭になつて居て、海さへ見えぬほどふさがつて居ました。

「それから澤山玩具を買つて頂戴なママ」

「でも澤山買ふだけのお金がないんですもの」
とお母さんは云ひながら一と際哀れにうなだれました。昔は有り餘つた財産も今は無けなしになつて居るのです。

でも子供が情けなささうな顔付になると、お母さんはその子を膝に抱き上げました。

「さあ私の頸をお抱き」

子供はその通りにしました。

「ママをキスして頂戴」

而して小鳥のやうに半分開いたこの子の口からキスを一つもらひました。而してヒヤシンスのやうに青いこの子の眼で見やられると、母の美しい顔は、子供と同じな心置きのない無邪氣さに還つて、まるで太陽の下に置かれた幼兒のやうに見えました。

「此處で私は天國の事などは歌ふまい。然し出來るなら何かこの二人の役に立ちたいものだ」

と鳩は思ひました。

而して鳩は、この奥さんが是れから用足しに行く「日の村」へと飛んで行きました。

その中に午後になりましたから、この可愛いゝ奥さんは腕に手籠をかけて、子供の手を引いて出かける用意をしました。奥さんはまだ一度もその村に行つた事はありませんが、島の向う側で日の落ちる方に在ると云ふ事は知つて居ました。又其處に行く途中には柵で圍まれた六つの農場と、六つの門とがあると云ふ事を、百姓から聞かされて居ました。

でいよ／＼出かけました。

やがて二人は石ころや木株のある嶮しい坂道にかゝりましたので、お母さんは子供を抱きましたが、中々重い事でした。

この子供の左脚は大變弱くつて、うつかりすると曲つてしまひさうだから、ひどく使はぬやうにしなければならぬと、お醫者の云つた事があるのでした。

若いお母さんはこの大事な重荷のために氣息を切つて、森の中は暑いものだから、汗の玉が顔から流れ下りました。

「咽喉がかわきました、ママ」

と幼い娘は泣きつくのでした。

「いゝ兒だから堪らへられるだけ堪らへて御覽なさい。彼方に着きさへすれば水を上げますからね」

とお母さんは云ひながら、赤ん坊のやうな乾いたその子の口を吸うてやりますと、子供はかわきも忘れてほゝゑみました。

でも日は照り切つて、森の中の空氣はそよともしません。

「さあ下りて少し歩いて見るんですよ」

と云ひながらお母さんは娘を下ろしました。

「もう草臥れてしまつたんですもの」

子供は泣く〳〵坐りこんでしまひます。

所が其處に綺麗な綺麗な赤薔薇の色をした小さい花が咲いて巴旦杏のやうな香ひをさせて居ました。子供は是れまでそんな小さな花を見た事がなかつたものですから、又にこ〳〵と微笑みましたので、それに力を得て、お

母さんは子供を抱き上げて、更らに行く手を急ぎました。

その中に第一の門に來ました。二人はそこを通つて跡には鎖をかけて置きました。

すると何處かで馬の嘶くやうな聲が聞こえたと思ふと、放れ馬が行く手に走り出て道の眞中にたち塞がつて啼きました。その啼き聲に應ずる聲が又森の四方に響き渡つて、大地はゆるぎ、枝は戰ひ、石は飛びました。而して途方に暮れた母子二人は二十匹にも餘る野馬の群れに圍まれてしまひました。

子供は顏をお母さんの胸に埋めて、心配で胸の動悸は小時計のやうにうちました。

「私怖い」

と小さな聲で云ひます。

「天に在します神樣――お助け下さい」

とお母さんは祈りました。

と黑鳥の歌が松の木の間で聞こえると共に馬共はてんでばらばらに何處かに行つてしまつて、四圍は元の靜けさにかへりました。

そこで二人は第二の門を通つて又鎖をかけました。

その先には作物を作らずに休ませて置く畑があつて、森の中よりもずつと熱い日が射して居ました。灰色の土塊が長く幾畦にもなつて居ると思ふと、急にそれが動き出したので、よく見ると羊の群れの背が見えて居たのでした。

羊、その中にも小羊はおとなしい獸ですが、牡羊はいぢめもしないのに無暗に人にかゝる惡戲をする奴で、うつかりはして居られません。所がその牡羊が一匹小溝を飛び越えて道の眞中にやつて來ました。而して頭を下げ

たなりで後しざりをします。

「私怖いママ」

と胸をどきつかせながら娘が申します。

「惠み深い在天の神樣、私共をお助け下さい」

と云つて天の一方を見上げながらお母さんが祈りますと、そこに蝶のやうな羽ばたきをさせながら、小さな雲雀が降りて居ました。そしてそれが歌を唄ひますと、牡羊は例の灰色の土塊の中に姿を隱してしまひました。

そこで今度は第三の門に來ましたが、此處はじゆく／＼の濕地ですから、うつかりすると脚が滅入り込みます。處々の草叢は綿の木の白い花で飾つた墓のやうにも思はれます。何しろ泥の中に落ちこまないやうに眞直に歩かなければなりませんでした。おまけに此處には、子供達がうつかりすると取つて叱られる、毒のある黑木いちごが生えて居ました。娘は情けなささうにそれを見ました。まだこの兒は毒とは何んのことだか知りませんでしたから。

なほ歩いて行きますと、樹の間から何か白いものがやつて來るのに氣が付きました。見る中に太陽は隱れて、白霧が四圍を取りまきました。如何にも氣味がよくありません。

する中にその霧の中から、ねぢ曲つた二本の角のある頭が出て、それが吼えると、續いて澤山の頭が現はれ出て、段々近づいて來ました。

「怖う御座んす、ママ、本當に怖い」

と子供が申します。

「偉大な惠み深い神樣、私共に憐れみを垂れさせ給へ」

とお母さんは道のわきに行つて、草叢と草叢との間の沼の中へ身を伏せて心の底から祈りました。
その時響を立てゝ、海から大風が來て森の中を吹き拔けました。この大きな神風に遭つては森の中の樹と云ふ樹は皆なびき伏しました。その中で一本の若い松も幹をたわめて、寄る邊(べ)ないこのお母さんの耳に木の梢が何かさゝやきました。而してお母さんが娘を抱かない方の手を延ばしてその枝をつかむと、松は自ら立ちなほつて、憂ひに沈むお母さんを澤の中から救ひ上げてくれました。

その時霧は吹き拂はれて、太陽は又照り始めました。而して二人は第四の門に近づきました。途中で帽子を落して來たお母さんは、髮の毛で子供の淚を拭つてやりますと、子供はうれしげにほゝゑみました。そのほゝゑみが又哀れなお母さんの心を慰めて、今までの苦しみを忘れて第五の門に着く程の力が出て來ました。此處まで來るともう氣が確かになりました。何故と云ふと、向うには赤い屋根と旗が見えますし、道の兩側には白あぢさゐと野薔薇が戀でもして居るやうに二つづゝ竝んで植つて居ましたから。

娘も獨りで步けました。而して手籃一杯に花を摘み入れました。聖ヨハネ祭の夜宮には人形のリザが、その花の中でいゝ夢を見て眠るんです。

こんな風に面白く、二人は苦勞も忘れて步きました。もう赤楊(はんのき)の林さへぬければ「日の村」へ着く筈でした。やがて二人は岡を登つて右に曲らうとすると、そこに又牡牛が一匹立つて居るのに出遇ひました。

逃げる事も叶(かな)ひません。くづをれてお母さんは膝をつき、子供をねかしてその上を護るやうに自分の頭を垂れますと、長い毛が黑い面被(ベール)のやうに垂れ下りました。

而して兩手をさし出して默つたなりで祈りました。子供の額からは苦悶の汗が血の滴(したゝ)りのやうに土の上に落ちました。

「神樣、私の命をお召しになるとも、この子の命だけはお助け下さい」

と祈ると、頭の上で羽ばたきの音がしますから、見上げると、白鳩が村の方に飛んで行つて牡牛の姿はもうありませんでした。

お母さんが子供をさがしますと、道の傍で苺を摘んで居りました。而してお母さんはその苺を誰がそこに生やして下さつたかをうなづきました。

而してとう〳〵二人は六番目の門を潜つて町の中をさまよひ歩きました。

その町と云ふのは、大きな菩提樹や楓の樹の茂つた下を流れる、綠の堤の小川の岸にありました。而して岡の上には赤い鐘樓のある白い寺だの、ライラックの咲き揃つた寺領の庭だの、素馨の花に埋もれた郵便局だの、大槲樹の後ろにある園丁の家だのがあつて、見るもの悉く花やかです。そよ風になびく旗、河岸や橋に繫がれた小舟、今日こそ聖ヨハネの祭日だと云ふ事が察せられます。

所がそこには人の子一人居りません。二人は先づ店に買物に行つて、そこで娘は何か飲むつもりでしたが、店は皆んな閉つて居ました。

「ママ咽喉がかわきますよ」

二人は郵便局に行きました。そこも閉つて居ます。

「ママお腹がすきました」

お母さんは默つたまゝでした。子供は何故日曜でもないのに店が閉つて、そこいらに人が居ないのか判りませんでした。娘は園丁の所に行つて見ましたが、そこも閉つて居て、大きな犬が門の所に寝ころんで居るばかりでした。

「ママ草臥(くたび)れました」
「私もですよ、何處かで水を飲みませうね」
で二人は家毎を訪れて見ましたが、いづれも閉めてありました。子供はこの上歩く事は出來ません、脚はつかれて跛(びつこ)をひいて居ました。お母さんは娘の美しい體が横に曲つたのを見ると、もう堪(たま)らないで、道の傍に坐つて子供を抱き取りました。子供はすぐ眠入つてしまひました。
その時鳩がライラックに來てとまつて天國の歡喜と絕えせぬこの世の苦しみ悲しみを聲美しく歌ひました。
お母さんは眠つた子供の仰向いた顏を見おろしました。顏のまはりの白いレースが丁度白百合の花びらのやうでした。それを見るとお母さんは天國を胸に抱いてるやうに思ひました。
ふと子供は眼をさまして水を求めました。
お母さんは默つて居る外ありませんでした。
子供は泣き出して、
「お家に歸りませう」
と申します。
「あの恐ろしい旅をもう一度ですか。迚(とて)も迚も。私は海の中に這入る方がまだましだと思ふ」
とお母さんは答へましたが、
矢張子供は、
「お家に行きたい」
と云ひ張りました。

お母さんは立ち上りました。

見ると彼方の岡の後ろに若い赤楊(はんのき)の林がありましたが、よく見て居るとそれが頻(しきり)に動きます。それでお母さんは、直ぐそこには人が集まつて、聖ヨハネ祭の草屋を作るために、その葉を採つて居るのだと氣が付きました。而してそこには水があると見込をつけてそつちに行つて見ました。

途中には生垣(いけがき)に取りめぐらされて白い門のある小さな住居のあるのを見ましたが、戸は開いたまゝになつて快く二人の這入るに任せてありました。お母さんは門を這入つて、芍薬(しやくやく)と耘斗葉(おまき)の園に行きました。見ると窓には皆んなカーテンが引いてありまして、而もそれが悉く白い色でした。唯一つの屋根窓だけが開いて居て、二つの棕櫚の葉の間から白い手が見えて、小さなハンケチを、別れを惜んで振るかのやうに振つて居ました。

お母さんは又入口の階段を上つて見ますと、生え茂つた草の中に桃金孃(てんにんくわ)と白薔薇との花環が置いてありましたが、花嫁の持つのにしては大き過ぎて見えました。

それから露縁(ぬれえん)に上つて案内を乞うて見ました。

答へる人はありませんので住居の中に這入つて行きました。床の上に薔薇に埋められて、銀の脚を持つて黒綾の棺が置いてありました。而してその棺の中には、頭に婚禮の冠を着けた若い娘がねかしてありました。

その室の壁と云ふのは新しい粗(あら)けづりの松板でヴァニスをかけたゞけですから、節(ふし)がよく見えて居ました。黒ずんだ枝の切去られた名ごりの卵形の節の數々は眼の玉のやうに思ひなされました。

この奇怪な壁の姿に始めて眼をとめたものは娘でした。

「まあ澤山な眼が」

とさう云ひ出しました。

なる程色々な眼がありました。大きくつて親切らしい眞面目な眼や、小さく輝く愛嬌のある子供の眼や、白眼の多過ぎる怒つたらしい眼や、心の中まで見ぬきさうな隙のない眼などがありました。叉そこに死んで居る娘をなつかしさうに打ち見やる、大きなやさしい母らしい眼もありまして、その眼中には透徹るやうな松脂の涙が宿つて、夕日の光をうけて金剛石のやうにきら〲と光つて居ました。

「そこに居るお孃さんは眠つていらつしやるの」

と子供は初めて死骸に氣がついて、お母さんに尋ねました。

「さうです、眠つていらつしやるんです」

「花嫁さんでせうか、ママ」

「さうです花嫁さんです」

よく見るとお母さんはその娘を見知つて居るのでした。その娘は眞夏の頃歸つて來るあの船乘の花嫁となる筈でしたが、その船乘が秋にならなければ歸れないと云ふ手紙をよこしたので、落膽してしまつたのでした。木の葉が落ち盡して、木枯しの吹き始める秋まで待つ事は堪へ切れなかつたのです。

お母さんは鳩の歌に耳を傾けて、その云ふ言葉がよく判(わか)つて居たのですから、この屋敷を出て行くにつけても行く先が知れて居ました。

重い手籃を門の外に置いて、子供を抱き上げて、自分と海岸との間に横はる廣野をさしてお母さんは歩き出しました。その野は花の海で、花粉のためにさま〲な色にそまつたお母さんの白い裳(もすそ)のまはりで、花共が絅々とさゝやき交はして居ました。蜂鳥や、蜂や、胡蝶が翅を擧げて歌ひながら、綾のやうな大きな金色の雲となつて二人の前を走つて歩きました。お母さんは歩みも輕く海岸の方に進んで行きました。

河の中には白い帆艇が帆を一ぱいに張つて、埠頭を目がけて走つて來ましたが、舵の座には誰も居りませんでした。お母さんは花と花の匂ひにひたりながら進みますから、その裳は花床よりもなほ綺麗な色になりました。お母さんは海岸の柳の木蔭に足をとめましたが、その柳の幹と枝とにはさまつた巣が、風のまに〳〵柳がなびくにつれて、搖れ動いて小鳥等を夢に誘ひます。娘はその小鳥等を撫でゝやりたがりました。

「いゝえ、鳥の巢には觸るものではありません」

とお母さんは云ひました。

かうして二人が海岸の石原の上に立つて居ると、一艘の舟がすぐ足許に來て着きましたが、中には一人も乘手がありませんでした。

でお母さまは子供を連れてそれに乘りました。船はすぐ方向をかへて、そこを離れてしまひました。

墓場の傍を帆走つて行く時、凡ての鐘は鳴りましたが、それは少しも悲しげには響きませんでした。

船が段々遠ざかつてフォールドに來て見ますと、そこからは太洋の波が見えました。

娘はかくまで海がおだやかで青いのに大喜びをしましたが、よく見ると二人の帆走つて居るのは海原ではなくつて美しく咲き揃つた矢車草の花の中でした。娘は手を延ばしてそれを摘み取りました。

花は起きたり臥したりして漣のやうに絃に音をたてました。暫くすると二人は又白い霧に包まれました上に本當の波の聲さへ聞こえて來ました。然し霧の上では雲雀が高く囀つて居ました。

「どうして雲雀は海の上なんぞで鳴くんでせう」

と子供が聞きました。

「海があんまり綠ですから、雲雀は野原だと思つてゐるんでせう」

とお母さんは說き明しました。

と忽ち霧は消えてしまつて、空は紺靑に澄み渡つて、その中を雲雀がかけて居ました。遠い〳〵所に木の茂つた島が見えます。白砂の上を人々が手を取り合つて行きかひして居ります。祭壇から火の立ち登る柱廊下の上に聳えた黃金の圓屋根に夕暮の光が反映つて、島の空高く薔薇色と藍綠色との虹が懸つて居ました。

「あれは何んですか、ママ」

お母さんは何んと答へていゝか知りませんでした。

「あれが鳩の歌つた天國ですか、一體天國とは何んでせう、ママ」

「そこはね、皆んながお互に友達になつて、悲しい事も爭闘もしない所です」

「私はそこに行きたいなあ」

と子供が云ひました。

「私もですよ」

と憂さ辛さに浮世をはかなんだ淋しいお母さんも云ひました。

（一九一四年一月一日、「小樽新聞」所載）

燕と王子

（飜案）

燕と云ふ鳥は處をさだめず飛びまはる鳥で、暖かい所を見附けてお引越しを致します。今は日本が暖かいからおもてに出て御覽なさい。羽根が紫の樣な黑でお腹が白で、喉の處に赤い頸卷をしておとう樣の御召しになる燕尾服の後部見た樣な、尾のある雀より餘程大きな鳥が眼まぐるしい程活潑に飛び廻つて居ます。此のお話は其の燕のお話です。

燕の澤山住んで居るのはエヂプトのナイルと云ふ世界中で一番大きな川の岸です——おかあ樣に地圖を見せておもらひなさい——其處は始終暖かでよいのですけれども、燕も時々はあきると見えて群れを作つて引越しをします。或る時其の群れの一つが歐羅巴に出懸けて、獨逸と云ふ國を流れて居るライン河のほとりまで參りました。此の河は大層綺麗な河で西岸には古いお城があつたり葡萄の畑があつたりして、河添ひには折りしも夏ですから葦が青々と凉しく茂つて居ました。

燕は面白くつて堪りません。丸で皆んなで鬼ごつこをする樣にかけちがつたりすりぬけたり葦の間を水に近く日がな三界遊び暮しましたが、其の中一つの燕は生ひ茂つた葦原の中の一本のやさしい形の葦と大變仲がよくつて羽根が疲れると、其のなよ〳〵とした莖先きにとまつて嬉し相にブランコをしたり、葦とお話をしたりして日を過ごして居ました。

其の中に長い夏もやがて末になつて、葡萄の果も紫水晶の樣になり、落ちて地に腐つたのが、甘い香を風に送

る樣になりますと、村の娘達が澤山出て來て籃にそれを摘み集めます。摘み集めながら歌ふ歌が面白いので、燕達も歌ひつれながら葡萄摘みの袖の下だの頭巾の上だのを飛びかけつて遊びました。然し軈て葡萄の收穫も濟みますと、もう冬籠りの支度です。朝毎に河面は霧が濃くなつて薄寒くさへ思はれる時節となりましたので、氣の早い一人の燕がもう歸らうと云ひ出すと、他のもさうだと云ふのでそろ〳〵南に向つて旅立ちを始めました。

唯やさしい形の葦と仲のよくなつた燕は歸らうとは致しません。朋輩が誘つても諌めても、まだ歸らないのだとだゞをこねてとう〳〵獨りぽつちになつて仕舞ひました。さうなると便りにするものは形のいゝ一本の葦ばかりであります。或る時其の燕は二人ツきりで御話をしようと葦の所に行つて穗の出た莖先きにとまりますと、可哀相に枯れかけて居た葦はぽつきり折れて穗先きが垂れて仕舞ひました。燕は驚いていたはりながら、

「葦さん、僕は大變な事をしたねえ、痛いだらう」

と申しますと葦は悲し相に、

「それは少しは痛う御座います」

と答へます。燕は葦が可哀相ですから慰めて、

「だつて好いや、僕は葦さんと一所に冬まで居るから」

すると葦が風の助けで首をふりながら、

「それはいけません貴方は未だ霜と云ふ奴を見ないんですか。それは恐ろしい白髮の爺で、貴方の樣なやさしい綺麗な鳥は手もなく取つて殺します。早く暖かい國に歸つて下さい、それでないと私は尙ほ悲しい思ひをしますから。私は今年は此の儘で黃色く枯れてしまひますけれども、來年貴方の來る時分には又若くなつて綺麗になつて貴方と御友達になりませう。貴方が今年死ぬと來年は私一人つきりで淋しう御座いますから」

と尤もな事を親切に云つて吳れたので、燕もとう〳〵納得して殘り惜しさは山々ですけれども見かへり〳〵南を向いて心細い獨り旅をする事になりました。

秋の空は高く晴れて西から吹く風がひや〳〵と膚身にこたへます。今日は或る百姓の軒下、明日は木蔭に朽ち果てた水車の上と云ふ樣に何處と云ふ事もなく宿を定めて南へ〳〵とかけりましたけれども、容易に暖かい所には出ず、氣候は一日々々と寒くなつて、大好きな葦の云つた事が今更に身に沁みました。葦と別れてから幾日目でしたらう。或る寒い夕方野こえ山こえ漸く一つの古い町に辿り着いて、偖て何處を一夜のやどりとしたものかと考へましたが思はしい所もありませんので、日は暮れるし仕方がないから夕日を受けて金色に光つた高い王子の立像の肩先きに羽を休める事にしました。

王子の像は石だゝみの敷かれた往來の四つ角に立つて居ます。爽かにもたげた頭からは黃金の髮が肩まで垂れて左の手を帶刀のつかに置いて屹とした姿で町を見下して居ます。大變心のやさしい王子であつたのが、まだ年の若い中に病氣で崩くなられたので、王樣と皇后が大層悲しまれて靑銅の上に金の延べ板をかぶせて其の立像を造り記念の爲めに町の目貫の處にそれをお立てになつたのでした。

燕は此の若い凜々しい王子の肩に羽をすくめて薄寒い一夜を過ごし、翌日町中をつゝむ霧が稍ゝ晴れて旭日がうら〳〵と東に登らうとする頃旅立ちの用意をして居ますと、何處かで「燕、燕」と自分を呼ぶ聲がします。はてなと思つて見廻しましたが誰も近くに居る樣子はないから羽を延ばさうとしますと、又同じ樣に「燕、燕」と呼ぶものがあります。燕は不思議でたまりません。ふと王子の御顏を仰いで見ますと王子はやさしいにこやかな笑みを浮べてオパールと云ふ貴い石の眸で燕を眺めて御出でになりました。燕は不圖身をすりよせて、

「今私をお呼びになつたのは貴方で御座いますか」

と聞いて見ますと王子はうなづかれて、
「如何にも私だ。實はお前に少し賴みたい事があるので呼んだのだがそれを叶へて吳れるだらうか」
と仰有います。燕は未だこんな立派な方からまのあたり御聲をかけられた事がないのでほく／＼喜びながら、
「それはお安い御用です。何んでも致しますから御遠慮なく仰せ付けて下さいまし」
と申し上げました。
王子は暫く考へて居られましたがやがて決心のおももちで、
「それでは氣の毒だが一つ賴まう、彼處を見ろ」
と町の西の方を指しながら、
「彼處に穢い一階立ちの家があつて、たつた一つの窓が此方を向いて開いて居る。あの窓の中をよく見て御覽。一人の年老つた寡婦がせつ／＼と針仕事をして居るだらう、あの人は賴りのない身で毎日骨を折つて賃仕事をして居るのだが、賴む人が少いので時々は御飯も喰べないで居るのが此處から見える。私はそれが可哀相でならないから何かやつて助けてやらうと思ふけれども、第一私は此處に立つたツきり歩く事が出來ない。お前何卒私の體の中から金をはぎとつてそれをくはへて行つて知れない樣にあの窓から投げ込んで吳れまいか」
と斯う云ふお賴みでした。燕は王子の難有いお志に感じ入りはしましたが、此の立派な王子から金をはぎ取る事は如何にも進みません。色々と躊躇して居ます。王子は頻りとおせきになります。仕方なく胸のあたりの一枚をめくり起してそれを首尾よく寡婦の窓から投げ込みました。寡婦は仕事に身を入れて居るのでそれには氣が附かず、やがて御飯時に支度をしようと立ち上つた時、ぴか／＼光る金の延べ板を見附け出した時の喜びはどんなでしたらう。神樣のお惠みを難有く押しいたゞいて其の晩は身になる御飯を致したのみでなく、永く滯つて居たお

寺の御布施も濟ます事が出來まして、涙を流して喜んだのであります。燕も何か大變によい事をしたやうに思つていそ〳〵と王子の御肩に戻つて來て今日の始末を逐一言上に及びました。

次の朝燕は、今日こそは慕はしいナイル河に一日も早く歸らうと思つて羽毛をつくろつて羽ばたきを致しますと又王子がお呼びになります。昨日の事があつたので燕は王子を此の上もない好い方と慕つて居りましたから、早速御返事をしますと王子の仰しやるには、

「今日はあの東の方にある道の突當りに白い馬が荷車を引いて行く、彼處を御覽。其處に二人の小さな乞食の子が寒む相に立つて居るだらう。あゝ、二人は舊は家の家來の子で、お父さんもお母さんも大變によい方であつたが、友達の讒言で扶持に離れて、二三年病氣をすると二人とも死んで仕舞つたのだ、それで後に殘された二人の小兒はあんな乞食になつて誰もかまふ人がないけれども、若し此處に金の延べ金があつたら二人はそれを御殿に持つて行くと舊の通り御家來にして下さる約束がある。御前氣の毒だけれども私の體から成る可く大きな金をはがしてそれを持つて行つて呉れまいか」

燕は此の二人の乞食を見ますと氣の毒でたまらなくなりましたから、自分の事は忘れて仕舞つて王子の肩のあたりから出來るだけ大きな金の板をはがして重も相にくはへて飛び出しました。二人の乞食は手をつなぎあつて今日はどうして食はうと困じ果てゝ居ます。燕は快活に二人のまはりを二三度なぐさめる樣に飛びまはつて、やがて二人の前に金の板を落しますと、二人は吃驚してそれを拾ひ上げて暫く眺めて居ましたが、兄なる少年は思出した樣にそれを取り上げて、是れさへあれば御殿の勘當も許されるからと喜んで妹と手をひきつれて御殿の方に走つて行くのを、しつかと見屆けた上で、燕はいゝ事をしたと思つて王子の肩に飛び歸つて來て一部始終の物語をして上げますと、王子も大層お喜びになつて一方ならず燕の心の親切なのをお賞めになりました。

次の日も王子は燕の旅立ちを氣の毒だがとお引き留めになつて仰有るには、

「今日は北の方に行つてもらひ度い。あの烏の風見のある屋根の高い家の中に一人の畫家が居る筈だ。其の人は大層腕のある人だけれども段々に眼が惡くなつて、早く療治をしないと盲目になつて畫家を廢さねばならなくなるから、どうか金を送つて醫者に行ける樣にしてやりたい。お前今日も一つ骨を折つて吳れまいか」

そこで燕は又自分の事は忘れて仕舞つて、今度は王子の背のあたりから金をめくつて其方に飛んで行きましたが、畫家は室內には火がなくて薄寒いので窓をしめ切つて仕事をして居ました。金の投げ入れ樣がありません。仕方なしに風見の烏に相談しますと、畫家は燕が大好きで燕の顏さへ見ると何もかも忘れて仕舞つて、そればかり見て居るからお前も目につく樣に窓の周りを飛び廻つたらよからうと敎へて吳れました。そこで燕は得たりと出來るだけしなやかな飛び振りをして其の窓の前を二三遍あちらこちらに飛びますと、畫家はやにはに面を擧げて、

「此の寒いのに燕が來た」

と云ふや否や窓を開いて首をつき出し宛ら燕の飛び方に見ほれて居ます。燕は得たり賢しと隙を窺つて例の金の板を部屋の中に投げ込んで仕舞ひました。畫家の喜びは何に譬へませう。天の佑があるからは自分は眼病をなほした上で無類の名畫をかいて見せると勇み立つて醫師の處にかけ着けて行きました。

王子も燕も遙に是れを見て、今日も一つい丶事をしたと淸い心を以て夜の眠につきました。

さう斯うする中に氣候は段々と寒くなつて來ました。靑銅の王子の肩では中々凌ぎ難い程になりました。然し王子は次の日も次の日も今迄長い間見て知つて居る貧しい正直な人や苦しんで居るえらい人やに自分の體の金を送りますので燕は中々南に歸る暇がありません。日中は秋とは申しながらさすがに日がぽか／＼と麗かで黃金色の光が赤い瓦や黃になつた木の葉を照して暖かなものですから、燕は王子の仰せのまゝにあちこちと飛び廻つて

御用をたして居ました。其の中に王子の體の金は段々にすくなくなつて可哀相に此の間まではまばゆい程に美しかつたお姿が見る影もないものになつて仕舞ひました。或る日の夕方王子は靜か燕をかへり見て、

「燕、お前は親切ものでよく此の寒いのも厭はず働いて吳れたが、私にはもう人にやるものがなくなつて仕舞つてこんな醜い體になつたからさぞお前も私と一所に居るのがいやになつたらう。もうお歸り、寒くなつたし、ナイル河には美しい夏がお前を待つて居るから。此の町はもうやがて冬になると淋しいしお前の樣なしなやかな綺麗な鳥は居たゝまれまい、それにしてもお前の樣なよい友達と別れるのは悲しい」

と仰有いました。燕は是れを聞いて何とも云へない心地になりまして、いつそ王子の肩で寒さに凍えて死んで仕舞はうかとも思ひながらしを〳〵として御返事もしないで居ますと、誰か二人王子の像の下に在る露臺に腰かけてひそ〳〵話をして居るものがあります。

王子も燕も氣が付いて見ますと其處には一人の若い武士と見目美しい乙女とが腰をかけて居ました。二人は固よりお話を聞くものがあらうとは思ひませんので頻りと互に心のありたけを打ち明かして居ました。やがて武士が申しますのには、

「二人は早く結婚がしたいのだけれども大切なものがないので出來ないのは殘念だ。それは私の家では結婚する時に屹度先祖から傳へて來た名玉を結婚の指輪に入れなければ出來ない事になつて居ます。所が誰かゞそれを盜んで仕舞ひましたからどうしても結婚の式を擧げることは出來ません」

乙女は固より此の武士が若いけれども勇氣があつて強くつて度々の戰で功名手柄をしたのを慕つてどうか其の奧さんになり度いと思つて居たのですから、淚をはら〳〵と流しながら歎息をして、何んと言葉の出し樣もありません。仕舞には二人手を取りあつて泣いて居ました。

燕は世の中には憐れな話もあるものだと思ひながら不圖王子を仰いで見ますと王子の眼からも涙がしきりと流れて居ました。燕は驚いて近々とすりよりながら「どうなさいました」と申しますと王子は、

「氣の毒な二人だ。彼の若い武士の云ふ名玉と云ふのは今は私の眸になつて居る、二つのオパールの事であるが、王が私の立像を造られ樣となされた時私の眸に使ふ程立派な珠が何處にもなかつたので、大層心を痛めてお出でなさると惡い諂ひ好きな家來が、それはお易い御用で御座いますと云つてあの若い武士の父上を訪れて四方山の話のまぎれにそつとあの大事な珠を盜んで仕舞つたのだ。私はもう眼が見えなくなつてもいゝからどうか私の眼から眸を拔き出してあの二人に與つて呉れ」

と仰有りながら尙ほ涙をはら〳〵と流されました。凡そ世の中で盲目程氣の毒なものはありません。毎日綺麗に照らす日の眼も、毎晚美しくかゞやく月の光も、靑い若葉も紅い紅葉も、水の色も空の彩も、皆んな見えなくなつてしまふのです。試みに眼をふさいで一日だけ我慢が出來ますか、出來ますまい。それを年が年中死ぬまでして居なければならないのだから、本當に思ひやるのも憐れな程でせう。

王子はありつたけの身のまはりを哀れな人におやりなすつたのみか、今は又何よりも大切な眼までつぶさうとなさるのですもの。燕はほと〳〵何んと御返事をしていゝのか分らないでうつぶいた儘で是れもしく〳〵泣き出しました。

王子はやがて涙を拂つて、

「あゝ是れは私が弱かつた。泣く程自分のものを惜しんでそれを人に施したとて何の役に立つものぞ。心から喜んで施しをしてこそ神樣の御心にも叶ふのだ。昔キリストと云ふ御方は人間の爲めには十字架の上で身を殺してさへ喜んでいらしつたのではないか。もう私は泣かぬ。さあ早く此の珠を取つてあの若い武士にやつて呉れ、さ、

早く」

とお急せきになります。燕は尙も心を定めかねて思ひわづらつて居ます中に、若い武士と乙女とは立ち上つて悲し相に下を向きながらとぼ〳〵とお城の方に歸つて行きます。もう日がとつぷりと暮れて、巢に歸る鳥が飛び連れてかあ〳〵と夕燒のした空のあなたに見えて居ます。王子はそれを御覽になるとお叱りになるばかり、燕を急せいて早く眸を拔けと仰有います。燕はひくにひかれぬ立場になつて、

「それでは仕方が御座いません、御免蒙ります」

と申しますと、觀念くわんねんして王子の眼から眸を拔いてしまひました。おくれてはなるまいと共の二つをくちばしに啣くはへるが早いか、力を籠めて羽ばたきをしながら二人の後を追ひかけました。王子は舊もとの通り町を見下ろした形で立つて居られますが、もう何んにも見えるのではありませんかつた。

燕がものゝ四五町も走つて行つて二人の前にオパールを落しますと先づ乙女がそれに眼をつけて取り上げました。若い武士は一と眼見ると驚いてそれを受け取つて暫くは無言で見つめて居ましたが、

「是れだ、是れだ、此の珠だ。あゝ私はもう結婚が出來る。結婚をして人一倍の忠義が出來る。神樣のお惠み、難有い忝ない。此の珠をみつけた上は明日にでも御婚禮をしませう」

と喜びがこみ上げて二人とも身を震はせて神にお禮を申します。

是れを見た燕はどんな結構なものをもらつたよりも嬉しく思つて、心も輕く羽根も輕く王子のもとに立ちもどつてお肩の上にちよんと坐り、

「御覽なさい王子樣。あの二人の喜びはどうです。踊らない計りぢやありませんか。御覽なさい泣いて居るのだか笑つて居るのだか分りません。御覽なさいあの若い武士が珠を押しいたゞいて居るでせう」

と氣息もつかずに申しますと、王子は下を向いた儘で、

「燕や私はもう眼が見えないのだよ」

と仰有いました。

偖て次の日に二人の御婚禮がありますので、町中の人は此の勇しい若い武士とやさしく美しい乙女とを壽がうと思つて朝から往來を埋めて何もかも華かな事でありました。家々の窓からは花環や國旗やリボンやが風にひるがへつて愉快な音樂の聲で町中がどよめき亙ります。燕はちよこなんと王子の肩に坐つて、今馬車が來たとか今小兒が萬歳をやつて居るとか、美しい衣物の坊樣が見えたとか、背の高い武士が歩いて來るとか、詩人がお祝ひの詩を聲ほがらかに讀み上げて居るとか、娘の群れが踊りながら現はれたとか、凡そ町に起つた事を一つ一つ手に取る樣に王子にお話をして上げました。王子は默つた儘で下を向いて聞いていらつしやいます。やがて花よめ花むこが騎馬でお寺に乘りつけて大層盛んな式がありました。其の花むこの男々しかつた事、花よめの美しかつた事は燕の早口でも申し盡くせませんかつた。

天氣のよい秋日和は日が暮れると急に寒くなるものです。さすがに賑やかだつた御婚禮が濟みますと、町は又舊の通りに靜かになつて夜が次第に更けて來ました。燕は眼をきよろ〳〵させながら羽根を幾度か組み合せ直して頸をちゞこめて見ましたが、中々こらへきれない寒さで寢つかれません。まんじりともしないで東の空がぼうつと薄紫になつた頃見ますと屋根の上には一面に白いきら〳〵したものが布いてあります。

燕は驚いて其の由を王子に申しますと、王子も大層お驚きになつて、

「それは霜と云ふもので――霜と云ふ聲を聞くと燕は葦の云つた事を思ひ出してぎよつとしました。葦は何んと云つたか覺えて居ますか――冬の來た證據だ、まあ自分とした事が自分の事にばかり取りまぎれて居てお前の事

を思はなかつたのは實に不埒であつた。永々御世話になつてありがたかつたがもう私も此の世には用のない體になつたからナイルの方に一日も早く歸つて呉れ。彼れ是れする中に冬になると迚もお前の生命は續かないから」

としみ〲仰有いました。燕は何んで今更ら王子を振り捨てゝ行かれませう。縱令凍死に死にはするとも此處一足も動きませんと殊勝な事を申しましたが、王子は

「そんな分らずやを云ふものではない。お前が今年死ねばお前と私の遇へるのは今年限り。今日ナイルに歸つて又來年お出で。さうすれば來年又此處で遇へるから」

と事をわけて云ひ聞かせて下さいました。燕はそれもさうだ、

「そんなら王子樣來年又お遇ひ申しますから御無事で入らつしやいまし。お眼が御不自由で私の居ない爲めに、猶更らの御不自由でせうが、來年は屹度澤山のお話を持つて參りますから」

と燕は泣く〱南の方へと朝晴れの空を急ぎました。此のまめ〱しい心よしの友達が暖かい南國へ羽をのして行く姿の名殘も王子は見る事もお出來なさらず、おいたはしいお首をお下げなすつた儘薄ら寒い風の中に獨り立つてお出でゞした。

偖て其の中に日もたつて冬は漸く寒くなり雪達磨の出來る雪がちら〱と降り出しますと、もう降誕祭には間もありません。慾張もけちんばうも年寄も病人も此の頃ばかりは晴れ〲となつて子供の樣になりますので、かしげ勝ちの首もまつすぐに、下向き勝ちの顔も空を見る樣になるのが此の頃です。で、往來の人は長々見忘れて居た黄金の王子はどうして居られる事かとふり仰ぎますと、驚くまい事か透明る程光つて御座つた王子は丸で癩病やみの樣に眞黑で、眼は兩方ともひたとつぶれて御座らつしやります。

「何んだ此の不體裁は、町の眞中にこんなものは置いて置けやしない」

と一人が申しますと、

「本當だ、クリスマス前に壞(こは)して仕舞はうぢやないか」

と一人がほざきます。

「生きてる中に此の王子は惡い事をしたにちがひない。それだからこそ死んだ後で此の様(さま)になるんだ」

と又一人が叫びます。

「こはせ／＼」

「たゝきこはせ／＼」

と云ふ聲がやがて彼方からも此方からも起つて、仕舞には一人が石をなげますと一人は瓦をぶつける。とう／＼一と群(かたまり)の若い者が繩と木階(はしご)を持つて來て繩を王子の頸にかけると皆んなで寄つてたかつてえい／＼引つ張つたものですから、さしもに堅固な王子の立像も無殘な事には礎(いしづゑ)を離れて轉び落ちて仕舞ひました。

本當に可哀相な御最期です。

かくて王子の體は一箇月程地の上に横になつてありましたが、町の人々は相談してあゝして置いても何んの役にも立たないからと云ふのでそれを鎔(と)かして一つの鐘を造つてお寺の二階に收める事にしました。

其の次の年あの燕がはる／＼ナイル河から來て王子を尋ねまはりましたけれども影も形もありませんかつた。

然し今でも此の町に行く人があれば春でも夏でも秋でも冬でも丁度日が暮れて仕事が濟む時、灯(ともし)がついて夕炊(ゆふげ)の煙が家々から立ち昇る時、凡てのものが樂しく休む其の時にお寺の高い塔の上から澄んだ涼しい鐘の音が聞こえて鬼であれ魔であれ、惡い者は一刻も此の樂しい町に居たゝまれない様に響き渡るさうであります。めでたしめでたし。

一房の葡萄

僕は小さい時に繪を描くことが好きでした。僕の通つてゐた學校は橫濱の山手といふ所にありましたが、そこいらは西洋人ばかり住んでゐる町で、僕の學校も敎師は西洋人ばかりでした。そしてその學校の行きかへりには、いつでもホテルや西洋人の會社などがならんでゐる海岸の通りを通るのでした。通りの海沿ひに立つて見ると、眞靑な海の上に軍艦だの商船だのが一ぱいならんでゐて、煙突から煙の出てゐるのや、檣から檣へ萬國旗をかけわたしたのやがあつて、眼がいたいやうに綺麗でした。僕はよく岸に立つてその景色を見渡して、家に歸ると、覺えてゐるだけを出來るだけ美しく繪に描いて見ようとしました。けれどもあの透きとほるやうな海の藍色と、白い帆前船などの水際近くに塗つてある洋紅色とは、僕の持つてゐる繪具ではどうしてもうまく出せませんでした。いくら描いても〳〵本當の景色で見るやうな色には描けませんでした。

ふと僕は學校の友達の持つてゐる西洋繪具を思ひ出しました。その友達は矢張り西洋人で、しかも僕より二つ位齡が上でしたから、身長は見上げるやうに大きい子でした。ジムといふその子の持つてゐる繪具は舶來の上等のもので、輕い木の箱の中に、十二種の繪具が、小さな墨のやうに四角な形にかためられて、二列にならんでゐました。どの色も美しかつたが、とりわけて藍と洋紅とは吃驚するほど美しいものでした。ジムは僕より身長が高いくせに、繪はずつと下手でした。それでもその繪具をぬると、下手な繪さへなんだか見ちがへるやうに美しくなるのです。僕はいつでもそれを羨しいと思つてゐました。あんな繪具さへあれば、僕だつて海の景色を、

本當に海に見えるやうに描いて見せるのになあと、自分の惡い繪具を恨みながら考へました。さうしたら、その日からジムの繪具がほしくつて〳〵たまらなくなりましたけれども、僕はなんだか臆病になつて、パパにもママにも買つて下さいと願ふ氣になれないので、毎日々々その繪具のことを心の中で思ひつゞけるばかりで幾日か日が經ちました。

今ではいつの頃だつたか覺えてはゐませんが、秋だつたのでせう。葡萄の實が熟してゐたのですから。天氣は冬が來る前の秋によくあるやうに、空の奧の奧まで見すかれさうに晴れわたつた日でした。僕達は先生と一緒に辨當をたべましたが、その樂しみな辨當の最中でも、僕の心はなんだか落着かないで、その日の空とはうらはらに暗かつたのです。僕は自分一人で考へこんでゐました。誰かゞ氣がついて見たら、顏も屹度青かつたかも知れません。僕はジムの繪具がほしくつて〳〵たまらなくなつてしまつたのです。胸が痛むほどほしくなつてしまつたのです。ジムは僕の胸の中で考へてゐることを知つてゐるにちがひないと思つて、そつとその顏を見ると、ジムはなんにも知らないやうに、面白さうに笑つたりして、わきに坐つてゐる生徒と話をしてゐるのです。でもその笑つてゐるのが僕のことを知つてゐて笑つてゐるやうにも思へるし、何か話をしてゐるのが、「いまに見ろ、あの日本人が僕の繪具を取るにちがひないから」といつてゐるやうにも思へるのです。僕はいやな氣持になりました。けれども、ジムが僕を疑つてゐるやうに見えれば見えるほど、僕はその繪具がほしくてならなくなるのです。

僕はかはいゝ顏はしてゐたかも知れないが、體も心も弱い子でした。その上臆病者で、言ひたいことも言はずにすますやうな質でした。だからあんまり人からは、かはいがられなかつたし、友達もない方でした。晝御飯がすむと他の子供達は活潑に運動場に出て走りまはつて遊びはじめましたが、僕だけはなほさらその日は變に心が

沈んで、一人だけ教場にはいつてゐました。そとが明るいだけに教場の中は暗くなつて、僕の心の中のやうでした。自分の席に坐つてゐながら、僕の眼は時々ジムの卓の方に走りました。ナイフで色々ないたづら書きが彫りつけてあつて、手垢で眞黑になつてゐるあの蓋を揚げると、その中に本や雜記帳や石板と一緒になつて、飴のやうな木の色の繪具箱があるんだ。そしてその箱の中には小さい墨のやうな形をした藍や洋紅の繪具が……僕は顏が赤くなつたやうな氣がした。思はずそつぽを向いてしまふのです。けれどもすぐ又横目でジムの卓の方を見ないではゐられませんでして、胸のところがどき〳〵として苦しい程でした。ぢつと坐つてゐながら、夢で鬼にでも追ひかけられた時のやうに氣ばかりせか〳〵してゐました。

教場に這入る鐘がかん〳〵と鳴りました。僕は思はずぎよつとして立ち上りました。生徒達が大きな聲で笑つたり呶鳴つたりしながら、洗面所の方に手を洗ひに出かけて行くのが窓から見えました。僕は急に頭の中が氷のやうに冷たくなるのを氣味惡く思ひながら、ふら〳〵とジムの卓の所に行つて、半分夢のやうにそこの蓋を揚げて見ました。そこには僕が考へてゐたとほり、雜記帳や鉛筆箱とまじつて、見覺えのある繪具箱がしまつてありました。なんのためだか知らないが僕はあつちこつちをむやみに見廻はしてから、手早くその箱の蓋を開けて藍と洋紅との二色を取り上げるが早いか、ポッケットの中に押し込みました。そして急いでいつも整列して先生を待つてゐる所に走つて行きました。

僕達は若い女の先生に連れられて教場に這入り銘々の席に坐りました。僕はジムがどんな顏をしてゐるか見たくつてたまらなかつたけれども、どうしてもそつちの方をふり向くことができませんでした。でも僕のしたことを誰も氣のついた樣子がないので、氣味が惡いやうな安心したやうな心持でゐました。僕の大好きな若い女の先生の仰しやることなんかは耳にはいりはいつても、なんのことだつたかちつともわかりませんでした。先生も

時々不思議さうに僕の方を見てゐるやうでした。

僕は然し先生の眼を見るのがその日に限つてなんだかいやでした。そんな風で一時間がたちました。なんだかみんな耳こすりでもしてゐるやうだと思ひながら一時間がたちました。

教場を出る鐘が鳴つたので僕はほつと安心して溜息をつきました。けれども先生が行つてしまふと、僕は僕の級で一番大きなそしてよく出來る生徒に、

「ちよつとこつちにお出で」

と肱の所を摑まれてゐました。僕の胸は、宿題をなまけたのに先生に名を指された時のやうに、思はずどきんどきんと震へはじめました。けれども僕は出來るだけ知らない振りをしてゐなければならないと思つて、わざと平氣な顏をしたつもりで、仕方なしに運動場の隅に連れて行かれました。

「君はジムの繪具を持つてゐるだらう。こゝに出し給へ」

さういつてその生徒は僕の前に大きく擴げた手をつき出しました。さういはれると僕はかへつて心が落ち着いて、

「そんなもの、僕持つてやしない」

と、つひでたらめをいつてしまひました。さうすると三四人の友達と一緒に僕の側に來てゐたジムが、

「僕は晝休みの前にちやんと繪具箱を調べておいたんだよ。一つも失くなつてはゐなかつたんだよ。そして晝休みが濟んだら二つ失くなつてゐたんだよ。そして休みの時間に教場にゐたのは君だけぢやないか」

と少し言葉を震はしながら言ひかへしました。

僕はもう駄目だと思ふと急に頭の中に血が流れこんで來て顏が眞赤になつたやうでした。すると誰だつたかそ

こに立つてゐた一人がいきなり僕のポッケットに手をさし込まうとしました。僕は一生懸命にさうはさせまいとしましたけれども、多勢に無勢で迚も叶ひません。僕のポッケットの中からは、見る〳〵マーブル球（今のビー球のことです）や鉛のメンコなどゝ一緒に、二つの繪具のかたまりが摑み出されてしまひました。「それ見ろ」といはんばかりの顏をして、子供達は憎らしさうに僕の顏を睨みつけました。僕の體はひとりでにぶる〳〵震へて、眼の前が眞暗になるやうでした。いゝお天氣なのに、みんな休時間を面白さうに遊び廻はつてゐるのに、僕だけは本當に心からしをれてしまひました。あんなことをなぜしてしまつたんだらう。取りかへしのつかないことになつてしまつた。もう僕は駄目だ。そんなに思ふと、弱蟲だつた僕は淋しく悲しくなつて來て、しく〳〵と泣き出してしまひました、

「泣いておどかしたつて駄目だよ」

とよく出來る大きな子が馬鹿にするやうな、憎みきつたやうな聲で言つて、動くまいとする僕をみんなで寄つてたかつて二階に引つ張つて行かうとしました。僕は出來るだけ行くまいとしたけれども、とう〳〵力まかせに引きずられて、階子段を登らせられてしまひました。そこに僕の好きな受持の先生の部屋があるのです。

やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとは、はいつてもいゝかと戸をたゝくことなのです。中からはやさしく「おはいり」といふ先生の聲が聞こえました。僕はその部屋にはいる時ほどいやだと思つたことはまたとありません。

何か書きものをしてゐた先生は、どや〳〵とはいつて來た僕達を見ると、少し驚いたやうでした。が、女の癖に男のやうに頸の所でぶつりと切つた髮の毛を右の手で撫であげながら、いつものとほりのやさしい顏をこちらに向けて、一寸首をかしげたゞけで、何んの御用といふ風をしなさいました。さうするとよく出來る大きな子が

前に出て、僕がジムの繪具を取つたことを、委しく先生に言ひつけました。先生は少し曇つた顔付をして眞面目にみんなの顔や、半分泣きかゝつてゐる僕の顔を見くらべてゐなさいましたが、僕に「それは本當ですか」と聞かれました。本當なんだけれども、僕がそんないやな奴だといふことを、どうしても僕の好きな先生に知られるのがつらかつたのです。だから僕は答へる代りに本當に泣き出してしまひました。

先生は暫く僕を見つめてゐましたが、やがて生徒達に向つて靜かに「もういつてもようございます」といつて、みんなをかへしてしまはれました。生徒達は少し物足らなさうにどや〱と下に降りていつてしまひました。

先生は少しの間なんとも言はずに僕の方も向かずに、自分の手の爪を見つめてゐましたが、やがて靜かに立つて來て、僕の肩の所を抱きすくめるやうにして「繪具はもう返しましたか」と小さな聲で仰しやいました。僕は返したことをしつかり先生に知つてもらひたいので深々と頷いて見せました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだつたと思つてゐますか」

もう一度さう先生が靜かに仰しやつた時には、僕はもうたまりませんでした。ぶる〱と震へてしかたがない脣を、噛みしめても噛みしめても泣聲が出て、眼からは涙がむやみに流れて來るのです。もう先生に抱かれたまま死んでしまひたいやうな心持ちになつてしまひました。

「あなたはもう泣くんぢやない。よく解つたらそれでいゝから泣くのをやめませう、ね。次の時間には教場に出ないでもよろしいから、私のこのお部屋にいらつしやい。靜かにしてこゝにいらつしやい。私が教場から歸るまでこゝにいらつしやいよ。いゝ？」と仰しやりながら僕を長椅子に坐らせて、その時また勉強の鐘がなつたので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見てゐられましたが、二階の窓まで高く這ひ上つた葡萄蔓から、一房の西洋葡萄をもぎとつて、しく〱と泣きつゞけてゐた僕の膝の上にそれをおいて、靜かに部屋を出て行きなさいま

した。

一時(じ)がや／＼とやかましかつた生徒達はみんな教場にはいつて、急にしんとするほどあたりが靜かになりました。僕は淋しくつて／＼しやうがない程悲しくなりました。あの位好きな先生を苦しめたかと思ふと、僕は本當に惡いことをしてしまつたと思ひました。葡萄などは迚も喰べる氣になれないで、いつまでも泣いてゐました。

ふと僕は肩を輕くゆすぶられて眼をさましました。僕は先生の部屋でいつの間にか泣寢入り(なきねいり)をしてゐたと見えます。少し瘦せて身長(せい)の高い先生は、笑顏を見せて僕を見おろしてゐられました。僕は眠つたゝめに氣分がよくなつて今まであつたことは忘れてしまつて、少し恥かしさうに笑ひかへしながら、慌てゝ膝の上から辷り落ちさうになつてゐた葡萄の房をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思ひ出して、笑ひも何も引つ込んでしまひました。

「そんなに悲しい顏をしないでもよろしい。もうみんなは歸つてしまひましたから、あなたもお歸りなさい。そして明日はどんなことがあつても學校に來なければいけませんよ。あなたの顏を見ないと私は悲しく思ひますよ。屹度(きつと)ですよ」

さういつて先生は僕のカバンの中にそつと葡萄の房を入れて下さいました。僕はいつものやうに海岸通りを、海を眺めたり船を眺めたりしながら、つまらなく家に歸りました。そして葡萄をおいしく喰べてしまひました。

けれども次の日が來ると僕は中々學校に行く氣にはなれませんでした。お腹(なか)が痛くなればいゝと思つたり、頭痛がすればいゝと思つたりしたけれども、その日に限つて蟲齒一本痛みもしないのです。仕方なしにいや／＼ながら家は出ましたが、ぶら／＼と考へながら歩きました。どうしても學校の門をはいることは出來ないやうに思はれたのです。けれども先生の別れの時の言葉を思ひ出すと、僕は先生の顏だけはなんといつても見たくてしか

たがありませんでした。僕が行かなかつたら先生は屹度悲しく思はれるに違ひない。もう一度先生のやさしい眼で見られたい。たゞその一事(ひとこと)があるばかりで僕は學校の門をくゞりました。

さうしたらどうでせう、先づ第一に待ち切つてゐたやうにジムが飛んで來て、僕の手を握つてくれました。そして昨日のことなんか忘れてしまつたやうに、親切に僕の手をひいて、どきまぎしてゐる僕を先生の部屋に連れて行くのです。僕はなんだか譯がわかりませんでした。學校に行つたらみんなが遠くの方から僕を見て「見ろ泥棒の嘘(うそ)つきの日本人が來た」とでも惡口をいふだらうと思つてゐたのに、こんな風にされると氣味が惡い程でした。

二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に戸を開(あ)けて下さいました。二人は部屋の中にはいりました。

「ジム、あなたはいゝ子、よく私の言つたことがわかつてくれましたね。ジムはもうあなたからあやまつて貰はなくつてもいゝと言つてゐます。二人は今からいゝお友達になればそれでいゝんです。二人とも上手に握手をなさい」

と先生はにこ〳〵しながら僕達を向ひ合せました。僕はでもあんまり勝手過ぎるやうでもじ〳〵してしますと、ジムはぶら下(さ)げてゐる僕の手をいそ〳〵と引張り出して堅く握つてくれました。僕はもうなんといつてこの嬉しさを表はせばいゝのか分らないで、唯恥かしく笑ふ外ありませんでした。ジムも氣持ちよさゝうに、笑顔をしてゐました。先生はにこ〳〵しながら僕に、

「昨日の葡萄はおいしかつたの」と問はれました。

僕は顔を眞赤にして「えゝ」と白状するより仕方がありませんでした。

「そんなら又あげませうね」

さういつて、先生は眞白なリンネルの着物につゝまれた體を窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取つて、眞白い左の手の上に粉のふいた紫色の房を乘せて、細長い銀色の鋏(はさみ)で眞中からぷつりと二つに切つて、ジムと僕とに下さいました。眞白い手の平に紫色の葡萄の粒が重なつて乘つてゐたその美しさを僕は今でもはつきりと思ひ出すことが出來ます。

僕はその時から前より少しいゝ子になり、少しはにかみ屋でなくなつたやうです。

それにしても僕の大好きなあのいゝ先生はどこに行かれたでせう。もう二度とは遇(あ)へないと知りながら、僕は今でもあの先生がゐたらなあと思ひます。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のやうな白い美しい手はどこにも見つかりません。

（一九二一年作）

溺れかけた兄妹

土用波といふ高い波が風もないのに海岸に打ち寄せる頃になると、海水浴に來てゐる都の人たちも段々別莊をしめて歸つてゆくやうになります。今までは海岸の砂の上にも水の中にも、朝から晩まで澤山の人が集つて來て、砂山からでも見てゐると、あんなに大勢な人間が一たい何處から出て來たのだらうと、不思議に思へるほどですが、九月にはいつてから三日目になるその日には、見わたすかぎり砂濱の何處にも人の子一人ゐませんでした。

私の友達のMと私と妹とはお名殘だといつて海水浴にゆくことにしました。お婆樣が波が荒くなつて來るから行かない方がよくはないかと仰しやつたのですけれども、こんなにお天氣はいゝし、風はなしするから大丈夫だといつて、仰しやることを聞かずに出かけました。

丁度晝少し過ぎで、上天氣で空には雲一つありませんでした。晝間でも草の中にはもう蟲の音がしてゐましたが、それでも砂は熱くなつて、跣足だと時々草の上に駈け上らなければゐられないほどでした。Mはタオルを頭からかぶつてどん〳〵飛んで行きました。私は麥稈帽子を被つた妹の手を引いてあとから駈けました。少しでも早く海の中につかりたいので三人は氣息を切つて急いだのです。

紆波といひますね、その波がうつてゐました。ちやぷり〳〵と小さな波が波打際でくだけるのではなく、少し沖の方に細長い小山のやうな波が出來て、それが陸の方を向いて段々押寄せて來ると、やがてその小山のてつぺんが尖つて來て、ざぶりと大きな音をたてゝ一度に崩れかゝるのです。さうすると暫く間をおいて又あの波が

小山のやうに打ち寄せて來ます。そして崩れた波はひどい勢ひで砂の上に這ひ上つて、そこら中を泡で敷きつめたやうにしてしまふのです。三人はさうした波の様子を見ると少し氣味惡くも思ひました。けれども折角そこまで來てゐながら、そのまゝ引き返すのはどうしてもいやでした。で、妹に帽子を脫がせて、それを砂の上に仰向けにおいて、衣物やタオルをその中に丸めこむと私達三人は手をつなぎ合せて水の中にはいつてゆきました。

「ひきがひどいね」

とMがいひました。本當にその通りでした。ひきとは、水が沖の方に退いて行く時の力のことです。それがその日は大變强いやうに私達は思つたのです。踝くらゐまでより水の來ない所に立つてゐても、その水が退いてゆく時にはまるで急な河の流れのやうで、足の下の砂がどん／＼掘れるものですから、うつかりしてゐると倒れさうになる位でした。その水の沖の方に動くのを見てゐると眼がふら／＼しました。けれどもそれが私達には面白くつてならなかつたのです。足の裏をくすぐるやうに砂が掘れて足がどん／＼深く埋まつてゆくのがこの上なく面白かつたのです。三人は手をつないだまゝ少しづゝ深い方にはいつてゆきました。沖の方を向いて立つてゐると、膝の所で足がくの字に曲りさうになります。陸の方を向いてゐると向脛にあたる水が痛い位でした。兩足を揃へて眞直に立つたまゝどつちにも倒れないのを勝にして見たり、片足で立ちつこをして見たりして、三人は面白がつて人魚のやうに跳ね廻りました。

その中にMが膝位の深さの所まで行つて見ました。さうすると紆波が來る度毎にMは背延びをしなければならない程でした。それがまた面白さうなので私達も段々深みに進んでゆきました。そして私達はとう／＼波のない時には腰位まで水につかる程の深みに出てしまひました。そこまで行くと波が來たらたゞ立つてゐたまゝでは追つ付きません。どうしてもふはりと浮き上らなければ水を呑ませられてしまふのです。

ふはりと浮き上ると私達は大變高い所に來たやうに思ひました。波が行つてしまふので地面に足をつけると、海岸の方を見ても海岸は見えずに波の背中だけが見えるのでした。その中にその波がざぶんとくだけます。波打際が一面に白くなつて、いきなり砂山や妹や帽子などが手に取るやうに見えます。それがまたこの上なく面白かつたのです。私達三人は土用波があぶないといふことも何も忘れてしまつて波越しの遊びを續けさまにやつてゐました。

「あら大きな波が來てよ」

と沖の方を見てゐた妹が少し怖さうな聲でかういきなりいひましたので、私達も思はずその方を見ると、妹の言葉通りに、これまでのとはかけはなれて大きな波が、兩手をひろげるやうな恰好で押し寄せて來るのでした。泳ぎの上手なMも少し氣味惡さうに陸の方を向いて、いくらかでも淺い所まで遁げようとした位でした。私達はいふまでもありません。腰から上をのめるやうに前に出して、兩手を又その前に突き出して泳ぐやうな恰好をしながら歩かうとしたのですが、何しろひきがひどいので、足を上げることも前にやることも思ふやうには出來ません。私達はまるで夢の中で怖い奴に追ひかけられてゐる時のやうな氣がしました。

後から押し寄せて來る波は私達が淺い所まで行くのを待つてはくれません。見る〳〵大きくなつて來て、そのてつぺんにはちらり〳〵と白い泡がくだけ始めました。Mは後ろから大聲をあげて、

「そんなにそつちへ行くと駄目だよ、波がくだけると捲きこまれるよ。今の中に波を越す方がいゝよ」

といひました。さういはれゝばさうです。私と妹とは立ち止つて仕方なく波の來るのを待つてゐました。高い波が屛風を立てつらねたやうに押し寄せて來ました。私達三人は丁度具合よくくだけない中に波の背を越すことが出來ました。私達は體をもまれるやうに感じながらも、うまくその大波をやりすごすことだけは出來たのでし

た。三人はやうやく安心して泳ぎながら顏を見合せてにこ〳〵しました。そして波が行つてしまふと三人ながら泳ぎをやめてもとのやうに底の砂の上に立たうとしました。

所がどうでせう、私達は泳ぎをやめると一しよに、三人ながらずぼりと水の中に潜つてしまひました。水の中に潜つても足は砂にはつかないのです。私達は驚きました、慌てました。そして一生懸命にめんかきをして、やうやく水の上に顏だけ出すことが出來ました。その時私達三人が互に見合せた眼といつたら、顏といつたら、ありません。顏は眞靑でした。眼は飛び出しさうに見開いてゐました。今の波一つで、どこか深い所に流されたのだといふことを私達は云ひ合はさないでも知ることが出來たのです。云ひ合はさないでも私達は陸の方を眼がけて泳げるだけ泳がなければならないといふことがわかつたのです。

三人は默つたまゝで體を橫にして泳ぎはじめました。けれども私達にどれ程の力があつたかを考へて見て下さい。Mは十四でした。私は十三でした。妹は十一でした。Mは每年學校の水泳部に行つてゐたので、兎に角あたり前に泳ぐことを知つてゐましたが、私は橫のし泳ぎを少しと、水の上に仰向けに浮くことを覺えたばかりですし、妹はやうやく板を離れて二三間泳ぐことが出來るだけなのです。

御覽なさい、私達は見る〳〵沖の方へ沖の方へと流されてゐるのです。私は頭を半分水の中につけて橫のしでおよぎながら時々頭を上げて見ると、その度每に妹は沖の方へと私から離れてゆき、友達のMはまた岸の方へと私から離れて行つて、暫くの後には三人はやうやく聲がとゞく位お互に離れ〳〵になつてしまひました。そして波が來るたんびに私は妹を見失つたりMを見失つたりしました。私の顏が見えると妹は後ろの方からあらん限りの聲をしぼつて、

「兄さん來てよ……………もう沈む………‥苦しい」

と呼びかけるのです。實際妹は鼻の處位まで水に沈みながら聲を出さうとするのですから、その度毎に水を呑むと見えて、眞蒼な苦しさうな顏をして私を睨みつけるやうに見えます。私も前に泳ぎながら心は後ろにばかり引かれました。幾度も妹のゐる方へ急いで行かうかと思ひました。けれども私は惡い人間だつたと見えて、かうなると自分の命が助かりたかつたのです。妹の處へ行けば二人とも一緒に沖に流れて命がないのは知れ切つてゐました。私はそれが恐ろしかつたのです。何しろ早く岸について漁夫にでも助けに行つてもらふ外はないと思ひました。今から思ふとそれはずるい考へだつたやうです。

でも兎に角さう思ふと私はもう後も向かずに無我夢中で岸の方を向いて泳ぎ出しました。力が無くなりさうになると仰向けに水の上に臥て暫く氣息をつきました。それでも岸は少しづゝ近づいて來るやうでした。一生懸命に……一生懸命に……、そして立泳ぎのやうにたつて足を砂につけて見ようとしたら、またずぶりと頭まで潜つてしまひました。私は慌てました。そして又一生懸命で泳ぎ出しました。

立つて見たら水が膝の處位しかない所まで泳いで來てゐたのはそれから餘程たつてのことでした。ほつと安心したと思ふと、もう夢中で私は泣聲を立てながら、

「助けてくれえ」

といつて砂濱を氣狂ひのやうに駈けずり廻りました。見るとMは遙かむかうの方で私と同じやうなことをしてゐます。私は駈けずりまはりながら、妹の方を見ることを忘れはしませんでした。波打際から隨分遠い所に、波に隱れたり現はれたりして、可哀さうな妹の頭だけが見えました。

濱には船もゐません、漁夫もゐません。その時になつて私は又水の中に飛び込んで行きたいやうな心持になりました。大事な妹を置きつぱなしにして來たのがたまらなく悲しくなりました。

その時Mが遙かむかうから一人の若い男の袖を引つぱつてこつちに走つて來ました。私はそれを見ると何もかも忘れてそつの方に駈け出しました。若い男といふのは、土地の者ではありませうが、漁夫とも見えないやうな通りがゝりの人で、肩に何か擔つてゐました。

「早く……　……早く行つて助けて下さい………あすこだ、あすこだ」

私は涙を流し放題に流して、地だんだをふまないばかりにせき立てゝ、震へる手をのばして妹の頭がちよつぴり水の上に浮んでゐる方を指しました。

若い男は私の指す方を見定めてゐましたが、やがて手早く擔つてゐたものを砂の上に卸し、帶をくる〳〵と解いて、衣物を一緒にその上におくと、ざぶりと波を切つて海の中にはいつて行つてくれました。

私はぶる〳〵震へて泣きながら、兩手の指をそろへて口へ押しこんで、それをぎゆつと齒でかみしめながら、その男がどん〳〵沖の方に遠ざかつて行くのを見送りました。私の足がどんな處に立つてゐるのだか、寒いのだか、暑いのだか、すこしも私には分りません。手足があるのだかないのだか、それも分りませんでした。

拔手を切つて行く若者の頭も段々小さくなりまして、妹との隔たりが見る〳〵近よつて行きました。若者の身のまはりには白い泡がきら〳〵と光つて、水を切つた手が濡れたまゝ飛魚が飛ぶやうに海の上に現はれたり隱れたりします。私はそんなことを一生懸命に見つめてゐました。

とう〳〵若者の頭と妹の頭とが一つになりました。私は思はず指を口の中から放して、聲を立てながら水の中にはいつてゆきました。けれども二人がこつちに來るのゝおそいこと〳〵。私はまた何んの譯もなく砂の方に飛び上りました。そして又海の中にはいつて行きました。どうしてもぢつとして待つてゐることが出來ないのです。

妹の頭は幾度も水の中に沈みました。時には沈み切りに沈んだのかと思ふ程長く現はれて來ませんでした。若

者もどうかすると水の上には見えなくなりました。さうかと思ふと、ぽこんと跳ね上るやうに高く水の上に現はれ出ました。何んだか曲泳ぎでもしてゐるのではないかと思はれる程でした。それでもそんなことをしてゐる中に、二人は段々岸近くなつて來て、とう〳〵その顏までがはつきり見える位になりました。が、そこいらは打ち寄せる波が崩れるところなので、二人はもろともに幾度も白い泡の渦卷の中に姿を隱しました。やがて若者は這ふやうにして波打際にたどりつきました。妹はそんな淺みに來ても若者におぶさりかゝつてゐました。私は有頂天になつてそこまで飛んで行きました。

飛んで行つて見て驚いたのは若者の姿でした。せはしく深く氣息をついて、體はつかれ切つたやうにゆるんでへた〳〵になつてゐました。妹は私が近づいたのを見ると夢中で飛んで來ましたが、ふつと思ひかへしたやうに私をよけて砂山の方を向いて駈け出しました。その時私は妹か私を恨んでゐるのだなと氣がついて、それは無理のないことだと思ふと、この上なく淋しい氣持ちになりました。

それにしても友達のMは何處に行つてしまつたのだらうと思つて、私は若者のそばに立ちながらあたりを見廻はすと、遙かな砂山の所をお婆樣を助けながら駈け下りて來るのでした。妹は早くもそれを見付けてそつちに行かうとしてゐるのだとわかりました。

それで私は少し安心して若者の肩に手をかけて何かいはうとすると、若者はうるさゝうに私の手を拂ひのけて、水の寄せたり引いたりする所に坐りこんだまゝ、いやな顏をして胸のあたりを撫でまはしてゐます。私は何んだか言葉をかけるのさへためらはれて默つたまゝ突つ立つてゐました。

「まああなたがこの子を助けて下さいましたんですね。お禮の申しやうも御座んせん」

すぐそばで氣息せき切つてしみ〴〵と云はれるお婆樣の聲を私は聞きました。妹は頭からずぶ濡れになつたま

まで泣きじやくりをしながらお婆樣にぴつたり抱かれてゐました。

私達三人は濡れたまゝで、衣物やタオルを小脇に抱へてお婆樣と一緒に家の方に歸りました。若者はやうやく立ち上つて體を拭いて行つてしまはうとするのをお婆樣がたつて賴んだので、默つたまゝ私達のあとから跟いて來ました。

家に着くともう妹の爲めに床がとつてありました。妹は寢衣に着かへて寢かしつけられると、まるで夢中になつてしまつて、熱を出して木の葉のやうにふるへ始めました。お婆樣は氣丈な方で甲斐々々しく世話をすますと、若者に向つて心の底からお禮を云はれました。若者は挨拶の言葉も得云はないやうな人で、唯默つてうなづいてばかりゐました。お婆樣はやうやくのことでその人の住まつてゐる處だけを聞き出すことが出來ました。若者は麥湯を飮みながら、妹の方を心配さうに見てお辭儀を二三度して歸つて行つてしまひました。

「Mさんが駈けこんで來なすつて、お前達のことを云ひなすつた時には、私は眼がくらむやうだつたよ。お父さんやお母さんから賴まれてゐて、お前達が死にでもしたら、私は生きてはゐられないから一緒に死ぬつもりで、あの砂山をお前、Mさんより早く駈け上りました。でもあの人が通り合せたお蔭で助かりはしたものゝこはいことだつたねえ、もう〳〵氣をつけておくれでないとほんに困りますよ」

お婆樣はやがてきつとなつて私を前にすゑてから仰しやいました。日頃はやさしいお婆樣でしたが、その時の言葉には私は身も心もすくんでしまひました。少しの間でも自分一人が助かりたいと思つた私は、心の中をそこら中から針でつかれるやうでした。私は泣くにも泣かれないでかたくなつたまゝこちんとお婆樣の前に下を向いて坐りつゞけてゐました。しん〳〵と暑い日が緣の向うの砂に照りつけてゐました。

若者の所へはお婆樣が自分で御禮に行かれました。而して何か御禮の心でお婆樣が持つて行かれたものをその

人は何んといつても受取らなかつたさうです。

それから五六年の間はその若者のゐる所は知れてゐましたが、今は何處にどうしてゐるのかわかりません。私達のいゝお婆樣はもうこの世にはおいでになりません。私の友達のMは妙なことから人に殺されて死んでしまひました。妹と私ばかりが今でも生き殘つてゐます。その時の話を妹にするたんびに、あの時ばかりは兄さんを心から恨めしく思つたと妹はいつでもいひます。波が高まると妹の姿が見えなくなつたその時の事を思ふと、今でも私の胸は動悸がして、空恐ろしい氣持になります。

（一九二一年作）

碁石を呑んだ八つちやん

八つちやんが黑い石も白い石もみんなひとりで兩手でとつて、股の下に入れてしまはうとするから、僕は怒つてやつたんだ。

「八つちやん、それは僕んだよ」

といつても、八つちやんは眼ばかりくり〱させて、僕の石までひつたくりつゞけるから、僕は構はずに取りかへしてやつた。さうしたら八つちやんが生意氣に僕の頰ぺたをひつかいた。お母さんがいくら八つちやんは弟だから可愛がるんだと仰しやつたつて、八つちやんが頰ぺたをひつかけば僕だつて口惜しいから僕も力任せに八つちやんの小つぽけな鼻の所をひつかいてやつた。指の先きが眼にさはつた時には、ひつかきながらもちよつと心配だつた。ひつかいたらすぐ泣くだらうと思つた。さうしたらいゝ氣持だらうと思つてひつかいてやつた。八つちやんは泣かないで僕にかゝつて來た。投げ出してゐた足を折りまげて尻を浮かして、兩手をひつかく形にして、默つたまゝでかゝつて來たから、僕はすきをねらつてもう一度八つちやんの團子鼻の所をひつかいてやつた。さうしたら八つちやんは暫く顔中を變ちくりんにしてゐたが、いきなり尻をどんとついて、僕の胸の所からどきんとするやうな大きな聲で泣き出した。

僕はいゝ氣味で、もう一つ八つちやんの頰ぺたをなぐりつけておいて、八つちやんの足許にころげてゐる碁石を大急ぎでひつたくつてやつた。さうしたら部屋のむかうに日なたぼつこしながら衣物を縫つてゐた婆やが、眼

鏡をかけた顏をこちらに向けて、上眼で睨(にら)みつけながら、
「又泣かせて、兄さん惡いぢやありませんか年かさのくせに」
といつたが、八つちやんが足をばた／＼やつて死にさうに泣くものだから、いきなり立つて來て八つちやんを抱き上げた。婆やは八つちやんにお乳を飮ませてゐるものだから、いつでも八つちやんの加勢をするんだ。そして、
「お〻／＼可哀さうに何處を。本當に惡い兄さんですね。あらこんなに眼の下を蚯蚓(みゝず)ばれにして兄さん、御免なさいと仰しやいまし。仰しやらないとお母さんにいひつけますよ、さ」
誰が八つちやんなんかに御免なさいするもんか。始めてついへば八つちやんが惡いんだ。僕は默つたまゝで婆やを睨みつけてやつた。
婆やはわあ／＼泣く八つちやんの背中を、抱いたまゝ平手(ひらて)でそつとたゝきながら、八つちやんをなだめたり、僕に何んだか小言をいひ續けてゐたが、僕がどうしても詫(あや)まつてやらなかつたら、とう／＼、
「それぢやよう御座んす。八つちやんあとで婆やがお母さんに皆んないひつけてあげますからね、もう泣くんぢやありませんよ、いゝ子ね。八つちやんは婆やの御祕藏つ子。兄さんと遊ばずに婆やのそばにいらつしやい。いやな兄さんだこと」
といつて僕が大急ぎで一かたまりに集めた碁石の所に手を出して一掴み掴まうとした。僕は大急ぎで兩手で蓋をしたけれども、婆やはかまはずに少しばかり石を拾つて婆やの坐つてゐる處に持つていつてしまつた。
不斷なら僕は婆やを追ひかけて行つて婆やが何んといつても、それを取りかへして來るんだけれども、八つちやんの顏に蚯蚓ばれが出來てゐると婆やのいつたのが氣がゝりで、若しかするとお母さんにも叱られるだらうと思ふと、少し位碁石は取られても我慢する氣になつた。何しろ八つちやんよりはずつと澤山こつちに碁石がある

んだから、僕は威張つていゝと思つた。そして部屋の眞中に陣どつて、その石を黑と白とに分けて疊の上に綺麗にならべ始めた。

八つちやんは婆やの膝に抱かれながら、まだ口惜しさうに泣きつゞけてゐた。婆やが乳をあてがつても飲まうとしなかつた。時々思ひ出しては大きな聲を出した。仕舞にはその泣聲が少し氣になり出して、僕は八つちやんと喧嘩しなければよかつたなあと思ひ始めた。さつき八つちやんがにこ〳〵笑ひながら小さな手に碁石を一杯握つて、僕が入用(いら)ないといつたのも僕は思ひ出した。その小さな握拳(にぎりこぶし)が眼の前でひよこり〳〵と動いた。

その中に婆やが疊の上に握つてゐた碁石をばらりと撒(ま)くと、泣きじやくりをしてゐた八ちやんは急に泣きやんで、婆やの膝からすべり下りて、それをおもちやにし始めた。婆やはそれを見ると、

「さう〳〵、さうやつておとなにお遊びなさいよ。婆やは八つちやんのおちやんちやんを急いで縫ひ上げますからね」

と云ひながら、せつせと縫物をはじめた。

僕はその時、白い石で兎を、黑い石で龜を作らうとした。龜の方は出來たけれども、兎の方はあんまり大きく作つたので、片方の耳の先きが足りなかつた。もう十ほどあればうまく出來上るんだけれども、八つちやんが持つていつてしまつたんだから仕方がない。

「八つちやん十だけ白い石くれない？「

といはうとしてふつと八つちやんの方に顔を向けたが、縁側の方を向いて碁石をおもちやにしてゐる八つちやんを見たら、口をきくのが變になつた。今喧嘩したばかりだから、僕から何かいひ出してはいけなかつた。だから仕方なしに僕は兎をくづしてしまつて、もう少し小さく作りなほさうとした。でもさうすると龜の方が大きくな

り過ぎて、兎が居眠りしないでも龜の方が駈けつこに勝ちさうだつた。だから困つちやつた。
僕はどうしても八つちやんに足らない碁石をくれろといひたくなつた。八つちやんはまだ三つで、すぐ忘れるから、さういつたら先刻のやうに丸い握り拳だけうんと手を延ばしてくれるかもしれないと思つた。
「八つちやん」
といはうとして僕はその方を見た。
さうしたら八つちやんは婆やのお尻の處で遊んでゐたが眞赤な顏になつて、眼に一杯涙をためて口を大きく開いて、手と足とを一生懸命にばたばたと動かしてゐた。僕は始め淸正公樣にゐるかつたいの乞食がお金をねだる眞似をしてゐるのかと思つた。それでもあのおしやべりの八つちやんが口をきかないのが變だつた。おまけに見てゐると、兩手を口のところにもつて行つて、無理に口の中に入れようとしたりした。何んだかふざけてゐるのではなく、本氣の本氣らしくなつて來た。仕舞には眼を白くしたり黑くしたりして、げえげえと吐きはじめた。
僕は氣味が惡くなつて來た。八つちやんが急に怖い病氣になつたんだと思ひ出した。僕は大きな聲で、
「婆や……婆や……八つちやんが病氣になつたよう」
と怒鳴つてしまつた。さうしたら婆やはすぐ自分のお尻の方をふり向いたが、八つちやんの肩に手をかけて、自分の方に向けて、急に慌てゝ後ろから八つちやんを抱いて、
「あら八つちやんどうしたんです。口をあけて御覽なさい。口をですよ。こつちを、明るい方を向いて……あゝ碁石を吞んだぢやないの」
と云ふと握り拳をかためて、八つちやんの背中を續けさまにたゝきつけた。
「さあ、かーつと云つてお吐きさない……それもう一度……どうしようねえ……八つちやん、吐くんですよう」

婆やは八つちやんをかつきり膝の上に抱き上げて又背中をたゝいた。僕はいつ來たとも知らぬ中に婆やの側に來て立つたまゝで八つちやんの顏を見下ろしてゐた。八つちやんの顏は血が出るほど紅くなつてゐた。婆やはどもりながら、

「兄さんあなた、早くいつて水を一杯……」

僕は皆まで聞かずに緣側に飛び出して臺所の方に駈けて行つた。水を飮ませさへすれば八つちやんの病氣はなほるにちがひないと思つた。さうしたら婆やが後ろからまた呼びかけた。

「兄さん水は……早くお母さんの所にいつて、早く來て下さいと……」

僕は臺所の所に行くのをやめて、今度は一生懸命でお茶の間の方に走つた。

お母さんも障子を明けはなして日なたぼつこをしながら靜かに縫物をしてゐらしつた。その側で鐵瓶のお湯がいゝ音をたてゝ煮えてゐた。

僕にはそこがそんなに靜かなのが變に思へた。八つちやんの病氣はもうなほつてゐるかも知れないと思つた。けれども心の中は駈けつこをしてゐる時見たいにどきん〳〵してゐて、うまく口がきけなかつた。

「お母さん……お母さん……八つちやんがね……かうやつてゐるんですよ……婆やが早く來てつて」

といつて八つちやんのしたとほりの眞似を立ちながらして見せた。お母さんは少しだるさうな眼をして、にこにこしながら僕を見たが僕を見ると、急に二つに折れてゐた背中を眞直になさつた。

「八つちやんがどうかしたの」

僕は一生懸命眞面目になつた、

「うん」

と思ひ切り頭を前の方にこくりとやつた。
「うん……八つちやんがかうやつて……病氣になつたの」
僕はもう一度前と同じ眞似をした。お母さんは僕を見てゐて思はず笑はうとなさつたが、すぐ心配さうな顏になつて、大急ぎで頭にさしてゐた針を拔いて針さしにさして、慌てゝ立ち上つて、前かけの絲くづを兩手ではたきながら、僕のあとから婆やのゐる方に駈けていらしつた。
「婆や……どうしたの」
お母さんは僕を押しのけて、婆やの側に來てから仰しやつた。
「八つちやんがあなた……碁石でもお呑みになつたんでせうか……」
「お呑みになつたんでせうかもないもんぢやないか」
お母さんの聲は怒つた時の聲だつた。そしていきなり婆やからひつたくるやうに八つちやんを抱き取つて、自分が苦しくつてたまらないやうな顏をしながら、ばた〳〵手足を動かしてゐる八つちやんをよく見てゐらしつた。
「象牙のお箸を持つて參りませうか……それで喉を撫でますと……」婆やがさう云ふか云はぬに、
「刺がさゝつたんぢやあるまいし……兄さんあなた早く行つて水を持つていらつしやい」
と僕の方を御覽になつた。婆やはそれを聞くと立ち上つたが、僕は婆やが八つちやんをそんなにしたやうに思つたし、用は僕がいひつかつたのだから、婆やの走るのをつき拔けて臺所に駈けつけた。けれども茶碗を探してそれに水を入れるのは婆やの方が早かつた。僕は口惜しくなつて婆やにかぶりついた。
「水は僕が持つてくんだい。お母さんは僕に水を……」
「それどころぢやありませんよ」

と婆やは怒つたやうな聲を出して、僕がかゝつて行くのを茶碗を持つてゐない方の手で振りはらつて、八つちやんの方にいつてしまつた。僕は婆やがあんなに力があるとは思はなかつた。僕は、

「僕だい僕だい水は僕が持つて行くんだい」

と泣きさうに怒つて追つかけたけれども、婆やがそれをお母さんの手に渡すまで婆やに追ひつくことが出來なかつた。僕は婆やが水をこぼさないでそれほど早く駈けられるとは思はなかつた。

お母さんは婆やから茶碗を受け取ると八つちやんの口の所にもつて行つた。半分ほど襟頸に水がこぼれたけれども、それでも八つちやんは水が飲めた。八つちやんはむせて、苦しがつて兩手で胸の所を引つかくやうにした。懷ろの所に僕がたゝんでやつた「だまかし船」が半分顏を出してゐた。僕は八つちやんが本當に可哀さうでたまらなくなつた。あんなに苦しめば屹度死ぬにちがひないと思つた。死んぢやいけないけれども屹度死ぬにちがひないと思つた。

今迄口惜しがつてゐた僕は急に悲しくなつた。お母さんの顏が眞蒼で、手がぶる〳〵震へて八つちやんの顏が眞紅で、ちつとも八ちやんの顏みたいでないのを見たら、一人ぼつちになつてしまつたやうで、我慢のしやうもなく涙が出た。

お母さんは僕がべそをかき始めたのに氣もつかないで、夢中になつて八つちやんの世話をしてゐなさつた。婆やは膝をついたなりで覗きこむやうに、お母さんと八つちやんの顏とのくつつき合つてゐるのを見下ろしてゐた。

その中に八つちやんが胸にあてがつてゐた手を放して驚いたやうな顏をしたと思つたら、いきなりいつもの通りな大きな聲を出してわーつと泣き出した。お母さんは夢中になつて八つちやんをだきすくめた。婆やはせきこんで、

「通りましたね、まあよかつたこと」

といつた。吃度碁石がお腹の中にはいつてしまつたのだらう。お母さんも少し安心なさつたやうだつた。僕は泣き乍らも、お母さんを見たら、その眼に涙が一杯たまつてゐた。

その時になつてお母さんは急に思ひ出したやうに、婆やにお醫者さんに駈けつけるようにと仰しやつた。婆やはぴよこ〳〵と幾度も頭を下げて、前垂で顔をふき〳〵立つて行つた。

泣きわめいてゐる八つちやんをあやしながら、お母さんはきつい眼をして、僕に早く碁石をしまへと仰しやつた。僕は叱られたやうな、惡いことをしてゐたやうな氣がして、大急ぎで碁石を白も黑もかまはず入れ物に仕舞つてしまつた。

八つちやんは寢床の上にねかされた。どこも痛くはないと見えて、泣くのをよさうとしては、又急に何か思ひ出したやうにわーつと泣き出した。そして、

「さあもういゝのよ八つちやん。どこも痛くはありませんわ。弱いことそんなに泣いちやあ。かあちやんがおさすりしてあげますからね、泣くんぢやないの。……あの兄さん」

といつて僕を見なすつたが、僕がしく〳〵泣いてゐるのに氣がつくと、

「まあ兄さんも弱蟲ね」

といひながらお母さんも泣き出しなさつた。それだのに泣くのを僕に隱して泣かないやうな風をなさるんだ。

「兄さん泣いてなんぞゐないで、お座蒲團をこゝに一つ持つて來て頂戴」

と仰しやつた。僕はお母さんが泣くので、泣くのを隱すので、なほ八つちやんが死ぬんではないかと心配になつてお母さんの仰しやるとほりにしたら、ひよつとして八つちやんが助かるんではないかと思つて、すぐ座蒲團

を取りに行つて來た。

お醫者さんは、白い鬚の方のではない、金緣の眼がねをかけた方のだつた。その若いお醫者さんが八つちやんのお腹をさすつたり、手くびを握つたりしながら、心配さうな顏をしてお母さんと小さな聲でお話をしてゐた。お醫者の歸つた時には、八つちやんは泣きづかれにつかれてよく寢てしまつた。

お母さんはそのそばにぢつと坐つてゐた。八ちやんは時々怖い夢でも見ると見えて、急に泣き出したりした。

その晚は僕は婆やと寢た。そしてお母さんは八つちやんのそばに寢なさつた。婆やが時々起きて八ちやんの方に行くので、折角眠りかけた僕は幾度も眼をさました。八つちやんがどんなになつたかと思ふと、僕は本當に淋しく悲しかつた。

時計が九つ打つても僕は寢られなかつた。寢られないなあと思つてゐる中に、ふつと氣が附いたらもう朝になつてゐた。いつの間に寢てしまつたんだらう。

「兄さん眼がさめて」

さういふやさしい聲が僕の耳許でした。お母さんの聲を聞くと僕の體はあたゝかになる。僕は眼をぱつちり開いて嬉しくつて、思はず寢がへりをうつて聲のする方に向いた。そこにお母さんがちやんと着がへをして、頭を綺麗に結つて、にこ〳〵として僕を見詰めていらつしつた。

「およろこび、八つちやんがね、すつかりよくなつてよ。夜中にお通じがあつたから碁石が出て來たのよ。……でも本當に怖いから、これから兄さんも碁石だけはおもちやにしないで頂戴ね。兄さん……八つちやんが惡かつた時、兄さんは泣いてゐたのね。もう泣かないでもいゝことになつたのよ。今日こそあなたがたに一番すきなお菓子をあげませうね。さ、お起き」

と云つて僕の兩脇に手を入れて、抱き起さうとなさつた。僕は擽つたくてたまらないから、大きな聲を出して

あはゝあはゝと笑つた。

「八つちやんが眼をさましますよ、そんな大きな聲をすると」

と云つてお母さんは一寸眞面目な顏をなさつたが、すぐそのあとからにこ〳〵して僕の寢間着を着かへさせて

下さつた。

（一九二一年作）

僕の帽子のお話

「僕の帽子はおとうさんが東京から買つて來て下さつたのです。ねだんは二圓八十錢で、かつかうもいゝし、らしやも上等です。おとうさんが大切にしなければいけないと仰しやいました。僕もその帽子が好きだから大切にしてゐます。夜は寢る時にも手に持つて寢ます」

綴り方の時にかういふ作文を出したら、先生が皆んなにそれを讀んで聞かせて、「寢る時にも手に持つて寢ます。寢る時にも手に持つて寢ます」と二度そのところを繰り返してゐはゝゝとお笑ひになりました。皆んなも、先生が大きな口を開いてお笑ひになるのを見ると、一緒になつて笑ひました。僕もをかしくなつて笑ひました。さうしたら皆んながなほのこと笑ひました。

その大切な帽子がなくなつてしまつたのですから僕は本當に困りました。いつもの通り「御機嫌よう」をして、本の包みを枕もとにおいて、帽子のぴかぴか光る庇(ひさし)をつまんで寢たことだけはちやんと覺えてゐるのですが、それがどこへか見えなくなつたのです。

眼をさましたら本の包みはちやんと枕もとにありましたけれども、帽子はありませんでした。僕は驚いて、半分寢床から起き上つて、あつちこつちを見廻はしました。おとうさんもおかあさんも、何にも知らないやうに、僕のそばでよく寢てゐらつしやいます。僕はおかあさんを起さうかとちよつと思ひましたが、おかあさんが「お前さんお寢ぼけね、こゝにちやんとあるぢやありませんか」といひながら、わけなく見付けだしでもなさると、少

し恥かしいと思つて、起すのをやめて、かいまきの袖をまくり上げたり、枕の近所を探して見たりしたけれども、矢張りありません。よく探して見たら直ぐ出て來るだらうと初めの中は思つて、それほど心配はしなかつたけれども、いくらそこいらを探しても、どうしても出て來ようとはしないので、だん／＼心配になつて來て、しまひには喉が干からびる程心配になつてしまひました。寢床の裾の方もまくつて見ました。もしや手に持つたまゝで帽子のありかを探してゐるのではないかと思つて、兩手を眼の前につき出して、手の平と手の甲と、指の間とをよく調べても見ました。ありません。僕は胸がどき／＼して來ました。

昨日買つていたゞいた讀本の字引きが一番大切で、その次に大切なのは帽子なんだから、僕は悲しくなり出しました。涙が眼に一杯たまつて來ました。僕は「泣いたつて駄目だよ」と涙を叱りつけながら、そつと寢床を拔け出して本棚の所に行つて、上から下までよく見ましたけれども、帽子らしいものは見えません。僕は本當に困つてしまひました。

「帽子を持つて寢たのは一昨日の晩で、昨夜はひよつとするとさうするのを忘れたのかも知れない」とふとその時思ひました。さう思ふと、持つて寢たやうでもあり、持つのを忘れて寢たやうでもあります。「きつと忘れたんだ。そんなら中の口におき忘れてあるんだ。さうだ」僕は飛び上るほど嬉しくなりました。中の口の帽子かけに庇のぴか／＼光つた帽子が、知らん顔をしてぶら下がつてゐるんだ。なんのこつたと思ふと、僕はひとりでに面白くなつて、襖をがらつと勢ひよく開けましたが、その音におとうさんやおかあさんが眼をおさましになると大變だと思つて、後ろをふり返つて見ました。物音にすぐ眼のさめるおかあさんも、その時にはよく寢ていらつしやいました。僕はそうつと襖をしめて、中の口の方に行きました。いつでもそこの電燈は消してある筈なのに、その晩ばかりは晝のやうに明るくなつてゐました。なんでもよく見えました。中の口の帽子かけには、おとうさ

んの帽子の隣りに、僕の帽子が威張りくさつてかゝつてゐるに違ひないとは思ひましたが、なんだか矢張り心配で、僕はそこに行くまで、なるべくそつちの方を向きませんでした。そしてしつかりその前に來てから、「ばあ」をするやうに、急に上を向いて見ました。おとうさんの茶色の帽子だけが、知らん顔をしてかゝつてゐました。あるに違ひないと思つてゐた僕の帽子は矢張りそこにもありませんでした。僕はせか〳〵した氣持ちになつて、あつちこつちを見廻はしました。

　さうしたら中の口の格子戸に黒いものが挾まつてゐるのを見つけ出しました。電燈の光でよく見ると、驚いたことにはそれが僕の帽子らしいのです。僕は夢中になつて、そこにあつた草履をひつかけて飛び出しました。そして格子戸を開けて、ひしやげた帽子を拾はうとしたら、不思議にも格子戸がひとりでに音もなく開いて、帽子がひよいと往來の方へ轉がり出しました。格子戸のむかうには雨戸が締つてゐる筈なのに、今夜に限つてそれも開いてゐました。けれども僕はそんなことを考へてはゐられませんでした。帽子がどこかに見えなくならない中にと思つて、慌てゝ僕も格子戸のあきまから駈け出しました。見ると帽子は投げられた圓盤のやうに二三間先をくる〳〵とまはつて行きます。風も吹いてゐないのに不思議なことでした。僕は何しろ一生懸命に駈け出して帽子に追ひつきました。まあよかつたと安心しながら、それを拾はうとすると、帽子は上手に僕の手からぬけ出して、ころ〳〵と二三間先に轉がつて行くのではありませんか。僕は大急ぎで立ち上がつて又あとを追ひかけました。そんな風にして、帽子は僕につかまりさうになると、一二間轉がり、三間轉がりして、どこまでも僕から逃げのびました。

　四つ角の、學校の道具を賣つてゐるをばさんの所まで來ると帽子のやつ、そこに立ち止まつて、獨樂のやうに三四遍横まはりをしたかと思ふと、調子をつけるつもりか一寸飛び上つて、地面に落ちるや否や學校の方を向いて驚

くほど早く走りはじめました。見る〳〵齒醫者の家の前を通り過ぎて、始終僕達をからかふ小僧のゐる酒屋の天水桶に飛び乘つて、そこでまたきり〳〵舞ひをして桶のむかうに落ちたと思ふと、今度は斜むかうの三軒長屋の格子窓の中程の所を、風に吹きつけられたやうにかすめて通つて、それからまた往來の上を人通りがないのでいい氣になつて走ります。僕も帽子の走るとほりを、右に行つたり左に行つたりしながら追ひかけました。夜のことだからそこいらは氣味の惡いほど暗いのだけれども、帽子だけははつきりとしてゐて、徽章までちやんと見えてゐました。それだのに帽子はどうしてもつかまりません。始めの中は面白くも思ひましたが、その中に口惜しくなり、腹が立ち、しまひには情けなくなつて、泣き出しさうになりました。それでも僕は我慢してゐました。そして、

「おゝい、待つてくれえ」

と聲を出してしまひました。人間の言葉が帽子にわかる筈はないとおもひながらも、聲を出さずにはゐられなくなつてしまつたのです。さうしたら、どうでせう、帽子が――その時はもう學校の正門の所まで來てゐましたが――急に立ちどまつて、こつちを振り向いて、

「やあい、追ひつかれるものなら、追ひついて見ろ」

といひました。確かに帽子がさういつたのです。それを聞くと、僕は「何糞」と敗けない氣が出て、いきなりその帽子に飛びつかうとしましたら、帽子も僕も一緒になつて學校の正門の鐵の扉を何んの苦もなくつき抜けてゐました。

あつと思ふと僕は梅組の教室の中にゐました。僕の組は松組なのに、どうして梅組にはいりこんだか分りません。飯本先生が一錢銅貨を一枚皆に見せてゐらつしやいました。

「これを何枚呑むとお腹の痛みがなほりますか」

とお聞きになりました。

「一枚呑むとなほります」

とすぐ答へたのはあばれ坊主の栗原です。先生が頭を振られました。

「二枚です」と今度はおとなしい伊藤が手を擧げながらいひました。

「よろしい、その通り」

僕は伊藤は矢張よく出來るのだなと感心しました。

おや、僕の帽子はどうしたらうと、今まで先生の手にある銅貨にばかり氣を取られてゐた僕は、不意に氣がつくと、大急ぎでそこらを見廻はしました。どこで見失つたか、そこいらに帽子はゐませんでした。

僕は慌てゝ教室を飛び出しました。廣い野原に來てゐました。どつちを見ても短かい草ばかり生えた廣い野です。眞暗に曇つた空に僕の帽子が黑い月のやうに高くぶら下がつてゐます。とても手も何も屆きはしません。飛行機に乘つて追ひかけてもそこまでは行けさうにありません。僕は聲も出なくなつて恨めしくそれを見つめながら地だんだを踏むばかりでした。けれども、いくら地だんだを踏んで睨みつけても、帽子の方は平氣な顏をして、そつぽを向いてゐるばかりです。こつちから何かいひかけても返事もしてやらないぞといふやうな意地悪な顏をしてゐます。おとうさんに、帽子が逃げ出して天に登つて眞黑なお月樣になりましたといつたところが、とても信じて下さりさうではありませんし、明日からは、帽子なしで學校にも通はなければならないのです。こんな馬鹿げたことがあるものでせうか。あれ程大事に可愛がつてやつてゐたのに、帽子はどうして僕をこんなに困らせなければゐられないのでせう。僕はなほ〳〵口惜しくなりました。さうしたら、また涙といふ厄介ものが兩方の眼

からぽたぽたと流れ出して來ました。

野原はだんだん暗くなつて行きます。どちらを見ても人つ子一人ゐませんし、人の家らしい灯の光も見えません。どういふ風にして家に歸れるのか、それさへ分らなくなつてしまひました。今までそれは考へてはゐないことでした。ひよつとしたら狸が帽子に化けて僕をいぢめるのではないかしら。狸が化けるなんて、大うそだと思つてゐたのですが、その時ばかりはどうもさうらしい氣がしてしかたがなくなりはじめました。帽子を賣つてゐた東京の店が狸の巣で、おとうさんがばかされてゐたんだ。狸が僕を山の中に連れこんで行くために第一におとうさんをばかしたんだ。さういへばあの帽子はあんまり僕の氣にいるやうに出來てゐました。僕はだんだん氣味が惡くなつてそつと帽子を見上げて見ました。さうしたら眞黒なお月樣のやうな帽子が小さく丸まつた狸のやうにも見えました。さうかと思ふと矢張り僕の大事な帽子でした。

その時遠くの方で僕の名前を呼ぶ聲が聞こえはじめました。泣くやうな聲もしました。いよいよ狸の親方が來たかなと思ふと、僕は恐ろしさに脊骨がぎゆつと縮み上りました。

ふと僕の眼の前に僕のおとうさんとおかあさんとが寢衣（ねまき）のまゝで、眼を泣きはらしながら、大騷ぎをして僕の名を呼びながら探しものをしてゐらつしやいます。それを見ると僕は悲しさと嬉しさとが一緒になつて、いきなり飛びつかうとしましたが、矢張りおとうさんもおかあさんも狸の化けたのではないかと、ふと氣が付くと、何んだか薄氣味が惡くなつて飛びつくのをやめました。そしてよく二人を見てゐました。

おとうさんもおかあさんも僕がついそばにゐるのに少しも氣がつかないらしく、おかあさんは僕の名を呼びつづけながら、簞笥の引出しを一生懸命に尋ねてゐらつしやるし、おとうさんは涙で曇る眼鏡を拭きながら、本棚の本を片端（かたつぱし）から取り出して見てゐらつしやいます。さうです、そこには家にある通りの本棚と簞笥とが來てゐた

のです。僕はいくらそんな所を探したつて僕はゐるものかと思ひながら、暫くは見つけられないのをいゝ事にして默つて見てゐました。

「どうもあれがこの本の中にゐない筈はないのだがな」

とやがておとうさんがおかあさんに仰しやいます。

「いゝえ、そんな所にはゐません。またこの簞笥の引出しに隱れたなりで、いつの間にか寢込んだに違ひありません。月の光が暗いのでちつとも見つかりはしない」

とおかあさんはいら〳〵するやうに泣きながら、おとうさんに返事をしてゐられます。

矢張りそれは本當のおとうさんやおかあさんでした。それに違ひありませんでした。あんなに僕の事を思つてくれるおとうさんやおかあさんが外にある筈はないのですもの。僕は急に勇氣が出て來て顏中がにこ〳〵笑ひになりかけて來ました。「わつ」といつて二人を驚かして上げようと思つて、いきなり大きな聲を出して二人の方に走り寄りました。ところがどうしたことでせう。僕の體は學校の鐵の扉を何んの苦もなく通りぬけたやうに、おとうさんとおかあさんとを空氣のやうに通りぬけてしまひました。僕は驚いて振り返つて見ました。おとうさんとおかあさんとは、そんなことがあつたのは少しも知らないやうに相變らず本棚と簞笥とをいぢつてゐらつしやいました。僕はもう一度二人の方に進み寄つて、二人に手をかけて見ました。さうしたら、二人ばかりではなく、本棚までも簞笥までも空氣と同じやうに觸ることが出來ません。それを知つてか知らないでか、二人は前の通り一生懸命に、泣きながら、しきりと僕の名を呼んで僕を探してゐらつしやいます。僕も聲を立てました。だん〳〵大きく聲を立てました。

「おとうさん、おかあさん、僕こゝにゐるんですよ。おとうさん、おかあさん」

けれども駄目でした。おとうさんもおかあさんも、僕のそこにゐることは少しも氣付かないで、夢中になつて僕のゐもしない所を探してゐらつしやるんです。僕は情けなくなつて本當においおい聲を出して泣いてやらうかと思ふ位でした。

さうしたら僕の心にえらい智慧が湧いて來ました。あの狸帽子が天の所でいたづらをしてゐるので、おとうさんやおかあさんは僕のゐるのがお分りにならないんだ。さうだ、あの帽子に化けてゐる狸おやぢを征伐するより外はない。さう思ひました。で、僕は空中にぶら下がつてゐる帽子を眼がけて飛びついて、それをいぢめて白狀させてやらうと思ひました。僕は高飛びの身構へをしました。

「レデー・オン・ゼ・マーク……ゲッセット……ゴー」

力一杯跳ね上つたと思ふと、僕の體はどこまでもどこまでも上の方へと登つて行きます。面白いやうに登つて行きます。とうとう帽子の所に來ました。僕は力みかへつて帽子をうんと摑みました。帽子が「痛い」といひました。その拍子に帽子が天の釘から外づれでもしたのか僕は帽子を摑んだまゝ、まつさかさまに下の方へと落ちはじめました。どこまでもどこまでも。もう草原に足がつきさうだと思ふのに、そんなこともなく、際限もなく落ちて行きました。だんだんそこいらが明るくなり、雷が鳴り、しまひには眼も明けてゐられない程、まぶしい火の海の中にはいりこんで行かうとするのです。そこまで落ちたら燒け死ぬ外はありません。帽子が大きな聲を立てゝ、

「助けてくれえ」

と呶鳴りました。僕は恐ろしくて唯うなりました。

僕は誰かに身をゆすぶられました。びつくりして眼を開いたら夢でした。

雨戸を半分開けかけたおかあさんが、僕のそばに來てゐらつしやいました。

「あなた、どうかおしかえ、大變にうなされて……お寢ぼけさんね、もう學校に行く時間が來ますよ」と仰しやいました。そんなことはどうでもいゝ。僕はいきなり枕もとを見ました。さうしたら僕は矢張り後生大事に疵のぴか〳〵光る二圓八十錢の帽子を右手で握つてゐました。

僕は隨分うれしくなつて、それからにこ〳〵とおかあさんの顏を見て笑ひました。

（一九二一年作）

片輪者

昔トウロンといふ佛蘭西のある町に、二人の片輪者がゐました。一人は盲目(めくら)で一人は跛者(ちんば)でした。この町は中中大きな町で、隨分澤山の片輪者がゐましたけれども、この二人の片輪者だけは特別に人の眼を牽きました。何故だといふと、外の片輪者は自分の不運を歎いて何んとかして癒りたい〳〵と思ひ、人に見られるのを恥かしがつて、あまり人目に立つやうな處には姿を現はしませんでしたが、その二人の片輪者だけは、殊更人の集るやうな處にはきつと出しやばるので、片輪者といへば、この二人だけが片輪者であるやうに人々は思ふのでした。

一體をいふと、トウロンといふ町には片輪者といつては一人もゐない筈なのです。その理由は、この町の守本尊に聖マルティンといふ偉(えら)い聖者の木像があつて、それに願をかけると、どんな病氣でも片輪でもすぐ癒つてしまふからでした。所が私の今お話する騷ぎが起つた年から五十年程前に、町の重立つた人々が、その聖者の尊像を内所で町から持ち出して、五六里も離れた處に在る高い山の中にかくまつてしまつたのです。何故そんなことをしたかといふと、歐羅巴の北の方から夥しい海賊がやつて來て、佛蘭西のどこゝとなく暴れまはり、手あたり次第に金銀財寶を奪つて行つてしまふので、若し聖者の尊像でも盜まれるやうなことがあつたら、勿體ないばかりか、町の名折れになるといふので、誰も登ることの出來ないやうな險しい山の天邊にお移しゝてしまつたのです。

それからといふもの、このトウロンの町も片輪者が出來るやうになつたのです。で、さつき私がお話した二人

の片輪者、即ち一人の盲人と一人の跛者とは、自分達が不幸な人間だといふことを悲しんで、人間並になりたいと遠くからでも聖者に願かけをしたらよさゝうなものを、さうはしないで、自分が片輪に生れついたのをいゝことにして、人の情けで遊んで飯を食はうといふ心を起しました。

盲人の名前を假りにジャンといひ、跛者の名前をピエールといつておきませう。このジャンとピエールとは初めの間は市場などに行つて、哀れな聲を出して自分の片輪を賣りものにして一錢二錢の合力を願つてゐましたが、人々が哀れがつて親切をするのをいゝ事にして段々増長しました。而して盲人のジャンの方は卜占者になり、跛者のピエールの方は巡禮になりました。

ジャンは卜占者にふさはしいやうな物々しい學者めいた服裝をし、眼明きには見えないものが見え、眼明きには考へられないものが考へられると觸れて廻つて、聖マルティンの御留守をあづかる豫言者だと自分からいひ出しました。さらぬだに守護本尊が町にないので心細く思つてゐた人々は、始めの中こそジャンの廣言を馬鹿にしてゐましたが、そのいふ事が一つ二つ中つたりして見ると、何だか便りにしたい氣持になつて、次第々々に信者が殖え、ジャンはしまひには大層な金持になつて、町中第一とも見えるやうな御殿を建てゝそれに住まひ、贅澤三昧な暮しをするやうになりましたが、その御殿もその中の色々な寶物も、聖マルティンの尊像がお山からお下りになつたら、一まとめにして獻上するのだといつてゐたものですから、誰もジャンの贅澤三昧をとがめ立てする人はありませんでした。而してジャンは何時の間にか、金の力で町の重立つた人を自分の手下のやうにしてしまひ、恐ろしく偉い人間だといふことになつてしまひました。さうなるとお金はひとりでの樣にジャンの懷ろを眼がけて集まつて來ました。

ピエールはピエールで、違つた仕方で金を溜めにかゝりました。ピエールはジャンのやうに偉いものらしく威張

ることをしないで、どこまでも正直で可哀さうな片輪者らしく見せかけました。「私にはジャンのやうな神樣から授かつた不思議な力などはありません。あたり前なけちな人間で、しかも色々な罪を犯してゐるのだから、神樣が片輪になさつたのも無理はありません。だから私は自分の罪ほろぼしに、何か自分を苦しめるやうなことをして神樣のお怒りをなだめなければなりまん。この心持を哀れと思つて下さい」などと口癖のやうにいひました。そこでピエールの仕事といふのは大きな袋を作つて、それに町の人々が奉納するお金や品物を入れて、跛脚を引き〳〵聖マルティンの尊像の安置してある險しい山に登ることでした。足の達者な人でも登れないやうな所に、この片輪者が命がけで登るといふのですから、中には變だと思ふ人もありましたが、さういふ人にはピエールはいつでも悲しげな顏をしてから答へました。

「お疑ひは御尤もです。けれども何時か私の一心がどれ程强かつたかを皆樣は御覽下さるでせう。海賊が攻めこんで來なくなるやうな時代が來て聖マルティン樣が山からお下りになる時になつたら、お迎ひに行つた人達は、尊像が何處にあるか知れない程、町の方々の奉納品が尊像のまはりに積み上げてあるのを見てお驚きになるのでせうから」

その言葉つきが如何にも巧みなので、しまひにはそれを疑ふ人がなくなつて、ピエールがお山に登る時が來たといふことになると、誰彼となく色々珍らしいものや金目の掛かるものをピエールの囊の中に入れてやりました。ピエールは山の麓までは行きましたが、本當は一度も山に上つたことはありません。人々の奉納したものは皆んな自分が盜んでしまつて、知れないやうに思ふまゝな贅澤をして暮してゐました。

トウロンには澤山の片輪者が出來た中にも、二人の偉い片輪者がゐる。一人は神樣の心を知る豫言者、一人は神樣の忠義な僕、さすがにトウロンは聖マルティンを守護本尊と仰ぐ町だけあると、他の町々まで噂されるやう

になりました。

さうやつてゐる中に、海賊共は商賣がうまく行かない爲めか、段々と人數が減つて行つて、滅多に佛蘭西までは攻め入つて來なくなり、お蔭で佛蘭西の町々は枕を高くして寢ることが出來るやうになりました。

こゝでトウロンでも年寄つた人々がより〳〵相談して、永い間山の中にかくまつておいた尊像を町にお迎へしようといふ事に決りました。それにしてもその事がうつかり海賊の方にでも聞こえれば、どんな妨げをしないものでもないし、又一つにはいきなり町にお迎へして不幸な人々に不意な喜びをさせようといふので、二十人程の人がそつと夜中に山に登ることになりました。

さうとは知らないジャンとピエールは、片輪を賣りものにしたばかりで、しこたま貯へこんだお金を、湯水のやうに使つて贅澤三昧をしてゐましたが、尊像が山からお下りになるその日も、朝からジャンの御殿の奥に陣取つて、酒を飮んだり、おいしい物を喰べたりして、思ふまゝのことをしやべり散らしてゐました。

ジャンがいふには、

「かうしてゐれば片輪も重寶なものだ。世の中の奴等は智慧がないから片輪になるとしよげ込んでしまつて、丈夫な人間、あたり前な人間になりたがつてゐるが、俺達はそんな馬鹿は出來ないなあ」

ピエールのいふには、

「丈夫な人間、あたり前な人間のしてゐることを見ろ。汗水たらして一日働いても、今日々々をやつと過ごしてゐるだけだが、俺達は片輪なばかりで、何んにもしないで遊びながら、町の人達が造り上げたお金を片つ端から捲き上げることが出來る。どうか死ぬまで跛脚でゐたいものだ」

「俺も人並に眼が見えるやうになつちや大變だ。人並になつたら俺には何一つ仕事といふ仕事は出來ないのだか

ら、その日から乞食になるより外はない。もう乞食の暮しは懲り〲だ」
とジャンは合槌をうちました。
所が戶外が急に賑やかになつて、町の中を狂氣のやうに馳せちがふ人馬の足音が聞こえ出したと思ふと、寺々の鐘が勢ひよく鳴りはじめました。町の人々は大きな聲で讃美の歌を歌ひはじめました。ジャンとピエールは朝から何がはじまつたのかと思つて、窓をあけて往來を見ると、年寄も子供も男も女も皆戶外に飛び出して、町の門の方を見やりながら物待ち顏に、口々に叫んでゐます。よく聞いて見ると聖マルティンの尊像かやがて山から町におはいりになるといつてゐるのです。
それを聞いた二人は膽がつぶれんばかりに驚いてしまひました。
「奉納したものが山の上に積んであると、俺のいひ觸らした虛言はすつかり知れてしまつた。俺はもう町の人達に殺されるにきまつてゐる」
とピエールが頭の髮をむしると、
「俺のこの御殿も寶物も今日から聖マルティンのものになつてしまふのだ。俺の財產は今日から何んにもなくなるのだ。聖マルティルの畜生奴」
とジャンはジャンで見えない眼から口惜し淚を流します。
「でも俺は命まで取られさうなのだ」
とピエールがいふと、
「命を取られるのは、まだ一思ひでいゝ。俺は一文なしになつて、皆なに馬鹿にされて、饑ゑ死をしなければならないんだ。五分切り、一寸試しも同樣だ。あゝ困つたなあ、おまけに聖マルティンが町に這入れば、俺の片輪

はなほるかも知れないのだ。片輪がなほつちや大變だ。おいピエール、俺を早くほかの町に連れ出してくれ」
とジャンはせか〳〵とピエールの方に手探りで近づきました。
町の中はまるで祭日の晩のやうに賑やかになり增さつてゆくばかりです。
「といつて、俺は跛脚だから迚も早くは歩けない。……あゝ困つたなあ。どうかいつまでも片輪でゐたいものだがなあ。ぢやあジャン、お前は私をおぶつてくれ。お前は俺の脚になつてくれ、俺はお前の眼になるから」
ピエールはかういひながらジャンにいきなりおぶさりました。而してジャンに指圖をすると、ジャンはあぶない足取りながらピエールを背負つて一散に駈け出しました。
「ハレルーヤ〳〵〳〵」
といふ聲がどよめき渡つて聞こえます。
ジャンとピエールとを除いた町中の病人や片輪者は人間並みになれるよろこびの日が來たので、有頂天になつて、聖マルティンの御着きを待ちうけてゐます。
その間をジャンとピエールは人波にゆられながら逃げようとしました。
その中にどうでせう。ジャンの眼は少しづゝあかるくなつて、綾目が見えるやうになつて來ました。あれと驚く間もなくその背中で指圖をしてゐたピエールはいきなりジャンの背中から飛びおりるなり、足早にすたこらと門の反對の方に歩き出しました。
ジャンはそれを見ると驚いて、
「やいピエール、お前の脚はどうしたんだ」
といひますと、ピエールも始めて氣がついたやうに驚いて、ジャンを見かへりながら、

「といへばお前は眼が見えるやうになつたのか」
と不思議がります。二人は思はず固唾を呑んで互ひの顏を見かはしました。
「大變だ」
と二人は一緒に叫びました。澤山の人々に取りかこまれた古い聖マルティンの尊像がしづ〳〵と近づいて來てゐたのです。その御利益で二人の病氣はもうなほり始めてゐたのです。
二人の片輪者は片輪が癒りかけたと氣が付くと、ぺたんと地びたに尻もちをついてしまひました。而して二人は、
「飛んでもないことになつたなあ」
「情けないことになつたなあ」
といひ合ひながら、一人は眼をこすりながら、一人は脚をさすりながら、おい〳〵といつて泣き出しました。

（一九二二年一月、「良婦の友」所載）

火事とポチ

ポチの啼き聲で僕は眼がさめた。

眠たくつてたまらなかつたから、うるさいなとその啼き聲を怒つてゐる間もなく、眞赤な火が眼に映つたので、驚いて兩方の眼をしつかり開いて見たら、戸棚の中ぢうが火になつてゐるので、二度驚いて飛び起きた。さうしたら僕のそばに寢てゐるはずのお婆さまが、何か黑い布のやうなもので、夢中になつて戸棚の火をたゝいてゐた。何んだか知れないけれども僕は、お婆さまの樣子が滑稽にも見え、怖ろしくも見えて、思はずその方に駈けよつた。さうしたらお婆さまは默つたまゝでうるさゝうに僕を拂ひ退けておいてその布のやうなものを滅多やたらに振り廻はした。それが僕の手に觸つたらぐしよ〳〵に濡れてゐるのが知れた。

「お婆さま、どうしたの？」

と聞いて見た。お婆さまは戸棚の中の火の方ばかり見て答へようともしない。僕は火事ぢやないかと思つた。

これが火事といふものぢやないかと思つた。

ポチが戸の外で氣狂ひのやうに啼いてゐる。

部屋の中は、障子も、壁も、床の間も、違ひ棚も、晝間のやうに明るくなつてゐた。お婆さまの影法師が大きくそれに映つて、怪物か何かのやうに動いてゐた。たゞお婆さまが僕に一言も物をいはないのが變だつた。急に啞になつたのだらうか。而していつものやうには僕を可愛がつてくれずに、僕が近寄つても邪魔者あつかひにす

る。

これはどうしても大變だと僕は思つた。僕は夢中になつてお婆さまにかじりつかうとした。さうしたらあんな弱いお婆さまが默つたまゝで、いやといふほど僕を拂ひのけたので僕は襖のところまでけし飛ばされた。

火事なんだ。お婆さまが一人で消さうとしてゐるんだ。それがわかるとお婆さま一人では駄目だと思つたから、僕はすぐ部屋を飛び出して、お父さんとお母さんとが寢てゐる離れの所に行つて、

「お父さん……お母さん……」

と思ひきり大きな聲を出した。

僕の部屋の外で啼いてゐると思つたポチがいつの間にかそこに來てゐて、きやん〳〵とひどく啼いてゐた。僕が大きな聲を出すか出さないにお母さんが寢衣のまゝで飛び出して來た。

「どうしたといふの？」

とお母さんは內所話のやうな小さな聲で、僕の兩肩をしつかり押へて僕に聞いた。

「大變なの……」

「大變なの、僕の部屋が火事になつたよう」といはうとしたが、どうしても「大變なの」きりであとは聲が出なかつた。

お母さんの手は震へてゐた。その手が僕の手を引いて、僕の部屋の方に行つたが、開けつぱなしになつてゐる襖の所から火が見えたら、お母さんはいきなり「あれえ」といつて、僕の手を振りはなすなり、その部屋に飛び込まうとした。僕はがむしやらにお母さんにかじりついた。その時お母さんは始めてそこに僕のゐるのに氣がついたやうに、うつ向いて僕の耳の所に口をつけて、

つて……いゝかい、早くさ」

「早く〳〵お父さんをお起しして、……それからお隣りに行つて……お隣りのをぢさんを起すんです、火事です

そんなことをお母さんはいつたやうだつた。

そこにお父さんも走つて來た。僕はお父さんには何んにもいはないで、すぐ上り口に行つた。そこは眞暗らだつた。裸足で土間に飛び下りて、かけがねを外して戸を開けることが出來た。すぐ飛び出さうとしたけれども、裸足だと足を怪我して恐ろしい病氣になるとお母さんから聞いてゐたから、暗闇の中で手さぐりにさぐつたら大きな草履があつたから、誰のだか知らないけれどもそれをはいて戸外に飛び出した。戸外も眞暗らで寒かつた。不斷なら氣味が惡くつて、とても夜中にひとりで歩くことなんか出來ないのだけれども、その晩だけは何んともなかつた。唯何かにけつまづいてころびさうなので、思ひきり足を高く上げながら走つた。僕を惡者とでも思つたのか、いきなりポチが走つて來て、吠えながら飛びつかうとしたが、すぐ僕だと知れると、僕の前になつたり後になつたりして、門の所まで追つかけて來た。而して僕が門を出たら、暫く僕を見てゐたが、すぐ變な啼き聲を立てながら家の方に歸つていつてしまつた。

僕も夢中で駈けた。お隣りのをぢさんの門をたゝいて、

「火事だよう！」

と二三度怒鳴つた。その次の家も起す方がいゝと思つて僕は次の家の門をたゝいて又怒鳴つた。その次にも行つた。その次にも行つた。而して自分の家の方を見ると、さつきまで眞暗だつたのに、屋根の下の所あたりから、火がちよろ〳〵と燃え出してゐた。ぱち〳〵と焚火のやうな音も聞こえてゐた。ポチの啼き聲もよく聞こえてゐた。

僕の家は町からずつと離れた高臺に在る官舍町にあつたから、僕が「火事だよう」といつて歩いた家は皆んな

知つた人の家だつた。後を振りかへつて見ると、二人三人黑い人影が僕の家の方に走つて行くのが見える。僕はそれが嬉しくつて、なほのこと、次の家から次の家へと怒鳴つて歩いた。

二十軒位もさうやつて怒鳴つて歩いたら、自分の家からは隨分遠くに來てしまつてゐた。少し氣味が惡くなつて僕は立ちどまつてしまつた。而してもう一度家の方を見た。もう火は大分燃え上つて、そこいらの樹や板塀なんかゞはつきりと晝に描いたやうに見えた。風がないので、火は眞直に上の方に燃えて、火の子が空の方に高く上つて行つた。ぱち〳〵といふ音の外に、ぱん〳〵と鐵砲を打つやうな音も聞こえてゐた。立ちどまつて見ると、僕の體はぶる〳〵震へて、膝小僧と下腭とががち〳〵音を立てるかと思ふほどだつた。急に家が戀しくなつた。お婆さまも、お父さんも、お母さんも、妹や弟たちもどうしてゐるだらうと思ふと、もう迚もその先まで怒鳴つて歩く氣にはなれないで、いきなり來た道を夢中で走り出した。走りながらも僕は燃え上る火から眼をはなさなかつた。眞暗らななかに、僕の家だけが焚火のやうに明るかつた。顏までが火照つてるやうだつた。何か大きな聲でわめき合ふ人の聲がした。而してポチの氣違ひのやうに啼く聲が。

町の方からは半鐘も鳴らないし、ポンプも來ない。僕はもう家はすつかり燒けてしまふと思つた。明日からは何を喰べて、何處に寢るのだらうと思ひながら、早く皆んなの顏が見たさに一生懸命に走つた。

家の少し手前で、僕は一人の大きな男がこつちに走つて來るのに遇つた。よく見るとその男は、僕の妹と弟とを兩脇にしつかりとかゝへてゐた。妹も弟も大きな聲を出して泣いてゐた。僕はいきなりその大きな男を人さらひだと思つた。官舍町の後ろは山になつてゐて、大きな森の中の古寺に一人の乞食が住んでゐた。僕たちが戰ごつこをしに山に遊びに行つて、その乞食を遠くにでも見付けたら最後、大急ぎで「人さらひが來たぞ」といひながら逃げるのだつた。その乞食の人はどんなことがあつても駈けるといふことをしないで、襤褸を引きずつたま

ま、のそり〳〵と歩いてゐたから、それに捕へられる氣遣ひはなかつたけれども、遠くの方から僕たちの逃げるのを見ながら、牛のやうな聲でおどかすことがあつた。僕達はその乞食を何よりも怖がつた。僕はその乞食が妹と弟とをさらつて行くのだと思つたのだ。うまいことには、その人は僕のそこにゐるのには氣がつかない程あわてゝゐたと見えて、知らん顔をして、僕のそばを通りぬけて行つた。僕はその人をやりすごして、少しの間どうしようかと思つてゐたが、妹や弟のゐどころが知れなくなつてしまつては大變だと氣がつくと、家に歸るのはやめて、大急ぎでその男のあとを追ひかけた。その人の足は本當に早かつた。はいてゐる大きな草履が邪魔になつて脫ぎ捨てたくなる程だつた。

その人は、大きな聲で泣きつゞけてゐる妹たちを小脇にかゝへたまゝ、どん〳〵石垣のある橫町へと曲つて行くので、僕は段々氣味が惡くなつて來たけれども、火事どころの騷ぎではないと思つて、頬かぶりをして尻をはしよつたその人の後ろから、氣づかれないやうにくつゝいて行つた。さうしたらその人はやがて橋本さんといふ家の高い石段をのぼり始めた。見るとその石段の上には、橋本さんの人たちが大勢立つて、僕の家の方を向いて火事を眺めてゐた。そこにその乞食らしい人がのぼつて行くのだから、僕は少し變だと思つた。さうすると、橋本のをばさんが、上からいきなりその男の人に聲をかけた。

「あなた歸つていらしつたんですか……ひどくなりさうですね」

さうしたら、その乞食らしい人が、

「子供さんたちがけんのんだから連れて來たよ。竹男さんだけは何處に行つたかどうも見えなんだ」

と妹や弟を輕々とかつぎ上げながらいつた。何んだ。乞食ぢやなかつたんだ。橋本のをぢさんだつたんだ。僕はすつかり嬉しくなつてしまつて、すぐ石段を上つて行つた。

「あら、竹男さんぢやありませんか」
と眼早く僕を見つけてくれたをばさんがいつた。橋本さんの人たちは家中で僕達を家の中に連れこんだ。家の中には燈火がかん〳〵ついて、眞暗らなところを長い間歩いてゐた僕には大變うれしかつた。寒いだらうといつて、葛湯をつくつたり、丹前を着せたりしてくれた。さうしたら僕は何んだが急に悲しくなつて。家にはいつてから泣きやんでゐた妹たちも、僕がしく〳〵泣き出すと一緒になつて大きな聲を出しはじめた。

僕たちはその家の窓から、ぶる〳〵震へながら、自分の家の燒けるのを見て夜を明かした。僕たちをおくとすぐ又出かけて行つた橋本のをぢさんが、びつしより濡れて泥だらけになつて、人ちがひがする程顏がよごれて歸つて來た頃には、夜がすつかり明けはなれて、僕の家の所からは黑い烟と白い煙とが別々になつて、よぢれ合ひながらもく〳〵と立ち上つてゐた。

「安心なさい。母屋は燒けたけれども離れだけは殘つて、お父さんもお母さんも皆んな怪我はなかつたから……その中に連れて歸つて上げるよ。今朝の寒さは格別だ。この一面の霜はどうだ」
といひながら、をぢさんは井戸ばたに立つて、あたりを眺めまはしてゐた。本當に井戸がはまでが眞白になつてゐた。

橋本さんで朝御飯の御馳走になつて、太陽が茂木の別莊の大きな槇の木の上に上つた頃、僕たちはをぢさんに連れられて家に歸つた。

いつの間に、どこからこんなに來たらうと思ふほどの大勢の人が喧嘩腰になつて働いてゐた。何處から何處まで大雨のあとのやうにびしよ〳〵なので、草履がすぐ重くなつて足の裏が氣味惡く濡れてしまつた。離れに行つたら、これがお婆さまか、これがお父さんか、これがお母さんかと驚くほどに皆んな變つてゐた。

お母さんなんかは一度も見たことのないやうな變な着物を着て、髮の毛なんかは目茶苦茶になつて、顏も手も煤ぶつたやうになつてゐた。僕たちを見るといきなり駈けよつて來て、三人を胸のところに抱きしめて、顏を僕たちの顏にすり附けてむせるやうに泣きはじめた。僕たちはすこしきびが惡く思つた位だつた。

變つたといへば家の燒け跡の變りやうもひどいものだつた。黑こげの材木が、積木をひつくり返したやうに重なりあつて、そこから煙りが臭いにほひと一緒にやつて來た。そこいらが廣くなつて、何んだかそれを見るとお母さんぢやないけれども涙が出て來さうだつた。

半分焦げたり、びしよ〳〵に濡れたりした燒け殘りの荷物と一緒に、僕たち六人は小さな離れで暮すことになつた。御飯は三度〻〻官舍の人たちが作つて來てくれた。熱い握り飯はうまかつた。胡麻のふつてあるのや、中から梅干の出て來るのや、海苔でそとが包んであるのや……こんなおいしい御飯を食べたことがないと思ふ程だつた。

火は泥棒がつけたのらしいといふことがわかつた。井戸のつるべ繩が切つてあつて水を汲むことが出來なくなつてゐたのと、短刀が一本火に燒けて燒け跡から出て來たので、泥棒でもするやうな人のやつたことだと警察の人が來て見込みをつけた。それを聞いてお母さんはやうやく安心が出來たといつた。お父さんは二三日の間、每日警察に呼び出されて、始終腹を立てゝゐた。お婆さまは、自分の部屋から火事が出たのを見つけ出した時は、あんまり仰天して口がきけなくなつたのださうだけれども、火事がすむとやつと物がいへるやうになつた。そのかはり、少し病氣になつて、狹い部屋の片隅に床を取つてねたきりになつてゐた。

僕たちは、火事のあつた次ぎの日からは、いつもの通りの氣持になつた。それればかりではない、却つて不斷より面白い位だつた。每日三人で燒け跡に出かけていつて、人足の人なんかに、邪魔だ、あぶないといはれなが

ら、色々なものを拾ひ出して、銘々で見せあつたり、取りかへつこをしたりした。

火事がすんでから三日目に、朝眼をさますとお婆さまがあわてるやうにポチはどうしたらうとお母さんに尋ねた。お婆さまはポチがひどい目にあつた夢を見たのださうだ。あの犬が吠えてくれたばかりで、火事が起つたのを知つたので、若しポチが知らしてくれなければ燒け死んでゐたかも知れないとお婆さまはいつた。

さういへば本當にポチはゐなくなつてしまつた。朝起きた時にも、燒け跡に遊びに行つてる時にも、何んだか一つ足らないものがあるやうだつたが、それはポチがゐなかつたんだ。僕がおこしに行く前に、ポチは離れに來て、雨戸をがりがり引つ搔きながら、悲しさうに吠えたので、お父さんもお母さんも眼をさましてゐたのだとお母さんもいつた。そんな忠義なポチがゐなくなつたのを、僕たちは皆んな忘れてしまつてゐたのだ。ポチのことを思ひ出したら、僕は急に淋しくなつた。ポチは、妹と弟とをのければ、僕の一番好きな友達なんだ。居留地に住んでゐるお父さんの友達の西洋人がくれた犬で、耳の長い、尾のふさふさした大きな犬。長い舌を出してぺろぺろと僕や妹の頸の所を甜めて、くすぐつたがらせる犬、喧嘩ならどの犬にだつて負けない犬、滅多に吠えない犬、吠えると人でも馬でも怖がらせる犬、僕たちを見るときつと笑ひながら駈けつけて來て飛びつく犬、藝當は何んにも出來ない癖に、何んだか可愛いゝ犬、藝當をさせようとすると、恥かしさうに横を向いてしまつて、大きな眼を細くする犬。どうして僕はあの大事な友達がゐなくなつたのを今日まで思ひ出さずにゐたらうと思つた。

僕は淋しいばかりぢやない、口惜しくなつた。妹と弟とにさういつて、すぐポチを捜しはじめた。三人で手分けをして庭に出て、大きな聲で「ポチ……ポチ……ポチ來いポチ來い」と呼んで歩いた。官舍町を一軒々々聞いて歩いた。ポチが來てはゐませんか。ゐません。何處かで見ませんでしたか。見ません。どこでもさういふ返事だつた。僕たちは腹もすかなくなつてしまつた。御飯だといつて、女中が呼びに來たけれども歸らなかつた。茂木の

別莊の方から、乞食の人が住んでゐる山の森の方へも行つた。而して時々大きな聲を出してポチの名を呼んで見た。而して立ち停つて聞いてゐた。大急ぎで駈けて來るポチの足音が聞こえやしないかと思つて。けれどもポチの姿も、足音も、啼き聲も聞こえては來なかつた。

「ポチがゐなくなつて可哀さうねえ。殺されたんだわ。きつと」

と妹は、淋しい山道に立ちすくんで泣き出しさうな聲を出した。本當にポチが殺されるか盜まれでもしなければゐなくなつてしまふ譯がないんだ。でもそんなことがあつてたまるものか。あんなに强いポチが殺される氣遣ひは滅多にないし、盜まうとする人が來たら嚙みつくに決つてゐる。どうしたんだらうなあ。いやになつちまふなあ。……僕は腹が立つて來た。而して妹にいつてやつた。

「もとはつていへばお前が惡いんだよ。お前がいつか、ポチなんていやな犬、あつち行けつていつたぢやないか」

「あら、それは冗談にいつたんだわ」

「冗談だつていけないよ」

「それでポチがゐなくなつたんぢやないことよ」

「さうだい……さうだい。それぢや何故ゐなくなつたんだか知つてるかい……そうれ見ろ」

「あつちに行けつていつたつて、ポチは何處にも行きはしなかつたわ」

「さうさ。それはさうさ……ポチだつてどうしようかつて考へてゐたんだい」

「でも兄さんだつてポチをぶつたことがあつてよ」

「ぶちなんてしませんよだ」

「いゝえ、ぶつてよ本當に」

「ぶつたつていゝやい……ぶつたつて」

ポチが僕の汽車の玩具を目茶苦茶に毀したから、ポチがきやん〳〵といふ程ぶつたことがあつた。……それを妹にいはれたら、何んだかそれがもとでポチがゐなくなつたやうにもなつて來た。でも僕はさう思ふのはいやだつた。どうしても妹が惡いんだと思つた。妹が憎らしくなつた。

「ぶつたつて僕はあとで可愛がつてやつたよ」

「私だつて可愛がつてよ」

妹が山の中でしく〳〵泣き出した。さうしたら弟まで泣き出した。僕も一緒に泣きたくなつたけれども、口惜しいから我慢してゐた。

何んだか山の中に三人きりでゐるのが急に怖いやうに思へて來た。

そこに女中が僕たちを捜しに來て、家では僕たちが見えなくなつたので心配してゐるから早く歸れといつた。女中を見たら妹も弟も急に聲を張り上げて泣き出した。僕もとう〳〵むやみに悲しくなつて泣き出した。而して女中に連れられて家に歸つて來た。

「まああなた方は何處をうろついてゐたんです、御飯も喰べないで……而して三人ともそんなに泣いて……」

とお母さんは本當に怒つたやうな聲でいつた。而して握り飯を出してくれた。それを見たら急に腹がすいて來た。今まで泣いてゐて、すぐそれを喰べるのは少し恥かしかつたけれども、すぐ喰べはじめた。

そこに、燒け跡で働いてゐる人足が來て、ポチが見つかつたと知らせてくれた。僕たちもだつたけれども、お婆さまやお母さんまで、大騷ぎをして「何處にゐました」と尋ねた。

「ひどい怪我をして物置のかげにゐました」

と人足の人はいつて、すぐ僕たちを連れていつてくれた。僕は握り飯を放り出して、手についてる御飯粒を着物で拂ひ落としながら、大急ぎでその人のあとから駈け出した。妹や弟も負けず劣らずついて來た。

半燒けになつた物置が平べつたく倒れてゐる、その後ろに三四人の人足がかこんでゐた、僕たちを迎へに來てくれた人足はその仲間の所にいつて、「おい、ちよつとそこを退きな」といつたら皆んな立ち上つた。そこにポチが丸まつて寢てゐた。

僕たちは夢中になつて「ポチ」と呼びながら、ポチのところに行つた。ポチは身動きもしなかつた。僕たちはポチを一目見て驚いてしまつた。體中を燒傷したと見えて、ふさ〳〵してゐる毛が處々狐色に焦げて、泥が一ぱいこびりついてゐた。而して頭や足には血が眞黑になつてこびりついてゐた。ポチだかどこの犬だか分らない程穢なくなつてゐた。駈けこんでいつた僕は思はず後ずさりした。ポチは僕たちの來たのを知ると、少し頭を上げて血走つた眼で悲しさうに僕たちの方を見た。而して前脚を動かして立たうとしたが、どうしても立てないで、そのまゝねころんでしまつた。

「可哀さうに、落ちて來た材木で腰つ骨でもやられたんだらう」

「何しろ一晩中きやん〳〵いつて火のまはりを飛び歩いてゐたから、疲れもしたらうよ」

「見ろ、あすこからあんなに血が流れてらあ」

人足たちが口々にそんなことをいつた。本當に血が出てゐた。左の後脚のつけ根の所から血が流れて、それが地面までこぼれてゐた。

「いたはつてやんねえ」

「俺れやいやだ」

そんなことをいつて、人足たちも看病してやる人はゐなかつた。僕は何んだか氣味が惡かつたけれども、あんまり可哀さうなので、怖々遠くから頭を撫でゝやつたら、鼻の先を震はしながら、眼をつぶつて頭をもち上げた。それを見たら僕は穢ないのも氣味の惡いのも忘れてしまつて、いきなりそのそばに行つて頭を抱へるやうにして可愛がつてやつた。何故こんな可愛いゝ友達を一度でもぶつたらうと思つて、もうポチがどんなことをしてもぶつなんて、そんなことはしまいと思つた。ポチはおとなしく眼をつぶつたまゝで僕の方に頭を寄せかけて來た。體中がぶる〳〵震へてゐるのがわかつた。

妹や弟もポチのまはりに集まつて來た。その中にお父さんもお母さんも來た。僕はお父さんに手傳つて、バケツで水を運んで來て、綺麗な白い切れで靜かに泥や血を洗ひ落としてやつた。痛い所を洗つてやる時には、ポチはそこに鼻先を持つて來て、洗ふ手を押し退けようとした。

「よし〳〵靜かにしてゐろ。今綺麗にして傷をなほしてやるからな」

お父さんが人間に物をいふやうに優しい聲でかういつたりした。お母さんは人に知れないやうに泣いてゐた。

よくふざけるポチだつたのにもうふざけるなんて、そんなことはちつともしなくなつた。それが僕には可哀さうだつた。體をすつかり拭いてやつたお父さんが、怪我がひどいから犬の醫者を呼んで來るといつて出かけて行つた留守に、僕は妹たちに手傳つてもらつて、藁で寢床を作つてやつた。而してタオルでポチの體をすつかり拭いてやつた。ポチを寢床の上に臥かしかへようとしたら、痛いと見えて、はじめてひどい聲を出して啼きながら噛みつきさうにした。人夫たちも親切に世話してくれた。而して板きれでポチのまはりに圍ひをしてくれた。冬だから、寒いから、毛が濡れてゐると隨分寒いだらうと思つた。

醫者が來て藥を塗つたり飮ませたりしてからは人足たちもお母さんも行つてしまつた。弟も寒いからといふの

でお母さんに連れて行かれてしまつた。けれどもお父さんと僕と妹とはポチの傍を離れないで、ぢつとその樣子を見てゐた。お母さんが女中に牛乳で煮たお粥を持つて來させた。ポチは喜んでそれを喰べてしまつた。火事の晩から三日の間ポチは何んにも喰べずに辛抱してゐたんだもの、さぞお粥がうまかつたらう。

ポチはぢつと丸まつて震へながら眼をつぶつてゐた。眼頭の所が涙で始終濡れてゐた。而して時々細く眼を開いて僕たちをぢつと見ると又睡つた。

いつの間にか寒い〳〵夕方が來た。お父さんがもう大丈夫だから家にはいらうといつたけれども僕はいるのがいやだつた。夜どほしでもポチと一緒にゐてやりたかつた。お父さんは仕方なく寒い〳〵といひながら一人で行つてしまつた。

僕と妹だけがあとに殘つた。あんまりよく睡るので死ぬんではないかと思つて、小さな聲で「ポチや」といふとポチは面倒くさゝうに眼を開いた。而して少しだけ尻尾をふつて見せた。

とう〳〵夜になつてしまつた。夕御飯でもあるし、風邪をひくと大變だからといつてお母さんが無理に僕たちを連れに來たので、僕と妹とはポチの頭をよく撫でゝやつて家に歸つた。

次ぎの朝、眼をさますと、僕は着物も着かへないでポチの所に行つて見た。お父さんがポチのわきにしやがんでゐた。而して、「ポチは死んだよ」といつた。ポチは死んでしまつた。

ポチのお墓は今でも、あの乞食の人の住んでゐた、森の中の寺の庭にあるか知らん。

（一九二二年八月、「婦人公論」所載）

附録

瞳なき眼

瞳なき眼

あからさまに云はう、
大千世界は瞳のない眼だ。
見開いたまゝ瞬(またゝ)きをしない眼だ。
劫初から劫末へ、
ギヤマンの皿にすかして見る烏賊の皮膚の色のやうな白眼だけが。
凝然(ぎようぜん)として、動かずに、流れずに。

可憐な小さい一つの瞳が、
燃えかすれゆく隕石(ゐんせき)のやうに、
瞳のない眼の灰色の面に吸ひこまれる。
見る／＼
今在る、あるかなきかに

……もう無い。
可憐な小さい瞳が、
瞳の妄執に黒く燃え立つ小さい瞳が、
可憐な小さい瞳が……
淋しさ……せめては叫べ、ひと聲。瞳よ。（三月十一日）

手

（高村光太郎氏の製作にかゝる左手のブロンズを見入りて）

孤獨な淋しい神祕……
手……一つの手……
見つめてゐると、肉體から、靈魂から、不思議にも遊離しはじめる手。
存在の莊嚴と虛妄――神か――無か。
おゝ見つめてゐると、
凡べてのものが手を殘して消え失せた、
無邊際の空間に、
たゞ一つ殘り在る手。

左の手を見つめろ、
今、お前自身の手を、これを讀む時の光の下に、ぢつと見つめろ。
五つの指の淋しい群像、
何を彼等は考へ、
彼等は何をするのだ。
指さすべき何が……握りしむべき何が……

……………………………………

手は沈默にまでもがいてゐる。（三月九日）

死を

……死を。
生の燒點なる死を、
若さの中に尋ね出された死を、
まがふかたなく捕へあてた死を、

目路のかなたに屈辱の凡べてをかいやる死を、
我れの外なる凡べての人にはたゞ愚かしい死を、
その黒い焔の中に親をも子をも燒きつくす死を、
……おゝ生を容赦なく踏みにじるその不可思議な生命を。（三月十日）

人生

生命のうろつきの間に見えるなまけた幻影――人生。（三月十日）

電車の眼が見た

省線の高土堤をひらめきゆく電車の眼、
その眼が見る土堤下の人の渦巻き、
かげろふの見えがくれ、
葉卷きの煙が風に搖られて、
するりと横さまに飛び消える。

何んでもない、
人は睦まじく生きたがつてるぢやないか。
その祈りが橫さまに飛び消える……ひらめき消える。（三月十日）

恐怖の面紗

もう一握りの勇氣、
一摘まみのすてばち、
それが面紗をはぎ取る時、
おどろき
ふためき
醉ひしれ
無——
たゞ飛びかゝつて
眼くるめく抱擁。
…………………………………………

嗚呼
メデュサがほゝゑむ
ヴィナスのやうに。（三月十一日）

（以上一九二三年四月、「泉」第二巻第四號所載）

石炭のかけら

北氷洋から掘り出された石炭のかけら、
永劫の冷却にもたじろかず火をふくむ、
黒く火をふくむ。
しなやかな白い手がそれを弄ぶ、
春にしめつた紫の眼がそれを撫でまはす。
いたづらを愼しめ。

火照（ほて）つた赤い唇を冷たさと黒さとに近づけるな
いざなひに滿ちた横顔で荒くれた面に頰ずりするな、

いたづらを愼しめ。
石炭は火だ。
火は破却だ。
いたづらを愼しめよ。（四月七日）

思ひ

美しい畫を集めた書物から落ちて
突風にさらはれた二ひらの落丁。
一つは高く、
一つは低く、
見かはしながら、
見失ひながら、
また遙かに見かはしながら、
亂れつゝ散る。（四月二日）

（以上一九二三年五月、「泉」第二卷第五號所載）

最後の歌

（歿後、その書齋にて發見されたもの）

＊

世の常のわが戀ならばかくばかりおゞましき火に身はや燒くべき

＊

幾年の命を人は遂げんとや思ひ入りたるよろこびも見で

＊

修禪する人の如くに世にそむき靜かに戀の門にのぞまむ

＊

道はなし世に道は無し心して荒野の土に汝が足を置け

＊

さかしらに世に立てりける我かこれ神に似るまで愚かしき今

＊

生れ來る人は持たすなわがうけし悲しき性とうれはしき道

雲に入るみさごの如き一筋の戀とし知れば心は足りぬ

＊

蟬一つ樹をば離れて地に落ちぬ風なき秋の靜かなるかな

＊

明日知らぬ命の際に思ふこと色に出づらむあぢさゐの花

＊

命絕つ笞しあらば手に取りて世の見る前に我を打たまし

―第三卷了―

昭和四年十月五日印刷
昭和四年十月十五日發行

非賣品

監輯者　有島生馬
　　　　里見弴
發行者　佐藤義亮
印刷所　富士印刷株式會社
製本所　大出製本所

發行所　東京市牛込區矢來町
（振替東京七九七七〇）
新潮社
電話牛込・八〇六番・八〇八番
八〇五番・八〇七番・八〇九番